金日成伝

第二部

民主朝鮮建設から千里馬大進軍まで

白　峯著・金日成伝翻訳委員会訳

雄　山　閣　刊

金日成伝

II

民主朝鮮建設から千里馬大進軍まで

白　峯著

翻訳委員会訳

定価９８０円

金日成伝

（民主朝鮮建設から千里馬大進軍まで）

第二部

白　　峯　　著

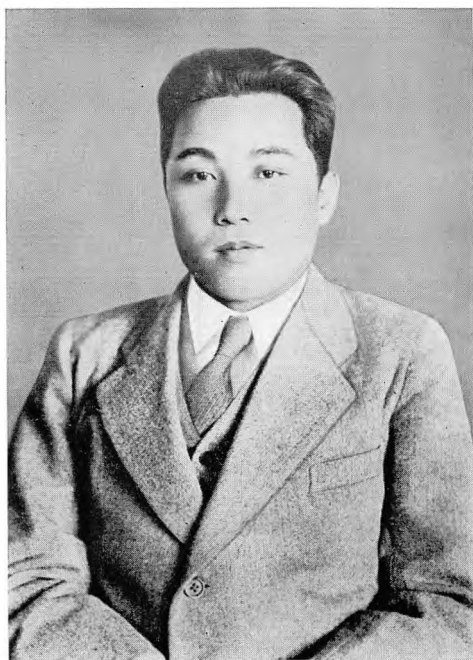
金日成伝翻訳委員会訳

雄山閣版

金 日 成 首 相

白頭山上の天池に立つ金日成首相

〈上〉朝鮮共産党の創建者である金日成将軍
（第一章第2節参照）

〈下〉祖国に凱旋した金日成将軍を熱烈に歓迎するピョンヤン市群衆大会
（第一章第3節参照）

〈上〉祖母と感激的な再会をする金日成将軍（第一章第3節参照）

〈下〉党中央組織委員会第三回拡大執行委員会の決定書草案を討議する金日成将軍（第二章第1節参照）

北朝鮮民主青年同盟第1回代表者大会で演説する金日成将軍
（第二章第2節参照）

北朝鮮臨時人民委員会の事務室で執務する金日成将軍
（第二章第3節参照）

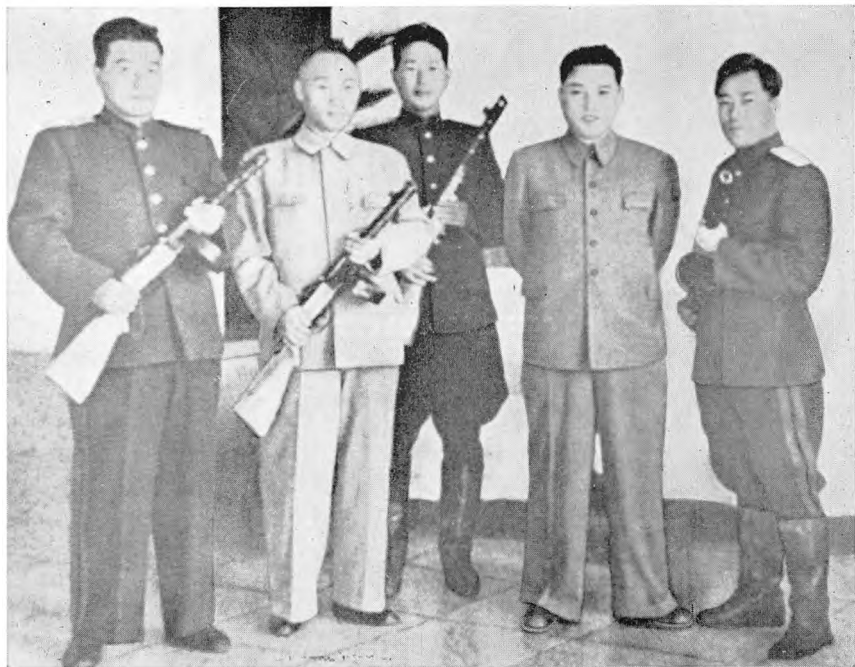
土地改革に先立って平安南道大同郡の農民たちと話合う金日成将軍
（第二章第4節参照）

黄海製鉄所で現地指導をおこなう金日成将軍　（第二章第4節参照）

北朝鮮労働党創立大会で報告する
金日成将軍　　（第二章第５節参照）

北朝鮮労働党第２回大会で中央委員会活動報
告をおこなう金日成将軍（第三章第２節参照）

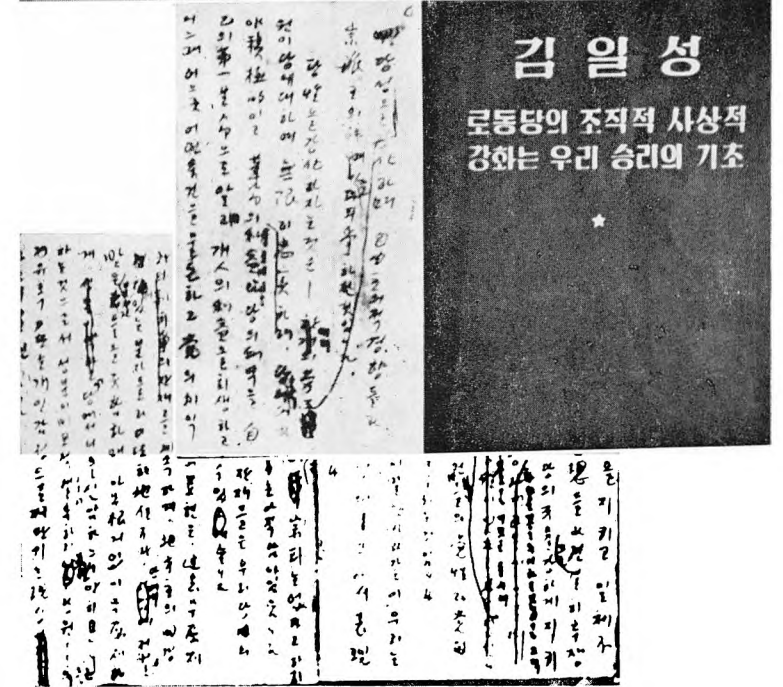
朝鮮人民軍の閲兵式で『朝鮮人民軍の創建に際して』演説する金日成将軍
（第三章第5節参照）

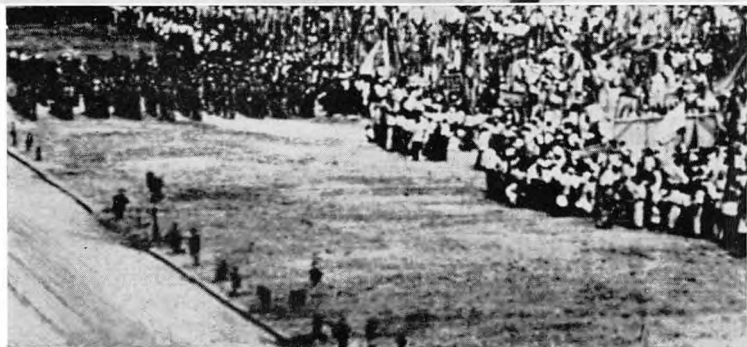
金日成将軍は、わが国ではじめて製作された機関銃を古い戦友である幹部たちに授与した
（第三章第5節参照）

〈上〉朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議の第一回会議で政府政綱を発表する金日成首相（第三章第7節参照）

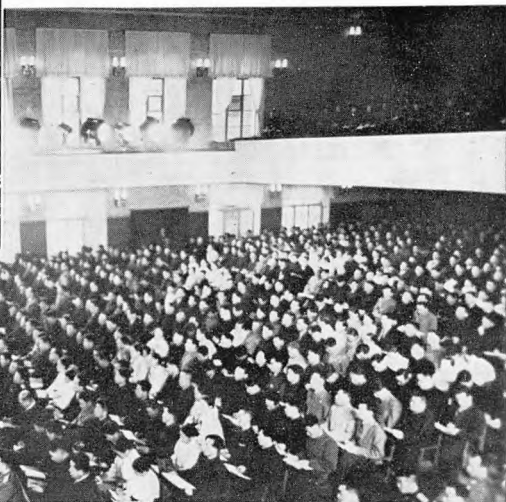
〈下〉偉大な祖国解放戦争を輝かしい勝利へと導いた軍事委員会委員長であり、英雄的な朝鮮人民軍最高司令官であり、百戦百勝の鋼鉄の統帥者である金日成元帥（第四章参照）

アメリカ帝国主義侵略者をうちくだき、一路南へ進撃する人民軍勇士をはげます金日成首相　（第四章第3節参照）

英雄および模範戦闘員と話合う金日成首相　（第四章第4節参照）

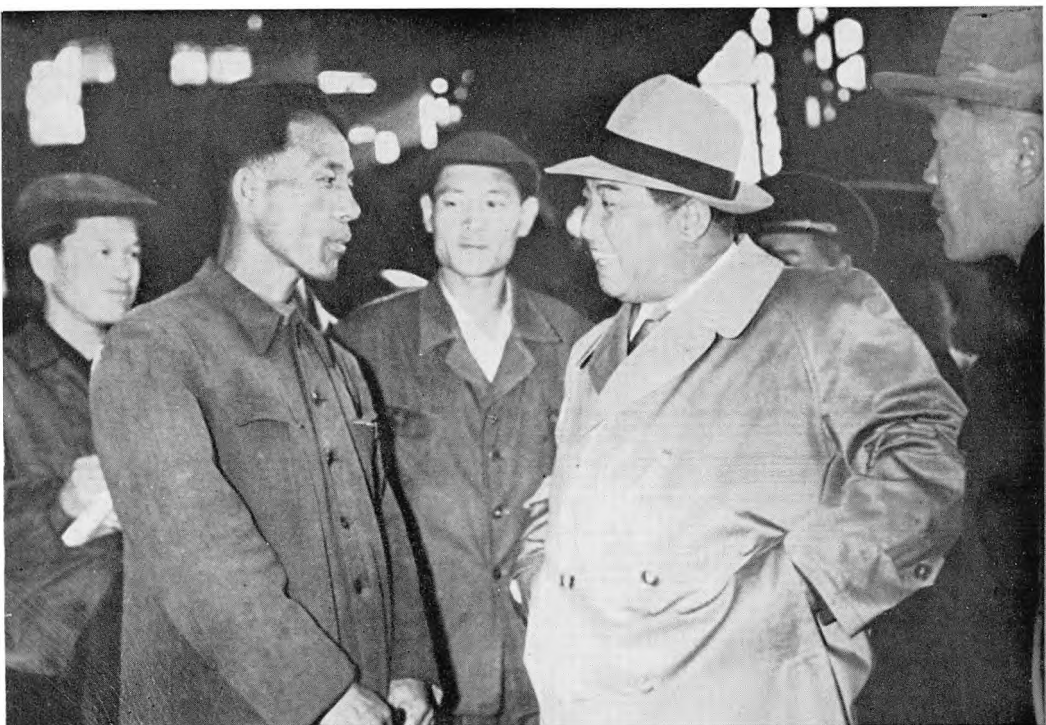
前線を視察する最高司令官金日成元帥
（第四章第７節参照）

朝鮮労働党中央委員会第５回総会で報告する金日成首相
（第四章第７節参照）

戦争で勝利をおさめた英雄的人民軍将兵と人民の歓呼にこたえる金日成首相　（第四章第8節参照）

朝鮮労働党中央委員会第6回総会で報告をおこなう金日成首相
（第五章第1節参照）

論文『思想活動で教条主義と形式主義をなくし主体を確立することについて』を執筆する金日成首相　（第五章第4節参照）

朝鮮労働党第3回大会で中央委員会活動総括報告をおこなう金日成首相
（第六章第1節参照）

全国農業協同組合大会で報告する金日成首相　（第六章第2節参照）

論文『共産主義教養について』を執筆する金日成首相
（第六章第4節参照）

千 里 馬 銅 像（第七章参照）

降仙製鋼所を現地指導する金日成首相　　　　（第七章第３節参照）

月報

金日成伝 第二部

民主朝鮮建設から千里馬大進軍まで

雄山閣出版株式会社
東京都千代田区富士見二ー六ー九

『金日成伝』内外に大きな反響をまきおこす

─各界著名人士が絶讃─

─全国主要書店で連続ベストセラー─

『金日成伝』（第一部─生い立ちから祖国凱旋まで）が、わが国ではじめて出版されてからまだ五カ月にもならない。しかしこの間、日本の出版界にはきわめて大きな波紋がまきおこった。

それは『金日成伝』が出版されるや、政治家、社会活動家、学者、文化人、宗教家をはじめ学生、市民のあいだに大きな関心をよび、初版が一流書店でまたたくまに売切れてしまい、注文が殺到しはじめると同時に、全国主要書店でつぎつぎとベストセラーとなったからである。

もともと日本人のなかには、金日成将軍の名が一九三〇年代からすでにひそかに知れわたっていた。

それは抗日遊撃隊を率いて朝鮮民族解放運動の陣頭に立ち、「無敵」を誇る関東軍をおののかせる伝説的な英雄として当時満州や朝鮮にいた日本人のなかには暗黙のうちに「恐るべき人物」として知られていたし、日本国内でもひそかに知れわたっていた。

そして朝鮮が三十六年間の日本帝国主義のくさりを断ち切り、みるみるうちに東方の一角にそびえる社会主義強国に変わるという「奇跡」が日本人の目の前でおこった。金日成将軍の名は、やがて金日成首相としてより多く

の人のなかに知れわたり、以前口に出せなかったその名がいつしか公然と語られるようになり、その人となりの全ぼうを知る機会を心待ちにしていた。

革命という複雑で困難な大事業をなしとげるには、必ず偉大な指導者を必要とすることは歴史の教えるところであるが、朝鮮の「奇跡」を知るには、金日成首相をはなれて考えることができない。

『金日成伝』が読者の間に急速にひろまっている事実は、日本人のなかにこうした認識が深まっていることのあらわれといえよう。

二十世紀における卓越した指導者である金日成首相の半世紀の記録を、伝記として日本で出版したことの意義が大であることは、社会党委員長成田知巳氏、総評議長堀井利勝氏、日朝協会会長長野国助氏、立命館大学名誉総長末川博氏、日本学術会議会員宗像誠也氏、東京教育大学教授家永三郎氏をはじめ多くの各界人士が、こぞってこの本の推せん者となったことからも十分うかがわれる。

そればかりでなく数多くの人が推せん文を書き、新聞、雑誌にそれぞれ書評を書いた。それはひとえに、金田一京助氏がのべたように「朝鮮民族の英雄であるばかりでなく、世界的政治家である金日成元帥」にたいする讃辞であった。

法政大学元総長谷川徹三氏は、「戦争中、なぞの人物としてさまざまのうわさを聞いており、戦後、輝かしい存在として表面に立ちあらわれた金日成首相に、私は大きな関心をいだいている」と前おきしてつぎのように語っている。

「伝記の巻頭の写真や、絵を拝見して感じたことは、金日成首相が少年の頃から実にりっぱな風ぼうをもっていたということである。金日成首相が少年の日からその人間的資質の偉大さを物語るりっぱな風ぼうをもっていたことに私は感銘をうけずにはいられない」

また東京大学教授高橋幸八郎氏はつぎのようにのべている。

「『金日成伝』にのべられていることがらは、朝鮮のりっぱな生きた経済史ではないかと思う。『金日成伝』を読んで私が得た金日成将軍の印象というのはきわめて純粋であるということである。この純粋さが本来の意味での革命の、創造的な革命というものの内容ではないかと思う」

金日成首相に直接会ったことのある衆議院議員帆足計氏はつぎのように語った。

「先年お目にかかった金日成首相の第一印象は、若々しくおおらかな風格ということであった。官僚的なところがすこしもなく、そして何より感心したことは、その施策が何事につけてもきわめて実際的なことであった。首相は中央にとどまること少く、始終地方を駆け廻って直下に人民の生活のなかに入り、またいつも人民の先頭に立って困難の打開に体当りで努力しているのである。この書はたんに金日成首相の伝記として有益なだけではなく、若い朝鮮民主主義人民共和国が風雪をついて前進した苦難と成長の歴史としても興味ふかく有益なものと思う」

軍事評論家の高橋甫氏は、日本平和委員会発行の『平和運動』四号にこう書いている。

「私自身、襟を正し、涙と感嘆とをもって、くりかえし全巻を味読した。日本国民の若い世代にとって、この本は、民族の独立とはどのようなものであり、どのようにしてそれはかちとり、どのように守らなければならないかを教えている、深刻な教科書であると思う。抗日遊撃闘争は、金日成将軍という、めったに世に現われない、愛国者であり、英雄であり、政治的、軍事的天才である指導者をえたから、輝かしい勝利を実現することができたといっても過言ではない。一度の敗北にもめげず、七転び八起き、名声を馳せた軍事指導者は、この世に少い。しかし、文字通り百戦百勝という軍事指導者はほんとうの軍事的天才というのほかはなく、それは、軍事的天才というよりも政治的指導の天才というべきものなのかもしれない。私の調査したかぎりでは、金日成将軍は、そ

のような稀有な政治的指導、軍事的指導の天才の一人であった。志遠く、主体性を堅持して、百戦百勝、鋼鉄のような強靱さを発揮しつつ、朝鮮人民の先頭にたつ、たぐいまれな指導者金日成将軍の健闘を祈って筆をおく」

また映画『チョンリマ』撮影のため数年前、朝鮮民主主義人民共和国に滞在したことのある映画監督山本薩夫氏は、「『金日成伝』を読んではじめて、あの当時強烈な印象と感動をうけた〝チョンリマ〟の奇跡の源がわかった。抗日武装闘争の時期の政治的経験と業績、たたかいを通じてつちかわれた主体思想と不屈の闘志がいまにうけつがれ、開花しているのだ」と語った。

宗教家である清水寺教学部長の福岡精道氏は、「天、一人の英傑をこの世に送るや、選ぶに時と処をもってする」とのべながらつぎのように語っている。

「いまやアジアを初め全世界には、民族独立と解放の闘争がほうはいとして起っているが、金日成首相は単に朝鮮民族四千万の導きの太陽であるのみならず、これら独立と解放を熱願している諸民族の師表となっているのである。『金日成伝』は単なる事実の羅列でなく、祖国と民族への限りない愛を、文字どおり死を賭して貫いてきた民族の救世主にたいする美しい一大詩編である」

『金日成伝』はこのように、巨大な感動と反響をよびながらいっそう広く読まれている。

歴史に大きな足跡をのこす人物である金日成首相の伝記を発行することは、日本人にとって非常に大事なことであり使命でもあると思う。

第二部、第三部の御愛読を乞う次第である。

（K）

『金日成伝』出版によせる駐日各国外交官のこえ

○金日成首相の革命闘争の過程は、たたかう世界の人民が必ず研究すべき歴史であり、教科書である。私はこんご金日成首相の伝記がスペイン語、英語その他の国のことばに早く翻訳され、出版されて各国人民の間に広く普及されることをのぞむ。（駐日キューバ大使マヌエル・クエルボ・メンデス氏）

○金日成首相は朝鮮が生んだ卓越した偉大な指導者であることを私は知っている。なぜかというと、金日成首相は朝鮮人民を指導して〝世界最強〟を豪語していたア

メリカの鼻柱をへし折ったからだ。（アルジェリアの一外交官）
○金日成首相は朝鮮人民の偉大な指導者であるばかりでなく、世界の人民の卓越した指導者である。イラク人民は金日成首相に深い敬意を払っている。私は日本語は得手ではないが『金日成伝』を一冊買った。じっくりと読むつもりだ。（イラクの一外交官）
——いずれも六月二十三日東京椿山荘で開かれた『金日成伝』出版記念会にて——

◎新聞雑誌の書評から

評論家　藤島宇内

◇日本では一般に、第二次大戦で米軍を、中国の革命運動のために日本軍国主義が敗北したという認識はあるが、朝鮮の革命運動に敗北したという認識はほとんどない。そのことが、現代においても日本人の朝鮮に対する蔑視観を是正できない一つの理由となっている。本書によって朝鮮の革命運動が日本に紹介されることは、日本人の朝鮮観を是正する上のプラスにもなると思われる。
（東京新聞・五月十九日）

大学教授　家永三郎

◇私たちは、日本の官憲の苛烈な弾圧のもとでつづけられた朝鮮の人びとの解放を求めるたたかいについても、ほとんど知ることなく過してきた。日本人の知識のこうした重大な盲点が、朝鮮解放後四分の一世紀ちかくをへた今日まで、私たちが朝鮮について正しく理解し判断するのを妨げる大きな条件となっていたのではなかったろうか。…今回新刊の『金日成伝』により、いっそうその経過をいきいきと読みとることができるのは、右に述べてきたような日本人の盲点を埋める役割をはたすものとしてきわめて意味深いものがあるといわなければならない。
（朝日新聞・五月二十日）

朝鮮問題研究家　川越敬三

◇金日成の名は誰でも知っていながら、その人物についてはほとんど知っていないのが日本の現実なのである。本書はそうした隣国の最高指導者について書かれた最初の本格的な伝記である。…朝鮮問題が日本のわれわれにとってますます身近かな重要問題になってきているこんにち、朝鮮労働党の理論や政策の源流を本書によって探

ることは意義のあることであろう。

（図書新聞・五月二十四日）

国際政治学者　畑田重夫

◇この本は、個人の伝記にはちがいないが、同時に解放前の朝鮮、すなわち旧日本帝国主義の植民地支配下の朝鮮の歴史、とりわけ朝鮮人民の解放闘争史でもあり、革命運動史でもある。

（週刊読書人・六月九日）

◇宣伝臭を予想し、あるいは通読できないのではないかと思っていた。…その叙述がハナにつくかと思うとまったく逆で、強い感動を与える力を持っている。…この本の一番のおもしろさは、革命的英雄とはいかなる存在であるかについて、いやおうなしに読者を感銘させるところにある。

（週刊読売・五月三十日号）

◇米軍偵察機を撃墜して、大きな緊張感をもたらしている一方の朝鮮。その国のイニシアチブをとるたしかな巨人・金日成のおさなかりしころの生いたちから、祖国凱旋までの半生記。読後、胸にくるものは社会主義への情熱と勇気か。

（アサヒ芸能・五月一日号）

◎愛読者カードから

○『金日成伝』を新聞広告で見つけ、早速興味深く読みました。私は元満州国通化省臨江県撫松に於て、昭和十二—二十年一、七〇〇町歩にわたる自給農場を場長として経営しておりました。金日成将軍の事は、深い尊敬の念を常に抱いておりました。金司令の人となりは住民からよく聞いていました。物資の供給もしてあげた事が有りました。金司令の紳士的な人物の一端を記憶しております。金首相の御健康と御奮斗を祈って止みません。（島根県益田市大字須子イ二二四番地一七　楠孝雄）

○私は一九二〇年より終戦迄、間島省龍井で生活しましたので、金日成首相のうわさはよくききました。日本軍警が血まなこでさがし求め、遂に果たさなかったのでほんとうに幸いでした。金日成首相は大偉人であります。この本は私の希望で息子に買って貰いました。昼夜兼行で一巻をよみ終りました。感無量です。（大阪府吹田市津雲台C—19—206　川原とよ）

四たび共和国を訪問して

畑中政春

このたびの朝鮮民主主義人民共和国訪問を通じて、私がもっとも強烈な印象をうけたのは、全国土がまさに鉄壁の要さいと化し、全人民が武装し、アメリカ帝国主義の陸、海、空、いずれからの攻撃があっても、ただちにこれを撃破するという強固な決意に燃えながら、一人ひとりがそれぞれの部署についているということでした。

金日成首相はすでに一九六二年、こんにちの情勢を予見して、経済建設と国防建設を並進する路線をとってきました。そして六六年一〇月の朝鮮労働党代表者会議でさらにそれを強調し、着々と経済建設をすすめる一方、軍隊の幹部化、現代化、全人民の武装化、全国の要さい化のために力をそそいで自衛の軍事路線をつらぬいてきました。

朝鮮をめぐる情勢は周知のように、米スパイ機の撃墜事件で最高度の緊張に達しました。日本では一触即発の戦争の危機を感じた人もすくなくありません。

しかし一昨年訪問した時のような、農場や工場などでの軍事訓練もみられず、平壌市内を行進する労農赤衛隊の姿もみられませんでした。

夕ぐれの平壌には大同江にボートを浮かべたり、公園のベンチで楽しく語らう若者たちや観劇に行く市民の姿がみられ、万端の準備態勢をととのえた自信と、ゆとりあるしずけさがうかがえました。

このように祖国防衛を完ぺきにしながらも、社会主義建設で着々と成果をおさめ、人民の生活は日々に向上しています。いま朝鮮の経済成長率は16～17パーセント。他の社会主義国が8パーセントぐらい。日本では高度成長を誇っても、せいぜい10パーセントです。

五カ年計画当時の30～40パーセントの成長率にくらべれば、たしかに落ちているが、多額の予算を国防費にまわして、なお16～17パーセントの発展速度は大へんなことで、緊張激化のたびに一部の人びとのもち出す経済不

振うんぬんの言葉を、この数字が吹きとばすでしょう。
金日成首相は、「われわれは七カ年計画で予定されたとおり、いま工場の建設を大々的にすすめている。50万キロの火力発電所も建設した。ことし中に農村では13万世帯の住宅を建設する」と語っていました。
朝鮮人民は、金日成首相を中心とする朝鮮労働党のまわりに堅く団結しており、人民との間は一枚岩のように寸分のすき間もありません。
金日成首相は明るく若々しく、エネルギッシュにどこへでもでかけていって、人民とつねに接し、建設現場をひとつひとつ指導します。首相のこういうくだけた明るさと若さが国全体にはつらつとした空気をかもしだす源になっているのです。
金日成首相は、社会主義建設の道をたゆみなく前進する朝鮮人民の団結のシンボルなのです。
朝鮮人民との友好をはかっていくとき、朝鮮の解放の歴史をよく知り、朝鮮人民が敬愛してやまない金日成首相と人民とのつながりを正しく理解しなければならないと思います。
六月二日、朝9時から2時間40分間、私は首相にお会いしました。
金日成首相は、アメリカ帝国主義の朝鮮での軍事挑発反対、安保破棄・沖縄即時全面返還、南朝鮮でのファッショ弾圧に反対する日本人民のたたかいに敬意を表し、日本に帰ったらみなさんによろしくお伝え願いたいとのことでした。
金日成首相は、会談のなかで日朝両国人民が団結して、大局的な立場からアメリカ帝国主義に反対してたたかうことが、いまほど切実に要求されているときはないと強調しました。
私は日朝協会の仕事の重大さとともに、責任の重さを感じずにはおれませんでした。
訪朝中、私の健康に、こまかく気を配ってくださった金日成首相に深く感謝しております。

（談）

編集部だより

『金日成伝』第二部を、朝鮮民主々義人民共和国の創建二十一周年の記念日までに、読者の皆様におとどけできますことを、当社としましては大変喜しく、また誇らしく思っています。本書の第一部は物凄い反響でした。第三部は来年二月初旬に皆様におとどけする予定です。（H）

金日成伝〈第二部〉

はじめに

ながい歳月にわたって、国の内外からあらゆる苦難をへてきたわが民族は、悲運につつまれた祖国と人民を救いだす卓越した指導者を心の底から待ちのぞんでいました。

とくに祖国が日本帝国主義の植民地に転落し、人民の運命が生死存亡の危機にさらされていたとき、それはもっともさしせまった民族的な渇望となっていました。

太陽や月さえ光を失った民族受難の時代に、この民族あげての願望をになってあらわれた人こそ、まさしく絶世の愛国者であり、民族的英雄であり、百戦百勝の鋼鉄の統帥者であり、国際共産主義運動と労働運動のすぐれた指導者のひとりである四千万朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相その人だったのです。

万景台の貧しい農家に生まれた金日成首相は、十四歳のとき、早くも祖国と人民のために一身をささげることを決心し、たたかいの道につきすすんだのちは、偉大な抗日武装闘争の旗じるしのもと、祖宗の山——白頭霊峰に祖国光復の烽火を高くあげ、三千里の山河に解放の曙光を照らし、朝鮮人民を英雄的な救国闘争へとふるいたたせました。

年老いたものから子どもにいたるすべての世代は、金日成将軍の名にはげまされて暗たんたる日々にも生きる力と希望を燃やし、その名を胸にひめては不倶戴天の敵日本帝国主義とのたたかいに決起しました。そして朝鮮人民は、一九三〇年代から金日成将軍を偉大な領袖としてむかえることによって、指導者にたいする歴史的な渇望をみたすことができたのであります。

白頭のけわしい山々、高くそびえた峰々を十五星霜にわたって踏みわけ、日本帝国主義侵略者をうちやぶって、ついに祖国を救った金日成将軍は、たたかいの砲火にくすんだ赤旗を高くかかげ、解放された祖国、歓呼にどよめく人民のもとへと凱旋しました。

金日成将軍によって指導された偉大な抗日武装闘争と、金日成将軍の祖国凱旋は、まさに朝鮮民族のもっとも大きな栄光であり、もっとも大きなしあわせであったのです。

将軍は、祖国凱旋後も、ながい歳月にわたる疲れをいやすいとまもなく、祖国の地に自由で富強な人民の楽園を築き、アメリカ帝国主義者の南朝鮮占領によって二つにわかれた祖国を統一するための全民族的な闘争を組織指導しました。

金日成将軍は、解放後、新しい祖国建設の大綱をさししめし、マルクス・レーニン主義の党と人民の主権をうちたて、反帝反封建民主主義革命を輝かしく遂行し、真の人民武力を創建し、共和国北半部を強力な民主基地に築きあげました。

アメリカ帝国主義者が戦争を挑発したときには、祖国の運命を一身にになない、天才的な戦略戦術と卓越した指導によって、世界「最強」を豪語するアメリカ帝国主義者を惨敗のどん底につきおとし、朝鮮人民の偉大な勝利をかちとりました。

金日成首相は、戦後もっともみじかい期間に祖国の地から灰の山と瓦礫を一掃し、社会主義革命と社会主義建設を輝かしい勝利へと導いてふたたび全世界を驚嘆させ、革命をたゆみなく、また、かつてだれひとりとして歩んだことのない道へと疾風のごとく前進させてきました。

将軍は革命と建設のうえで、だれも解くことのできなかった複雑な問題をもっとも正しく独創的に解明することによって、朝鮮人民をいっそう輝かしい勝利の道へとふるいたたせました。

首相はまた、アメリカ帝国主義とその手先どもを一掃するための南朝鮮人民の革命闘争と、祖国統一のための全朝鮮人民の闘争を勝利へと導き、国際共産主義運動の傑出した指導者として世界革命の発展に大きな寄与をしました。

闘争の道に第一歩をしるしたそのときから、じつに四十余年にわたるながい歳月をへてこんにちにいたる金日成首相の革命活動の過程——、それは朝鮮人民にたいする熱烈な愛と献身的な服務の歴史であり、民族の敵との血ぬられた闘争の歴史であり、たえまのないはげしい革命と創造の歴史であり、輝かしい勝利の歴史であります。

わが民族の歴史は五千年のながきにおよびますが、金日成首相のように科学的な革命理論と卓越した指導力をもち、さらに気高く美しい徳性をかねそなえた指導者をいただいた例はかつてありませんでした。

またわたしたちは、金日成首相のように生死の瀬戸際から民族を救いだし、たくましい革命的展開力で前人未到の道を切りひらき、たゆみなく前進しながら祖国と人民を繁栄と勝利の道へりっぱに導いた指導者をほかに知りません。

だからこそ、すべての朝鮮人民は大きな誇りをもち、金日成首相を民族の太陽として、人民の偉大な領袖としてあおいでおり、広はんな世界の人民も、国際革命運動につくした金日成首相の巨大な貢献によって、世界革命運動の卓越した指導者として金日成首相を心から尊敬しているのであります。

このような指導者を推戴しているからこそ、アメリカ帝国主義の支配のもとであらゆる苦痛をなめている南朝鮮の同胞も、心から金日成首相をあおぎみ、ひたすら、統一された祖国で幸福に暮らすその日のために力強く生きぬき、勇敢にたたかっているのです。

この本は、金日成首相の伝記第二部（第一部は金日成将軍の幼年時代と初期革命活動、そして抗日武装闘争をおもな内容としている）であります。ここには金日成首相の祖国凱旋からはじまり、平和的な建設期、偉大な祖国解放戦争の

時期、戦後の復旧建設と社会主義基礎建設の時期、そして社会主義の高峰をきわめ、祖国統一の大事変を主動的にむかえるためにたたかう現在までの首相の卓越した戦略戦術と偉大な導き、高邁な徳性などの重要な内容がおさめられています。

しかし、このように複雑でぼう大な内容を一冊の本に体系的にまとめるということは、きわめてむずかしい仕事でした。筆者自身、ぼう大な内容に圧倒され、迷路におちいったことも一度や二度ではありませんし、また深い理論的な問題と劇的で深刻な場面にいたっては、自分の無能と力不足をなげいたこともしばしばでした。また先へすすむにつれ、高い峰々が蒼空にそびえたち、探求すればするほどはてしない世界がひろがってゆくようでした。したがって、そのなかから基本的なものをえらびだして書くだけでも、研究不足の筆者にとっては力にあまる仕事だったのです。

しかし、広はんな人びとが将軍の伝記を切実にもとめている事実を思い、およばずながらもこれを世にだすことにしました。今後さらに研究をかさね、いっそう完全なものにしていきたいと考えております。

わたしはこの本を出版する機会をかり、祖国の統一とかぎりない繁栄、人民の輝かしい未来と幸福のために、四千万鮮朝人民の敬愛する指導者金日成首相のご健康と長寿を心から祈るものであります。

一九六八年八月

白峯

金日成伝〈第二部〉目次

目次

第一章　新しい民主朝鮮創建の第一歩

1　祖国建設の大綱をしめして

苛烈をきわめた第二次世界大戦は、一九四五年八月十五日、日本帝国主義の無条件降服をもってその幕をとじた。

朝鮮(チョソン)は解放された。現代史におけるもっとも悲劇的な受難者であった朝鮮人民は、三十六年間にわたる日本帝国主義の植民地支配の鎖をたち切り、自由な新時代をむかえた。

これは朝鮮人民の偉大な領袖金日成(キムイルソン)将軍の指導のもとにたたかってきた朝鮮の共産主義者たちの輝かしい勝利であり、朝鮮人民のもっとも栄光にみちた民族的勝利であった。

金日成将軍の指導のもとに十五星霜のながい歳月を英雄的にたたかい、日本帝国主義侵略軍を撃破しつづけてきた朝鮮人民革命軍の各部隊は、日本帝国主義にたいする最後の掃討戦に参戦した。このたたかいで朝鮮人民革命軍は、終局的に敵を撃滅して民族的慶事をもたらし、英雄的な抗日武装闘争の歴史的勝利をかざったのである。

ながいあいだこの地で銃剣をふりかざし、暴虐のかぎりをつくしてきた日本帝国主義侵略者は、時代の激流におしながされる落葉のように、朝鮮人民のうらみの涙にみたされた玄海灘のはるかかなたに追いやられた。これが侵

略者の末路であり、運命であった。

解放のよろこびにつつまれた朝鮮人民は歓呼の声をあげ、手をとりあって踊った。

遠く各地に散っていた人びとは、ひたすら故郷への道をいそいだ。みじめな流浪の生活と異国での暮らしから、徴兵と徴用から、すべての受難者たちが帰ってきた。あちこちの村々や家々で、浮き雲のように散りぢりになっていた家族との感激的な再会の場面がくりひろげられた。

すべてが急変した。

人びとの境遇は一夜にしてかわった。きのうまでは侵略者の奴隷として、またその奴隷の運命を背負って生まれたわが子に乳房をふくませては涙にくれていた母親たちも、いまは幸福と希望につつまれた母親に生れかわったのである。

人民は奴隷の境遇から解き放たれ、血のにじむような思いで待ちのぞんでいた自由をかちとり、圧迫と搾取のない新しい社会を建設する輝かしい道へすすむことになった。

第二次世界大戦後の内外情勢は、民族的独立と新しい社会の建設をめざす朝鮮人民にとって有利にかわっていった。

国際舞台における政治勢力の配置も根本的にかわった。ドイツ、イタリア、日本の敗北によって帝国主義陣営の力が全般的に弱まった反面、民主主義と社会主義の陣営が世界的な規模で形成された。

植民地、半植民地従属国家においては民族解放運動が燎原の火のように燃えひろがり、一部の植民地人民は隷属の鎖をたち切って民族的独立をかちとった。

資本の鎖にしばられていた西ヨーロッパとアジアの諸国においても、共産党を先頭とする勤労人民の民主主義的運動が大衆的に力強く展開された。

多くの植民地を失い、その政治的領域をいちじるしくせばめられた帝国主義陣営は、大きな危機に見まわれた。このことは、帝国主義者が世界を意のままに動かしていた時代はすでにすぎ去り、歴史の創造者である人民のもとめる道にむかってすすんでいることをはっきりしめすものであった。

こうした世界情勢の動きは、そのまま朝鮮にも反映された。

朝鮮人民の革命的気勢はきわめて高かった。

日本帝国主義のあらゆる機関に石がなげこまれ、かれらの手先、民族反逆者、地主、買弁資本家、反動官僚どもは、日のあたる場所を避け、逃げ道をもとめてさまよわなければならなかった。

春風が芽ぶくのをうながすように、解放は大衆の政治的めざめをもたらした。いたるところで演説会や演芸公演がひらかれ、さまざまな大衆団体がつくられていった。

侵略者の滅亡と民族の解放という、いいつくせない歓喜と激動のうずによって、朝鮮の山河は炎のるつぼさながらにわきかえった。これは暗黒の世界をでて光明の岸辺にたった人民が、時代の大転換をその胸で感じとり、その目でたしかめる歴史的な瞬間であった。

この意義深い瞬間、全朝鮮人民の心は、十五星霜にわたって日本帝国主義の百万の大軍とたたかい、ついに敵をうちたおして祖国を解放した朝鮮人民の偉大な指導者金日成将軍のもとにはせた。

解放をむかえた三千万朝鮮人民は声をかぎりに、「金日成将軍万歳！」を叫び、すべての人びとがなつかしい領袖をむかえるそのときを胸ときめかせて待ちのぞんだ。

金日成将軍——、その名はまさに朝鮮民族の太陽であった。三千里朝鮮の山河を圧殺しようとした日本帝国主義の悪法と流血の弾圧も、深くとざされた暗黒と林立する銃剣も、金日成将軍がかざす蘇生と救いの光明をさえぎることはできなかった。

人民は日本帝国主義のさげすみにさいなまれ、抑圧に苦しみながらも、白頭（ペクドゥ）の峻嶺をのりこえ、侵略者を容赦なくうちくだく金日成将軍の活躍にはげまされ、青くしげる竹のようにまっすぐな心をもって敵とたたかっていくことができたのである。

由緒ある万景台（マンギョンデ）の革命家の家に生まれた将軍は、十四歳のときすでに、祖国を解放するまでは故郷の土を二度と踏むまいと決心して単身鴨緑江（アムロク）をわたり、遠くけわしいたたかいの道に第一歩を踏みいれた。

そして早くも十五歳の若さで最初の革命組織であるㅌ（トゥ）・ㄷ（ドゥ）（打倒帝国主義同盟）を組織し、以後朝鮮共産主義青年同盟をはじめ各種の反日革命組織の創建者、指導者として、青年学生運動のすぐれた指導者として、あるときは地下で、あるときは合法的にはげしい革命闘争をくりひろげた。

このたたかいの過程には、留置場や刑務所で囹圄（れいご）の生活をおくるなど、きびしい試練の日々も多かった。しかし日本帝国主義の鉄窓も銃剣も、祖国の光復をめざす将軍の大きな志をくじくことはできなかった。

一九三〇年の春、吉林（キルリム）の監獄をでた将軍は、本格的な武装闘争を準備するために農民大衆のなかにはいり、以前にもまして力強く反日地下闘争をくりひろげた。

このときからすでに将軍は、広はんな人民があおぎみる指導者として歴史の舞台に登場したのであった。

たたかいは苦難にみちていた。世のなかは荒れ狂い、歳月は苛酷をきわめた。

日本帝国主義は大陸侵略にやっきとなり、朝鮮人民にたいする野蛮な弾圧をますます強化してきた。いたるところで血が流された。

朝鮮は一つの巨大な監獄であった。一時は闘士を自称していた連中もおじ気づき、愛国を時代錯誤であるとうそぶきながら日本帝国主義のまえにひれふし、自称「共産主義者」たちも変節して民族を裏切った。

時代はまさに惨たんたるものであったが、金日成将軍は祖国のために一身をささげることをかたく決意し、偉大

な革命の赤旗を高くかかげたのである。

金日成将軍は一九三〇年の初頭に、反日民族解放闘争をその最高の段階である偉大な武装闘争へと発展させた。これは朝鮮の革命史にもたらされた偉大な転換であった。

二十一歳の若さで将軍は、敵のきびしい弾圧にもめげず抗日遊撃隊を創建し、その指導者として、全アジアの支配をもくろむ日本帝国主義の大軍との英雄的な闘争にたちあがった。

将軍は白頭山を中心とする広大な密林と山野において、十五年というながい歳月にわたり数千、数万回も、日本帝国主義侵略軍を、まるで秋の枯草のようになぎたおした。

飢えに苦しむときも、真冬の吹雪にさいなまれるときも、そしてまた雲霞(うんか)のようにおしよせる敵との激戦のさなかでも、かたときも忘れることのできなかったのは踏みにじられた祖国であり、必ずや解放せずにはおかない祖国の未来であり、人民が国のあるじとなる新しい社会であった。

祖国と人民にたいする炎のような愛があったからこそ、将軍は水火千里の試練にたえることができたのであり、天才的な戦略戦術をもって敵の大軍を手玉にとり、滅亡へと追いやることができたのである。

だからこそ人民は、将軍を天地の造化を意のままにする天が生んだ統帥者とあおいだのである。このたたかいの過程で将軍は、解放後の朝鮮に創建すべきマルクス・レーニン主義党の組織的思想的土台を準備し、反日民族統一戦線体である祖国光復会を創建して、その周囲に各界各層の人民をはばひろく結集させたのであった。

熾烈で多方面的な、そして深刻な政治闘争をふくむ将軍の偉大な抗日武装闘争は、日本帝国主義をほろぼし、祖国を解放することによって歴史的な大勝利を達成した。

歴史的な勝利をおさめた金日成将軍は、解放された祖国へ、——ひたすらそのために身をささげてきた祖国へ、民族の太陽として戦友たちとともに堂々と凱旋した。

金日成将軍の祖国凱旋は、じつに二十年という革命の嵐と鮮血にいろどられた歳月をへて達成されたのであり、これは将軍の革命闘争の輝かしい勝利であり、同時に、朝鮮の共産主義者と人民の、反日祖国光復の偉大な勝利でもあった。

祖国の地を踏んだ将軍は、うるわしい祖国の山河を感無量の面持でながめた。このときの将軍の胸中を去来した感激とよろこびは、ことばでは到底いいつくせないものであったにちがいない。どんなにか愛しつづけてきたなつかしい祖国であったろう！　肌をつきさす寒風のもとで草のかゆをすすりながら十何年ものあいだ慕いつづけてきた祖国！　何千何万回にもおよぶ戦闘と、はてしなくつづく数十万里の行軍をへてたどりつくことのできたその祖国！

それが苦難とたたかいの日々であっただけに、血はかぎりなく流され、犠牲も多かった。

熱烈な愛国の闘士であった両親と叔父、そしてまた弟も、祖国光復をめざすたたかいにその生涯をささげた。

いかに多くの抗日の戦友が、侵略者とのはげしいたたかいで英雄的な最後をとげたことか。

将軍は、こうしたすべての革命戦士たちの鮮血にじむうらみと念願をはたして凱旋したのであった。

将軍は祖国の土を手にかたくにぎりしめ、感激につつまれていた戦友にむかっていった。

「同志諸君、われわれはついに祖国へ帰ってきたのだ！」

あらゆる勝利が詩的に集約されたことばであった。

戦友たちはかたくだきあって踊った。どの顔も涙にぬれていた。しかし、かれらは泣いていたのではなく、心の底からのよろこびにうちふるえていたのであった。

金日成将軍とその統率下にあった朝鮮人民革命軍は、人民の熱狂的な歓迎をうけた。

人民は、たたかいに勝利して凱旋してきた朝鮮の誇りである革命闘士たちに花束を贈り、かたくだきあった。そ

して、やがてその抱擁は踊りにかわっていった。

将軍と革命軍のゆくいたるところで、全人民が声をかぎりに「金日成将軍万歳！」、「朝鮮独立万歳！」を叫び、熱狂してむかえた。

しかし、あまりにも謙虚な金日成将軍は、栄誉も歓迎もかたく辞退した。

将軍は自分の名をまえにださず、つねにつつましく戦友たちのあいだにたっていた。そしてピョンヤンにおちついたのちも、祖国凱旋を公表しなかった。

しかし人民には、すべてをよみとる聡明な天賦の目がそなわっているものである。

金日成将軍が凱旋したというううわさは、たちまち全国にひろがった。そして白頭山から漢拏(ハルラ)山（済州島にある朝鮮の名山の一つ）にいたる朝鮮のすべての山河、すべての人民が一つにとけあい、声を一つにして、抗日武装闘争の統帥者であり、民族の傑出した英雄であり、解放朝鮮を導く英明な領袖で

解放をむかえた朝鮮人民のよろこび

ある金日成将軍の凱旋を熱烈に歓迎した。

しかし、金日成将軍は歓迎の場に姿を見せようとはしなかった。

偉勲を誇ることよりも、富強な自主独立国家の建設に心をはせる金日成将軍は、苦しくけわしかった抗日闘争の疲れをいやすいとまもなく、新しい朝鮮の建設に没頭した。

なさなければならない仕事は、文字どおり山積していた。

まず激動する内外の政治情勢や、祖国の具体的な実情を科学的に分析しなければならなかったし、当面する数多くの問題を処理しながら、朝鮮革命の大綱を具体化しなければならなかった。

国を新しくつくるということは、なみ大抵のことではなかった。

将軍はまず国内の実情を具体的に分析し、人民を結集して新しい祖国建設にふるいたたせるために、祖国凱旋のその日から、金策(キムチェク)、安吉(アンギル)同志をはじめ、数多くの抗日闘士たちを元山(ウォンサン)、咸興(ハムフン)、吉州(キルジュ)、恵山(ヘサン)、茂山(ムサン)、清津(チョンジン)、鉄原(チョルウォン)、海州(ヘジュ)、南浦(ナムポ)、江界(カンゲ)、新義州(シニジュ)などの各地へ派遣した。

将軍は同志たちを派遣するにあたって、人民のなかでおこなうべき活動について、あらかじめつぎのような方向をあたえた。

すなわち、党組織と人民委員会を組織すること。すでにこれらの組織がつくられている地方では、それをさらに強化して社会団体を組織し、各界各層の大衆をこれに結集させること。また日本帝国主義の所有物であった産業、銀行、工場、企業所などを接収して反動どもがこれを破壊できないようにし、民兵隊、保安隊、警備隊など、人民武装隊を組織して政権機関、生産機関および人民の生命と財産を守り、正常な生活と生産活動を保障すること。さらに各学校を復興し、日本帝国主義の奴隷教育を撤廃して早急に民族教育を実施すること。そして日本帝国主義の残滓(ざんし)を清算するとともに、その手先を処断し、放送、新聞、雑誌など、各種の宣伝手段を掌握して日本帝国主義の

侵略的本質を暴露し、すべてを自力で解決すること、などであった。
このように将軍の思索と活動は、すでに政治、経済、文化のあらゆる領域にくまなくおよんでいった。
金日成将軍は早くも祖国凱旋の途上において要旨つぎのように語った。
「同志たちは、……すべて重要な任務を担当し、遂行しなければならない。朝鮮の情勢はきわめて複雑である。一時は革命運動にくわわりながら日本帝国主義に投降した変節者もいれば、歴史的に分派活動だけにふけっていた連中もいる。また日本帝国主義にこびへつらい、その忠実な手先となったようなものもいる。それに、日本帝国主義が三十六年ものあいだわが人民を圧迫したため帝国主義的残滓が多くのこっている。これらは、われわれが革命を遂行するうえで反革命的な作用をおよぼす。人を識別できるようでなければならない。
われわれは、人民大衆のために革命をつづけなければならない。そのためには人民大衆を結束させなければならない。人民大衆には誠意をつくさなければならない……。人民のなかにはいって宣伝活動をおこない、人民大衆から学ばなければならない。とくに、青年たちに愛国心を鼓吹する活動を積極的におこない、かれらが祖国建設にたちあがるようにしなければならない。すべての人びとを総動員し、解放された祖国を一日も早く富強な国家にしなければならない……。
われわれの革命は、まだ終っていない。すでに達成したことよりも、さらに大きな課題がのこっている。警戒心を高めて活動しなければならない……」
このことばは同志たちの行動の指針となった。
将軍は多忙な日々にもつねに人民とともにすごし、かれらとともに生活しながら、国の前途について熱心に語りあった。
将軍には官邸もなかった。将軍は抗日の戦友たちとともに合宿生活をおくっていた。

合宿所には連日のように労働者や農民、政治家、科学者、芸術家や技術者、宗教家など、各界各層の人びとがたずねてきた。

将軍はかれらと寝食をともにしながら、熱心に討論もした。将軍は国内情勢をたずねるかれらに正しい認識をあたえ、朝鮮がすすむべき道を明確にさししめしながら、真の愛国者である共産主義者にしたがい、朝鮮革命を完遂してこそ幸福な前途がひらかれるのだという確信をあたえた。

同志たちは将軍に、故郷をたずねるよう何回となくすすめた。しかし将軍はいつも微笑をうかべるだけで、別れてからすでに二十年にもなる故郷をたずねようとはしなかった。祖国建設の焦眉の問題をさしおいて、個人的なことで時間をさくことを好まなかったのである。

十月初旬のある日のことであった。

金日成将軍は副官をともなって降仙製鋼所にむかった。副官は子どものようによろこんだ。ゆく先が万景台の方向なので、今度こそは心のふるさと——万景台におともできるものだと思った。

多忙な日々をおくっていた将軍は、ピョンヤンに凱旋してからすでに半月以上もすごしながら、数日前になってやっと、普通江の対岸に住む母方の叔父（康竜錫先生）に副官をつうじて、近く帰るということづてをつたえただけで、指呼のあいだにある故郷をたずねることはすっかり忘れていたかのようであった。

疾走する車の窓からは、万景台につづく初秋の田畑や、緑の松に美しくおおわれた山なみが、ひと目で見わたされた。

窓ごしに目をやる将軍の感慨深気な顔には、明るい微笑がただよっていた。

将軍は興奮した語調でいった。

「むかしもいまも、ふるさとの山河はいいものだ！」

反日抗戦の行軍の途上でも、たき火のまわりでも、隊員たちに祖国の象徴として語ってきかせたふるさとであった。

やがて、車は万景台にむかう別れ道にさしかかった。将軍は車からおりると、万景台の方を指さしながら副官にいった。

「あそこが万景台です。いいところですよ。わたしのかわりに、ちょっとよってくれませんか。きっと気にいるでしょう……」

副官は、どうこたえてよいかわからなかった。瞬間、それまでの大きな期待が失望にかわった。

かれは無言のまま、哀願するように将軍の顔を見つめるだけであった。

しかし金日成将軍は、深い追憶の微笑をうかべていた。

「……二十年ぶりに見るふるさとです……。たずねてゆけば年老いたわたしの祖父母に会えるはずです。よろしくつたえてください。それから、国が解放されたのだから、もうすぐわたしも帰ってくるだろうといってくださ い。これからは住みよい世のなかになるだろうということも、ついでに申しあげて……。では明日の朝、ここでおちあいましょう」

将軍は、夢多き少年時代の思い出が刻みこまれた山なみをしばらくながめていたが、そのままゆっくりと車の方へ足をはこんだ。

心もとなくなった副官は、うるんだ目をしばたたきながら懇願するようにいった。

「ちょっとだけでも、およりになられては……」

「いや、つぎの機会にしましょう」

将軍は、わかってほしいというような微笑をうかべて、降仙製鋼所へと車を走らせた。

ふるさとの家をたずね、二十年を一日のごとく待ちこがれている祖父母に再会したい気持は、人一倍強かったにちがいない。だがそのまえに、祖国建設にたちあがった労働者たちと会わなければならなかったし、かれらに力と勇気をあたえなければならなかった。

こうして将軍は、祖国建設の偉業のために、ふるさとを目前にしながらも素通りしたのであった。

副官は遠ざかっていく将軍の後姿を見つめながら、こうつぶやくのだった。

「偉大なお方だ……」

金日成将軍は工場、企業所、学校、機関や農村などを足しげくたずね、労働者、農民、事務員、青年学生、インテリたちに前途を明らかにし、かれらの生活のすみずみまで気をくばり、勇気をあたえた。

将軍は各方面にわたって多忙な活動をおこないながら、解放された祖国の進路をさししめす朝鮮革命の大綱を具体化することに心血をそそいだ。

将軍はなによりもまず、全般的な政治情勢を深く分析することからはじめた。

解放された朝鮮人民の建国への熱意は、火を吐く噴火山のようであった。

全国に共産党の組織がつくられ、積極的な活動がくりひろげられた。

人民大衆は共産主義者たちの指導のもとに、各地で日本帝国主義の諸機関をうちこわし、自己の地方主権機関である人民委員会を組織して新しい制度、新しい生活を築くためにたちあがった。

各界各層の愛国的人民は自由に政治活動を展開した。各人民委員会は共産主義者たちの指導のもとに、その任務をりっぱに遂行していった。

労働者たちは日本帝国主義が所有していた工場、企業所などを直接管理し、農民は地主の圧迫と搾取に反対して積極的にたちあがった。

反動勢力は人民大衆の革命的な気勢におさえられ、頭をもたげることさえできなかった。かれらは人民の目を避けて生きのびようと必死にもがいていた。

しかし情勢は決してなまやさしくはなかった。別の面から見ると内外の情勢はきわめて複雑であり、朝鮮人民の建国闘争の前途には数多くの難関がよこたわっていた。

第二次世界大戦後、世界反動の頭目となったアメリカ帝国主義者は世界制覇の野望を燃やし、多くの国々や地域を隷属させ、新たな戦争の準備をすすめるなど、凶悪な侵略政策を強行するために血まなこになっていた。こうしてアメリカ帝国主義は、国際的革命勢力と全世界人民の共通の敵となった。

とくに、解放された朝鮮の南半部の地域を占領したアメリカ帝国主義は、朝鮮全土を植民地にし、アジア大陸侵略の基地にしようと植民地軍事基地化政策を強引におしすすめた。

アメリカ侵略者たちは、南朝鮮に侵入したその日から日本帝国主義のあとをつぎ、悪らつな植民地支配者として君臨した。かれらは暴虐無類の軍政をしき、人民みずから組織した人民委員会を強制的に解散させた。

アメリカ帝国主義は、かつて日本帝国主義が占有していた財産を横領したばかりでなく、必要なものすべてを意のままに手中にした。こうして朝鮮人民は、世界反動の頭目であるアメリカ帝国主義と国内で直接対決することとなった。

アメリカ帝国主義は朝鮮人民の不倶戴天の敵であり、朝鮮革命のもっとも凶悪な敵となった。

アメリカ帝国主義侵略者は、なりをひそめていた反動勢力をかき集め、植民地隷属化政策を実施するための支柱としてかれらを利用した。

また北朝鮮の悪質地主や隷属資本家、親日分子、民族反逆者、悪質官僚なども南朝鮮にのがれて反動勢力と野合した。海外にいた反動勢力も少なからず南朝鮮にはいりこんだ。

南朝鮮に集結した反動勢力はアメリカ帝国主義侵略勢力の案内者、手先となって人民を弾圧し、すすんで侵略者の専横と略奪行為に協力した。

北朝鮮でも、これに期待をかけた反動勢力がみにくい策動をつづけた。そのうえ内外で、いわゆる「共産主義運動」や「民族主義運動」にたずさわっていたという自称「愛国者」や「指導者」たちが、情勢の把握はもちろん、これといった政治理念もなしに、ただ地位だけにありつこうと血まなこになっていた。

かれらは、建国闘争にたちあがった人民大衆を組織して祖国建設に力をつくすかわりに、自分の名を売り、自分を支持する人びとを周囲に集めるために汲々としていた。そして、かれらのうちのあるものは人民委員会の指導的地位にもぐりこみ、陰に陽に人民の建国事業を妨害した。

これにくわえて、朴憲永（パクホンヨン）をはじめとする分派分子たちが情勢をさらに混乱させた。

当時の南朝鮮の情勢は、共産主義者たちが党を組織し、団結させることのできるすべての愛国勢力で統一戦線を結成し、はばひろい人民大衆を結集して合法闘争と地下闘争をたくみにむすびつけ、アメリカ帝国主義と右翼反動勢力に積極的な打撃をあたえることを要求していた。

しかし朴憲永一派は、かえってアメリカ帝国主義侵略者を「解放者」、「援助者」であると宣伝してアメリカ帝国主義にたいする幻想をふりまき、党の指導権をにぎるための派閥あらそいにのみ没頭した。そしてかれらは、アメリカ帝国主義の忠僕である李承晩（リスンマン）を、ブルジョア共和国である、いわゆる「人民共和国」の大統領におしたてようとはかり、はばひろい民主主義勢力の統一戦線のかわりに、アメリカ帝国主義の手先李承晩がとなえる、いわゆる「大同団結」のスローガンに呼応しさえした。

さらに一部の連中は、民主革命の段階をとびこえて、ただちにプロレタリア独裁政権をうちたて、一挙に社会主義革命を遂行すべきであると主張した。

あらゆる群小勢力がたがいに対立し、政治的濁流となってうずをまき、巷間には反動的な「政見」がみちあふれ、これが南朝鮮の情勢をさらに複雑なものにした。

こうした情勢がつづけば、解放されたばかりの祖国の前途はまたもや暗雲にとざされ、朝鮮民族はふたたびのろうべき悲劇に見まわれたことであろう。

じつに、民族の幸福と不幸が決定される歴史的な瞬間であった。したがって情勢は、正確な路線と人民大衆を正しく導くことを切実にもとめていた。

しかし、複雑な情勢を正確に洞察して遠い未来まで見とおし、朝鮮革命の唯一にして正確な路線をうちだすということは、だれにでもできることではなかった。

解放後の朝鮮革命の前途には、歴史的にひきつがれてきた後進性、複雑にからみあった政治勢力と社会階級的関係、アメリカ帝国主義の南朝鮮占領とそれにともなう南北の分裂など、複雑な諸問題が無数によこたわっていた。

これらすべての問題を正確に分析し、革命の正しい道を切りひらくことは、長期の革命闘争において独創的で豊富な経験を蓄積し、熱烈な愛国心と確固としたマルクス・レーニン主義的主見をもつ、革命の卓越した指導者である金日成将軍によってのみ可能であった。

だからこそ朝鮮人民は、解放直後、金日成将軍が一日も早く革命の陣頭にたって混乱した情勢をただすことを待ちのぞみ、自己の無力を嘆く南北の政治家たちもまた、金日成将軍ができるだけ早く民族の宿願をかなえてくれることを強くもとめていたのであった。

そうしたある日、金日成将軍は人づてに、ソウルにいた呂運亨（リョウンヒョン）から一通の手紙をうけとった。その手紙には、混乱した南朝鮮の情勢を嘆き、これを収拾することができるのは金日成将軍をおいてほかになく、将軍が一日も早くソウルにきて混乱した事態を収拾し、祖国を正しい道に導いてほしいという内容がしたためてあった。

将軍は、こうした要請を許憲(ホホン)先生や他の多くの人士からもうけとった。

将軍はこれらにたいする返信のなかで、アメリカ帝国主義の南朝鮮占領によって国土が分断されているため、ソウルにはゆけないことをくわしく説明し、同志たちがたがいに手をとりあってたたかうようにはげました。

朝鮮人民の期待を一身に集めた金日成将軍は、内外の情勢を科学的に洞察し、解放された朝鮮を民主主義的な新しい国家に建設するための朝鮮革命の大綱を具体化することに心血をそそいだ。

解放された朝鮮はどの道をすすむべきか？　革命の当面の課題はなにか？　南北に分断されている条件のもとで、革命をどう推進すべきか？

将軍の思索はこうした問題に集中された。

将軍は、早くも一九三〇年代にマルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用して発展させ、朝鮮革命の性格と任務、同盟者と闘争対象など、戦略戦術上の諸原則を明確に規定した祖国光復会の十大綱領を提示し、こうした問題に正確な回答をあたえていた。

将軍は、みずから作成した祖国光復会十大綱領を解放された朝鮮の実情と新たな情勢に照らして発展させてゆくため、日夜をわかたず努力した。

将軍の質素な事務室には、夜ふけまであかりがともっていた。将軍は全朝鮮が眠りについた夜ふけにも、朝鮮革命の大綱を具体化するために全般的な内外情勢を深く分析した。ときには工場や農村をたずね、労働者や農民とくったくなく話をかわし、人民の要求と生活状況をしらべ、かれらにもたらすべき未来を構想した。

こうした探求の過程をへて、朝鮮革命の大綱は具体化されていった。

金日成将軍は、朝鮮は必ず圧迫と搾取のない社会主義、共産主義社会を建設する道にすすまなければならないと考えた。

しかし将軍は、わが国がながいあいだ日本帝国主義に束縛され、資本主義的発展が抑制されていたため、非常に多くの封建的な要素をのこした植民地社会のままであることを考慮し、当面、反帝反封建的民主主義革命を遂行しなければならないと判断した。

そしてこの革命は、これまでのブルジョア革命とは異なり、その発展過程で、社会主義革命の段階にひきつづき移行することを前提とする人民民主主義革命でなければならないと考えた。

将軍は、朝鮮革命はただこの道をすすむことによってのみ、共産主義者の最高の目的であり、人類の気高い理想である社会主義、共産主義社会を建設することができるとみなしたのである。

こうした判断にもとづいて、金日成将軍は広はんな人民大衆を共産主義者のまわりにかたく団結させ、帝国主義の残存勢力と封建勢力に反対する民主主義革命を徹底的におこない、統一的な民主主義独立国家の建設のためにたたかうことが共産主義者の当面の任務であるとした。そして帝国主義残存勢力と封建勢力に反対し、民主主義革命を完遂するためには、必ず労働者階級の指導のもとに反帝反封建民主主義革命に利害関係のある広はんな農民と愛国的知識人、また民族的良心をもつ民族資本家までふくめた民主主義民族統一戦線を形成し、それにもとづいて労働者階級が導く人民政権である民主主義人民共和国樹立の課題を明示した。

しかしこの革命課題は、アメリカ帝国主義の南朝鮮占領によって、きわめて複雑な様相をおびざるをえなかった。長期にわたって帝国主義とたたかい、朝鮮革命を指導してきた金日成将軍は、帝国主義者の侵略的本性は絶対にかわらないものであり、とくにその頭目であるアメリカ帝国主義者の侵略性と略奪性は、他のいかなる帝国主義者にもまして凶悪であることを見ぬいていた。

金日成将軍は、アメリカ帝国主義が南朝鮮を占領している条件のもとでの朝鮮革命は、長期的で、しかも困難かつ複雑なものになるであろうと科学的に判断し、そのため朝鮮革命は、やむをえず一定の時期まで南北の異なった

環境のもとで、異なった闘争形式ですすめるほかはないと考えた。

こうして金日成将軍は、アメリカ帝国主義に反対して民族的統一と独立を達成するための闘争をおしすすめながら、まず、すでに解放された北朝鮮で革命を急速に推進し、朝鮮革命の強力な基地をつくるための民主基地創設路線を提起したのである。

北半部における民主基地創設の基本問題は、北半部において革命と建設を強力にすすめながら、まず第一に、マルクス・レーニン主義党を創建して強化発展させ、その周囲に労働者、農民をはじめとする各界各層の大衆をかたく結集し、北半部を単一的な革命勢力にかえることであり、第二には、強力な自立的民族経済を創設することによって革命の終局的勝利のための物質的土台をしっかりとかためることであり、第三には、革命の獲得物を武力で防衛し、敵のいかなる侵略的挑発策動をも一撃のもとにうちくだくことのできる軍事力をととのえること、などであった。

これは金日成将軍の偉大な主体思想の実現――すなわち、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を北半部で実現することを意味した。

これはアメリカ帝国主義の侵略政策に対処して、解放された北朝鮮に強力な革命基地を築き、これにもとづいて朝鮮人民みずからの力でアメリカ帝国主義を南朝鮮から追いだし、祖国の統一と革命の終局的勝利を成功裏に保障しようという徹底した主体的路線であり、反帝反米に徹した革命的な戦略的路線であった。

これはまた、祖国が二分された条件のもとで革命を成功裏に遂行し、その終局的勝利を保障するための、もっとも正しい道をさししめした独創的ですぐれた路線であった。

当時、世界の多くの国々は、第二次世界大戦でアメリカが反ファッショ「連合国」の一員であったことから、アメリカ帝国主義にたいして誤った幻想をいだいていた。また少なからぬ人びとは、朝鮮人民の運命が諸大国によって決定されるものであるかのように考えていた。

しかし、金日成将軍は天才的な慧眼をもってアメリカ帝国主義の侵略的正体を見ぬき、自力更生の原則から、朝鮮人民の主体的な力量で革命の勝利を達成する確固たる方針を提起したのであった。

それと同時に金日成将軍は、祖国の統一と朝鮮革命の終局的勝利のためには、三大革命勢力――すなわち北半部の革命勢力と、南半部の革命勢力と、国際的な革命勢力を強化しなければならないことを明らかにした。

金日成将軍がさししめした天才的な朝鮮革命の大綱――すなわち社会主義革命へ移行することを前提とする反帝反封建民主主義革命の遂行、民主主義人民共和国の創建路線、革命的な民主基地創設路線には、まさに解放された朝鮮の進路と未来の姿が燦然と輝き、アメリカ帝国主義と反動勢力の破滅が合法則的に運命づけられていたのである。

このように、解放直後の混乱期にあって、朝鮮革命の唯一にして正当な大綱を明らかにした金日成将軍は、人民大衆をその実践へとふるいたたせながら朝鮮革命を力強く前進させていった。

金日成将軍がさししめした革命の大綱は、将軍の革命思想が具現された朝鮮革命の指針であったし、朝鮮人民を栄光と勝利に導く革命の赤い旗であった。

2　マルクス・レーニン主義党の創建

金日成将軍は、解放された朝鮮の現実に適応した革命の大綱を具体化するかたわら、マルクス・レーニン主義党を創建し、大衆を党のまわりに結集させることによって、革命の主体的力量を強化する問題に全力をつくした。

これらはすべて歴史的な意義をもつ課題であり、いずれも緊急を要するものばかりであった。

一般的に、すでに勝利した外国の革命の場合は、革命闘争の初期に党が創建され、労働者階級は権力奪取の闘争

過程で大衆を基本的に獲得するのがふつうであった。この場合には労働者階級は革命が勝利したのち、ただちに新しい社会を建設するたたかいに全力をかたむけることができたのである。

しかし、解放後のわが国においては事情が異なっていた。朝鮮の労働者階級は、統一的なマルクス・レーニン主義党をもたないままに民族的解放をむかえたため、広はんな大衆を獲得して組織する問題が未解決のままであった。だからといって、新しい社会建設をあとまわしにすることもできなかった。これはこれとして切実な問題であった。

朝鮮革命のこうした特殊性を分析した金日成将軍は、まず党を創建し、大衆をそのまわりに結束させると同時に、新しい社会建設をもとどこおりなく推進するという構想をたて、その実現へと人民大衆をふるいたたせた。複雑で困難な諸問題を同時に解決してゆくことは容易ではなかった。しかし、そうであればあるほど金日成将軍は、たたかうことへの誇りを新たにするのであった。

将軍は、このときも革命課題の遂行順序を正しくさだめ、中心の環をとらえてそこに力を集中し、その環を解くことによって複雑にからみあった革命課題全般を解決するという、伝統的な活動方法をもちいた。

金日成将軍は革命のあらゆる戦線に力をそそぎながら、なによりもまずマルクス・レーニン主義党の創建に心血をそそいだ。

党創建は緊急を要したし、これは共産主義者と労働者階級が真っ先に解決しなければならない革命課題であった。労働者階級と勤労大衆は、すぐれた指導者をもち、その指導者の思想を実現する革命的な党を組織してこそ、勝利をおさめることができるのである。

とくに解放直後のわが国の複雑な情勢は、マルクス・レーニン主義党の創建をいっそう切実に要求していた。

解放と同時に、全国各地では共産党の諸組織が結成されたばかりでなく、ブルジョア民族主義者たちの政党運動

もはげしく展開された。

アメリカ帝国主義によって占領された南朝鮮においては、親日・親米派、民族反逆者どもの反動的な諸政党が出現した。

これら雑多な諸政党は、それぞれがみにくい目的を美辞麗句でおおった政治綱領をかかげて、人民大衆を集めようとやっきになっていた。労働者階級をはじめとする勤労人民は分裂の危機にさらされていた。

じつに、統一的なマルクス・レーニン主義党の創建いかんは、勤労大衆の分裂を阻止し、かれらを民主朝鮮建設のための革命の側に獲得できるかどうかという問題として提起された朝鮮革命の運命にかかわる基本的な問題であった。

金日成将軍は、一九三〇年代の抗日武装闘争の時期に蓄積した党創建の組織的思想的準備にもとづいて党創建活動をすすめながら、解放後の情勢を具体的に分析して、党創建の明確な方針をうちたてた。

将軍はまず、長期の革命闘争において鍛練され、洗練された共産主義者を中核に、各地方で結成された共産党諸組織を統一的に結集し、唯一的な指導体系をうちたてることによって統一的な党をつくりあげることを明示した。

これは党を創建するために、かつてみずから準備した土台と解放後の情勢を科学的に打算してたてられたもっとも正確な方針であった。

金日成将軍は抗日武装闘争の炎のなかですすめてきた党創建の準備活動をつうじて、党創建の確固たる中核隊列を育成した。この中核隊列は解放後、各地方で分散的に組織された共産党の諸組織を結集して統一的なマルクス・レーニン主義党を創建しうる強固な土台となった。

したがって統一的な党は、すでに準備された共産主義中核隊列を骨幹として、各地方の共産党諸組織を統一的に結集し、唯一の指導体系をうちたてさえすれば創建されることになるのであった。

もちろん各地方の共産党諸組織には、点検されていない人びとが少なくなかった。解放と同時に、それまで国内各地で地下闘争をおこなっていた人びとや出獄した人びと、また海外で活動していた人びとが一時に集まってきた。ところが、かつて統一的な党がなかったために、かれらがどんな人たちなのかを十分に知るすべがなかった。かれらのなかには組織的な党生活をへて点検され、鍛練された幹部が少なかった。その大部分は党組織、思想活動にたいする理論的および実践的知識と経験もなかったし、情勢も正確に把握できないまま、地方主義的習性にそまって各地方に分散して活動していた人たちであった。

しかし金日成将軍は、早急に党を創建しなければならない緊迫した情勢のもとで、かれらをまず入党させて教育し、訓練しながら実際の闘争をつうじて点検しなければならないと教えた。

将軍は、アメリカ帝国主義が南朝鮮を占領している条件のもとでは、党の中央機関をあらゆる面で有利な北朝鮮におかなければならないと考えた。これは北朝鮮に有利な条件が生まれたことを利用して南北朝鮮の共産主義者をかたく団結させ、すみやかに統一的で強力なマルクス・レーニン主義党を創建することと、北半部において革命を急速に発展させることを考慮にいれたからであった。

統一的な党創建のための金日成将軍の方針は、当時の革命情勢下において唯一にして正確なものであった。

金日成将軍は、党創建のために多くの難関を克服しなければならなかった。なによりもアメリカ帝国主義の破壊策動、とくに共産主義隊列にもぐりこんだ分派分子らの分裂策動をうちくだかなければならなかった。

南朝鮮を占領したアメリカ帝国主義は革命勢力を弾圧し、あらゆる反動勢力をかき集めながら、これを自己の植民地隷属化政策の支柱として民主勢力と対立させた。

アメリカ帝国主義を後楯にした地主、買弁資本家、親日・親米分子などの反動勢力は、人民大衆をあざむいて自派の勢力下におき、民主勢力を分裂、弱化させようとたくらんだ。

かれらはとくに、南北の分裂と共産主義隊列内の分派分子を利用して、共産主義隊列の統一と共産党の創建を阻止しようと策動した。

そのうえ、共産主義隊列内にもぐりこんだ出世欲にかられた分派分子が分裂策動をおこなった。

かつて無原則的な派閥あらそいによって、革命運動にはかり知れない害毒をおよぼした「火曜派」、「M・L派」、「ソウル・上海派」など各種の分派分子は、その罪過がまだ十分に暴露されていない隙に乗じて、うわべでは熱烈な共産主義者や愛国者をよそおい、かげにまわってはみにくい分派勢力の拡大に狂奔した。

分派分子の策動はソウルでもっとも露骨におこなわれていた。かつて派閥あらそいによって朝鮮の共産主義運動を破壊してきた分派分子は、解放をむかえるやソウルに集中し、各自が自分勝手に共産党の看板をかかげ、ふたたび派閥あらそいに明け暮れた。

「M・L派」を中心とする革命の裏切り者や堕落分子たちは「長安派」なるものを結成し、「共産党」を僭称した。

以前すでに革命に背をむけ、日本帝国主義とアメリカ帝国主義のスパイになりさがった朴憲永は、その正体をかくして「火曜派」分子と裏切り者をかき集め、術策をろうしてひそかに、いわゆる「朝鮮共産党中央」なるものをでっちあげ、各地にその追随者をさしむけた。

北朝鮮においても、分派分子や地方割拠主義者たちは、各地でその分派的地盤をつくるために血まなこになっていた。

金日成将軍は、アメリカ帝国主義と国内反動勢力の破壊策動粉砕のたたかいをすすめながら、とくに分派分子の分裂策動を克服し、共産主義者の統一を達成するために全力をかたむけた。金日成将軍の原則的な闘争によって、分派分子は大きな打撃をうけた。

しかし、革命よりは党の「指導権」をにぎることに熱心なアメリカ帝国主義者のスパイ朴憲永一派と、北半部で暗躍していた分派分子は、分派的術策でねつ造したいわゆる「ソウル中央」をあくまでも固執した。かれらは「ソウルだけは絶対にゆずれない」とわめきながら、金日成将軍が提起した賢明で正当な方針に反対しつづけた。

こうした複雑な事態をのりこえ、一日も早く統一的な党を創建するためには、特別な対策が講じられなければならなかった。

金日成将軍は、各地に分散して組織されていた党の諸組織を統一し、すでに準備してあった党の政治路線を効果的に遂行できる強力な中央指導機関として、北朝鮮共産党中央組織委員会を創設する方針をうちだした。つまり、この北朝鮮共産党中央組織委員会を創設してこそ、あらゆる策動分子や分派分子たちの分裂策動にたいして組織的な打撃をあたえることができ、北朝鮮の各級党組織を統一的に指導することが可能であったからである。

またこれによって、南朝鮮の党活動をも正しく指導できる土台を築くことができた。

じつに北朝鮮共産党中央組織委員会創設にかんする将軍の方針は、当時の情勢下において、共産党の全般的活動とわが国の革命を成功裏に指導する中央指導機関を遅滞なく組織できるもっとも賢明な方針であった。

将軍は、多くの地方党組織の中核幹部やその他の関係者と会い、かれらに複雑な内外の情勢や、共産主義者に課せられた基本任務と革命的党の創建方針の正当性、党創建を妨害する分派分子の分裂策動などについて具体的に説明した。と同時に、各地方に革命の戦友たちを派遣し、地方党組織と共産主義者の活動を積極的に援助するよう指示した。

各地に派遣された共産主義者の中核は、抗日武装闘争の時期に体得したすぐれた活動方法を生かし、大衆のなかにはいって積極的な政治活動を展開した。かれらは金日成将軍の指示どおり、大衆のなかで、朝鮮革命を遂行するためには共産主義者の指導のもとにすべての反帝反封建勢力を結集させなければならないと力説した。

金日成将軍はまた、大衆を共産主義者のまわりに結集させるため、先進的な労働者や農民、勤労インテリや青年学生たちのなかで広はんな大衆政治工作をくりひろげた。

金日成将軍と各地に派遣された共産主義者の中核の精力的な活動によって、労働者階級をはじめとする勤労大衆は急速にめざめ、共産党諸組織も認識を新たにして党創建に積極的にたちあがった。

将軍の党創建についての方針は、共産主義者や先進的労働者、人民大衆から積極的に支持された。

これにもとづいて将軍は一九四五年十月五日、ピョンヤンにおいて北朝鮮各地の党の代表を招集し、党創建のための準備会議をひらいた。

この会議でも分派分子らはみにくい正体をさらけだした。

かれらは、いわゆる「ソウル中央」を支持し、北朝鮮共産党中央組織委員会の創設に反対した。

これにたいして金日成将軍は強力な打撃をくわえる一方、かれらの誤った立場をただすために忍耐強くかれらをさとした。

将軍の雅量と抱擁力、整然とした理論のまえに、分派分子らはどうすることもできなかった。

金日成将軍は、はげしい思想闘争をへて十月十日、ついに党創建をめざす歴史的な北朝鮮五道（当時は、行政区画が平安南、北道、咸鏡南、北道、黄海道の五道となっていた）の党責任者および熱誠者大会をひらいた。

北朝鮮五道党責任者および熱誠者大会には七十余名の代表が参加したが、その構成メンバーはきわめて複雑であった。この大会にはもちろん、かつて日本帝国主義と最後まで屈せずにたたかってきた堅実な革命家や先進的な労働者出身の党熱誠者たちが参加したが、逆に朝鮮革命と労働運動に大きな害毒をおよぼした分派分子、地方割拠主義者も少なからず参加していた。このことは、大会が複雑で困難な過程をへるだろうということをあらかじめしめしていた。

大会の任務は、金日成将軍が祖国に凱旋したのち作成した革命の大綱である党の政治路線と組織路線を採択し、統一的中央指導機関として北朝鮮共産党中央組織委員会を創設することであった。

金日成将軍はこの大会で、党組織問題にかんする報告をおこなった。将軍はこの報告のなかで、北朝鮮共産党中央組織委員会の創設方針と党の政治路線、組織路線を提示した。

分派分子らが左右両翼の日和見主義的主張をかかげ、革命隊列を混乱させようとしていた情勢のもとで、党の政治路線を正確に規定することはとくに重要な意義をもっていた。

金日成将軍は報告で解放後の政治情勢を正確に分析し、祖国光復会の綱領に規定された諸原則を解放後の情勢にそくして具体化した人民民主主義革命路線と、その遂行方法を明確にしめした。

大会は将軍が提起した政治路線をそのまま承認し、民主主義人民共和国創建のための四大当面課題を採択した。

四大当面課題はつぎのようなものであった。

一、愛国的、民主主義的な各政党と各派をもうらする民主主義的民族統一戦線を形成することによって、広はんな愛国的民主勢力を結集し、わが民族の完全自主独立を保障する民主主義人民共和国の創建に努力すること。

二、民主主義的建国運動におけるもっとも大きな障害物である日本帝国主義の残存勢力と国際反動の手先、その他あらゆる反動分子を徹底的に清算することによって、わが民族の民主主義的発展を順調に保障すること。

三、統一的な全朝鮮民主主義臨時政府を樹立するため、まず各地方に真の人民の政権である人民委員会を組織し、すべての民主主義的改革を実施して、日本帝国主義が破壊した工場、企業所および全人民経済を復旧し、人民の物質文化生活水準を向上させることによって、民主主義独立国家建設の基本的土台を築くこと。

四、以上のすべての課題を達成するために党をさらに拡大強化し、各界各層の大衆を組織して、かれらを党のまわ

りに結集させるための社会団体の活動を強力に推進すること。

こうした革命任務は、わが国にかもしだされた特殊な政治情勢のために、革命が南北において同時に遂行できない条件のもとで、金日成将軍の革命的民主基地創設路線と切りはなして考えることはできなかった。したがって大会で採択された党の政治路線は、民主基地創設路線と不可分にむすびついていた。

将軍はつぎのように語った。

「解放直後、わが党は北朝鮮において民主改革を徹底的におこない、民主建設を促進させることによって、やがて朝鮮民族を完全に解放し、朝鮮を富強な自主独立国家につくりあげるための確固たる民主基地を北朝鮮に創設することを基本的な政治路線であると規定しました」

金日成将軍が発表した、富強な民主主義人民共和国を創建して北半部に革命的民主基地を創設するという政治路線は、抗日武装闘争の時期に明らかにした人民革命政府路線と革命根拠地創設路線を、解放されたわが国の新しい情勢に適用し、それを創造的に発展させたものとして、朝鮮革命の全国的勝利を達成するためのもっとも賢明な路線であった。

金日成将軍は、政治路線とともに党の基本的組織路線を明らかにした。

金日成将軍は党の組織路線で、党の隊列を組織的思想的に強化して党の思想意志の統一を保障し、党を急速に発展させるための基本原則をしめした。

将軍はつぎのように語った。

「われわれはおもに、労働者と都市および農村の先進的勤労大衆が党の隊列にくわわるように、党発展の方向を正しくさだめなくてはなりません……。

われわれが有力で権威ある共産党をもつことをのぞむなら、必ず全力をかたむけて党内の規律を強化し、党の統一を保つためにたたかわなければなりません……。

党がつねに広はんな勤労大衆と接し、かれらと密接な連係をむすぶならば、その党は百戦百勝するでありましょう。反対に、党がもし大衆と遊離し官僚主義のとりこになれば、その党は力を失い没落するでありましょう……。

党はふつうの組織ではなく、労働者階級の最高形態の組織であり、労働者階級の他のすべての諸組織を指導する組織であります」

金日成将軍が明らかにした党の組織路線は、マルクス・レーニン主義の党建設原則をわが国の実情にあうように創造的に発展させたもっとも正確な路線として、早急に党を強化発展させるうえで確固たる基礎となった。

北朝鮮五道党責任者および熱誠者大会は、北朝鮮共産党中央組織委員会を構成した。

これは深刻な思想闘争をへて達成された。

大会に参加した分派分子と地方割拠主義者らは、この問題の討議をめぐって、しつこい策動をくりかえした。分派分子らは、北朝鮮共産党中央組織委員会の創設を「党の分裂」だと誹謗し、「ソウル中央」を合法的な党中央指導機関と認めるよう、ふたたび要求しだした。

しかし、かれらの真のねらいは別のところにあった。ながいあいだの分派主義的習性と個人英雄主義的な思想にとりつかれていたかれらは、党をかつての地方的グループに四分五裂させ、それぞれが各地方に割拠し、性こりもなく分派的グループ活動をつづけようというのであった。

かれらは、「もし北朝鮮に組織委員会が結成されれば、それは党の分裂を意味するものである」といいながら、あたかも自分たちが党の統一を守っているかのようにふるまったが、実際にはアメリカ帝国主義の弾圧下にある、いわゆる「ソウル中央」の監視がゆきとどかないことをさいわいに、思いどおりに分派活動をつづけるために、身

近かでつねに全面的な指導と監督がおこなえる北朝鮮共産党中央組織委員会の創設に反対したのであった。

金日成将軍は、強力で唯一的な中央指導機関である北朝鮮共産党中央組織委員会の創設をのぞまない分派分子らの分裂策動をうちくだくために、深刻な思想闘争をくりひろげた。

将軍は数回にわたる発言と個別的な説得をつうじて反対派をおさえ、事態を正しく導き、大会を成功裏に終わらせるため忍耐強い努力をかさねた。

思想理論的にあますところなくうちのめされ、公然と反対できなくなった分派分子らは、こんどは陰謀的な手段をろうしはじめた。

執拗な分派分子らは態度をかえ、北朝鮮共産党中央組織委員会の創設に賛成するかのように見せかけて組織内にはいり、重要な地位を占めると、これを利用して北朝鮮共産党中央組織委員会を、いわゆる「ソウル中央」の従属機関または「地方党機関」にかえようとたくらんだ。

しかし、これもかれらの誤算に終わった。やがてかれらは相応の懲罰をうけなければならなかった。

十月十日から十月十三日にかけておこなわれた大会は、金日成将軍の正しい指導のもとに分派分子らの策動をうちくだき、統一的党中央機関としての北朝鮮共産党中央組織委員会を創設し、これを内外に宣布した。

金日成将軍は、党創建とその歴史的な意義についてつぎのようにのべた。

「われわれは、革命闘争において洗練された共産主義者を中核とし、各地で活動していた共産主義グループを結束して、マルクス・レーニン主義的党創建の原則に厳格にもとづき、ふたたび党を創建しました。

わが党は、解放後の混乱した複雑な環境のもとで階級敵の破壊策動に反対し、分派主義、地方主義をはじめ、あらゆる日和見主義に反対するたたかいのなかで結成されました。われわれは、抗日武装闘争で達成された党創建の組織的思想的準備にもとづき、そしてまた、わが労働者階級と勤労人民の高い革命的熱意と積極的な支持に依拠し

として育てあげ、人民大衆を教育、改造して強力な革命力量にきたえあげた。

将軍はまた、内外の敵とのたたかいと困難な革命課題を遂行する過程で、党を広はんな大衆のなかにしっかりと根をおろした、いかなる嵐にも微動だにしない党に、朝鮮の労働者階級と人民にはかぎりなく忠実で、階級敵とあらゆる左右の日和見主義にたいしては非妥協的で、戦闘的で、革命的な党に育成し、鍛練した。

だからこそ、こんにち朝鮮労働党は、その創建の歴史はたとえみじかくとも、英明な領袖の指導のもとに百六十万にのぼる勤労大衆の先進分子を結集し、そのまわりに全人民を団結させ、朝鮮人民の絶対的支持と信任をえたもっとも大衆的で、もっとも革命的な党に成長したのである。

さらに、自己の領袖である金日成将軍以外のだれをも知らず、金日成将軍の思想以外にはいかなる思想をも知らず、ただ領袖の思想――金日成将軍の偉大な革命思想を唯一の指導思想として、それを最後までつらぬく党の唯一思想体系がしっかりと確立した、統一と団結の鋼鉄の党となった。

じつに、金日成将軍の独創的な革命思想とその賢明な指導をはなれては、党の創建とその強化発展も、わが国の革命と建設の成果的な遂行も考えることができない。

朝鮮労働党は、金日成将軍の偉大な革命思想をわが国に具現することをその崇高な目的とし、使命としているのである。

だからこそ栄光に輝く朝鮮労働党の党員と朝鮮人民は、朝鮮労働党をさして、金日成将軍の党とよぶのである。

3　二十年ぶりの帰郷

解放直後、金日成将軍が多忙な日々をおくっていたとき、故郷――万景台では、もどかしさと大きな期待につつまれていた。

それは、解放と同時に歓呼の花吹雪につつまれて帰郷するはずの将軍から、なんの音沙汰もなかったからである。

万景台では、将軍のうわさでもちきりであった。だれもが将軍の帰郷を待ちわびていた。

祖父、祖母、叔父（金亨禄先生）は音沙汰のない金日成将軍のために、夜も寝つかれないありさまであった。

祖父は毎日のように、将軍が幼いころ虹をつかむのだといってよじのぼったことのある、大きなやちだもの木のしたにたって孫の帰りを待ちあぐんでいた。

ときには、畑仕事が終わってからも家にはもどらず、村の入口に腰をおろして煙草をふかしながら、ピョンヤンにつうずる人かげのない道をながめつづけるのであった。

そのうち、金日成将軍がピョンヤンにいるといううわさがつたわった。

それも最初のうちは、たんなるうわさとしかうけとれなかったが、日がたつにつれて、だれもがまぎれもない事実だといいはるようになった。

それなら、どうして目と鼻の先である故郷をたずねてこようともせず、安否さえつたえてよこさないのだろうか――。

じっとしていられない気性の叔母は、たまりかねてピョンヤンへかけつけていった。

3　二十年ぶりの帰郷

解放直後、金日成将軍が多忙な日々をおくっていたとき、故郷——万景台では、もどかしさと大きな期待につつまれていた。
それは、解放と同時に歓呼の花吹雪につつまれて帰郷するはずの将軍から、なんの音沙汰もなかったからである。
万景台では、将軍のうわさでもちきりであった。だれもが将軍の帰郷を待ちわびていた。
祖父、祖母、叔父（金亨禄先生）は音沙汰のない金日成将軍のために、夜も寝つかれないありさまであった。
祖父は毎日のように、将軍が幼いころ虹をつかむのだといってよじのぼったことのある、大きなやちだもの木のしたにたって孫の帰りを待ちあぐんでいた。
ときには、畑仕事が終わってからも家にはもどらず、村の入口に腰をおろして煙草をふかしながら、ピョンヤンにつうずる人かげのない道をながめつづけるのであった。
そのうち、金日成将軍がピョンヤンにいるといううわさがつたわった。
それも最初のうちは、たんなるうわさとしかうけとれなかったが、日がたつにつれて、だれもがまぎれもない事実だといいはるようになった。
それなら、どうして目と鼻の先である故郷をたずねてこようともせず、安否さえつたえてよこさないのだろうか——。
じっとしていられない気性の叔母は、たまりかねてピョンヤンへかけつけていった。

「あのう……金日成将軍という方は、おとしはいくつくらいなんでしょうか?」
叔母はあちこちで、こうたずねて歩いた。そのうちある人が、「三十そこそこの青年将軍だということですよ」
と教えてくれた。
今年五十歳の自分よりも、十六歳年下の将軍が三十四歳であることを叔母はよく知っていた。叔母はこれをきくと、よろこびのあまりにわれを忘れた。まぎれもなく万景台で生まれた金日成将軍にちがいないのだ。
しかし、叔母の心はすっきりしなかった。
人によっていうことがちがっていたのである。ある人は根も葉もないうわさを真(ま)にうけて、将軍は五十歳をこえたお方だといい、また別の人は、もう還暦をすぎた老人だともいった。
こうした話をきくたびに、叔母はすっかり気をおとしてしまうのであった。そんな老人ではないとうち消そうとしても、実際に会っていないだけに、どれを信じていいのかわからず、いたずらにあせるばかりであった。
こんなことなら、かえってきかずにいたほうがよかったと悔いもした。
叔母は十二キロの道のりを、まるで千里の遠い道のりでも歩いてきたかのような重い足どりで帰ってきた。
翌日、叔母はふたたびピョンヤンにむかった。
こんどは、それらしき人をつかまえては、「将軍は、どんなお顔つきなんでしょうか?」、「お笑いになると、両頬にはっきりと笑(え)くぼができるお顔ではないでしょうか?」とたずねた。
しかしかれらのこたえも、どこまで信じてよいのかわからなかった。かれらとて金日成将軍を直接見たわけではなく、人からきいた話をつたえているにすぎなかった。
もどかしい日々がすぎていった。
ところが解放をむかえてひと月ほどたったある日、ついに、まちがいなく万景台で生まれた金日成将軍が祖国に

帰っており、近く故郷をたずねる予定であるというたよりがよせられた。

十月初旬には七谷（チルゴル）の母方の人がきてつたえてくれたし、十月九日には副官が直接たずねてきて、うれしいたよりをとどけてくれた。

将軍のふるさとの家は祝日のようなよろこびにわきたった。だれもがこの大きなよろこびをかくすことができなかった。

祖母と叔母は、孫を、甥をもてなす準備におおわらわであった。従弟たちもまた、従兄をむかえるよろこびに胸をときめかした。からだを悪くして病床にふせがちであった祖父金輔鉉（キムボヒョン）先生も床をあげ、なつかしい孫の帰りを待ちわびた。

万景台のすべてが将軍の帰郷の日を指おりかぞえて待っていた。

こうした一九四五年十月十四日！

牡丹峰（モランボン）のふもとにある公設の運動場では、金日成将軍の祖国凱旋を歓迎するピョンヤン市民衆大会が盛大にひらかれた。

将軍が大会に出席するという知らせがつたわるや、全ピョンヤン市がわきかえった。ピョンヤンはじまって以来のよろこびであり、最大の歓迎ぶりであった。

市内や近郷からは、定刻まえに人びとがぞくぞくと集まってきた。

さんさんとふりそそぐ黄金のような秋の日ざし――。あおげば鏡と見まがうばかりの雲一つなく澄みわたった明るくほほえむ青空――。大会場は十万をこえる大群衆でうまった。近くの牡丹峰の頂上まで人びとで真っ白にうずめつくされた。

群衆のなかには、将軍の叔母をはじめ万景台の人びとの姿も見えた。

この日の朝、夫がいっしょにゆこうともいわず自分一人だけで家をでたことに気嫌をそこねた叔母は、「母をなくされた将軍に、叔母が母がわりをつとめていけないという法がありますか。朝鮮の民衆がこぞって将軍をおむかえにゆくというのに、わたしがじっとしていられるわけがないでしょう……」と、十二キロの道のりを一気に大会場へかけつけたのだった。

大会は午後一時にはじまった。

金日成将軍が、りりしくも活気にみちた英姿を演壇にあらわした。

その一瞬、歓喜の声が熱風のように満場を吹きぬけ、熱狂的なかん声が天地をどよめかした。「金日成将軍万歳！」を叫び、よろこびに舞い、だきあってはねまわる大群衆——。それはまるで、あかね色にそまった波がしらを輝かし、日の出をむかえる壮快な朝の大海原を思わせた。

金日成将軍は手を高くふりかざし、太陽の輝きのような微笑で群衆の歓呼にこたえた。それはまさしく、抗日戦のながい年月、炎と吹雪の万里の道のりを切りひらきながら、つねに祖国の山河を思い、人民をいつくしんできた偉大な愛にみちたあいさつであった。またそれは、朝鮮の大地に復活と輝かしい勝利を約束する不世出の英雄、民族の領袖が、なつかしい祖国の山河と人民におくる祝福のあいさつでもあった。

少女たちがささげる花束につつまれてほほえむその顔——。民族の繁栄と幸福が燦然と輝き、熱情と英知にあふれる慈愛にみちたその顔——。そのひとにらみで凶悪な敵を枯草のようになぎたおし、そのほほえみで枯枝にも花を咲かせたという伝説そのままの非凡な感化力をもつ微笑で人民に返礼する領袖金日成将軍は、またなんと若々しいことだろう！

すぎ去った日々を思いかえす老人ではなく、はるかな未来をのぞむこの青年こそ、永遠に繁栄する人民の前途を約束する人物ではないか！

だれもがその英姿から陶酔にみちた視線をそらすことができなかった。

どんなに待ちこがれた領袖であったろう。地獄のような生活、奴隷のような生活に苦しんだながい暗黒の日々に、だれもが夢に描き、ただ一つの救いの希望として心に刻んできた領袖――。全アジアを炎で焼きつくした日本帝国主義の軍隊に肉迫し、その心胆を寒からしめた将軍――。砲煙にくすんだ赤旗と民族繁栄の綱領を高くかかげ、抗日闘争の鮮血にそまる十五星霜をたたかいぬいてきた民族の指導者、その千軍万馬の将軍がいま三千万同胞のもとに帰り、花束につつまれてほほえんでいるのだ！

群衆は歓呼をおくりながら感動の涙を流した。

将軍の叔母は、それ以上じっとしてはいられなかった。少しでも近くから将軍を見たかったし、少しでも近くで演説をききたかった。叔母は人波をかきわけてまえへすすみながら将軍を見あげた。

はなれていた歳月の、なんとながかったことか。堂々としたりりしいその姿に、はっきりとやどる幼い日のおもかげ――。忘れもしないあのえくぼと歯並、あの英知に輝くつぶらな目――。あの子だ！　成柱（ソンジュ）にまちがいない！　うちの将軍だ！

叔母は、まえをさえぎる警備員に「金日成将軍の叔母なんです」と叫びながら、夢中で演壇のしたにかけつけた。

叔母は警備員にたのんだ。

「おねがいです、わたしを将軍に会わせてください」

警備員は壇上にあがっていった。そしてもどってくると、叔母を金日成将軍の車に案内し、ここでしばらく待つようにといった。

やがて、金日成将軍は歴史的な演説をおこなった。

マイクから流れるその力強い声は、牡丹峰にまで大きくこだました。

「わが民族は三十六年の暗黒の生活から解放と自由をかちとり、わが祖国三千里の山河は燦然たる朝日のような希望に輝きはじめました。わが朝鮮民族には、これから新しい民主祖国建設のために、みんなが一つになってすすむときがきました。特定の党派や個人の力だけでは、この偉大な使命をなしとげることはできません。力のあるものは力で、知識のあるものは知識で、金のあるものは金で、真に国を愛し、民族を愛し、民主主義を愛する全民族が完全に一致団結して、わが祖国を民主主義的な民主独立国家に建設しなければなりません……」

金日成将軍は、場内をうめた大群衆の心をはげしくゆり動かしたこの演説の最後を、「朝鮮独立万歳！」ということばでむすんだ。

水をうったように静まりかえっていた会場は、ふたたび「金日成将軍万歳！」のかん声でどよめいた。

この万歳とかん声は、ピョンヤン市民だけのものではなかった。それは、三千万朝鮮人民が自分たちの敬愛する領袖におくるかぎりない愛情と尊敬のあらわれであった。

当時の新聞『ピョンヤン民報』は、この熱狂的な歓迎の模様を、「錦で縫いとったようにうるわしい朝鮮の山河を揺るがせた四十万の歓呼」という見出しで、つぎのようにつたえた。

「ピョンヤンの歴史はながし四千年！　人口また少なからず四十万！　だが、いまだかつてこれほどの大群衆が一堂に会したことがあったろうか。

かくのごとき意義ある集会をもったことがあったろうか。

とくに、この大会を歴史的に意義あるものとし、会場を感動の嵐でつつんだのは、朝鮮の偉大な愛国者、ピョンヤンが生んだ英雄金日成将軍がここに参席し、民衆に感激的で熱烈なあいさつと激励のことばをのべたことである……。

朝鮮人民が深く敬慕し、待ちのぞんでいた金日成将軍が会場にその姿をあらわすや、熱狂的歓呼の嵐がまきおこ

り、全群衆がよろこびと感動で涙にむせんだ」
壇上からおりた金日成将軍は、満場の歓呼と感激のどよめきのなかで叔母と再会した。
「叔母さん、おかわりありませんでしたか」
将軍は叔母の手をにぎりしめて、こうあいさつした。
「将軍さま、わたしがわかりますか」
こういいながら、叔母はやっとの思いで涙をこらえた。
「わたしが叔母さんを忘れるはずがあるもんですか」
将軍はおおらかに笑った。
叔母はこらえきれなくなって、とうとう泣きだしてしまった。二十年のあいだ、かたときも忘れることのなかった将軍の手をにぎりしめ、はじめて叔母は心ゆくまで泣くことができたのだ。彼女の涙にうるんだ目には、将軍の顔がかすんで見えた。
「叔母さん、家に帰りましょう。家でゆっくりお話ししようではありませんか。きょうは、叔母さんがわたしの母のかわりです」
将軍は叔母をともなって宿舎に帰った。叔父夫婦と再会した将軍は、水いらずでつもりつもった話にときのたつのを忘れた。
叔母が二番目の弟、英柱（ヨンジュ）同志の消息をたずねると、将軍はつぎのようにこたえた。
「……わたしは、まず何人かの恩人をさがしたいのです。その一人は、父が葡坪（ポピョン）で逮捕されて厚昌（フチャン）警察署に護送されたとき、脱出に力をかしてくれた黄（ファン）という姓の方です。もう一人は、父を山小屋にかくまい、鴨緑江をわたしてくれた金（キム）某という方です。また、わたしが北満遠征の帰り道、ひどい寒さにからだを痛め、日本軍に包囲された

ときたすけだしてくれた伐採場の金老人、そして老爺嶺（ロヤリョン）の密林で、わたしを親身に看病してくれた趙宅周（チョテクジュ）老人と嫁の崔日華（チュエイルファ）さん……、わたしにはこうした恩人が多いのです」

「だけど、その方たちをどうやってさがすのです。見当もつかないでしょうに……」

「しかし、生きていさえすればいつかはきっと会えるでしょう」

話は両親や叔父の亨権（ヒョングォン）先生のことに移っていった。

叔母がもう五十歳になったという話をきいて、将軍は微笑をうかべながらいった。

「叔母さんは、まだまだお若いですね。わたしの母の分までなが生きなさってください。わたしもときには、母に会いたくてならないことがあります…。こうして一人で祖国に帰ってみると、なおさらです。母はわたしをこよなく愛してくださいました」

将軍はこの日、宿舎で叔父夫婦としばらく話し、なつかしいふるさと万景台に帰った。

将軍は革命の大綱を人民のまえに明らかにし、朝鮮革命の参謀部であるマルクス・レーニン主義党を創建するなど、重大な国事をなしとげ、人民のまえで祖国凱旋の最初のあいさつをおこなったあと、はじめて生まれ故郷をたずねたのである。

金日成将軍をむかえる歓呼の声が万景台をゆるがした。

将軍が生まれ育った村であったがゆえに、祖国解放のたたかいに身を挺した金日成将軍の両親と、叔父金亨権先生が暮らした村であったがゆえに、この村は日本軍警の憎しみを集め、ながいあいだ無道な迫害に苦しんできた。

その万景台が、いまわきかえる歓喜の丘とかわったのだ。

「ほんとうにおまえが……、とうとう帰ってきてくれたんだね！　これは……夢では……」

白髪の祖母が村の入口で、孫をかきいだいて声をつまらせた。金日成将軍も祖母をだきしめた。

かつて、どのような英雄叙事詩に描かれた伝説上の英雄も、これほど感激的な再会をしたことはなかったであろう。

これは、現実にくりひろげられた民族的叙事詩のもっとも劇的な場面であった。

「これは夢では……」

祖母のこのことばには、あまりにもながかった苦難ののち、やっと手にした幸福の感動が凝結していた。別離の日から二十年——。それはまた、どんなにかながく苦渋にみちた日々であっただろう！

かつて二人の息子と嫁は孫をつれて故郷をはなれ、遠い満州の地へと旅立っていった。祖母の日々は孫恋しさと、さびしさと、待ちわびることのせつなさで流れていった。

しかも祖母にとどいた消息は、悲しいものばかりであった。

最初にとどいたのは、長男がたたかいの途上で他界したという知らせだった。そして、その心の傷あとがいえやらぬまに、今度は嫁がこの世を去ったという知らせがとどき、さらに末の息子が革命の節操をまげず、ソウルの刑務所で獄死したという悲報がつづいた。

だが、しばらくすると、白頭の山なみをかけめぐり、日本侵略軍をうちのめして勇名をとどろかせている金日成将軍が、孫の成柱であるといううわさがひろがった。あまりのことにおどろきながらも誇りにみちた祖母は、夜ごと寝もやらずに孫の無事をねがった。

日本の官憲はものものしく家のまわりをとりかこみ、昼夜をわかたず監視の目を光らせ、横暴のかぎりをつくした。土足で部屋をさがしまわり、土間の敷石まではがす捜索がいくたびくりかえされたことだろう。

悲運はつづいた。

二人目の孫の哲柱（チョルチュ）が、日本軍とたたかって戦死したという知らせがとどいた。

そして、なんとしたことだろう。今度は将軍が戦死したというおそろしいうわさ（日本帝国主義は、将軍によせる朝鮮人民の敬慕の情を踏みにじろうと、執拗にこうしたデマ宣伝をおこなった）が、駐在所と面事務所からつたわったのである。あまりにもおそろしい消息であった。隣近所からは、お悔みの酒までとどけられる始末だった。

しかし祖母には、これは絶対に信じられなかった。どうして太陽を消すことができようか！

はたして、ふたたび金日成将軍がけわしい白頭の山ひだを自在にかけめぐり、日本帝国主義に火のつぶてをあびせているといううれしいうわさがつたわってきた。

日本の軍警はさらにたけり狂った。かれらは銃剣でおどかして祖母を満州までつれだし、おろかにも金日成将軍を「帰順」させようと画策した。祖母は、金日成将軍の祖母らしく泰然としてかれらをきりきり舞いさせ、かれらのあらゆる奸智にたけた策動をはねかえした。手のほどこしようがなくなったかれらは、やむをえず祖母を故郷に帰した。

墨を流したように暗くとざされた日々は、晴れることを知らなかった。暗い歳月が流れるばかり、孫のゆくえは知るすべもなかった。

しかし、いまは、苦しみのあとには楽がくるということばのとおり、暗い歳月は晴れ、苦痛は霧のように消え去ったのである。

あれほど待ちこがれた孫の金日成将軍が帰り、祖母の胸にだかれたのだ！　国の指導者、人民の太陽となって帰ってきたのだ！

金日成将軍は歓呼をおくる郷里の人たちの手をかわるがわるにぎりしめながら、なつかしいわが家の小さな門構えをくぐった。

そのとき、からだを悪くして部屋にいた祖父が、はだしで庭におりてきながら叫んだ。

「帰ってきたか！　死んだと思った孫のおまえが……」

深いしわが刻まれた祖父の顔には、とめどもなく涙が流れた。

「おじいさん！　わたしのためにずいぶんご苦労なさったことでしょう」

将軍は祖父をしっかりとだきかかえて部屋のなかにつれていき、心からのあいさつをのべた。将軍が部屋にはいったその一瞬、すべての人びとの目には、歳月の風雪に痛んだこの小さなわらぶきの家がたちまち豪華な宮殿のように見えた。

多くの人びとが部屋にはいってきてすわった。家族の紹介や親戚の紹介、村人たちの紹介のあと、一座の人びとは将軍をかこんで心ゆくまで話しあった。

祖母は将軍からかたときも目をはなさなかった。将軍によりそっては手をなでたり、背をなでたりしながら、うれしさをどうあらわしたらいいのかわからないようすだった。

しかし祖母には、他界した息子や嫁を忘れることもできなかった。そしてチマのはしで涙をふきながら、声をつまらせていった。

「おまえを見たら……生涯この胸につもりつもった悲しみが一度に晴れたようですよ……。でも、おまえの父や母は、いったいどこへのこして、おまえ一人で帰ってきたのでしょう。どうしていっしょに帰れなかったのでしょう……」

胸をかきむしるようなこのことばに、いあわせた人びとは声もなく目がしらをおさえた。

このふんいきを、ふたたび明るくしたのは子どもたちであった。無邪気な子どもたちは将軍のひざにしきりとまつわりついた。将軍は明るい笑顔で子どもたちをだきあげた。

祖母も笑いながらいった。

「解放とはいいものだ……。おまえの父や母も草葉のかげで、さぞかしよろこんでいることでしょう」

金日成将軍には、すべてが感無量であった。いくとせぶりのわが家であろう！　故郷の人びととも何年ぶりの再会であろうか！　よろこびが大きいだけにことばにはならず、人びとはただ涙をぬぐうばかりであった。

まさにこの瞬間には、すべてのことばが意味を失った。

やがて簡素な祝宴がひらかれた。食卓には将軍がもってきた酒がだされた。

老人たちは将軍の凱旋を祝って祝杯をあげた。この日、村の人たちは牛をつぶした。しかしそれでもなお、満足できない村人たちであった。

叔母が感激をおさえきれなくなって歌をうたった。それは、そのむかし金日成将軍の両親が幼い将軍をだいて寝つかせながらよくうたってきかせた子守歌であった。

朝鮮の子よ　いとし子よ
すくすくのびよ　早よのびよ
家では孝行　となりにゃなかよし
いとしのわが子よ　早よ育て

朝鮮の子よ　早よ育て
そして明日にも　小学校
中学大学　早よおえて
国の独立　かちとれよ

感激にふるえるその細い歌声は、遠くすぎ去ったなつかしい日々の情趣をふたたびよみがえらせ、すべての人びとに、このわらぶき家がへてきた美しくも崇高な歴史を思いださせた。

叔母はふと、歓喜にわきたつピョンヤン市民衆大会で将軍に会ったときのことや、そのときの将軍のことばを思いだした。

「叔母さん……、きょうは叔母さんがわたしの母のかわりです」

だが、じつの母にかわりうる人がこの世にいるだろうか！　もしもわたしがじつの母親であったなら、この瞬間に、この席がどれほどたのしいものになっていたことであろう！　十人の叔母よりも、一人の母がもっと恋しいはずではないか！

——こんな思いにとらわれながら、目をつむって歌をうたう叔母のほおを、とめどなく涙がつたった。

金日成将軍は叔母の歌声にひきいれられ、すぎし日のいろいろな思い出にひたりでもするかのように顔色をくもらせた。

ときは流れ、静かだった部屋のなかと庭がふたたび歌と踊りでにぎわった。叔母も庭にでて踊った。それは静かな品のある動きのなかにも、ひめられた情熱とよろこびがはっきりと感じとられる踊りであった。

こうして村中が踊り、よろこびにつつまれた。

この日、金日成将軍は、幼ない時代そのままの純真な万景台の一農夫の孫として、なつかしい祖父母と叔父、叔母、親戚、知人たちにかこまれ、たのしい一日を心ゆくまですごした。

金日成将軍が祖国凱旋の最初のあいさつをしたという消息は、全国はもちろん、海外にもひろくつたわった。凱旋のあいさつの消息をきいて、さらに多くの人びとが将軍を訪問し手紙をおくってきた。そして、南北朝鮮の出版報道関係者たちは、先をあらそって金日成将軍の訪問記を書いたり、将軍のようすをつたえた。

一九四五年十二月二十九日、将軍を訪問した二人の『ソウル新聞』記者は、金日成将軍に会ったその訪問記のなかで、つぎのように書いた。

「えくぼをうかべる微笑、やさしい目にやどる非凡な輝き。

われらの英雄金日成将軍

……いま記者は、わが民族が生んだ軍事的天才、不世出の英雄金日成将軍と会っている。日本帝国主義の圧政のもとでわが民族が暗たんたる逆境にあったとき、金日成将軍の存在は、その名のしめすごとく民族の太陽であり、希望であった。いかに多くの青年がその名にはげまされ、偉大な闘争へと決起したことであろう。……将軍の風貌をつたえよう。浅ぐろい顔、みじかいハイカラの髪、自然な二重まぶた、笑うたびにできるえくぼ——一点非のうちどころのない美青年である。背丈は五尺五寸もあろうか。それほどふとってはいない。大陸的であけっぴろげな快活な性格、謙遜で明快な態度、まわりの人びとをして、まるで古くからの知己ででもあるかのように感じさせる。あの覇気と豪胆さが、どこにひめられているのかわからないほどである。将軍の目は、人を射るようなまなざしではないが、左右に視線が移るとき、きらりと光るその輝き。両の眉毛のあたりにただようその精気。ふとく力強い声……。これらが風貌の特徴であろうか——。十九歳の身でパルチザン部隊を組織し、抗日闘争を展開した。以来、将軍の活動は日本帝国主義者を大いになやまし、かれらは日本軍十五個師団を金将軍部隊にあたらせた。

……かざり気のないことばと、明快な表現をもちいる。

謙虚そのもので、政治家として出馬するのかという質問に、自分はそのような表現には適さないとこたえる。青年や学生が、将軍、将軍とよぶと、『わたしは将軍ではありません。あなたたちの友人です。友人とよんでください』という。

民衆——、なかでも青年たちを深く愛し、だれとでもすすんで会い、かれらのことばに熱心に耳をかたむけ、ま

た質問にたいしては親切にこたえる。……金将軍は、いま一人の市民として民衆のなかにいる。若い英知と勇気がこれから先、民族の発展にどう具現されていくであろうか。朝鮮の関心事でなければならない」(『ソウル新聞』一九四六年一月十日付第二面)

民族の格別な期待と関心のなかで、金日成将軍は人民を新しい民主朝鮮建設の道へと力強く導いていった。人民は将軍がさししめした道で新しい朝鮮の輝かしい前途を確信をもってながめ、日一日と将軍のまわりに鉄壁のごとく結集していった。

こうして、金日成将軍を偉大な指導者にいただく朝鮮人民の前途には、力強い勝利だけが約束されていた。

第二章　民主革命の陣頭にたって

1　大衆を革命一路に

朝鮮革命は大河のようにとうとうと流れた。

国の主人となった労働者、農民、勤労インテリはいうまでもなく、立場と考え方の複雑な各階層の大衆も、意気高く前進する革命の激流にそってすすんでいった。

人びとの立場と生活、すべてが急激にかわり、大きな足どりで前進していった。まさにそれは、解放をむかえた朝鮮人民のおごそかな流れであった。

金日成将軍は、大衆のこうした革命的な意気ごみを、民族の歴史的な宿望である祖国の完全な自主独立と民主主義的発展のための全民族的なたたかいへと導いていった。

将軍は、朝鮮革命は朝鮮人民みずからの力でなしとげなければならないという確固とした主体的立場から、革命を勝利に導くために、なによりもまず、人民大衆を党のまわりに結集させるという困難で複雑な活動に心血をそそいだ。

金日成将軍は、革命勝利の決定的な要因は国の内部の力であり、革命と建設は他人がしてくれるものではないと

考えた。
したがって将軍は、党のまわりに労働者、農民をはじめとする広はんな人民大衆をかたく結集させ、主体的な力を強化することがとりもなおさず、一日も早く統一的な民主主義臨時政府を樹立し、朝鮮の完全な自主独立と民主主義的発展をなしとげる、もっとも重要な保障であるとかたく信じた。
じつに解放直後の複雑多難な情勢のもとで、党の政治路線を実現できるかどうかは、結局、共産党が大衆をたたかいとることができるかどうかにかかっていた。
だが当時の状況のもとで、広はんな大衆を党のまわりにかたく結集するということは、決してたやすいことではなかった。
党自体が創建されてまもないため、まだ組織的思想的に強化されていなかった。そのうえ一部の大衆のなかには、共産主義運動にたいする過去の日本帝国主義者たちの悪宣伝の影響がのこっていた。
政治的にめざめていなかった一部の大衆は、民族主義にたいする幻想をいだいていた。
そのうえ、さまざまな政党が複雑な情勢を利用して大衆を自分の側にひきいれようとつとめ、とくに南朝鮮を占領しているアメリカ帝国主義は、自分の手先どもといっしょにあらゆる方法と手段をもちい、民族の内部にくさびをうちこもうとたくらんだ。
このような状況のもとで、もしも党が大衆をかちとることを少しでもおろそかにするならば、朝鮮革命はじつに予測できない難関にぶつかるかも知れなかった。
金日成将軍は共産党を創建したとき、すでに四大当面課題の第一条で、愛国的で民主主義的な各政党と政派をもうらする民主主義民族統一戦線を形成し、広はんな愛国的民主勢力を結集させる課題を提起していた。
金日成将軍は一九四五年十月十三日、共産党の各道党責任者たちをまえにしておこなった演説『新しい朝鮮の建

設と民族統一戦線について』のなかで、解放後の朝鮮革命の重要な路線上の問題を明らかにするとともに、独創的な民主主義民族統一戦線政策を具体的にさししめした。

将軍は演説のなかで国の社会経済関係を分析し、朝鮮人民のまえには反帝反封建民主主義革命を遂行し、民主主義人民共和国を創建する任務が提起されているということをいま一度明らかにした。

そして、この革命の指導階級は労働者階級であることを強調した。

将軍は、つぎのようにのべた。

「日本帝国主義に屈服し、かれらと野合した朝鮮の資本家階級が、革命を指導することができないということはあまりにも明らかなことであります。日本帝国主義に反対し、最後まで英雄的にたたかった労働者階級だけが、朝鮮革命を指導することができるし、また必ず指導しなければなりません」

そして金日成将軍は、民族統一戦線運動をあらゆる方法で強化することを党の重要な課題として提起し、統一戦線運動で党が守るべき基本原則を明白にしめした。

将軍はまず、統一戦線の対象の問題について正確な解答をあたえた。

将軍は、民主主義人民共和国をうちたてるためには、労働者階級と農民だけでなく、民族資本家もふくめて、すべての愛国的民主勢力が参加する統一戦線を結成しなければならないとのべながら、日本帝国主義の手先とは連合することができないということを強調した。

将軍はつぎのようにのべた。

「……われわれの統一戦線は、民主主義人民共和国の建設のための統一戦線であるから、日本帝国主義の手先との連合ということはまったく考えられません。われわれは、民主主義的独立国家の建設を要求する良心的な民族資本家たちとは連合することができるし、またそうしなければなりません」

また民主主義民族統一戦線運動では、共産党が必ず指導的な役割をはたさなければならないと強調して、つぎのようにのべた。

「このたたかいで共産党は、消極的もしくは受身になってはなりません。民主主義人民共和国を樹立するためのたたかいで、共産党員はもっとも積極的で能動的な役割をはたさなければならないし、人民大衆の先頭にたって、かれらを導いていかなければなりません。そうしてこそ、人民大衆は共産党についてくるでありましょう」

　将軍はつづけて、共産党は国の統一と独立を主張する党派とはためらうことなく合作しなければならないが、この場合、共産党は決してかれらのうしろからついていってはならず、ましてや他党にまきこまれるようなことがあってはならないし、つねにかれらと合作しながら自己の独自性を守りとおさなければならないと強調した。

　金日成将軍は、反動勢力とも「統一戦線」をむすぼうとする右翼的傾向をきびしく警戒しながら、闘争対象とは手をにぎることができないし、統一戦線は反動勢力との徹底した非妥協的な闘争の原則で形成されなければならないことを強調した。それは民主主義的民族統一戦線が、あくまでも反動勢力を打倒することを目的とする各界各層人民の愛国的、民主主義的な連合であり、民族の利益、祖国の発展をはかる統一戦線であるためであると指摘した。

　また将軍は、日本帝国主義の手先である親日地主、隷属資本家や民族反逆者たちを粛清しなければならないとのべながら、日本帝国主義の手先をどう規定するかという原則的な問題について、つぎのように明らかにした。

「革命を破壊するため、意識的に人民を弾圧し虐殺したものだとか、日本帝国主義の利益を守るため民族の利益に反し、これを売りわたしたものだとか、日本帝国主義に積極的に協力した分子は、もちろん手先として規定しなければなりません。……しかし、自分の生活を維持するため、もしくは強圧にたえられず、やむをえず日本帝国主義の機関に服務した人だとか、そこで消極的で、受動的な役割しかしなかった下級の事務員たちを手先

と規定することはできません。こうした人たちは教育し、改造しなければならず、かれらに再生の道をひらいてやらなければなりません」

金日成将軍は、統一戦線を形成するうえで提起される当面の課題を全面的に明らかにした。

将軍は、強固な統一戦線を形成するには労働者と農民の同盟を強化し、広はんな農民を革命の側に結集させなければならないということ、共産党の隊列を強化することがなによりも重要であるということ、まだ十分めざめていない大衆をすみやかに教育して、かれらが真の民主主義のためのたたかいにたちあがるようにすること、――そのためには大衆を教育するばかりでなく、大衆から学び、かれらの声に耳をかたむけ、かれらの要求を解決してやらなければならないということ、などを強調した。

金日成将軍は、このように統一戦線運動で党が守るべき基本原則と当面の課題を明らかにし、統一戦線を形成することは、新しい祖国を創建するうえでもっとも重要な問題の一つであると結論づけた。

「新しい民主朝鮮を建設できるかどうかは、われわれが共産党を強化し、民族統一戦線を結成し、広はんな大衆を共産党のまわりに結集することに成功するかどうかにかかっています。すべての共産党員は党の隊列をたえず拡大強化し、友党と誠心誠意合作し、広はんな大衆をかちとるために積極的にたたかわなければなりません」

将軍の演説『新しい朝鮮の建設と民族統一戦線について』は、朝鮮革命の前途をいま一度正確に解明し、独創的な統一戦線の戦略戦術を明確にしたものであり、党建設と大衆の結束で提起される原則的な諸問題について解答をあたえた労作として、理論的、実践的に大きな意義をもっている。

将軍の綱領的な教えにしたがって、共産党は広はんな人民大衆を獲得し、民主主義民族統一戦線を実現するためのたたかいを強力にくりひろげた。金日成将軍は、党のこのたたかいを正しく指導した。

将軍は、まず創建した党を組織的、思想的に強化する活動に力をそそいだ。大衆の結束も、民族統一戦線の形成

も、それを指導する共産党の強化なしには達成できないものであった。
当時、創建された党のまえには多くの複雑な問題が提起され、多くの難関がよこたわっていた。党は自己の隊列をかためなければならなかったし、反動とのたたかいを強め、大衆をかちとるためのたたかいも強力におしすすめなければならなかった。また政権問題の解決にも深い注意をはらわなければならず、民主改革の準備もすすめなければならなかった。経済的混乱、とくに食糧難を打開することも当面の重要な課題であった。
ところが、こうしたおりにも、創建されてまもない党は、党内外の分派分子らによって妨害されつづけていた。党内にもぐりこんだ分派分子と不純分子、異色分子たちは、党の決定を実行せずに分派的陰謀にのみ没頭していた。かれらは、一部の道党委員会をはじめとする地方の道委員会の責任ある地位にいすわって、党の決定を無視し、はなはだしくは党中央の指導を拒否しさえした。
かれらは、党の組織路線も実行しなかった。
その結果、共産党内に労働者が少なく、多くの工場や企業所や農村には党細胞がつくられなかった。党内の規律も乱れていた。
朴憲永一味をはじめとする反革命分派分子の策動もつづいていた。かれらはなおも北朝鮮共産党中央組織委員会に反対し、北朝鮮にいる自分たちの手先をつかって、ありとあらゆる陰謀をくわだてた。かれらは、かげでこっそりとでっちあげたいわゆる「ソウル中央」なるものを認めることを強要し、統一的な党の発展をさまたげた。
金日成将軍は党を組織的、思想的に強化するため、党内にもぐりこんだ分派分子、異色分子らの策動を粉砕するたたかいを強力におしすすめた。このたたかいで大きな意義をもったのは、一九四五年十二月十七日に招集された北朝鮮共産党中央組織委員会第三回拡大執行委員会であった。
金日成将軍は拡大執行委員会で、『北朝鮮共産党各級党組織の活動について』と題する報告をおこなった。

将軍はその報告のなかで、あらゆる分派的策動とすべての不健全な傾向を組織的に克服し、党の統一と団結を守り、党活動を正しい軌道にのせるための具体的課題を明らかにした。

第三回拡大執行委員会は、党活動の発展のうえで画期的な意義をもった。

この会議を契機として、党内にもぐりこんでいたすべての異色分子らとの決定的なたたかいがくりひろげられ、このたたかいの過程で、中央の路線にそむき、中央の指示にしたがわなかった地方割拠主義者らは致命的な打撃をうけ、党の組織的、思想的統一がなしとげられるようになった。

この会議を契機として、全党に中央集権的組織指導体系と党規律が強化されるようになり、党員の党派性も高まった。党中央と各級党組織にはすぐれた幹部たちが登用され、党は労働者階級と貧農のなかに深く根をおろすようになった。

金日成将軍は、党を組織的、思想的に強化するとともに、広はんな勤労大衆を組織的に結集させるため、昼夜の別なく奮闘した。

国と民族の運命を一身にになった将軍は、きわめて多忙な身であるにもかかわらず、大衆を獲得して団結させるため、つねにすすんで各階層の代表たちと会い、情勢と党の政治路線を大衆に説明した。将軍はピョンヤンだけでなく、海州（ヘジュ）など各地方にでむいて、みずから大衆講演会に出演した。

ちょうどこうした一九四五年の十二月、曺晩植（チョマンシク）を頭目とする極悪な反動分子どもは、ピョンヤンから遠くはなれた辺境の都市新義州で、一部の不純な学生たちをそそのかして騒乱をひきおこした。

この日、金日成将軍はピョンヤンのある劇場で市民を集めて演説をおこなっていたが、その演説の最中に新義州からの急報をうけとった。演説を終えてから将軍は副官にこう指示した。

「新義州にいく準備をしなさい。いますぐ」

まわりの同志たちが将軍の身辺を案じて思いとどまらせようとしたが、将軍は外套を身にまといながら、ただ微笑をうかべているだけだった。

「さあ、でかけよう」

こういうと将軍は、凶悪な反動どもが見さかいなく策動している新義州にむかっていそいで出発した。

現地につくと金日成将軍は危険をおかして、学生と群衆でごったがえしている公設運動場にはいっていった。随員たちはその身辺を案じたが、将軍は泰然として歩いていった。

「金日成将軍だ！」、「金日成将軍がこられた！」という声に、騒々しかった場内は一瞬にして静まりかえった。静寂のなかにただようものは、かすかな息づかいと、おどろきと、感嘆のまじった熱のこもった視線だけであった。

演壇にのぼった将軍は、顔に笑みをうかべて場内をゆっくりと見まわした。

そのとき群衆のなかから、かん高い声で、「将軍も共産党員ですか？」ときくものがいた。

これは、かれらが悪らつな反動どもの悪宣伝にだまされたか、または認識不足から共産党にたいして不信の念をいだいていることをある程度そのまま反映した質問であった。群衆は息をころして壇上を見つめていた。

劇的な質問をうけた金日成将軍は、両手をゆっくりと腰にあてると顔をひきしめ、あたりにひびくような大声でこたえた。

「そうです。わたしは共産党員です」

この毅然とした宣言は、千斤の重みですべての人びとの心をうった。

会場はざわめいた。だれかが、また質問した。

「将軍は、なぜ共産党にはいったのですか？」

ばかげた質問であった。会場がざわざわしているのが目に映った。会場が静まりかえるのを待って、将軍は右のこぶしをふりかざしながら口をひらいた。

「わたしがなぜ共産党にはいったか、共産党がどんな党であるかについて話しましょう……」

将軍は、どんな反動どもでも威圧されてしまうような感動的な語調で理路整然と話をつづけた。

「……朝鮮の共産主義者たちは、祖国の解放と独立のために、わが民族の幸福と繁栄のために、手に武器をとって日本帝国主義侵略者どもと十五年間もたたかったのです！　あらゆる苦しみと犠牲をかえりみず、極刑と拷問、監獄と絞首台もおそれず、最後までたたかったのです！……朝鮮の共産主義者こそは、わが国の真の愛国者であり、共産党こそは、わが祖国と人民の運命に責任をもち、繁栄と幸福の道へ導くことのできる脳髄であり、心臓なのです……」

とうとうと語る将軍の雄弁に、いままで緊張していた聴衆は、しだいに深い思いと感動につつまれはじめた。

将軍はなおも、血ぬられたたたかいをくりひろげて祖国を救った共産主義者たちが人民をはげまし、民族の繁栄と幸福をもたらす偉大な社会を建設するのだという崇高な理念について、詩的な口調で語りつづけた。そして、祖国と民族を愛し、民主主義を愛する人であればだれでも、力のあるものは力で、知識のあるものは知識で、金のあるものは金で、新しい民主的祖国建設に貢献しなければならないと訴えたのである。

将軍のことばは、水面に張りつめた氷をとかし、歓喜のさざ波をうたせる春の日ざしであり、革命の熱風であった。感動した聴衆はわきかえった。

このときであった。場内の片隅からだれいうともなく、「金日成将軍万歳！」という歓呼の声があがった。歓呼の声はまたたくまに四方にひろがり、やがては会場をゆさぶった。人びとは声をかぎりに「金日成将軍万歳！」を

叫びつづけた。

どんなに傲慢で愚かな人間であつても、朝鮮人としての良心を少しでももちあわせているものならば、民族の救世主であり、太陽である金日成将軍にたいし、またその愛国的熱弁にたいし、頭をさげないではいられなかった。

将軍は顔いっぱいに微笑をうかべ、歓呼して万歳をさけぶ群衆に手をふってこたえた。

この万歳の声は、まぎれもなく金日成将軍の権威と革命的感化力にたいする感動の頌歌であり、ひとにぎりの反動分子にだまされていた大衆が一度に革命の側に移り、真の領袖をあおいでほとばしらせた感激の声であった。

金日成将軍は、このように身の危険をもかえりみず、人民大衆の団結のためにつとめた。

共産党が大衆団体を組織し、広はんな勤労大衆を党に結集させることは、さしせまった課題であるとともに、遠大な朝鮮革命の未来のためにも、きわめて重要なことであった。党は広はんな大衆を傘下の社会団体にかたく結集させることによって、はじめてその革命路線の実践が可能であった。また悪らつで狡猾なアメリカ帝国主義者や、それと結託した反革命分子との熾烈なたたかいによって、決定的な勝利をおさめることができた。

大衆の獲得と社会団体の組織過程は、深刻な階級闘争であった。党は解放直後から、破壊をたくらむ反動分子や分派主義者と熾烈なたたかいをくりかえしてきた。

金日成将軍は、異色分子が大衆団体の指導部にもぐりこむことができないようにするとともに、政党所属のいかん、信仰の有無をとわずに、革命に参加できるあらゆる階級と階層をすべて大衆団体に結集させた。

金日成将軍の正しい指導のもとに、解放後みじかい期間に数百万の勤労者をもうらする大衆団体が結成された。こうして勤労者、技術者、事務員は職業同盟に、勤労農民は農民同盟に、各界各層の青年学生は民主青年同盟に、女性は民主女性同盟に、それぞれ統一的に結集された。

金日成将軍は社会団体を組織するだけでなく、より多くの大衆をそこに結集させるようにした。将軍はつぎのように語った。

「われわれは党を強固なものにすると同時に、党の指導下にある大衆団体をいっそう強化しなければならない。わが党のまわりに広はんな大衆組織がなければ、党はやせこけた人間のようになってしまうだろう。したがってわが党はすべての社会団体をいっそう強化し、広はんな大衆をこれに結集させ、社会団体をつうじてより広はんな大衆を教育し、かれらを党のまわりにかたく団結させてゆかなければならない」

将軍の指導のもとに社会団体はより多くの大衆を結集させ、新しい朝鮮の建設に大きな役割をはたした。大衆団体は結成当初から、共産党の正しい指導のもとで活動した。

このようにして共産党は党の隊列を急速に拡大してゆき、党の影響力が勤労大衆の奥深くまで浸透できる広はんな組織的基盤と、有利な活動条件をそなえることができた。

将軍は大衆を組織的に結集させるかたわら、大衆にたいする思想政治教育を強め、かれらを実践のなかできたえるようにした。

金日成将軍は、勤労大衆の階級的自覚を高めるための思想教育の中心内容を明らかにした。それは帝国主義の本質、――とくにアメリカ帝国主義の凶悪な侵略的策動を暴露し、それと結託している親日・親米派、民族反逆者を糾弾する宣伝扇動活動をひろくおこなうこと、また労働者には、労働者階級こそもっとも革命的で愛国的な階級であり、革命の指導階級であるという自覚を高めて、その階級的団結を強めること、さらに農民には、地主の搾取を暴露し、土地は農民のものとならなければならないことをさとらせ、農民の自覚程度を考えて、まず親日地主を反対するたたかいをおこし、小作料三・七制実施を強く要求すること、などであった。

共産党の各組織と大衆団体は将軍がしめした方向にしたがって、大衆にたいする政治教育を力強くくりひろげて

いった。
将軍はとくに、勤労大衆の民族的誇りを高める教育活動を重要視した。
金日成将軍は、一九四五年十月十八日、平安南道人民政治委員会が催した歓迎会での演説で、新しい民主主義国家建設の課題をさししめし、つぎのように語った。
「これらすべての課題を成功裏に遂行するためには、すべての人びとを愛国思想でしっかりと武装させなければなりません。日本帝国主義は朝鮮人の民族的自負心を踏みにじり、わが青年たちに奴隷根性をうえつけました。民主主義的独立国家を建設するためには、わが人民の民族的誇りをよみがえらせなければなりません。われわれは植民地奴隷根性を根こそぎにして、高い民族的誇りと、どんなことでもやれるのだという自信をもってすすまなければなりません」
将軍は、このような民族的誇りと自信を高めるための教育を、アメリカ帝国主義にたいするあらゆる幻想の排除、そしてかれらにたいする敵愾心の高揚とむすびつけてすすめるようにした。
こうした大衆教育と実際のたたかいをつうじて、勤労大衆の階級的自覚と民族的誇りは急速に高まっていった。
勤労大衆は共産党の指導のもとに、アメリカ帝国主義と国内反動勢力に反対するたたかいを力強くおしすすめ、新しい朝鮮の建設にこぞってたちあがった。
勤労大衆を党のまわりにかたく結集させる過程は、同時に、統一戦線運動で広はんな勤労大衆の下層統一を実現する過程でもあった。広はんな大衆が共産党のまわりに結集されていくことによって、共産党はますます強力なものとなっていった。
将軍は党を堅固なものとし、広はんな勤労大衆をこれに結集させることを基礎にして、あらゆる愛国的な民主勢力を結集させるため、友党との統一戦線に力をそそいだ。将軍は、小ブルジョア階級と民族資本家、宗教家その他

の中間勢力からなる民主主義的政党組織をたすけ、政党の健全な発展に力をつくした。
解放後、共産党が創建され、その勢力がひろがり、より強化されるにつれ、知識人、宗教家、中小商工業者もしだいに組織化されていった。
ブルジョア民族主義者は、共産党の勢力がまだ強くなく、大衆の政治的自覚が弱いすきに乗じて自分たちの政治的基盤を築こうとたくらんだ。
また民主党の上層部にもぐりこんだ一部の反動分子は、組織化の過程にあった民主党を南朝鮮の「韓国民主党」のような反動政党にしようと画策した。また一部の悪質なキリスト教牧師、長老などの教職者とその他の反動どもは、一部の地方で「大韓社会民主党」という秘密団体までつくりあげた。
天道教内の上層部の一部のものたちは、民族反逆者崔麟(チュエリン)とつながりをもち、北朝鮮で天道教の勢力をひろめようとした。そして都市と農村の小ブルジョアジーと一部の知識人も、自分たち独自の政治的組織を結成しようとしていた。
このようなときに金日成将軍は、親日派、民族反逆者打倒のスローガンを前面にかかげて、反動どもの蠢動(しゅんどう)を大衆的なたたかいをつうじて徹底的に鎮圧し、これによって民主主義的政党内でかれらが悪らつにふるまえないようにした。
それと同時に、進歩勢力が民主党、青友党などの政党を組織する際は親日派、民族反逆者を粛清し、民主主義的自主独立国家建設に協力することを基本任務とする綱領と、自己の政党の性格にあう組織路線をうちださせるよう積極的にたすけた。
将軍は、このように能動的で主動的な措置をとることによって中間勢力を正しく導き、かれらを反革命の側にひきずりこもうと策動していたアメリカ帝国主義とその手先どもに決定的な打撃をあたえた。

将軍は多くの民主主義的諸政党の組織化をたすけたばかりでなく、組織された友党との連合を実現し、共同闘争をたくみにおしすすめていった。

金日成将軍はまず友党を信頼し、尊重して、その活動を積極的にたすけた。かれらと密接に協議し、かれらの意見に耳をかたむけ、つねに先進的な思想と理論で、また抗日武装闘争の時期に蓄積された豊富な闘争経験でかれらをめざめさせ、実践的な模範によってたえず革命的影響をあたえた。

将軍は友党との合作で、団結しながらたたかう原則をうちだした。団結の基準はあくまでも帝国主義に反対し、民主改革の実施を支持することであった。将軍は友党のいい面はこれを積極的に支持し、信頼し、尊重しながら、悪い面にたいしては見すごすことなくそのつど批判をくわえてこれをただした。

金日成将軍は友党との統一戦線で下層統一を基本とし、これに上層統一を有機的にむすびつけるという原則を守るようにした。

当時、上層との統一戦線で提起されていた問題で重要なことは、友党の上層部にもぐりこんだ一部の反動派を孤立させ、進歩的勢力が優勢を保つようにたすけることであった。

この原則にしたがって共産党は、「親日派、民族反逆者打倒」のスローガンをかかげ、友党内の反動的要素との妥協のないたたかいをおしすすめながら、上層部の進歩的勢力を味方にひきいれ、下層大衆をめざめさせていった。

また党は、友党のなかの反動分子とのたたかいでは、おもに党内でたたかいを強めるという原則をつらぬいた。その結果、友党は上層内部の反動的策動と動揺を内部闘争をとおしてこれを撃破し、制圧できるようになっていった。

金日成将軍はこのように社会団体とともに民主主義的政党の組織をたすけ、かれらとの団結を強化する活動をと

おして、短期間のうちに統一戦線の基礎を築きあげた。

こうして北朝鮮では、共産党の政治路線を実現するための実践的なたたかいの過程において、一九四五年末から一九四六年初までに事実上、民主主義民族統一戦線が形成されたのである。

2 青年のなかで

金日成将軍はつねに、革命と建設において青年がはたす役割を重要視した。

青年は生気はつらつとしており、元気旺盛で勇敢であり、新しいものにたいして敏感であり、進取性に富み、正義と真理を愛し、そのためには生命をもいとわずたたかうりっぱな資質をそなえている。

それゆえ将軍は、青年を革命と建設の近衛隊として、先進的闘士として、社会の未来を代表する新しい世代とみなした。

将軍は革命活動の初期から青年に第一義的な関心をよせ、直接、青年運動を組織指導したのである。

革命闘争と青年活動をつねにむすびつけていた将軍は、解放後の複雑な情勢に照らして広はんな青年を党のまわりにかたく結集させ、革命課題の遂行へふるいたたせることに特別の意義をあたえた。

将軍は、青年の地位と役割についてつぎのように強調した。

「青年は民主朝鮮建設の突撃隊であり、未来の朝鮮の主人であります。われわれが民主主義的独立国家建設の偉業をなしとげることができるかどうかは、青年の自覚と闘争いかんに大きくかかっています」

青年の絶対多数は勤労大衆の子弟であり、日本帝国主義植民地支配のもとで民族的抑圧と搾取をうけて成長したため、愛国心と革命性をもっていた。

それゆえ、かれらを団結させることは当面の革命闘争においてはもちろん、かれらを社会主義、共産主義建設のたのもしいにない手にさせるうえでも必要なことであった。

しかし、解放直後の青年運動はきわめて複雑な状況にあった。反動と分派分子の分裂策動によって、共産青年同盟をはじめ、「解放青年同盟」、「農民青年同盟」、「学生青年同盟」など、いくつかの青年学生団体が分散して組織されていた。民主党とキリスト教内の反動分子も「キリスト教青年団」、「白衣青年同盟」などの反動青年団体を組織し、青年学生運動の分裂をもくろんでいた。

しかし当時の共産青年同盟は、同盟員の数が少なかった。こうした状態がつづけば青年学生の運動の分裂は避けられず、したがって共産党の周囲に青年大衆を結集させることが非常にむずかしくなるおそれがあった。

こうした点を洞察した金日成将軍は、「民主主義の旗のもとに、愛国的青年は団結せよ!」というスローガンをかかげて共産主義青年同盟を解散させ、青年の広はんな統一的組織として民主主義青年同盟を組織する新しい方針をうちだした。

将軍の民青創立方針は、解放後の国の情勢、革命の性格と任務、各界各層の青年の階級的立場、青年運動の特殊性などに適合したきわめて正しい方針であった。またそれは、金日成将軍が革命活動の初期から朝鮮青年運動を直接、組織指導してきた豊富な経験にもとづき、党の青年後継者を広はんな大衆的基盤をもとに準備してゆく創造的方針であり、愛国的で、民主主義的な各界各層の大衆を結集させるという、党の政治路線を反映した革命的方針であった。

将軍がうちだした方針にしたがって、民青創建の準備活動は活発にすすめられた。

しかし、これはなまやさしいことではなかった。いたるところで反動分子がうごめいていた。かれらは青年たちの会議場や講演会にあらわれては一騒動をおこしたり、外套のなかに拳銃をかくしておどかしたりした。また夜中

に青年活動家の宿所を襲ったりもした。

それに、鍛錬された活動家はまだ少なかった。多くの青年たちは革命に身をささげようと決起はしたものの、なにをどうすればよいのかわからなかったし、階級的にもさほどめざめてはいなかった。

分派分子と事大主義者は、共青（共産主義青年同盟）を改編して民青を組織することは「党の右傾化」であり、「青年運動の後退」であるといって公然と反対した。また青年を組織にうけいれるにあたっても、共産主義を信奉するものにかぎると強弁し、隊列の拡大発展をさまたげた。

ほかの党はといえば、独自に青年問題をうちだして会議や講演会をひらき、参加した青年をだましては書類に捺印させ、「加盟者」にしたてたりした。

このような複雑な状況のもとで、青年大衆をどうすればより早く結集させることができるかについて、つねに気づかっていた金日成将軍は、この問題を青年活動家だけにまかせず、みずから青年活動家と個別に、あるいは集団的にひんぱんに会い、青年運動の方向と具体的な方法までこまかく教えた。

将軍はつねに青年活動家にむかい、革命にとっては、革命的で進取性のある青年たちをつかむことが大切であるとのべ、つぎのように語った。

「革命においてもっとも勇敢で、多くの血を流すのは青年である。いかなる革命であっても、青年が先頭にたたずに勝利したためしはない。

青年は革命する世代であり、のびゆく世代であり、前進する世代である。

青年たちを正しく教育してこそ、祖国統一も容易にでき、共産主義社会にもより早く到達することができる」

将軍はこのように、青年の歴史的使命と社会的役割にたいして正しい評価をくだし、たとえ一人の青年でも反動の手にわたしてはならないし、青年のなかに階級的な自覚、民族的な誇りを高めるための政治思想教育と道徳教育

を強めなければならないと教えた。

とくに、革命家としての高い社会的意識と誇りをもつように青年を教育することによって、かれらが新しい社会建設に目的意識的に参加するようにしなければならないと教えた。

解放直後の一九四五年九月のある日のことであった。

将軍は、かつてのきびしい抗日武装闘争のときから育ててきたある隊員に、洋服を着てくるようにといった。かれはなんのことかも知らず、いそいで洋服をもってきた。

将軍は隊員に洋服を着させると、それをしげしげとながめてから肩にそっと手をかけ、静かにこういった。

「同志は年も若いし、それにパルチザンで共青活動をした経験もあるので、これから青年活動にたずさわったらどうかと思うが……」

将軍は、かれをピョンヤン市共青副委員長に任命しようというのであった。

金日成将軍は、かれに解放された祖国の情勢を分析してきかせながら、朝鮮革命の性格と任務、それにともなう朝鮮青年運動の前途についてわかりやすく説明し、共青での活動について要旨つぎのように語った。

「朝鮮の青年は、まだ自己の広はんな組織体をもっていない。こうした条件のもとでは必ず、新しい民主朝鮮建設のおもだった働き手となる青年たちの広はんで、統一的な民主主義的団体を組織しなければならない。

このような唯一の大衆的青年組織をつくるには、労働者、農民、知識人の青年のなかから、もっとも先進的で党に忠実な青年たちで中核を築き、共青組織を強化すると同時に、先進的で中核となる青年の役割を高め、各界各層の青年を教育し、組織していかなければならない。

そのためにはまず、この活動をおしすすめる青年活動家を準備し、たすけてやることが重要である。

もちろん、大部分の青年活動家たちが革命のためにたちあがったことは事実である。しかし、まだ青年運動の経

験もなく、革命理論ももたず、活動方法はなおのことわかっていない。だから、だれと手をにぎって、なにをどうすればよいのか見当がつかないのである。

したがって、かれらが革命的な理論と活動方法を身につけるように手伝ってやらなければならない。そのかたわら共青の指導機関内に党組織を早くつくり、党の組織生活をつうじて活動家たちを政治的、思想的に教育し、実務能力も高めてやらなければならない。

また青年や活動家たちのなかで、非原則的なすべての現象にたいするたたかいを組織し、隊列内の統一と団結を自分のひとみのように大切に守るよう原則的な教育を強化し、偶然分子（階級的立場や思想から見て本来ならば革命的党隊列内にはいってこられないものが、自己の出世欲のため出身をいつわったり、偶然な機会に党内にもぐりこんだ不純分子のこと）、不純分子（党や革命の利益に反する思想をもって行動する敵対分子のこと）、異色分子（党の闘争目的と思想を異にするもので、党や革命隊列内にもぐりこんだ不純分子のこと）どもを徹底的に粛清して、隊列内の純潔をたもつようにしなければならない」

金日成将軍の直接の指導と配慮によって、青年活動はいちじるしく前進した。青年活動をになっていく中核が築きあげられてゆき、多くの青年たちがめざめていった。しかし一部の青年活動家のなかには、まだ対象にそくした活動ができないでいた。

将軍は、こうした欠陥もそのつどただしてゆき、青年活動家たちに、活動方法をあらためることは群衆を獲得するかどうか、革命を前進させるかどうかの、きわめて重要な問題であると語った。そして人間を改造する活動を一律におこなってはならず、活動の場所、対象の具体的な特性にそくしておこなう革命的な活動方法についても、くわしくさとした。

「きみたちは、青年活動をしているからには、多くの青年たちと会って活動するわけであるが、ときには老人と

も会い、婦女子たちとも会わねばならないこともあるだろう。

その場合、老人にいうことと婦女子にいうことが、まったく同じであってはいけない。

老人に話すことば、婦女子に話すことば、目下（めした）のもの、同僚に話すことばそれぞれが、みなちがうものである。

老人に会うときにはまず朝鮮の礼儀作法にしたがって、ていねいにあいさつをし、ことばでも、『トンム』（仲間、同志といった意味）といったぞんざいなことばをつかってはならないし、煙草や酒もできるだけつつしんだほうがよい。そして年寄りのいうことをいつも尊重し、相手が理解しないといって自分の考えを無理じいしてはならない。軽率なことばをつかうことは、なおさら注意しなくてはならない。……

青年活動家は、いろんな人と食事することもある。この場合も、年寄りが箸をつけるまえに手をつけてはならないし、上座にすわってあぐらをかいたまま食事をするようなことがあってはならない。

婦女子にたいしても同じことである。舅（しゅうと）や姑（しゅうとめ）のいる婦人をつかまえて、『トンム』とよんだりしてはならないだろう。婦女子がたまにまちがったことをいったり、その考えが誤っているからといって決してとがめてはいけない。そして、相手がききわけるまで親切にさとさなければならない。……

なにかしようと決心して、青年のなかにはいって仕事をする場合でも相手を尊重し、『これこれのことをしようと思うのだが、きみはどう思う？』というように、きたんなく話しあえば、おそらく反対する人は一人もいないはずである。

また、相手が自分の意見に同意しない場合もありうるが、そんなときも決しておしつけるようにして同意をえようとしないで、相手の意見を尊重し、説得と解説によって心を動かすようにしなくてはいけない。

きみたちは、いつどこへいって、どんなことをするにしても、仕事をはじめるまえにはまずこうしたことを肝に銘じ、必ずこのとおりに実行しなければならない。

もちろん青年を教育し、かれらを革命課題の遂行にふるいたたせることは非常に重要である。しかしきみたちがいばったり、謙遜さを欠き、礼儀一つ守れないとすれば、いったいだれがきみたちを信頼し、革命をいっしょにやろうとするだろうか。

きみたちがいつも謙虚で礼儀正しく、すべてのことにみずから模範をしめしさえすれば、人民の真の忠僕は共産主義者であることが理解されようし、またそうなってこそ大衆がついてくるし、教育もすすみ、革命任務も成功裏に遂行されるであろう」

このことばは、青年活動家たちの綱領的な指針となった。

将軍は青年と青年活動家たちを肉親の情でいつくしみ、かれらの活動と生活に格別の気をくばった。解放直後はすべてのものが不足し困難なときであったが、青年活動家のためにりっぱな庁舎を建て、自動車も数台おくったりした。

ピョンヤン市共青委員会が将軍の配慮によって新しい庁舎をあてがわれ、まだ何日もたっていないある日のことであった。

将軍は朝鮮革命を指導するせわしいなかを、新しい庁舎で活動している共青活動家たちのことを気にかけて、ぼたん雪がふりしきる深夜にもかかわらず、わざわざ庁舎をたずねていった。

ピョンヤン市共青委員会の庁舎のまえについた将軍は肩につもった雪をはらおうともせず、新しい庁舎を見てまわり、副官にこういった。

「青年というものは、明るくてひろびろとしていて朗らかなことが好きなのに、青年機関の玄関の電灯がこんなに暗くてはだめだ。そうだろう……」

金日成将軍は正門からなかへはいろうとしたとき、玄関のドアのせまいことについても指摘した。

「このドアもなおしたほうがよい。希望と抱負に燃えている青年たちが胸を大きくひらいて、大手をふってはいれるようにしてあげたほうがいい」

普通の人にはなんでもないことのように思える電灯やドアにたいしてまで、青年の特質を深く考慮し、かれらを心からいつくしむ将軍は、このような些細なことからも大きなところに考えをめぐらすのだった。

将軍は事務室へと足をむけた。しごとをしかけたまま机にうつ伏せになっている委員長の姿が目にとまった。おこそうとする副官を、将軍は手をふっておしとどめた。

そして静かに委員長のそばに近づくと、自分の外套をぬいでそっとかけてやり、足音をしのばせてその場を去った。

青年たちの生活のすみずみまでこまかく気をくばる金日成将軍は、青年活動家が寝とまりしている合宿にも、いくたびとなくおとずれた。

そんなときはよく、食堂から先にたちよった。そして食堂で働いている人たちに、大豆をおくるから、若ものたちが好むもやしをつくって熱い汁でもこしらえてやるようにたのみもした。またときには、おいしいおかずの材料を副官にもたせたりした。

青年運動の前途をはっきりとしめし、青年たちの活動と生活を肉親のようにこまごまと見守る金日成将軍のもとで、民青組織結成の土台は短期間のあいだに、あい路と難関をのりこえて築かれていった。

一九四五年十月二十八日、ピョンヤンで金日成将軍の参席のもとに各道共青熱誠者会議がひらかれた。

将軍はこの会議で、祖国の現状、朝鮮革命の性格と任務を分析し、青年運動のすすむべき方向をいま一度明らかにして、各界各層の青年を党のまわりにかたく団結させる必要性とその対策を、説得力あるわかりやすいことばで解説した。

将軍は民青創建の方針を代表たちによく理解させるため、みずからの体験まであげて説明した。

「われわれが山のなかでたたかっているとき、あるところで反日『救国軍』に出会った。かれらは共産主義者といえば頭ごなしにきらい、多くの共産主義者を殺害する蛮行をひんぱんに働いていた。

われわれは大兵力の日本帝国主義軍隊とたたかうため、かれらと反帝統一戦線をむすぶことを決心し、かれらの頭目と会った。

われわれは日本帝国主義に反対してたたかうかれらの活動を高く評価し、朝鮮の共産主義者もやはり日本帝国主義に反対し、朝鮮の独立をたたかいとるという目的は同じであることを理解させ、われわれとともに、共同の敵日本帝国主義に反対してたたかうことを訴えた。

われわれ共産主義者は、日本帝国主義の軍隊とたたかう戦場で、もっとも困難で骨がおれる戦闘をうけもち、勇敢さと犠牲精神の模範をしめしてやった。

われわれは血を流し命をかけてかれらを救い、共産主義者の気高い品性と同志愛をみせてやった。たたかいは勝利のうちに終わった。それからというものは、かれらは全員われわれの味方となり、そのなかにはすぐれた共産主義者となったものもいる。

ところで、解放され、合法活動ができるこんにち、共産主義青年が青年団体内で当時のように活動すれば、新しいものに敏感で、正義感に燃える勤労青年はもちろんのこと、各界各層の青年も必ず共産主義青年についてくるであろう……」

将軍の演説は青年活動家の前途を照らす灯台であった。会議の参加者たちはだれもが、民青を創建することがまさに当面の朝鮮青年運動のすすむべき道であることをいっそうはっきり理解するようになった。

現実を正しく見ることもできず、革命理論もなく、革命の段階もよく知らない分派分子らは、将軍がしばらく席

をたつと、その機に乗じて挑戦してきた。しかし、それはことごとくうちくだかれた。
将軍は翌日も会議を指導した。
会議では、共青を民青に改編する決定が満場一致で採択された。その瞬間、嵐のような拍手と歓呼の声がわきおこった。
会議では、将軍がみずから筆をいれてなおした宣言書が朗読された。
「新しい国家建設で中堅となる朝鮮青年男女諸君！……われわれの責任がいかに重大であるかを自覚せよ！われわれは総力を集中して、全朝鮮人民の福祉を保障ある民主主義人民共和国を一日も早く建設しなければならない。
うるわしい三千里江山のあるじである朝鮮青年男女諸君！世界に誇る民主主義新国家を建設しよう！……民族団結を妨害し、分裂をたくらむいっさいの反動分子と勇敢にたたかおう！熱血の朝鮮青年よ！きたれ！集まれ！団結は力である。そしてこの団結された力と燃えたぎる熱情で、この偉大な任務をなしとげよう！」
金日成将軍の提議によって、一九四五年十月三十日、朝鮮民主青年同盟組織準備委員会が結成された。
青年の気勢と政治的熱意は、活火山のように燃えあがった。
民青創立方針を実践するなかで、青年運動は新しい転換をなしとげた。なかでも将軍の直接的な指導をうけたピョンヤン市と平安南道（ピョンアン）の活動はめざましかった。将軍は、ここでつくられた模範を全国に一般化していった。
将軍は集会や講演会、座談会などをひらき、広はんな青年たちに民青創建の正当性とその意義、朝鮮青年運動の任務と展望を解説、宣伝させた。そしてみずからも青年のなかにはいって講演し、かれらと談話をかわした。
革命と建設を全般にわたって指導する将軍の労苦をいくらかでも少なくするため、青年活動家たちが、講演にでるのをさしひかえてくださるようにと、なんども進言したが、そのたびに将軍は、つぎのように語るのだっ

た。

「日本帝国主義侵略者は、朝鮮民族の文明の度が高くなり発展するのをおそれて、貧しい家の子には勉強もさせず、農村では夜学まで廃止してしまったのです。朝鮮の青年たちが政治的生命をもたないまま、学びたくとも学べず、知りたくとも知ることができずに生きてきたことを思うと胸が痛むのです……。かれらのねがいをかなえてやるのは、かれらのために血を流してたたかったわれわれをおいてはほかにないではありませんか……」

将軍は、反動どもが「反共」騒動をおこし、民青創建の奔流をさえぎろうと必死になってもがいている危険な状況にもかかわらず、みずから草稿を作成してピョンヤンはもちろん、遠く海州をはじめ多くの地方にまででかけていき、青年学生のまえで講演をした。

民青の創建は、こうした金日成将軍の具体的な指導があったからこそ急速にすすんだのであった。とくに、北朝鮮共産党中央組織委員会第三回拡大執行委員会以後、青年運動はいっそう早いテンポで前進した。

そのころはすでに、敵のいかなるあがきも、分派分子や地方割拠主義者どものどのような策動も、こなごなにうちくだかれていた。

こうして一九四六年一月十六日、朝鮮民主青年同盟創建のための北朝鮮民主青年団体代表者会議がひらかれた。

一九四六年一月十七日、朝鮮人民のすぐれた指導者である金日成将軍の偉大な革命思想を直接体現し、将軍が組織展開した初期革命活動の時期と、抗日武装闘争の時期の豊富な青年活動の伝統をひきついだ朝鮮民主青年同盟の創建が宣布された。民主青年同盟の創建は、朝鮮青年の生活と青年運動発展のうえで、大きな意義をもつ歴史的な出来事であった。

民青が創立されたことによって朝鮮の青年たちは、金日成将軍を首班とする党中央委員会のまわりに、さらにかたく結束することができた。

その後、金日成将軍は社会主義革命が完成し、社会主義建設が全面的に深化発展するにしたがい、青年の政治思想生活でおきた大きな変化と青年運動発展の要求にそくして、民青を共産主義的な大衆団体である社会主義労働青年同盟にあらため、その強化発展にすみずみまで心をくばった。

将軍はじつに、青年のためには何一つ惜しまなかった。

将軍は青年の将来と希望についても深く心をくばり、かれら一人ひとりをはげました。

将軍は、工場にでかけては油にまみれた青年の手をあたたかく握り、農村にでかけては農村の青年たちと語りあい、かれらの生産活動と学習、生活のすみずみにいたるまでこまかく心をくばった。

溶鉱炉や地下坑道のなかで、船の甲板や伐採場、建設場や協同農場の、そのどこででも将軍は青年たちを自分の息子のようにはげまし、かれらを新たな偉勲へとふるいたたせた。

青年運動指導における金日成将軍のたぐいまれな豊富な経験と、洗練された導きと、そして肉親のような愛といつくしみがあったからこそ、朝鮮の青年運動は世界青年運動の模範となり、朝鮮青年は金日成将軍の命令や、指示にかぎりなく、忠実な近衛隊、決死隊となったのである。

3　最初の人民政権の誕生

金日成将軍は、広はんな勤労大衆を党のまわりにさらに多く、さらにかたく団結させて新しい形態の人民政権を樹立するために力をそそいだ。

北朝鮮で革命をとどこおりなく前進させ、革命的な民主基地の創設路線をつらぬくためには、日本帝国主義の古い支配機構をうちこわし、新しい人民政権を樹立しなければならなかった。

人民政権をうちたて、それを革命の武器としてしっかりと手中におさめなければ、敵の反抗を鎮圧できないばかりでなく、社会の根本的な変革も、革命の決定的な勝利も達成することができなかった。革命を最終的な勝利へと導くためには、解放された朝鮮人民の要求に全面的にそい、祖国の民主主義的発展に全面的に合致し、祖国の民主主義的発展にそくした新しい形態の強力な政権機関をうちたてねばならなかった。また新しい形態の強力な人民政権を樹立してこそ、党の政治路線、とくに北半部を朝鮮革命の基地にかえる党の革命的な民主基地路線をつらぬくことができた。

金日成将軍は、権力の問題を革命における基本的な問題、革命の勝敗と建設の成果を左右する死活の問題として、抗日武装闘争の時期に築いた貴い伝統と経験にもとづき、解放された朝鮮の具体的現実に適した真の人民政権創設路線を科学的に明示した。

将軍は、人民政権路線を規定するにあたって、まず朝鮮革命は資本家階級の指導する古い形態のブルジョア革命ではなく、労働者階級が指導する新しいかたちの人民民主主義革命である点と、この革命の反帝反封建的な性格から出発して、労働者階級の指導のもとに広はんな農民と都市小資産階級だけでなく、一部の民族資本家まで革命に参加することができるという点をふかく考慮した。

こうして金日成将軍は、党の政治路線において、解放された祖国の地に、広はんな民主主義民族統一戦線にもとづく民主主義人民共和国を創建する路線をさししめしたのである。

民主主義人民共和国創建路線は、将軍が指導した抗日武装闘争の炎のなかで、すでにその基礎が築きあげられていた。金日成将軍の導きのもとにくりひろげられた抗日武装闘争の全行程は、そのまま労働者、農民をはじめとする勤労階級に自由としあわせをもたらす、真の人民の政権を樹立するための闘争であった。

その当時将軍は、将来創建される政権は、労働者階級が導く労農同盟にもとづいた広はんな反日勢力の統一戦線

による人民革命政府とならねばならないという路線を提示した。これは、わが国の革命発展の合法則的要求から生れ、民族的、階級的矛盾と社会経済的条件を科学的に分析して提起された路線であったし、権力問題にかんするマルクス・レーニン主義理論を独創的に発展させた路線であった。

将軍は、東満州遊撃根拠地にはじめて人民革命政府を樹立したその経験にもとづき、祖国光復会十大綱領においてうちだした、人民自身が政権の主人公となり、徹底して人民の利益に奉仕し、労働者、農民をはじめとする全人民と革命的連係をもつ人民政権を創建するという、深い思想を体系化した。

同時に金日成将軍は、きびしい抗日武装闘争の試練のなかで、大衆と血縁的連係をむすび、人民のためにすべてをささげてたたかうことのできる、きたえられた数多くの共産主義者を育成し、人民政権を創建するための革命的骨幹を準備した。

一九三〇年代の抗日武装闘争の時期に、金日成将軍が創造した人民政権路線とその貴重な活動経験は、まさに解放された朝鮮人民をして、みずからすすんでそのような人民政権形態を選ぶようにさせた。

解放をむかえ、民主主義的な新しい朝鮮を建設する道を歩みはじめた朝鮮人民は、抗日武装闘争の過程で育った共産主義者の正しい指導のもとに、日本帝国主義の統治機構をうちこわし、勤労人民の各界各層の代表による地方政権機関である人民委員会を組織した。

金日成将軍は、人民の創意により、人民自身の手によって創設された人民委員会を新しい形態の人民政権機関として規定しながら、その理由をつぎのようにのべた。

「それは、人民委員会こそ人民の創意により、人民自身の手によって樹立された政権であり、朝鮮人民の敵である親日派、民族反逆者、地主、および買弁資本家に反対する労働者階級を中核とする勤労大衆と全人民の利益を代表する政権であり、広はんな大衆のなかにふかく根をおろし、人民の要求にもっとも敏速に応じ、人民の支持をう

け、人民と血縁的にむすびついた政権機関であり、古いブルジョア社会の『議会的民主主義』政権の形態でなく、悪どい日本帝国主義支配の抑圧的な国家機構がうちくだかれた場所に発生したまったく新しい民主主義的政権形態であり、将来わが人民を幸福な、そしてゆたかな、さらに気高い民主主義の社会に導くことのできる新しい形態の政権であるからであります」

いいかえれば、人民委員会は、祖国の完全な自主独立を保障し、広はんな人民大衆をそのまわりに結束させ、人民の政治的熱情と愛国心を高度に発揮させ、あらゆる力を強く豊かな祖国建設に動員することのできる政権形態であった。

将軍が明らかにした人民政権路線は、一九三〇年代に築かれた人民革命政府路線の継承発展であり、それをいっそう豊富にしたものであった。

金日成将軍は、まず各地に組織された人民委員会を強化するために、あらゆる努力をかたむけた。

人民委員会を創設し、それを強化する仕事は、きわめてきびしい階級闘争であった。

日本帝国主義にかわって南朝鮮を占領したアメリカ帝国主義者は、反動勢力をかき集めて、民主主義的自主独立国家建設のためのわが人民の闘争を失敗させようと、ありとあらゆる策動をくりひろげた。これとともに左右の日和見主義者も、人民政権を組織するための闘争に多くの難関をつくりあげた。

朴憲永スパイ一味をかしらとする右翼投降主義者たちは、親日地主、資本家の利益を代弁して、わが国にブルジョア共和国である、いわゆる「人民共和国」をつくらねばならないと主張した。

また極左分子たちは、わが国の社会発展の客観的要求を無視し、民主主義革命の段階をとびこえて、ただちにわが国にプロレタリア独裁政権をうちたて、社会主義革命を遂行せねばならないと強弁した。

金日成将軍は、民族と階級の敵および左右の日和見主義者どものこのような策動を徹底的にうちくだき、人民委

員会を強化する活動を力強く導いた。将軍は、共産党の組織をあげて人民大衆のなかに民主主義人民共和国創建路線を深く浸透させると同時に、敵対分子の罪状をあますところなく暴露し、人民大衆の団結した力によって敵対分子を徹底的に粉砕した。

将軍はこのような闘争において、鍛練された勤労人民のすぐれた働き手を人民委員会に数多く派遣し、その構成をさらに改善して、人民委員会にたいする共産党の指導を保障し、人民委員会内部での新しい秩序確立のための組織指導を強化した。

将軍は、左右の日和見主義者、とくに朴憲永スパイ一味のブルジョア的な、いわゆる「人民共和国」建設をうんぬんする反革命的な主張を粉砕するためにきびしい思想闘争をくりひろげた。

一九四五年十一月十五日にひらかれた北朝鮮共産党中央組織委員会第二回拡大執行委員会で、将軍は政権の問題にかんする党の基本方針を明示し、真の人民政権は大衆的な基盤である広はんな民主主義民族統一戦線にもとづかねばならず、党の指導が必ず確保されなければならないと再三強調した。

将軍は、政権というものは、何人かの人間が集まって宣布することによって樹立されるものではないと指摘し、朴憲永一味がたくらんだいわゆる「人民共和国」は、いかなる大衆的な基盤ももたないものであることを暴露した。したがって、反動分子が中心となって構成しようとするいわゆる「人民共和国」にたいしては、全然支持できないことを明らかにしたのである。こうして朴憲永一味がたくらんだいわゆる「人民共和国」は、こなごなにうちくだかれてしまった。

この会議以後、分派分子たちは、「人民共和国」樹立うんぬんを二度と口にできなかったし、金日成将軍が明らかにした政治路線にたいしても、それ以上反対することができなかった。

将軍は、内外の敵との闘争を強力におしすすめながら、北朝鮮の中央政権機関を樹立するためのたたかいを力強

くおしすすめた。
　この過程で、地方人民委員会内で吉晩植をはじめとする革命の異色分子、偶然分子らが一掃され、北朝鮮の行政を部門別（産業、交通、逓信、農林、商業、財政、教育、保健、司法、保安）に担当する行政十局が組織された。また、北朝鮮共産党中央組織委員会第三回拡大執行委員会以後、党が急速に強化され、広はんな人民大衆が党のまわりに結集し、民主主義民族統一戦線が形成されていった。
　こうした条件がつくりだされるや、金日成将軍はただちに北朝鮮の中央政権機関として、北朝鮮臨時人民委員会を樹立する方針を明らかにした。
　これは、新しい情勢の切実な要求にたいする明確な回答でもあった。
　地方に新しい政権機関が組織され、それがさらに発展するにつれて、各地方の人民委員会を統一的に指導する中央機関を樹立することは、きわめて緊急な課題であった。このような中央的国家機構を樹立してこそ、人民政権機関の散漫性と地方割拠主義的傾向をなくし、祖国と人民のまえに提起された切実な政治的、経済的課題をさらに円滑に、統一的に実現することができるのであった。
　しかし一部のものたちは、「遠からず三十八度線がなくなって南北が統一されるのに、北朝鮮だけの中央政権機関を樹立する必要はない」と主張した。
　金日成将軍はこのような妄言をはねのけ、民主主義的政党や社会団体を中心として北朝鮮中央行政機関をうちたてるため、発起委員会を組織し、一九四六年二月八日、北朝鮮臨時人民委員会を樹立するための北朝鮮の民主主義的な政党、社会団体、行政局、人民委員会の代表からなる拡大協議会をひらいた。
　この会議で金日成将軍は、『当面する朝鮮の政治情勢と北朝鮮臨時人民委員会の組織について』と題する報告をおこなった。

将軍は、日本帝国主義者の悪らつな支配の結果わが国に生みだされた社会経済的状態について分析し、解放後五か月間の北朝鮮における政治、経済、文化の全分野で達成した成果を概括した。ひきつづき将軍は人民委員会の発展過程を指摘し、地方人民委員会がかちとった業績にたいして正しい評価をくだしながら、中央主権機関を樹立せねばならない必要性を明らかにした。

将軍は、北朝鮮に中央主権機関を樹立することは、完全に時期の熟した課題だと指摘しながら、

「われわれは、わが国に統一政府が樹立されるときまで、北朝鮮臨時人民委員会がこのような機関とならねばならないと考える」

と強調した。

そして将軍は終わりに、樹立された北朝鮮臨時人民委員会の任務について具体的に明らかにした。

金日成将軍の報告は、会議に参加した人びとの熱烈な支持をえた。拡大協議会は高い政治的熱意のなかで北朝鮮臨時人民委員会を樹立し、その委員長として朝鮮人民の敬愛する領袖金日成将軍を一致して推戴した。

こうして朝鮮人民の久しい宿願であり、朝鮮の共産主義者がそのために血を流してたたかった、その人民政権が金日成将軍によって輝かしい誕生を見るにいたったのである。

これはまさに、朝鮮人民の政治生活において深い歴史的意義をもつよろこばしい出来事であった。

金日成将軍は、この政権の深い根源についてつぎのようにのべた。

「朝鮮の共産主義者たちと愛国的人民は、日本帝国主義支配下のもっとも暗たんたる時期に、言語に絶するあらゆる艱難辛苦をへながらも、ただひたすら祖国の光復と人民の自由のために、十五年間も英雄的な抗日武装闘争を展開してきました。……われわれの人民政権は、朝鮮の共産主義者をはじめとする愛国的人民の栄光にみちた革命伝統を継承した政権であり、わが党の指導のもとに、わが人民が苦しい闘争をつうじて獲得した偉大なたたかいの

成果であります」

一九三〇年代に築かれた人民革命政府路線の伝統を継承した北朝鮮臨時人民委員会は、労働者階級が指導する労農同盟にもとづく、広はんな反帝反封建的民主勢力をもうらした民主主義民族統一戦線に依拠した人民政権として、人民民主主義独裁の機能を遂行する政権であった。

この政権は、反帝反封建的民主主義革命の課題を完遂し、北半部に革命的民主基地を創設する使命をもっていた。

北朝鮮臨時人民委員会が樹立されたことによって、わが国における主権問題はりっぱに解決された。

こうして朝鮮人民は、自己の真の政権をもつことによって文字どおり国家の堂々たる主人となり、富強で自由な、新しい社会を建設する力強い革命の武器をもつにいたったのである。

北朝鮮臨時人民委員会の樹立は、朝鮮人民にあたえられた画期的な慶事であった。

人民は、真の人民政権の樹立を熱烈に歓迎した。人民は敬愛する領袖金日成将軍がその首班におされたことを心からよろこび、これ以上の幸福はないと考えた。

いかなる国家の人民にとっても、自己の主権はきわめて貴重である。しかしその貴さを感じとる心情が、朝鮮人民ほど強烈な人民はおそらく少なかろう。それは、朝鮮人民がへてきた苦難の歴史が世界に類例のないほど涙ぐましいものであったからである。

かつての朝鮮人民は、主権をもたなかったがゆえに、自分の国、自分の土地に住みながらも苦しみ、囚人や流浪の民とかわりない抑圧とさげすみのなかで、血のにじむような苦渋を味わってきた。のどをうるおすために飲む一ぱいの水にもにがい涙がまじっていたし、落葉のように踏みにじられ、餓死をする破目になっても、それをどこにも訴えでるところがなかった。

圧制者、侵略者の圧力におされ、渡り鳥の群のように、見も知らぬはるかな異国に流れていった人びとは、どれほど多かったことであろう。しかし渡り鳥は帰ってきても、こうして旅立っていった人びとのなかでふたたびなつかしい祖国の地に帰ってきた人びとはきわめて少なかった。日本、満洲、中国内陸、そして遠い南の空のはて――、そのいずこにも、わが同胞の、死ぬに死にきれぬ思いでこの世を去ったそのなきがらが散らばらなかったところがあっただろうか。

それればかりではなかった。

数千をこえる同胞が、アメリカの奴隷商人どもに、その当時の金でわずか三円で売りとばされ、太平洋のかなたにわたっていかなければならなかった。そしてかれらは、ハワイやメキシコで、ふたたびアメリカの農場主に奴隷として売りわたされ、残忍きわまりない殺人鬼どものムチにうたれて、荒地のいばらを血に染めながら死んでいった。またある人は銃剣に追いたてられて、猛獣や毒蛇のむらがるジャングルをかけまわり、わに狩りにひきだされては悲鳴だけをのこし、わににくわれて死んでいった。

空とぶ鳥も、住んでいる森と巣を追われても、他に移る場所があるのに、自分の国、自分の政権をもたないわが同胞にはゆきつくところさえなかったのだ。

しかし、ついに真の人民の政権がうちたてられ、あのいまいましい不幸と苦痛の歴史は、遠いむかしがたりとして永遠に消え去った。

かつての奴隷であり、悲惨な受難者であった労働者、農民をはじめとする勤労人民は、金日成将軍がもたらしてくれた政権をもりたて、心を一つにしてこぞってたちあがり、国の堂々たる主人となった。

こうして各地で、北朝鮮臨時人民委員会の結成を祝う群衆大会がひらかれた。

二月十日、ピョンヤンでは、十万の市民が花束と絹でかざった金日成将軍の大きな肖像画を先頭にして、祝賀行

進をくりひろげた。

「北朝鮮人民の真の政権である北朝鮮臨時人民委員会結成万歳！」、「朝鮮人民の敬愛する英雄、北朝鮮臨時人民委員会委員長金日成将軍万歳！」と叫ぶ歓声は、ピョンヤンだけでなく全国各地でわきおこった。

人民は敬愛する領袖金日成将軍にたいして、その教えに忠実であることをかたく誓った。

江原道（カンウォン）の人民は将軍におくる手紙に、つぎのようにしたためた。

「われわれの偉大な指導者金日成将軍！　われわれ江原道の百万道民は将軍の教えを高くかかげ、北朝鮮臨時人民委員会の決定を忠実に実行することによって、われわれの義務をまっとうするでありましょう」

このような誓いの手紙が、ぞくぞくと将軍のもとにとどけられた。将軍のまわりに結集した民主勢力の力は、まさしく泰山をゆり動かす勢いで成長した。金日成将軍は、このような力をもった人民の領袖であった。

将軍は重大な責務を感じ、祖国と人民をひたすら勝利と栄光の道に導く決意をいっそう固めた。

金日成将軍は一九四六年三月二十三日、党の政治路線を具体化し、北朝鮮臨時人民委員会が遂行せねばならない二〇か条の政綱を発表した。

二〇か条政綱はつぎのとおりである。

一、朝鮮の政治、経済生活から、かつての日本帝国主義支配ののこりかすを、すべて徹底的にとりのぞくこと。

二、国内の反動分子や反民主的分子とは容赦なくたたかい、ファッショ的、反民主的な政党、団体および個人の活動を絶対に禁止すること。

三、全人民に、言論、出版、集会および信仰の自由を保障すること。民主的な政党、労働組合、農民組合、その他の民主的な社会団体の自由な活動条件を保障すること。

四、全朝鮮人民は、一般的で、直接的で、平等な秘密投票による選挙によって、地方のいっさいの行政機関である人民委員会を結成する義務と権利をもつこと。
五、性別、信仰および財産の有無にかかわりなく、すべての公民に、政治、経済生活における平等の権利を保障すること。
六、人格、住宅の神聖不可侵を主張し、公民の財産と個人の所有物を法的に保障すること。
七、日本帝国主義の支配当時に行使され、また、その影響をうけているいっさいの法律と裁判機関を廃止し、民主主義の原則にもとづいて人民裁判機関を選挙すべきであり、一般公民に法律上平等の権利を保障すること。
八、人民の福祉増進をはかるために、工業、農業、運輸および商業を発展させること。
九、大企業所、運輸機関、銀行、鉱山、山林を国有化すること。
一〇、個人の手工業と商業の自由をゆるし、これを奨励すること。
一一、日本人と、日本国と、売国奴の土地および、ひきつづき小作にだしている地主の土地を没収し、小作制度を撤廃して、没収したすべての土地を農民に無償で分配し、その所有とすること。灌漑関係のすべての施設を無償で没収し、国家が管理すること。
一二、生活必需品の市場価格をさだめ、投機業者および高利貸業者とたたかうこと。
一三、単一で公正な税制を制定し、累進所得税制を実施すること。
一四、労働者、事務員の八時間労働制を実施し、最低賃金を規定すること。十三歳未満の少年の労働を禁止し、十三歳から十六歳までの少年には六時間労働制を実施すること。
一五、労働者と事務員の生命保険を実施し、労働者と企業所にたいする保険制を実施すること。
一六、全般的な義務教育制を実施し、国家の経営する小、中、専門、大学を広はんに拡張すること。国家の民主

主義制度にのっとり、人民教育制度を改革すること。

一七、民族文化、科学および芸術を積極的に発展させ、劇場、図書館、ラジオ放送局および映画館の数をふやすこと。

一八、国家機関と人民経済の各部門に必要な人材を養成する特別の学校をひろく設立すること。

一九、科学と芸術に従事する人びとの活動を奨励し、かれらを援助すること。

二〇、国営病院の数をふやし、伝染病を根絶し、貧しい人びとを無料で治療すること。

二〇か条の政綱は、将軍が抗日武装闘争の炎のなかで作成した祖国光復会十大綱領を、解放された朝鮮の現実にそくしてさらに発展させた徹底的に主体的で、創造的な反帝反封建民主主義革命の輝かしい政綱であった。

この政綱をつうじて人民は、はっきりとしたたたかいの展望をさらに明確にとらえ、党員は党の政治路線をいっそう具体的に把握するようになった。

こうして二〇か条の政綱は、祖国の統一独立と民主化のための全朝鮮人民の闘争の旗じるしとなった。朝鮮人民と各政党、社会団体は、金日成将軍が作成して発表した二〇か条政綱を全面的に支持し、熱烈な支持声明をぞくぞくと発表した。

北朝鮮臨時人民委員会を創建した金日成将軍は、これを熱烈に支持する全人民を指導し、誕生まもない人民政権機関をあらゆる面で強化しながら、二〇か条政綱でしめされた課題を実現する闘争を強力におしすすめた。この闘争のなかで、北半部では人民民主主義制度が強固にうちたてられ、自由で幸福な人民の新しい生活が花ひらくようになったのである。

4　土地は農民に、工場は労働者に

党と政府の首班におされた金日成将軍は、朝鮮革命の運命を一身にになない、民主基地創設のたたかいを全面的におしすすめた。

政治、経済、文化、軍事などすべての領域で、新しい制度、新しい生活を築きあげるこのたたかいは、反帝反封建的社会経済改革を実施してこそはじめて可能であった。

金日成将軍は、政権を強化し、それを武器として、社会生活に歴史的な転換をもたらす諸般の民主改革をおこなうことを決心した。民主主義的改革をおこなってこそ、地主、資本家をはじめとする反動階級の経済的基盤をなくし、社会生活のすべての分野で植民地的封建的くびきをたち切り、日本帝国主義によって破壊された産業や農業をすみやかに復興させ、飢えと貧困にさいなまれてきた労働者、農民をはじめ全勤労者の生活を根本的に改善することができるのであった。

人民の世紀的な願望を解決し、新しい民主朝鮮建設の大道を切りひらくためにも、人民政権の社会経済的地盤をうちかため、北半部を強力な革命の基地にかえるためにも、さらにまた、これにもとづいて祖国統一のための南北朝鮮人民のたたかいをより主動的におしすすめるためにも、革命的な民主改革をおこなわなければならなかった。

金日成将軍は、これらすべての現実的な要求と革命発展の必然的課題を綿密に検討し、党と政権機関の総力をあげて、民主改革の準備を徹底的にすすめていった。

将軍は、ながい革命闘争の期間にも終始一貫守りつづけてきた主体的な立場にたって、すべての改革を自主的に、朝鮮の具体的現実にあうよう創造的におこなった。

民主改革は、農民たちの世紀的なねがいである土地問題、民族経済の基礎である産業問題、労働者階級の切実な要求である労働保護の問題、女性の社会的権利を保障するための女性解放の問題、教育、文化、司法の民主化問題など、きわめてひろい範囲におよんでいた。

将軍は、これらの諸問題のなかでも、朝鮮がたちおくれた植民地農業国であり、農民が人口の絶対多数をしめている条件を考慮して、農村において支配的であった封建的関係の清算をもっともさしせまった革命課題として提起した。

将軍はつぎのようにのべた。

「土地問題は、民主主義革命の段階で真っ先に解決しなければならないさしせまった問題であります。土地問題を解決してこそ、農村をよりどころとする反動勢力の経済的地盤をとりのぞいて、農民を封建的搾取から解放し、かれらの政治的熱意をいちじるしく高めることができ、国の全般的な政治、経済、文化生活を民主化するための社会、政治的基盤を強めることができるのであります。

また土地改革をおこなってこそ、農業生産力を封建的なくびきから解放してすみやかに発展させ、民族工業と民族経済全般の復興発展を力強くおしすすめることができるのであります。

土地問題の解決は、農民が人口の絶対多数をしめ、たちおくれた植民地農業国であったわが国においては、とくに重要な意義をもっています」

解放直後、北半部の農村では封建的な小作制度がそのままのこっていた。全農家の四パーセントにすぎない地主が総耕地面積の五二・八パーセントをしめ、人口の八〇パーセントに近い農民の絶対多数は土地のない農民か、わずかな土地しかもたない農民であった。

封建的小作制度は、圧倒的多数の農民を従来どおり地主の隷属下におき、農業生産力の発展をさまたげていた。

それのみか封建的な土地所有関係は、他の人民経済部門の発展をはばみ、全般的な社会的進歩をさまたげる大きなくびきでもあった。

反動階級である地主階級を一掃することも、農民を封建的な搾取と抑圧から解放することも、農業とともに他の人民経済部門を順調に復興、発展させることも、さらにまた、その他すべての民主革命の課題を成功裏になしとげることも、結局は土地改革を実施してこそ、はじめて可能であった。

これはとりもなおさず、北朝鮮を祖国統一の強固な民主基地にかえる歴史的偉業の道を切りひらくことでもあった。

将軍は『土地は耕す農民に』という土地綱領を作成した。

金日成将軍の土地綱領は、国の具体的な社会経済的条件と階級的相互関係はもちろん、農民の土地にたいする血のにじむようなねがいを、そのまま反映したものであった。

将軍は、土地にたいする朝鮮農民の念願についてつぎのようにのべた。

「ながいあいだ封建的搾取にさいなまれ、日本帝国主義の支配のもとで二重三重の搾取と抑圧をうけてきた朝鮮農民は、農奴とかわらないみじめな生活をおくり、貧困と飢餓のもとでやっと生きのびてきました。

農民の最大のねがいは、自分の土地をもち、自分の土地を耕すことでありました。しかし、外来侵略者が権力をにぎっていた日本帝国主義支配のもとでは、農民のこのようなねがいは実現しえなかったのであります」

将軍は、農民の境遇と気持を歴史的に深く察していたばかりでなく、かれらにかぎりない同情と愛情をいだいていた。とうてい人家とはおもえないような貧しくうす暗い農民のわらぶきの小屋は、幼いときから将軍のまぶたにやきつけられ、その胸を痛ませた。

貧しい家庭に生まれた将軍は、幼いときから農民の苦しみを体験した。ピョンヤンと満州とのあいだの千里の道

をゆききした十二歳のときと十四歳のときには、土地を追われた流浪民の悪夢にも似た惨状と、かれらのうらみにみちた話をきいていくどとなく涙ぐんだ。

はげしい抗日武装闘争をくりひろげたその時期にも、どれだけ多くの農民が異国の地をさまよい、将軍の血を燃えあがらせたことであっただろう。……援護物資を背に深い密林をかきわけて密営地までやってきた農民に会うたびに、かれらのほころびた麻服や、あかぎれだらけのごつごつした手から、救いをもとめて叫ぶ祖国の声をきくのだった。

わたしたちの耳にはいまも、一九三四年の冬、雪におおわれたあの遠い厳寒の老爺嶺の山奥の趙宅周老人の丸木小屋で、看病をうけていた将軍が出発するときにのこしたことばが、悲壮なうたのようにありありときこえてくる。

「みなさんが故郷をすててはるばるやってこられた異国の地でも、こうして日の目を見ることもできずにかくれて暮らさなければならないとは――。これはわたしたち朝鮮の若ものの責任です。けれどもかたく信じて待っていてください。わたしたち朝鮮人民が明るい祖国で楽しく暮らせる日はきっときますから……」

祖国を解放した将軍は、農民を世紀的なくびきから救いだすことによって、ついにその宿願を輝かしく実現するようになったのである。

金日成将軍は農民たちの熱望をくみとって、土地問題解決の正しい方針をさししめした。この方針は小作料の減免闘争からはじまって、日本帝国主義者とその手先の土地を没収し、これを農民にわけあたえるというものであった。

この方針は、当時の北半部農民の階級的めざめの程度と準備程度を十分に考慮したうえでさだめられたものであった。

将軍は、農民たちの土地のためのたたかいを準備するために、三・七制小作料の実施闘争を組織した。この小作

料の減免闘争は、一九四五年の秋から冬にかけて全国の農村でまきおこった。

封建的搾取と抑圧のもとでながいあいだ苦しんできた農民たちは、金日成将軍の指導のもとに悪質地主の反抗をおさえ、三・七制をたたかいとった。このたたかいの過程で、農民の政治的めざめと熱意は非常に高まった。農民はみずからの利益のためにたたかうことができるようになり、地主の搾取から解放されるべきだと悟るようになった。

土地にたいする農民の要求は、しだいに高まっていった。土地を要求する数多くの手紙が、毎日のように金日成将軍のもとにとどいた。農民たちは手紙だけでなく、直接たずねてきて土地改革の実施をもとめた。

一九四六年二月末には、北朝鮮各地で三百余名の農民代表が将軍をたずね、土地を要求する全農民の意思をつたえた。三・一運動の記念日をきっかけに、北半部各地で二百余万名の農民が鎌や鋤を手に、土地を要求するデモを断行した。

金日成将軍は多忙ななかにも、みずから各地の農村にでかけては農民とひざをまじえて話しあい、かれらの要求と農村の実情を具体的にしらべた。将軍は平安南道粛川郡下の農村だけでも、一か月以上にわたって滞在しながら、土地問題をもっとも正しく解決するための方途を研究した。

土地改革法令の発布を十余日後にひかえた一九四六年二月下旬のある日には、随員をともない、平安南道の江東郡時足面をたずねた。

その日は風が強く吹きあれ、土ぼこりのひどい日であった。

しかし金日成将軍は、大通りから遠くはなれた小さな村をえらび、そこで車をおりた。随員たちは土ぼこりをあげる強い風に背をむけてはなんどもたちどまったが、先頭にたった金日成将軍は平然として畑のなかの細道を大股で歩いていった。

一行を出迎えた村びとたちは、金日成将軍を大きなかわらぶきの家の清潔な部屋に案内しようとした。将軍は副官に、それは地主の家ではないかとたずねた。

そのとおりです、とこたえる副官のことばをきいた将軍は、苦笑をうかべながら、

「よろこんでむかえるはずのない地主の世話にはなるまい……。農民の家にいきましょう」といって、見るからに貧しげな小さなわらぶき家にはいっていった。

古びたアンペラをしいた部屋のなかはせまく、うす暗かった。

金日成将軍は、家の主人と集まってきた村びとにあいさつをしてから腰をおろし、部屋の隅におかれた素焼の器を指さしながら主人にたずねた。

「食糧が十分でないようですね……。じゃがいもの種子はたりなくないですか?……」

素焼の器には、かぼちゃとじゃがいもの煮たものがいれてあった。

将軍は主人の返事をまたずにことばをつづけた。

「……これからは一つ、楽な暮らしをしてみましょう。いままでは他人の土地を耕し、苦労してつくった穀物も地主に奪われ、貧乏暮らしをしなければならなかったが、これからは自分の土地をもって、しあわせに暮らすのです」

国中が領袖とあおぐお方をみすぼらしい自分の家にむかえたその農民は、涙にうるんだ目をしばたたくばかりであった。

将軍は農民たちを見わたしながら、話をつづけた。

「国が、地主の土地をみなさんにわけあたえるようにしましょう! もともと土地は、耕す農民のものです。ところが、いままでは世のなかがさかさまになっていました。一年中、汗水流して働く農民には土地がなく、なにも

しない地主には多くの土地がある……。このようなさかさまになった世のなかをたださねばなりません」

農民たちとの語らいは、ながくつづいた。

将軍は、ふつう農民一人がどれだけの土地を耕作しうるか、またどれだけの収穫がえられるかをきき、さらに地主の土地を、どの田が地味がゆたかで、どの田がそうでないかを区別できるかとたずねた。

かれらはひろい地主の土地の耕地別のよしあしを、まるで手にとるようによく知っていた。土地について語るときの農民たちの顔には、かつて生きるすべをうしない、あてもなく流浪の旅についた人びとが故郷をふりかえるときと同じような、せつなさとなつかしさがこもっていた。ひろい地主の土地をこれほどまでに知りつくしているということは、どれだけかれらが土地のために苦しめられ、またどれだけ土地をほしがっているかを物語っているのだ。

金日成将軍は農民たちの心を察してか、しばらく深く考えこんでいたが、かたわらの随員に、土地改革では土地についてもっともくわしい農民自身が中心にならなければならないと語った。

このように将軍は、農村での階級的な力関係と土地所有関係、土地にたいする農民の世紀的なねがいなどの諸条件を十分に考慮したうえで、土地没収の対象とすべき地主階層と小作制撤廃の方法をはじめ、農民の真の利益と社会発展の要求とを正しく反映した土地改革の諸原則を確定した。

金日成将軍がみずから作成した土地改革法令は、一九四六年三月四日、北朝鮮共産党中央組織委員会第五回拡大執行委員会の審議をへて、同年三月五日、北朝鮮臨時人民委員会の法令として発布された。土地改革法令には、つぎのような原則が規定された。すなわち、

一、日本人および民族反逆者の全所有地、ひきつづき小作にだされている土地、五町歩（約五ヘクタール）以上の朝鮮人地主および宗教団体所有の土地を没収対象とさだめ、

二、没収した土地をわけあたえるにあたっては、雇用農民、土地のない農民、わずかな土地しかもたない農民の

永久所有地として分与するが、農家の家族数と労力者数にしたがって均等に分配する原則でおこない、

三、土地を没収された地主から借りた雇用農民や農民たちのすべての債務をとり消し、地主の建物、畜力、農機具および施設などの財産を没収して、その大部分を雇用農民や土地のなかった農民に分けあたえ、

四、土地の没収および分与はすべて無料でおこない、

五、分与された土地を売買したり、小作にだしたり、抵当にいれることを禁じ、

六、農民に分与することが不適当である果樹園、灌漑施設、山林および一部の土地は国家管理に移すこと、などであった。

これらの原則がしめしているように、土地改革法令はもっとも徹底的なものであった。

この法令は没収対象をさだめるうえで、その規模いかんをとわず、封建的搾取の手段となっていたすべての土地の没収を規定した。これは、封建的土地所有関係と小作制度を徹底的に清算するためであった。

この法令はまた、土地の没収と分配方法において、無償没収、無償分配の原則をさだめることにより、地主階級の経済的基盤をのこらずとりのぞき、徹底的に農民の利益を守った。

さらにこの法令は、分与地を売買したり、抵当にいれたり、小作にだしたりすることを禁止し、これによって土地の再集中や小作制の復活をふせぐようにした。

このように、金日成将軍のさだめた土地改革法令は、当面の土地改革を徹底的に実施したばかりでなく、二度と地主制度が復活できないようにし、将来の農業協同化までを見とおした遠大で、革命的な法令であった。

土地改革法令の発布は、全朝鮮人民を熱狂させた。各地の農民は大会をひらいて、土地改革法令を熱烈に支持した。土地改革法令が発布された翌日、北半部のすべての民主主義的政党、社会団体は、土地改革法令を全面的に支持し、その実行にすべての人民委員会や農民委員会が積極的に参加することを訴えた共同声明書を発表した。

金日成将軍は高まった革命的な熱意を、土地改革の成果的な実現をめざすたたかいへと導いた。

金日成将軍は、土地改革を短期間で徹底的に完遂するため、労働者階級の支援を強めながら、雇農および貧農にしっかりと依拠し、中農とかたく同盟して富農を孤立させ、地主のあらゆる反抗を徹底的にうちくだく階級政策を明示し、これにもとづいてぼう大な組織活動と大衆的政治活動をくりひろげた。

金日成将軍はまず、共産党が土地改革の成果的な遂行に全力をつくすように指導した。こうして中央から下部末端にいたる全党が動員されて人民委員会の活動をたすけ、党員たちは大衆のなかで中核的な役割をはたした。

将軍はまた、共産党が民主的政党、社会団体との統一戦線を強化して、それを動かし、すべてをこのたたかいに積極的に参加させるようにした。

これとともに、貧農と雇農が農村委員会を組織し、かれらが土地改革の実現に主動的な役割をはたし、その執行者になるよう指導した。これは農民たちをじっさいの闘争過程で、政治的、階級的にきたえると同時に、土地改革を徹底的におこなわなければならないとする金日成将軍の高い志をしめすものであった。

農村委員会は、共産党の指導のもとに広はんな農民大衆をたちあがらせ、土地改革を積極的にすすめていった。

金日成将軍は農民の階級的自覚を高め、地主をはじめあらゆる反動分子のデマと悪宣伝をうちくだくために、各政党や社会団体の幹部、または宣伝員を派遣し、農民大衆のあいだで土地改革法令の解説、宣伝活動をくりひろげた。

また地主の反抗を粉砕し、かれらの反動的影響が、十分にめざめていない農民におよぶことをふせぐために、悪質地主を移住させる措置をとった。

土地没収の対象となった地主階級は死もの狂いで抵抗した。南朝鮮のアメリカ帝国主義とその手先どもは、北半部における政治的基盤が崩壊するや、スパイ、テロ分子、破壊分子などをおくりこみ、かれらが地主と共謀して策

動するようしむけた。平安北道慈城（ジァソン）郡では地主が郡農民同盟委員長の地位を占め、土地改革法令の実施を破綻させようとしたし、黄海（ファンヘ）道安岳（アンアク）郡では、地主と親日分子が小銃と機関銃をうめて反抗の機会をうかがっていた。江原道の平康（ピョンガン）郡ではテロ分子六名が逮捕され、永平（ヨンピョン）では毒薬をもった日本人と民族反逆分子二人がつかまった。

金日成将軍は、革命の指導階級である労働者階級を農村におくりこんだ。これは労働者階級が反動とのたたかいで農民をたすけ、かれらに強い自信をあたえ、かれらの積極性を発揮させるという、たんにそれだけのためではなかった。

将軍は、まさにこの過程をつうじて労農同盟を強化し、その不敗の威力を目のあたりにしめして人民を教育しようとしたのであった。

金日成将軍は、北朝鮮労働組合総聯盟の傘下にあるピョンヤンの鉱山労組、鉄道労組、金属労組、化学労組などの各労組から、千百五十名のもっともすぐれた労働者をえらんで平安南道の各郡におくりこんだ。そしてかれらを農民たちと協力させ、さらにすべての地方においても土地改革のたたかいで労働者が積極的に農民を援助できるよう措置をとった。

農村での土地革命は勝利の一路をつきすすんだ。数世紀にわたって農民を苦しめ、朝鮮の社会の発展をさまたげてきた封建制度を一掃する土地革命を円滑に遂行するために、金日成将軍は一身をかえりみず、文字どおり不眠不休の日々をおくった。

土地改革の過程では、一部に左右の日和見的な偏向があらわれた。

一部の地方では五町歩以下の土地所有者までも地主と規定する誤りをおかし、親日派を規定するうえでも原則を無視して混乱をまねいたり、個人的な復讐心にかられて規定をおかすようなこともあった。また一部の農民のあいだでは地方主義や門閥主義的傾向からぬけきれず、地主に同情し、かれらを擁護するようなことも生じた。

金日成将軍は、党組織が農民のなかにはいって、かれらをめざめさせ、はげまし、たたかいにおける偏向をただすように指導しながら、みずから平安南道の大同郡、江西郡、中和郡など多くの農村にはいっていった。

ある日、将軍は土地改革の実施状況を見るために平安南道の三石地区の農村におもむいた。

将軍はそこの農村委員会をおとずれ、農家をたずねて農民とも話しあった。将軍をむかえたこの地方の農民たちは、かぎりないよろこびにわいた。

金日成将軍は、村人たちにつぎのように語った。

「みなさんが土地をもらってよろこんでいるのを見ると、わたしもうれしくてなりません。抗日闘士たちが血を流してとりもどしたこの土地は、永久に土地を耕す農民のものとなったのです。この土地をいつまでも守ってください。……」

将軍は、この村にある大地主の家にいってみた。地主はすでにソウルに逃げたあとだった。家のなかには、きのうまでの作男や雇い人や下男だけが数十名のこっていた。

将軍が正門からはいろうとすると、かれらは家のなかから大いそぎででてきて両手を地面について土下座をした。これを見て困惑した将軍は、いそいでかれらの手をとっておこしながら、すでに国の主人となり土地のあるじとなった農民が、こんなことをしてはいけないとさとした。

そして、年老いた朴長班老人をともなって部屋にあがった将軍は、かつての悲惨な生活をそのまま物語る亀の甲のようなひびわれた老人の手をなでながら、こう語った。

「わたしの家にもあなたと同じ年輩の祖父がいるのですが……、なんだか祖父といっしょに自分の家にすわっているような気がしてなりません」

将軍は部屋のなかや庭にいる農民を見わたしながら、土地改革についてわからないことがあったらきいてくれる

ようにといった。すると部屋の外から、作男だった農民が恥かしそうに小さな声で、「この土地、ずっとおれたち農民のものなんですか？」とたずねた。そばにいた農民がかれのわき腹をつつきながら、ぶしつけにそんなことをうかがってはいけないととがめた。だが、それは余計なとがめであった。

この素朴な質問に金日成将軍は微笑をうかべ、つぎのようにこたえた。

「この土地をとりもどすために、抗日闘士たちは多くの血を流し、食べるものものろくに食べず、着るものものろくに着ずに、白頭山の密林のなかで十五年ものあいだたたかったのです。

苦しいたたかいをへてかちとったこの土地を、だれにもわたすことはできません」

もう一人の農民がたずねた。

「いざ土地をもらってみると、牛も種子も肥料も、なに一つないことが心配でなりませんが……」

将軍は、国が種子や肥料や農機具などをすべて保障するから、心配せずに仕事にはげむようにといいながら、さしあたっては、耕牛を共同で使用する班のようなものをつくって仕事をした方がいいと教えた。

このとき大きなふろしき包みをかかえて、正門まえではいろうかはいるまいかとためらっている主婦の姿が目についた。

将軍は、彼女をなかに招いた。

その農婦は将軍のまえでていねいにあいさつをすると、もってきたふろしき包みをひらきはじめた。包みのなかからは見るからにおいしそうな、まだ湯気のたつ蒸したじゃがいもがでてきた。畑仕事の苦労と農村のおもむきをただよわせたそのじゃがいもを見て、いあわせた人たちはおもわずほほえみをうかべた。

将軍は、「朝鮮のじゃがいもはまた格別な味です。……わたしたちは山のなかでたたかっているときに、祖国のじゃがいもを非常になつかしんだものです」

といいながら、みずからじゃがいもの皮をむき、かたわらの一番年長の朴長班老人にすすめた。それから集まっていた農民たち一人ひとりにもすすめ、最後に自分も一つほおばった。

だが、このとき劇的なことがおこった。

最初にじゃがいもをもらった朴長班老人は、それを両手でおしいただくようにしたまま白髪の頭を深くたれてすすり泣いていたが、突然、将軍の胸に顔をうずめ、声をあげて泣きだしてしまったのだ。

将軍のあたたかいことばと、なごやかで家庭的なふんいきに感動しただけではなかった。それまでの生涯を奴隷のようにこきつかわれ、牛馬のように虐待されつづけてきたかれは、いまはじめて人間らしいあつかいをうけたのだった。それも敬愛する偉大な領袖金日成将軍から——。

みじめなすぎ去った生涯において、笑うことすら忘れてしまった朴長班老人は、その生涯をつうじてのもっともしあわせなこの瞬間でさえ、号泣こそすれ笑うことはできなかったのだ。いあわせた人びとも、ただうなだれて目がしらをおさえるばかりであった。

将軍の目にも涙がやどっていた。

この光景は、渾然と一つにとけあった領袖と人民の心が、すぎ去った暗い歳月を永遠に葬むり、明るい新生活をいだいて強くはげしく波うつ、そうした劇的な瞬間であった。

金日成将軍は数十の間かずをもつ地主の邸宅を見てまわったのち、そこにある一切の什器を、きのうまで奴隷や作男や小作人の暮らしをしいられてきた人びとに分けあたえるようにといった。そしてみずから筆をとって、『朴長班』としたためた表札をこの家の門柱にとりつけた。

将軍は、地主の所有であったもっとも肥えた土地を、その家で奴隷として苦しんできた人たちにわけあたえるために、野にでてみずから標識の杭をうち、そこにかれらの名前を書きこんだ。

それがすんでからはじめて、将軍はこの村の人びとに別れをつげたのであった。
その過去がどんなに不幸であったにしても、このような領袖をみずからの指導者にもつ朝鮮人民は、過去の不幸をおぎなってあまりある大きなしあわせに恵まれているのだ。
その夜、朴長班老人夫婦は自分の表札がかかっている門柱をいだいて一晩中泣いた。村の人たちは、朴老人が幾晩もつづけて田にでては、将軍がたててくれた杭をなでているのを見た。
朴老人は会う人ごとに口ぐせのようにいった。
「この世に天地ができたときからいままで、金日成将軍さまのようなお方がほかにいただろうか！」
このように金日成将軍は、現地で土地改革を指導しながら農民たちに大きな力をあたえたのであった。
金日成将軍の賢明な方針と指導によって、土地改革はわずか二十日というきわめてみじかい期間に、徹底的に、そして成功裏に終わった。
将軍は、このみじかいあいだに、数千年ものあいだ朝鮮の農民の生活を苦しめてきた封建的土地所有関係と地主制度を一挙に廃絶し、農民たちの世紀的なのぞみをかなえてやったのであった。これは世界いずれの国にもその例を見ることができない大きな出来事であった。
土地改革の結果、百万町歩以上の土地が没収され、七十余万の農家に無償で分配された。
こうして土地を耕す農民が、歴史上はじめて真の土地の主人となったのである。
土地の主人になった農民たちには、農業を発展させ、かれら自身の物質的、文化的生活水準を改善する新しい道がひらかれた。工業と農業のむすびつきを強め、全般的な人民経済の発展をうながすことができるようになった。
土地改革の結果、もっとも反動的な階級である地主階級が完全に消滅し、封建的土地所有と密接にむすびついていた富農の力もいちじるしく弱められた。

このように土地改革が徹底的におこなわれたことは、将来の農業協同化を順調におしすすめうる前提にもなった。土地改革の結果、農民は封建的搾取と圧迫から解放されたばかりでなく、その過程で政治思想的にも急速にめざめ、労働者階級のもっとも力強い同盟者となった。

金日成将軍は、土地改革が正しく徹底的に遂行されるよう指導したばかりでなく、それを独創的に解決することによって、反帝反封建民主主義革命段階で重要な問題として提起される土地問題解決の模範を創造した。

将軍は、革命を達成したほかの国のような土地国有化をおこなわず、農民が土地を直接的に完全に所有するという原則のもとに土地改革を実施した。

これは、わが国農村の発展の特殊性と、先祖代々から自分の土地を手にいれることを夢見てきた貧しい農民たちの切実なねがいを深く考慮したものであった。将軍は、土地にたいするねがいがかなえられれば、農民たちの熱意がこのうえなく高まるであろうことを見とおしていた。こうして土地を農民に分与するという原則により、徹底的な土地改革が実施されたのである。

そして、農民たちのねがいを完全にかなえたばかりでなく、地主を一掃し、富農を全面的に弱めることによって社会主義的農業協同化を容易にするしっかりとした基礎を同時につくりだした。

このように反帝反封建民主主義革命の段階で、革命の当面の要求と将来の利益にまでむすびつけた独創的な土地問題の解決は、世界にその前例がなかった。

金日成将軍の指導のもとに実施された土地改革は、じつに世界でもっとも進歩的で模範的なものであった。

将軍は土地改革を、広はんな農民大衆のなかに党組織がしっかりと根をおろし、農村に党のゆるぎない地盤をかためる決定的な契機とした。

すなわち土地改革を実施する過程で、貧農と雇農のなかからもっとも優秀な人びとをえらんで党にうけいれ、党

の農村陣地をしっかりと築き、党の階級的成分を改善して党をいっそう拡大し強化した。

将軍のしめした創造的な方針にもとづく土地改革の過程で、平安北道の党組織では三千二百七十二名の新入党員をうけいれたのをはじめ、総計一万名近い新入党員が党の隊列にくわわり、党の農村陣地はいちだんと強化された。

じつに土地改革は、朝鮮の歴史上における偉大な事変であったばかりでなく、世界の被圧迫人民の解放闘争においても大きな意義をもつ出来事であった。

金日成将軍は、土地改革の国際的な意義についてつぎのようにのべた。

「土地改革の結果は、国際的に大きな意義をもっています。アジアの国々のうちではじめて実施された北朝鮮の土地改革は、植民地的、封建的圧迫と搾取に苦しんでいるアジア各国の人民と農民を強くはげまし、かれらの進路を照らす灯台となりました」

土地改革の勝利は全国をわきたたせた。土地の主人になった農民は大きなよろこびにつつまれた。人びとは集まりさえすれば踊りに興じた。どの村も笑い声と、はずんだ話し声にみちあふれていた。

農民たちはこぞって、土地を分けてくれた敬愛する領袖金日成将軍に心をはせた。農民たちは各地で土地改革完遂慶祝大会をひらいて金日成将軍に感謝をささげ、その指導のもとに新しい民主朝鮮建設をめざしてたたかう炎のような決意をかためた。

咸鏡(ハムギョン)北道穏城(オンソン)郡美浦(ミポ)面の人たちは、つぎのような感謝文を金日成将軍におくった。

「金日成将軍さま、

満州の山野で日本帝国主義の標的となっていた将軍さまはわが民族の命であり、こんにちの民族解放は、決して偶然なことではありませんでした。……

日本帝国主義の武装勢力は消滅しましたが、三千里のうるわしいわが祖国には、まだこれとむすびついた多くの

問題がのこされています。こうしたときに将軍さまは疲労をいやすいとまもなく、北朝鮮臨時人民委員会の責任者としてこのたびの土地改革令を発布し、ながいあいだ苦しみのなかで渇望してやまなかったわたしたちの土地問題を解決されました。
わたしたちは将軍さまの英雄的法案に感謝をささげ、満足の意を表します。……命令があれば遠慮なくあたえてください。わたしたちは必ずそれを実行してみせます……」
全国各地からおくられてくる農民たちの、こうした素朴な心に接した金日成将軍のよろこびは大きかった。
将軍は、こうして気勢の高まった農民たちを土地改革の勝利をかためる増産闘争へと導いていった。
土地改革の勝利をうたうかのように春がやってきた。それは解放後はじめてむかえる春であり、地主階級が消滅され、ひたいに汗する農民が土地のあるじとなったこの国に、はじめておとずれた春であった。
農民たちの胸は、しあわせにみちていた。
金日成将軍はかれらによびかけた。
「解放朝鮮のはじめての春を増産でむかえ、わずかの土地もあそばせないようにしよう！」
このよびかけにこたえて、農民たちは春耕と種まきの突撃運動と灌漑、開墾事業にたちあがった。
金日成将軍は土地改革の成果をかためる措置として、単一農業現物税制（収穫物の二五パーセント）を実施した。
この農業現物税制の実施によって、農民たちは苛酷な雑税から永遠に解放された。
土地問題を解決した金日成将軍は、ひきつづいて諸般の民主改革を実施し、勤労者たちの民主主義的自由と権利を全面的に拡大し、反帝反封建民主主義革命の課題を全般的に実現するたたかいをくりひろげた。
住民の絶対多数を占める農民を封建的圧迫と搾取から解放した金日成将軍には、産業を植民地的隷属から解放し、労働者階級を資本主義的搾取と抑圧から解放する重要な問題がのこされていた。

解放前のわが国の産業は、その大部分が日本帝国主義者の手中ににぎられ、日本経済の完全な隷属物であったために、民族経済の自立的な発展は考えることすらできなかった。

こうした実情のもとで、帝国主義者と国内反動の政治、経済的基盤をなくし、国の重要生産手段を民族経済の自主的発展と全人民の福祉に利用し、社会主義経済の土台を築いてゆるぎない自主独立国家を建設するためには、日本帝国主義と隷属資本家ににぎられていた重要産業を国有化しなければならなかった。

北半部での産業の国有化は、はげしいたたかいのなかですすめられた。

日本帝国主義者は逃亡に先だって、大部分の産業施設を手あたりしだい破壊した。

しかし、朝鮮の労働者は多くの工場、企業所を日本帝国主義者の破壊行為から守りぬき、破壊された工場、企業所を復旧し、機械を動かした。

金日成将軍は、いそがしいなかを各地の工場や企業所をたずねては、労働者が産業の主人公にふさわしく増産闘争を活発にくりひろげるよう指導した。

一九四六年のはじめにはピョンヤン鉄道工場（現在のピョンヤン電気機関車工場）をおとずれ、労働者たちに、解放された朝鮮の労働者階級がどのように生活し、なにをしなければならないかを教えた。

「……解放をむかえたこんにち、わが労働者階級は国の主人となった。

あなたたちと同じ労働者は、これまで三十六年ものあいだ日本帝国主義の圧迫と搾取にしいたげられてきたが、解放されたいまでは、あなたたちが国の生活を築いていく主人公なのだ。

いまでは、この工場はわれわれの工場であり、あなたたちの工場である。

解放されたわれわれ朝鮮人民の手中にのこされたものはなにか。いまはなにもない。ただひたすらわれわれが主人となって、国を建設していかなければならないのだ」

つづいて金日成将軍は、日本帝国主義がわれわれの工場と鉱山をことごとく破壊して逃亡したために、われわれの前途には多くの困難があるが、それはたやすく克服できるものであると強調し、抗日パルチザンたちが発揮した革命精神を模範として、ねばり強くたたかって困難をのりこえ、みじかい期間内に幸福で、みちたりた生活を築かなければならないと教えた。

一九四六年六月一日——、この日は解放をむかえた黄海(ファンヘ)製鉄所の労働者が、日本帝国主義者が破壊していった一号平炉を復旧し、はじめての溶鉄を流す日であった。

この日、将軍はこの製鉄所をたずね、

「さあ、見たまえ。われわれの労働者が溶鉄をひきだしている。日本帝国主義者は十年かかっても復旧できないといったが、われわれの労働者はわずか一年たらずでも、こうして溶鉄を流しているではないか。これは大きな勝利です！　これは新しい民主国家の建設でわが労働者のかちとった最初の勝利であり、わが国の金属工業の最初の出発です」

とたたえ、新しい祖国建設のためにさらに多くの仕事をしなければならないと強調した。

金日成将軍の強力な指導と労働者階級のたたかいによって、北半部のすべての産業施設は短期間内に復旧され、正常に活動しはじめた。

のこされた問題は、日本帝国主義から奪いかえした産業施設を法的に朝鮮人民の所有にかえることであった。

金日成将軍は、「産業、交通、運輸、逓信、銀行などの国有化にかんする法令」を発布（一九四六年八月十日）した。この法令はつぎのように指摘している。

「日本国と、日本人の社人および法人などの所有、または朝鮮人民の反逆者の所有となっているすべての企業所、鉱山、発電所、鉄道運輸、逓信、銀行、商業および文化機関などはすべて無償で没収し、これを朝鮮人民の所有、

水豊発電所において現地指導をおこなう金日成将軍

すなわち国有化する」

金日成将軍の指導のもとに、産業国有化は一気に、成功裏に完遂された。重要産業が国有化された結果、一千余の産業施設が全人民的所有となった。こうして人民経済の指導的な命脈が、国家の管理のもとにおかれるようになったのである。

北半部でおこなわれた産業国有化は、この課題を明らかにした祖国光復会の十大綱領を、解放された祖国の地で輝かしく実現したものであり、これは民主主義的自主独立国家の建設の基礎をととのえ、人民の福祉を向上させるうえで、きわめて大きな意義をもっていた。

重要産業が国有化されたことによって、北半部では、日本帝国主義者と親日派の経済的基盤が完全に消滅した。そして生産手段が個人の手に集中し、隷属と搾取などあらゆる社会的不幸を生みだしていた根源

が、産業の分野で基本的にとりのぞかれた。

重要産業が国有化された結果、あらゆる社会的不幸を生んだ根源が産業の分野から基本的になくなり、社会主義的生産関係が生まれ、人民経済において国営経済が指導的地位をしめるようになり、民族経済を計画的に発展させる基礎がつくられた。北半部の労働者階級は生産手段をみずからの手にしっかりとにぎり、かれら自身と人民のために労働することができるようになり、その指導的地位をいっそう強めることができた。

金日成将軍は重要産業の国有化を実施するにあたり、決して資本主義的所有一般の一掃を断行したのではなかった。産業国有化は反帝反封建的な民主主義革命の任務の一環として実施され、没収の対象は日本帝国主義と隷属資本家の所有にかぎられた。民族資本家の重要企業は法的に認められ、人民政権と民主改革を支持し、人民経済の復興発展につくす中小商工業者の活動にたいしては、国家的指導にしたがわせるという原則でこれを奨励する政策がとられた。

金日成将軍は、労働者階級の社会的境遇を根本的に改善するために、もっとも進歩的な労働法令（一九四六年六月二十四日）を制定した。

将軍は労働法令の目的について、つぎのようにのべている。

「……労働法令の目的は、労働者、事務員の労働条件を根本的に改善し、物質的福祉を向上させ、産業における帝国主義的搾取の残滓を根絶し、労働者階級の民主主義的解放を実現することにあります」

労働法令によって、労働者、事務員には八時間労働制が実施され、男女労働者の同一賃金制がさだめられ、少年の労働は禁止され、労働者、事務員にたいする有給休暇制と健康保護対策がきめられた。

将軍が発布した労働法令は、朝鮮歴史においてばかりでなく、世界の植民地、半植民地民族の歴史においてもはじめての、もっとも民主主義的な労働法令であった。それは、じつに新しい民主祖国創建の主力部隊である労働者

階級の切実な利益を反映した重要な法令であり、朝鮮の民主主義的発展の条件をととのえたものであった。
労働法令が実施された結果、労働者階級にたいする搾取と隷属関係は永久になくなり、かれらの政治的、労力的熱意と生活水準は急速に高まっていった。
すでに抗日武装闘争の時期から、女性解放の問題を革命で解決すべき根本問題の一つとみなし、祖国光復会十大綱領で明確な方針をしめした金日成将軍は、男女平等権法令を発布（一九四六年七月三十日）し、朝鮮の女性を植民地的、封建的くびきから完全に解放し、女性に政治的自由と権利を行使する輝かしい道と、新しい社会建設に積極的に参加できるひろい道をひらいてやった。
将軍はこのほかにも、司法および教育の民主化をすみやかにおしすすめ、新しい祖国建設と人民経済の復興発展に必要な民族幹部を養成するために、いくつかの措置をとった。
金日成将軍のすぐれた指導のもとに、北半部での反帝反封建民主主義革命の任務はみじかい期間に勝利した。世界の人民は、この偉大な勝利に驚嘆せざるをえなかった。
植民地支配から解放されてわずか一年たらずのあいだに、社会経済的改革を円滑に、徹底的に遂行したことは類例のないことであった。
土地改革をはじめとする反帝反封建民主主義革命の課題が偉大な勝利をおさめたことは、じつに朝鮮の歴史における偉大な変革であった。
この勝利は全面的に、朝鮮人民の敬愛する領袖である金日成将軍の賢明な指導とすぐれた展開力によってもたらされたものである。
北半部には人民民主主義制度が確立され、祖国の統一と独立の物質的保障である強力な革命的民主基地が築かれた。そして労働者、農民の階級的めざめと意識水準が高まり、すべての勤労人民の政治的統一が強まり、広はんな

人民大衆が党のまわりにかたく結集するようになった。民主改革が実施された結果、北半部では社会主義革命の段階に移行する条件がととのった。

北半部で実施された諸般の民主改革は世界ではじめての、もっとも徹底的におこなわれた進歩的な民主改革であり、じつに世界的な模範であった。

それは、民族的独立と解放のためにたたかうアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命闘争を鼓舞するたたかいの旗じるしとなり、理論的、実践的にかれらに闘争綱領を明示したものであった。

民主的改革の輝かしい成果は、南半部の人民に大きな革命的影響をあたえ、アメリカ帝国主義者と地主、買弁資本家、反動的官僚に反対するかれらの闘争を力強くはげました。民主改革は南半部人民の闘争の旗じるしとなり、希望の灯台となった。

南半部の人民は、金日成将軍の指導のもとに北半部の人民がなしとげた革命的成果にかぎりなくはげまされ、アメリカ帝国主義の植民地隷属化政策に反対して決然とたちあがった。かれらは祖国の自主独立を熱烈に希望し、北半部と同じように南朝鮮でも民主改革を実施することを要求し、不屈のたたかいをくりひろげた。

5　党を強大な大衆的政党へ

黄金時代へとまっしぐらにすすむ革命の日々は、党がいっそう洗練され、発展する誇らしく栄光にみちた日々でもあった。

金日成将軍の指導のもとに党は革命を正しく導き、人民にかぎりなく忠実であったがゆえに、全人民の一致した支持と信頼をえ、人民の胸のなかでもっとも貴いものとしての地位を占めた。

党は民主改革を実施する過程で人民から全国的な支持と信任をうけ、広はんな大衆をそのまわりにいっそうかたく結集させ、民主主義民族統一戦線と民主朝鮮の建設において、その指導的役割をいちだんと高めた。

もし偉大な領袖金日成将軍と、将軍の創建した党がなかったならば、人民に輝かしい勝利の前途をさししめすことはもちろん、北半部における人民政権の樹立も、偉大な民主改革の提起とその勝利も不可能であっただろう。

金日成将軍と、将軍が創建して導く党――、これは全朝鮮人民の脳髄であり、心臓であり、知恵であり、良心であった。

党は民主主義革命を遂行するたたかいのなかで鍛練され、育成された労働者や農民を入党させることによって、創建後わずか十か月間に、北朝鮮だけでも二十七万余名の党員を擁するにいたった。

そのうちの絶対多数は労働者と貧農であった。北半部のすべての地方と主要な工場、企業所には党組織がつくられ、一万二千余の細胞が活動するようになった。

党は量的な面で成長したばかりでなく、質的にもきわめて強固なものとなった。

金日成将軍の思想によって組織思想的に統一され、民主主義中央集権制の原則にもとづく指導体系と厳格な党的規律が確立された。

党は反帝反封建民主主義革命の過程で貴重な経験をつみ、党員もまた、この過程をつうじて革命的にきたえられた。

これは創建いらい、党建設の分野でなしとげられた大きな勝利であり、朝鮮人民がかちとった輝かしい政治的勝利であった。

しかし、たゆみなき前進と闘争によって革命を全速力で発展させることを信条とする金日成将軍は、党建設でおさめたこれらすべての成果も、これから先、党がいっそう急速に強化発展していく基盤にすぎないと考えた。

金日成将軍は、党をいっそう強大な大衆的政党として発展させる構想をたてた。党を大衆的政党としてしっかり組織することは、マルクス・レーニン主義党発展の合法則的な要求である。だが第二次大戦後、どの国のマルクス・レーニン主義党もこの問題を円滑に解決してはいなかった。

しかしこの問題もまた、金日成将軍によってはじめて独創的に解決された。

当面の政治情勢と革命発展の要求をするどく見とおした金日成将軍は、大衆的政党の建設を朝鮮革命の勝敗を左右する根本的な問題とみなした。

当時の情勢は、北半部では革命的な民主基地がしっかりと築かれ、祖国の自主独立のための全朝鮮人民の闘争が強化されていたのにたいし、南半部ではアメリカ帝国主義の植民地隷属化政策がますます露骨化し、民主勢力を抹殺し、分裂をたくらむかれらの策動が激化していた。

アメリカ帝国主義侵略者は、いわゆる「精版社偽造紙幣事件」（南朝鮮のかいらい警察が共産党の本部をおそったところ、そのビルの地下にある精版社という機関紙印刷所から「偽造紙幣」の銅版が見つかったという事件）なるものをでっちあげて共産党を弾圧し、南半部で発行されていた共産党機関紙の発行を禁止した。

また共産党員と、すべての民主主義的政党や社会団体の幹部にテロをくわえ、かれらを手あたりしだいに検挙した。

アメリカ帝国主義とその手先どもは、民主勢力にたいする暴圧を強める一方、欺瞞的な「左右合作」の看板をかかげて民主勢力を分裂させ、動揺する中間政党を反動勢力にひきこもうと策動した。それればかりでなく、無数の似非（えせ）「政党」をつくりあげ、勤労大衆までも分裂させようとたくらんだ。そしてその余波は、北半部にまでおよんだ。

こうした事態は、革命発展の要求にかなうよう、しかも敵の分裂策動に対処して主動的に民主勢力——とくに広

はんな勤労大衆の統一と団結の強化を、さしせまった問題として提起した。
金日成将軍は、この問題を解決してこそ北半部における民主改革の成果をうちかため、革命をひきつづき発展させることができ、社会主義をめざすたたかいで勝利することができると考えた。そして南朝鮮でも、敵の弾圧をうちやぶって党活動の合法性を保ち、アメリカ帝国主義に反対する大衆闘争を発展させることができると考えた。
しかし勤労大衆は南北をとわず、各派の政党によって分散されたままであった。
北朝鮮には農民と勤労インテリをもうらしている新民党があり、南朝鮮にもこれと似たような人民党と新民党があった。
こうした状況のもとでは、共産党がこれらの党の行動の統一を強める活動をどんなにうまくおこなったにしても、異なった党の指導をうける勤労者たちのあいだに生ずる一定のすきまを完全にふさぐことはできなかった。
北朝鮮では、これを利用して崔昌益（チュエチャンイク）らの分派分子が新民党に依拠して分派的地盤をつくることに汲々とし、労働者階級のなかにまで、その「党勢」をひろげようとたくらんだ。
また南朝鮮でも、共産党、人民党、新民党内での朴憲永一味、「M・L派」分子、その他の分派分子らの分裂策動が露骨をきわめた。
これらの事実は、アメリカ帝国主義者と国内反動による民主勢力への分裂策動、とくに勤労大衆の分裂をもくろむ策動に有利な条件をつくり、小ブルジョアジーとインテリの一部が反動どもに利用される危険性を生んだ。
金日成将軍は、こうした事態のもとで、党とほかの勤労者党がいつまでも分かれていることは革命発展の全般的利益にもとるものであり、このままでは革命の任務を成果的になしとげることができないと判断した。
ここで金日成将軍は、共産党とほかの勤労者党を合党し、新たに労働党を創建することにかんする大胆な方針を提示したのである。

将軍は、合党の必要性についてつぎのようにのべた。

「敵との決戦で勤労大衆が分裂することは、もっとも大きな危険であります。われわれの闘争任務をりっぱにやりとげるためには勤労大衆がいっそうかたく団結し、統一しなければなりません。朝鮮人民のまえに提起されている偉大な民主主義的課題をなしとげるうえで、もっとも決定的なことは勤労大衆の統一的な参謀部、勤労人民の唯一の戦闘的な前衛部隊をしっかりづくりあげることです。この問題は、ただ労働党を創建することによってのみ解決することができます」

金日成将軍は、大衆的な党を創建する路線をさししめしながら、たとえ党創建の歴史がみじかくても、すぐれた共産主義的中核が育成されているために、非プロレタリア的な人びとが入党してきても、これを革命家としてきたえることができると科学的に判断した。

将軍は、民主主義革命をつうじて変化した勤労者たちの境遇についても具体的に考察した。

北半部では人民政権が樹立され、民主改革が実施されたために労働者、農民をはじめ勤労インテリの境遇が根本的にかわり、かれらのあいだの利害関係もますます密接にむすびつくようになっていた。これとともに、かれらがたがいに同盟できる政治経済的基礎がつくられ、すべての社会生活で労働者階級の指導的役割が高まった。

将軍は、こうした社会階級的関係が共産党と新民党の合党を切実にもとめているばかりでなく、それが十分に可能であるとみなした。

さらに、共産党が当面の任務として提起した最低綱領と新民党の綱領が基本的に一致していたことも、両者が一つの党となりうる十分な条件であると判断した。

金日成将軍は、南半部においても当面する革命任務の共通性にもとづき、共産党、人民党、新民党が合党して勤労大衆をしっかりと統一させることができると確信した。

金日成将軍は労働党創建の方針をしめすと同時に、合党の基本原則についても明確に規定した。将軍は、共産党と他の勤労者党との合党が単純な機械的合党ではなく、原則的立場での合党であることを明らかにし、合党後の労働党の根本的な性格は共産党と同じく、マルクス・レーニン主義の党でなければならないことを明らかにした。

したがって、労働党の創建は抗日武装闘争の革命伝統と共産党の革命の偉業をうけつぎ、マルクス・レーニン主義の厳格な革命的原則にもとづくことを前提とするものであった。

すべての党員は、全勤労大衆を唯一的に指導する強大な大衆的党の創建をめざす金日成将軍の正しい方針を積極的に支持し、合党をすすめるために全力をあげた。

金日成将軍は、合党は北朝鮮労働党と南朝鮮労働党を別個に組織する方向ですすめることを明らかにした。将軍のこの方針は、南北両地域の情勢がたがいに異なることと、とくに南半部において党の合法的活動を保つことを考慮にいれた措置であった。

北半部では、共産党と新民党の合党が短期間に、成功裏にすすめられた。

一九四六年七月二十七日、金日成将軍の指導のもとに北朝鮮共産党中央組織委員会第八回拡大執行委員会がひらかれ、北朝鮮共産党と新民党の合党を正式に決定した。つづいて七月二十九日には、北朝鮮共産党中央組織委員会と新民党中央委員会の連席会議がひらかれ、両党の合党を決定した。その後、これにしたがって両党の各級党組織の連席会議がすすめられ、労働党組織が結成されていった。

労働党の創建過程は、その出発から左右の日和見的な偏向に反対するたたかいをともなった。左翼的な偏向は、おもに一部の人びとが合党をマルクス・レーニン主義から逸脱したものであるかのように考え、これに反対するというかたちであらわれた。また右翼的な偏向は、合党以後はマルクス・レーニン主義を放棄し、党の規律を弱めよ

うとする点にあらわれた。そして部分的には合党を「新民党化」、あるいは「小ブルジョア化」だとする傾向があらわれた。これは合党をよろこばない左翼的な偏向のあらわれであると同時に、革命的党建設の原則を放棄しようとする右翼的毒素であった。

将軍は、広はんな勤労大衆を代表する大衆的な党――労働党の創建がマルクス・レーニン主義からの逸脱ではなく、まさにマルクス・レーニン主義の原則を正しく適用し発展させたものであり、労働党はあくまでもマルクス・レーニン主義をゆるぎない指導的指針とする党であり、革命のための党であり、勤労大衆の戦闘的部隊であることを明確にし、左右の偏向をおかしているものたちに決定的な打撃をあたえた。

金日成将軍は合党を勝利へと導くために、党の方針にもとるさまざまな偏向にたいして徹底的な闘争をすすめた。

合党は成功裏にすすめられ、わずか一か月のあいだに労働党はその強大な姿をあらわした。

ピョンヤンでは一九四六年八月二十八日から三十日にかけて、北朝鮮労働党創建大会がひらかれた。大会には共産党員二十七万六千余名と、新民党員九万余名を代表する八百一名の代表者が参加した。

金日成将軍は大会で、『勤労大衆の統一的党の創建のために』と題する報告をおこなった。

将軍は報告で南北朝鮮の情勢を全面的に分析し、過去一年間の革命闘争の経験を総括した。そして民主主義民族統一戦線を強化し、各界各層の愛国的人民をかたく結集させること、とくに勤労大衆の統一を強めることがすべての勝利の保障になることを強調し、創建される労働党の目的と性格、任務をつぎのように規定した。

「わが党は、綱領の第一条に明示されているように朝鮮の勤労大衆の利益を代表し、擁護する党であり、富強な民主主義独立国家の建設を目的とする党であります。労働党は朝鮮の勤労大衆の前衛部隊であり、労働者、農民、勤労インテリの広はんな大衆のなかに根をおろしています。それゆえに労働党は、朝鮮の自主独立と民主化のための闘争において当然、主導的な勢力とならなければならないし、民主主義民族統一戦線で中核的な役割をうけ

もたなければなりません。わが党は、親日派、民族反逆者、地主、買弁資本家を打倒し、祖国を帝国主義のくびきから完全に解放し、民主主義的な自主独立国家を建設するためにたたかうでありましょう。……現段階におけるわが党の基本任務は、広はんな人民大衆を動員して反帝反封建民主主義革命を全国的に、徹底的に遂行し民主主義人民共和国を樹立することであります」

つづいて将軍は、両党が合党する必然性と、合党の過程で部分的にあらわれた左右日和見的偏向を批判し、党を勤労大衆の組織された強力な戦闘部隊として、前衛部隊として発展させるためには、党の隊列の統一と純潔性をかたく守り、鋼鉄のような規律を確立し、これをさまたげるあらゆる傾向と容赦なくたたかわなければならないと強調した。

このほかにも金日成将軍は、党の基本任務から出発して、党を組織思想的にいっそう強化する党の当面の任務について言及した。

大会は将軍の報告を討議し、『北朝鮮共産党と朝鮮新民党が合同して北朝鮮労働党を創建することにかんする決定書』を採択した。

さらに大会では労働党の綱領と規約が採択され、党の機関紙として『労働新聞』を発刊し、党および国家建設に必要な理論を展開するための理論雑誌の発刊を決定した。

大会では、南朝鮮における三党の合党事業の進行状況についても審議し、この事業を早急に推進するための決定を採択した。

最後に大会では、『朝鮮同胞に訴える（北朝鮮労働党創建大会）』という宣言書を採択した。

宣言書はつぎのようにのべている。

「われわれはこの宣言で、もし諸君が解放された祖国をほんとうに愛するならば、わが祖国が富強な自主独立国

家として平和を愛する世界の各民族の一員となることをねがうならば、わが国において反動と虐殺と暴政をもとめないならば、幸福で自由な生活をねがうならば、わが労働党の隊列にくわわり、みずからの献身的な参加によって、強大で自主的な民主主義朝鮮人民共和国の建設を援助するよう訴える」

金日成将軍の方針にしたがって、北朝鮮共産党が新民党と合党して勤労大衆の統一的党である労働党に発展したことは、革命勢力を拡大し強化するうえで画期的な出来事であった。

両党の合党のもつ大きな歴史的意義について、金日成将軍はつぎのようにのべた。

「わが党が新民党と合党して勤労大衆の統一的政党である労働党に発展したことは、われわれの革命力量を拡大、強化するうえで画期的な出来事であります。合党の結果わが党は、労働者階級ばかりでなく勤労農民と勤労インテリの先進的分子をその隊列に結集した大衆的な政党となりました。

共産党と新民党の合党は党の力量を強化し、革命家の隊列のいっそうの拡大を可能にし、党が広はんな大衆のなかでますます深く根をおろすことを可能にしました。それはまた、二つの勤労政党の存続によってもたらされる勤労人民の革命力量分裂の危険性をなくし、労働者階級の指導のもとに労働者、農民、勤労インテリの同盟を強め、すすんでは各界各層の民主勢力の統一戦線をいちだんと強化するようになりました」

こうして、マルクス・レーニン主義の党を大衆的政党に発展させる困難で深刻な問題は、第二次大戦後、共和国の北半部で金日成将軍の賢明な指導のもとにはじめて解決されたのであった。

金日成将軍は北朝鮮で合党事業を指導しながら、南朝鮮での合党についても大きな関心をはらった。

当時、南朝鮮の党員たちと勤労大衆は、将軍がしめした合党方針を積極的に支持していた。

しかし南半部での合党事業は、アメリカ帝国主義とその手先、またさまざまな謀略分子と分派分子の策動のために大きくさまたげられていた。

アメリカ帝国主義は合党を妨害するためにますます弾圧を強めた。かれらはすべての反動分子を結集し、あらゆる手段と謀略を弄して外部からの破壊工作をつづけ、謀略分子やスパイを放ち、内部から分裂させようと策動した。

朴憲永一味と「M・L派」の分派分子は、アメリカ帝国主義者にあやつられて、おもてむきは合党を支持するふりをしながら実際にはこれに反対し、合党の実現をひきのばした。かれらは合党問題をめぐって分裂策動をますます激化させた。はなはだしいことには、朴憲永一味は、共産党、人民党、新民党の合党問題をながいあいだにぎりつぶして提起することさえおこたり、合党事業をおしすすめるどころか、自派の指導権を維持することだけに汲々とし、自派に追従しない人びとを排斥していた。

金日成将軍は朴憲永一味の反党的な態度をきびしく批判した。

将軍は、人民党や新民党の幹部たちにも、共産党と合党することをすすめた。

その当時、南朝鮮の共産党ばかりでなく、人民党、新民党の代表的な幹部も、朝鮮人民の公認された領袖である金日成将軍の教えをこうために、三十八度線をこえてよくピョンヤンをたずねた。

金日成将軍が共産党と新民党の合党事業を活発にすすめていた一九四六年夏のある日、副官が将軍の部屋にはいって報告した。

「南朝鮮から、呂運亨（リョウンヒョン）がたずねてきました。外に待たせてあります」

「呂運亨？」

ペンをにぎった手をとめて顔をあげた将軍の目は、一瞬きらりと光った。

「雄弁家」、「すぐれた政客」として南朝鮮で一定の人気をえているという人民党の党首呂運亨が、みずからたずねてきたのである。将軍は書類を机の片隅におしやって、やわらかな微笑をうかべてこう返事した。

「ここへ案内してくれたまえ」

つばのひろいパナマ帽にサングラスをかけた紳士風の呂運亨が、副官に案内されて部屋にはいってきた。金日成将軍は明るい微笑をうかべ、ドアまででむかえにでてかれと握手した。呂運亨はひどく感激したようすであった。将軍は初対面のあいさつをかわし、かれとむかいあってすわった。
弁説たくみな呂運亨は自己流に内外情勢を語り、「憂国の情」をひれきした。
金日成将軍はかれの熱弁をききながら、ときおり真剣なまなざしで、また余裕のある微笑をうかべて相手の見解をただしたり、おぎなったりした。
なめらかに流れていた呂運亨の弁舌はしだいにとぎれがちになり、時間がたつにつれてそれはますますひどくなった。かれは金日成将軍と話あっているうちに、その偉大な品格と卓越した識見、深くひろい度量と抱擁力にうたれ、深い感動にとらわれたのであった。
食事の時間になった。金日成将軍は先に席をたちながらいった。
「なにもありませんが、わたしの家でいっしょに食事でもいたしましょう。あらかじめご来訪を知らせてくだされば、おもてなしの準備もさせるのですが……、突然お見えになった先生が悪いんですよ」
将軍は大きく笑った。
「わたしは旅館にいきます」と呂運亨は遠慮をした。
金日成将軍は、壁からパナマ帽をとって手にした呂運亨にいった。
「旅館のようにはいきませんが、わたしといっしょにまいりましょう。お客を旅館にとまらせるようなことがわが国の作法にかなわないことぐらい、先生もよくご存知ではありませんか……」
呂運亨は、自分を肉親のようにあたたかくむかえてくれた金日成将軍の抱擁力と感化力に、胸の熱くなるのをおさえることができなかった。

将軍の自宅に招待された呂運亨は、信じられないといったようすで部屋のなかや家具類を見つめていた。かれの想像とはあまりにもへだたりがあったからである。それは清潔ではあったが、一国の領袖の官邸の家具にしてはあまりにも簡素であった。

やがて食事がはこばれた。螺鈿の飾りもないありふれた食膳には、なに一つ特別な料理らしいものはなかった。呂運亨は敬虔な面持で金日成将軍とむかいあい、同じ食膳で箸をとった。

話題はふたたび政治問題に移った。

呂運亨は自分の意見をのべようとはせず、金日成将軍の話に耳をかたむけるばかりであった。そして感嘆しながらこういった。

「将軍のお話をうかがって、もやもやしていた胸がすっきりしました。わが国のすすむべき道がはっきりと見えてきました。率直に申しあげて、わたしは南朝鮮ばかりでなく、外国でも多くの名のある政治家に会ったことがあります。しかし将軍のようなお方にお会いするのははじめてです。ことばだけでなく心から申しあげるのですが、あなたがいらっしゃるおかげで、わが朝鮮は大きく運がひらけました」

かれは自分のたどってきた生涯をふりかえりながら、祖国と人民のために献身しようという主観的な希望に反して、あやまちも多かったと率直にのべ、これからは将軍の教えにしたがって力のかぎり働きたい、とその決意を語った。

金日成将軍は呂運亨に、共産党と団結しなければならないといった。呂運亨はこの至情あふれる将軍の勧告にしたがい、それからは将軍の志をくんで活動するようになった。

将軍は南朝鮮の三党を合党させるために、あらゆる努力をはらった。

しかし、すでにアメリカ帝国主義のスパイになりさがっていた朴憲永一味は、呂運亨を党首とする人民党および

新民党との合作につくすどころか、逆に合党事業を破壊させる犯罪的行為をくりかえしていた。
一方、「M・L派」分子は「大会派」と称する分派集団をつくり、朴憲永の「偏狭な幹部政策」に反対するという口実のもとにますます分裂策動を強め、「党内闘争」を党外にひろげて党を破壊し、合党事業をさまたげた。
かれらはひそかに、反党分子崔昌益の庇護と援助をうけていた。朴憲永一味と「大会派」の派閥闘争は、九月のゼネストと十月の人民抗争においてますます悪どいものになった。朴憲永一味は南朝鮮人民の革命的な気勢を分派的目的に利用しながら、人民を無謀な暴動へとかりたて、敵のむごい虐殺の犠牲に供しようと狂奔した。一方、「大会派」分子もかれらなりに、分派的目的のためになんのためらいもなくゼネストと人民抗争を破壊するという罪悪をおかした。
派閥闘争は人民党や新民党にも波及し、これらの党の内部分裂と動揺を激化させた。南朝鮮における分派分子の目にあまる派閥あらそいは、合党問題をめぐって党と勤労大衆をますます分裂させていった。
金日成将軍は、分派分子と敵の破壊策動のために南朝鮮で合党事業がおくれている重大な事態を憂慮し、これを打開するためのあらゆる措置をとった。将軍は北朝鮮労働党創建大会において、南朝鮮三党の合党事業をめぐって生まれた重大な事態を分析し批判したのち、一九四六年九月二十六日に、『北朝鮮労働党の創建と南朝鮮労働党の創建問題について』と題する論文を発表し、いま一度重要な教示をあたえた。
将軍はこの論文で、ふたたび労働党創建の必要性を強調し、北半部で順調に遂行された合党事業の経験に照らして、党の思想意志の統一と鋼鉄のような規律を確立してこそ、合党事業を成功させることができると教えた。
将軍のこの労作は、合党事業を妨害する分派分子に大きな打撃をあたえた。
朴憲永一味はもはやそれ以上、合党問題をひきのばすことができなくなった。また、北朝鮮労働党からいかなる支持をもうけることができないと悟った分派分子は、自派の勢力をかき集めて政党を組織し、これを既成事実とし

て認めさせようという陰険な策動をはじめた。また「大会派」分子の策動は、「社会労働党」をでっちあげるまでにいたった。こうしたゆるしがたい行為は、決定的に紛砕しなければならなかった。

将軍は十一月十六日、党中央委員会常務委員会をひらき、「社会労働党」の反党的で反動的な本質を暴露し批判する決定書『南朝鮮社会労働党について』を採択するよう提議した。この決定書は党員とすべての勤労者に、「社会労働党」を徹底的に排撃することと、合党のためにほんとうにたたかう人たちだけを支持するよう訴えたものであった。

金日成将軍の強い措置によって、「社会労働党」は組織されてから数日をでずして解散され破滅した。

一九四六年十一月二十三日、南朝鮮労働党が結成された。

しかし、これは形式上の合党にすぎなかった。その内幕は朴憲永一味が自派に追従するものたちだけで南朝鮮労働党中央委員会を構成したものであり、ただ党の看板をかえたにすぎなかった。

こうして南朝鮮労働党は、大衆的な政党になることができなかった。分派分子はその後も派閥あらそいをやめなかった。「M・L派」分子は「勤労人民党」をつくって朴憲永に対抗した。朴憲永一味もまたアメリカ帝国主義のスパイであることをかくし、南朝鮮の革命運動を巧妙な手段で破綻させていった。

こうして南朝鮮では合党の真の目的が達せられず、勤労大衆はますます分裂の一途をたどった。

金日成将軍は分派分子の破壊策動をそのつど批判しながら、ひきつづき広はんな勤労大衆の統一をめざす活動を忍耐強くすすめていった。

それと同時に、将軍は大衆的政党として発展した北朝鮮労働党を政治的、思想的に強化するため、大きな力をそそいだ。

将軍は、まず第一に労働者階級を中核とする勤労人民の前衛部隊としての労働党の性格から出発して、党の隊列

を急速に拡大するための基本原則を明らかにした。

金日成将軍は、党の隊列を急速に拡大するにあたって党員の資格問題に特別な意義を付与し、つぎのようにのべた。

「いうまでもなく、マルクス・レーニン主義者が民主革命の任務を実践するうえでもっとも前衛的かつ積極的であることは事実であり、マルクス・レーニン主義で武装したこれらの革命家がわが党の中核にならなければならないのは当然であります。しかし、マルクス・レーニン主義に精通した人だけが民主主義革命の遂行に参加でき、労働党に入党できるものと考えるのは大きな誤りです。

われわれは、たとえマルクス・レーニン主義に精通していなくとも、民主的な祖国建設において愛国的熱意と積極性を発揮し、前衛的な役割をはたしている人であるならば、だれでも労働党員になることができると考えるものであります。また労働者ばかりでなく、農民と勤労インテリでも、大衆の先頭にたって断固としてたたかう人であるならば、すべて労働党にはいることができます」

これは、党員の資格を大衆的政党である労働党の性格およびその建設の特性にそくして創造的に規定したものとして、党の隊列を急速に拡大し発展させる唯一の方針であった。

しかし金日成将軍は、党拡大の活動を組合的、募集的なやり方でおこない、党隊列の純潔性をそこなう右翼日和見主義的な傾向におちいることをいましめた。

金日成将軍は、党隊列の量的拡大と質的強化を密接にむすびつけ、戦闘的な大衆的党を建設しなければならないと教え、その方途を具体的にしめした。

将軍は党員の党派性をきたえ、党生活を強め、党の中核隊列をたえず拡大していくことが党建設における基本問題であることを明らかにした。

将軍はとくに、党中核の育成問題を重要な組織路線とみなした。

金日成将軍は、「中核とは、共産主義の真理を悟り、確信をもって革命の道をすすむ党員のこと」であり、さらに「大衆的党を建設すると同時に細胞の中核をたえず育成することは、われわれの一貫した組織路線であります」とのべた。

金日成将軍がしめしたこの組織路線は、党建設の綱領的指針を明らかにしたものであった。

創建後まもない党が大衆的な党として急速に拡大し発展するにつれ、党員の革命的な鍛練の度合いと、政治的、思想的水準の差が目だった。いいかえれば、きたえられた共産主義者と労働者階級の中核がまだそれほどの数に達していない組織に、広はんな党員をもうらすることになったのである。結局、こうした党員の水準の差をなくすことは、革命的で戦闘的な党を建設する根本問題となっていた。

金日成将軍は、十五年間の抗日武装闘争の時期における革命隊列育成の豊富な経験と共産党建設でえた貴重な経験を一般化し、この問題を解決する鍵を中核の育成にもとめ、このことを党組織の重要な任務として提起した。

将軍は、マルクス・レーニン主義党が労働者階級をはじめ勤労大衆と大衆組織にたいして指導的役割をはたし、すべての党員が勤労者のなかで中核的な役割をはたすことは当然であり、また党内で党員の水準に差がある以上、思想的にも能力的にもすすんでいる党員がおくれた党員を指導していくべきであると考えた。将軍はとくに、共産党と他党との合党によって共産主義思想で十分武装されていない党員が党内でかなりの比重をしめている条件のもとでは、共産主義思想でしっかり武装した党員たちの中核的な役割は、党隊列の統一と団結を強めるうえで、また全般的な党事業を発展させるうえで、きわめて重要な意義をもつとみなした。

それは、まず中核を育成することが全党内に党の唯一思想体系を確立し、党の統一と団結を強める決定的な保障であると考えたからであった。

全党内に党の唯一思想体系を確立し、党の統一と団結をかたく守るためには、領袖の革命思想で全党員を武装させるとともに、分派主義、日和見主義、ブルジョア思想、事大主義思想、封建儒教思想を克服し、清算しなければならなかった。この闘争はただ、革命の領袖にかぎりなく忠実で、党と革命のために命をささげてたたかい、階級的立場が明確で、革命的節操のかたい中核によってのみなしうることだったのである。

金日成将軍はまた、党の中核を育成し拡大することが党員相互間の水準の差をなくし、すべての党員を党の革命思想、党の政策でしっかりと武装させ、いかなる状況のもとでも独自的に、能動的に活動することのできる鍛練された革命家、政治活動家として育成する方法であると考えた。

将軍は、党の中核を育成する方法をも具体的にしめした。将軍は、中核の育成は教育活動と革命的実践をむすびつけ、この事業を一時的ではなしにねばり強くおこない、とくに党員の党生活を強化して、分派分子およびさまざまな日和見主義に反対する思想闘争をつうじて、かれらを革命家にそだてあげることであると教えた。

このように金日成将軍は、ゆるぎない主体思想にもとづいて大衆的党建設で提起される理論的、実践的問題に全面的で明確な解答をあたえ、これによってマルクス・レーニン主義党建設の理論を大きく発展させた。

将軍はまた、党隊列の思想意志の統一と鋼鉄のような規律をあらゆる面から強化することを明確にしめした。これは全朝鮮人民の運命と、朝鮮革命の終局的な勝利が全面的に党の指導にかかっており、党を強化することが革命の勝利を決定的に保障するという、将軍の確固たる主体的立場からでたものである。

金日成将軍は、つぎのように強調した。

「二つの党がいま合党したばかりなので、われわれの隊列のなかにはさまざまな傾向があらわれることもありま す。それゆえ、わが党の綱領にもとづく統一的な思想で全党員を武装させ、原則的な同志的団結を強め、政治的自覚を高めなければなりません。

いっさいの分派主義的傾向とたたかうことは、いま党生活においてとくに重要な意義をもっています。われわれは、朝鮮の革命運動にひきつづきはかり知れない害毒をおよぼしてきたにくむべき分派主義の残滓を徹底的に一掃して、わが党を統一的で威力ある鋼鉄の隊伍にしなければなりません」

さらに金日成将軍は、合党の目的に照らして第一義的な意義をもつ問題は、党が大衆とのむすびつきを強めることであると強調した。

将軍は、党が大衆とのむすびつきを強めるためには、人民大衆のなかに党の綱領と決定、すべての政策を深く浸透させ、それが大衆自身のものとなるようにし、大衆みずからの団結した力で党の意図を実践するようにしなければならないと教えた。

金日成将軍の正しい方針にしたがって、合党後、党の隊列は急速に成長し、質的にもさらに強固となった。

とくに金日成将軍のしめした方針にしたがって、まず中核を育成し、かれらの役割を高め、全党員を革命思想で徹底的に武装させることによって、党は隊列内にもぐりこんだ分派分子をそのつど排除し、すべての異質的な思想傾向を克服する深刻な思想闘争を成功裏にすすめることができ、革命的で戦闘的な党として強化され、発展することができた。

これは、北半部に築かれた革命的民主基地を強化発展させるうえで、また祖国の統一と朝鮮革命の終局的勝利を達成するうえで、もっとも強固な保障となった。

6　みずから手にした建設のシャベル

金日成将軍の指導のもとに、土地改革をはじめ諸般の民主改革を実施し、新しい制度をうちたてるたたかいがす

すめられていた時期は、勤労者が復興建設に力強くたちあがった時期でもあった。

つぎつぎと実施された諸般の民主改革によって、全国は感激と興奮でわきかえっていた。土地の主人となった農民は土地改革慶祝大会をひらいて、幾世紀にもわたる宿望をかなえてくれた金日成将軍にかぎりない感謝をささげ、将軍のよびかけにこたえて新しい祖国建設に献身することを誓いあった。

工場の主人となった労働者階級は、大衆的な増産闘争にたちあがった。

祖国建設にたちあがった人民大衆の革命的な気勢と政治的熱意は非常に高まった。

金日成将軍は、勤労大衆の高まった気勢と熱意を新しい祖国建設へ、富強な自主独立国家建設のための復興建設闘争へと導いた。

新しい祖国建設の先頭にたった将軍は、みずから建国事業の炎を燃えあがらせた。

西ピョンヤン一帯の一万八千余町歩の田畑をめぐって流れる普通江は、毎年の洪水で作物に被害をあたえ、市民を苦しめる災厄(さいやく)の川であった。

土地改革を勝利的に終えた将軍は、西ピョンヤン一帯を視察したのち、普通江改修工事の着工を指示した。

将軍はそのときからすでに、祖国の自然を改造する雄大な構想をたてていた。春は旱ばつがつづき夏には大雨に見まわれるわが国の気候条件から、全国に稠密(ちょうみつ)な灌漑水利網をはりめぐらして毎年の豊作を保障することが農業部門における急務であるとみなした。

普通江改修工事は、水利化の国として世界に名高いこんにちの朝鮮をもたらした偉大な自然改造の最初の工事であった。

一九四六年五月二十一日、金日成将軍はみずから普通江改修工事の着工式に参席し、激励のことばをのべた。

「われわれには食糧、人材、物資など、すべてがたりないが、だからといって仕事もしないであそんでいるわけ

普通江改修工事で最初のシャベルをとる金日成首相

はいかない。われわれは全力をつくして難関をのりこえ、あらゆる困難を克服しなければならない。……われわれは決意を新たにして、民主主義的国家建設のために、まずこの小さな工事から完成させなければならない」

着工式が終わると、将軍は改修工事の最初の鍬いれをおこなった。

この鍬いれにつづいて、三千余名の市民がきそって土を掘りトロッコをおした。だれもが炎のような建国の熱情で堤防づくりにとりくんだ。

金日成将軍はワイシャツ姿でシャベルを手にもち、群衆の先頭にたった。

また仕事のあいまをぬって各現場をまわり、建設者たちと話合い、かれらの労をねぎらった。

金日成将軍は、普通江改修工事がはじまってから二週間がすぎた同年の六月四日、ふたたびこの作業現場をおとずれた。

将軍は、各地から集まった建設者たちと、解放後はじめての年の農作物の状況について話しあった。

将軍は汗みどろになって働いていた一建設隊員と握手をかわしながら、かれの郷里について、工事の意義や責任量、労働の度合いなどについて語りあった。

将軍は、思いだしたようにこうたずねた。

「そう、きょうは端午の節句だったね。こんな日に仕事にでたりしてはつまらないのじゃないか」

建設者たちは口をそろえて力強くこたえた。

「そんなことはありません」

将軍はたのもしげに建設者たちを見まわして、現在の一日というものは将来の百日にも値するのだから、これまでの生活をあらためなくてはいけない。節句の日にこうしてたのしく仕事するのも結構なことではないか。いつか日をえらんで、みんないっしょにたのしむことにして工事をいそごう」とはげました。

将軍が最初の鍬いれをおこない、直接指導してきた普通江改修工事は期限前に完成した。

将軍が手にしたこの最初のシャベル、将軍が点火したこの一点の火は、解放された人民の胸のなかに富強な新しい祖国建設の高い熱意と、つきることのない力をよびおこした。

将軍はいそがしいなかにも毎日のように工場と農村をたずね、労働者や農民の増産闘争を指導した。

金日成将軍のすぐれた指導と精力的な活動によって、新しい祖国建設は着々とすすめられていった。

富強な自主独立国家を一日も早く建設しようとねがう金日成将軍は、これに満足することなく、革命と建設を急速に前進させていった。

富強な自主独立国家の基盤となる経済建設は、多くの難関をのりこえなければならなかった。

日本帝国主義のながい植民地支配の結果、朝鮮の経済はひどくいびつになっていた。しかしそれさえも日本帝国主義が敗北したとき、のこらず破壊して逃げたため、あとにはひどく無残な工場と混乱した運輸機関、破産した農

業と帳簿ばかりの金庫しかのこされていなかった。
そのうえ原料も資材も資金もなかった。技術者と熟練労働者の不足は、これにもまして大きな困難であった。ないもの、たりないものがあまりにも多かった。
こうした困難な状況のもとで経済建設をおこなうためには、あるものは極力節約し、ないものはつくりだし、不足しているものはがまんし、わからないことは学ぶ——というように、歯をくいしばってすべての難関を突破していかなければならなかった。
そのためには、指導的活動家から大衆にいたる全人民が心を一つにして、日本帝国主義の植民地支配ののこりかすを一掃し、新しい祖国建設の課題を実践するために決死の覚悟でたちあがり、無比の愛国的献身性を発揮しなければならなかった。
だが日本帝国主義がのこした禍いは、経済の領域ばかりではなく、人びとの頭のなかにも少なからずあり、それが建国事業をさまたげていた。
一部の人たちは、新しい祖国建設が、どれほど困難かつ複雑な情勢のもとですすめられているかをはっきり認識していなかった。
かれらのあいだでは、利己主義思想と日本帝国主義がのこしていった退廃的な遺習が根絶されず、怠慢、安逸、奢侈、浪費、詐欺横領といった悪習がそのままのこっていた。
ひいては一部の政務員のなかにさえ奢侈と享楽のみを追いもとめ、国家と社会の共同生活を無視し、国家財産を浪費する利己主義的な思想があらわれていた。また一部の活動家のあいだでは、つねに活動任務を研究し、それを責任をもって遂行するという気風が確立されておらず、自己を過信し、命令と叱責に明け暮れる官僚主義、形式主義など、否定すべき活動作風がのこっていた。

こうした状況のもとでは、党と人民政権機関が新しい社会建設へと人民を力強く組織し動員することが困難であり、人民の創造的な熱意と革命的気風を高揚することは不可能であった。新しい民主朝鮮の主人公にふさわしい精神と道徳的な品格や戦闘力をつちかうためには、思想の変革をおこなわなければならなかった。

こうした思想意識の領域における変革は、革命を新しい段階に発展させるための必然的な要求であった。革命発展の主客観的要求を科学的に分析した将軍は、一九四六年十一月二十五日、北朝鮮臨時人民委員会第三回拡大委員会で、人民大衆の思想意識の変革を目的とする全群衆的な闘争として、建国思想総動員運動の展開を提議した。

金日成将軍は、「……人民委員会の幹部と産業機関、文化、教育機関およびその他すべての部門の活動家たちが先頭にたち、広はんな大衆のなかで、古い思想をすて、新しい建国思想で武装するたたかいをくりひろげる」ことを訴えた。

そして人民大衆のなかで国家財産を浪費したり横領する利己主義、奢侈と逸楽にふける享楽主義、仕事にたいする無責任と自己過信、官僚主義的な活動態度など、日本帝国主義のながい植民地支配の遺物である退廃的な思想の残滓と悪習を根絶するきびしい思想闘争を展開する課題を提起した。さらに国家財産を節約して、あたえられたすべての革命的任務を責任をもって誠実に遂行し、人民を心から愛し、たがいにたすけあい、団結する新しい革命的気風をうちたてることを強調した。

これとともに将軍は、新しい社会を建設する前途には幾多の難関がよこたわっていると指摘しながら、不屈の革命精神と忍耐力を発揮しなければならないと教えた。

将軍が提起した建国思想総動員運動は、新しい朝鮮建設における精神上の大変革をよびおこし、民主的建国事業を推進させる強力な要因となった。それは、党および国家機関の幹部から人民大衆にいたるまで、新しい民主朝鮮

の幹部らしく、人民らしい精神、道徳的風格と戦闘力をつちかう思想革命を意味した。

それはまた、勤労大衆をより高い新たな革命へと組織動員する強力な思想的準備であった。

建国思想総動員運動を展開しようという将軍の訴えは、すべての活動家と人民大衆の熱烈な支持をうけ、またたくまに全人民的な運動となってくりひろげられていった。

将軍のよびかけを支持してあらゆる部門、あらゆる単位で、建国思想総動員と思想意識を改造するための広はんな群衆討議が、深刻な批判と自己批判をともなってすすめられた。

するどい思想的攻勢である大衆的討議の過程で、利己主義と享楽主義、奢侈と怠惰が批判され、革命の隊列内にもぐりこんだ敵対分子、異色分子、出世主義者、徒食者などが一掃された。この闘争過程で、人民のなかから愛国的増産と節約をもって、あらゆる経済的困難を克服してゆく大衆運動が力強くおこった。

産業運輸部門では、定州(ジョンジュ)機関区の従業員たちが愛国的増産運動の最初ののろしをあげた。

当時、人民経済の動脈である鉄道部門では、有煙炭不足のため定時運行の保障がむづかしい状態にあった。

定州機関区の従業員は、石炭が不足するからといって嘆くのではなく、ないものは自力でつくりださなければならないという建国の意欲に燃え、一九四六年十二月初旬、当時、唯一の有煙炭生産鉱であった安州(アンジュ)炭鉱に採炭選抜隊をおくった。かれらは石炭採掘ですぐれた試験的成果をあげたのち、労力、資材、技術などの不足から自力で生産しえなくなった安州炭鉱に採炭突撃隊をおくるよう人民経済の各部門と全国に訴え、みずからも率先して十二月十二日に突撃隊を派遣した。

英雄的な定州機関区従業員たちの愛国的熱意にこたえて、平安北道では各政党、社会団体の活動家からなる採炭突撃隊が組織された。この模様を一九四六年一月二日付の『平北日報(ピョンブク)』は、つぎのように紹介している。

「このように、もっとも気高く栄光ある建国の労働に参加した隊員のなかには、事務員もあり、農民、労働者は

もちろん、医師までも自発的に参加したのであった」

この愛国的増産運動は、人民経済のすべての部門に波及した。

農民金斉元（キムジェウォン）がよびかけた愛国米献納運動は、農業部門でまきおこった愛国運動の代表的な実例である。農民金斉元は、金日成将軍のおかげで一生の念願であった土地を無償で分配されたよろこびと、農業現物税法令発布の感激につつまれて、その年の秋の収穫のうち、一年分の食糧だけをのこして三十かますの米を国家に献納したのであった。

これをきっかけに黄海南道載寧（ジェリョン）郡の農民たちは一九四六年十二月十日、現物税完納慶祝大会をひらき、八百三十かますの愛国米を国家におさめ、全農民に愛国米献納運動の展開と穀物買上げ早期実現を訴えた。

金斉元愛国米献納運動熱誠者大会から金日成将軍におくられた手紙には、つぎのように書かれてあった。

「……われわれは無償で土地を分配されたよろこびにあふれて力いっぱい仕事にはげみ、生産を高め、農業現物税を完納し、金斉元農民が提唱した愛国米運動に参加しました。金斉元愛国米運動は、北朝鮮の食糧問題を農民の燃えあがった愛国心によって解決しようとすることを具体的に表現したものであり、将軍の訴えた建国思想運動に積極的にこたえたものであります。われわれはこの運動をさらにひろく展開するために、北朝鮮のすべての農民に訴えました。……産業の発展なくして朝鮮の完全な独立はありえません。それはまた、食糧問題の解決なしには実現できません。それゆえわれわれは、ひとうねの土地をもむだにすることなく、怠惰をゆるさず、力いっぱい働くことを神聖な任務と考えています。われわれは今年の生産計画を超過完遂して、北朝鮮の食糧問題を完全に解決し、われわれに土地をくださった金日成将軍にこたえることを誓います……」

こうして建国思想総動員運動は、やがて教育、文化、科学、芸術の各分野と家庭にまでひろがり、新たな革命の遂行において、あらゆる難関をのりこえる大きな推進力となった。

金日成将軍がみずから燃えあがらせた新しい祖国建設の偉大な炎、将軍の発起で創造された建国思想の徹底化運動の巨大な力によって、朝鮮人民は民主主義革命の課題をりっぱになしとげ、将軍の指導のもとに新しいより高い革命的任務を成功裏に遂行することができたのである。

第三章　社会主義革命の大道をひらく

1　革命を新しい段階へ

革命のすぐれた指導者金日成将軍は、革命と建設で、つねにとどまることを知らなかった。

党と人民を導いて、解放後わずか一年という短期間に反帝反封建民主主義革命の任務を輝かしく遂行した金日成将軍は、ひきつづき人民大衆を社会主義革命と社会主義建設の新しい段階へと導いた。反帝反封建民主主義革命の任務をなしとげた北半部で社会主義革命の段階へとただちに移行することは、北半部にうちたてられた社会主義制度と朝鮮革命発展の合法則的な要求であった。

民主主義革命の任務がりっぱに遂行された結果、社会経済関係における植民地的性格、半封建的な性格はまったくなくなり、北半部の社会経済関係は根本的にかわった。

国営経済と協同経営からなる社会主義的な経済形態が指導的地位を占めるようになり、ほかにはわずかに個人農経営と都市手工業経営からなる小商品経済形態、都市の資本主義的な個人商工業と農村の富農経営にかぎられた、いくらにもならない資本主義的経済形態がのこされているだけだった。

階級関係では、地主、買弁資本家、親日派、民族反逆者どもが完全に一掃されたので、搾取階級としてはごくわ

ずかな民族資本家と富農だけがのこった。そして勤労人民が国の主人となり、労働者階級の指導的役割が高まって労農同盟がいっそう強化された。

こうして北半部では人民民主主義制度が確立し、祖国統一を実現するための強力な革命的民主基地が築かれた。

このような条件を科学的に分析した金日成将軍は、革命をさらに一歩前進させて社会主義へと移行し、社会主義革命の任務をただちに遂行することだけが北半部の革命基地を強化し、朝鮮革命の発展をうながす唯一の道であると判断した。

北半部で社会主義へと移行する過程は、一連の特殊性と、そこから生じる多くの難問をかかえていた。

まず北半部で社会主義へと移行する過程は、資本主義のかなり発展した国が社会主義へ移行する場合とは異なる面をもっていた。

資本主義が正常に発展できなかった条件のもとにあった北半部では、まず反帝反封建民主主義革命の任務を遂行したのち、ただちに社会主義へと移行するようになったのである。

金日成将軍は、資本主義が正常に発展していなかったからといって社会を資本主義化し、わざわざ資本家を育ててからそれをなくすための社会主義革命をおこなう必要はないと考えた。帝国主義と植民地主義のくびきから解放された諸国が真の自由と進歩をかちとるためには、必ず社会主義的な発展の道にすすまなければならないということが将軍のゆるぎない立場であり、信条であった。

一方、北半部で社会主義へと移行する当時の内外の情勢もまた複雑であった。

まず国が南北に両断され、世界反動の頭目であり、侵略と戦争の元凶であるアメリカ帝国主義と直接対峙している状況のもとで社会主義革命を遂行しなければならなかった。

こうした実情にあったため、社会主義へ移行し、社会主義革命の任務を遂行するうえで、多くの複雑で困難な新

しい問題がおこった。

しかし偉大な領袖金日成将軍は、すべての問題を解決するときつねにそうであったように、まったく新しい条件と環境のもとで、なんびとも歩んだことのない道をりっぱに切りひらき、革命をもっとも正しく、早い方向へと導いた。

革命の脱落分子らは、将軍の偉大な革命思想を深くくみとりもせず、祖国の統一以前に北半部で社会主義革命を遂行してはならないし、また遂行することもできないと主張した。

これは、朝鮮革命の発展の合法則性をまったく知らないところからでたものであり、くつがえされた搾取階級の立場と見解を力づける反動的な主張であった。

金日成将軍は脱落分子らに打撃をあたえながら、祖国の統一は腕をこまねいて待つのではなく、たたかいとるものであり、そのためには革命をいっそう力強く前進させ、北半部の革命基地を政治、経済、軍事的に強化しなければならないと教えた。

もともと社会主義革命の任務は、社会主義と資本主義のたたかい――すなわち、だれがだれをうちたおすかというはげしい階級闘争をへてのみ遂行することができるのである。将軍は、社会主義革命の課題を遂行するためにはマルクス・レーニン主義党の指導を強化するとともに、革命の武器である人民政権をいっそう強力なものに――、すなわちプロレタリア独裁政権へと発展させ、それを強固なものにしなければならないと考えた。

将軍は革命の根本問題である政権を強化し、発展させる方法として、全人民的な民主選挙を実施すべきであることを明らかにし、つぎのようにのべた。

「……民主革命の成果をいっそう強化し、発展させるためには、臨時的な性格をおびた人民委員会を法的に強固な人民委員会、すなわち一定の選挙によって樹立された人民委員会に発展させなければなりません」

これは、民主改革をへて高まった人民大衆の政治的熱意と、反動勢力にたいする民主勢力の圧倒的な優勢、そして、すでに樹立された政権が真の人民の政権であり、この政権内で労働者階級と党の指導的地位が非常に強固となったことなどを科学的に判断して明らかにした独創的な方法であり、革命を順調に、新たな段階へと発展させるためのもっとも賢明な方法であった。

反帝反封建民主主義革命の任務は遂行されたが、くつがえされた搾取階級の残存分子が政権のなかに一定の勢力としてのこっている国では、やむをえず暴力的な方法によって新たなプロレタリア独裁政権を樹立する方法をとった。しかし事情のちがう北半部では、そうする必要がなかったのである。

金日成将軍の賢明な方針によって、一九四六年九月五日にひらかれた北朝鮮臨時人民委員会第二回拡大委員会では、十一月三日を道、市、郡人民委員会の委員選挙の日と決定した。北半部で実施されるこの民主選挙は、朝鮮の歴史においてはいうまでもなく、アジアでもはじめて実施される民主選挙であった。

将軍は選挙の勝利のための全国的な活動を指導する一方、都市と農村に直接でかけ、人民大衆を選挙の勝利へ、新しい祖国建設の大道へと導いた。

各地で金日成将軍と人民が相まみえる意義深い日がつづいた。このような日々は、まさに人民にたいする将軍の熱い愛情と、金日成将軍にたいする人民のかぎりない忠誠心がかたくむすばれる日々であった。

平安南道江東郡三登面（サムドン）の人びとは、立候補者の推せんがはじまるとただちに群衆大会をひらき、真っ先に金日成将軍を自分たちの選挙区（平安南道五七号選挙区）から平安南道人民委員会の委員候補におした。

それから数日後の十月十五日、北朝鮮臨時人民委員会の会議室では、金日成将軍と十二名の三登面の人民代表が相まみえる感激的な場面がくりひろげられた。

熱烈なあいさつがかわされ、つづいて二人の少女が二万名の三登面人民の真心こもった花束と名産の栗と蜂蜜を

将軍に贈った。将軍はためらった。しかし、富豪の千金であれば辞退したであろうが、人民の素朴な真心がこもった贈り物をことわるわけにはいかなかった。和気あいあいとした話がかわされるなかで一人の老人がつぎのように申しでた。

「わたしたちは、将軍さまをおつれしようとやってきたのです。将軍さま、わたしたちといっしょに三登面にまいりましょう。選挙民からぜひおつれするようにと、なんども念をおされました」

みんなはこの申しでを将軍にききいれてもらおうと、まるで子どものようにせがみはじめた。将軍は笑顔でいくども礼をのべ、きょうは無理だが明日は必ずゆきましょうと心よく約束した。

あくる日、金日成将軍は北朝鮮臨時人民委員会の金策(キムチェク)副委員長と数名の随員をつれ、面の人民代表とともに三登面へと車を走らせた。車は大城(デソン)山と将軍の父金亨稷(キムヒョンジク)先生が革命活動をおこなった由緒ある江東をへて、午後三時五十分ごろ、黒嶺(フクリョン)炭鉱のある三登面の入口についた。

金日成将軍の肖像をかかげた大きなアーチや、無数の旗と選挙スローガンで飾られた村の入口と沿道には、つめかけた労働者や農民が口ぐちに万歳をさけび、熱烈な歓呼で将軍をむかえた。十五年にわたる抗日武装闘争をくりひろげて祖国を救った将軍、土地と工場とすべての権利を人民にもたらした将軍にたいする人民の歓迎は、炎のように燃えあがった。

将軍は群衆から遠くはなれた村の入口で車をとめ、歩いて村にはいった。ところが村にはいりかけた将軍は、ふとたちどまって道すじをじっと見つめた。道にはなんと三百メートルはあろうかと思われる白木綿(もめん)がしきつめられていた。これは村人たちが将軍にしめした最高の尊敬のあらわれであり、心からのもてなしであった。

将軍は当然、そのうえを歩かねばならなかった。しかし、あらゆる苦難をかさねながらも栄誉をつねに固辞してきた将軍は、そのうえを歩こうとはしなかった。将軍は、むかえにでてきた朝鮮労働党江東郡委員長にこういっ

た。

「なぜこういうことをするのですか？　こういうことはよくありません。これは人民が着るべきものであって、わたしがそのうえを歩くべきものではないのです。早くかたづけてください」

みんなは胸を熱くしてうなだれた。

将軍は木綿がかたづけられたのを見てようやく足をはこんだ。人びとは心のこりを感じながらも将軍の気高い徳性に感激し、いっそう熱烈な歓声をあげた。

将軍は帽子を高くかざし、人びとにいちいちあいさつしながら、群衆大会の会場である三登人民学校の運動場へはいっていった。老いも若きも、人びとはよろこびをおさえることができず、とびあがって万歳を叫んだ。開会が宣せられ、村民代表の熱烈な歓迎のあいさつがあってから将軍が演壇にのぼった。

将軍は笑顔で手をあげ、やっと群衆を静めてから演説をはじめた。熱烈な歓迎にたいする感謝のことばからはじまった将軍の演説は、どよめく歓呼と拍手によっていくども中断された。将軍はまず、民主改革が実施されたため、これから先、いっそうりっぱに暮らせる土台が築かれたとのべた。そして、これは富強な民主主義的自主独立の国家を建設するはじまりにすぎないとのべながら、今後の任務について明らかにし、労働者や農民の当面する課題についてつぎのようにのべた。

「農民のみなさんは、わけあたえられた土地をいっそうよく手いれして米を多く生産し、労働者のみなさんは工場を建て、機械をつくり、石炭を多く掘りださなければなりません。そして、労働者と農民が団結して国を築きあげ、だれもが国の主人とならなければなりません」

つづいて将軍は、アメリカ帝国主義のさしがねのもとで、建国事業、とくに選挙を破綻させようとする敵の策動にたいして革命的な警戒心を高めることと、勤労人民を代表する真の人民の政権をうちたて、自己の主権をしっか

りとかためるためにみんなが心を一つにし、愛国心をいかんなく発揮しなければならないとのべた。最後に将軍は候補者に推せんされたことにたいして謝意をのべながら演説を終えた。

将軍と三登面の人びととの感激的な対面は、民主主義革命を輝かしく遂行した指導者と人民が、かぎりない信頼と感激をわかちあい、革命の途上でいっそう大きな勝利を約束する慶祝のつどいでもあった。

投票日が近づくにつれ、全人民の政治的熱意はいっそう高まったが、反動どもの策動もますます露骨になっていった。アメリカ帝国主義者にあやつられた反動どもは「信者の友」であるかのようによそおって、キリスト教信者たちを選挙から離脱させようとこころみた。

またかれらは、「選挙はなんの意味ももたない」とか、「選挙の結果は某党の一人舞台となるにきまっている」とか、「土地をとり返してやる」などという中傷やデマを流し、あげくのはては「黒箱運動」（選挙で白箱は賛成投票、黒箱は不賛成投票の箱となっていた）を扇動するなど、ありとあらゆる悪らつな策動をおこなった。

しかし反動どものいかなる破壊策動も、金日成将軍の賢明な指導のもとに国の主人となり、自主独立国家建設に敢然とたちあがった人民大衆をあざむくことはできなかった。

選挙の日になると、男女の有権者たちは労働者、農民、事務員、商工人、宗教人をとわず、朝早くからぞくぞくと投票場に集まってきた。北朝鮮各地のすべての選挙民は、意義深い祝日気分でわきたった。

投票がはじまると、有権者たちは先をあらそって人民の真の代表である候補者へ賛成の一票を投じた。

こうして、最初の民主選挙は歴史的な大勝利をおさめた。

道、市、郡人民委員会委員選挙にひきつづいて、あくる年の三月と五月には人民政権の下部組織である面、里人民委員会の委員選挙がおこなわれた。この選挙でも人民大衆は完全な勝利をおさめた。

金日成将軍は選挙の勝利がもつ大きな意義について、つぎのようにのべた。

「このたびの選挙の勝利は、朝鮮人民にたいする帝国主義者と反逆者どもの誹謗と蔑視を粉砕して、われわれも他の人と同じようにりっぱに暮らすことができ、われわれの手でわれわれの生活を築き、わが人民の手でわが国をおさめることができるということを全世界にしめしたのです」

選挙の勝利にもとづいて、一九四七年二月にはピョンヤンで道、市、郡人民委員会大会がひらかれた。大会では北朝鮮人民会議を創設し、その第一回会議で北朝鮮人民委員会が組織された。

全人民の熱望を反映して、北朝鮮人民会議では満場の歓呼のなかで金日成将軍を北朝鮮人民委員会委員長（首班）に推戴した。

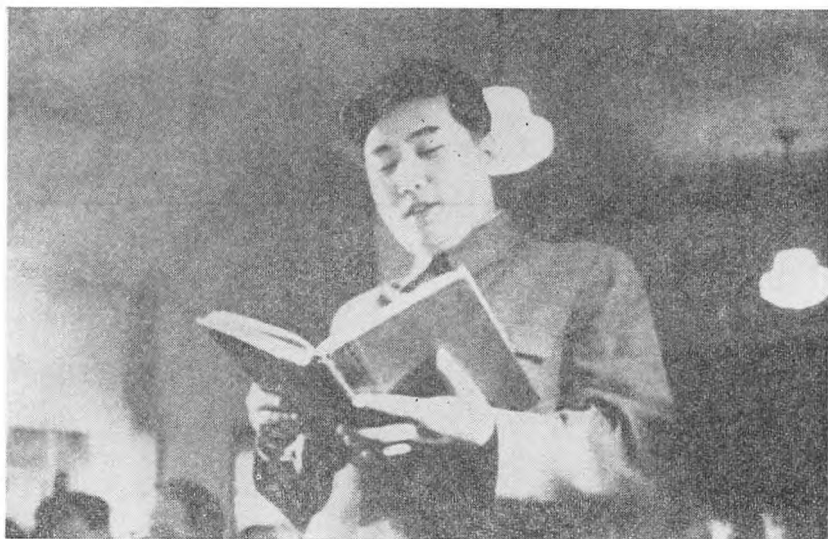
こうして、人民政権を強化する歴史的任務が遂行された。

民主選挙によって創設された北朝鮮人民委員会は、労働者階級が指導する人民民主主義政権という点では北朝鮮臨時人民委員会とかわらなかった。

しかし北朝鮮人民委員会は、社会主義革命の任務を遂行するプロレタリア独裁政権であるという点で、北朝鮮臨時人民委員会とは質的に異なる政権であった。すなわち、北朝鮮臨時人民委員会が反帝反封建民主主義革命の任務を遂行する人民民主主義独裁政権であるとすれば、北朝鮮人民委員会は、社会主義革命の任務を遂行するプロレタリア独裁政権であったのである。

金日成将軍は、北朝鮮人民委員会のこのような性格についてつぎのようにのべた。

「はじめての歴史的な民主選挙を実施して、北朝鮮人民委員会を創設しました。これはわが国に生まれた最初のプロレタリア独裁政権であります。北朝鮮人民委員会は、社会主義革命と社会主義建設の強力な武器として、漸次社会主義へと移行する過渡期の任務を遂行し、人民経済を計画的に発展させるためにたたかいました」

このように、反帝反封建民主主義革命から社会主義革命の新たな段階へと移行する歴史的過程が、国際反動の頭

北朝鮮道、市、郡人民委員会大会で結論をのべる金日成将軍

目アメリカ帝国主義と相対峙している北朝鮮で、歴史上はじめて切りひらかれたのである。

これはいうまでもなく、将軍の科学的な見とおしとすぐれた指導、さらにその主体的な独自的路線の輝かしい勝利であった。

プロレタリア独裁政権である北朝鮮人民委員会は、朝鮮労働党の指導のもとに、歴史的な使命である過渡期の任務を遂行する栄えあるたたかいにすすんだ。

金日成将軍は過渡期の歴史的な期間に、人間による人間の搾取を根絶し、生産力を高度に発展させるとともに、さらにすすんで先進的な労働者階級が経済と文化、思想と道徳のすべての分野で、社会を労働者階級の姿に改造する任務を遂行しなければならないと教えた。これは労働者階級が、その前衛部隊である党の指導のもとに遂行するぼう大で困難な任務であり、ながい時日を要する革命的課題である。

いかなる国も、資本主義から社会主義へ移行する過渡期をへなければならない。しかし過渡期の任務をどのように遂行するかということは、それぞれの国の具

体的な実情にしたがって異なる。そしてこの困難な任務をりっぱに遂行するかどうかは、その国の指導者とマルクス・レーニン主義党の指導いかんにかかっている。
社会主義革命と社会主義建設をすみやかにおこなうためには、それぞれの国が社会経済発展の具体的条件にそくして、過渡期のぼう大な任務を順序正しく提起して遂行しなければならない。
金日成将軍は、もともとたちおくれていたわが国の経済を日本帝国主義者が破壊してしまったうえに、人民経済の主導的部門となった社会主義経済形態がまだ十分発展していない事情などを考慮にいれ、それにそうような、初期にはたすべき過渡期の任務を正しくしめした。
将軍は、過渡期の初期には個人経営部門の社会主義的改造をまだ前面にうちださず、社会主義経済形態を優先的に発展させ、その支配的地位をたえず高めながら、個人経営部門の発展をこれに結合させる原則にもとづいて経済を発展させる方針をうちだした。
将軍は個人経営部門にたいする党の経済政策を科学的に規定した。将軍は、各地にちらばっている中小資本家の企業所と、農民や手工業者を代表する小商品経済形態を一度になくすことはできないし、そうかといって国家が直接それを管理、運営することもできないと考えた。
それゆえ将軍は、農村では一定の期間、土地の主人となった農民たちの高い政治的熱意に依拠し、個人経営をつうじて農業生産を発展させながら、しだいに協同化していく準備をすすめた。また都市では、まず個人手工業にたいする協同化だけをモデルケースとしておしすすめ、個人商工業にたいしてはしだいに社会主義的に改造することを見こしてこれを制限し、利用する政策をとった。
金日成将軍が直接作成したこのような方針は、北半部の経済状態とその発展の合法則性、朝鮮革命の全般的な要求を科学的に反映したもっとも正しい方針である。またこれは、たびかさなるあい路と難関のなかで、富強な自主

独立国家を建設し、社会主義革命と社会主義建設の道を真っすぐに切りひらいた徹底的に主体的で、独創的な方針であった。

こうして国の主人、工場と土地のあるじとなった労働者、農民をはじめとするすべての勤労者たちは、すぐれた指導者金日成将軍が明らかにした革命の新たな道のりにしたがって力強く前進した。

2　革命発展の新たな転換めざし

新たな段階にはいった革命は、力強い前進をはじめた。

金日成将軍は、しっかりと築かれた人民政権の機能を高めながら、ただちに過渡期の任務を遂行するために党と人民大衆をはばひろく組織動員した。

将軍は民主改革の成果をゆるぎないものにし、ゆたかで強力な自主独立国家を建設するためには、なによりも破壊された経済をすみやかに復興させなければならないと考えた。

北朝鮮人民委員会は一九四七年の人民経済計画をたて、これを国家法令として発表した。これはアジアにおけるはじめての人民経済計画であった。

しかし人民経済を復興させるには、幾多のあい路と難関がよこたわっていた。

かつて日本帝国主義がとった民族経済抹殺政策のために、国の経済はひどい植民地的な跛行性をおびていた。日本帝国主義は、朝鮮のゆたかな資源を原資材のまま略奪していくだけであった。

かれらは、旋盤やモーターはいうまでもなく、朝鮮では農機具一つ、鉛筆一本さえろくに生産できないようにした。

かれらは、そうでなくてもたちおくれていたわが国の経済を、敗戦で引き揚げる際、手あたりしだい破壊しつくしていった。そのうえ南北が分断されたため、穀倉地帯であり、軽工業もいくらかは土台がある南朝鮮と切りはなされた北半部の経済は、いっそういびつな性格をおびるようになった。資材、技術、資金など、すべてが不足していた。

反動どもの破壊策動がそれに輪をかけた。そのため経済建設は最初の第一歩から難関とのたたかい、反動とのはげしい階級闘争をくりひろげるなかでおしすすめられた。

しかし金日成将軍はあらゆる試練にうちかち、前進の道を切りひらいた。

すべての活動を革命的におしすすめる将軍は、まず政治的参謀部としての党をふるいたたせ、党員の前衛的な役割を高める一方、人民政権機関が人民経済計画の遂行に大きな力をふりむけるようにし、活動家の責任感と経済指導の水準をいっそう高めた。

これとともに、すべての勤労者団体の役割を高め、広はんな大衆を生産と建設に極力動員し、反革命分子とのたたかいを組織するなど、すべての活動をみずから計画し、配置し、指導した。

将軍はまた、一大思想改造運動である建国思想を徹底化する運動を人民経済計画遂行のための生産闘争と密接にむすびつけ、勤労者たちの愛国的熱意をいっそう高めるようにした。

将軍のまわりに結集した人民は創造的熱意をあますところなく発揮した。人民経済計画を「妄想」であるとさわぎたてていた反動分子らの誹謗と中傷は、完全にうちくだかれた。そして一九四六年にくらべ、工業生産高を一九二パーセントに、穀物収穫高は一一八・六パーセントに高めることを目標にした一九四七年の人民経済計画は、期限内にみごとに超過完遂された。

これは人民大衆に、ゆたかで強力な自主独立国家を、自分の力でりっぱに建設することができるという自負心と

信念をあたえた。

革命と建設をおしすすめる過程で、朝鮮革命の参謀部である労働党もいちだんと強化された。党は短期間のうちに労働者と農民のなかに深く根をおろした大衆的政党として強化され、全党と人民が金日成将軍を首班とする党中央委員会のまわりにかたく結集した。

北半部の革命基地は、政治、経済、軍事的に日ましに強化されていった。

金日成将軍は、このすべての勝利に輝くたくましい前進を、南半部の同胞を解放し、祖国を統一するための闘争へと導いていった。

祖国が分裂し、アメリカ帝国主義の占領下にある南朝鮮人民の不幸と苦痛は、人民の自由解放と祖国の完全独立のためにたたかいぬいてきた将軍の心を深く痛め、いっそう重い責任感をいだかせた。

将軍は、この重大な任務を完遂することこそが、十五星霜にわたる抗日武装闘争の時期からおしすすめてきた朝鮮革命の偉業をりっぱに実現する道であり、朝鮮人民とつぎの世代を社会主義、共産主義社会で、いっそう幸福に暮らせるようにする道であると考えた。

将軍が革命的な民主基地路線をしめしたのも、全力をかたむけて民主基地をしっかりと築きあげたのも、結局は分断された祖国を統一し、朝鮮革命の全国的勝利をなしとげるためであった。

しかし祖国統一の前途には、難関と試練がいくえにもよこたわっていた。

とくに一九四七年十月にはいり、祖国の分裂はいっそう重大な局面をむかえた。それは全面的にアメリカ帝国主義者の悪どい分裂策動によるものであった。

アメリカ帝国主義は一九四七年十月中旬、朝鮮問題を不法にも国連にもちこんだ。かれらは自分のかいらいどもを総動員して、いわゆる「国連朝鮮委員団」なるものをでっちあげ、その監視のもとに朝鮮で「選挙」を実施しよ

うとした。
金日成将軍は、この猿芝居の舞台裏にある黒い陰謀の手のうちをすべてよみとった。
将軍は、アメリカ帝国主義者のかいらい政権でっちあげ陰謀は、全朝鮮を一挙に支配できなくなったアメリカ帝国主義者が南朝鮮だけでも占領しつづけようと企図するものであり、さらには南朝鮮を軍事基地として北半部まで侵略し、やがて全朝鮮を自分たちの植民地にかえようとする狼のしわざであることを見ぬいていた。
将軍はまた、アメリカ帝国主義のこの陰謀には、朝鮮を足場として社会主義陣営を侵略しようとする野望がひそんでいると判断した。
朝鮮人民はこのような情勢のもとで、アメリカ帝国主義とその手先どもの植民地隷属化政策と民族分裂策動をうちくだき、国の統一のための全人民的な闘争を力強くくりひろげなければならなかった。
そのためには、なによりも革命の参謀部である党をいっそう強め、そのまわりにすべての愛国的な民主勢力をかたく結束させ、党の指導的役割をいっそう高めなければならなかった。そして北半部で革命と建設をすみやかにおしすすめ、朝鮮革命の基地をいっそう強固にしなければならなかった。
これはさしせまった情勢の要求であり、祖国統一と革命の全国的勝利のため必ず解決しなければならない基本的な要求であった。
金日成将軍は、これらすべての問題にたいして全面的な解答をあたえるため、北朝鮮労働党第二回大会の開催を提起した。
一九四八年三月二十七日、ピョンヤンで歴史的な北朝鮮労働党第二回大会がひらかれた。これは北朝鮮労働党創建大会がひらかれてから一年半ぶりに開催される大会であった。
それは決してながい期間ではなかったが、はげしい革命闘争と巨大な変革で刻まれた意義深い日々であった。大

会には、このような変革と建設の先頭にたって献身的にたたかい、たくましくきたえられた代表たちが集まった。

南北朝鮮の革命家と人民の注目のうちにひらかれたこの大会で、金日成将軍は党中央委員会の活動総括報告をおこなった。

将軍の報告は、当面の情勢と社会主義革命の新たな要求にこたえ、南北朝鮮のすべての革命勢力を結集し、北半部の革命基地をしっかりと築き、党を組織思想的に強化するための方針を明らかにした歴史的な文献であった。

金日成将軍は、国際情勢を分析した報告のはじめの部分で、第二次世界大戦後、国際的な政治勢力の分野にあらわれた変化の重要な特徴は、帝国主義反動勢力が弱まった反面、社会主義と民主主義勢力が決定的に強化されたところにあるとし、露骨になったアメリカ帝国主義者の侵略策動をするどく暴露した。

将軍はつぎのようにのべた。

「アメリカの独占資本家たちは戦争の過程で、損失どころかばく大な利潤を獲得しました。それゆえかれらは戦争が終わったこんにちでも、ひきつづきぼう大な利潤を獲得するために自国の労働者階級にたいする搾取を強め、国外市場をより多く奪取し、威嚇、恐かつ、『援助』などのさまざまな方法で、戦争で破壊をこうむった西ヨーロッパとアジア諸国を隷属させようとやっきになっています。かれらはヒトラーがわめいていた『世界支配論』をふたたびもちだし、米英民族の優越性などというでたらめな人種論をふりまきはじめています」

将軍の指摘は、アメリカ帝国主義者がさわぎたててきた弱小民族にたいする「救援者」という仮面を完全にはぎとり、世界反動の頭目としての本質をあますところなく暴露した。

報告のつぎの部分で将軍は国内情勢を深く分析し、革命の新たな勝利のための方針をさししめした。

まず当面の情勢に対処して、国の統一と独立のための明確な方針をうちだした。

金日成将軍は解放後、祖国が二つに分断されたおもな原因は、ほかならぬアメリカ帝国主義者の南朝鮮占領と、かれらの侵略政策にあることを歴史的にするどく暴露し、祖国統一の前途に生じた難関をのりこえ、その偉業をいっそう強力におしすすめるための決定的な対策をしめした。

将軍は国連の不法な決定を断固うちくだき、すべての外国軍隊を撤退させ、朝鮮人民の手で国の統一と民族的独立をかちとるためのゆるぎない自主的な統一のための方針を明らかにした。

自主的な祖国統一の方針は、朝鮮問題は朝鮮人民みずからが解決すべきであり、また解決できるという将軍の徹底した主体思想と自主路線のあらわれであった。

金日成将軍は、アメリカ帝国主義者が「単独選挙」の陰謀をたくらんでいる状況のもとで、祖国統一の新たな局面を切りひらくために、自主的原則と民主主義的基礎のうえで実施される南北の総選挙について提起した。

将軍は、つぎのようにのべた。

「統一的な民主政府の樹立についてのわが党の主張は、以前とかわりません。わが党は一般、平等、直接選挙の原則と秘密投票の方法によって、全朝鮮にわたる最高立法機関の選挙を主張します。

このようにして選挙された人民の最高立法機関は、民主的な憲法を採択し、わが人民を民族的繁栄と幸福への道に導く真の民主主義人民政府を組織すべきであります。朝鮮人民みずからがこのような方法によって統一政府を樹立することは、外国軍隊が撤退してこそはじめて可能なことであります」

将軍が明らかにした自主的な平和統一の方案は、アメリカ帝国主義とその手先である地主、買弁資本家、親日・親米派に反対する革命的な原則にもとづいたものであり、無原則的な平和主義とは縁もゆかりもないものであった。将軍は国の平和的統一のためにたたかいながらも、もし、敵が侵略戦争をひきおこすならば、それには解放戦争でこたえるという革命的な立場をつねにしっかりと守った。

国内情勢にかんする報告のつぎの部分で金日成将軍は、人民政権を樹立し、民主改革を遂行することによってかちえた成果と経験を総括しながら、革命基地をいっそう強化しなければならないと強調した。

将軍は北半部で人民政権を強化し、社会主義建設のための過渡期の経済建設を力強くおしすすめることを、この時期の中心的な課題として提起し、過渡期の初期における経済建設の方向と党の経済政策についてふたたび明確にした。

将軍は、「重要なことは、たんに破壊された経済を復旧するだけではなく、工業その他の諸部門におけるながいあいだの日本帝国主義支配の残滓を一掃し、国営部門が支配的な地位を占めるような方向で民族経済を復興発展させること」であり、「わが党の経済政策の基礎は、重要な工業部門と鉄道運輸、逓信、貿易および金融機関にたいする国家の直接的な計画的管理を保障し、人民経済の発展においてたえず国営部門の指導的役割を強め、協同組合部門と私営部門を正しく結合」させることであると教えた。

金日成将軍はまた、社会主義計画経済を運営した経験のとぼしい事情を考慮し、党組織と党員が経済知識と技術を学び、経済建設にたいする党の指導的役割をあらゆる面で高めることを重要な課題としてしめした。

金日成将軍は報告の第三の部分で、当面の情勢と革命の任務を遂行するための要求にそうよう、党を組織的、思想的に強化し、その指導的役割をいっそう高めるための党建設方針を明示した。

金日成将軍は、党のまえに提起されたぼう大で複雑な革命の任務と党建設の客観的要求からして、党の隊列をしっかりとかためる問題は最優先的な中心問題であると強調した。

将軍は全党を強化し、その戦闘力を高める基本的な環は、党の末端組織である細胞をしっかりと築くことにあるとし、つぎのようにのべた。

「党細胞は、日常的に党員を教育し、訓練して党隊列の思想的一致と組織的統一を保ち、党の路線と政策を実生

活に具現する基礎組織であります。細胞を強化することは、全党を強化する基本であります」

将軍は、それぞれの細胞が党員に任務を正しくあたえ、かれらの党生活と活動状況を綿密に指導し、点検して、党活動を生き生きとした戦闘的なものにしなければならないと強調した。

これとともに党の中核を育て、きたえる問題を強調した。この問題は党の隊列が急速に拡大し、政治的に十分きたえられていない党員が党内に少なくなかった当時の実情からして、非常に重要なことであった。

また金日成将軍は、党の質的強化のために幹部政策を改善し、下部にたいする指導点検を正しくおこない、党員たちの活動作風をあらためることについての具体的な課題を明示した。

将軍は、党を組織思想的に強化するための活動とかんれんして、党の思想活動を強化する問題に格別の注意をはらった。

将軍は、党の宣伝活動と思想教育活動は党を組織的に強め、党を一つの思想と意志で結束する強力な武器であるとし、党の路線と政策、党の創建と強化発展の過程、祖国建設における労働党の活動と役割、党の革命伝統を基本内容とする政治活動を強化し、党員と人民に階級の敵をはっきりと認識させ、かれらの階級的な自覚を高める方向で思想教育活動を強めるよう強調した。

将軍はまた、それまでに展開された反分派闘争の過程を総括して、表面では党を支持するふりをし、内心では党に反対する分派分子の陰険な策動にたいして警戒心を高め、全党をあげて分派分子とたたかわなければならないと強調した。

党の統一と団結を強化することにかんする将軍の教えは、党を内部から分裂させ、瓦解させようとする分派分子の策動をうちくだき、党隊列の統一を強化するうえで画期的意義をもつ綱領的な指針となった。

大会では、金日成将軍の報告を熱烈に支持する討論がおこなわれ、諸決定が採択された。

大会ではまた、南朝鮮で反動的な「単独選挙」を実施しようとするアメリカ帝国主義とその手先一味の犯罪的策動を粉砕し、自主的で民主主義的原則にもとづいた祖国統一を実現するための闘争へ、南朝鮮の全人民をふるいたたせるアピールが採択された。

金日成将軍が提示したこれらすべての方針は、国の統一と北半部の革命基地をしっかりと築く活動ですべての党員と人民の闘争綱領となり、かれらに勝利にたいするかたい信念をあたえた。

このように北朝鮮労働党第二回大会は、朝鮮革命の発展と党建設で偉大な革命的転換をもたらした歴史的な出来事であった。

全党員と人民は、党大会がうちだした任務を実現する創造的なたたかいを力強くくりひろげた。

3　自立経済の遠大な構想

北朝鮮労働党第二回大会の方針をつらぬく過程で、共和国北半部では自立経済を建設するためのたたかいがいっそうはばひろく展開された。

金日成将軍は、自立的民族経済とは国を富強にし、人民生活を向上させるのに必要な重工業および軽工業製品、農産物を基本的に国内で解決できるよう経済を多面的に発展させ、現代的な技術で装備し、自己の強固な原料基地を築くことによって、すべての部門が有機的に連結した一つの総合的な経済体系をつくりあげることだとみなした。

将軍は、世界における自立的民族経済建設の最初の理論家、実践家として、その遠大な構想を実現することに党と人民大衆を一歩一歩導いていった。

将軍はつぎのようにのべた。

「民主主義独立国家を建設するためには、必ず自民族の自立的経済の基礎を確立しなければならず、自立経済の基礎を確立するためには、人民経済を急速に発展させなければなりません。自立的経済の基礎がなくては、われわれは独立もできなければ建国もできず、また生きてゆくこともできないのです」

将軍が教えたように、自立経済建設は国の自主と独立をもたらし、人民生活を向上させるうえで緊要なものであった。政治的な独立を達成したとしても、経済的自立がなしとげなければ、それは真に完全な、自主的な独立国家だということはできない。じつに自立経済は、政治的独立と人民生活の向上のための物質的基礎であった。

解放後、南と北は経済発展においても正反対の道を歩んだ。

南朝鮮を占領したアメリカ帝国主義者は、南朝鮮を植民地として隷属させるために、人民大衆が組織した人民委員会を強制的に解散させる一方、日本帝国主義の独占資本家たちが所有していた工場や企業所を奪い、それを自己にこびへつらう買弁資本家にゆずりわたす策動を強行した。こうして南朝鮮では、民族経済の自立的発展の道が完全にとざされてしまった。

これとは正反対に、主権が人民の手中にある北半部では、金日成将軍の予見性のある措置によって、人民政権の重要な施策としての諸般の民主改革が実施され、日本の独占資本家と親日派たちが所有していた重要産業が国家の所有、すなわち全人民の所有となった。

金日成将軍が指摘したように、重要産業の国有化は、「外来独占資本と隷属資本を収奪し、人民経済の基本命脈を国家が直接にぎることによって、わが国から帝国主義的搾取と隷属の経済的基盤を清算したし、国の重要生産手段を民族経済の自主的な発展と、全人民の福利増進のために利用することができる基本的な条件」をつくりあげたのである。

こうして人民大衆のなかで、自立経済を建設しようという自力更生の革命精神がいっそう高まった。

自立経済を建設することについての金日成将軍の偉大な構想は、一九三〇年代に祖国光復会の綱領が明らかにした経済綱領と将軍の偉大な主体思想、自力更生の革命精神の輝かしい具現であった。

金日成将軍は自立経済建設の偉大な構想から、人民経済の復興における経済発展の展望と当面する人民生活の問題を正しくむすびつけてすすんだ。

金日成将軍はつぎのように教えた。

「ある人びとは重工業だけを強調し、ただちに重工業主義ですすまなければならないという誤った主張をしています。もちろん重工業を復旧し発展させることは重要であります。重工業を発展させてこそ、自立的な民族工業の基礎を築きあげることができ、人民生活を向上させるための物質的条件をととのえることもできます。

しかし、現在われわれがおかれている実情のもとでは、ただちに重工業を大々的に拡大するとか、重工業だけに力をそそぐことはできません。しばらくのあいだは既存の重工業工場を復旧し整備して、人民経済の発展に必要な原料と資材を生産し供給する方向にすすまなければなりません。そして、基礎すら築かれていない軽工業を創設して、重工業との均衡を保つようにし、また農業の発展を力強くおしすすめなければなりません」

このように将軍は、人民経済の基礎である重工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業の発展にも深い注意をむける方向をしっかりと守った。

かつて、経済にたいする管理運営からまったくのけものにされていた人民にとって、人民経済のすべての部門をりっぱに運営していくのは容易なことではなかった。まして自立経済の建設は、だれも歩んだことのないはじめての道であった。

金日成将軍は自立経済にたいする構想にもとづいて、経済建設の初期から人民経済の各部門にたいする具体的な

指導をおこなった。工場と企業所、農村はいうまでもなく、国のすみずみまでみずからたずね、勤労者を自立経済建設へと力強くたちあがらせた。

抗日武装闘争の過程で創造された将軍の革命的な活動方法は、経済建設にたいする指導においても具現されていった。

将軍の指導では、理論と実践、経済管理運営のための方法の探求と実地指導、そして現状把握が完全に一つの統一性と体系性をもっていた。

将軍は各道の重要工場や企業所、炭鉱や鉱山を直接訪問し、現実をよくつかんで人民経済復旧発展の具体的な方法を教えた。

工業にたいする指導では、重工業企業所に優先的な関心をはらった。

一九四七年七月二十一日、金日成将軍は黄海製鉄所を現地指導した。将軍は復旧したコークス炉の火いれ式に参席し、労働者たちの成果をたたえた。この製鉄所ではコークス炉のほかにも薄板延伸職場などが稼動していたが、肝心な溶鉱炉はまだ息をふきかえしていなかった。

しばらくのあいだ構内をくまなく見てまわった将軍は、コークス炉職場につくと、集まっていた労働者たちにたいし、かれらがいままでに達成した成果をほめたたえたのち、熱のこもった語調で溶鉱炉の復旧を訴えた。

そして、完全な独立国家の建設で重要な位置を占める製鉄所復旧建設の速度を高め、工場復旧のまえによこたわる数多くの難関を愛国的情熱で克服しなければならないとのべながら、「朝鮮人民の力でできないことはない」と強調した。

そして工場の指導的幹部たちには、漁船を手にいれて自分たちで魚をとり、後方供給事業の基盤をしっかりととのえ、魚や野菜を供給し、不足がちな労働者たちの住宅もより多く建てるようこまかく教えた。そして国家的に

も、この工場の労働者たちに補給米と栄養剤をおくる措置をとった。
労働者たちは、国が困難な状況にあるにもかかわらず、自分たちにそそがれる将軍の厚い配慮に感激し、高い労働成果でもってこれにこたえた。
かれらは、敗北した日本帝国主義者が、十年かかっても絶対に復旧できないとうそぶいていた溶鉱炉を、金日成将軍が現地指導をおこなってからわずか四か月あまりのみじかい期間に復旧し、溶鉄を流しはじめた。
一九四七年十二月三日、黄海製鉄所の労働者たちは、敬愛する領袖の参席のもとに第三号溶鉱炉の出銑式をおこなう栄誉をになった。
金日成将軍は労働者たちの熱烈な歓呼をうけながら、みずから出銑式のテープを切った。出銑工たちがみごとな手さばきで溶鉱炉の出銑口をつきやぶると、溶鉱がまばゆい光を放ちながら流れだした。労働者たちは誇りとよろこびにわきたち、のどがはりさけんばかりに「金日成将軍万歳！」と叫んだ。これは領袖があたえた無限の力をもって幾重もの難関をのりこえ、技術の最初の高地をひととびで占領した朝鮮の労働者階級の勝利の歓声であった。
将軍は満面に微笑をたたえながら出銑工たちのまえに歩みより、「勇敢な戦士諸君！　さあ、握手をしよう」といいながら、汗でよごれた労働者たちの手をしっかりとにぎりしめた。
将軍は、労働者たちが自力で溶鉱炉を復旧したことを高く評価し、つぎのようにのべた。
「諸君は溶鉱炉の主人であり、国家の主人です。諸君は、わが国をささえてたつ貴重な宝です……。わが国の富強な発展は、あげて諸君の力にかかっています。溶鉱炉を早く復旧し、溶鉄をたくさん生産してこそ機械をたくさんつくり、軽工業を発展させ、農業も発展させることができるのです。そうしてこそ、全朝鮮人民が一日も早く幸福な生活をおくることができるのです」
これは、溶解工たちにたいする過分な賛辞ではなかった。鉄はまさに人民経済の礎石であり、大黒柱であった。

鉄、鋼鉄があってこそ、経済も人民の幸福も真にゆるぎないものとすることができるのである。それゆえ将軍は、自立経済建設において真っ先に製鉄部門に力を集中し、溶解工たちの勝利をこれほどまでに高くたたえたのである。

金日成将軍はふと、一出銑工の首にある大きなやけどのあとに目をとめた。顔をくもらせた将軍は深い物思いにとらわれながら、やけどのあとをしばらくさわっていた。そのやけどのあとは、主権をうばわれ鉄が人民のものでなかった暗い時代に、朝鮮人民がうけたあらゆる苦痛とさげすみを雄弁に物語っていた。その出銑工の場合も、十七歳のときから溶鉱炉で日本人にムチうたれ、火に焼かれ、涙ならぬ血を流しつつ働きつづけなければならなかったのだ。

しかし、世のなかはかわった。いまやかれは国の主人となり、自身と祖国のために溶鉄をつくりだしているのである。かつては奴隷の鎖につながれ、侵略者のムチがうなったかれの体に、いまは人民の領袖が手をおき、むかしの傷あとをなでながら胸を痛めてくれているのだ。

血が凍るほどの苦痛にも泣くことを知らなかったその出銑工は、将軍の愛情にせき切って流れる涙をこぶしでぬぐいつづけた。感激はすべての労働者をとらえ、かれらの胸を将軍にたいする忠誠心でわきたたせた。

金日成将軍は出銑作業を視察してから、歓迎に集まった群衆のまえで祝賀演説をおこなった。

金日成将軍は、北朝鮮で民主主義的課題が勝利のうちに遂行される途上において、きょうはもう一つの勝利をおさめた日であるとのべ、この工場の労働者たちは自力で銑鉄を生産し、人民があたえた使命をりっぱになしとげたと高くほめたたえた。将軍はつづけて、この勝利に満足することなく、より大きな勝利をかちとらねばならないとのべ、そのためには働きながら学び、学びながら働いて、みんなが熟練工にならなければならないと激励した。

金日成将軍のこのような直接的な指導のもとで、日本帝国主義者が敗走するときに破壊した工場、企業所などの大部分が復旧され、新たな生産を開始するようになった。

朝鮮の労働者階級は、現代的な工場、企業所などを自力で復旧してゆくことによって、領袖がさずけてくれた自力更生の革命精神の底知れぬ力を誇示したのであった。

また将軍は復旧された工場や企業所などの運営を改善し、生産の増大をはかりながら、労働者たちの高まった熱意を組織するため、増産競争運動を拡大し、強化する措置をとった。

一九四八年二月、金日成将軍は食糧問題を解決し、増産競争の炎を燃えさからせ、人民経済のあらゆる部門を稼動させる構想をいだき、興南（フンナム）肥料工場をたずねた。

工場のなかをすみずみまで見まわった将軍は、一万余の群衆をまえに演説をおこなった。

将軍は、「いつの時代もそうであるが、歴史を創造するのは人民大衆であり、とくに現代社会を前進させるおもな力は労働者階級」であるとのべ、自立経済建設において労働者階級が遂行しなければならない先駆者的役割を強調した。

将軍の教えをうけたこの地の労働者たちは、いっそうはげしい増産闘争をくりひろげた。生産目標は日一日とのびていった。革新につぐ革新をくりかえしていたかれらは、三月二十日に従業員決起大会をひらき、一九四八年の人民経済計画を十一月までに終えることを決議し、全国の労働者たちに増産競争運動をよびかけた。

金日成将軍が火を点じた増産競争の炎は、このようにして全国にひろがっていった。そしてそれはいっそう発展し、全国的な規模で企業所間の競争として展開されていった。工場の主人として、富強な自主独立国家建設のりっぱな主人となった労働者たちの愛国的創意性は、かつてない高まりを見せた。

将軍はたちおくれていた農業をたてなおし、当面の食糧問題を解決するために、農業の発展にも慎重な注意をはらった。

金日成将軍は、つぎのようにのべた。

「こんにち、わが国の農業のまえに提起されている当面の課題は、耕地面積を拡張し、土地をよく利用して収穫をいっそう高め、北朝鮮を穀物の不足した地帯から穀物のゆとりのある地帯にかえ、食糧問題を解決することであります」

農業における水の問題は、数千年ものあいだ農民を苦しめてきた問題であった。

将軍は農村における水利事情を具体的にとらえて対策をたてるため、土地改革法令を発布した一か月後の四月に平安南道安州（アンジュ）郡大尼（テニ）面白鶴（ベクハク）里をたずねて、農民たちと会った。

水不足の実情をこまかくきき、田畑を注意深く見てまわった将軍は、やがて灌漑水が流れ、機械で農業をいとなむ新しい世のなかが必ずくると農民たちに話した。

将軍は農民たちの勤労意欲に国家的支援を結合させ、全国各地で灌漑工事をくりひろげた。平安南道においては一九四七年の春から数十か所の工事がはじまった。

金日成将軍は、いそがしい日々をおくりながらも各地の灌漑工事場をたずね、こまかいところまで指導をした。

一九四八年九月からはじまった平安南道灌漑工事も、やはり将軍の直接的な指導をうけた。

平安南道灌漑工事は、大同江（テドン）と清川江（チョンチョン）の水が延々数十里にもおよぶ、複雑な大小数万個の構造物をへて五万余町歩の十二（ヨルドゥ）三千里平野をうるおす、わが国の歴史上類例を見ない大規模な灌漑工事であった。農民たちの水の苦労を自身の苦しみとした将軍は、国情が困難であるにもかかわらず、このように大規模な工事を大胆にくりひろげていった。また金日成将軍は、山間地帯の火田民の生活改善問題にも格別な関心をはらった。将軍は火田民の苦しい境遇を考慮し、農業現物税の税率を一〇パーセントにひきさげる対策をたてる一方、かれらの生活を向上させるためにあらゆる努力をかたむけた。

一九四七年の初秋、将軍は東海岸の視察からピョンヤンにもどる途中、車をおりてしばらく歩かねばならない

農民とともに田植をする金日成首相

陽徳のある山村をたずね、ふもとにある一軒家で李老人と席をともにした。

将軍は老人にたばこをすすめ、暮らしや野良仕事についてたずねたのち、土地改革の意義についてもやさしく説明した。話が山間地帯の農民の生活改善問題におよぶと、将軍は、やせた土地でも肥料をたくさんやれば肥えた土地になること、この地方で現金収入をふやすには、むかしからよくできる「陽徳草」（煙草の葉）をたくさん植え、とくに山菜と野生の果実を利用して副業をうまくいとなむよう例をあげながら教えた。

将軍の話を注意深くきいていた李老人は、

「ほんとに！　お話をきいていますと、むこうの山がみな黄金のなる稲むらのように見えてきます。……ところで、そんなたのしいお話を村の人たちにもきかせ

てやってくださいませんか。みんなきっと耳をそばだてることでしょう」
と、感嘆の声を放った。じつのところ李老人は、このやさしい若い方が金日成将軍であることを知らずにいたのだが、しばらくして面人民委員会の委員長がきたとき、はじめて将軍であることに気づいたため、身のおきどころに困ってしまうほどあわてた。
「将軍さま！　ほんとうに失礼しました。将軍さまだと気づかなくてつい……」
感激で胸がいっぱいになった老人は、話をつづけることができなかった。
老人はふところから手あかのついた小さな手帖と鉛筆をとりだし、なにかを書きとめてから口をひらいた。
「将軍さま、ここに、金日成将軍さまがわたしの家をたずねてくださった、と書きました。これを子どもたちにのこしたいと思います」
すると将軍は、満面に微笑をうかべながら語った。
「おじいさん、それよりも、すべての山から黄金をとりいれるようにと書いて、子孫にゆずりわたしてください」
集まってきた人びとは、人民にたいするかぎりない愛情が詩につつまれたような将軍の話に深く感動した。興奮した老人は急にたちあがると、両腕を鶴の羽のようにひろげて踊りはじめた。
金日成将軍は李老人の家で一夜をすごし、村人たちにも会った。
あくる日は山麓や林のなかをかきわけながら、山の利用方法についてくわしく教えたのち、村人たちと別れのあいさつをかわした。
「山をよく利用して、もとでのいらない副業を大きくひろげるよう」にというこの教えは、将軍が白頭の密林を舞台に抗日遊撃闘争をくりひろげていたときの実践的経験にもとづいてうちだした賢明な方針であった。
過渡期の経済発展は、きびしい階級闘争のなかですすめられていった。

金日成将軍は、一部の人民経済部門で働く活動家たちが、社会主義経済形態の優勢を保障できる条件をうまく利用できなかったために生じた、都市や農村での否定的な現象にたいして強い制裁をくわえる一方、それをただす対策をたてた。

手工業者や水産業者たちの利益をはかるためには、かれらを自発性の原則にもとづいて生産協同組合と水産協同組合にもうらする一方、商品流通分野での執拗な資本主義攻勢をくいとめ、社会主義商業の役割を高めるための対策をたてた。

都市と農村で資本主義的要素を利用し、制限することについての党の方針に反し、投機と高利貸をこととする現象にたいしては、強力な対策がとられた。

農村では将軍の発案によって農機械賃耕所が設けられ、協同的組織形態である農業信用協同組合が拡大強化された。これは農牛の賃貸制や、その他の不法な手段で貧農を搾取しようとする富農への積極的な攻勢であった。

日がたつにつれて社会主義経済形態の主導的役割が強まり、都市と農村では個人経営の社会主義的改造のための前提がととのえられていった。

金日成将軍は、経済建設を促進させるためには党の指導をより強化しなければならないと考えた。

将軍は、党は人民大衆を政治的に指導できるばかりでなく、経済建設や企業の管理と運営に明るく、経済にたいする知識と技術をもつ建設者の党にならなければならないと強調した。

経済建設で党組織の役割が高まり、計画遂行における安逸で形式的な態度を克服し、勤労大衆の政治的熱意を高めるための組織思想活動が強力におしすすめられた。

将軍の正しい指導のもとで経済の管理運営水準も高まった。一九四七年と一九四八年の各々一年間の計画を遂行した経験にもとづいて、一九四九年からは二か年間の展望計画がたてられるようになった。それにともない、自立

経済建設のためのぼう大な事業がより大きな規模で、より遠い将来を見とおしながらすすめられるようになった。
しかし新しい祖国建設の前途には、新たな任務とともに、いくつかの難関がよこたわっていた。
産業の植民地的跛行性をなくし、経済の自立的土台を強化するためには数多くの建設をすすめなければならなかったし、復旧された工場や企業所を拡張して、それを正常に運営しなければならなかった。それには多くの労力が必要とされた。
しかし一部の経済活動家たちは、農民の生活が安定するにつれ、日本の植民地支配のときのように労働力が農村から都市へと自然発生的に流れこまず、都市にも失業者がいなくなった新たな環境と条件を正しく見つめようとはせず、じっと手をこまねいて、労働力がひとりでに工場へ流れこむのを待っているだけだった。
経済建設の規模が大きくなり、経済課題がより複雑になるにしたがって生じた新たな環境と新たな課題は、まったく新しい活動作風と方法を要求していたのである。
そのために金日成将軍は、一九四九年十一月に産業部門経済および職業同盟熱誠者大会の開催を提起し、新たな環境にあうように経済指導の水準を高める決定的な対策をたてた。
将軍は、経済指導活動家たちが新たな環境と条件にふさわしく思想的な観点をただし、新しい活動方法を体得するよう強調した。
そしてとくに、失業が根絶された人民民主主義制度のもとで、労働力が自然発生的に集まってくるだろうと安易に考える現象を批判し、労働力を組織的に計画的に確保してその流動をふせぎ、勤労者の技術技能水準を高めるなど、労働力問題を解決する具体的な方法をしめした。
経済指導活動家たちの水準を高めるための諸対策は、工業、農業、林業、水産業、交通運輸など、人民経済部門別熱誠者会議でより具体化された。

将軍はこれらの会議に参加し、実質的な指導をおこなった。

将軍のこのような積極的措置と具体的指導によって、たびかさなる難関はそのつど克服された。

革命的民主基地強化の物質的基礎である自立経済の土台は、このようにめざましく築きあげられていった。

金日成将軍の正しい指導と人民大衆の高揚する愛国的熱意により、人民経済計画は毎年超過遂行された。

一九五〇年上半期における工業生産高は、解放前の最高水準を突破した。とくに機械製作工業と軽工業部門が急速に発展し、産業の植民地的跛行性も少なからず克服された。

農業でも大きな成果がかちとられた。穀物収穫高は、一九四八年にすでに日本帝国主義支配期の最高水準をはるかにこえた。もともと山が多く耕地がせまいため、不足がちだった穀物問題を解決したことはきわめて大きな勝利であった。

社会主義経済形態は工業においてばかりでなく、都市と農村の商品流通においても圧倒的な地位を占めるようになった。

金日成将軍が提示し貫徹した自立的民族経済建設の路線は、最初からその生活力をあますところなく発揮した。

一九四六年から一九四九年のあいだに、消費物資の小売り価格は半分あるいはそれ以下になったが、労働者、事務員の貨幣賃金は逆に一五二・八パーセントに増大し、かれらの生活水準は非常に高まった。

農民の生活も日ましに向上した。農林省が四十二の農村を調査した資料によれば、穀物収穫高は、一九四四年の十一万七千かますから一九四九年には十五万かますにふえた。また一九四四年には食糧が不足して八千かますを買いいれるか、借りいれなければならなかったが、一九四九年には多くの食糧を市場に売っても一万かますの余剰穀物を手にするようになった。

これらの農村では、三年のあいだに全農家の一八パーセントにあたる住宅を新しく建て、役畜として六百二十八

頭の牛まで買いいれた。

ながくはなかったが、平和的建設期はじつに創造と繁栄の日々であった。わが国の悠久な歴史のうえで、このように希望にみちた幸福な時期はかつてなかった。人民大衆は、富強な自主独立国家建設のこの時期を「黄金の時代」とよび、誇らかに謳歌した。

4　新しい民族文化の創造へ

金日成将軍は、新たな民族文化の建設を新しい祖国建設の重要な一翼とみなし、その発展のためにあらゆる努力をかたむけた。

将軍は過渡期の任務と自立経済建設路線の諸要求を分析し、新しい文化建設の基本課題についてつぎのようにのべた。

「文化建設の基本課題は、人民教育と文学芸術分野において日本帝国主義の思想ののこりかすを完全に一掃し、民族文化を急速に発展させ、全人民の知識水準を高め、人民経済と国家機関に必要な、能力のある、民主主義精神で教育された民族幹部を数多く育てることであります」

すなわち、社会主義を建設するためには文化革命の課題を遂行し、自己の有能な民族幹部を数多く育成して、人民経済を自己の幹部たちでゆるぎなく運営しなければならないということである。

金日成将軍は、新しい文化建設の基本方針をさししめしたばかりでなく、国の主人となった人民が無知と蒙昧からぬけだして文化の主人になり、かつて学ぶ権利を奪われていた勤労者とその子弟のだれもが学べるように、当面の課題を正しく解決していった。

日本帝国主義の愚民化政策により、勤労者の大半は自分の名前さえ書けない文盲としてのこされていた。文盲をなくさないかぎり、勤労者たちを政治生活に積極的に参加させることができず、経済建設のたのもしい働き手に育成することもできなかった。

したがって将軍は、文盲一掃を新しい祖国建設のまえに提起される緊急課題の一つとしてかかげ、全人民的な運動としておしすすめるようにした。

将軍の教えにしたがって、この運動の先駆者となったのは、江原道でも深い山奥の平康郡玉洞里の農村婦人李桂山さんであった。

それには、つぎのような一つのエピソードがあった。

彼女は、目に見えるのはけわしい山なみ、きこえるものといえば風の音ばかりという山間僻地で、作男であった父と臨時に他家の手伝いをして生活していた母のひざもとで、幼いときから力にあまる苦役と飢えにさいなまれて育った。学校の門前にもゆけなかった彼女は、十六歳になった年に地主の借金のかたに買いとられ、みじめな下女としてこきつかわれた。年ごろになって嫁いだが、その夫も地主の作男だった。そして夫は二人の子どもをのこしたまま、いわゆる「報国隊」にひきたてられて命をおとしてしまった。

彼女は胸をかきむしって号泣したが、なぐさめのことばをかけてくれる人さえいなかった。もちろん、身をよせるところもなかった。彼女は文字一つ学ぶこともできないまま、幼い子どもを育てるために苦しい下女働きをつづけた。やがて国が解放され、まともな世のなかになってはじめて、彼女は「ものをいう道具」から自分の生活をもつ人間にかわった。

李桂山さんは他の人びとと同じように、長年の夢であった土地を金日成将軍からわけあたえられた。胸をおどらせて畑にでかけてみると、村の長老たちが一番いい土地に「李桂山」という名札をたてて待っていた。ところが生

まれてこのかた、文字というものを知らない彼女は、自分の名札を見ても、なんのことかさっぱりわからなかった。

結局くわしい説明をきいてはじめて、それがまぎれもなく自分の土地であり、自分が突然、二千坪をはるかにこえる土地のあるじになったというおどろくべき事実を知ったのである。

そのときだれかが、「金日成将軍さまが、あなたに一番いい土地をくださったんですよ」と教えた。

その瞬間、不幸と苦役の半生にさいなまれてきた彼女は土地にひれふし、自分の名札をしっかりとだきしめ、声をあげて泣きくずれた。

悪夢のような過去への追憶と、太陽のような将軍の恩恵が胸をうったからである。

彼女は分配された土地を熱心に耕した。野良仕事もかってなくはかどった。

日がたつにつれて田圃は青いじゅうたんにかわり、それはふたたび黄金の波にかわった。彼女の胸は将軍の恩恵にたいするありがたさでいっぱいになった。

大きな穴倉をじゃがいもでみたし、穀物を山のようにつみあげた彼女は、こみあげてくる熱いもので夜も寝つかれなかった。わけても、こんなに大きな恩恵をうけながら、金日成将軍にたいして感謝のことば一つ申しあげていないことがいたたまれなかった。こうした思いがつもりつもったとき、それはついに、穀物をもってピョンヤンにゆき、将軍に直接お目にかからねばという決心にかわっていた。

一九四七年、春の野良仕事をりっぱに終えた李桂山さんは、将軍のお目にかけようと一番よく実った小麦二斗とじゃがいも一斗をえらんだ。

しかし、出発しようと決心はしたものの、どうたずねていってよいのかわからなかった。そこでまず、十六キロもはなれた平康郡党委員会にゆき、委員長に会ってことのしだいを話した。

郡党委員長は、彼女の決意をほめたたえながらも難色をしめした。金日成将軍は国事で多忙な身であるから、おそらく農村の一婦人にまでいちいちお会いになることはむづかしいだろうということであった。

彼女は重い心をいだいたまま家にもどった。しかし夜も寝ずに考えぬいたが、将軍にお目にかからなければどうしても心が安まらないように思えた。

こうして彼女は、きれいに洗濯して折目をたてた麻のチマ（スカート）とチョゴリ（上衣）を身にまとい、将軍への贈り物を頭にのせてピョンヤンへと旅立った。

やがて彼女は元山をへてピョンヤンについた。生まれてはじめて大都会にでてきた李桂山さんは、あちこちをさまよい歩き、道ゆく人びとになんどもきいてて、ようやく将軍の住居をたずねあてた。

彼女はそこで、一人の幹部にたずねてきたわけを話したあと、しばらくして将軍の部屋に案内された。

李桂山さんがふるえる胸をやっとおさえ部屋にはいると、金日成将軍は明るい微笑をうかべながら彼女をむかいれ、ふしくれだったその手をにぎりしめて、「遠いところからご苦労さまでした」とやさしくねぎらいのことばをかけた。

彼女の目からは、とめどもなく涙が流れた。

「将軍さま、将軍さまがくださった土地から、わたしがつくった小麦とじゃがいもをもってまいりました。ほんのわずかですが、わたしの真心のしるしですので、どうかおうけとりください。つい一昨年まで他人の召使いをしていたわたしが、いまでは将軍さまのおかげで自分の家をもち、自分の田畑をたがやし、胸をはって暮らすことができるようになりました。……」

彼女はそれ以上、ことばをつづけることができなかった。

強く心をうたれた金日成将軍は、くりかえし礼をのべながら深い考えにふけったあと、実家に帰った娘をむかえ

る父親のように、やさしく村の農作状況や農民の生活、また教育のようすなどについてくわしくたずねた。
村に人民学校しかないという話をきいた将軍は、「わたしに贈り物をしてくださるよりも、村に学校をつくる仕事を手助けした方がもっとよかったでしょうに……」といった。
そして将軍は、急に話題をかえるとつぎのようにたずねた。
「あなたはいま、なにを勉強していますか？……新聞を読んでいますか？」
彼女は返事をすることができなかった。文字を知らない彼女は、やっと顔をあげてこたえた。
「将軍さま、わたしはまだ文字を知りません」
将軍は、深い思いやりのこもった微笑をうかべながらいった。
「すべての朝鮮人民が、わが国の文字を読めるようにならなければなりません。そのためには、まず勉強しなければならないのです……。あなたも勉強をしなさい。いまからでもおそくはありません。……家に帰ったら、ハングル（朝鮮文字）学校へ熱心にかよいなさい。文字を知ってはじめて人間が人間らしくなり、国の仕事もりっぱにできるのです」
彼女が文字を学びますとこたえると、将軍はこういった。
「それでは、わたしと約束をしましょう。いまから三か月後には文盲を退治して、あなたの手で手紙を書いておくってください。どうですか、約束できますか？」
李桂山さんは強くうなづいた。
将軍は彼女に、まず自分の文盲を退治して、すべての人びとが文盲退治運動をくりひろげるよう、一度みんなによびかけてみなさいといった。彼女は力強くこたえた。
「はい、そうします。約束どおりにしてみます」

金日成将軍と別れのあいさつをかわした李桂山さんは、生まれてはじめて乗用車にのり、りっぱな旅館にむかった。そこで彼女は車に同乗してきた青年から、金日成将軍が旅費のたしにといってわたしてくれたという部厚い封筒をうけとった。

彼女はあくる日、胸をふくらませて村に帰った。途中でひき返してくるものと思っていた李桂山さんが、金日成将軍に直接お目にかかって帰ってきたという知らせに、村中はお祭りさわぎのようにわきかえった。

彼女はその日の夜から人民学校の先生をたずね、熱心に文字をならいはじめた。

こうして彼女は日中はもちろん、床についても本を手からはなさなかった。雨のふる日は本を油紙につつみ、畑にでかけて学んだ。家では部屋のなかや台所にあるすべての品物に、その名前を一つ一つ書きつけてはおぼえるように心がけた。

村の婦人たちも彼女のあとを追って学びはじめた。やがて彼女は、勉強部屋までつくって村人たちといっしょに文字を学んだ。彼女は、金日成将軍が旅費にといってあたえてくれたお金を学校建設資金にさしだし、学校建設にも献身的に参加した。こうして文字どおり、村中が文盲退治と学校建設にたちあがった。

いつのまにか、金日成将軍との約束の日が近づいてきた。彼女は何日も徹夜をして、その後の生活をこまごまと手紙にしたためた。

その手紙をおくる日、平康郡では農民集会がひらかれ、文盲退治をめざす「李桂山運動」を全国によびかけた。

この運動は、またたくまに全国にひろがっていった。

手紙をだして何日かすぎたある日、李桂山さんは思いがけず金日成将軍から、なみなみならぬ賞賛のことばと激励の手紙をうけとった。そしてその後、将軍から表彰状と記念品に時計まで贈られた。

よろこびと幸福感で胸がいっぱいになった彼女は、その後、人民と祖国のためなら水火をもいとわず身をささげ

てたたかった。こうして彼女は大学まで卒業し、やがて最高人民会議の代議員となる栄誉までになった。つまり李桂山さんは、金日成将軍のあたたかい導きによって召使いの身のうえから土地と国の主人となり、幹部となったのである。

金日成将軍がくりひろげた文盲退治運動は、りっぱに実をむすんだ。こうして北半部は、一九四九年の三月にいたって、アジアで最初に文盲を完全に退治した国となった。

将軍は文盲を退治した人びとに、成人学校をつうじて初、中学校から大学にいたる学びの道をひらいてやるかたわら、農民の技術文化水準を高めるための活動に格別な関心をはらった。

将軍は国家百年の大計の遠大な構想のもとに、次代の教育と民族幹部育成事業を力強くおしすすめた。将軍は学校建設事業を全人民的な運動として展開する一方、ゆく先ざきでまず学校をたずね、教員や学生たちの生活に心をくばった。

将軍のひたむきな指導と配慮によって、まもなく普通教育体系が確立し、学齢児童の三分の二以上が就学できなかったかつての日本帝国主義支配時代のたちおくれをなくし、一九五〇年の新学期からは初等義務教育制度を実施する条件がととのえられた。教育内容も祖国建設の要求にあわせ、全面的に新しくつくりかえられた。

高等教育部門でも、民族幹部養成についての将軍の遠大な構想と具体的な指導のもとに、日本の植民地支配時代には単科大学一つなかった北半部に、一九四九年現在、金日成総合大学をはじめ十四の大学が創立された。

このように、次代の教育と民族幹部育成事業を高い段階へひきあげるまでに、将軍がこの分野にそそいだ力と配慮は筆舌につくしがたいものがある。

将軍は祖国に凱旋した直後から、次代の教育と民族幹部養成事業に深い関心をはらった。

一九四五年十月二十八日、平安南道大同郡にでむいた金日成将軍は、「知識のある人は知識で、技術のある人は技術で、お金のある人はお金をだしあって民主主義自主独立国家を建設しなければなりません。そのために、われわれには今後、より多くの人材が要求されます。だから、学校をより多く建てなければならないのです」と群衆のまえで強調した。

歓迎集会のあと、将軍のことばに勇気をえたある農民は、必ず自分たちの力で中学校を建設してみせますと申しでた。将軍はたいへんよろこび、その方法について一つ一つ教えたあと、学校につくりかえるという建物にいってみようといった。随員たちは帰る時間になりましたとつたえたが、将軍は農民といっしょにその場所へゆき、学校をどのように建てるべきかについてくわしく教えた。

将軍の直接的な導きのもと、学校を建設するという誇りを胸に、わずか一か月間で八つの教室と運動場までつくったこの地の人びとは、自分たちの代表をピョンヤンにさしむけた。

かれらをつうじて学校の建設状況をきいた将軍は非常に満足し、わが国のことばと文字でわが民族の歴史を教えるべきであり、教科書がなければ教員たちが書いてでもわれわれのものを教えなければならないと激励した。そして学問だけでなく、体育も活発におこない、道徳と品性の高い学生を育てるようにと教えた。

教員の一人が、学校の名前をつけてくださいと申しでると、将軍はしばらく考えにふけったのち、「三興(サムフン)中学校」にするがよいといった。

この名前には、知、徳、体の三つをかねそなえた人材を養成し、国の柱に育てようという深い意味がこめられていた。

金日成将軍は、もっともたちおくれていた民族技術幹部の養成事業をたてなおすために、文字どおり万難を排した。教育と科学の殿堂——金日成総合大学を創設し、発展させるためにかたむけられた将軍の努力と配慮は、じつ

に次代を育てる慈父の心情そのものであった。

一部の消極分子たちは、基礎がないとか教員がいないといいながら、総合大学の創設にあくまで反対した。

しかし将軍は、経験と基礎はないが、自主独立国家建設において焦眉の問題となっている技術人材の養成問題、とくに、その確固とした土台となる総合大学の創設を決してあとにまわすことはできないと考えた。

金日成将軍のこの大胆な決意には、朝鮮人民の主体的な力にたいする深い信頼がよこたわっていた。将軍は総合大学創設のために、各地に分散していた科学者を一人ひとりまねき、みずから会って活動の方向をかれらにあたえ、大学教授の陣容をととのえていった。

将軍は祖国に凱旋した直後から、総合大学創立に必要な七万余巻の書籍をすでに準備していた。

一九四六年十月一日、北半部で最初の総合大学が創設されたことは、全的に金日成将軍の名とむすびついていた。

したがって北朝鮮人民委員会は、人民大衆の一致した意思と希望を反映し、この大学を「金日成総合大学」とよぶことにしたのである。

金日成総合大学のその後の発展においても、やはり将軍の名とむすびつかないものはなかった。

一九四七年の春、数百万の農民が愛国米をさしだしたとき、将軍は、「国家百年の大計のために、次代を教育する事業につかうのがよい」とのべ、それを金日成総合大学の新校舎建設にあてたし、大学発展の方向についてはもちろん、教職員と学生の生活にいたるまで細心の注意をはらった。

金日成将軍はまた、科学技術の発展のために賢明な方針をうちだした。この方針は、科学技術の発展において主体的な立場をしっかりと守り、科学技術を国の自立的民族経済の建設に徹底的に服務させようとするものであった。

金日成総合大学の校舎竣工式で花束をうける金日成首相

将軍は、先進国が達成した科学技術の成果をわが国の実情にあうように摂取することについても教えた。

かつて科学技術を発展させることができないでいたころ、すでに外国では汽車や汽船をつくって利用していたが、李朝の支配層は冠をかむり、ロバにのって往き来し、時調（高麗末葉から発達した朝鮮の定型短詩形文学）を詠んで歳月をおくっていたために、侵略者に国まで奪われてしまったのである。

将軍は、このようなにがい過去をふりかえり、最短期間内にたちおくれた境遇からぬけだし、高度に発展した科学文化を築きあげようと決心した。そして科学技術の発展に大きな力をふりむけ、科学者をたいせつにし、かれらの生活に深い配慮をめぐらした。

生物学を専攻するある博士へのあたたかい配慮も、その一例である。

将軍はみずから狩猟などをして手にいれたため

ずらしい動物や魚類を、生物学発展のための研究に利用するようにと博士におくりとどけ、高齢の身で科学研究にたずさわる博士の身を案じて乗用車まで贈った。将軍はまた、非常にたいせつにしていた最新式猟銃や弾丸、猟犬まで博士に贈った。

このような肉親的な配慮は、すべての科学部門で働く無数の科学者たちにほどこされた。

また教育、科学とともに、文化芸術も、金日成将軍の正しい方針と具体的な指導のもとに発展の一路をたどった。

将軍は文化芸術を新祖国建設の力強い手段とみなし、この部門の活動家たちに、「みなさんは文化戦線でたたかう闘士たちであります。みなさんには、みなさんの口で、みなさんの筆で、朝鮮社会の発展を逆もどりさせようとする反動勢力をうつべき責任があり、民族文化を発展させ、人民大衆を愛国主義と民主主義精神で教育する責任があります。われわれが反動勢力を粉砕し、新しい民主朝鮮を建設しうるか否かは、みなさんが文化戦線でりっぱにたたかうか否かに大きくかかっています」と激励し、ふだんの指導を惜しまなかった。

将軍は、民族文化芸術を発展させるための方針をつぎのように明らかにした。

「自己の固有の文化のなかからすぐれたものを継承し、たちおくれたものは克服し、先進諸国の文化のうちで朝鮮人民の気風にあう進歩的なものを摂取し、われわれの民族文化と芸術を発展させなければなりません。これが民族文化建設のもっとも正しい道であります」

さらに将軍は、文学芸術家たちの隊列を育て、各種の文学芸術家団体を組織する活動から、かれらが創作した個々の作品にいたるまで、じつにはばひろく深い指導をあたえた。

その一例として、『愛国歌』の創作過程をあげることができる。

朝はかがやけ大地
黄金のめぐみあふれ
うるわし三千里祖国
半万年のながき歴史
きらめく文化をつぎし
賢きたみくさのほまれ
いのちささげて守らん
永遠にさかえよ祖国

平易でありながらも内容の深い歌詞に、重々しい旋律をもったこの『愛国歌』は、歌詞の主題、内容、作曲にいたるまで、金日成将軍の直接の指導のもとに創作されたものである。

一九四六年の秋、将軍は数名の作家と作曲家に会い、『愛国歌』の創作方向についてつぎのようにのべた。

「わが国はじつに美しい国です。三面が海でかこまれており、山は雄大かつ荘厳です。田園には五穀百果が実りますし、地下資源も無尽蔵にあります。そしてわれわれは五千年もの悠久な歴史をもつ人民であり、燦然たる文化に輝く人民であり、われわれの先祖は遠い太古のむかしから祖国の山河を血で守りぬき、外敵をうち、抗日パルチザンは日本帝国主義侵略者に反対して手に武器をとり、命をかけてたたかいました。いまわが勤労人民は搾取と抑圧から解放され、自己の手中に政権をしっかりにぎり、富強な祖国を建設するためにすべてをささげています。このようにうるわしい祖国と、すぐれた闘争の伝統をもつ朝鮮人民の民族的誇りと自負心を歌にこめるべきです」

将軍の教えをうけた詩人と作曲家は、ながい時日をかけ、多くの苦心のすえに『愛国歌』を創作した。

一九四七年六月、将軍の指導のもとに、北朝鮮人民委員会会議室で『愛国歌』が審議された。そのとき将軍は、歌詞の一節一節をとりあげ、細心の指導をおこなった。そして、「きらめく文化を」というくだりから最後までは反覆するのがよいと指摘し、「わが国は、燦然たる文化をうけついだ悠久な歴史をもつ国であるのに、どうして一度だけですますことができましょう。それではあまりにも単調ではないでしょうか。もう一度うたえば、旋律からしてもいっそう効果的だし、音楽的な調和もよくなるだけでなく、歌もいちだんと荘厳さをまし、うたう人をして民族的誇りと自負心をもつようにさせるでしょう」とのべた。

その場に集まった詩人や作曲家たちは、だれも将軍が指摘したその点にまでは思いいたらなかった。はたして将軍がのべたとおりに反覆したところ、歌はいちだんとよくなり、いっそう荘厳さをますようになった。

このように、将軍の熱烈な愛国心と文学芸術にたいする深い造詣によって、朝鮮人民はりっぱな『愛国歌』をもつようになったのである。

文学芸術にたいする将軍の教えは、文学芸術の全分野を包括するものであったし、それぞれの部門で党派性、階級性、人民性をかたく守り、芸術性を高める綱領的指針となった。世の人びとが驚嘆してやまない「黄金の芸術」は、将軍の賢明な導きのもとに、すでに解放直後からはぐくまれていたのである。

このように、将軍のかぎりない努力と正しい導きがあったからこそ、北半部は民族文化建設の領域でも燦然たる花を咲かせることができたし、民主基地を磐石のようにうちかためることができたのである。

5　不敗の革命武力—朝鮮人民軍の誕生

金日成将軍はたゆみなく前進する社会主義革命の大河をへて、祖国の統一と朝鮮革命の全国的勝利を見とおしながら、政治経済的な分野とともに、現代的武力である人民軍を創建するたたかいをくりひろげ、みずからその先頭にたった。

すでに祖国光復会の十大綱領で、「朝鮮の独立のために真にたたかうことのできる革命軍隊を組織」することを明確に規定した将軍は、人民軍の創建問題を非常に重視した。金日成将軍は、人民の真の軍隊を創建することが自主独立国家を建設するうえで不可欠の条件であり、正規軍をもたない国家はとうてい独立国家とみなすことはできないと考えた。

とりわけ解放後、世界反動の元凶であるアメリカ帝国主義侵略者が日本帝国主義にかわって南朝鮮を占領しており、国内の反動どもを糾合して南朝鮮の革命勢力を弾圧し、全朝鮮を完全な植民地にかえようと狂奔している状況のもとで、人民軍を創建することは朝鮮人民の運命にかかわる問題であり、一刻もなおざりにできないさしせまった課題であるとみなした。

金日成将軍は、つぎのようにのべた。

「わが人民は、アメリカ帝国主義とその手先どもの民族分裂政策を座視することはできないし、また他人がわれわれを独立させてくれ、われわれの軍隊を組織してくれるのを待つわけにもいきません。朝鮮人民はあくまでも自分の力で民主主義的な自主独立国家を建設しなければならないし、自分の手で統一政府を樹立するためのすべての準備をととのえなければなりません。また朝鮮人民はみずからの手で自己の軍隊を組織し、独立した民主祖国の創

建を促進させなければなりません」

このように金日成将軍は、現代的な正規軍の創建を朝鮮革命の勝利のための主要な環とみなし、革命的自衛の原則を国防建設と国防政策の基礎とした。

国防における自衛の原則――これは、朝鮮革命はあくまでも朝鮮人民が自主的に、みずからの力で遂行しなければならないという将軍の偉大な主体思想の輝かしい具現であり、朝鮮革命はあくまでも、朝鮮人民みずからの革命的武装力に依拠しなければならないという革命的な路線であった。

金日成将軍は革命的な自衛路線をしっかりと堅持しながら、解放されたその日から朝鮮人民の革命的武力を創設する問題に大きな関心をはらい、そのためにはなにものをも惜しまなかった。

正規の人民武力を創建することは容易な問題ではなかった。その前途には幾多の難関がよこたわっていた。革命の敵は最初から、革命武力の創建を破綻させようと狂奔していたし、分派主義者たちは、「南北が統一されていないのに、なんの軍隊が必要なのか」と誹謗した。

難関はこれだけではなかった。

正規軍を装備する物質的、技術的土台が非常に弱く、鍛練された幹部も少なかった。

しかし将軍は、いかに難関が多くとも、苦難にみちた抗日武装闘争の時期にみずからすすめた革命的武力建設の正しい路線と武力建設の豊富な経験があり、熾烈な武装闘争のなかで育成された革命的骨幹があるかぎり、短期間に革命的な軍隊を組織することが可能であると判断した。

将軍は党を創建し、革命的民主基地を建設するせわしい日々のなかでも、人民軍創建のための準備活動を直接組織し指導した。

解放直後は、どの分野においても幹部が非常に不足していた時期であったが、将軍は、抗日武装闘争の炎のなか

できたえられ洗練された抗日闘士の大多数を、まず軍隊を創建する活動に配置した。将軍は、かれらがこの活動においても主導的な役割をはたし、人民軍の骨幹となるように導いた。

将軍はまた、労働者や農民出身の新しい軍事政治活動家を育成するために、一九四五年十一月には、わが国における最初の軍事政治学校であるピョンヤン学院を創立し、一九四六年七月には、軍事活動家を専門的に育成する中央保安幹部学校を設立した。

また一九四六年八月には多くの保安幹部訓練所をつくり、正規軍の最初の基幹部隊を育成するようにした。

これは、抗日武装闘争における幹部育成の経験を新たな現実にあうよう創造的に適用したものであり、もっとも短期間に正規軍をつくるための対策であった。

祖国の津々浦々で将軍の崇高な志をうけつぎ、きのうまでの労働者や農民、あるいは青年学生たちが祖国防衛の大きな抱負と炎のような愛国心をいだいて学校へ、訓練所へと集まってきた。

金日成将軍は国の全般的な指導のために多忙な日々をおくりながらも、足しげく保安幹部訓練所をたずね、各地の工場と農村を指導するときも、必ずその地方の訓練所にたちよって訓練生を激励した。

一九四六年十月、将軍は保安幹部訓練所の建設工事場をおとずれた。

「みんな、ごくろう」

将軍は、より集まってきた訓練生の一人ひとりの手をにぎりながらいった。

「一つの家庭を新しくつくるのも容易なことではないのに、数千名の住む訓練所を建設するのだから困難も多いことだろう……」

ついで作業現場を視察しながら訓練生たちに、仕事がきつくないか、作業は一日に何時間するのか、何時間くらい睡眠をとっているかなどについてたずね、家にいるときよりは寝床や食事などがよくないと思うが、困ったこと

があれば遠慮せず話すがよいといった。

訓練生たちは、解放前に日本帝国主義者から虐待されたことを思えば、これくらいのことはなんでもないし、一日も早く訓練所建設事業を完成させて訓練をうけ、朝鮮人民の真の兵士になりたいとこたえた。そのこたえに満足しながら将軍はいった。

「みんなの考えは正しい。すべてのものが自分の境遇をよく知り、事業にたいする強い確信をもって全力をかたむけなければならない。かつてわれわれは、どんな境遇におかれていただろうか。日本帝国主義の野蛮な軍隊がわが祖国をじゅうりんし、わが父母兄弟を虐殺したとき、われわれは、その敵を撃退すべき自己の軍隊をもっていないことをどれほど嘆いたことだろう。わが朝鮮人民が、一日も早く自分の軍隊をもつ堂々たる民族になることを、どんなに待ちのぞんでいたことであろう。

このことを肝に銘じて、われわれは全力を人民武力の建設にそそがなければならない……」

この日、将軍は困難な点についてのこらず調査し、同行した幹部にたいして、まず最初に寝室と食堂、炊事場をつくることに注意をはらわなければならないと教えながら、こまかい点にいたるまで具体的に指導した。

将軍は訓練所の役員と訓練生たちに、軍事政治訓練の方向と規律のある生活、日課の組織、人民との血縁的つながりを強化する問題など、人民武力の建設で必ず守らなければならない問題について一つ一つ教えた。

また将軍は、集団生活でたちおくれたものにたいする教育方法を教え、創建される軍隊の性格にあうよう、自覚的な規律をうちたてることについてつぎのようにのべた。

「われわれは、どんな軍隊をつくろうとしているのか。帝国主義の侵略に反対してたたかい、人民を守り、民主主義を擁護する労働者階級の革命軍隊をつくろうとしているのである。ところでもし、教育方法や日常生活で帝国主義の軍隊のように怒ったり、なぐったりすることがあれば、それをゆるすことができるだろうか。また規律をつ

くるからといって号令一つですべての人びとを動かそうとしたり、食事の時間にも笛を吹きならしながら、たとえば『五分で食べろ！』とか、『休め、起立！』などとやるなら、これは日本帝国主義の軍隊と同じである。
われわれは、わが軍隊の性格にあうように規律をつくらなければならない。
どんなことでも、父母になった気持でかれらを大事にし、訓練しなければならない。われわれがなしとげる目的を教え、それをたすけ、かれらが心の底から、規律をはなれては軍隊が存在しえないことを悟るようにしなければならない……」
将軍はまた、訓練生の使命についてつぎのようにのべた。
「諸君がりっぱに訓練をおこなおうとすることや、党が軍隊を一日も早くつくり、より強化しようとすることは、すべてわが人民の自由な労働と民主的な建設を守り、人民の幸福と祖国の富強発展を保障するためのものである。われわれは、これをつねに心に銘記しなければならない」
この日、将軍のあたたかい配慮と具体的な指導をうけたここの幹部と訓練生たちは、大きな誇りと自負心をもち、その後も将軍の綱領的な教えにしたがって訓練所の建設作業と軍政学習にはげみ、活動と生活で大きな前進をもたらした。
将軍は一九四七年四月にも、この訓練所をおとづれた。
将軍は、訓練所が短期間にりっぱに建設されたことに満足しながら、建国室にたちよった。
将軍は、民主改革の成果と経済の発展ぶりをしめす展示物が少ない点について、つぎのようにのべた。
「まず、わが国のものと、わが人民がなしとげた成果をもっとよく知らなければならない。現在われわれは、他の諸国と堂々と肩をならべてすすむことができるように、わが国を建設する事業でりっぱな成果をおさめている。
かつてわが国では、自分のものの貴重さを知らず、他人のものばかりがりっぱだと考えたものたちが国をほろぼ

し、わが人民を文明からたちおくらせ、多くの血を流させた。自分のものが貴いことを知らず、自分の見解をもたずにすすむならば、やがて独立はしたとしても、国を健全に築いてゆくことはできないであろう」

将軍はこのときも、革命を遂行するうえで主体を確立することの重要性について、このように強調したのである。

射撃練習のとき、ある射撃場に足をはこんだ将軍は、百発百中の射撃術を見せてもらおうと微笑をたたえながら、熱心に照準練習をしている兵士に近づき、みずから銃をとって照準動作の模範までしめし、かれらを激励した。抗日武装闘争の伝説的な闘将である金日成将軍が、みずから銃を操作するのを目のあたりにした兵士と幹部たちは、忘れることのできない深い感動をおぼえた。

兵士たちの士気はまさに天を衝く勢いで、射撃成績も非常に優秀であった。自動小銃の射撃では、一個分隊が全部目標に命中させた。

将軍は兵士たちのたくみな射撃術を称賛したのち、その分隊の兵士たちと席を同じくして話しあった。

「解放前に銃をとったことのある人がいますか?」

将軍はこのように質問して、一人の兵士を指名した。その兵士は率直に、むかしは道ばたの銃を見ても暴発するように思われて近づくこともできなかったが、いまではかたときも銃を手ばなしたくないといいながら、武器を手にすれば一度でも多く操作して、それにより精通しようと力をそそいできたことをありのままに話した。

将軍は、その兵士の言葉を注意深くきいてからいった。

「そのとおりだ! わたしが質問したこともまさにそれだ。敵が二度とやってこれないようにしなければならないというかたい信念をもって、武器を自分の瞳のようにたいせつにし、自分の武器に精通するよう努力しなければならない」

この日、兵士たちは狙撃兵器ばかりでなく、迫撃砲の射撃訓練においてもおどろくべき射撃ぶりを将軍にひれきした。

将軍は、二百余名の優秀な射撃手の胸にみずから花をつけてやり、全員が「優」の成績をおさめた連隊に賞賛のことばをおくった。

金日成将軍のこのような細心の指導とあたたかい配慮によって、学院と学校、訓練所では短時日に人民武力創設の基盤がしっかりとつちかわれていった。

ピョンヤン学院と保安幹部学校をつうじて有能な軍事政治幹部の隊列が形成され、保安幹部訓練所をつうじて人民武力の骨幹部隊が準備されていった。

きのうまでハンマーと鎌以外は手にしたことのない労働者、農民出身の数多くの青年たちが、朝鮮革命の崇高な任務を自覚した軍事政治幹部に育った。

一九四七年十月二十六日、将軍の直接の発起と細心の指導によって創設され、発展してきた保安幹部学校は、最初の卒業生をおくりだすことになった。

この日、将軍は卒業式に親しく参席して卒業生を祝福し、アメリカ帝国主義者の陰謀と侵略策動によって、統一政府の樹立と自主独立と民主主義的発展に重大な危機が生まれている時期に、部隊におもむく諸君の任務は重要であると強調しながら、祖国と人民のために奉仕する軍隊の幹部として、その任務を忠実に遂行しなければならないと教えた。

将軍は、部隊に配置されてからの活動方向を明らかにし、みずから模範をしめすことによって隊員を教育しなければならないと指摘した。

このように、金日成将軍の賢明な措置と強い意志、そして縦横な革命的展開力によって、人民軍創建をさまたげ

ていた数かずの難関は打開され、正規軍としてのりっぱな面貌がととのえられていった。

抗日武装闘争のときに金日成将軍によって教育され、鍛錬された抗日革命闘士を骨幹とした人民武力は、朝鮮人民の敬愛する領袖である金日成将軍にかぎりなく忠実であり、将軍の偉大な革命思想を実践する領袖の軍隊、党の軍隊として、いままさに生まれでようとしていた。

このとき、南朝鮮を占領していたアメリカ帝国主義者は、朝鮮の自主独立国家の建設に露骨な敵対行為をしめしてきた。

かれらは、共和国北半部でなしとげられた民主主義的発展の巨大な成果を恐怖と敵意をもってうかがいながら、たんなる誹謗とデマ宣伝にとどまらず、殺人、放火、破壊を専門とするテロ集団を北半部に潜入させ、革命基地の成果を破壊し、人民生活を大きく混乱させようと策動した。敵の策動は、北半部の革命基地がより強化され、人民の勝利が大きくなればなるほどますます悪らつになった。

とくに一九四八年にはいってからは、三十八度線一帯で北半部に反対する露骨な武力侵犯事件をひんぱんにひきおこし、侵略と戦争挑発策動に狂奔した。

このような情勢のもとで金日成将軍は、革命の獲得物をしっかりと守り、アメリカ帝国主義者に反対し、祖国の統一を主動的に早めるためには、準備してきた人民武力の創建をただちに全世界に宣布しなければならないと判断した。

こうして、ついに意義深い日がおとずれた。

一九四八年二月八日、ピョンヤンでは人民の熱狂的な歓呼のなかで、朝鮮人民軍の創建を宣布する閲兵式が挙行された。

銃剣が林立する閲兵式の広場、堂々たる隊伍、熱狂的な歓声をあげる人民たち。主席壇にのぼった金日成将軍

はしきりに手をふり、微笑をふくんだ答礼をおくった。
世界の遊撃戦史上に類例のない苦難にみちた十五星霜の抗日武装闘争をへて、ついに創建された革命の正規軍を目前にした将軍の心情は、どんな言葉をもってしてもいいあらわすことができないであろう。
人民は自分たちの正規軍を目のあたりにする誇りと感激のあまり、涙でのどをつまらせて叫びつづけた。
「金日成将軍万歳！」
「朝鮮人民軍万歳！」
じつに朝鮮人民軍の創建は、半世紀にもおよぶ日本帝国主義の植民地支配のもとで踏みにじられ苦しんできた朝鮮人民が、夢にも忘れることのできなかったいま一つの世紀的な念願の実現であった。
金日成将軍は威風堂々とした隊伍を厳粛に閲兵したのち、『朝鮮人民軍の創建に際して』と題する歴史的な演説をおこなった。
将軍は朝鮮人民が自己の政権を創立して満二年になるこの日に、朝鮮の歴史においてはじめてみずからの武装力である朝鮮人民軍の創建を宣布するにいたった意義を指摘し、つぎのようにのべた。
「いかなる国家をとわず、自主独立国家は必ず自分の軍隊をもっているものであります。自分の軍隊をもっていない国が、完全な自主独立国家たりえないのは当然のことであります。わが祖国が日本の帝国主義者に占領されたのも、その当時、朝鮮人民が日本帝国主義侵略軍を撃破するにたるだけの軍隊をもっていなかったからでありますす」
金日成将軍は、この歴史的な演説のなかで、創建された人民軍のもっとも重要な特性についてつぎのようにのべた。
「きょう、われわれが創建する人民軍は、資本主義国家の軍隊とは根本的に異なる新しい型の軍隊であります。

資本主義国家の軍隊は、少数の資本家、地主のために絶対多数の勤労人民を抑圧し、搾取する制度を武力で擁護、維持し、他の民族と他国の領土を侵略する目的で組織された軍隊であります。

……それと異なり、いまわれわれが創建する軍隊は、朝鮮の労働者、農民をはじめとする勤労人民の息子や娘で組織され、朝鮮民族の解放と独立のために、人民大衆の幸福のために、外来帝国主義侵略勢力と国内反動勢力に反対してたたかう真の人民の軍隊であります。したがってわが人民軍は、いかなる敵が祖国の自由とわが人民の幸福な生活を侵害しようとするときでも、最後の血の一滴までささげてたたかい、敵を撃滅し、祖国と人民をあくまで死守するでありましょう」

将軍は、人民軍のいま一つの特性についてつぎのようにのべた。

「……わが人民軍は、民主朝鮮の正規軍として、たとえきょう創建されたとはいえ、実際にはながい歴史的根源をもった軍隊であり、抗日武装闘争の革命伝統と貴い闘争経験と不屈の愛国的精神をうけついだ栄えある軍隊であります」

このように輝かしい革命伝統で武装し、それを直接継承しているからこそ、朝鮮人民軍は、より大きな栄誉と誇りを自覚しているのである。まさにこのような特性からして、朝鮮人民軍は国と人民をしっかりと守り、侵略者をあくまで撃滅することを自己の気高い義務、使命としているのである。

金日成将軍の歴史的な演説が終わるや、場内をゆるがす万歳の歓呼とともに、荘重な吹奏楽にあわせて、この国の息子や娘からなる武装隊伍――荘厳な人民軍隊の分列行進がはじまった。

銃剣を光らせ、足音高く行進する無敵の隊伍は、将軍がたっている主席壇のまえを堂々ととおりすぎていった。将軍をあおぎながら叫ぶ「万歳」の声は、天地をゆるがした。

行進する兵士たち――、奴隷生活の苦しみを体験した人民の息子や娘であるかれらは、血でもって獲得した新し

い制度と幸福のためには、貴い生命をもささげるかたい決意に燃えていた。しかもかれらの先頭には、抗日武装闘争の参加者である百戦練磨の闘士たちがたっていた。

朝鮮人民の偉大な領袖金日成将軍と朝鮮労働党を血をもって守りぬく、領袖と党の革命的武装力であり、労働者、農民の階級的利益を擁護し、北半部における社会主義革命と建設の獲得物をしっかりと守り、祖国の統一と革命の全国的勝利の達成をその崇高な使命としている真の革命武力、人民武力は、このようにして誕生したのであった。

この軍隊は不敗である。

いかなる敵も、いかなるどう猛な侵略者も、偉大な革命伝統と炎のような革命的熱情をもったこの軍隊に刃むかうことはできない。

百戦百勝の鋼鉄の統帥者であり、天才的な軍事戦略家である金日成将軍の導きをうける朝鮮人民軍――、この人民軍に挑戦する敵は、嵐が吹きすさぶ荒海で絶壁にうちつけられ、粉ごなにくだけ散る海賊船の運命をまぬがれないだろう。

まさに朝鮮人民軍の創建は、権力を自己の掌中にした労働者階級と全人民が金日成将軍の偉大な革命思想を高くかかげ、将軍のまわりにかたく団結し、ゆたかで強い自主独立国家を建設するたたかいで達成した輝かしい勝利であり、社会主義、共産主義の洋々たる未来をめざし前進する人民の革命闘争で、画期的な意義をもつ重大な出来事であった。

朝鮮人民軍が創建されたことによって、朝鮮人民は、かつて自分の軍隊をもたなかったがゆえに外来帝国主義侵略者に国を奪われ、あらゆる虐待と蔑視をうけてきた民族から、なんびとといえどもそこなうことのできない強く、尊厳にみちた民族に、自分の力で祖国の安全をしっかりと守りぬく堂々たる自主独立国家の賢明な人民となったのである。

朝鮮人民軍の創建は、たんに朝鮮人民にとってばかりでなく、東方と世界の革命的人民にとっても大きなよろこびであった。朝鮮人民軍の創建は、権力をとりもどした朝鮮人民が東方ではじめて正規の革命武力を宣布したものとして、アジアの被圧迫人民と植民地支配からぬけだした人民に大きなはげましとなった。

人民軍を創建した将軍は、これにとどまっていたわけではない。将軍は創建された人民軍を政治思想的に、軍事技術的に、よりしっかり準備された不敗の隊伍につくりあげることに深い関心をはらった。

将軍はつぎのようにのべた。

「人民軍の創建は、やがて樹立しなければならない朝鮮民主主義人民共和国の強大な革命的武装力を創建するための第一歩にすぎず、たんにその骨幹をつくりあげたことを意味するにすぎません。したがって軍人はもちろんのこと、全人民がきょう創建された人民軍をより強化発展させるために、あらゆる面で努力しなければならないし、朝鮮人民軍の不敗の力を世界に誇れるようにしなければなりません」

将軍はとくに、人民軍を一騎当千の幹部軍隊に、現代化された偉大な革命軍隊に育成することをめざし、それに必要な戦闘的な課題を人民軍将兵にあたえた。

将軍はまず、人民軍の兵士たちがその使命からして祖国と人民をかぎりなく愛し、祖国の自由と人民の幸福のためにすべてをささげてたたかう精神で武装するよう導いた。

将軍は、軍隊内で革命の先輩たちの気高い愛国主義思想を見ならい、たがいに愛し、尊敬し、信頼し、団結する精神、勇敢で革命的な気風をはぐくみ、鋼鉄のような規律をうちたてるよう、兵士たちにたいする政治思想教育活動を強化した。

金日成将軍は、軍隊の隊列を質的に強化するため、すでに創建されている軍官学校をつうじて人民軍幹部育成事業を強化するとともに、現代戦の特性、朝鮮の山岳、自然地理的特性にそくした軍事科学と軍事技術を発展させ、

軍隊の武力装備を改善することに心血をそそいだ。

とくに将軍は、たとえ経済状態は困難であっても自力で武器を生産し、人民軍隊をしっかりと武装させるために軍需品工場を創設し、武器と弾薬を生産する措置をとった。

将軍のこうした措置によって、解放後わずか数年のあいだに朝鮮人民自身の力で各種の狙撃兵器と弾薬や砲弾が生産され、人民軍隊を武装させることができるようになった。

将軍は自動小銃がはじめて生産されたとき、これを非常によろこび、抗日武装闘争当時からの戦友である金策（キムチェク）、姜健（カンゴン）同志をはじめとする四名の同志にその銃を贈り、かれらとともに記念撮影をおこなった。

不敗の革命武力である朝鮮人民軍の創建とその成長発展は、白頭の吹雪のなかで、また密林のなかのかがり火のそばで祖国の未来を描きながら、人民武力建設の土台を築いてきた金日成将軍の偉大な構想の実現であり、金日成将軍の偉大な主体思想と卓越した軍事思想の輝かしい勝利であり、人民武力建設のためにささげた金日成将軍の気高い情熱、細心であたたかい配慮の結実であった。

金日成将軍によって創建され育成された鋼鉄のような朝鮮人民軍があったからこそ、わが人民は三年間の苛烈な戦争で世界「最強」を豪語したアメリカ帝国主義者をうちやぶり、祖国の自由と独立をりっぱに守りとおし、社会主義の東方の哨所をしっかりとささえぬくことができたのである。

6　南北連席会議

政治、経済、軍事のすべての分野にわたり、革命と建設が勝利のうちにすすめられるにしたがって、北半部は朝鮮革命のたのもしい堡塁に、祖国統一の確固たる基地に強化発展していった。

金日成将軍は北朝鮮労働党第二回大会で明らかにした路線と方針にもとづき、北半部で革命と建設を力強く前進させながら、他方ではアメリカ帝国主義の民族分裂政策と「単選」（アメリカ占領下の南朝鮮で単独選挙を実施し、アメリカ帝国主義のかいらい政権をでっちあげようとする陰謀）、「単政」（単選の結果でっちあげられる政権）陰謀をうちやぶり、人民大衆を祖国の自主的統一への決定的局面を切りひらくためのたたかいへと導いた。

金日成将軍が明らかにした祖国の自主的統一方針は、当時のわが国の情勢と南北朝鮮全人民の一致した念願と志向に完全に合致していた。

アメリカ帝国主義に屈従する民族反逆者、親米・親日反動分子を除外した三千万人民の心は、一致して民族の太陽金日成将軍にそそがれ、将軍がうちだした方針を熱烈に支持した。

こうして、革命と反革命との階級的力関係には大きな変化が生じた。

領袖のよびかけにつねに忠実な北半部の人民は、南朝鮮におしいった「国連朝鮮委員団」に反対する強力な示威運動と群衆大会をくりひろげ、朝鮮問題にたいする外国の干渉に反対し、祖国を自主的に統一する断固たる態度を全世界にはっきりとしめした。

南朝鮮の愛国的人民も、敬愛する領袖金日成将軍のよびかけを支持して救国抗争にたちあがった。

「国連朝鮮委員団はでていけ！」

というスローガンをかかげてくりひろげられた南朝鮮人民の二・七救国闘争は、アメリカ帝国主義の民族分裂政策に大きな打撃をあたえ、祖国の統一独立をめざす強い意思と志向をはっきりとしめした。

労働者、農民をはじめとする広はんな大衆の革命的気勢が高まるにつれ、中間政治勢力も革命の側にかたむいてきた。

アメリカ帝国主義とその手先どもは人民大衆から孤立し、反動的支配層内部でも矛盾と葛藤がいっそう深まりつ

つあった。

金日成将軍が明らかにした公明正大な祖国の平和的統一方針と、それにはげまされた南朝鮮人民の反米救国闘争が高まるにつれ、右翼陣営内部でも大きな動揺が生じた。

このような情勢と力関係の変化を考慮にいれた金日成将軍は、アメリカ帝国主義の「単独選挙」陰謀を粉砕して祖国統一を実現するために、南北朝鮮のすべての愛国的民主勢力を統一団結させる積極的な措置をとった。

こうして金日成将軍は、南北朝鮮の諸政党と社会団体からなる連席会議の開催をよびかけた。

これは、アメリカ帝国主義とその手先を朝鮮人民から孤立させ、アメリカ帝国主義の民族分裂策動を粉砕するばかりでなく、自主的な祖国統一の旗のもとに南北朝鮮のすべての愛国的民主勢力を結束させ、反米救国統一戦線を形成するうえで重要な意義をもつものであった。

じつに金日成将軍が提起したこの方針は、当面する難局をのりこえ、祖国統一の新しい局面を切りひらくもっとも賢明で積極的な対策であった。

北朝鮮民戦（民主主義民族統一戦線）傘下の各政党や社会団体は、金日成将軍のよびかけた南北連席会議の開催を共同で訴えた。

金日成将軍は、南朝鮮におけるアメリカ帝国主義の「単独選挙」陰謀に反対し、平和的な祖国統一を支持する政党や社会団体や個別的人士なら、だれとでも手をたずさえていく立場を明らかにし、かつては罪を犯したものであっても、反米自主統一の立場にたってたたかう人であれば、だれにたいしても過去をとわないとひろく宣言した。

金日成将軍の大胆で寛大な立場とよびかけは、南朝鮮の政界に大きな反響をまきおこし、人民は熱烈な支持でもってこれにこたえた。

こうして南朝鮮民戦傘下の各政党と社会団体はもちろん、中間政党と「反共」的で頑固な右翼民族主義者であっ

た一部の人たちまで、金日成将軍の主体的で愛国的なよびかけを支持してたちあがった。

このような事態の発展に不安と恐怖を感じた内外の敵は、南北連席会議の招集をあくまで破綻させようと執拗に策動した。アメリカ帝国主義とその手先どもは、金日成将軍がうちだした自主的な祖国統一方針が南朝鮮人民のなかにひろく知れわたるのをくいとめようと狂奔し、南北協商を支持する政党、社会団体と個人を苛酷に弾圧した。

朴憲永一味もやはり、南北連席会議の招集準備活動を妨害した。

かれらは南北連席会議の招集提議がだされるや、うわべではそれを支持するようなふりをしながら、かげでは十分に協商にふくめることのできる中間政党まで無原則的に排斥し、会議を破綻させようと策動し、かれらにつうじている何人かのものだけを会議に参加させようとした。

金日成将軍はこのような策動をうちやぶり、アメリカ帝国主義の単独かいらい政府樹立の陰謀に反対する南朝鮮のすべての政党、社会団体と人士たちを連席会議に参加させるため、積極的な活動を展開した。

将軍は直接、人を派遣して南朝鮮の政党、社会団体、人士たちに祖国統一方針と南北連席会議の目的をねばり強く説き明かし、会議への参加を手だすけするようにした。

金日成将軍の積極的な活動によって共産主義者はもちろん、中間政党の代表と、「反共」をとなえていた一部の頑固な右翼民族主義者までが南北連席会議に参加する意向を表明し、アメリカ帝国主義とその手先どものあらゆる妨害と弾圧をはねのけて一路ピョンヤンへとむかった。そのなかには七十の高齢をかぞえる金九(キムグ)、金奎植(キムギュシク)と金月松(キムウォルソン)らもいた。

「同じ自分の国土へいこうというわたしを、どこのだれがとめるというのじゃ。あの連中が、いまわが国土を永久にわけへだてようとしてやっきとなっているときに、北半部で南北連席会議をひらき、難局を打開する道をともに論議しようとよんでくれたことは、じつにうれしいことではないか。たとえ、わたしが七十に手のとどく老いの

身だとて、道のりが遠いからとて、じっとしていられようか」

これは北への旅にたった金月松の告白である。しかし、これはかれ一人の心情ではなかった。

一つの民族が席をともにして、難関を打開する対策を論議しようとの誠意のこもったよびかけがあり、民族の将来を憂う思いが炎のように燃えさかっているとき、どうして政見と信仰のちがいをとい、道のりがけわしいからといってためらうことができるだろうか。困難を打開しなければならないのだ。金日成将軍がおられるピョンヤンへいこう！

かれらはみな、このような思いでピョンヤンにむかった。

こうして一九四八年四月十九日からピョンヤンの由緒ある牡丹峰の中腹に位置している劇場で、ついに南北朝鮮の五十六政党、社会団体代表が参加した歴史的な南北朝鮮政党、社会団体代表者連席会議がひらかれた。

南北連席会議は、世界の注目と民族の強い期待のうちにすすめられた。

会議はまさに政見と信仰の差異を超越して、一つの目標のもとに朝鮮人民の愛国的民主勢力を総団結させた前例のない民族的な出来事として、最初から渾然ととけあったふんいきのなかですすめられた。

会議では、朝鮮人民の英明な領袖金日成将軍が、当面の政治情勢と祖国の平和的統一のための課題について報告した。

満場の熱烈な歓呼と拍手のなかを壇上にのぼった金日成将軍は、当面の情勢分析につづけて、「南朝鮮でくわだてられている反人民的亡国選挙を拒否し破綻させることは、現在わが民族のまえに提起された最大の政治的課題」であると指摘し、「この全民族的なたたかいで国と民族の運命を憂うすべての人びとは、党派と宗教の所属、政治的見解のいかんをとわず、必ず団結しなければなりません。団結のみがわれわれの勝利を保障するのです」と力をこめてのべた。

つづいて将軍は、全民族的な力の統一と団結をなしとげ、わが国を永久に分裂させようとする「国連朝鮮委員団」の策動と南朝鮮の「単独選挙」を破綻させ、民主主義的統一政府樹立の歴史的な偉業達成のためにたたかう救国対策を講じるよう提起した。

つづけて将軍は、切々とつぎのようによびかけた。

「祖国が分裂の危機におちいっているこの重大なときに、われわれが団結してたたかわなければ、また、アメリカ帝国主義者の侵略を粉砕する一大救国対策を講じなければ、われわれは民族と子孫にぬぐい去ることのできない罪を犯すようになることを知らなければなりません。われわれは全力をつくして統一的自主独立国家を建設し、民主主義的な原則にもとづいた統一政府を樹立するための全民族的なたたかいを展開しなければなりません」

祖国の危機を打開する前途を明るく照らしだした金日成将軍の報告は、南北朝鮮代表を感激と興奮のうずにまきこんだ。

とくに、南朝鮮代表がうけた衝撃は劇的であった。実践よりも空論が多く、演説においては、深い内容よりも、ありとあらゆる修飾語をもてあそぶことになれてきたかれらは、金日成将軍の報告に接し、生まれてはじめて民族の心をはげしくゆり動かされ、救国の大路をはっきりとしめす深遠な政治的雄弁をきく思いであった。

金九のような右翼の巨頭までも会議の途中で感嘆詞を連発し、たえずうなづき、ついには感動のあまり白髪の頭をあげることができなかった。かれはながい歳月、誤った道を歩んできた自責の念にかられ、余生なりとも新しく生きようと胸を痛めながら決心するかのようであった。自己流の政見すら発表できなかったかれは、口をひらくたびに沈うつな声で口ごもりながら、「わたしは学んだものとてなく……」と自己の無能をなげいた。

報告につづいて討論をおこなった数十名の代表は、たとえ代表する階級と階層、政見と信仰はそれぞれ異なっていても、一致して金日成将軍が提示した方針を支持し、その道にしたがってかたく団結してたたかう決意をひれき

した。

連席会議は満場一致で、「朝鮮政治情勢にたいする決定書」を採択し、南朝鮮単独選挙反対闘争委員会を組織し、「単独選挙」を破綻させるための救国闘争を訴える檄文『全朝鮮同胞に檄す』を発表した。

金日成将軍の主動的な活動によって、愛国勢力を成功裏に団結させた歴史的な南北連席会議は、民族あげての救国対策をたててその幕をとじた。

会議に参加したすべての代表が満足の意を表明したが、わけても南朝鮮からきた代表たちは感嘆しきりであった。それはかれらが、生涯かけて待ちのぞんできた民族の太陽金日成将軍をはじめて身近にいただき、将軍の賢明な指導を直接うけたことによるものであった。

金日成将軍は、死線をのりこえて北半部にやってきた南朝鮮代表を心から歓迎し、かれらの過去にたいしては一言もふれなかったばかりでなく、きびしく遠い道のりをものともせずはせ参じたかれらの愛国的壮挙を高く評価した。

将軍は三十八度線の境まで人をやって代表たちを丁重にむかえ、金九、金奎植らがおくれて会議場に到着したときには、しばらく会議を休会してまでかれらを歓迎した。

また金日成将軍は、会議の期間中にも南朝鮮代表にあたたかい配慮をほどこした。

将軍は南朝鮮代表の健康を案じて宿舎と食生活にいたるまで細心の注意をはらい、かれらに十分な休息があたえられるようつねに気をくばった。

さらに、南朝鮮の代表たちが会議の期間中に、休憩時間や会議を終えたのちの余暇を利用して、ピョンヤン市を中心とする北朝鮮各地を自由に旅行しながら、万景台、黄海製鉄所、金日成総合大学、革命家遺子女学院（革命家遺家族の子弟のための学校）、国立映画撮影所と、その他の経済、教育、文化施設など、民主建設の状況をつぶさに

参観できるように配慮した。
南朝鮮からきた代表たちにとっては、見るものきくものすべてが深い感動をよびおこすものばかりであった。
北朝鮮の民族経済建設の実情を見た金奎植は、金日成将軍が主催した招待宴の席上、南北をくらべてつぎのようにのべた。
「北朝鮮にきてみると、北朝鮮は自給自足の土台ができています。南では工場が門をとざし、生産がとまり、ただアメリカの借款だけで生きているという現状なのに、ここでは工場が動いています。南はほろびゆく一家でありここは新しくたちあがり、幸福になってゆく新家庭のようです」
南朝鮮の代表たちはとくに、人民を勝利の道に導いてゆく金日成将軍にたいする敬慕と、英明な領袖をいただくよろこびをかくすことができなかった。
「北朝鮮が二年あまりのみじかい期間に、すべての建設部門で飛躍的な発展をとげたことにおどろいた。わたしが見た黄海製鉄所だけでも、日本帝国主義の凶悪な魔手によって破壊されたままうけついだ工場を朝鮮人がみずからの手で運営し、日本帝国主義支配のとき以上の生産をあげていることに、わが民族の優秀さをいま一度悟り、祖国の自主独立にたいする信念をさらに強くした。金日成将軍はまさしくわが民族の英明な指導者である。金日成将軍の指導のもとに、祖国の自主独立の基礎となる諸般の民主建設が勝利のうちになしとげられている事実は、このことを雄弁に証明してくれるのだ」
これは朝鮮語研究会代表の感想であるが、これはたんにかれ一人の感想であるばかりでなく、南朝鮮からきた他のすべての政党、社会団体代表の感想でもあった。
建民会代表は自分の感想を後日、つぎのようにのべた。
「わたしは……、将軍の気さくで謙虚な品性からも多くの感銘をうけたが、さらに感嘆したことは、いつどこで

も人民のなかで学び、人民を指導する気高い徳性とその作風であった。わたしは将軍と何回となく接するなかで、日がたつにつれ、この方こそ智、仁、勇をかねそなえた朝鮮人民のすぐれた指導者であるという感をますます強くした。義兵闘争の時期からはじまった半世紀をこえるわたしの複雑な生涯をつうじて、わたしはアジア、ヨーロッパなどの大小の国々をめぐり、いわゆる『傑出した』人びと、数多くの『英雄豪傑』たちに会ってみたが、いまだかつて将軍のような、真の人民の指導者に出会ったことはなかった」

このような感慨は、かれ一人のものではなかった。連席会議に参加した金九は、金日成将軍に一度会ったのち、将軍こそまさに民族の太陽であり、朝鮮人民の唯一の領袖であるとかたく信ずるようになり、共産主義者にたいする自分の頑固でせまい見解と訣別することを決心した。

かれは金日成将軍に会ったあとで、その感想をつぎのように率直に告白した。

「北朝鮮にきてみてすっかり気にいった。上海でも南朝鮮でも多くの共産主義者に会ったことがあるが、北朝鮮の共産主義者はかれらとはちがう。わたしはいままで共産主義者はかたくなな、つかいものにならない人たちのように思っていたが、今度きてみて、あなたがたは度量が大きく寛大であり、いくらでも合作できる方たちであることを知った。わたしは断然、あなたがたと合作していきたい」

金九はみずから心にきめたこの決意を、後日にいたってもかえることがなかった。そして、自分を理解してくれる親しいものたちにくりかえし話しては、金日成将軍のあたたかいふところをなつかしんだという。

かれが親しい知人たちに、好んできかせたという話の一つはこうである。

「朝鮮をたてなおす英雄は、この将軍以外にはない。事実、わたしは中国にいたとき、金日成将軍が日本帝国主義者たちをうちのめしているということをきいて、その方を若い大軍事戦略家とだけしか考えていなかった。八・一五解放直後もこの考えにはかわりなかった。だがピョンヤンで会った金将軍は大軍事戦略家であるばかりか、若

い偉大な政治家であった。もともと英雄は歴史のなかでもまれにしかあらわれないものだが、これほどの英雄があらわれるのは数千年の歴史でもまれなことである。ところが朝鮮にその英雄があらわれたのだ。わたしは将軍に一度お目にかかってからは、もうその方のそばからはなれたくなかった。朝、目がさめると将軍のところへいこうとばかり考えた。その方が朝鮮の未来を語られると、たちまち朝鮮民族の進路がはっきりと目に映るのだ」

金九がピョンヤンにとどまっていた四月二十三日、かれは万景台にある将軍の生家をたずねた。将軍の生家はきっと大きく、堂々とした邸宅であろうと考えていた金九は、それが農村のありふれた貧しいわらぶき家であることにまずおどろいた。そして、七十歳にもなる将軍の祖父が、相かわらず農業にたずさわっていることにまたおどろいた。

この日、将軍の祖父は庭で垣根をつくっていた。金九は非常におどろいた。かれは将軍の祖父にたいして、お孫さんを一国の指導者にもつお方が、どうしてこんな力仕事をなさるのかとたずねた。

将軍の祖父は、わたしの孫はそうであるが、わたしは農民であり、むかしから農業は天下の大本であるといわれているように、わたしが農業をりっぱにいとなんでこそ、孫も政治をりっぱにおこなえるのではないかとこたえたという。

金九は後日、親しい友人だけにこの話をきかせながら、たびたびつぎのように語った。

「ほんとうに平凡な農民の家であった。だからその方が農民を思うことは決して偶然ではないのだ。……金日成将軍に指導されてこそ朝鮮は幸福になれる。真の共産主義が、金将軍のなされているような政治であることを知っていたら、わたしがどうして共産主義に反対したであろうか。わたしはいままで歩んできた道のりをふりかえってみて、将軍がおられるのに、あえて『反共』をとなえながら『独立』だのなんだのとさわぎたてたことが恥かしく思えてならなかった。そしてわたしは、将軍、わたしに果樹園でも一つください、田舎で将軍の指導をうけながら

野良仕事でもやります、と申しあげたのだ。わたしは金日成将軍のすすまれる道をついてゆく……、この道こそ、わが民族がすすむべき道なのだ」

このようにかれは、金日成将軍の人となりに完全に魅せられたのである。かれは右翼政界の巨頭級の人物として、看板だけの「上海臨時政府」に座をしめていた当時から、時代錯誤のおろかな「反共」理念を古びた民族主義の外套でくるんで歩きながら、自分をあたかも指導者であるかのようによそおうことになれた頑固で高慢な人物であった。

そのようなかれが、若い金日成将軍にひと目会うと、たちまち将軍に自己の空想的な「王国」と「法統」(金九のひきいる臨時政府の法的正統性、これをかれらは主張していた)までささげつくしてしまったのである。

反動的な階級的立場と政治的偏見とによって時代にそむき、暗闇にとりのこされていたかれは、民族の太陽である金日成将軍の光をうけてはじめて、明るい光明のなかでめざめた人間に生まれかわったのである。

このような例は、かれ一人にかぎられたものではなかった。

金日成将軍と会った人なら、だれでも将軍の偉大な政治と高潔な徳性のまえで、頭をさげずにはいられなかったのである。

金九ですらこうであったのであるから、南朝鮮からきた中間勢力の政治家や良心的な人士がうけた感動はおして知るべしであった。会議を終えたかれらは、高い民族的自負心と新たな闘志を胸にひめて帰路についた。

会議は、金日成将軍が確信していたように、労働党の指導のもとで、政見の異なるすべての政党や社会団体が、祖国の統一独立のために団結することができることと、金日成将軍が提示した朝鮮労働党の統一戦線政策と祖国統一方針の正当性を十分に実証したし、将軍の指導の賢明さをいま一度しめした。

また、朝鮮民族は英明な領袖をいただいており、領袖の指導のもとに、みずからの問題をみずからの手で十分に

解決できるということを内外にしめした。

連席会議は民族分裂の危機を打開し、民主主義的統一政府を樹立するたたかいの隊列に、朝鮮の広はんな愛国的民主勢力をしっかりと結束させることによって、統一的な民主主義政府樹立と祖国統一のためのたたかいに新しい展望をもたらした。

ピョンヤン市をはじめ北半部の各地では、連席会議の決定を支持し、南朝鮮の「単独選挙」を排撃する各界各層の人民の群衆集会や、デモがくりひろげられた。また南朝鮮でも「単独選挙」に反対するストライキ、同盟休校が相ついでおこり、各地で暴動がおきた。南朝鮮の津々浦々でたちあがった人民は、「選挙場」と警察支署を襲撃し、これを破壊し、焼きはらい、いたるところで悪質警官を処断した。左翼、中立、右翼陣営をとわず、民族的良心をもつすべての政党、社会団体は、亡国の「単独選挙」を拒否し、排撃した。

このような民族あげての熾烈なたたかいによって、五・一〇「単独選挙」はついに完全に破綻した。これは朝鮮人民の団結力と愛国精神の断固とした示威であり、偉大な勝利であった。

7　朝鮮民主主義人民共和国の創建

アメリカ帝国主義侵略者は、みずからおちいった苦境からぬけだし、是が非でも朝鮮侵略の野望を実現してひきつづき南朝鮮を掌握すべく、ありとあらゆる手段と方法をもちいた。

朝鮮人民の力強い救国闘争によって、亡国的な「単独選挙」があますところなく破綻したにもかかわらず、アメリカ帝国主義侵略者どもは、「選挙」の結果なるものをねつ造し、売国奴李承晩をかしらとする単独かいらい政権をでっちあげた。

南朝鮮の単独かいらい政権は、朝鮮侵略の野望を実現しようとするアメリカ帝国主義の民族分裂政策と新植民地主義政策の産物であり、南朝鮮にたいする植民地支配の道具としてつくりだされた名ばかりの政権であった。

こうして、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略は新しい段階にはいり、民族分裂の危機は重大な段階にいたった。情勢は国土の分断と民族の分裂をふせぎ、祖国統一のためのより主導的で決定的な救国の対策を要求した。

金日成将軍はこれに対処し、解放後三年間に北半部でなしとげた革命と建設の成果にもとづき、また、「単独選挙」に反対する闘争をつうじて高まった大衆の愛国的熱意と、党のまわりに団結した南北朝鮮の広はんな革命勢力に依拠して、民主主義人民共和国を創建することについての党の政治的路線を、当面の情勢にあうよう一刻も早く実現することが必要であると判断した。

金日成将軍は、つぎのようにのべた。

「現情勢において、アメリカ軍が撤退することだけを待ちながら、南朝鮮の親日派、民族反逆者らの売国的反動政策の強化を傍観することは、民族とわれわれのつぎの世代にたいして、永遠にぬぐい去ることのできない罪を犯すことになります。もし、われわれが決定的な救国対策を講じないとすれば、朝鮮人民はわれわれを永遠にうらむことでしょう。われわれは、ただちに朝鮮人民の意思を代表する全朝鮮の最高立法機関を樹立し、朝鮮民主主義人民共和国憲法を実施しなければなりません。そしてわれわれは、単独政府を樹立するのではなく、南北朝鮮の政党、社会団体の代表からなる全朝鮮政府を樹立しなければならないのです」

将軍は、南北総選挙をおこない、最高立法機関を組織し、ただちに民主主義人民共和国を創建する方針を党政治委員会に提出した。

この方針は、将軍がすでに提示した党の政治路線と祖国の自主統一方針に完全に合致するものであった。まさにこの方針を実現してこそ、全朝鮮人民の利益と意思を代表する合法的政権を樹立することができ、南朝鮮かいらい

政権の不法性と反動性をより徹底的に暴露し、それを人民からいっそう孤立させ、祖国統一のための南北朝鮮人民の闘争を、民主主義人民共和国の旗のもとにいちだんと高めることができるのであった。

それはまた、アメリカ帝国主義侵略軍を撤退させ、祖国の自主統一のための朝鮮人民の闘争に有利な条件をつくりだし、国際革命勢力との連帯をいっそう強化することができるものであった。

金日成将軍の民主主義人民共和国創建方針は、一九四八年六月二十九日におこなわれた南北朝鮮の政党、社会団体指導者協議会で一致した賛同をえ、ただちに実践に移されるにいたった。

将軍は民主主義人民共和国の創建に先だち、南北朝鮮の労働党を一つにするための活動をおしすすめた。

南北朝鮮労働党の合党は、当時、南北朝鮮のすべての民主主義的で愛国的な政党と社会団体の統一行動が強化され、やがて樹立される民主主義人民共和国に南北朝鮮の代表が参加する条件のもとで、南北朝鮮の革命勢力にたいする労働党の統一的な指導を保障する問題とかんれんして切実に要求されていた。

それはまた、朴憲永一味の反党反革命的な分派活動によって事実上その戦闘力を失い、アメリカ帝国主義と李承晩一味の攻勢のまえで、全面的な破壊の危険にさらされた南朝鮮労働党を救うためにも、一刻をあらそう問題であった。

金日成将軍は、総選挙によって南北の革命勢力にたいする統一的な指導体系をうちたてる必要から、まず一九四八年八月、南北朝鮮労働党連合中央委員会を創設する措置を講じた（その後、南北朝鮮労働党は一九四九年六月に完全に合党された）。

金日成将軍は、南北朝鮮総選挙の実施とその勝利を保障するためのたたかいを強力に導いた。将軍は一九四八年六月に南北朝鮮の政党、社会団体の指導者協議会をひらき、労働党と民主主義的政党、社会団体、無所属人士との行動の統一を強化する措置をとり、全人民を総選挙へと組織し動員した。

将軍は選挙前夜の八月二十三日、平安南道江東郡勝湖選挙区の選挙民たちのまえで演説し、総選挙がもつ重大な意義について強調したのち、祖国と人民を愛し、われわれのつぎの世代を富強な民主主義独立国家の主人にしようとねがうならば、一人のこらず総選挙に参加し、民主主義民族統一戦線が推せんした統一立候補者に投票するようよびかけた。

こうして総選挙は、一九四八年八月二十五日に、南北朝鮮において各々ちがった方法でおこなわれ、成功裏に終了した。北朝鮮では総有権者の九九・九七パーセントが選挙に参加した。また南朝鮮の愛国的人民は、アメリカ帝国主義とその手先どものファッショ的な暴圧をしりぞけ、全朝鮮の最高立法機関である最高人民会議代議員選挙に積極的に参加した。そして南北朝鮮で五百七十二名の代議員が選出された。これは、党と領袖のまわりにかたく団結した全朝鮮人民の政治的威力の一大示威であった。

総選挙にもとづいて一九四八年九月、ピョンヤンで歴史的な最高人民会議第一回会議がひらかれた。会議では、朝鮮民主主義人民共和国を宣布し、朝鮮民主主義人民共和国憲法を採択した。

これは朝鮮人民の生活で、永遠に忘れることのできない一大慶事であった。

誇らしい国号を全世界に公布した朝鮮人民は、その歴史上はじめて自己の憲法をもつことになった。共和国憲法は、北朝鮮ですでになしとげた民主改革とすべての革命的成果を法的に強固にしただけでなく、南朝鮮人民の闘争綱領ともなった。

最高人民会議第一回会議は、政権の最高執行機関として朝鮮民主主義人民共和国政府を組織し、金日成将軍を内閣首相に、国家の首班に推戴した。

金日成将軍を国家首班に推戴したことは、まさに全朝鮮人民の一致した志向を反映したものであった。朝鮮人民は、十五星霜にわたる抗日武装闘争によって祖国を解放し、朝鮮革命をつねに勝利へと導く民族の太陽——偉大な

領袖金日成将軍をいただくことをかぎりない栄誉、そしてまた最大の幸福と考えた。これは一九三〇年代から朝鮮人民がひとしく領袖としてあおぎみた金日成将軍だけが南北朝鮮人民を指導し、分断された祖国と民族を統一させることができ、また将軍の賢明な導きによってのみ、三千万朝鮮人民が一つの家庭でかぎりなく幸福に暮らしていくことができるという、ゆるぎない信念にもとづくものであった。

朝鮮人民は一致して国家首班に推戴された金日成将軍をあおぎみ、かぎりない信頼と敬慕の情をもって熱烈に歓呼し、あくまでも将軍に忠誠をつくそうというかたい決意に燃えたった。

金日成首相は、最高人民会議第一回会議において、朝鮮民主主義人民共和国政府の政治綱領を発表した。政治綱領の要旨はつぎのとおりである。

第一に、共和国政府は、全朝鮮人民を政府のまわりにしっかりと団結させ、祖国統一のたたかいに動員するとともに、国土保全と民族統一の先決条件となるソ米両国軍隊の同時撤退のためにあらゆる努力をかたむける。

第二に、共和国政府は、わが国の政治、経済、文化生活から、日本帝国主義支配の悪影響を一掃するためあらゆる必要な対策を講じると同時に、わが朝鮮をふたたび植民地化し、わが人民が創設した民主制度を破壊しようとする帝国主義者と民族反逆者らのあらゆるたくらみに反対してたたかう。

第三に、共和国政府は、日本帝国主義時代のすべての法律と、南朝鮮かいらい政府のあらゆる反民主主義的、反人民的な法令の無効を宣し、北朝鮮で実施した諸般の民主改革をいっそう強化し、発展させ、それを全朝鮮において実施するためにたたかう。

第四に、共和国政府は、朝鮮を富強な民主主義独立国家として建設するため、経済の植民地的隷属性を清算し、外来帝国主義者の経済的隷属化政策に反対して朝鮮人民の福祉をたえず向上させ、わが祖国の独立と繁栄を保障する自立的民族経済を建設し、唯一の人民経済計画を作成し、その計画にもとづいて民族経済と民族文化を積極的に

発展させる。

第五に、教育、文化、保健事業に大きな力をそそぐ。教育分野では未就学児童を最大限に就学させ、初、高級中学校網を大々的にふやし、一九五〇年には初等義務教育制を実施する。また人民経済各部門に必要な有能な民族幹部を数多く育成するために、技術専門学校と大学をより多く建設し、勤労者のための各種学校を多数設置し、各種の出版物を大量に発行する。企業所と農村には、病院、診療所を広範囲に建て、人民保健事業を発展させる。

第六に、政府は、朝鮮民主主義人民共和国の政治的基礎である地方人民委員会が、すでに組織された北朝鮮地域ではそれをいっそう強固にし、組織されたが反動勢力によって解散させられた南朝鮮地域では、それを復旧するためにたたかう。

第七に、対外政策において共和国政府は、わが国を世界民主陣営の同等な一員として、わが民族の自由と独立を尊重し、平等な立場でわれわれにたいする自由愛好諸国と親善関係をむすぶために努力する。

第八に、共和国政府は外来侵略勢力から国を守り、北朝鮮ですでにかちとった民主改革の成果を守るために、人民軍隊をあらゆる面で強化する。

徹底的に主体的で自主的なこの政治綱領は、朝鮮革命発展の合法則的要求と朝鮮人民の民族的宿願のすべてを反映した、革命的で人民的な綱領であった。

朝鮮民主主義人民共和国の創建は、愛国的民主勢力の統一と団結によってなしとげられた朝鮮人民のもっとも大きな勝利であり、わが民族の歴史でじつに画期的な意義をもつ出来事であった。

金日成首相は、朝鮮民主主義人民共和国の創建について、つぎのようにのべた。

「朝鮮民主主義人民共和国は、北半部でなしとげられた偉大な社会経済的変革にもとづき、いっそう露骨化するアメリカ帝国主義とその手先どもの植民地隷属化政策と民族分裂策動に反対する民族あげての闘争のなかで、全朝

鮮人民の総意によって、一九四八年九月に創建されました」

共和国の創建によって、朝鮮人民は人民政権をより強固にし、人民民主主義国家体系を全面的にととのえることができたし、このときから国家主権をもつ堂々たる民族として、国際舞台に登場することができるようになった。

また共和国の創建は、朝鮮人民が十分に、自主的に祖国の統一独立をなしとげることができるということを全世界に現実的にしめし、その実現のための朝鮮人民のたたかいに新しい段階を切りひらいた。

愛国的な朝鮮人民の総意によって燦然とそびえたった朝鮮民主主義人民共和国は、統一独立される新しい朝鮮の旗じるしに、革命の完全な勝利のための闘争の確固とした旗じるしになったし、日本の反動の迫害のもとであえいでいる六十万在日同胞をはじめ、すべての海外同胞の希望とたたかいの灯台となった。

海外の朝鮮同胞は、自分たちに栄えある祖国があり、三千万の父金日成首相が朝鮮人民を勝利へと導いているというかぎりないよろこびにつつまれ、闘志と力をさらにふるいおこして民族的権利と自由をかちとるため勇敢にたたかった。

朝鮮民主主義人民共和国の創建は、国際的にみても一つの巨大な出来事であった。

共和国の創建は、東方における社会主義国家の誕生であり、それは平和と民主主義、社会主義をめざしてたたかう世界の人民にとっては大きな勝利に、アメリカ帝国主義をかしらとする帝国主義侵略勢力には甚大な打撃となった。

また東方の一角にゆるぎなくそびえたち、全世界に燦然たる光を放つ共和国は、偉大な領袖金日成首相の導きをうける朝鮮人民のもっとも偉大な獲得物として、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の革命的人民の植民地民族解放闘争の灯台となった。

共和国は、国際舞台で社会主義諸国と堂々と肩をならべてすすむようになり、その威信は日ましに高まった。

南朝鮮各地では、「金日成将軍万歳！」、「朝鮮民主主義人民共和国万歳！」、「アメリカ軍はでていけ！」、「李承晩かいらい政府を打倒しよう！」などと書かれたビラがいたるところにはられ、人民の反米反かいらい政府闘争がはげしく展開された。

このように金日成首相は、三千万朝鮮人民の念願をこめて朝鮮民主主義人民共和国を創建し、その旗じるしのもとに自主統一を実現するためのたたかいへ全人民を力強くふるいたたせ、祖国統一のためのたたかいを新しい段階へと導いた。

そのころアメリカ帝国主義者は、一九四八年からアメリカの全経済をまきこんだ経済恐慌による政治的、経済的危機からの出路を経済の軍事化と新たな戦争挑発にもとめ、そのおもなほこ先を朝鮮にむけた。

アメリカ帝国主義者は、南朝鮮を政治的、軍事的、経済的にいっそう隷属させる各種の侵略的な「協定」を締結し、一九四八年十一月三十日には南朝鮮かいらい国会を利用して、「アメリカ軍長期駐屯案」なるものまででっちあげた。他方かれらは、南朝鮮各地の陸、海、空軍基地を死物狂いで拡張し、とくにかいらい「国防軍」の組織とその増強に全力をかたむけた。

「北朝鮮を占領するためには、よく武装された十万の兵力が要求される」

これは、一九四八年九月八日付『スターズ・エンド・ストライプス』紙の報道である。

それから九か月のちの一九四九年六月に、「駐韓アメリカ大使」ムチオは南朝鮮かいらい政府の国防長官と司法長官をよびつけ、「北進はアメリカの韓国にたいする政策の中心問題」であるから、この「準備をおろそかにしてはならない」とせきたてた。

こうして、南朝鮮にたいするアメリカ帝国主義の軍事「援助」が大々的に増加され、かいらい軍兵力が急速にふえた。かいらい軍兵力は「国防警備隊」が「国防軍」に改称された当時の五個旅団から、一九四九年九月にいたっ

ては八個師団に増強され、一九五〇年六月における兵力総数は十五万を数えた。
侵略戦争への準備は、ファッショ的暴圧と人民にたいする野獣のような弾圧をともなった。
アメリカ帝国主義者とその手先である殺人鬼どもは、一九四九年七月から一九五〇年一月までの七か月間だけでも、じつに十万名以上の愛国的な人民を虐殺した。
そしてかれらは、救国闘争にたちあがった人民の目をあざむき、緊張状態を激化させるために共和国北半部にたいする武力挑発事件をひんぱんにひきおこした。
共和国北半部にたいするかれらの武力侵入は、一九四九年一月から九月までの期間だけでも四百三十二回にのぼった。
こうして、戦争を予告する暗雲が南朝鮮の空をおおいつくし、「北進」ラッパが騒々しくなりわたった。
国際情勢も複雑をきわめた。アメリカ帝国主義をかしらとする帝国主義者は、侵略と戦争政策を強化しながら、「反共」騒動を大々的にくりひろげる一方、ユーゴスラビアのチトー一味をはじめとする修正主義者をそそのかして、国際共産主義運動の隊列を分裂させようと策動した。
このような内外情勢をするどく洞察した金日成首相は、アメリカ帝国主義の侵略戦争挑発策動を粉砕し、祖国の平和統一のための朝鮮人民の主体的なたたかいをいっそう力強く導きながら、そのたたかいを反米反帝闘争における国際革命勢力との連帯を強化し、マルクス・レーニン主義の純潔を守るための闘争と密接にむすびつけた。
当時の情勢からして、朝鮮革命と祖国統一に有利な国際的環境をつくる問題がきわめて重要なものとして提起されていた。
金日成首相は、社会主義陣営諸国の人民とかたく団結し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の植民地民族解放闘争を積極的に支持し、かれらとの団結を強め、反米反帝闘争において国際革命勢力との連帯を強化する路線

を堅持した。これは党と政府の対外政策の基本であった。

他方、首相は、アメリカ帝国主義の新たな戦争挑発策動が激化する情勢に対処し、反米反帝闘争の旗じるしをいっそう高くかかげ、帝国主義の下僕におちぶれたチトー一味をはじめとする修正主義者に反対する力強いたたかいを展開した。

首相は、アメリカ帝国主義をかしらとする帝国主義勢力の新たな戦争挑発陰謀を過小評価しないようにいましめながら、戦争をふせぎ平和を擁護する闘争において、共産主義者が守らなければならない原則的な立場を明らかにした。

首相はつぎのようにのべた。

「帝国主義陣営が弱まり、民主主義陣営が強化された事実だけをもって、戦争の危険がすでにうすらいだと即断するのは大きな誤りであり、平和のための偉業に有害であります。

民主主義陣営の力が強く、全世界の自由を愛好する人民がいかに平和をのぞんでいても、戦争放火者に反対するたたかいを正しく組織し、展開しなければ平和を守ることはできません。戦争をふせぎ平和をかちとるためには、世界各地で戦争放火者と略奪者を暴露し、排撃し、かれらに反対する強力な闘争を展開しなければなりません」

戦争と平和にたいする金日成首相のこの原則的立場は、単純に平和をねがうだけでは決して平和を維持することができず、新たな戦争挑発に狂奔する帝国主義勢力に反対する妥協のない積極的な闘争を展開することによってのみ、平和をかちとることができるという、徹底した反帝革命の立場であった。

首相は、国際革命勢力との連帯を強めながらも、主力は朝鮮人民の主体的な力をあらゆる面から強化することにそそいだ。

首相は、祖国統一の決定的な保障である北半部の革命的民主基地を政治的、経済的、軍事的にいっそうしっかりうちかため、南朝鮮の愛国的民主勢力を党のまわりにかたく団結させ、アメリカ帝国主義侵略者を南朝鮮から追いだすための全人民的な反米救国闘争を展開することに、つねに第一義的な意義をみとめた。

首相は、民族の分裂と同族相あらそう危険をなくし、南朝鮮人民を解放するためには、その張本人であるアメリカ帝国主義者を南朝鮮から追いだすことにあると、くりかえし人民大衆に教えた。

首相はつぎのようにのべた。

「こんにち朝鮮人民のまえに提起されたもっとも重要で緊急な課題は、アメリカ軍を南朝鮮から即時撤退させることであります。アメリカ軍が撤退すれば、朝鮮問題はいかなる混乱も難関もなく朝鮮人民の意思どおり解決されるでしょう。アメリカ軍を即時撤退させるための闘争は、そのまま祖国の自由、独立と統一のためのたたかいであり、全民族の利益をはかるたたかいであります。朝鮮は朝鮮人民のものであり、朝鮮問題は必ず朝鮮人民自身によって解決されなければなりません。民族を愛し、祖国の統一をねがうすべての朝鮮人民は、わが国土からアメリカ軍を撤退させる民族あげてのたたかいに大胆にたちあがらなければなりません」

金日成首相は、アメリカ帝国主義侵略者に反対する民族あげてのたたかいを、国の統一と国土の保全をなしとげるためのたたかいの中心的な環としてとらえ、一貫して堅持してきた南北朝鮮の主体的な革命勢力を強化する戦略的方針をつらぬくことに心血をそそぎながら、統一の扉をひらくための対策をつぎつぎとうちだした。

金日成首相の直接の発起によって、一九四九年六月には南北の民主主義民族統一戦線が一つに統合され、これに祖国統一のたたかいに決起した南朝鮮の中間および一部の右翼政党と社会団体をもうらした祖国統一民主主義戦線の結成大会がひらかれた。

この大会では、金日成首相が明らかにした統一方針――すなわち、アメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から即時撤

退させ、アメリカ帝国主義の侵略道具である「国連朝鮮委員団」を追いだし、外国の干渉なしに南北朝鮮で総選挙を実施し、朝鮮人民自身の手で平和的に祖国統一を実現させることをよびかける宣言書が採択された。

この宣言書には、金日成首相が終始一貫して堅持してきた祖国統一の自主的な立場がそのままおりこまれていた。まさにここに、全人民の心をゆり動かした宣言書の力があった。

南北朝鮮の全人民はこの宣言書をこぞって支持し、反米救国のたたかいに力強くたちあがった。

日ましに高まる朝鮮人民の統一気運にあわてふためいたアメリカ帝国主義と李承晩一味は、一九五〇年にはいるや南朝鮮全域に「非常戒厳令」をしき、緊張状態をつくりだすと同時に、かいらい軍を三十八度線とその付近に集結させ、完全な「北進体制」をととのえた。そして黄海道碧城(ピョクソン)郡一帯と江原道の各地域にかけて、北半部地域にたいする武力侵攻をいっそうひんぱんに強行した。

祖国は文字どおり危機一髪の危険な情勢にさらされた。

このような情勢に対処して金日成首相は、国防力の強化に重大な関心をよせ、戦争をふせぎ、祖国の平和的統一を達成しようとする朝鮮人民の念願を実現するため、さらに誠意にみちた努力をかさねた。

首相の発起によって、一九五〇年六月、祖国統一民主主義戦線中央委員会は、八・一五祖国解放五周年を契機に南北朝鮮の総選挙を実施し、最高立法機関を構成することを提議するアピールを南朝鮮の諸政党、社会団体および社会活動家たちにおくった。

アメリカ帝国主義と李承晩一味は、この提議が南朝鮮の政党、社会団体と社会活動家たちにゆきわたることを極力さまたげたし、平和統一ということばを口にしただけでも検挙し、投獄し、虐殺するという鬼畜のような蛮行をはたらいた。

しかし首相は、戦争をふせぎ、平和統一をなしとげるためのたたかいを片時もおろそかにしなかった。

金日成首相はふたたび、最高人民会議常任委員会が、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議と南朝鮮の「国会」を単一の全朝鮮立法機関に連合する方法で祖国の統一を実現することを南朝鮮「国会」に提議するよう、誠意にみちた措置をとった。

世界の良心は、この大胆な提議から、同族間で血を流してあらそう惨劇をふせぎ民族統一をなしとげようとする金日成首相の熱烈な同胞愛と切々たる念願を深く感じとり、それが実現されることをねがってやまなかった。

しかし、朝鮮人民と世界人民のねがいにたいするアメリカ帝国主義と李承晩一味の回答は、ながいあいだ準備してきたのろうべき犯罪的侵略戦争の挑発であった。

第四章　アメリカ帝国主義を撃滅した鋼鉄の統帥者

1　祖国の運命を一身にになない

一九五〇年六月二十五日（日曜日）の早朝、三十八度線一帯は豪雨に襲われていた。真っ暗な空には稲妻が走り、雷が鳴った。

突然、雷鳴のなかからものすごい轟音が天地をゆるがすようになりひびいた。と思うと、境界線の南側から共和国の北側地域にむけて、真っ赤な砲火が無数に尾をひいた。これにつづいて、アメリカ軍顧問の指揮下に三十八度線上に集結していた李承晩かいらい軍の全師団が無謀な総攻撃を開始した。

アメリカ帝国主義者が李承晩かいらい軍をたてにして、朝鮮人民にたいする侵略戦争を挑発したのであった。朝鮮人民にとっては、これは不意にしいられた戦争であった。

戦端をひらいたのは李承晩かいらい軍であったが、戦争の首謀者と主役はアメリカ帝国主義者であった。攻めよせてくる敵、アメリカ帝国主義は決してなまやさしい相手ではなかった。かれらは世界反動の元凶であり国際憲兵であり、現代植民地主義の牙城であり、帝国主義の凶悪な頭目であった。かれらは殺りくと略奪とともに世界史の舞台に登場して以来、百十余回におよぶたえまない侵略戦争によって無数の人民の血を流しつづけ、極度

に野獣化され、膨張しつくした最大の吸血鬼であった。

かれらは歴史が準備した滅亡の絶壁から身をさけるため、力だけにたより、あらゆる蛮行をほしいままにしているもっともどう猛なけだものであった。このアメリカ帝国主義が李承晩かいらい軍を弾よけに、創建後まもない共和国を一気に葬り去ろうと攻めよせてきたのであった。

これはアメリカ帝国主義の世界制覇戦略、とくにアジア侵略政策の直接の延長であり犯罪的な侵略戦争であった。

第二次世界大戦後、国際反動勢力の頭目として登場したアメリカ帝国主義は、ながいあいだ燃やしつづけてきた世界制覇の野望を本格的に実現する道へとつきすすんだのである。

このためかれらは、社会主義陣営を包囲攻撃し、植民地民族解放闘争を弾圧する力の政策をもちいた。アメリカ帝国主義はこうした世界戦略の一環として、アジアの新生社会主義国家をくつがえし、アジアの完全支配をねらった。

アメリカ帝国主義は朝鮮をアジア侵略の橋頭堡に、第一級の戦略基地にするために朝鮮支配の政策をすすめてきた。一言でいえば、アメリカのアジア戦略とは、アジアを最良の資本市場、商品市場であるとみなし、これを支配する政策であり、そのアジアを支配するために朝鮮を占領するという政策であった。

こうした戦略にもとづいて、アメリカ帝国主義は南朝鮮を占拠したその日から、軍事的侵略政策と植民地隷属化政策を強行しながら北半部を侵略し、全朝鮮を支配するための戦闘準備を着々とすすめてきた。

しかし金日成将軍の徹底した反帝革命路線である民主基地創設路線によって、共和国北半部では革命と建設がすすめられ、その政治、経済、軍事的威力は日ましに強まり、その影響下に南朝鮮でも人民の救国闘争がはげしくくりひろげられた。

これは、アメリカ帝国主義の侵略政策にたいする大きな打撃であった。アメリカ帝国主義はその本来の侵略計画を実現するために、日ましに発展する朝鮮民主主義人民共和国をくつがえそうと、侵略戦争の挑発にやっきとなった。

とくにアメリカ帝国主義は、一九四八年からはじまった恐しい経済恐慌のうずのなかにまきこまれていた。アメリカのある経済学者が認めたように、「新しい対策が講じられないかぎりアメリカの政治経済的危機は爆発する危険があった」のである。

アメリカ帝国主義者は、この危機の打開策を戦争と軍需工業の拡大にもとめた。ヴァンフリートが、「朝鮮は一つの祝福であった。この土地か、さもなければほかのどこかに朝鮮がなければならなかった」(『ニューヨーク・ジャーナル・アメリカン』紙、一九五二年一月十九日付)とのべたのも理由のないことではなかった。

こうした直接的な諸要因がからみあい、一九五〇年にいたって、アメリカ帝国主義者の共和国北半部にたいする侵略策動はますますはげしくなったのである。

アメリカ極東軍司令官マッカーサーはすでに一九五〇年二月十六日、李承晩を東京によびよせ、七月までに北朝鮮を攻撃するようにという、いわゆる十一か条の戦争訓令をだした。

さらにアメリカ帝国主義者は、一九五〇年初頭から日本の重工業、化学工業の大企業を軍需工業に切りかえさせ、これをマッカーサーの手ににぎらせた。

とくに注目されるのはアメリカ大統領の特使ダレスの言動であった。六月十九日、東京でアメリカ国防長官、統合参謀本部議長、アメリカ極東軍司令官などによる戦争挑発にかんする秘密会談がひらかれた。この秘密会談に参加したダレスは六月二十二日に、「アメリカは数日後に極東において『積極的行動』をとる」とのべ、それに先だつ六月十八日には、三十八度線の前線で北朝鮮をにらみながら、「敵はもちろんのこと、最強の軍隊といえども諸君

に対抗することはできないであろう」とかいらい軍を称賛し、一週間後の侵略行為を念頭において、「諸君がその力を発揮する日は目前にせまった」といい放った。

反面、アメリカ帝国主義者は、すでに「国連の韓国問題決議案」まで準備していた。さらに戦争挑発の数時間まえには、南朝鮮にあった六百五十名のアメリカ人婦女子を仁川港（インチョン）からノルウェー船「ラインフルド」号で急拠帰国させるなど万全の措置をとった。

朝鮮戦争はまさに、アメリカ帝国主義者のこうした綿密で計画的な準備によってひきおこされたものである。

それにもかかわらず、盗っ人猛々しくも戦争をひきおこしたその日、アメリカ帝国主義者は、「アメリカはおどろきを禁じえない」、「アメリカとしては真珠湾事件にもおとらない不意うちをうけたことになる」、「まったく予期しえなかった事変」などとさわぎたてた。

このことは、アメリカ帝国主義が残虐性ばかりでなく、その狡猾さにおいてもヒトラーをはるかにしのいでいることを如実にしめすものである。

アメリカ帝国主義者は朝鮮戦争をひきおこすや、かねがねその達成の機をうかがってきた野望を力でもってなしとげ、一世紀近くにおよぶ朝鮮侵略史を強盗的な勝利でもって決着をつけようともくろんだ。

かれらの目的は、朝鮮民主主義人民共和国を征服して民主改革の成果をすべて抹殺し、全朝鮮を植民地に、兵站基地にかえ、ここを拠点にふたたび大陸へ侵入しようというものであった。

共和国は最大の危機にさらされた。すべてが生死の岐路にたたされた。主権と富と輝かしい未来を守ってしあわせで自由な人民としてとどまるか、さもなければアメリカ帝国主義の植民地奴隷に、姓名を奪われ番号でよばれる亡国の民となり、苦役と悲運にさいなまれて死ぬかの、どちらかをえらばねばならなかった。

このきびしい時期に、金日成首相は祖国と人民の運命を一身ににない、少しのためらいもなく決然と、ただちに

敵撃滅の対応措置をとった。

金日成首相は六月二十五日、共和国政府の名において、もしアメリカが侵略的な戦争行為をただちに中止しないならば決定的な報復措置をとるであろうと警告した。

だが、敵はこれをききいれず戦争を拡大していった。

ここにいたって金日成首相は、前線の人民軍将兵に決定的な反撃に移ることを命令した。

こうして、抗日武装闘争の輝かしい革命伝統をうけついだ鋼鉄の軍隊である朝鮮人民軍は間髪をいれず、一糸乱れぬ戦闘行動で、全戦線にわたって三十八度線以北に一～二キロメートルも侵入してきた李承晩かいらい軍を、息つくひまもあたえず一撃のもとに撃破し、破竹の勢いで南へ進撃を開始したのであった。

それは瞬時に断行されながらも、敵にわずかのすきさえあたえぬ威力ある決定的な反撃であった。敵は人民軍が反撃に移った最初の一撃で崩壊し、なだれをうって逃走した。

敵の不意うちにたいし、すかさず人民軍を反撃に移らせた金日成首相の軍事戦略は、世界の歴史にも前例のないものであった。

歴史が教えるところによれば、敵の全面的な攻撃をうけた国は程度の差こそあれ、混乱と後退を余儀なくされ、一定期間戦線を収拾し、力をたくわえてから反撃に移るのが通例であった。

しかし金日成首相は、全戦線にかけて不意うちをかけてきた敵に局部的にではなく、全面的な打撃をくわえながら人民軍を総攻撃に移らせたのであった。

これは抗日武装闘争の伝説的英雄であり、天才的な軍事戦略家である金日成首相によってのみはじめてよくなしうる、まったく独創的な戦略であった。

この独創的な即時反撃戦略は、金日成首相がしめした革命的民主基地創設路線の偉大な生活力をいかんなく発揮

したものであった。これは権力をその手中におさめた労働者階級が、帝国主義者とかれらの戦争政策にどうそなえるべきなのか、また侵略者の攻撃にどう対処しなければならないのかを教えてくれるものであった。

おしよせる敵にたいしては、これをむかえて決定的にうちのめし、敵の侵略にたいしては革命的な解放闘争をもって対処すること、——これは将軍が抗日武装闘争の時期から実践してきた確固とした原則であった。

金日成首相は一九三〇年代に補給基地も正規軍もない条件のもとで、はじめは少数の戦友たちと遊撃隊を組織して日本帝国主義とたたかい、この決死的なたたかいのなかで遊撃隊をきたえ、拡大し、実践をつうじて戦略戦術をあみだしていった。これは筆舌につくしがたいほどの苦しい過程であった。しかし最後に敗北の憂き目をみたのは「無敵日本軍」であり、勝利したのは金日成将軍のひきいる抗日遊撃隊であった。

ところがいまでは、将軍には国家と党があり、みずからが建軍し、育成した正規軍と革命的な人民があった。だから金日成首相は、世界「最強」を大言壮語するアメリカ帝国主義といえども、優にこれを撃破できると確信していた。

略奪者は暴虐で狡猾ではあっても、決して賢明ではない。これは首相のゆるぎない信念であった。

首相は、アメリカ帝国主義が朝鮮の都市と農村を破壊し、多くの人命をそこなう軍隊や武器をつくることはできても、朝鮮共産主義者の鋼鉄の党と、社会発展の合法則的な産物である社会主義制度を破壊し、歴史の歯車を逆転させることはできえないとかたく信じていた。

敵は、こうした偉大な指導者、ながい歳月にわたり、最悪の条件のもとで数千倍の強敵を撃破しつづけるなかで天才的な戦略戦術をあみだした鋼鉄の統帥者金日成首相と、その周囲にかたく団結した朝鮮人民の無限の力を知るすべもなく、ましてやそれをうちまかすことなどおよびもつかないことであった。

朝鮮人民がたたかう戦闘は、帝国主義の侵略から祖国の自由と独立を守り、南朝鮮人民の解放と祖国の統一をめ

アメリカ帝国主義者とその手先どもを一掃するための
聖なる戦いに総決起するよう訴える金日成首相

ざす正義の祖国解放戦争であり、国内反動勢力に反対するきびしい階級闘争であり、人民民主主義制度を守る革命戦争であった。

それはまた、アメリカ帝国主義をはじめ世界反動の連合勢力に反対するはげしい反帝反米闘争であり、世界平和と社会主義陣営の東方の哨所を守るためのたたかいであった。

六月二十六日、金日成首相は内閣非常会議をひらいて重要対策をたてた。これと同時に放送をつうじて全人民と人民軍を戦争の勝利へとふるいたたせる歴史的な演説をおこなった。

この演説で金日成首相は、戦争状況をするどく分析して、この戦争の性格や遂行方法およびその展望を明らかにし、全人民と人民軍に勝利をめざす戦闘的課題を提起した。

首相は、この戦争における敵のもくろみと朝鮮人民の目的について、つぎのようにのべた。

「李承晩一味は同族あいせめぐ戦争をつうじて、南半部に実施している反人民的、反動的な統治制度を共和国北半部にまでおしひろげようとたくらんでおり、わが人民のかちとった民主改革の成果を奪いとろうとしています。李承晩一味は、わが祖国をアメリカ帝国主義の植民地にかえ、全朝鮮人民をアメリカ帝国主義の奴隷にしようとしています。……

、朝鮮人民は、李承晩一味に反対するこの戦争で、朝鮮民主主義人民共和国とその憲法を守りぬき、南半部の売国的なかいらい政権をたたきつぶして、わが祖国の南半部を李承晩一味の反動的な支配から解放し、真の人民政権としての人民委員会を南半部に復活させ、朝鮮民主主義人民共和国の旗のもとに祖国統一の偉業を完成しなければなりません。

われわれがすすめている戦争は、祖国の統一と独立、自由と民主主義のための正義の戦争であります」

首相は、人民軍と共和国南半部人民の戦闘的課題をつぎのようにしめした。

「わが人民軍は共和国北半部の民主改革の諸成果をかたく守り、南半部の同胞を反動的な支配から解放し、人民共和国の旗のもとに祖国を統一するための正義のたたかいで、勇敢さと献身性を発揮しなければなりません。

……全人民軍将兵は祖国と人民のために、その血の最後の一滴までささげてたたかわなければなりません。

共和国北半部の人民は、すべての仕事を戦時体制にきりかえ、短期間に敵を全滅するために、すべての力を戦争の勝利にむかって動員しなければなりません。

……前線の勝利を確保するために、人民軍の後方を鉄壁のようにかためなければなりません。……

共和国南半部の男女パルチザンは、遊撃闘争をいっそうはげしく、いっそう勇敢に展開し、遊撃隊に広はんな人民大衆を結集して解放区を創設し、あるいは拡大しなければなりません。

……共和国南半部の同胞はかいらい李承晩政府の命令や指示に服従することなく、その実行をサボタージュし、

敵の後方組織を混乱におとしいれなければなりません」

この演説は、その一言ひとことが人民軍と全人民に英雄的愛国心をよびおこす、血のたぎるような訴えであった。

首相は、つぎのような確信にみちた予言と戦闘的なよびかけで、この歴史的な演説をむすんだ。

「人類の歴史は、みずからの自由と独立をめざすたたかいに死をとしてたちあがった人民はつねに勝利する、ということを教えています。

われわれのたたかいは正義のたたかいであります。勝利は必ずやわが人民の側に輝くでありましょう。祖国と人民のためのわれわれの正義の闘争は、必ずや勝利するであろうことをわたしは確信してうたがいません。

わが祖国を統一すべきときはきました。勝利の確信をもって勇敢に前進しましょう。

すべての力を、わが人民軍と前線の援助にささげよう！

すべての力を、敵撃滅と掃討につくそう！

全人民的な正義の戦争に総決起した朝鮮人民万歳！

朝鮮民主主義人民共和国万歳！

勝利をたたかいとるため前進しよう！」

金日成首相のこの歴史的な放送演説は、アメリカ帝国主義が挑発した不正義の侵略戦争において、アメリカ帝国主義者と李承晩一味を完全に撃破粉砕し、南半部を解放するという徹底した反帝反米闘争の革命的立場をしめすものであった。

同時にそれは、あくまでも朝鮮人民自身の力で世界「最強」を自称する帝国主義の頭目をうちたおし、最後の勝利をかちとるという確固たる自主的な立場でつらぬかれた演説であった。

演説は全朝鮮人民の心をとらえ、かれらを英雄的なたたかいへとふるいたたせた。それはまた硝煙けぶる戦線につたえられ、人民軍将兵の不死身の情熱を燃えたぎらせた。

最高人民会議常任委員会は、全人民の期待のなかで金日成首相を軍事委員会の委員長に、朝鮮人民軍最高司令官に推戴した。こうして金日成首相は、きびしい時代と危機に直面した人民が委任する大きな歴史的使命を遂行するために、祖国の運命を一身にになって決然とたちあがったのである。

世界の耳目は朝鮮に集中した。朝鮮は世界の焦点となり、朝鮮戦争は世界情勢のかなめであった。五大陸の人民はもちろん、政界、言論界、軍部が、血戦にわきたつ朝鮮に視線をそそいだ。

おどろきと緊張につつまれた世界史の舞台で、朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相は、世界「最強」を豪語するアメリカ帝国主義と真正面から対決することになった。

これは彼我の命運を決する仮借なき対決であった。結末は、はたしてどうなるのであろうか。世界はさまざまに判断した。

資本主義諸国の親米的な上層部では、アメリカの楽勝になんのうたがいもはさまなかった。どんな予想をたて、いかなる断定をくだそうと、それはかれらの自由にまかせればよい。しかし、かれらは大きな誤算をした。

最高司令官金日成首相は、かれらの「予言」をみごとにくつがえし、目にもとまらぬ敏活さと寸分のすきもない指導力をもって前線と後方を指揮した。

首相のよびかけにこたえて全国土は戦争一色に急変した。一切の権力は軍事委員会に集中された。戦時状態の布告、戦時動員令の実施、人民軍指揮体系の改編と抗日闘士による各級指揮部の補強、新しい師団の編成と各種技術兵種部隊の拡張、予備兵力の準備、戦争のための経済と後方の改編、全党組織と党員に救国闘争への決起をよびかける党中央委員会の手紙など、非常措置が矢つぎばやにとられていった。

朝鮮民主主義人民共和国は創建後まだ日が浅く、人民には現代戦の経験がなかった。

しかし金日成首相は、すでに抗日武装闘争の時期から堅持してきた伝統的な革命精神である自力更生の旗を高くかかげて、共和国のあらゆる人的および物的力をいっそう戦闘的に総動員した。

そして軍事戦略においては、人民軍の進撃と敵の背後での遊撃闘争をくみあわせる原則を守った。

首相は敵の侵攻を挫折させて反撃に移り、アメリカ帝国主義侵略者が大兵力を増強するまえに敵の基本集団をすばやく撃滅掃討し、南半部の人民を解放する戦略的方針をうちだした。

これが戦争の初段階における首相の戦略計画であった。

首相はこの戦略計画にもとづいて、人民軍連合各部隊の当面の戦略、戦術的課題をしめした。

それは人民軍部隊が西部戦線、中部戦線、東部戦線にわたる三戦線からいっせいに進攻するというものであった。主打撃方向は西部戦線であった。各戦線では協同作戦をたくみに組織し、刻々とのびてゆく戦線への供給を敏活に保障することであった。

最高司令官の命令と戦略的方針にしたがい、人民軍各部隊は天をも衝かんばかりの勢いで息つくひまもあたえず敵を撃破しながら、南へ南へと進撃をつづけた。

主打撃方向の人民軍部隊は、東豆川(トンドウチョン)、抱川(ポチョン)一帯において敵の抵抗を一挙に粉砕し、二十六日にはすでに議政府(イジョンブ)を解放した。

西部戦線右翼の歩兵連合部隊は、西海(ソヘ)(黄海)方面にのびる中部朝鮮の突出部、甕津(オンジン)と延安(ヨンアン)半島および、由緒深い古都開城(ケソン)、長湍(チャンダン)などの地域を解放した。中部戦線の人民軍は加平(カピョン)、春川(チュンチョン)の北方地域に進出し、東部戦線では江陵(カンルン)をおびやかした。

こうして三十八度線以南の屈曲と湿地の多い西海岸から山や渓谷、田畑の多い中部をへてけわしい太白山脈が走

る東海岸にいたるまでの全戦線は、人民軍の砲声と、キャタピラの音と、歩兵部隊の突撃のかん声でみちみち、こっぱみじんの運命におちいった敵陣は修羅場と化した。

2　侵略者を撃破し一路南へ！

最高司令官は、敵を撃破して疾風のごとく進撃する人民軍部隊にソウル解放の作戦任務をくだした。それはつぎのようなものであった。

「ソウルを西北と北、東南と南から迂回し、三十八度線一帯の敵を横城（フェンソン）、原州（ウォンジュ）、利川（リチョン）、水原（スウォン）の西南と南方に展開する敵とに分離し、敵の基本集団をソウル地域で包囲せん滅することにより、ソウルをはじめ漢江（ハンガン）以北の各都市を解放すること」

この命令にしたがって、人民軍各部隊は攻撃速度をさらに早めた。

議政府を突破した主打撃方向の人民軍戦車連合部隊は、アメリカ空軍の猛烈な爆撃と機銃掃射をついて敵の防衛集団に大きな打撃をあたえ、ソウルに迫った。

一気に共和国に攻めこもうとしたアメリカ帝国主義者と李承晩一味は、人民軍の圧倒的な反撃のまえに、ただぼう然とするばかりであった。

色を失った敵は、汶山（ムンサン）界線および危険のせまったソウル東方にかいらい軍残存兵力六個師団を配置して、アメリカ空軍の援護のもとに必死になってソウルの防備につとめた。

こうした敵情をすでに洞察した最高司令官は、敵にときをあたえず攻撃速度をさらに早め、正面および側面から攻撃をくわえるよう命令する一方、もっとも親しい戦友である民族保衛相をよんでソウル作戦計画を説明し、この

作戦を成功させるためにかれを前線に派遣した。

首相は、抗日武装闘争のときに、すべての指揮官をつねにもっとも危険な戦闘区域に派遣して指揮をとらせ、みずからもその模範をしめした。指揮官が先頭にたつことによって遊撃隊員の士気と戦闘力を高めたのである。

首相はこの経験を生かしたのであった。

前線の各部隊は最高司令官の命令にしたがい、ソウルにたいする総攻撃を開始した。それは怒濤をまきおこして瞬時に谷間を湖にかえる洪水にも似た攻撃であり、追撃してはこれを捕捉せん滅し、迂回してはこれを包囲せん滅する変幻自在な攻撃であった。

このころすでに敵は、人民軍の攻撃をふせぐだけの部隊、とくに規律と戦闘力をそなえた軍隊をもっていなかった。のこされたのは、ただ戦意を失った敗残兵の集団でしかなかった。

ソウルにちぢこまっていた敵の首脳部のあいだでも、絶望的な混乱がおこった。かれらは人民軍の攻撃によってソウルでおこりうる大騒動を未然にふせごうと、ソウル放送をつうじてかいらい軍が戦線で勝利しているというデマを報道しながら、その日の夜に「政府」を大田（デジョン）に移そうとやっきになった。

二十七日の朝には、アメリカ国務省からソウル脱出の指示をうけたアメリカ大使ムチオが、あたふたと真っ先に水原飛行場にかけつけ、日本行きの飛行機にとびのった。

しかし、これは混乱の発端にすぎなかった。

かいらい軍の負傷兵がソウルになだれこんできた。ソウルはまさに混乱のるつぼと化した。

一方、ソウルの包囲陣はますますせばめられ、人民軍の空軍はソウル上空を旋回しながら降伏勧告のビラをまき最高司令官の指示によって前線に派遣されていた民族保衛相は、放送をつうじて降伏をよびかけた。

二十七日の夜になって敵の混乱は極限に達した。それは人民軍の漢江（ハンガン）渡河を妨害するためにおこなわれた漢江橋

爆破となってあらわれた。
そのときはまだ、大部分のかいらい軍が漢江以北にいた。ソウル防衛に狩りだされていたかいらい軍と、強制的にもしくは敵の欺瞞宣伝にのせられて南におしよせる市民で漢江橋がごったがえしていたそのとき、狂いたったアメリカ帝国主義とかいらい軍の頭目は、この橋を爆破してしまったのである。そして数多くのかいらい軍兵士と市民が吹きとばされ、真っ暗闇の漢江に沈んでいったのであった。
東部からソウルを攻めていた人民軍歩兵連合部隊と戦車連合部隊は、六月二十八日の朝突撃に移り、ソウル東大門(トンデムン)区域に突入する一方、敵の南の退路を遮断した。これと協力して北部からソウルを圧迫していた部隊は彌阿里(ミアリ)一帯の敵を撃破し、ソウル市内に突入した。ソウル市内の各区域では猛烈な市街戦がくりひろげられた。
ソウル突入の先陣をつとめた人民軍戦車兵は、犯罪の巣窟であるかいらい政府の「中央庁」屋上に、五角の星輝く藍(あい)と紅(べに)の共和国国旗をひるがえした。
こうして朝鮮人民軍は敵の侵略を粉砕し、攻撃に移って三日目の六月二十八日十一時三十分、ついにソウルを完全に解放した！　これが侵略者の傲慢な挑戦にたいする金日成首相と朝鮮人民の断固としたこたえであった！
開戦三日目にしてすでに「首都」を占領されて逃亡する敵、とくに大言壮語しながら侵略の火をつけはしたものの、かえって支離滅裂の状態におちいった敵の醜態は、全世界の嘲笑の的となった。
四十年近い日本帝国主義の支配と、数年にわたるアメリカ帝国主義および李承晩一味の反動支配のもとで、植民地奴隷生活をしいられてきたソウル市民は、慈しみ深い領袖金日成首相のふところにいだかれたのであった。
解放された人民は、「われわれの敬愛する領袖金日成将軍万歳！」と書かれたプラカードと、金日成首相の肖像画を高くかかげて、声をかぎりに万歳を叫びながらソウル市内を行進した。人民のこうした歓喜と歓呼の声は、自分たちを飢餓と屈辱の泥沼から救ってくれた朝鮮人民の敬愛する領袖金日成首相にたいする、かぎりない感謝の念と

忠誠心のあらわれであった。

六月二十八日、最高司令官金日成首相はソウル解放に際して、全国の同胞と人民軍とソウル市民に熱烈な祝賀をおくり、戦争を早く終わらせ、祖国統一を完成させるために進撃している人民軍を総力をあげて援助するよう全人民に訴えた。

ソウル解放は、共和国北半部を一挙に征服しようとしたアメリカ帝国主義と李承晩一味の凶悪なたくらみをうちくだき、李承晩の支配体制を崩壊の危機に追いやった。敵は当時の敗戦の模様をつぎのように書いている。

「六月二十八日には、漢江の南方で烏合の衆と化した軍隊が逃げ腰で守備についていた。陸軍本部は二十五日の兵籍簿に記載されていた九万八千名のうち、わずかに二万二千名を確認できただけであった。『アメリカ軍についで強力な軍隊だといわれていた大韓民国国軍』は、敗北しただけではなく、崩壊してしまったのである」(『韓国戦争』)。

人民軍の進撃に狼狽したアメリカ帝国主義者は、空海軍を増強して前線と後方に無差別爆撃をくわえる一方、七月二日には日本駐屯アメリカ軍第二十四師団を釜山に上陸させるなど、陸軍兵力をも大々的に投入した。

アメリカ軍が前面に進出したことによって、アメリカ帝国主義の軍部と言論界では戦局の好転を信じていた。いかに勇猛で頑強な人民軍といえども、不敗を誇るアメリカ軍のまえでは無力であろう、人民軍はアメリカ軍には手も足もでまいと、かれらはこう速断したのである。

ところが、事実はどうであったろうか。人民軍勇士たちは敵をおそれるどころか、アメリカ帝国主義にたいするかぎりない憤りとにくしみに燃えていた。不倶戴天の敵を徹底的に撃滅する決意に燃える朝鮮人民軍は、アメリカ軍地上部隊とのたたかいで、緒戦からせん滅的な打撃をあたえた。

七月五日、烏山北方界線でアメリカ軍第二十四師団の先遣部隊と接触した人民軍の尖兵区分隊は、主力部隊の到

着を待たず突撃戦を断行した。戦車が敵の防御陣と砲兵火力を制圧するあいだに、歩兵部隊は正面と側面から敵の本陣に肉迫して果敢な攻撃をくわえた。ある兵士は銃剣で十七名、手榴弾で四十余名の敵をたおした。兵士のだれもがこの兵士に負けない勇敢さを発揮した。

人民軍尖兵区分隊は、わずか二時間たらずのあいだに、アメリカ軍一個歩兵大隊と一個砲兵大隊を完全に掃討した。

アメリカ軍地上部隊との緒戦でおさめた人民軍の輝かしい勝利は、領袖と党のために、祖国と人民のためにたたかう人民軍の威力をいんかなくしめしたものであった。それはまた、アメリカ帝国主義侵略者が技術と資源と数の優勢をたのんでみたところで、結局は敗北の運命をさけることができないということをはっきりと見せてくれた。

一方、創設後まもない人民軍航空隊は、空中戦で多くの敵機を撃墜し、海軍の第二魚雷艇隊は、注文津(ジュムンジン)沖合で、わずか四隻の魚雷艇をもってアメリカ帝国主義の重巡洋艦一隻を撃沈し、軽巡洋艦一隻を撃破した。これは世界海戦史に例のない偉勲であった。

肝を冷やした殺人将軍マッカーサーは、「敵は攻撃的であり、よく訓練された職業的軍隊であり、軍最高首脳の指揮もすぐれたものであり、戦略戦術もたくみに駆使している」と悲鳴をあげ、少なくとも完全な戦闘力を有する五個の師団と三個の戦車大隊がいますぐ必要であるとわめいた。

かれはまた、たびかさなる侵略戦争で平和な住民を大量殺りくすることによって、(たとえばルソン島の住民の四分の一を無残に虐殺したように)自身を勝者よばわりしてきた以前からの習性どおり、こんどもその空軍に命じ、前線ばかりでなく北半部の平和的産業施設や住宅地区に、戦争史上まれにみる野蛮な猛爆撃をくわえた。

こうして戦争の初期においてすでに、ピョンヤン、咸興、興南(フンナム)をはじめとする大部分の都市や村落が灰燼と化した。この情勢からおして外国の一部筋では、北朝鮮の戦争能力は急速に減少し、前線でのアメリカ軍はたやすく大

攻勢に転じうるであろうとみていた。

ときを同じくしてアメリカ帝国主義は、七月七日、国連安全保障理事会でその追従諸国をそそのかし、「国連軍」を組織し、朝鮮戦線に参戦させ、それをアメリカ軍が管理し、その総司令官はアメリカが任命するという不法な「決定」をでっちあげた。

こうしたきわめて重大な事態にたいして、朝鮮と平和を愛する世界の人民の非難、憤激は爆発した。だが、たけりたったアメリカ帝国主義は、「国連軍」という名でさらに多くの師団を朝鮮戦線におくりこんだ。「国連軍」総司令官となったマッカーサーは、東京に「国連軍」司令部をおき、アメリカ第八軍司令官ウォーカーは大田(テジョン)に第八軍司令部を設置した。こうして朝鮮戦争は困難かつ長期的なものとなった。

しかし、この戦争で朝鮮人民はますますきたえられ、戦争勝利にたいする金日成首相の信念にはかわりがなかった。

こうした信念は、朝鮮戦争とかんれんした『ユマニテ』紙記者の質問にたいする回答においても明確に知ることができる。

朝鮮戦争の展望についての質問にたいして、金日成首相は、「もし外国の武力干渉がなかったなら、朝鮮での戦争はすでに終っているはずである。もちろんアメリカの干渉は戦争をながびかせている。われわれは、勝利をたやすくえられるものとは予想していない。しかし朝鮮人民は、アメリカ武力侵略者をわが朝鮮から完全に駆逐し、終局的な勝利をかちとるまでたたかうかたい決意をもっている」と確答した。

アメリカ帝国主義の残忍な盲爆による被害が戦争終末に影響をおよぼすか、との質問にたいしては、こうこたえた。

「アメリカ帝国主義者の野獣のような暴行は、アメリカ武力侵犯者にたいするわが朝鮮人民の憎悪をいっそう燃

えたたせている。こうした蛮行は、自由と独立のための闘争で、朝鮮人民の力を弱めるどころか、かえって増大させている」

金日成首相は、世界でもっともごう慢で野蛮なアメリカ帝国主義を決定的にうちくだくために、一九五〇年七月八日の放送演説をつうじて、全人民と人民軍に、アメリカ帝国主義を撃滅するための全人民的民族解放闘争にたちあがるよう訴えた。

首相は、ヒトラーにおとらないアメリカ帝国主義の破廉恥で悪らつな侵略行為と野獣的蛮行を暴露し、人民に高潔な民族的自尊心と、侵略者にたいする不屈の闘志につらぬかれた熱烈な愛国心をよびおこしながら、つぎのようにのべた。

「われわれはアメリカ帝国主義者が、わが祖国の領土でおかしている罪悪を断じてゆるさず、わが国の平和な都市と農村に野蛮な爆撃をくわえ、われわれの父母、兄弟姉妹やあどけない子どもたちを虐殺しているのをゆるすことができません。

われわれだけでなく、われわれの子孫も、祖国の山河を人民の血でそめた野獣、アメリカ帝国主義侵略者をいつまでも、永久にのろいつづけるでしょう。

祖国の栄誉と民族の運命をとうとぶ朝鮮人であれば、だれかれをとわず、アメリカ帝国主義者の侵略に反対する祖国解放の正義のたたかいに総決起しなければなりません」

つづいて首相は、「祖国の自由と独立をかちとる事業は朝鮮人民自身がなすべきこと」であるという確固とした主体的な立場、自力更生の革命精神を強調し、全人民と軍隊に戦闘的任務をあたえた。

首相は戦争の勝利と人民軍の援護のために、共和国北半部と解放地域の人民は生産を最大限に高め、後方を鉄壁のごとくかためるため、男女パルチザンと未解放地区の人民は敵の背後でアメリカ帝国主義侵略者とその手先に仮借なき

攻撃をくわえ、これを掃討せよと訴えた。

さらに、かぎりない愛と期待をこめて、人民軍の戦闘的な任務をつぎのように明示した。

「英雄的な人民軍兵士、下士官、将校諸君！

全朝鮮人民は大きな愛と誇りをもって、祖国と人民のためのたたかいにおいて諸君が発揮している偉勲を見守っている。

悪らつな侵略者どもをいっそう容赦なく、決定的に撃滅しよう！　わが国土からアメリカ帝国主義の略奪者とその手先どもを一人のこらず全滅しよう。

人民軍将校諸君！

現代戦の指揮法をたくみに適用せよ。大胆に部隊の機動作戦を実施して敵を包囲全滅せよ。わが軍のすぐれた技術を完全に利用しよう」

首相は、演説の最後をつぎのような訴えでむすんだ。

「先祖代代の遺骨がうずめられており、そしてわれわれの愛するつぎの世代が育っているわが祖国の山河から、アメリカ帝国主義者を完全に駆逐するために前進しよう。朝鮮民主主義人民共和国の栄誉ある旗を、釜山、木浦（モクポ）、済州（ジェジュ）島の漢拏山（ハルラ）にまで高くひるがえすために、われわれの正義の解放闘争を完全な勝利でかざろう。

勝利をめざして前進せよ！

朝鮮の自由と独立万歳！」

金日成首相のこの演説は、全人民と人民軍の炎のような敵愾心を燃えあがらせ、かれらを領袖のまわりにかたく団結させ、領袖の指導のもとにアメリカ帝国主義者を完全に掃討する決意をかためさせた。それはまた全人民と人民軍に、アメリカ帝国主義にたいする大掃討戦を命じた民族至上の命令であり、アメリカ帝国主義が敗北するであ

ろうことをはっきりと警告した、かれらの侵略にたいする憤怒の回答でもあった。

最高司令官の命令をうけた人民軍将兵は、さらに敏活にたたかい、ますます攻撃を強めた。そして、七月八日には、天安（チョンアン）、鳥致院（ジョチウォン）、丹陽（タンヤン）、陰城（ウムソン）、清州（チョンジュ）、公州（コンジュ）、聞慶（ムンギョン）、盃珍（ウルチン）などをふくむ広大な地域を解放した。

たたかいがすすむにつれて、首相のまえには、早急に解決しなければならない困難な問題が、つぎつぎと提起された。

アメリカ軍の兵力が増強されていく条件のもとで、ひきつづき人民軍の進撃路を切りひらく問題、正義の戦争にたちあがった青年学徒の入隊によって急増した人民軍の隊列を質的に強化する問題、解放地区の拡大と戦線がのびるにつれて提起される軍需物資の輸送を改善する問題、東海岸および西海岸の防備を緊急に強化する問題、南半部地域の民主化事業など、なすべきことはかぎりがなかった。

首相は、敵の爆撃と焼夷弾のために焼野原と化した村を見まっては、敵撃滅へと農民の士気をよびおこし、夜半、敵機の照明弾に照らされた砲煙けぶる前線にも姿を見せては、兵士たちを激励した。身辺の危険などかえりみようともしなかった。副官たちは、ひとときも気をやすめることができなかった。

前線を視察する金日成首相は、戦闘員の士気と戦闘能力、戦略物資の供給、負傷兵の治療、指揮官の部隊管理などにこまかく気をくばり、具体的な指示をあたえた。

首相は、前線における戦闘指揮を敏活におこなうため、前線司令部をもうけた。ここには、金策、姜健の両同志をはじめ、抗日パルチザン闘士たちを任命した。それから軍隊内の政治活動を強化するため、軍事委員制度を実施した。

一方、首相は前線の要求を敏活にみたし、前線と後方をさらに強化するために一連の対策を講じた。

首相は、急速に南にのびる前線を支援するため、前線司令部の後方基地をソウルにおいた。この措置によって、ソウルは軍需供給基地および負傷兵にたいする後送治療基地となった。戦争勝利にむかってたちあがった南朝鮮の人民を、人民軍の後方援助に動員する点からもきわめて適切な措置であった。

解放された南朝鮮地域および、北朝鮮で前線ゆきを志願する無数の男女青年を組織して多くの予備軍を編成し、それにともなう幹部の補充も適切におこなわれた。

さらに首相は、後方における全人民的な防衛体系をととのえるための緊急対策をたてた。

首相は、敗走するアメリカ帝国主義侵略者がぼう大な空、海軍を動員してわが軍の背後に上陸を企てるであろうことを予見し、これを適時にうちくだくためには後方、とくに重要な海岸地帯の防衛を強化すべきであると考え、これにもとづいてながい海岸線を中心に、各地で人民軍を基本とした全人民的な防衛体系をうちたてるよう指示した。なかでも敵の上陸地点と予測される仁川—ソウル地区に強力な防衛体系をととのえるよう、京畿道防衛地域軍事委員会に特別の指示をあたえた。

金日成首相は、こうしたぼう大かつ困難な課題を遂行するには非常な努力が必要であると説きながら、腕をこまねいて人民のたすけをもとめたりせず、主体的な力によって必ず解決すべきであると強調した。

軍事指導のかたわら金日成首相は、解放地区における諸般の民主改革を指導した。

解放地区における民主改革は、そこの人びとを解放前の無権利と貧困から救いだして、北半部の人民と同じようにかれらを政権およびすべての財貨の主人の座につかせ、かれらの燃えたぎる熱意を戦争の勝利へ組織動員する、金日成首相の革命的構想の実現過程であった。

ことは決してやさしくはなかった。

敵は逃走に際してすべてを破壊し、多くの人民を虐殺した。共産主義隊列内にもぐりこんでいた敵の手先は、南

朝鮮労働党を破壊し、人民にも害をおよぼしていた。しかもいたるところで戦争の砲火がとどろきわたっていた。首相はこうした事態を考慮して、多くのすぐれた幹部を北半部から派遣し、南半部の人民を援助した。こうして各地に労働党の各級機関や社会団体が組織され、人民委員会の復旧につついで各級地方人民委員会選挙が人民の歓呼のうちに実施された。

これにもとづいて、敵の機関および地主の土地を無償で没収し、それを雇用農民と土地のない農民、わずかな土地しかもたない農民に無償で分与する歴史的な土地改革が実施された。有史以来はじめて土地の真の主人となった南朝鮮農民は、かぎりないよろこびにつつまれた。

土地改革につづいて、労働法令をはじめ社会の民主化をすすめる多くの革命的な措置がとられた。

南朝鮮の人民は、解放をもたらし、住みよい世のなかをつくってくれた金日成首相を心から信頼し、敬慕の情をおさえることができなかった。

首相は多忙な時間をさいては解放地区の人民をたずね、かれらの生活に心をくばった。

こんなこともあった。

首相がありきたりの軍服を着て、ある農家の内庭にはいったときであった。土間のかまどの前で仕事をしていた農家の主婦は、自分にあいさつする相手がだれであるかも知らず、ていねいに会釈をかえした。しばらく首相の顔を見つめていた農家の主婦は「どこかでお会いしたような方ですが……」とつぶやいた。

しかし、敵に支配されていた暗黒の世から解放されたばかりの農家の主婦が、金日成首相に会っていようはずはなかった。彼女はだれなのかを思いだそうとでもするかのように、将軍の顔をじいっと見つめては首をかしげた。なにかをいっしょうけんめい思いだそうとしている様子だった。そしていそいで部屋の戸をあけると、壁にかかっていた大きな写真を見あげた。金日成首相の肖像であった。彼女は視線をふたたび首相に移した。彼女はその

かがだれであるかを悟ったのだ。その瞬間、おどろきと感動のあまり、農家の主婦は涙をうかべたままぼう然とたちすくんでしまった。

「首相さま！　わたしはまさか……、首相さま、ありがとうございます！」

一農家の生活にまで心を配る首相にたいして、農婦が口にすることができたことばは、ただこれだけであった。

このエピソード一つだけをみても、敬愛する領袖金日成首相にたいする南朝鮮人民の燃えるような敬慕の情をうかがい知ることができるであろう。

こうして民主改革は、南朝鮮の人民に人民民主主義制度の優越性をしめし、かれらを金日成首相と党のまわりにかたく団結させる契機となった。

それはまた、アメリカ帝国主義者と李承晩一味の政治経済的土台を一掃して、かれらを孤立させ、南朝鮮人民の革命的熱意を戦争勝利へと組織していくうえで大きな意義をもつものであった。

南朝鮮の人民は、かれらの解放をもたらし、かれらを新しい世のなかの主人にしてくれた領袖と労働党の恩にむくいるため、戦争勝利にすべてをなげだしてたちあがった。

解放地域の人民は民主改革に積極的に参加し、破壊された経済の復旧建設に力をそそいだ。和順(ファスン)、寧越(ニョンウォル)などの炭鉱では、敵が破壊していった炭抗が短時日のあいだに修理復旧され、京仁地方と広州(クァンジュ)、春川(チュンチョン)など、全壊された工業中心地でも復旧作業が活発にすすめられた。

解放地域の人民は、各地に武装自衛隊を組織しては村や都市を守りながら防衛施設を築き、反スパイ闘争をくりひろげて後方をしっかりとかためていった。解放区の人民は敵の猛爆撃のなかで橋をたてなおし、砲火をくぐって前線に弾薬、食糧その他の軍需物資をはこび、人民軍の傷病兵を手厚く看護した。

それればかりでなく、数十万にのぼる男女青年学生がアメリカ帝国主義侵略者をうちたおすため、先をきそって義

勇軍の隊列にくわわった。

アメリカ帝国主義者が無差別爆撃と殺りくをほしいままにしていたとき、金日成首相は人民を解放し、かれらに新生活をもたらし、軍隊と人民を革命的に組織教育することによって無限の威力をつくりだした。

金日成首相は軍隊と後方を立体的に、強力に築き、総力をあげてアメリカ帝国主義にたいする大せん滅戦を展開した。

首相の視線は大田にそそがれた。大田――ここにアメリカ軍を追いつめ、朝鮮人民の本領をしめすのだ。首相はこう決心した。

大田は南朝鮮の重要都市の一つで、嶺南（慶尚南北道）と湖南（全羅南北道）地方をむすぶ戦略上の要衝であった。

ソウルから敗走につぐ敗走をかさねてきた敵は、大田を「臨時首都」にさだめ、ここに大兵力をつぎこんだ。とくにアメリカ帝国主義侵略者は、アメリカの歴史上最強の「常勝師団」とよばれていた第二十四師団とアメリカ軍の全火力をここに集結させた。

敵は大田を死守するため、錦江（クムガン）と小白（ソベク）山脈の要害を利用して有利な地点ごとに強固な陣地を構築し、この界線を「不撤退線」、「最終防衛線」であると公言してはばからなかった。

この界線を突破しなければ、大田以南の地域に進攻することはできなかった。またこの界線を突破してこそ、アメリカ軍によって人民軍の進撃が挫折されるだろうというアメリカ帝国主義の高慢な妄想と、アメリカ軍の「強大性」にかんする「神話」を粉砕することができるのであった。

じつに大田解放戦の勝敗いかんは、アメリカ帝国主義の鼻柱をくじくことができるかどうかという問題であり、それはまた、以後の作戦にも大きな影響をおよぼすものであった。

したがって人民軍連合部隊は、いかなる犠牲をはらおうとも必ず、そして迅速に大田を解放しなければならなかった。

金日成首相は、軍事情勢と敵味方相互の力関係、戦争の推移と展望をするどく分析し、大田解放をめざす周到緻密な作戦計画をたて、直接その指揮にあたった。

首相はこの戦闘で、人民軍の各兵種間の緊密な協同作戦によって敵の正面および側面を強力にたたき、同時に一部の部隊を大田南方に迂回させ、敵の背後に深く浸透して、敵の退路と増援路を遮断し、これを包囲せん滅する作戦をもちいた。

すなわち、アメリカ帝国主義侵略軍の主力部隊と南へ敗走中であったかいらい軍の大兵力を袋小路に追いつめ、これをのこらず全滅させる考えであった。

こうすることによって、恐怖にふるえながら敗走する侵略者に深刻な軍事政治的敗北をあたえ、全面的な混乱におちいらせようとしたのであった。

これは、困難な抗日武装闘争の時期にあみだした神出鬼没の遊撃戦術、とくに敵の大部隊を機敏な大包囲作戦によって奇襲掃討した偉大な戦略戦術を現代戦に適用した、卓越した戦術であった。

七月十八日、最高司令官の命令によってすでに論山（ロンサン）一帯に進出していた人民軍連合部隊は、大田南方へと迂回しはじめた。敵の背後と側面にむかって迂回する戦闘員たちは、敵のきびしい警戒網を切りぬけ、ひそかに強行軍しなければならなかった。かれらは、抗日パルチザンの将帥であり、朝鮮人民軍の最高司令官である金日成首相が直接くだした戦闘命令を遂行する栄誉にはげまされ、想像を絶する苦難を克服し、大田南方と東南方に陣地を占めた。

これとときを同じくして、英雄的な渡河作戦によって錦江をわたった一連合部隊は、大田北方の太平里（テピョンリ）付近で、ア

メリカ第二十四師団十九歩兵連隊を包囲して分散せん滅し、ひきつづき大田西北に進出した。また鳥致院、清州方面から攻撃してきた部隊は大田北方に進出した。

十九日の午後、包囲を終えた朝鮮人民軍連合部隊は、二十日早朝、大田市街にたいする総攻撃を開始した。各種の砲門がいっせいに火ぶたをきり、すさまじい砲煙をついて強力な戦車部隊を先頭に四方から市街に突入する人民軍の猛攻撃は、泰山をもくずさんばかりであった。

これが敵のいう「不撤退線」なのか？　神話の創造者である「常勝師団」は、天地をゆり動かす砲声のなかでねむっていたとでもいうのであろうか？　いや敵は死物狂いに抵抗した。しかし、なんの効果もなかった。アメリカ帝国主義の「最精鋭」部隊も、朝鮮人民軍のまえでは虎ににらまれた小犬同然であった。

ここで、大田戦闘にかんする敵側の記録を見るのも興味あることであろう。

「かれら（人民軍—引用者註）は守備軍を正面から攻撃して、その自由をしばり後退をよぎなくさせる一方、迂回または浸透作戦によって守備軍の背後に進出し、その退路を遮断するという戦術をもちいた。ある特定な時点で、ディーンであれ、ほかの指揮官であれ、背後の状況を把握することは不可能であった。それは……、アメリカ軍の指揮者たちがそれと気づいたときにはすでにおそかったほど、看破するに困難な戦術であった。……アメリカ軍は崩壊し、救えるものだけを救った。……

二十日の朝になって、もう二日間持ちこたえれば増援軍がつくかも知れないというディーンの希望は失われた。士気をなくした守備部隊の兵力は、市内へ退却しはじめていたし、市を包囲した敵の火線はますますその環をちぢめていた」（『韓国戦争』）。

大田市内の敵は大混乱におちいっていた。それは軍隊というよりも、逃げ道をもとめて絶望的に狂乱する盗賊の群であった。これまた逃げ口をさがして砲煙のなかを走りまわっていたアメリカ軍第二十四師団長ディーンも、ち

ょうど同じ時刻に、まぎれもない侵略者の末路のほろ苦さをたっぷりと味わっていた。
すでに生気を失っていたかれは、威風あたりをはらってすすむ人民軍の戦車めがけて、やぶれかぶれにピストルを放った。戦車はびくともせずにとおりすぎたが、ディーンは最後の一発までうちまくった。ディーンのこうした行為は、いかなる小説家といえども想像できない絶望した者の狂気の発作以外のなにものでもなかった。しかしそのあとのディーンは、もっとみじめであった。かれはかいらい軍に変装して逃亡をはかったが、人民軍兵士に生捕りにされてしまったのである。

ディーンの境遇は、アメリカ帝国主義のすべての妄想家たちに多くの象徴的な問題をなげかけた。アメリカ軍第二十四師団をはじめ、大田の敵軍は壊滅し、市街は解放された。

大田戦闘における人民軍の圧倒的な勝利は、金日成首相のすぐれた戦略戦術と人民軍の威力を全世界にしめし、人民軍はアメリカ帝国主義のいかなる軍隊をも撃破し、最後の勝利をたたかいとることができることを実証した。

アメリカの強大性にかんする「神話」はくずれた。アメリカ帝国主義が誇りとしていた、いわゆる「勝利の歴史」は終止符をうち、かれらは敗北の急坂をころがりおちていった。とくに「最精鋭」を看板としていたアメリカ軍第二十四師団の惨敗は、アメリカ帝国主義を不安におののかせた。

アメリカ帝国主義侵略者は、この戦闘でこうむった深刻な敗北から、金日成首相のすぐれた戦略戦術と人民軍の政治的、軍事的優越性には、いかなる軍事技術的優位や戦略戦術といえどもそれが完全に無能であるということを、いっそう深刻に感じるようになった。

大田で惨敗したアメリカ帝国主義侵略軍は、最後の拠点である釜山（プサン）にむかい、算（さん）を乱して敗走した。

各前線の人民軍将兵は敗走する敵を追撃しながら、急速に南下していった。

大田解放につづいて七月二十二日には木浦を、二十三日には光州を解放し、さらに南原（ナムウオン）、求礼（クレ）、順天（スンチョン）、麗水（リョス）、

河東、晋州、咸昌、安東などの諸地域を解放した。八月二日には敵の大邱方面防衛の要衝である金泉を解放した。

こうして勇猛な人民軍は、開戦後わずか一か月のあいだに、南半部の全地域の九〇パーセント以上と人口の九二パーセントを解放した。

疲労困憊した敵は、支離滅裂になって朝鮮の東南端である釜山の三角地に追いつめられていった。

釜山は絶望と恐怖におののく敵の修羅場であった。せまりくる死のかげと、ちりあくたのように玄海灘に追いおとされるであろうという絶望感で、かれらは気も狂わんばかりであった。

敵は当時の釜山の様子をつぎのように書いている。

「敗退につぐ敗退で釜山の空気は沈滞し、国連軍の全面的な後退を予測して恐怖にふるえ、まひしていた」（『韓国動乱史』）

「半島の片隅の小さな橋頭堡（釜山橋頭堡）にあえぎながら集まってくる戦闘員は、精根つきはて士気あがらず、やりばのない不満にみちていた」（『韓国戦争』）

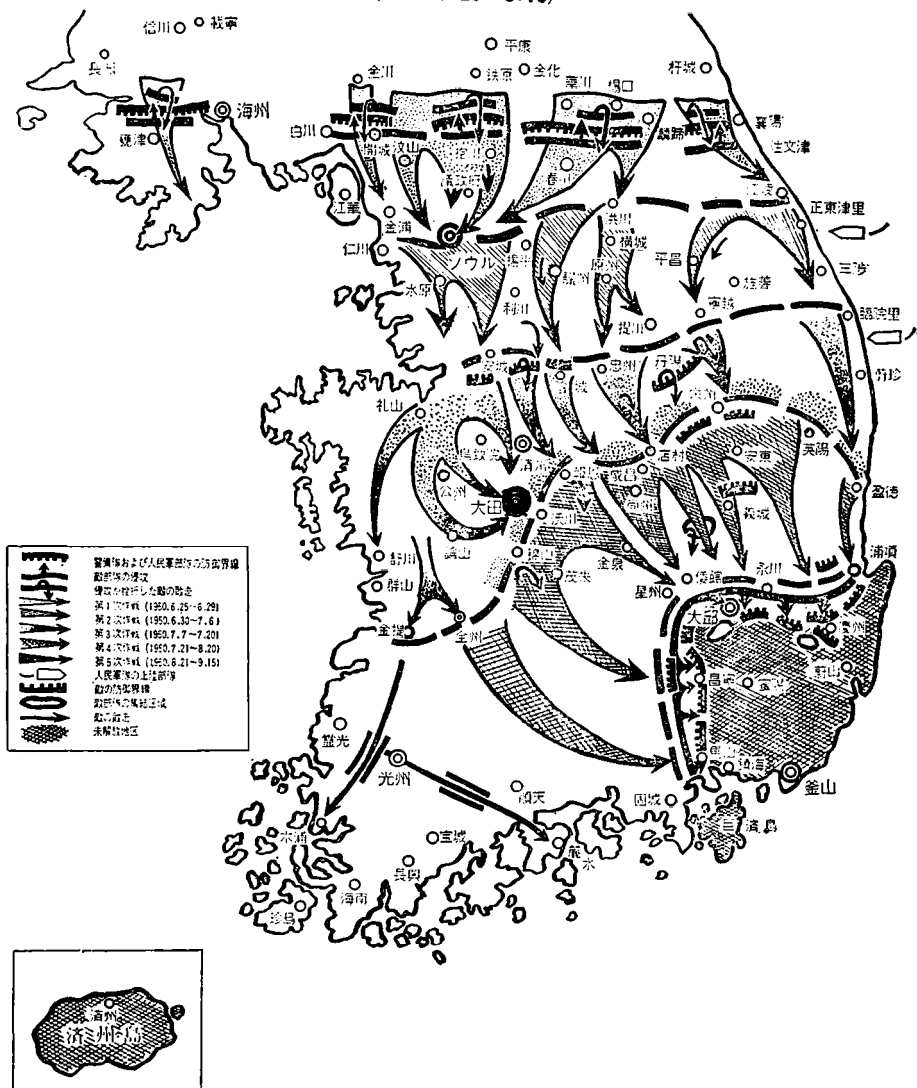
敵がなしうることは、最後のあがきだけであった。釜山にいたアメリカ軍第八軍司令官ウォーカーは、東京のマッカーサーに、アメリカ軍の至急増派を嘆願し、マッカーサーは、「韓国は危機に直面」とうめき声をあげてトルーマンの神経をいらだたせ、大兵力の急派を求めるのにやっきとなっていた。

釜山―東京―ワシントン間の無線通信は昼夜の区別なく、どなり声と悲鳴でいらだっていた。

敵は、五個の師団と一個独立連隊のアメリカおよびイギリス軍と、手あたりしだいにかき集めた八個師団のかいらい軍兵力を洛東江一帯に集中し、人民軍の進攻をくいとめようと死物狂いであった。

金日成首相は、窮地におちいった敵があがけばあがくほど瞬時も攻撃の手をゆるめず、滅亡に追いやらなければ

祖国解放戦争第1段階略図

(1950.6.25—9.15)

ならないと訴えた。

首相はつぎのようにのべた。

「戦闘は、戦争の最後の段階にはいってますますはげしくなる。……アメリカの干渉者とその手先李承晩一味を壊滅させ、祖国の地から帝国主義侵略者を掃討することは、諸君の不屈の闘争精神と強靱さと軍事的機能にかかっており、祖国にたいする自己の義務をまっとうしようとする諸君の決意にかかっている。われわれは、短時日のうちに祖国からアメリカ侵略者を追いだすことができるし、また必ず追いださなければならない」

最高司令官の戦略的方針にしたがって、人民軍は幾重にもはりめぐらされた敵陣を突破して疾風のように洛東江戦線へ進出していった。

洛東江、釜山—、このことばはすべての兵士の胸を高ならせた。このことばを耳にすると、綿のように疲れて倒れていた兵士も元気をとりもどしてたちあがった。息をひきとる寸前にも、兵士たちはこのことばを口にして手にしていた弾丸を戦友にやるのだった。

人民軍の威力におそれをなした侵略者どもは、夜は陣地内深くに逃げこみ、夜が明けると空一面をおおう空軍と砲の援護のもと、戦車をたてに必死の攻撃をくりかえした。

敵は技術機材も師団の数も多かった。敵機は一日中わが軍の上空をおおい、銃砲弾の雨をふらせた。山が燃え岩がくずれ、川の水もわきたった。

しかし不死身である人民軍将兵は、敵を北部と西部から包囲せん滅する作戦方針にしたがい、倭館(ウエクワン)、八公山(パルコン)、浦項(ポハン)をはじめ各地で、敵にせん滅的な打撃をあたえた。ときには砲煙弾雨をくぐって敵陣深く突入し、ときには誘引包囲して敵をせん滅した。

洛東江は鮮血で真っ赤にそまった。すべてが火をふいた。あらゆる空間は敵味方の砲弾と硝煙でみたされ、頭上

では敵機が狂ったようにとびかっていた。こうした死闘のなかで、士気あくまで高くひきつづき勝利をかさねていたのは人民軍であり、恐怖におののきふるえていたのはアメリカ帝国主義侵略者とその雇傭軍であった。

いかなる強敵も荒れ狂う風波も、金日成首相にたいする人民軍将兵の燃えるような忠誠心をまげることはできなかった。焼けつくような塹壕でたたかうときも、銃剣をきらめかせて敵陣に肉迫する突撃戦のときも、心は金日成首相と人民にたいする忠誠心で燃えていた。

抗日の将帥である金日成将軍によって組織され、きたえぬかれた軍隊、白頭の革命思想と現代兵器で武装した軍隊、将軍の天才的な戦略戦術を活用するこの軍隊のまえには、いかなる敵も刃むかうことができなかった。

おろかにもアメリカ帝国主義者が見くびっていた朝鮮人民軍は、必勝不敗の思想と不屈の闘志、すぐれた戦略戦術と戦闘能力をかねそなえ、複雑な現代戦に精通したもっともすぐれた鋼鉄の軍隊であったのである。

3　試練にたえ、新たな打撃戦へ

戦線は激動していた。

洛東江以南のせまい地域に追いこめられ、玄海灘のもくずとなる危機に直面していたアメリカ帝国主義侵略者は、いかなる代価をはらってでもその侵略計画をなしとげようと必死になった。

アメリカ帝国主義は増援部隊の量をたのんで洛東江地域における反攻を企図しながら、一方では太平洋方面の陸海空軍と地中海艦隊の一部、これにくわえて、イギリス、フランス、フィリッピン、トルコなど追従国の軍隊まで動員して、仁川上陸作戦を強行しようとした。

敵はこの作戦を成功させることによって、仁川、ソウル、原州地域に強力な戦線をしき、人民軍の前線と後方を

切断し、洛東江一帯で反攻撃にでる集団との連合のもとに、前線の人民軍主力部隊を「包囲せん滅」して、朝鮮全土を占領しようとたくらんだ。

金日成首相はこうした敵の企図をいち早く看破し、一連の対策を講じた。首相は洛東江戦線の人民軍連合部隊に、敵の反攻撃企図にそなえて有利な地点を堅持し、部隊相互の連絡を密にして強力な防衛陣地を組織することを命令した。

これとともに、仁川―ソウル間の防衛に深い注意をはらった。首相は、まだ戦争がはじまったばかりの七月のはじめに、すでに西海岸、とくに仁川―ソウル地区の防衛をかためることを京畿道防衛地域軍事委員会に命令していた。

そのとき首相は京畿道地区を七つの防衛地域にわけ、各区域に十分な軍事力を増強すべき課題をあたえた。とくに仁川周辺にたいしては三つの防衛線を地図にしるし、そこに新しく編成中であった連合部隊を配置することまでしめした。しかしのちに明らかになったように、京畿道防衛地域軍事委員会の責任ある地位にもぐりこんでいたスパイ李承燁一味は、この命令を実行しなかった。

これはスパイ一味の悪らつな反革命的行為であった。敵の大軍は、ほかならぬこの仁川にむかって集結しつつあった。

金日成首相は新たに緊急対策をたてねばならなかった。首相は西海岸地域の反上陸防衛線を迅速に強化するために、西海岸防衛司令部を組織し、仁川―ソウル地区に急速に兵力を動員した。

九月十三日、突然敵は千余の爆撃機および戦闘機の援護のもとに、三百余隻の艦船とアメリカ帝国主義の第十軍団管下の米海兵第一師団、米第七師団、特殊工兵旅団およびかいらい軍、追従国軍隊など、五万余の大兵力を動員して仁川上陸作戦を開始した。

こうして人民軍は、洛東江戦線と仁川—ソウル地区の両戦線において、優勢な敵と正面からぶつかり苦しい戦闘をおこなわなければならなくなった。

仁川の関門ともいうべき月尾島は、たえまなくふりそそぐ敵の爆弾と砲弾の下で燃えていた。敵の爆撃編隊は、百余回も出動した。敵はこの小さな島に、一平方メートルあたり平均四個以上の爆弾と砲弾をあびせた。

しかし、島全体がくずれ去るような猛砲爆撃のなかでも、月尾島の英雄的海岸砲中隊と防衛歩兵中隊はひるむことがなかった。

かれらにはしりぞくところがなかったし、しりぞくこともできなかった。解放された広大な土地と、砲火のなかで血みどろの戦いをつづける洛東江戦線が、燃える眼ざしでこの島を見つめていることを知っていた。

かれらは、党会議と軍人集会をひらき、金日成首相の指導のもとに圧倒的に優勢な敵とたたかって勝利した抗日パルチザン闘士のようにたたかうことを決意した。神聖な祖国の地——月尾島に敵を上陸させないため、身命をなげうって一歩もひかず、最後までたたかいぬくことをおごそかに最高司令官と党に誓った。

戦況はきびしかった。敵弾があられのようにふりそそぎ、島中が砲煙と火炎につつまれた。しかしかれらは弾雨をかいくぐり、稲妻のような機敏さで敵艦を砲撃した。砲身が焼けてまがり、最後の砲身が敵弾にくだけるまで月尾島の海岸砲中隊の射撃はやまなかった。

砲が破壊され、弾丸がつきたとき、勇士たちは、「金日成将軍万歳!」を声高く叫びながら肉迫戦に突入し、その血の最後の一滴を敵のおびただしい血とひきかえ、全員壮烈な最期をとげた。

月尾島の英雄たちは、この戦闘で十余隻の敵艦を撃沈撃破し、中隊の兵力で数百倍数千倍の敵を三日間もくいとめた! 祖国と革命にささげたこの三日間の日時こそ、なにものにもかえがたいものであった。全員が秀いでた英雄であったかれらは、その鮮血にそまった偉勲でもって抗日武装闘争の革命伝統を輝かしくうけつぎ、金日成首相

の思想で生き、そしてたたかう朝鮮人民軍の鋼鉄の意志と無限の威力を全世界にしめしたのである。

仁川に上陸したアメリカ帝国主義侵略者は、一歩踏みだすごとに大量の損失をこうむりながらソウルにせまった。

マッカーサーは、ソウルの婦女子と全財産の略奪をゆるすという野蛮な扇動で、侵略軍の野獣性をいっそうあおりたてた。

ソウル地区では、熾烈な全人民的攻防戦がくりひろげられた。人民軍は、道路一つ、路地一つでも血みどろのたたかいなしにはわたさなかった。

金日成首相と朝鮮労働党によって自由と幸福を見いだしたソウル市民は、労働者を先頭に武器をとり、人民軍とともに侵略軍をむかえうち犠牲的にたたかった。市民たちは砲声とどろく街でバリケードを築き、弾薬と軍需物資をはこんだ。女性も死をおそれず砲煙をかいくぐって戦闘員の食事をはこび、塹壕のなかで負傷兵を看護した。

仁川—ソウル防衛部隊とソウル市民は、決死的な闘争をくりひろげて一万二千余の敵将兵を殺傷、捕虜にし、敵の攻撃を十四日間もくいとめた。

これは、「速戦即決」の戦術でソウルを占領し、原州と大田方面へ進出して基本戦線の攻撃集団と連絡をとり、洛東江戦線の人民軍主力部隊を「包囲せん滅」しようとねらった敵にとって大きな打撃であった。

一方、洛東江戦線の人民軍連合部隊は、非常に不利な状況のもとで敵の狂気じみた攻撃をくいとめながら苛烈な防衛戦線をくりひろげていた。

戦局を判断した最高司令官金日成首相は、敵が人民軍にくらべて圧倒的に優勢な兵力と装備をもって前後から攻撃してくる状況のもとで、従来のように敵を正面からたたくことをやめ、かれらを深く誘いこんで分散させ、混乱と疲労に追いこむと同時に、短期間に味方の力を蓄積して新たなせん滅的攻撃戦をくりひろげることを決心し

た。

　これは、敵の両面攻撃からわが軍を最大限に保存しながら、敵を完全な受け身においこみ、わが軍の包囲をねらう敵を逆に包囲し、せん滅するという、もっとも進攻的で卓越した戦略であった。この戦略的方針は、抗日武装闘争の時期にしばしばもちいられたように、困難かつ危険な状況のもとで優勢な敵を独創的な戦略戦術で撃破し、ごう慢な敵首脳部を絶望に追いやる、金日成首相のはかり知れないすぐれた英知と闘志をしめすものであった。

　首相は敵の攻撃速度をおさえながら時をかせぎ、南半部から人民軍主力部隊を計画的に後退させるかたわら、後備部隊をひきつづき準備することを重要な課題として提起した。

　一時的な戦略的後退は、人民と人民軍にとってきびしい試練であった。

　しかし朝鮮人民は、革命と生活の体験をつうじて自分たちをつねに勝利へと導いてきた金日成首相が新しい方針をしめすであろうと確信していた。

　十月十一日、金日成首相は放送演説で、全人民と人民軍に戦略的後退の具体的な対策をしめした。

　首相はこの演説で、いま祖国の情勢がたとえ重大であっても、朝鮮人民は必ず最後の勝利に到達するという強い信念をしめしながら、つぎのようにのべた。

　「滅亡の運命を背負った帝国主義は、歴史の歯車を逆にまわそうと狂いたっています。帝国主義はロシアでこれをくわだてたが失敗に終わりました。帝国主義は中国でこれをくわだてたがなんらの成果もえられませんでした。いま帝国主義は、朝鮮を奴隷化しようとふたたび同じようなくわだてをくりかえしています。しかしこんども強盗のようなアメリカ帝国主義の反動的な略奪計画は、必ず失敗に終わるでありましょう。

　朝鮮を奴隷化しようとするアメリカ帝国主義のたくらみに反対し、祖国の自由と独立のためにたたかうわが人民の民族解放闘争は、一時的で暫時的な原因でおこったものではなく、それは、ながいあいだの日本帝国主義の奴隷

の境遇を体験した朝鮮人民が、二度と外来帝国主義の奴隷になってはならないという民族的、基本的利害から、民族解放闘争によってのみ祖国の自由と独立、みずからとその子孫の幸福と繁栄を達成できるということを自覚したからであります。

まさにそれゆえに、朝鮮人民は勝利するでありましょう」

首相はさらに、人民軍には戦闘力をいっそう高めることを、後方人民には産業、運輸施設と物資をのこらず疎開させることを、敵の占領地区の人民には果敢にパルチザン闘争をくりひろげることを、それぞれの戦闘的課題として提起した。

この演説は、迫りくる危機を主動的にのりきって、最後の勝利をたたかいとる労働党の戦闘的綱領であった。

人民と人民軍将兵は、首相のこの教えにはげまされ、必勝の信念をさらに高め、犠牲的にたたかった。

三十八度線と元山（ウォンサン）、陽徳（ヤンドク）一帯の守備部隊は、おしよせる敵軍を決死的にはばみ、撃破し、人民軍主力部隊と後方人民に後退する貴重な時間をあたえ、その撤収路をひらいた。

洛東江戦線にあった人民軍主力部隊は、大胆に敵を奇襲掃討しながら、道のない険しい山を越え、川をわたり、数百キロにおよぶきびしい道のりを迅速に後退した。米軍の眼前からかき消すがごとく姿を消した人民軍の撤退について、ブルジョア評論家たちは、「奇跡」だとか、「縮地法（古代朝鮮の仙術の一つで、地脈をたぐりよせて遠距離をも短時間のうちに往き来するという法）をつかうんだ」とかといって、一様に驚嘆した。

後退する主力部隊をみごとに指導したのは、金日成首相が抗日武装闘争の嵐のなかで育てあげた百戦錬磨の革命闘士たちであった。世界遊撃戦史に前例のないあの困難な行軍――、一九三八年末から一九三九年の初にかけての「苦難の行軍」に参加したかれらは、自信にみちあふれ、威風堂々としていた。

かれらはつねに敵を呑み、敏活に指揮をとり、楽天的な気質と、部下にたいするきびしいながらもあたたかい愛

情でもって、全部隊をかたく団結した弾力性ある集団につくりあげた。
じつに、困難に直面すればするほど光を放つ偉大な抗日武装闘争の革命伝統の力は、かぎりなく貴重なものであった。
アメリカ帝国主義は決して朝鮮人民を屈服させることはできなかった。朝鮮は、野蛮な「開拓者」が思いどおりに、原住民を牛馬のように死の苦役にかりたてることのできたアメリカ大陸でもなかったし、まがい物のガラス玉で黒人を奴隷として買うことのできたむかしのアフリカでもなかった。
朝鮮は、小さくはあったがそれ自体が勇気のかたまりであり、爆弾であり、つるぎであった。
たたかれればなぐりかえし、呑みくだせば腹を裂いておどりでてくる朝鮮であった。
かつては、ほかならぬ日本帝国主義が見さかいもなくふるまって滅亡の運命をたどった。アメリカ帝国主義とてこれと同じ運命をまぬがれることはできなかった。かれらは、それが身をほろぼす落し穴とも知らずに、のこのことわなにかかりにやってきた。
敵は人民軍主力を捕捉できなかっただけでなく、逆に、いたるところで防御陣をしいていた人民軍の銃弾をいやというほどあびた。高原（コオン）、文川（ムンチョン）、九月山（クウォルサン）、谷山（コクサン）をはじめ敵占領地域のいたるところで、パルチザンを組織した人民は、敵の背後を強烈にたたいた。
いかなる難関のもとにあっても、いかなる苦痛に見まわれても、人民は金日成首相と朝鮮労働党にひたすら忠実であった。労働者は重い機械や設備をかついで、遠く離れた安全地帯まで運んで生産をつづけた。農民は、一粒の米も敵にわたすなという、金日成首相の教えを守ってたたかった。
二か月間の生活体験をつうじて、金日成首相がもたらした人民民主主義制度のありがたさを深く感じた南朝鮮人民は、金日成首相のいる北に強くひきつけられた。労働者、農民は領袖のよびかけにこたえて決然とパルチザン闘

争にたちあがり、青年学生は先をきそって義勇軍に投じた。
後退する人びとのなかには、最前線の砲火をくぐって活動していた政治工作員たちや、芸術家たちもいた。リュックのうえに幼な児をのせ、全家族をつれて北にむかう南朝鮮の労働者、農民の姿も多かった。上空を敵機が鳥群のようにとびかう戦火の、千里をこえる遠い道のりを、『金日成将軍の歌』をうたいながら征服してきた南海沿岸の少年たちもいた。休むたびにわらじをつくってはき、金日成首相のいる北をめざして足を早める白髪の学者たちもいた。首相がしめたし真理と革命的配慮が、このような熱情をそだてたのである。
しかし、敵の占領地域では、天人ともにゆるすことのできない蛮行が公然とおこなわれた。アメリカ帝国主義侵略者とその手先は、いたるところですべてを踏みにじり、焼きはらった。罪のない人民を集団的に虐殺した。子どもたちや妊婦を火のなかに投げこみ、老人たちを生き埋めにした。敵は黄海道信州（シンチョン）郡だけでも、郡民の四分の一を惨殺した。
敵はもともと人倫や道徳を身につけていなかった。略奪と背徳の渦のなかでうじ虫のように生きてきたかれらには、ひとかけらの人間的良心もなかった。人民は、敵が野獣であることをはっきりとみた。
これによって、アメリカ帝国主義はぬぐうことのできない政治的、道徳的な惨敗をこうむったのである。この惨敗は、かれらを軍事的な完敗にひきずりこむ重石であった。
人民は敵に殺される瞬間も、命乞いをしなかった。かれらはアメリカ帝国主義を同じ空のしたで住むことのできない野蛮人として呪いながら、たたかい、そして死んでいった。人民は得物を手にし、あるいは敵の武器を奪っていたるところで決死的な復讐戦をいどみ、敵を混乱と恐怖におとしいれた。
後退する人民軍と人民のあいだでも憤怒の炎が燃え、かれらの胸には復讐の稲妻がひらめいていた。
後退の日々、金日成首相は、日に夜をついで猛烈な活動をつづけた。攻めいる敵を迎撃する連続的な防衛戦闘の

組織、親しい戦友たちに新しい任務をあたえて各戦線に派遣する仕事、敵の背後をつく強力な第二戦線の組織、後退する軍隊と人民にたいする配慮と組織的な指導、安全地帯における戦時生産の組織、再進撃の準備とせん滅的攻撃作戦の構想など、なすべき仕事はあまりにもおおかった。

しかし首相は、山積みされたこれらの問題を、非凡な革命的展開力をもってぬかりなく処理していった。

首相は毎分毎秒を千金のように惜しんだ。副官たちは、首相がいつ眠るのかわからなかった。首相は多忙をきわめた活動をつづけながらも、つねに沈着さとゆとりを保っていた。

首相は戦争全般を指揮しながらも、後退してくる人びとにまでこまかい配慮をめぐらした。

後退してくるある科学者集団のなかに、身ごもった妻と幼い五人の子どもをつれたビナロンの権威者李升基（リスンギ）博士がいた。博士とその家族が、党の配慮のもとに両江道（リャンガンド）新坡（シンパ）郡延坪（ヨンピョン）に到着し、一晩休んでふたたび出発の準備をしているときだった。先に発った科学者のうちの一人が、農民とともに牛車を一台ひいて帰ってきた。

かれはいぶかる博士に、つぎのようないきさつを話した。

科学者の後退を気にかけていた最高司令官は、博士が身重の人と子どもたちをつれているということを知り、非常に感動しながらも、心配していたとのことであった。そして思いやりの深い首相は、敵機の空爆にさらされているひろい道路を自動車でとおるよりは、婦人と子どもたちを牛車にのせて山道をとおった方が安全だからと、この牛車をおくってくださったのだというのである。

血をわけた父さえおよばぬこの大いなる愛！　戦争まえまでソウルで貧困と屈辱の生活をしいられてきた博士夫妻は、金日成首相の気高くあたたかい愛情をひしひしと感じ、子どものようにすすり泣いた。

後退を指導しながら再進撃の構想を練っていた金日成首相は、十一月初旬の雪ふりしきるある夜、昌城（チャンソン）を発って満浦（マンポ）郡高山鎮（コサンジン）にむかった。

その途中で、声高らかに『金日成将軍の歌』を夜空にひびかせながら、力強く行軍していくある部隊と出会った。車をおりた首相は隊列の指揮官に、どこからきた部隊かとたずねた。暗い夜のこととて、指揮官は相手がだれであるかも知らずこたえた。部隊は慶尚道の安東を撤退していたるところで敵を撃破しながら、八百キロの道を行軍してきたというのである。

首相は指揮官の手をとって労をねぎらい、暗闇のなかにたっている兵士たちを見わたしてから、目に見えて年若い兵士の肩に手をおいて、名と年齢をたずねた。兵士は、はきはきした声でこたえた。

「大隊連絡兵蘇勝烈（ソスンリョル）、十七歳、安東からここまで歩いてきたのであります」

首相はそれにうなずき、疲れはないか、ふるさとはどこか、父母はみな元気かときいてから、最後にこうたずねた。

「ところできみたちは、どこへいくところなのか」

「最高司令部であります」

「なんのためにそこへいくのだ？」

蘇勝烈は、姿勢をただして元気よくこたえた。

「最高司令官同志の新しい戦闘命令をうけにいくのであります」

連絡兵の力強いこたえをきいた首相は、しばらく雪のふる空を見あげていた。つぎの瞬間、首相は力強い声でいた。

「きみたちは命令さえうければ、ヤンキーとたたかって勝てるか？」

すると暗闇のなかにたっていた全隊列が、砲声のような声をひびかせてこたえた。

「勝利できます！　必ず勝利することができます！」

このとき道の両側を縦隊にならび、山河もくずさんばかりの大きな声で『金日成将軍の歌』をうたいながら、新しい人民軍部隊が相ついで行軍してきた。それはとうとうと流れる鉄の流れ、炎の流れであった。

首相はこのたのもしい隊列を見つめながら、興奮した語調でいった。

「……われわれは早く万端の戦闘準備をととのえ、わが祖国の地から敵を一撃のもとに掃滅しなければならない！　いまきみたちは後退ではなく、すでに反撃に移ったも同然だ！　この行軍は、きみたちのふるさとにつうじる勝利の道である！……」

首相はかたわらの随員たちにむかって、確信にみちてこういった。

「見たまえ。朝鮮の青年たちは死にはしなかった！　朝鮮人民は必ず勝利する！　必ずや勝利するのだ！」

これはきびしい時期に新しい大戦闘をまえにして、領袖とその戦士たちがわかちあった信念の対話であった。

侵略者どもは、つぎつぎにおしよせていた。幼稚で横暴なマッカーサーは、米軍の勝利はすでに決ったも同然だと「確信」した。かれは兵士たちに、「クリスマスの聖餐はふるさとに帰ってとれるであろう」と豪語した。

しかしマッカーサーは、金日成首相の卓越した戦略戦術を駆使する人民軍が、いたるところに口をひらいている深くせまい渓谷と刃のような陵線をもつ北朝鮮の山岳地帯で、その有利な地理的条件を利用して、アメリカ帝国主義侵略軍を分散、捕捉して滅亡させるだろうとは、よもや知るよしもなかった。かれが最大の勝利をもくろんだ場所には、かれの最悪の惨敗が待ちうけていたのである。

侵略者にたいする朝鮮人民軍の一大せん滅戦は刻々と迫っていた。

このようなとき、すでに金日成首相は洛東江戦線から鉄原まで後退したいくつかの部隊を、黄海北道、江原道、平安南道一帯の広大な地域に配置して、敵の背後に強力な打撃をくわえ、人民軍主力の再進撃に呼応して敵の退路を遮断し、敵を包囲網に追いこんでせん滅戦をくりひろげる準備を指示した。

一方、首相は新しい大打撃戦に移行する準備として時間を最大限に利用し、前線から後退してきた各部隊を整備し、部隊内に強固な規律を確立する対策をたてた。

それとともに人民軍を新しい戦闘技術、機械で武装させながら、師団の再編成と予備部隊の組織を急速にすすめていった。また人民軍の戦闘力をいちだんと強化するために、軍隊内に政治部をもうけた。

首相の指示にしたがって、朝鮮人民軍は後退後、わずか一か月半たらずのあいだに、強力な主力軍団と予備軍団に編成された。

人民軍将兵は、金日成首相の命令さえあれば、北半部にはいりこんだ敵を一網打尽にしてソウルへ、釜山へ南下する態勢をととのえた。

人民軍部隊の戦略的後退の過程について、『アメリカ敗れたり』の著者はつぎのように書いた。

「国連軍の仁川上陸―かくて形勢が一変し逆転してしまった。だが緒戦における韓国軍の潰走状態とは異り、共産軍の意識的な解体、再編は、きわめて長期にわたったにせよ、最も困難な条件の下でなしとげられた。とはいえ戦線整理の、かつ戦略的後退のこの柔軟さ、屈伸性と機動性は、まったく共産軍特有の戦闘意識にのみ立脚し、それのみがよくなし得たところでもある。共産軍はその最大の危機を、最少の犠牲において逃げおおせたのである」

戦争は第三段階にはいった。それは金日成首相の直接の指導のもとに展開された五回にわたる縦横無尽の作戦による、戦争の新しい段階であった。

後退時期のきびしい試練を克服した金日成首相は、百倍千倍もの報復をあびせ、朝鮮人民のまえに敵をひざまづかせる遠大な構想を練り、非凡な戦略戦術的英知と最大限の緊張を要する第三段階の戦闘を指揮した。

首相は、敵を三十八度線以南に追いだしながら、不断の消耗戦でその力量を弱化させる一方、戦争勝利のためのわが方の力量を十分にたくわえることを、第三段階の戦略的課題とした。

このために金日成首相は、東部戦線では積極的な防御戦を、西部戦線では清川江以北の地域で敵を包囲せん滅することを基本にした第一次作戦を、十月二十五日から開始することにした。

作戦が開始されるやいなや、西部戦線の各部隊は、敵の集団にせん滅的な打撃をあたえ、一万五千余の敵将兵を殺傷、捕虜にし、ばく大な戦闘機材をろ獲し、敗残兵を清川江以南に駆逐した。

さらに強力な反攻撃戦をくりひろげる構想を胸に、金日成首相は十一月に朝鮮人民軍軍政幹部会議を招集した。首相はこの会議で、四か月間の戦争過程を総括し、戦線で一大転換をもたらすための反攻撃計画を明らかにしながら、つぎのような課題をしめした。

反攻撃戦において前面攻撃と、敵の背後で活動する部隊による後方からの打撃を密接にくみあわせて、敵の兵力と戦闘資材に甚大な打撃をあたえること。そのために強力な反攻撃集団を編成し、積極的な作戦を展開して敵を連続的に撃滅掃討し、人民軍各部隊の敵後方における闘争をさらに拡大すること。そのために軍人の士気をいっそう高め、思想的準備を強化すること。

首相は、勝利はひとりでにやってくるものではなく、あらゆる困難やあい路とたたかってかちとらなくてはならないものであると強調した。

会議でしめされた首相の方針と対策は、第三段階の勝利と戦争の最後の勝利を達成するうえで、大きく寄与した。

この会議の前日、金日成首相は慈江道竜林面で、連合部隊をひきい敵の包囲網を突破して洛東江戦線から後退してきたある軍部隊長と会った。

首相は軍部隊長に、敵の背後で活動する軍団の責任者に任命したことをつたえてから、作戦地図のまえに近づいた。

首相はすでにいく段階先の戦闘まで計画し、遠い先を見とおしているかのようであった。作戦地図を指しながら、こう語った。

「……われわれの第一次作戦で甚大な打撃をうけ挫折した敵は、いまここ清川江、長津湖畔、清津一帯で混乱におちいっている。敵の主要攻撃方向は、この清川江一帯である。ここにはいま、敵の主力集団であるアメリカ第八野戦軍管下の十余個師団が集結している。それから敵の補助攻撃方向は、戦線中部と東部にある。これはわれわれが予想したとおりだ。殺人鬼マッカーサーはいま、十二月二十五日までにわが北半部全域を手中におさめようと、いわゆる『クリスマス総攻撃』を狂ったように準備している。……」

首相は敵の妄想を嘲笑するかのように、豪快に笑った。

この時期、マッカーサーは東北戦線、とくに清川江以北の地域で徹底的な敗北を喫して大きく後退せざるをえない破目に追いこまれていながらも、例のごとくたわごとばかりならべていた。「アメリカ兵士に告げよ！　かれらが鴨緑江まで達したときは各自わが家に帰れるであろうことを——。余は、かれらがクリスマスの聖餐をかれらの故郷でとることができるであろうとの余の声明を確認する」ときを同じくしてアメリカ大統領のトルーマンは「北朝鮮軍の無条件降伏」だけが戦争解決の第一条件であり、遠からずマッカーサーが豆満江と鴨緑江で降伏条約を締結するであろうとのべて、マッカーサーを持ちあげていた。

金日成首相は、かれらの笑止な妄動を醜悪きわまりないものと軽蔑した。

「われわれの第二次作戦はいつはじまるのですか？」

首相の豪放な笑いにひきこまれていた軍部隊長は、これからの作戦計画についてこうたずねた。

「それは敵の新たな攻撃が開始されるそのときだ。敵の動きからみて、今月の二十四日か二十五日ごろになろうと思われる」

ついで首相は反攻撃作戦計画を説明した。

「——わが軍の主要攻撃方向は、ここ西部戦線だ。ここに（清川江地域を指しながら）集結した敵の基本主力アメリカ第八野戦軍を包囲せん滅すれば、敵の全集団を、大きく西部戦線と東部戦線に分断し、撃破することができる。これは敵の全戦線に、大きな脅威と混乱をあたえることになる。さらに、ここを突破することによって、敵の背後で活動するわが部隊との迅　な連合戦線を形成することもできよう——」

金日成首相は色鉛筆で中部および東部戦線に配置された各軍部隊を指しながら、「ここのわが軍も、それぞれ敵をたたきながら咸興地区で迅速に合流し、敵を包囲せん滅しなければならない。こうすれば、補助攻撃方向にも包囲網が形成される。このたびの反攻撃において、われわれは、敵をただおしていくのではなく、いたるところで包囲し、これをせん滅しなければならない」とのべた。

首相は戦略戦術的方針と作戦計画を具体的に説明したあと、新任の軍部隊長が指揮をとる敵背後の第二戦線部隊の任務についてのべた。

「やがて第二次作戦が開始されれば、初期に敵の背後で活動していた各部隊が、これらの道路（ピョンヤン—開城間、ピョンヤン—新渓間、陽徳—元山間）を掌握し、敗走する敵を迎撃してこれをたたきつぶさなくてはならない。これによって敵は大きな包囲網のなかで混乱におちいることになろう。しかし凶悪な敵は、敗残兵と作戦予備隊をもって三十八度線一帯で中間防御をこころみるはずである。したがって敵の後方で活動する各部隊は、われわれの攻撃成果が拡大するにつれて迅速に三十八度線を掌握し、南からやってくる敵の増援集団を迎撃し、中間防御のたくらみを完全に粉砕せねばならない」

ここで首相は、青い印のついた敵の戦線をさし、その致命的弱点について一つ一つ指摘した。

「——敵は、ここ清川江地域から清津まで四〇〇余キロにわたる戦線をもっている。これは、大部分が起伏のは

げしい山岳地帯の戦線だ。したがって敵は数十個師団の大兵力をここに投入してはいるが、西部、中部および東部の各集団間には、不可避的に間隙が生じる。また主に大きな道路にそって攻撃してきた敵の側面は、すでにわれわれに捕捉されている。敵のもう一つの弱点は、各集団間の協同動作が鈍いところにある。敵の主力集団であるアメリカ第八野戦軍（西部戦線）、アメリカ第十軍団（中部戦線）、李承晩かいらい軍第一軍団（東部戦線）などは、日本にあるアメリカ軍「極東軍司令官」マッカーサーに直属していて、それぞれ独立的に行動している。したがってマッカーサーが一人で大声をはりあげて指揮してみたところで、敵の各集団間の協同体系と統一的な指揮体系にはいつも混乱が生じるのである」

最高司令官の予想どおり、敵は十一月二十四日、総攻撃を開始した。

西部戦線のわが軍各部隊は、二十五日、決定的な反攻撃に移り、十二月二十五日にはピョンヤンを解放し、敵に息つくひまもあたえず攻撃速度をさらに高めた。

中部戦線と東部戦線においても一大せん滅戦が展開された。とくに海抜千メートルの峻嶺を一気にこえ長津湖畔において苛烈凄絶な反攻撃戦を展開した人民軍勇士たちは、雪におおわれた湖畔と多くの谷間を敵の死体でうめつくした。ついで咸鏡南、北道の広はんな地域でも、いたるところで敵を分散、捕捉し、掃討した。

一方、京畿道、江原道、平安南道、黄海北道の広大な地域で活動する第二戦線各部隊は、「注文品」（敵の背後でたたかった戦士たちは最高司令官の予想が一分の狂いもなくあたったので敗走してくる敵をこうよんだ）を迎撃してつぎつぎにせん滅していった。

「アメリカ第八軍」という名の怪物は頭まで切りおとされてしまった。というのは、敗走するアメリカ第八野戦軍司令官ウオーカーは、その随員八十余名とともに人民軍の敵後方活動部隊に捕捉され、連川郡全谷里南方の道路で全滅させられたからである。

敵は十一月二十五日から十二月二十四日までの第二次作戦期間に、三十八度線以南に完全に駆逐された。アメリカ帝国主義者は、二万四千二百余名のアメリカ軍をふくむ三万六千余名の将兵と多くの戦闘技術機材を失った。だからこそ、非常に悪質な『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙でさえ、「これはアメリカ陸軍史上最大の敗北」だと嘆かざるをえなかったのである。

侵略者は唖然とした。「クリスマスの祝杯」の夢は、惨敗と絶望にかわった。この惨敗によってマッカーサーは、まもなくアメリカ極東軍司令官と「国連軍」総司令官の職から追われ、軍籍すら失わざるをえなかった。

アメリカ帝国主義のもろさは、全世界に露呈された。いまや「強大さ」も「威信」もなかった。かれらは恥辱と絶望に呻吟していた。

わが軍の各部隊は、金日成首相の円熟した指揮下に、なおもソウル南方に進出しながら、主動的防御戦、鉄壁の陣地戦など、三次、四次の作戦を連続的に展開し、アメリカ帝国主義侵略者とその手先にせん滅的な打撃をあたえた。

こうした過程は、金日成首相の戦略戦術と用兵学のたぐいまれな卓越性をいま一度しめしたものであった。

とくに、基本攻撃集団にくみあわせて敵の背後に強力な第二戦線をしき、敵を挾撃してせん滅する敏活で立体的な戦法は、抗日武装闘争の将帥であった金日成首相だけが創造しうる独創的な戦争芸術であった。

もちろん、世界の戦史には、敵を前後から挾撃した実例がなくはなかった。しかしそれらはすべて、基本戦線に配合した敵後方の人民による遊撃闘争であった。

第二次世界大戦においては、ソ独戦線にたいする米英帝国主義者の「第二戦線」があった。だが、それは一国単位の第二戦線ではなかった。

それればかりか、この第二戦線は、米英帝国主義者が戦争の運命を決するソ独戦線で、ソ連とドイツがともに破壊

され、力が弱まったときに漁夫の利をえようとした陰険な目的を追求したものであった。
これらの第二戦線とはちがい、金日成首相が創造した第二戦線は、洛東江一帯から後退してきた人民軍の大部隊が敵後方のひろい地域を確保して敵の占領から人民を解放しながら、完全な正規的軍事作戦を展開するためのものであった。そればかりでなく、この第二戦線は、基本戦略遂行の完全な一構成部分として、基本戦線に積極的にむすびついて主導権をしっかりにぎり、敵を大包囲網のなかに追いこんでせん滅する戦線であった。
基本戦線にむすびついてこのような第二戦線を組織し、活用した金日成首相の作戦芸術は、世界の戦史上に類例のない独創的なものであった。
金日成首相が、このように輝かしい戦略戦術をみずから創造し、直接活用した結果、人民軍各部隊は、後退からただちに大打撃戦に移り、敵を完全に守勢に追いこみ、壮快なせん滅戦を展開することができたのである。
朝鮮人民軍の連続的な勝利は、アメリカ帝国主義者とその手先を恐怖と絶望に追いやり、進歩と正義を愛する全世界の人民をよろこびにわきたたせた。子どもから年寄りにいたる全世界の心あるすべての人びとは、朝鮮ということばをアメリカ帝国主義にたいする痛快な報復者の名として、希望と勝利の名としてよんだ。アジアがヨーロッパの東方にあるという程度の知識しかもたなかった人たちすら、朝鮮の地図をのぞきこみ、詩人のように興奮して「朝鮮！　朝鮮！」と叫んだ。
社会主義諸国はいうまでもなく、資本主義諸国の都市でも、朝鮮人民の正義の闘争を支持し、アメリカ帝国主義の蛮行を糾弾する勤労者のデモがたえまなくくりひろげられた。すべての国際民主団体の会議や行事の中心には、いつも朝鮮問題が炬火のように光を放った。こうした国際会議や行事に出席する朝鮮代表は、花束の波にうもれ、歓呼の嵐につつまれた。
ワルシャワでひらかれた世界平和擁護大会に参加した朝鮮代表は、二十分間の演説にたいし、半時間以上も熱狂

的な歓呼をうけた。朝鮮代表がアメリカ帝国主義の蛮行を暴露すると、全会場が怒りをこめてアメリカ帝国主義者を糾弾した。朝鮮代表が朝鮮人民の英雄的なたたかいを紹介すると、アフリカ諸国の代表を先頭にした大会の全参加者が、声をかぎりに「朝鮮万歳！」を叫び、朝鮮代表を胴上げして歓呼した。

朝鮮人はどの国をおとずれても、もっとも熱狂的な歓迎をうけた。どこへいっても歓呼をあび、花束につつまれた。子どもたちは人形やおもちゃをもってきて、朝鮮の子どもたちに贈ってほしいといった。おとなたちは、記念にサインをしてほしいと人垣をつくった。かれらは朝鮮人といっしょに汽車にのることにさえ栄誉を感じた。電車や汽車は、色テープでふちどった金日成首相の大きな肖像画をかかげて走った。

五千年の朝鮮の歴史をつうじて、朝鮮がこれほど世界の熱狂的な歓呼をうけたことはいまだかつてなかつた。

これは、朝鮮人民が戦争で流している血が、朝鮮のみならず、世界人民の革命偉業を守り、朝鮮人民のおさめる勝利の一つ一つが、世界的意義をもつものであることを雄弁に物語るものであった。

4　人民と戦士のなかで

戦争は苦難にみちていた。

前線も後方もなかった。国中がたたかっていた。

もっとも熾烈な現代戦であった朝鮮戦争は、あらゆる面で立体戦であり、総力戦であった。これはまた、二つの制度間の戦争――北半部に樹立された人民民主主義制度と南半部の資本主義制度間の決戦でもあった。

金日成首相は、この点を重視した。首相は人民民主主義制度の優越性と威力を全面的に発揮させることによって、たとえ規模が大きく、経済的、技術的に発展しているといっても、法則的には滅亡する運命を背負ったアメリ

カ帝国主義を総敗北のどろ沼に突きおとそうと決心した。

しかし、この制度の優越性と威力は、決してひとりでに発揮されるわけではなかった。金日成首相は苛烈な戦争の砲火のなかでも、はかり知れない情熱で政治的な創意を発揮した。

首相は、軍人たちと最前線の状況を、例外なく後方の人民たちとの関連において判断し、後方のさ細な現象をもつねに前線と直結させて判断した。

この時期、三十八度線以南に敗走したアメリカ帝国主義侵略者は、なんとかして敗北を挽回しようとやっきになっていた。アメリカ帝国主義はいかにも平和に関心があるかのように見せかけながら、裏では国内でに「全国緊急非常状態」を宣布し、軍備をさらに拡張し、徴兵を強化した。

一方では、朝鮮戦線にオーストラリア、トルコ、カナダ、ニュージランド、タイ、ルクセンブルグをはじめ、多くの追随国軍隊をひきいれ、戦争拡大にたけりたっていた。アメリカ極東軍司令部もあわただしい動きをみせていた。そこでは、たびたび茶番劇がしくまれた。

かれらは全世界の面前で喫した惨敗をおおいかくそうと、「クリスマス総攻勢」の失敗は北朝鮮の「厳冬」と「不幸な気候」のせいであると強弁した。これはまったく笑止千万な「発想」であり「弁明」であった。かと思うと、原子爆弾を使用するとか、つつじの花が咲くころふたたび総攻撃に移るなどとたわごとをならべたてた。

アメリカ帝国主義は軍事力を増強し、新たな軍事的冒険を強行した。戦争はますますきびしくなっていった。こうした情勢は、戦争の長期化にそなえて前線と後方をさらにかため、敵にたいする決定的な攻撃を準備することを要求した。

このようなとき、前線ではもちろん輝かしい勝利をおさめていたが、国内の状況は困難をきわめていた。すべての部門、すべての生活が多くの難関に直面していた。

なによりも一時的後退期につくりだされた難関と無規律な現象が、まだ完全にぬぐい去られていなかった。敵の占領から解放された直後の地域では、党組織と人民政権機関がまだ復旧されていないありさまだった。都市や工場は寒々とした廃墟と化し、大部分の農村も、風に吹かれて灰が舞いあがる空地となっていた。人民生活は、苦しいというようなものではなかった。

戦争のなりゆきと後方の状況全般を深く分析した最高司令官金日成首相は、後退期にあらわれた欠陥を一日も早くただし、後方を復旧整備してこそ、党と国家の活動を前線の要求にそくして保障することができ、決定的な攻撃へと人民大衆を総動員することができると考えた。

一九五〇年十二月二十一日、首相は朝鮮人民を偉大な勝利へと組織動員する雄大な構想をいだいて、朝鮮労働党中央委員会第三回総会をひらいた。

会議で首相は、『現情勢と当面の課題』と題して報告をおこなった。この報告で金日成首相は、六か月間の戦争の過程を総括しながら、戦争勝利のための課題を提起した。

金日成首相は、革命的規律の強化を第一義的な課題として提起した。首相は一時的後退期に一部にあらわれた無規律的な現象を批判し、党と革命に難関がかさなればかさなるほど党の規律を強化し、党の隊列の統一と団結をかたく守らねばならないと強調した。

首相はつぎのようにのべた。

「暴虐な敵を撃滅して栄えある勝利をたたかいとる基本的条件の一つは、わが党がいつにもまして規律を強化し、党中央委員会のまわりに党の隊列を鋼鉄のようにいっそうかたく団結させることであります。……党の命令とあれば水火をいとわず、適時に正確に実践する強力な作風が全党を支配するようにしなければなりません」

首相は、党規律、国家規律および軍事規律を強化する闘争を強力にすすめながら、批判と自己批判を活発におこ

なうことを強調した。

金日成首相のこの教えは、党の唯一の思想にもとづいて全党の統一団結を強化する綱領的課題をしめしたものであり、党活動においてつねに堅持すべき不動の原則を明らかにしたものであった。

朝鮮労働党はマルクス・レーニン主義党であり、革命のためにたたかう戦闘的党である。

それゆえ、党がその使命をまっとうするためには、必ず民主主義中央集権制の原則にもとづいた党の鋼鉄のような統一が必要であり、党の指導者である金日成首相の命令、指示と、首相の思想の具体的表現である党の決定によって全党が一心同体となって動かねばならなかった。

全党員と勤労者が金日成首相の思想でしっかり武装し、その教えにあくまで忠実であり、いつ、どこで、どのような風が吹こうとも動揺することなく、誠心誠意、敬愛する領袖金日成首相を命にかけて守り、領袖の教えと党の決定を無条件にうけいれ、遂行する唯一の思想体系を確立してこそ、戦争に勝利することができた。

前線の軍事情勢と関連して、首相は積極的な追撃戦をくりひろげることを提起し、とくに軍事行動において教条主義に反対し、徹底的に主体を確立することを重要な課題としてうちだした。

そして全人民が革命の主人として自力更生の革命精神をいっそう発揮し、後方で党と政権機関を一刻も早く整理し、あらゆる手段を利用して人民経済を復旧して前線を支援し、人民を必勝の信念で武装させて後方を鉄壁の要塞にかためる問題など、多くの戦闘的課題をしめした。

このように首相は総会で、全党員を革命的規律と革命精神でしっかり武装させ、すべての難関とあい路を克服する明確な方途をしめすことによって、党の戦闘力をいっそう高め、党員と人民を最後の勝利にたいする強い信念で武装させた。

じつに党中央委員会第三回総会は、党生活と国家活動のすべての部門において大きな転換点となった。

首相は党組織をあげて、後退期に一部表面化した無規律な行動にたいして強力な思想闘争をすすめた。とくに党内部で無原則に思いのままに行動する分派分子にたいしては、断固たる打撃をあたえた。

こうしたたたかいのなかで、すべての分野で革命的規律が徹底的に強化され、領袖と党の要求であればどんな任務でも遂行するという党の唯一思想体系が確立されていき、革命的闘志と自力更生の革命精神がいちじるしく高まった。

いたるところで党組織が強化され、人民政権機関が活発に動いた。

金日成首相は、党の指導的役割とその戦闘力を高めながら、軍隊と人民にたいする思想教育の基本方向をしめし、これを強力におしすすめた。

首相の方針にしたがって、党組織は政治思想活動を強力に展開した。党の政治活動の基本は、人民と軍人のなかで領袖と党にたいするかぎりない忠誠心をつちかい、最後の勝利にたいする確固とした信念をもつようにし、かれらを、十五星霜のあいだ白頭山の密林であらゆる苦難にも屈することなく祖国解放の偉業を成就した金日成将軍の指導のもとに組織展開された抗日武装闘争の栄えある革命伝統で武装することにあった。

こうして党員と人民と人民軍は、敬愛する領袖金日成首相を生命をとして守り、その命令と指示にかぎりなく忠実であった抗日遊撃隊員のように最後の勝利をかたく信じ、生きても領袖のために生き、死ぬときも領袖のために死ぬ高潔な思想をもって、戦争の勝利めざすたたかいに献身した。

金日成首相は、反革命分子にたいする闘争をも正確に指導した。

共和国北半部地域に一時的にはいりこんでいたアメリカ帝国主義侵略者は、多数のスパイを放ち、不健全な一部の階層をそそのかして、「治安隊」をはじめさまざまな反動団体を組織し、多くの人民を殺害させた。侵略者はこうすることによって、人民をたがいに反目、敵対させ、かれらが二度と団結できないようにしようとたくらんだの

であった。

しかし、金日成首相の賢明な方針によって、敵の企図は水泡に帰した。首相は、アメリカ帝国主義の策動にのってはならないといましめ、複雑な階層との活動で守らなければならない原則的な立場を明らかにした。金日成首相は、敵味方をはっきりと見わけ、ごく少数の悪質分子はこれを徹底的に鎮圧し、無意識的に敵に追従していた人びとはこれを包容して教育するという原則を堅持しなければならないと教えた。

階級路線と大衆路線を正確にむすびつけたこの方針は、ごく少数の悪質分子を清算することによって、敵につけいるすきをあたえず、広はんな大衆を一つの家庭に包容し、すべての力を敵撃滅へと組織動員する積極的な方針であった。この過程で、愛国烈士遺家族をはじめ労働者、農民の階級的自覚が非常に高まったことはいうまでもない。結局、敵はそのみにくい目的を達成するかわりに、みずからの野蛮な正体を暴露されて完全に孤立し、全人民的な怒りの炎につつまれてしまったのであった。

抗日武装闘争の時期から反動とのたたかいで豊富な経験をつんだ金日成首相だけが、こうした政治の弁証法を創造することができたのであった。

このように金日成首相は、党と大衆をかたくむすびつけ、闘志に燃える一つの大集団につくりあげる一方、人民軍の活動をくまなく指導した。

とくに、軍事活動で、わが国の地形上の特徴および戦争の具体的状況にそくして人民軍の装備を改善して適切に使用する問題、山岳戦と夜間戦闘をたくみに配合する問題、砲火力を強め砲兵と歩兵の緊密な協同作戦で敵をせん滅する問題など、金日成首相がとった主動的な措置は、戦争の勝利をいちだんと早めるものであった。

当時、アメリカ帝国主義侵略者は、大規模な攻撃作戦を準備しつつ、前面からの攻撃と海からの上陸作戦をくわだて、一方では「制限攻撃」をかけてきた。

首相は敵の戦術に対処して、敵の兵力と戦闘技術機材を大量に消耗させる機動防御と反打撃戦を展開する方針をうちだし、みずから戦線にでむいては将兵の士気を高めた。

一九五一年三月のある日の早朝、首相は、洛東江戦線から撤収して新しい戦闘任務についていたある区分隊をたずねた。

大隊長から隊列報告をうけた首相は、「全軍務者同志諸君！ 敵を攻撃するときも敵の後方で活動するときも、つねに勇敢にたたかって勝利した同志諸君に感謝をささげる」と全将兵をたたえた。

「祖国のために服務します！」

将兵たちは声をかぎりに叫んだ。だれの目も感激の涙でうるんでいた。

首相は重機関銃をならべたある中隊のまえで足をとめ、中隊長に中隊の状況をくわしくきいた。

しばらく、武器、装具類、食糧、弾薬などにいたるまで中隊の戦闘準備状態をいちいち見まわってから首相は、なにを思ったのか、一個小隊の兵士たちに、軍靴をぬぐよう指示した。兵士たちが軍靴をぬぎ終わると、首相は腰をかがめ、軍靴がやぶれてはいないか、足にまめができていないか、靴下がよごれてはいないかと、ていねいにしらべるのだった。

これは、息子を遠くきびしい旅におくりだした親だけが、それもかぎりなく慈愛にみちた親だけがすることのできる気づかいであった。

洛東江戦線で威力を発揮したという重機関銃にまつわる話をきいた首相は、それをみずから分解し、くみたててみてからこう語った。

「……きみたちがえた戦闘経験は、非常に貴重である。そうした経験を生かしながら、思想的に武装し、戦闘および政治訓練を十分におこなえば、むこうところ敵なしといえよう。むかし、端午の節句におこなわれた相撲大会

にでる人は、十分に腹ごしらえをしたうえ、予備の食糧までもっていったものだ。それだけの準備なしには、賞品の牛を手にすることはできないからである。ましていま戦場にあるわれわれが、つねに訓練にはげみ、完全な戦闘準備をととのえないでどうしよう！　戦闘では外掛けで攻めようが、内掛けで攻めようが、どっちにしても敵をたたきつけなければならないのだ。……」

将兵たちは、和気あいあいたるなかにも偉大な思想のこもったこのことばをききながら、領袖と革命のためならばいかなる敵といえども一撃のもとにせん滅する強い決意をかためたのであった。

人民軍将兵を深く愛する金日成首相は、いつも将兵たちと深い愛情をもって気軽に会い、かれらと談笑するのをこのうえない喜びとした。

この年の六月下旬、首相は、三十八度線で陣地防衛任務についていた七人の共和国英雄および模範戦闘員をまねいた。

七人の戦士たちが胸をおどらせながら最高司令部の門をくぐろうとしたとき、首相はまるで遠来の友をむかえるように、満面に笑みをたたえながらむかえにでるのだった。

「英雄たちがやってきたな！　遠い道のりをご苦労であった！　……ところで前線の戦闘員たちは、みな元気かね？」

首相は親しみをこめてこうたずねた。

「最高司令官同志！　最前線にいるわが戦闘員たちは、最高司令官同志のあたたかい愛情とかぎりない配慮のおかげで、元気に、勇敢にたたかっています」と、戦士の一人がこたえた。

かれらを部屋に案内し、しばらく戦線の様子などをきいたのち、首相は戦争の見とおしについて語った。

「党のまわりに一枚岩のようにかたく団結したわが人民軍と人民は、必ず敵をうちたおし、終局的勝利をかちと

るだろう。だが勝利を達成するためには、これからさらに苦しい試練をへなければならない。わたしがきょう、諸君に話そうとするのもこのことである」
首相は、さらに言葉をつづけた。
「諸君は、アメリカ帝国主義がすすんでわが祖国から手をひき、でていくだろうと考えてはいけない。……敵はいま、鼻っ柱をくじかれながらも、なおわが祖国の南半部を踏みにじり、その侵略的野望を実現しようと狂いたっている。われわれは敵に寸土もわたすことはできない。……必ず祖国の南半部を解放しなければならない。……われわれをねらうアメリカ帝国主義侵略者を最後まで撃滅しなければならない」
戦士たちは、このことばから最高司令官同志の確固とした信念と闘志を感じとり、砲煙弾雨のなかで英雄的にたたかう、すべての軍人にたいする首相の厚い信頼をひしひしと感じたのだった。
首相は、「きみたちに贈り物をせねば……」といいながら、「アメリカ帝国主義侵略者を撃滅せよ！」という文字と、各自の名が彫られた自動小銃を一人ひとりに手わたした。
首相は自動小銃を手にしてたっているかれらにいった。
「この銃には、この国の数多い革命烈士と人民の貴い血と汗がにじんでいる。そしてまた、敵を撃滅し祖国を守り、とくにアメリカ帝国主義侵略者のもとでいまだに苦しんでいる南半部人民を解放する党の要求と、人民のねがいがこめられている。この銃でアメリカ帝国主義侵略者を最後まで撃滅せねばならない」
「祖国のために服務します！」
英雄たちは銃身を力強くにぎりしめ、領袖のまえで忠誠を誓った。
この日、金日成首相は、英雄たちと家庭的なふんいきのなかで夕食をともにした。これには最高司令部の幹部たちも多数参席した。

首相は、英雄たちを食卓にまねきながらいった。

「諸君の口にあうかどうか……。これがきみたちの家だったら、戦争から帰ったわが子のために、母親が腕によりをかけていろいろご馳走するだろうに……、そのようにできなくて……」

首相の心づくしのもてなしに、英雄たちもただ胸を熱くするばかりであった。

一九三〇年代の抗日武装闘争の時期、吹雪荒れ狂う日々にも、たった一枚の毛布を隊員たちにゆずってたき火のそばで夜をすごし、一合のはったい粉も隊員たちにわけあたえた金日成首相、戦士たちにたいする首相のこの厚い愛情は、天の高さや海の深さもとうていおよばぬ、千古の歳月を滾々と湧きいずる泉のようなものであった。

七人の戦士たちはこみあげる感動で、すぐには箸をとることができなかった。

首相は、「さあ、どうしたんだね。きみたちがたくさんたべてくれないと、わたしの気持がすまないではないか。さあ」といいながら心づくしの冷麺をすすめ、かれらの盃に親しく酒をついだ。

肉親にもまさるこのこまやかな愛に、かれらの目には涙がやどった。

首相は、盃をあけ、つつましく箸をはこぶ英雄たちを慈愛にみちたまなざしで見つめながら、「きみたちが前線でたたかいながらよくうたう歌があるだろう。それを、ここできかせてはくれないか」とかれらの歌を所望した。

七人の戦士たちは、最初に『金日成将軍の歌』をうたった。

英雄たちと最高司令部の幹部たちは、座席の順に一人ずつうたった。

食卓をかこんでいる全員がうたい終わると、首相は、「すると今度はわたしの番だね」と笑いながら、「以前、抗日パルチザンのとき、われわれはこんな歌もうたったものだ」とまえおきして、つぎのような歌をうたった。

はてしなき白頭の密林

煌々とかがやく月よ
月見れば思いはかける
はるかなる祖国の山河
ああ　革命にささげしこの身
いつの日か　かならず帰らん
なつかしの祖国のもとに

最高司令官の歌は、いあわせた人びとの心を強くうった。かれらの目のまえには、十五年のながい年月をひたすら祖国解放の一念に燃えて、白頭の密林と広漠たる満州の広野を踏破し、日本帝国主義侵略者を撃破した金日成将軍の英姿がくっきりとうかび、将軍がとりもどしてくれた祖国の貴さがいまさらのようにひしひしと感じられたのであった。

首相は、貴い祖国を命をとして守り、いまだに敵に踏みにじられている祖国の南半部を必ずとりもどさねばならないと、かれらにこの歌をうたってきかせたのであろう——。

歌をきき終わったかれらは、心を一つにして誓った。たとえ死ぬことがあっても、この銃で不倶戴天の敵アメリカ帝国主義侵略者を一人のこらず撃滅し、祖国を守り、南の地をとりもどしてみせると……。

前線に帰った七人の勇士は、炎と燃える祖国の高地で全将兵におくる敬愛する領袖のあいさつをつたえた。将兵たちの士気は天を衝いた。かれらは岩肌や木の幹に、「党と領袖のために！　祖国と人民のために！」、「寸土も敵にわたすな！」、「アメリカ帝国主義者を一人のこらず撃滅しよう！」というスローガンを刻みつけ、敵にさらに大きな打撃をあたえるたたかいへとたちあがったのである。

人民軍のすべての将兵は、猛ける獅子のような勢いでたたかった。

金昌杰英雄は、六〇六・六高地の戦闘において、人民軍の前進をさまたげる敵のトーチカを、党と領袖にたいする忠誠心に燃えたぎるみずからの胸でふさぎ、部隊の突撃路を切りひらいた。

カマク峰戦闘で両腕と両足に重傷を負った姜浩英英雄は、「わたしの腕と足はもぎとられた。だが復讐心は幾千倍にも燃えている。朝鮮労働党員の炎の闘志と、党と領袖にかたく誓った不屈の意志をみせてやる」と叫び、手榴弾を口にくわえて敵陣にころがりこみ、多くの敵をふきとばした。

敵機のじゅうたん爆撃と機銃掃射のもとで数十人の負傷兵を救いだし、みずからも致命傷を負った看護兵安英愛は、息をひきとる最後の瞬間にこういった。

「労働党はわたしを育て、導いてくれました。党はわたしの命です、わたしの党費をおさめてください。そしてわたしの党員証を党中央委員会にとどけてください」

高地防御戦に奮戦した韓継烈英雄は、名高い「わが高地運動」ののろしをあげた。

「いや、この高地は絶対に敵にわたすことはできない。われわれは死ぬときもこの高地とともに死に、生きてたたかうときもこの高地とともにいなければならない。この高地は、わが高地だ。……同志たち、敵に死をあたえよ、祖国の高地はわが高地だ！」

これは、かれが戦友たちによびかけたことばだった。

領袖の教えにかぎりなく忠実な人民軍戦士たちは、狙撃兵器で敵機を撃墜する飛行機狩り組運動をくりひろげた。自分たちをねらって急降下してくる敵機を、狙撃兵器で真っ向うからねらいうつ人民軍の心――、それは敵愾心と闘志の火の玉でなくてなんであろう！

首相は、このように軍隊と戦線を指導しながら後方の人民生活にも大きな力をそそぎ、かれらのたたかいを正

しく導いた。戦争の多忙な日々にも、人民生活にたいする配慮は一つの日課になっていた。首相は、時間をさいては野良にでて農民とともに殻竿をうち、春にはかれらといっしょに畑仕事をやり、種まきもした。
「人民が粟飯を食べるときは、われわれも粟飯を食べなければならない」
首相はロぐせのように、副官たちにこう語り、司令部の生活をきわめて質素なものにした。どこにでかけても、アメリカ帝国主義侵略軍の野蛮な盲爆によって廃墟と化した都市と農村を見てまわった。人民の生活を気づかって洞くつに住んでいる人びとまでたずねて暮らしむきをきき、まだ夜も明けきらぬうちから戦災孤児を見まっては、父親にもまさる愛をそそいだ。
金日成首相にとって、もっとも貴重なもの――、それはほかでもなく人間の生命、人民の生命であった。首相は党、政権機関の責任幹部をまえに、つぎのようにのべたことがある。
「……人民生活を安定させる仕事は、全国家的、全党的、そして社会的にもっとも重要な仕事であります。アメリカ帝国主義者がいくら狂ったようにわが国を破壊し、廃墟にかえ、焦土化しようと、人間さえのこれば、われわれは戦争が終わったあとにわが祖国を新しい強力な国に復旧することができます。
同志諸君！　人間をたいせつにし、救済する仕事は、われわれのもっとも重要な仕事であります。」
首相の細心の心遣いによって、人民は戦争のさなかでも多くの配慮をうけた。
戦災民救護委員会は、すべての戦災民に食糧と衣服を支給し、住宅建設資金まで融資した。愛国烈士の遺族と傷痍軍人、人民軍の家族にたいしては、全国家的、全人民的な援護活動が組織された。
金日成首相は、戦災孤児たちを国家の責任のもとに養育する対策をたてた。
首相は一九五〇年十二月、ピョンヤンにむかう途中、夫が順川で戦死したため四人の子どもを女手一つで育てている一婦人に会ったことがあった。彼女は必死になって働いていたが、女手一つのうえに、敵の占領から解放され

た直後であったため、その生活は非常に苦しかった。
首相は、女手一つで四人の子どもを育てるのは大変でしょう、といたわった。彼女は、大丈夫ですとけなげにこたえたが、それがなまやさしくないことは、だれの目にも明らかであった。
この婦人の困難な生活を目のあたりに見て、たたかいで夫をなくした婦人たちとすべての孤児に深い思いをよせた首相は、ただちに愛国烈士遺児学院と初等学院、愛育園を各道に設立する対策をとり、孤児や、家族が多くて父母の力だけでは養育がむづかしい子どもを、国家が責任をもって養育する措置を講じた。
こうして、すべての孤児は国家と人民のふところにいだかれ、のびのびと育っていった。多くの父母が戦争で犠牲になったが、孤児たちが泣きながら街をさまようようなことは決してなかった。
そのころ、北半部各地を視察してまわった国際婦人連盟調査団のメンバーは、街をさまよう孤児や浮浪者を一人も見かけなかったことを不審に思い、どうしてこうなのかと、しきりにたずねた。これは、彼女たちには想像もつかない、常識外のことだったのである。
彼女たちはまた、人びとの寝具が清潔できちんとしたものであることにおどろき、戦時なのにどうしてこう安定した生活が可能なのかと質問した。
しかし調査団の人びとは自分の目をとおして、これらすべてのことが偉大な領袖金日成首相の賢明な導きと、あたたかい配慮の結果であることをはっきり知った。
そして最後には、朝鮮で見るものすべてが彼女たちの感嘆の的となった。
金日成首相は労働者、事務員にも現物給与をともなった賃金制度を実施し、貧農には現物税まで一部減免した。
全国の各級学校がすべて開校され、苛烈な戦争の日々にも国中で子どもたちの本を読む声がたえなかった。
一九五一年度の学生数は、じつに百余万に達した。アメリカ帝国主義強盗が死の爆弾をふらすさなかでも、子ど

もたちはカバンのなかで筆箱の音をたてながら学校に通った。

爆弾が落下すると、子どもたちは草の茂みに身を伏せた。爆撃がしずまると、ふたたび鶴の群のように列をつくり、歌をうたいながら学校の門をくぐった。アメリカ帝国主義者は、金日成首相の教えを学ぶ朝鮮の子どもたちの生活を破壊することができなかった。全朝鮮人民が首相の愛情と配慮につつまれていた。全朝鮮人民はまた、領袖と祖国のために献身した。敵はいかなる爆撃をもってしても、朝鮮人民のこの生活を破壊することはできなかった。

金日成首相は戦火のさなかでも、一木一草にいたるまで、国と人民にとって貴重なものはこれをすべて大切に保護した。樹木に勝手になたをふるうことさえ禁じた。

こんなこともあった。ある日、副官たちが敵のおとした時限爆弾を発見した。そこは直接危険というほどの人場所ではなかったが、そのまま放置しておくわけにもいかなかった。

そこで副官たちは大胆にも時限爆弾をかかえて、近くの栗林にはこびこんだ。しばらくすると、爆弾はすさまじい音をたてて爆発した。

執務中であった首相は、その音をきいて外にでてきた。副官の一人からいきさつをきいた首相は、爆発現場に足をはこんだ。副官たちは適切な処置をとったものとばかり思いこんでいた。

しかし、爆発現場についたとき、どうしてか首相の顔色が急にくもった。

首相は非常に残念そうなまなざしで、無残になぎたおされた栗の木を見つめていた。副官たちはどきりとした。はたして首相は、アメリカ帝国主義者が夜昼をとわず爆撃であらゆる樹木を根こそぎにしているというのに、きみたちまでがこういうことをしてどうするつもりなのか、と強く叱責（しっせき）した。

副官たちは、いたらなさを恥じて首をうなだれた。しかしかれらは、ひともとの祖国の草木にも深い愛をそそぐ

首相の偉大な心にふれて、強い感動にとらわれていた。
その後、副官たちは数百株の栗の苗木をその一帯に植えた。うっ蒼と生い茂るその木の下で、栗をひろう子どもたちのあどけない姿を思いうかべながら……。
金日成首相のこうした配慮につつまれて、人民は戦争のきびしい逆境にたえぬくことができた。
首相は、国の経済生活がしだいに安定するにしたがい、前線援護と後方強化のための英雄的な勤労のたたかいに全人民をふるいたたせた。
首相は、戦後復旧建設の基本方向は、「現実的条件にもとづいて、あらゆる物資と旧式の生産手段をものこらず利用して生産機関を復旧し、そして現存する可能性をすべて動員して、前線に物資をおくり、同時に戦争終結後に十分かつ迅速に復旧できるだけの準備活動を」おこなうことであると明らかにした。
首相は、党と政府を動員し、国中が破壊された戦争下にあっても人民経済計画を作成させ、その実践へと力強く導いた。
英雄的な労働者階級は、敵機の猛爆撃をおかして廃墟のなかから生産施設を復旧し、数多くの工場、企業所を地下に建設した。
「戦時生産と復旧準備の速度を高めよう！」という鉱山部門労働者のよびかけにこたえて、軍需生産、交通運輸、林産、機械、電気、逓信部門などの労働者ははげしい増産競争運動をくりひろげた。
機関車は鳥の群のように襲いかかる敵機をものともせず、汽笛の音をひびかせながら戦線に走り、鳥の群さえ爆音をさけて山奥に逃げるような夜も、地下工場では生産がつづけられた。
首相は当時、農村の困難を解決するため、「食糧のための闘争は祖国のための闘争だ！」というスローガンをかかげ、農村にばく大な物質的配慮をめぐらすかたわら、全人民的支援を組織した。優秀な幹部の派遣、農村の党

農民たちを戦時食糧増産のための闘争へ、鼓舞激励する金日成首相

組織や政権機関の活動と大衆政治活動の強化、戦災民と零細農民からなる数多くの国営農牧場の新設と拡張、住宅建設と営農資金の貸与、兄弟国人民からおくられてきた援助物資の供給、国家資金による灌漑施設の復旧など、農村にたいする配慮はじつに数えきれないほどであった。

農民たちもだまってはいなかった。かれらは畑の片隅に待避壕を掘り、自分自身や役牛を偽装し、昼夜となく野良仕事にはげんだ。あるいは米俵を牛車や馬車にのせ、戦火をかいくぐって遠い戦線へといそいだ。女性たちは夫や兄にかわり、いままでは男の仕事とされていた畑打ちや田鋤(すき)きをはじめた。

英雄たちの集まりである人民軍の姿を描き、敵機の爆撃下をものともせず、草の葉で偽装した牛を追って畑を耕す女性の姿は末ながく語りつたえられるであろう。そして新しい世代の高貴な志を育て、かれらの感動をよびつづけていくにちがいない！　はたしていかなる頭脳が、この大地にしみこむ偉大な愛と献身の真価をはかることができようか！

廃墟のなかで、炎のなかで、このような政治をおこなうことのできる領袖、このようなかぎりない力を創造した金日成首相は、まさに偉大な人物である。金日成首相にとって、人民民主主義制度はまさに、名将の手ににぎられた宝剣であった。

首相のまえで、アメリカ帝国主義侵略者になにができようか！　敵が軍事的、政治的、道徳的に敗北した地に、共和国は難攻不落の要塞のように毅然としてそびえていた。そしてその要塞のうえで、金日成首相は硝煙けむる戦線を見わたしていたのである。

5　陣地防御戦、一、二一一高地戦闘

アメリカ帝国主義侵略者は、戦争開始後の最初の一年間に、すでに第二次世界大戦でこうむった損失の半分をはるかにこえる兵力と戦闘技術機材を失っていた。

これが政治的、道徳的な惨敗をはじめ、すべての軍事作戦の敗北過程でこうむった損失であることを考慮にいれるとき、アメリカ帝国主義の立場は弁明の余地がないほどみじめなものであった。

こういう状態でアメリカ帝国主義はさらにあがきつづけた。かれらは三十八度線上で防御しながら、新しい兵力と戦闘技術機材を大々的に補充して、新しい攻撃を準備した。

これに対処して金日成首相は、主導的に陣地防御戦を展開して敵の攻撃を粉砕する戦争第四段階の戦略的方針をたてた。

戦争第四段階の戦略的方針は、大部隊による積極的な陣地防御戦によってすでに占めた戦線を維持しつつ、ときをかせぎ、後方と人民軍の戦闘的機能と技術装備をいっそう強化するとともに、敵の兵員と技術機材にばく大な損

失をあたえ、その攻撃企図を粉砕し、敵味方間の力関係をいっそう有利にかえて、戦争の終局的勝利をかちとるための決定的な攻撃に転ずるすべての条件をつくりだすことであった。

陣地戦にかんする金日成首相の軍事戦略思想は、新しい歴史的条件と朝鮮の地理的特殊性を科学的に分析して形成された独創的かつ主体的な軍事思想であり、すでにたたかいとった革命の獲得物を防衛し、さらには戦争の終局的勝利を保障するすぐれた思想であった。

金日成首相は、すでに占めている地域を敵に奪取されるということは結局、革命の獲得物を敵にゆだねることを意味し、それは絶対にゆるせないことであると考えていた。

これにもとづいて首相は、陣地戦を戦略的方針としてうちだしたのである。

首相は陣地防御戦の方針をたてたばかりでなく、その輝かしい勝利のため、すでに占めている陣地を敵のいかなる最新兵器の攻撃からも守りとおせるように坑道化するという、きわめて革新的な対策をうちだした。

首相が創案した坑道式陣地は、朝鮮戦争のあらゆる客観的な要求を集中的に反映した輝かしい創造物であった。

朝鮮戦争は最新科学の成果を最高度に利用した現代戦であったし、その激烈さにおいても類例のないものであった。アメリカ帝国主義は爆撃と砲撃によって人民軍陣地の焦土化をもくろみ、一方では初歩的な法規と人道さえ無視して、前線と後方に多くの毒ガス弾、細菌弾を投下した。この野獣にもおとる敵との戦争において、坑道陣地を築くことはきわめて切迫した要求であった。

坑道陣地は敵の強力な爆撃と化学、細菌兵器や砲火力から兵力と戦闘技術機材を保護し、はげしい戦闘のなかでも戦闘員に休息をとらせ、さらに攻撃する敵を防御線前面で捕捉、せん滅することによって、敵を一歩たりとも防御地帯に近づけないようにするものであった。

それはまた、味方の積極的な反突撃と攻撃戦の有利な出撃陣地として敵に決定的な打撃をくわえ、それによって敵がその戦線をもちこたえられないようにするためのものでもあった。

そればかりでなく、野戦型築城施設と結合した強力な反航空、反砲、反戦車、反化学兵器の坑道陣地体系としてその規模と堅固さにおいても、戦略戦術的価値においても、これまで世界の戦史にその例を見ることのできないもっともすぐれた、かつ独創的な防御陣地体系であった。

陣地戦にかんする首相の方針にしたがって、一九五一年なかばころから人民軍部隊は三十八度線上で鉄壁の陣地防御戦に移行していった。

人民軍の初期の陣地防御戦は、きわめて苦しいものであった。敵は味方の各師団の正面に毎日平均六千余発の爆弾を投下し、敵の攻撃対象となった高地には毎日数万発の砲弾をうちこんだ。

前線はいずこも炎につつまれていた。人民軍の勇士たちは、夜築いた防御施設が敵の爆撃と砲撃で破壊されるたびごとに、いち早く修理するか、新しく築かなければならなかった。後方供給路も例外なく、爆撃と艦砲射撃をうけていた。そのため前線に弾薬と食糧をおくるためには、深い山あいやけわしい峰々をこえなければならなかった。

しかし、最高司令官の戦略的方針にかぎりなく忠実な人民軍の勇士たちは、困難な状態におかれても戦争の主導権をにぎり、陣地をかたく守りながら、気ちがいじみた攻勢をくわだてる敵に、そのつど甚大な打撃をあたえた。また、味方の各部隊は、夜陰に乗じて大胆な襲撃戦をくりひろげ、防御準備と部隊の配備変更をりっぱにやりとげた。

熾烈な爆撃と砲火のなかで、陣地は堅牢な坑道にかわっていった。抗道陣地の工事は、その規模が巨大なものであったうえに、敵との激戦のなかですすまねばならなかったため、きわめて苦しかった。

首相は坑道作業現場で直接、工事を指導しながら戦士たちを激励した。

戦士たちの新しい軍服や軍靴をつぶさにしらべ、不便な点はないか、マスクや手袋はたりなくないかとこまかく心をくばり、ときにはさく岩機をにぎってみずから岩をくだき、戦士たちの士気をふるいたたせた。

人民軍将兵たちは、最高司令官のこまやかな指導にはげまされあらゆる難関をのりこえ、おどろくべき創意を発揮した。

工事の初期には前線鍛冶場をもうけ、集めた鉄くずで各種の作業道具をつくり、ダイナマイトなしで岩石をくりぬいていった。あるいはまた、雪崩れにもめげず、数千立方メートルの原木を人力でけわしい山の頂上にひきあげ、それで坑道の支柱をつくった。作業場は戦場と同じであった。じつに坑道陣地を築くたたかいは、最高司令官の教えにあくまで忠実な朝鮮人民軍の剛毅さと不屈の精神をいかんなくしめした。

人民軍の陣地は、短期間に厚い掩蓋におおわれた坑道式陣地、鉄壁の要塞にかわった。

人民軍各部隊は、この坑道陣地にたてこもることによって、敵の航空機が四六時中飛来し、昼夜をわかたず砲弾がふりそそぎ、山容もかわる高地においてさえも、敵にせん滅的な打撃をあたえることができた。

アメリカ帝国主義は狼狽した。たびかさなる軍事的、道徳的な敗北、朝鮮人民と人民軍の威力の増大、世界の平和を愛する諸国人民の圧力、帝国主義陣営内部の矛盾の激化、アメリカ軍兵士をとらえている恐怖心と厭戦気分などの諸条件は、かれらをのっぴきならぬジレンマにおとしいれた。

そのためかれらは、敗北の境遇からぬけでる道を血まなこになってさがしもとめた。こうした事態を背景にして、敵は一九五一年六月三十日、マッカーサーのあとに「国連軍」総司令官となったリッジウェイをして、停戦会談を提議せざるをえなかった。

金日成首相は、敵の侵略的野望を徹底的にうちくだくため、敵がたとえ停戦会談を申しいれたとしても、決し

て侵略的野望をすてていないことを見ぬいて、会談に応じながらも、それにのぞむ態度と立場を明確にしめした。

首相は、敵が停戦会談によって日ましに深刻化する政治的、軍事的苦境からぬけだそうとしており、戦争を終わらせ平和をねがっているかのようによそおいながら、戦争によってうることのできなかった侵略目的を、停戦会談で実現しようと画策していることをはっきり見ぬいていた。

そのため金日成首相は、アメリカ帝国主義者にいささかの幻想もいだいてはならず、なおも手痛い軍事的打撃をくわえるとともに、停戦会談においてかれらの侵略目的を破綻させねばならないと強調した。

停戦会談は、一九五一年七月十日から開城でひらかれた。これは朝鮮民主主義人民共和国と世界反動の頭目であるアメリカ帝国主義との国際的談判であった。

こうして金日成首相は、軍事および政治外交の二つの戦線を結合して、アメリカ帝国主義に打撃をくわえていくことになった。

停戦会談でアメリカ帝国主義は見えすいた領土的野望にしがみつくなど、はじめから会談のひきのばしをはかった。

金日成首相は、アメリカ帝国主義の侵略的正体を全世界に暴露する一方、朝鮮人民軍首席代表をして、停戦会談場でアメリカ帝国主義に強力な政治的打撃をあたえた。こうして会談は事実上、アメリカ帝国主義という名の強盗を審問し、辛らつに断罪する公判廷とかわった。アメリカ代表は、それこそ霜にうたれたいなごのように意気消沈した。

アメリカ帝国主義は、会談で強盗的野望をとげることができなくなると、会談の舞台裏で侵略戦争を拡大する新たな陰謀をこらした。「国連軍」総司令官リッジウェイはあわただしく朝鮮戦線をかけまわり、アメリカ第八軍司

令官バンフリートに、「会談期間中、戦線を強化して各部隊の兵員損失を補充し、広はんな攻撃を展開するに必要な兵器、弾薬を第一線部隊の管轄下におくこと」を命じた。またバンフリートはかれなりに、「『停戦会談』における合意は、国連軍が軍事的に勝利することによってのみ可能である」と公言してはばからなかった。

敵は決定的攻撃の準備をいそいだ。かれらは西部戦線で攻勢にでると見せかけながら、全力をあげて東部戦線にたいする「夏季攻勢」を準備した。

アメリカ帝国主義侵略者が「夏季攻勢」でねらった目的は、東海岸の元山もしくは通川(トンチョン)地域に上陸する集団と、戦線の東部および西部で攻撃する各部隊が、淮陽(フェヤン)の東北側と末輝里(マルフィリ)地域で連合して、味方の各部隊が戦線の東部と中部で占めている戦略上重要な山岳地帯を占領することにより、戦線を開城、金川(クムチョン)、伊川(イチョン)、元山一帯にまでおしあげたのち、そこでふたたび北半部の全地域を占領し、戦争をひきつづき拡大しようというものであった。政治的には、これによって「軍事的圧力」をくわえ、いわゆる「栄誉ある停戦」を達成しようともくろんだ。

敵はこの作戦に、戦線の東部だけでも十三万の大兵力と千余の航空機、多くの戦車、各種の砲を投入し、数十隻の艦船による大々的な上陸作戦も準備した。

しかしこのころ、人民軍の前線の状態はきわめて困難であった。まだ防御陣地がしっかり築かれていなかったうえに、三十年来の大洪水のため輸送路が寸断されていた。それにくわえて、後日明らかになったように、このとき朴憲永、李承燁スパイ一味がアメリカ帝国主義の指示により、後方で凶悪な陰謀をたくらんでいた。もちろん、それは妄想にすぎなかった。

金日成首相は、敵の攻撃企図をそのつど正確に看破し、積極的な防御、反攻撃の準備をととのえた。敵の基本的な打撃方向が東部であることを事前に見ぬいた首相は、すかさず必要なだけの兵力を西部から東部へ移動させ、東部における味方の防御態勢をさらに強化した。

首相がその天才的な判断力にもとづいて断行したこの非常措置は、重要戦闘地区に部隊を適時に移動させた敏速な機動作戦として、前例のない模範であった。

一方、大規模な戦闘がくりひろげられる山岳地帯に曲射砲火力を増強すること、防御陣地を対空、対砲、対戦車用に築くことなど、首相がとったすべての措置と命令は、戦争勝利にきわめて大きな影響をおよぼした。

とくに一九五一年七月二十七日、首相の提議にもとづいて採択された党中央委員会政治委員会の決定『人民軍内における労働党組織設置の総括と政治機関の活動状況について』は、部隊内における党の政治活動を強化し、戦闘力を高めるうえで大きな意義をもつものであった。

一九五一年、金日成首相は古くからの抗日闘士である軍部隊長に、一、二一一高地の作戦を現地で遂行する任務をあたえてこう語った。

「敵はいま一、二一一高地をねらっている。それは、この高地を突破しなければ東海岸に上陸する各部隊と絶対に合流できないことを知っているからだ。だからわれわれは、この要衝地点で敵の主力を撃破しなければならない」

首相はまた、戦線の砲火の密度を高め、強力な反砲闘争を展開することを指摘して、強力な砲を前線の高地にひきあげ、歩兵と砲兵の協同作戦によって敵をたたくことなど、すでに構想していた歩砲協同戦術をさずけた。

八月十八日、侵略者どもは、それまで機をうかがってきた大規模な、いわゆる「夏季攻勢」を開始した。敵は一、二一一高地をはじめ東部戦線の人民軍陣地にたいし、それぞれ数万発の爆弾と砲弾をうちこみ、おびただしい戦車の支援のもとに攻勢をかけてきた。

敵は攻撃のたびに人民軍の強力な打撃をうけ、群をなしてうちたおされながらも、狂ったようにくりかえし攻めよせてきた。

人民軍の状況は不利であった。前例のない大洪水で塹壕と掩蔽壕には水があふれ、すべての谷間には幅五〇メートルにもなる激流が大河をなして流れるというありさまだった。しかし洪水と砲火のなかでも、一人ひとりが英雄である人民軍勇士たちは、領袖と党の万歳を叫び、不死身のようにたたかった。銃身が灼熱してつかえなくなると手榴弾のたばをかかえて敵陣におどりこみ、手榴弾がなくなれば岩石をころがして敵の死体で丘をうめつくした。

夏の日々は、どしゃぶりの雨と川のように流れる敵の血にひたって過ぎていった。天地をとどろかす連続的な爆音と、空がうまるほどにとびかう銃砲弾、たえることのない怒号とともに展開される白兵戦――、そこには限界も時間の概念もなかった。

一、二一一高地をはじめ、東部戦線の大小さまざまなすべての高地では死の白兵戦が一か月もつづいた。

人民軍勇士たちは、八月十八日から九月十八日までの一か月間に、七万八千八百余の敵将兵と無数の戦闘技術機材を撃滅し、敵の「夏季攻勢」を死の攻勢、絶望の攻勢にかえてしまった。

敵もこの惨敗のまえでは、戦慄せずにはいられなかった。アメリカ帝国主義侵略軍の敗軍の将たちは、味方の死体で築かれた山のうえにすわり、群がる鳥の鳴き声を背にあびながら星条旗に顔をうずめた。

この惨敗をさして、アメリカ統合参謀本部議長ブラッドレーは、「夏季攻勢」が「まずい時期に、まずい場所で、まずい敵を相手にした、まずい戦争であった」と嘆いた。

しかし、泣きながらも惨敗から教訓をえることを知らないのがアメリカ帝国主義のつねであった。侵略者どもは、ふたたび大規模な「秋季攻勢」の準備をいそいだ。アメリカ帝国主義が死の運命を負わされていたことは、こうした歩みのなかにはっきりとあらわれていた。あがけばあがくほど死に近づき、死が近くなればなるほどあがくアメリカ帝国主義であった。

アメリカ帝国主義の「秋季攻勢」は「夏季攻勢」と同じような作戦目的をもつものであった。表面上のちがいは、開城地区に人民軍部隊を誘引することによって、「夏季攻勢」のときの目的を一気に達成しようとねらい、一方、西部戦線地域でも別な打撃をくわえようと計画したことであった。そうしながら、東部戦線の一、二一一高地一帯にたいする決定的な攻撃を準備していった。

一、二一一高地一帯は、江原道麟蹄（リンジェ）と楊口（ヤング）から、それぞれ内金剛（ネクムガン）、末輝里につうずる幹線道路の交叉点の正面に位置する決定的な要衝で、作戦——戦術的にきわめて重要なところであった。すなわち一、二一一高地と一、〇五二高地は、楊口、沙汰里（サテリ）の道路の東側にあって、南北に大愚山（デウ）、加七峰（カチル）、鷹峰（メ）などをむすぶ基本山脈であり、支配的な高地であった。そのため、北半部の広はんな地域へおしいろうとした敵は、たとえ死体の山を築こうと、この地帯だけはあくまで掌握せんものとねらったのであった。

一、二一一高地を守りぬくかどうかは、じつに戦線のあらゆる軍事情勢を左右する基本的な環であり、戦争全般にも影響をおよぼす問題であった。

敵の企図と戦争の状況を手にとるようにはっきりと見ぬいていた最高司令官は、西海岸の防御部隊の一部まで東部戦線に集結させる一方、一、二一一高地をはじめ、重要な高地に強力な防御地帯を築き、深い縦心をもった防御体制を確立した。

首相は、この戦線でふたたび敵にせん滅的敗北をあたえることによって、朝鮮人民の力をしめし、敵のいかなる野心的挑戦も、かれらに破滅をもたらすだけだということを思い知らせようと決心した。これにもとづいて、すべての戦線、とくに東部戦線を強化するための敏速な措置がつぎつぎととられていった。

一方、人民軍の各部隊では、「一歩もあとへひくな！」との最高司令官命令をあくまで遂行するために、党会議と軍人集会がひらかれた。

すべての将兵たちは一大決戦をひかえて、抗日武装闘争の伝説的英雄である金日成将軍の英姿を心に描いて闘志と思想をとぎすまし、血潮をたぎらせた。全将兵が抗日パルチザン闘士のように不死身となり、火の玉となり、嵐となって侵略者を撃滅することをかたく決意するのであった。

「アメリカ帝国主義者に死をあたえよ！」という決意の叫びが、あらゆる会議場からとどろいた。戦闘員たちは、「最後の血の一滴までささげて、貴いわが祖国の領土を守りぬくことをかたく誓う」手紙を金日成首相におくった。

敵も、その「勝利」を信じていた。アメリカ帝国主義の一将軍は、こう豪語した。

「このたびの秋季攻勢は、もっとも栄誉あり、もっとも勇敢で、もっとも知恵のある大アメリカの第一歩兵師団をはじめとする十五個師団の兵力を総動員し、数百台の戦車とわがアメリカの誇りである各種の砲および航空機、毒ガス弾、サーチライトまで総動員したものだ。したがって、このたびの攻勢こそ共産軍を完全にせん滅し、屈服させる大作戦となるであろう」

しかしこれもまた、自分たちの喫した敗北から教訓をさがすことのできない敵の妄言にすぎなかった。

敵は九月二十九日、ついに西部および東部戦線で「秋季攻勢」を開始した。敵の攻撃は猛烈であり、執拗であった。

戦線は炎のるつぼと化し、いたるところで激戦がくりひろげられた。名もない一つの谷間、一つの峰をめぐってさえも凄絶な死闘が展開された。敵は大波のようにつづけざまにおしよせてきた。しかしそれは、うちよせたきりひき返すことのできない死体の波であった。

人民軍戦闘員たちは、それこそ怒れる猛虎であり、不死鳥であった。十人、二十人の敵を一人で撃滅した戦士たちも、敵弾にたおれたときその戦果に満足できず、復讐をたのむ、といいのこして息をひきとるのであった。

こうした激闘のさなかのある日、金日成首相は、一、二一一高地の戦闘を指揮する軍部隊長を電話によびだした。それは午前零時をすぎた真夜中のことであった。軍部隊長は受話器をとりあげた瞬間、ながいあいだききなれてきた最初のひと声で、それとわかる領袖の太くよくひびく声をきいた。その語調はいつものように力強く、快活で、そして沈着であった。

首相は、一、二一一高地の戦士の偉勲を高く称賛しながら、その日の戦闘状況と戦闘員たちの健康状態や生活状況をたずねた。そしてこういった。

「だれもが、かけがえのない貴重な宝だ。戦闘員一人ひとりが、すべて貴重な革命の戦友たちなのだ。かつてわれわれが日本帝国主義とたたかっていたとき、革命戦友の少なかったことがどれほどつらかったことか。われわれはその貴重な宝を、力のおよぶかぎりたいせつにしてやらねばならない。……もう冷気がしのびよる季節になったようだが、あたたかいご飯と熱い味噌汁をたいてあげ、寝床も寒くないようにしてやらなければならない。そして戦闘員たちが風邪をひかないよう、まえもってよく面倒をみてあげなさい。……」

すこし間をおいて、首相は話をつづけた。

「神聖な祖国の地を寸土も奪われてはならないという、このことが父母たちのねがいであり、党の要求であることを深く悟ったとき、かれらはいっそう勇敢にたたかうであろう。このことを、よく教えてやってほしい」

翌日、軍部隊長は首相のことばを全軍に伝達した。勇士たちは領袖のあたたかい愛情を全身にひしひしと感じ、こぶしで涙をぬぐった。

かれらは、「自分たちをこれほどまでいつくしんでくれる党と領袖のためなら、なにを惜しむことがあろう。この高地を守りぬいてほしいというのが父母たちのねがいであり、党の要求であるならば、たとえ身が粉になろうともこの高地を必ず守りぬいてみせます」と、強い決意をかためたのであった。

金日成首相は多忙なかにも、危険をかえりみず最前線におもむき、みずから戦闘の指揮をとって戦闘員たちの士気を鼓舞した。

あるいはまた、電話をつうじて、人を派遣して、つねに最前線部隊の状況をつかみ、戦闘員たちの戦闘意欲をいやがうえにも高めたのであった。そのたびに戦線では大きな力と勇気がみなぎり、いっそうはげしい戦闘が展開された。

一、二一一高地一帯では、昼も夜も苛烈な激戦がつづいた。

敵は一か月以上もこの高地に正面攻撃をくわえてきたが、無数の死体をのこしただけで陣地を奪うことはできなかった。敵は作戦をかえた。人民軍の戦力を分散させようと、沙汰里北方の八五一高地一帯に攻撃のほこ先をむけ、一、二一一高地を側面と背後から攻めて占領しようとたくらんだ。

このときも金日成首相は敵の企図をすばやく見ぬき、一、二一一高地の防御をさらに強化する一方、いざというときには強力な予備隊をも動員するよう命令した。

しかし敵は一、二一一高地の防御力が分散されたものと思いこみ、ここに多くの兵力を投入して必死におしよせてきた。アメリカ帝国主義はすでに、第一回の攻撃からあらゆる戦闘技術機材をかき集め、「最大の爆撃」と「最大の砲撃」を敢行した。

高地では岩石がとび散り、年ふりた大木も根こそぎにされた。森を失ったリスが兵士のふところにとびこみ、舞いあがる土煙は陽光をさえぎった。山の峰々のいただきは砲火にけずられて、見るみるうちに低くなっていった。

しかし、人民軍勇士たちはびくともしなかった。

かれらは砲煙と炎につつまれながらも、陽気な冗談を忘れなかった。

それでいて這いあがってくる敵の姿を発見すると、天地をもゆるがすようなかん声をあげて、激戦をくりひろげた。身がくだけ散っても、銃だけは手離さなかった。

息をひきとる瞬間にも、手榴弾をまさぐった。

戦闘のあい間のわずかなひまにも会議をひらき、領袖の命令を遂行するために、はがねのようにはねかえる弾力のあることばで決意を語った。

かれらは、最高司令官金日成首相に手紙をおくった。

「敬愛する領袖金日成将軍！

ここは、一、二一一高地の塹壕のなかです。わたくしたちは、きょう三回目の戦闘をたったいま終えてこの場に集まりました。塹壕は壁がくずれ、あたりはまだ火薬の臭いと砲煙がただよっています。この砲煙が消え去るまえに、敵はふたたび這いあがってくることでしょう、数万発の爆弾と砲弾をうちこみながら……。しかしわたくしたちは、わが人民の敬愛する領袖あなたが、祖国の寸土をも死守し、一歩も後退するな、といわれた命令にしたがい、この高地を血潮で守りぬきます。

わたくしたちの重機関銃座のまわりは、砲弾の薬莢が小さな山を築いています。わたしたちはこの薬莢の山が、見あげるばかりの大きな山になるまでたたかいます。

わが分隊員一同は、敬愛する領袖あなたが親しく指導された抗日遊撃隊の崇高な革命精神に学び、一致団結して容赦なく敵をうち、復讐の死をあたえ、最後の血の一滴までささげて敵とたたかい、祖国の高地をあくまで守りぬきます。わたくしたちは弾丸がつきれば手榴弾で、手榴弾がなくなれば肉弾で敵に最後のとどめをさし、必ず勝利をたたかいとります。……

敬愛する領袖！　あなたの息子である わたくしたちが 生きているかぎり、一、二一一高地は永遠に朝鮮民主主義

人民共和国の高地としてそびえていることでしょう。

金日成将軍万歳！

朝鮮人民軍第二歩兵師団〇〇連隊第二大隊重機中隊第一小隊第一分隊一同」

これは文字どおり、胸にたぎる赤い血潮で書かれた誓いのことばであった。一、二一一高地の鉄壁の守備隊は、この誓いに忠実であった。

敵は一九五一年の一年間だけでも、この高地に一平方キロメートルあたり六百五十二万余発の砲弾をうちこみ、四千百六十余個の爆弾を投下し、一か月間に数十、数百回もの攻撃をくりかえした。大隊が撃破されれば師団をかき集めて押しよせてきた。

しかし人民軍の戦闘員たちは、一歩もあとへはひかなかった。

一、二一一高地右側の無名高地における戦闘も凄絶をきわめた。

敵は山の陵線を死体でうめつくしながらも、執拗に這いあがってきた。人民軍の戦闘員たちは、わずか二、三時間のあいだに二百個近くの手榴弾を敵中に投げこまねばならないほどであった。敵はせん滅的な打撃をうけて逃走した。

十月三十日、敵はふたたび大兵力を動員して襲いかかってきた。戦闘は、ときを追ってますますはげしさをくわえていった。五回にわたる敵の波状攻撃を撃退したとき、通信が不通となり弾薬がきれた。敵は塹壕のすぐ近くまで迫っていた。だが分隊には、すでに手榴弾もなかった。無名高地は危機に直面した。勇士たちは猛虎のような勢いで敵中におどりこみ、軽機と歩兵銃を奪いとって敵をなぎたおした。

こうして、十五回にもわたる敵の突撃を撃退する戦闘で、戦闘員たちは、一人が数十人の敵を相手にしなければならなかった。かれらは襲いかかる敵を銃剣で突き、銃床でたたきふせ、敵が投げる手榴弾をひろってなげ返し

た。眼を失い、手足に重傷をうけながらも爆薬をかかえて敵の真っただなかにとびこんだ。

この日の夕方、無名高地の英雄たちは、上級指導部の命令にしたがって戦術的な撤収をおこなった。つぎの日の明け方、味方の模範中隊襲撃グループがこの高地を奇襲し、激戦のすえ、またたくまに奪還した。

この戦闘で共和国英雄李寿福は、胸で敵の銃眼をふさぎ、部隊の勝利をもたらした。かれは十九歳の若い民青員として、突撃をまえに自分の手帖にこう記した。

「ぼくは解放された朝鮮の青年だ。生命は貴い。輝かしい明日の希望も大切だ。だが、ぼくの希望、ぼくの生命、ぼくの幸福――それは、祖国の運命にくらべれば小さいものだ。一つしかない祖国のために、二つとない生命ではあるが、ぼくの青春をささげることほど貴い生命、美しい希望、大きな幸福がまたとあろうか！」

十九歳の若い胸のうちに、この高潔で崇高な思想をやどしたかれは、まさしく偉大な領袖に学び、そして育てられた真の朝鮮の息子であった！

貴重なもののすべてを領袖から、領袖の指導する党からあたえられたかれであったがゆえに、領袖と祖国はまさしくかれの母であった。

かれは、ただ見つめるだけで、いつもよろこびをあたえてくれた母なる祖国――、その母がおちいった危機を見るにたえかね、敵の銃眼を胸でふさぎ、偉大な母の永遠の安らぎと若さを守った。領袖の力、卓越した政治の力、思想の力はいかに強いことか！　李寿福英雄こそは、金日成首相のもとで育った朝鮮青年の華であった。

一、二一一高地の戦士たちは、その一人ひとりが李寿福であり、すべてがかれと同じようにたたかった。敵がいかに執拗に襲いかかってきても、人民軍にはひきさがる場所がなかった。かれらの背後には金日成首相からさずけられた工場があり、土地があった。そこには生まれてはじめていとなんだ美しい生活があった。いまそこには、敵の爆撃のなかでも、ひたすら勝利だけを信じて生き、たたかう父母や妻や姉たちがいた。本を読み、あそびたわむ

最高司令官金日成首相にかぎりなく忠実な1.211高地の勇士たち

れるあどけない弟や妹たちがいた。

戦士たちは、そのあらゆる生活のなかから、そして高地の土くれのあいだからも、金日成首相の力強い声をきいた。

「一歩もあとへひくな！」

かれらには、ひきさがるところがなかった。ただ敗北した侵略者の死体を踏みこえてのみ、故郷へ帰ることができた。かれらは、抗日パルチザンたちがそうであったように、最後の勝利をかたく信じ、一心同体になって侵略者を撃滅した。

一人の戦闘員が血潮たぎるわが胸で敵の銃眼をふさぐとき、二人目の戦闘員は手榴弾のたばをかかえて肉弾となり、敵兵の群におどりこんだ。砲兵区分隊の一通信員が切断された通信線をわが身で電線のかわりにしてつなぐとき、一砲手は敵弾にたおれながらも、アメリカ帝国主義を掃滅せよと叫んで復讐の砲弾をこめた。一機関銃手が薬夾の山を築きながら敵をなぎたおすとき、他の戦闘員は歯がかけるほど手榴弾の安

全弁をかみぬいて投じた。敵の手榴弾を投げかえしながらたたかう高地もあった。岩石をころがして敵をうちのめす高地も見られた。一工兵区分隊が英雄的にたたかい危機に直面したとみるや、一偵察区分隊が敵の背後を襲った。高地に危機がせまると、炊事兵も突撃にくわわり、衛生兵も、担架隊員も銃剣をふりかざして復讐戦を展開した。

こうした英雄的な息子や娘たちを育てあげたことだけでも、金日成首相と朝鮮労働党は偉大である。こうした英雄的な息子や娘たちを生んだことだけでも、わが祖国は栄誉に輝くであろう。そして、敵がわが祖国の地に牙をたてようとするそのときには、全人民が間髪をいれず鉄壁の陣をしき、決戦をもってこれにこたえるのだ。

朝鮮人民と人民軍のこのような大衆的英雄主義は、祖国にたいする炎のような愛情のあらわれであり、祖国を暗黒から救いだして人民の新しい生活を切りひらいた金日成首相にたいする比類なき忠誠心の示威であった。この思想、この力はまた、首相のすぐれた戦略戦術に導かれることによってますます必勝不敗のものとなった。

敵の「秋季攻勢」は十一月初旬にいたり、かれら自身の惨敗に終わった。じつに七万九千余の将兵と、ばく大な戦闘技術機材を失ったかれらは、しばらくは挑戦することさえできなかった。

これは、人民軍の巨大な勝利であった。最後まで守りぬいた一、二一一高地――、一万五千をこえる敵将兵の死体でおおわれたこの英雄の高地は、砲煙にくすんだその頂上に、共和国の国旗をなびかせて空高く毅然としてそそりたっていた。

アメリカ帝国主義侵略者は、この高地の戦闘であまりにもひどい惨敗を喫し、見あげるだけでも心が痛むというので、この高地をさして「傷心嶺（ハートブレイク・ヒル）」とよび、またこの高地一帯の谷間にはいったが最後、もはや生きては帰れないというので、それを「陥穽谷（トラップ・バレー）」と名づけた。

「世界でもっともすすんだ兵器も、東部戦線ではいまや無用の長物となった」

敵はこう悲鳴をあげた。
惨たんたる敗北をこうむった敵は、一九五一年十月二十五日、みずから一方的に決裂させた停戦会談の会議場に、意気消沈したその姿をふたたびあらわした。
しかし、ここでも、政治的敗北がかれらを待ちうけていたのである。

6　勝利のために、未来のために

アメリカ帝国主義者にとって朝鮮戦争は、現実にくりひろげられたながい悪夢であった。
かれらの傲慢な表情には、発作的な狂暴性とともに、深い絶望と悲哀がいりまじっていた。朝鮮戦争からの出路を見いだせないことがはっきりするにつれて、アメリカ帝国主義支配層は、目に見えてぐらつきだした。
しかし、膨脹した資本に基盤をおく野獣そのものの侵略性と残虐性だけは、依然として猛りたっていた。
かれらは、朝鮮の力がいかに強大であろうとも、そこには限界があるにちがいないと自分なりに判断した。
敵は朝鮮戦線にすでに投入していた五十五万余の兵力にくわえて、日本に待機させていた六万余の戦略的予備軍までかりだし、ふたたび攻撃をくわえてきた。敵の空軍は、平和的な住民地帯を昼夜をわかたずもっとも野蛮な方法で爆撃した。一方、停戦会談場では、捕虜送還をはじめ多くの問題討議において強盗的なむりおしで会談を決裂させようとした。
金日成首相は、アメリカ帝国主義のこうした行為を、敗北するものの最後のあがき以外のなにものでもないと見てとった。つねに外面ばかりでなく内面まで、現象ばかりでなく本質まで洞察する首相は、ますます狂暴化するアメリカ帝国主義者が、そのじつ、以前にもまして息を切らししもがいているということをするどく見ぬいていたので

ある。

金日成首相は、いつにもまして勝利をかたく信じていた。かつて日本帝国主義のあがきが頂点に達していた一九四〇年代初期のきびしい日々に、すでに朝鮮の夜明けを見とおしていた首相にとっては、いま傷だらけになってあがいているアメリカ帝国主義の敗北は、火を見るようにはっきりしていた。問題は、その勝利を一日も早くくりあげることにあった。

首相は国家生活の全般にわたって、戦争遂行の障害物となっている欠陥と不足点をとりのぞくことに多大な関心をはらった。

あい路は一つや二つではなかった。いっそうはげしくなる敵の破壊行為のため、人民生活は依然として苦しかった。復旧建設は部分的であったし、前線への供給も、防御陣地の構築も満足ではなかった。

一方、戦争がながびいてくると、スパイや破壊分子が党を大衆からひきはなし、党を内部から切りくずそうとやっきになった。

金日成首相は党と政権機関を強化し、全人民を組織動員して、後方と前線を堅固な要塞にかえることに全力をそそいだ。

そのためには第一に、党の組織活動において発生した欠陥をなくさねばならなかった。

当時、許哥而（ホガイ）をはじめ反党分派分子らは、労働者階級を先頭とする全勤労大衆の先鋒隊としての党の性格と、戦争によって工場労働者数が減少した事情などを正しく見ることができなかったし、また見ようともしなかった。

反党分派分子らは、党員の構成において労働者階級の比率を高めることだけにこだわり、前線と後方で無比の愛国的献身性を発揮してたたかっている勤労農民をはばひろく党にうけいれようとせず、数多くの入党志願者を拒否するという、ゆるすことのできない行為をはたらいていた。

党の大衆的性格と具体的な環境に反するこのような官僚主義的行為を放置すれば、党が人口の絶対多数をしめる農民との団結をかためるうえで大きな損失をうける危険があった。分派分子はまた、党員にたいする思想教育活動をそっちのけにして、戦略的後退期にわずかな誤ちをおかした党員さえも無原則的に懲罰し、党から追いだし、党活動において形式主義と官僚主義をひろめた。

これは結局、党を内部から切りくずし、党と大衆をひきはなそうともくろむ敵の策動をたすける行為であった。

金日成首相は、きびしい戦争の時期に、革命の参謀部である党を弱めるこのような左翼的誤りをただし、党をいっそう強化することによってすべての愛国的勢力を戦争勝利へと総動員するため、一九五一年十一月、党中央委員会第四回総会をひらいた。

会議で金日成首相は、『党組織の組織活動における若干の欠陥について』という報告をおこなった。

金日成首相は、一部の党組織が党発展のうえでおかしているセクショナリズム的誤りを批判し、前線と後方において祖国の自由と独立のために献身的にたたかっている先進的な労働者、勤労農民、勤労インテリを党に積極的にうけいれることによって、党をさらに大衆的な政党へ発展させるべきであると強調した。

首相は、つぎのように教えた。

「われわれは労働者階級を中核として、労働者階級の思想と、その指導的役割をしっかりと保ちながら、各界各層人民の愛国的先進分子を党の隊列にうけいれ、党を大衆的に拡大強化しなければなりません」

これとともに首相は、党の隊列を急速に拡大する条件のもとで、党の一貫した組織路線である党細胞の中核を不断に育成することについて強調した。そして首相は、政治教育によって党員の自覚的規律を高めるかわりに、党の組織規律の強化を党の懲罰とすりかえる誤りをあらため、まちがった懲罰をとり消す問題を提起した。

ついで首相は、後退期以後、友党内にはいりこんだ反動的要素と友党の基本的性格とを混同して、祖国戦線を不

必要だとする一部の党組織と党活動家の極左的偏向を批判し、祖国戦線にたいする党の指導を改善強化する課題を明らかにした。

首相は、祖国戦線にたいする党の指導を強めることとなくしては、各界各層のより多くの大衆を党のまわりに結集することができず、祖国統一の大業をなしとげることもできないと強調して、つぎのようにのべた。

「祖国戦線の活動を正しく推進するため、党員に、友党にたいする活動方法を教え、上層部の統一ばかりでなく、わが党員と友党の党員間の下部統一を強化することに多くの力をそそがなければなりません。いま統一戦線傘下にある各政党、社会団体の下部大衆は、絶対多数が勤労大衆であるため、最後までわれわれとともに前進することのできる、われわれの同盟者であります」

金日成首相は、党の組織活動にあらわれたあらゆる欠陥の基本原因は、一部活動家の官僚主義、形式主義的活動作風にあると指摘し、官僚主義、形式主義に反対する全党的闘争を強力にくりひろげることをよびかけた。

第四回総会以後、党組織では極左的偏向、とくにセクショナリズムと懲罰主義的傾向を克服するための闘争がくりひろげられた。数十万の労働者、農民、軍人および勤労インテリの優秀な先進分子が入党した。

こうして党は、百万大衆を擁する大きな組織となり、生気あふれ、全人民を一つに包容する威力ある大衆的な党に発展した。党にたいする人民大衆の支持と信頼もますます高まった。

金日成首相は、党の組織活動にあらわれた極左的偏向をただす闘争を、活動家の官僚主義および形式主義的活動作風、方法を一掃する闘争と密接にむすびつけ、これを同時におしすすめていった。

官僚主義は、人民大衆を抑圧するための支配階級の反人民的支配方法であり、人民民主主義制度のもとでは、ゆるすことのできない有害な作風である。にもかかわらず日本帝国主義支配期の古い思想ののこりかすが清算されず、革命闘争の経験が浅く、革命的大衆観点がしっかりしていないところから、一部の活動家たちには官僚主義的傾向

が少なからず露呈されていた。

官僚主義的傾向を根こそぎにしないでは、党と大衆との連係をかたくすることができず、人民大衆の創造的積極性を発揮させることもできなかった。

官僚主義に反対する闘争において一九五二年二月、道、市、郡人民委員会委員長ならびに指導活動家連席会議でおこなった金日成首相の演説『現段階における地方政権機関の任務と役割』は、きわめて重要な意義をもっていた。

金日成首相はこの演説において、敵と長期にわたってたたかい勝利するためには、党の路線と政策の執行者であり、唯一の人民政権である人民委員会を強化しなければならないと指摘し、人民政権を強化するための一連の課題を明らかにした。

首相はとくに、一部の活動家のあいだに見られる官僚主義的活動作風と方法をただし、人民との連係を緊密にすることについて強調した。

首相は、人民の声をきいて、人民が要求する方法、説得の方法によって活動すべきであるのに、人民に命令し、どなりつけ、仕事を独断的におこない、人民とまったくかけはなれて官僚貴族のように行動する現象を辛らつに批判し、官僚主義をただすことについて、つぎのように教えた。

「人民政権機関の活動家は人民に依拠して活動し、人民の利益を尊重し、人民に命令することをやめてかれらを納得させ、教育し、つねに人民から学び、人民のために誠心誠意服務することを知る、真の人民の活動家にならなければなりません」

首相のこのことばは、党ならびに人民政権機関活動家の活動における指針となった。

問題は、これを行動に移すこと、実践することであった。いいかえれば、すべての活動家がりっぱな人民的活動作風で仕事をし、人民を生産闘争へ力強く動員する問題であった。

この問題においても首相は、すべてのことにそうであったように、率先して模範をしめした。

一九五二年五月のある日、大同郡東岩面元和里（現在の順安郡元和里）でのことである。

金日成首相がその日、元和里をたずねたときは、まだ星がまたたく夜明けまえであった。農民たちは眠っていた。副官は訪問先の家の主人をよんで起こそうとした。だが、首相はそれをゆるさなかった。

首相は一国の領袖の身でありながら、冷えびえとした庭の地面にわらたばをしいてすわり、家の主人が起きるまでながいあいだ待っていた。まるで抗日武装闘争の時期、隊員たちを一時間でも多く眠らせてやろうと寝もやらず、たき火を見まわったときのように……。

金日成首相は、農民たちとともに畑へでかけた。

農民とともに畑へでかけた首相は、里の女性同盟委員長がすすめる敷物も辞退して畦の草のうえにすわり、農民たちに畑仕事のもようをくわしくたずねた。それがすむと農民たちとともに畑仕事をしながら、随員たちにこういった。

「種まきをするときにはていねいに仕事をしなければならない。種はまきすぎてもいけないし、少なくてもだめだ。ことに貴重な種をこぼさないように注意しなければならない。それからみぞをすこし深めに掘ったほうがいい。そうすれば日照りにもたえてよく根付くものだ」

首相は種まきもし、箕を手にして堆肥もほどこした。このとき上空には敵機がたえまなくとびかっていた。しかし首相は気にもとめないで仕事をつづけ、農民たちに、敵を撃滅するためにはまず軍人が十分に腹ごしらえできなければならないといいながら、「食糧のための闘争は、祖国のための闘争であり、前線の勝利を保障するための闘争である」というスローガンの内容を、わかりやすいことばで説明した。

首相といっしょに畑仕事をするこの村の農民は、だれもがよろこびにつつまれ、熱心に仕事にはげんだ。老人た

ちも感激のあまり畑にでてきた。

金日成首相の二月演説にはげまされた全国の党ならびに政権機関の活動家は、古い活動作風を克服し、人民との連係をいっそう強化して、労働者、農民と悲しみやよろこびをともにわかち、力強い勤労闘争の火の手をあげた。

農民は、戦争において自分たちがうけもった任務の重さをいっそうはっきり知るようになった。かれらはアメリカ帝国主義侵略者にたいする怒りに燃え、祖国にたいする熱い愛情をいだき、祖国の安全があってこそ個人の幸福も、未来もあるのだということをますますはっきり認識していった。こうして、農民たちの考えもすっかりかわった。かれらの関心は家庭の垣根と自分の田の畦をこえ、わきたつ集団へ、社会領域へとのびていった。これは貴重なことであった。

農民たちは、農牛共同使役班、労働相互扶助班を組織し、たらない食糧、労力、畜力、農器具などを共同で集め、たがいにたすけあいながら働いた。首相は、これを農業協同化の芽ばえとして注目し高く評価した。

畑仕事も戦闘であった。農民たちは荒地を耕し、爆撃による大穴をうめて耕地をならし、破壊された道路と鉄道線路を復旧した。内気な乙女たちが大きな雄牛をムチで追って田畑を耕したり、大きな荷車をひいたりすることが日常のこととなった。海辺に近い農民たちは武装作業隊を組織し、しのびこんでくる敵とたたかいながら畑仕事にはげんだ。

無差別爆撃をくりかえせば、朝鮮の農民は家財道具をかついで泣きわめきながらさまよい歩くであろうという、侵略者の予測は完全に裏切られた。るつぼのなかで鋼鉄がきたえられるように、農民は戦争の砲煙のなかでますます鍛練されていった。

労働者は破壊された生産施設と原料難に苦しみながらも、りっぱに戦時生産を保障した。爆撃で電気が切れると手でベルトをまわし、旋盤がこわれればそのつど新しくくみたてて生産をつづけた。敵機の猛爆下を機関車は瞬時

も休まず前線にむかってばく進した。どれだけ多くの肩と手が、どれほどの熱意をもって寸断された鉄路をつなぎ、機関車をおくりだしたことか！　爆撃に娘を失い、夜ふけにタバコばかりふかしていた老人も、機関車の汽笛さえきけば、泥まみれの手で涙をぬぐってたちあがった。汽笛の声は、屈することを知らない人民の勝利の叫びであった。

このように金日成首相は、道具をつるぎのようにふるい、生産を戦闘のようにおこなう人民を育て、あたたかい陽光に日焼けしたかれらを炎のなかで鍛練し、闘争によってきたえられた闘士に、いかなる難関にも屈せずにたたかう戦士に育てあげた。

首相は、後方を政治、経済的にうちかためるとともに、前線の強化にも万全の策を講じた。

首相は、軍隊や党組織、政治機関や戦闘指揮官たちの役割を高めるために一連の措置をとり、同時に戦闘員のあいだで模範中隊創造運動の炎を燃えあがらせた。そればかりでなく、人民軍の技術装備をたえず改善することにも大きな関心をはらった。戦闘技術機材の大部分は国内の軍需工場で生産された。これはいうまでもなく金日成首相のすぐれた戦時経済政策の勝利であった。

首相はまた、世界を驚嘆させた飛行機狩り班運動と狙撃兵運動を展開し、敵をふるえあがらせた。

狙撃兵は大胆にも敵の防御線の前面にひそみ、歩兵銃で敵の将兵を大量に射殺した。一九五二年三月からその年の十二月中旬までのあいだに、人民軍狙撃兵によって殺傷された敵の将兵は一万七百二十七人にも達した。人民軍の強烈な砲火力と狙撃兵の大胆な活動によって敵は死のかげにおびえ、陣地のなかにあっても自由に行動することができなかった。

飛行機狩り班も、めざましい活躍をした。

かれらは、日本帝国主義の軍警を意のままに撃破した抗日パルチザンのように、敏捷な行動によって、あるいは

また仮装目標物に誘いこむことによって、狙撃兵器で昼夜をわかたず敵機を撃墜した。飛行機狩り班によってうちおとされた敵機の数は、一九五二年の一年間だけでも、じつに千二百十九機に達した。
狙撃兵器は、それが大胆な兵士の手ににぎられるとき、飛行機をも意のままに撃墜することができるというこの事実は、一つのおどろくべき発見であった。じつに金日成首相は偉大であり、朝鮮人民軍は英雄であった！
飛行機狩り班の活動とともに、人民軍の高射砲火力と戦闘機の活動が強まるにつれ、アメリカ侵略軍の空中匪賊はその行動範囲をせばめ、白昼の飛行を夜間飛行にかえ、低空飛行から高空飛行に移り、単独飛行をやめて編隊飛行をとらなければならなくなった。
金日成首相はさらに襲撃班運動と戦車狩り班運動を組織し、敵を奇襲してこれをせん滅し、戦車は見つけしだいに破壊した。また遊動砲戦法をもちいて、いたるところで敵兵力と火力器材を機動的に消滅した。金日成首相が創造したこれらの大胆かつ革新的な戦法によって、敵はつねに恐怖につつまれ、ばく大な損失をこうむった。
すべてが改善され、状況はよくなった。強固な後方、坑道陣地の構築、質も量も軍事技術的にもさらに成長した人民軍――金日成首相と朝鮮人民の勝利は、すでに現実的に約束されたも同然であった。もちろんアメリカ帝国主義は、しつこくあがいていた。
外見では、まだ相当強そうに見えもした。しかし首相はすでに、砲声がやみ、戦車が戦塵をはらう勝利のその日のことを考えていた。夜をこがす火柱と砲声のひびきも、夕焼け空をおおう砲煙や激烈な戦闘も、燃えつくした部落と灰燼（かいじん）と化した都市も、首相の思索を乱すことはできなかった。それらはかえって、未来の構想をねる首相の思索に熾烈さと浪漫的な色調をそえるだけであった。
兵器と師団を前線におくりだしながらも、前線司令部に新しい命令をくだしたあとでも、夜ふけに作戦地図のまえにたつときも、人民をたずねゆく明け方の道にあっても、首相は未来と建設と繁栄に思いをはせていた。アメリ

ヵ帝国主義の極東軍司令部と全支配層が作戦地図のまえで頭をかかえているとき、金日成首相はすでにふつうの地図をまえに静かにたっていた。

人跡未踏の北方の広大な高原地帯、ここに大きな農場をつくることができるだろうか？　西海の干潟地を開拓できるだろうか？　大治金基地と軽工業基地はどこに築くべきか？　都市のアパートと農村住宅はどこに、どんな構造で建築すべきか？　金日成首相は構想をねり、未来をながめていた。

話は、一九五一年のはじめにさかのぼる。

外国留学の途中で前線を志願し、ピョンヤンに帰ってきたある建築専門家がいた。

かれは思いがけなく金日成首相からよばれ、最高司令部をたずねていった。健康で活気あふれる首相に会ったかれは、こみあげる感動に目がしらをぬらすばかりであった。

首相は都市建設における技術者の役割を強調しながら、かれにこう話した。

「もう、われわれには勝利の日が遠くはない。だとすれば、破壊された都市を復旧しなければならないではないか。

破壊されるまえよりもいっそう雄大で、美しい都市を建設して、復旧建設においても朝鮮人民の真価をみせてやらねばならない！」

これは、前線を志願した若い建築家には思いがけないことばであった。国中が炎につつまれ運命を決する死闘をくりかえしているときに、雄大な都市建設とは！　かれは、こみあげるよろこびをおさえることができなかった。

このとき、前線から電話がかかってきた。受話器をとりあげて前線の報告をきく首相は、砲煙につつまれた前線に思いをはせてか、窓ごしに南の空を見あげながら、自信にみちあふれた力強い声で命令をあたえた。

電話を終えた首相は、まずピョンヤン市の復旧建設計画を討議してみようといいながら、大きな白い紙を一枚ひ

楽元機械工場鋳物職場の細胞総会を指導する金日成首相

ろげて机のうえにおいた。そして鉛筆をとると、紙いっぱいにピョンヤン市の複雑な建設図の輪郭を描いていった。

どこからか、廃墟となった都市や苛烈な戦争を想起させる飛行機の爆音と高射砲の音がきこえてきた。しかし、金日成首相は話を中断しないで、紙のうえに新しいピョンヤンの街路や重要施設などの位置まではっきり記入していった。それは、ただたんなる書きこみではなかった。首相の視線は、灰燼のなかからのびてゆく美しくひろい街路と、子どもたちがあそぶ美しい公園や、大理石と花崗岩でつくられた文化施設にそそがれていたのだ。

朝鮮のたくましく美しい顔であり、花である都市、幸福と熱情にあふれた生活が躍動する社会主義の首都ピョンヤン！

考えるだけでも若い建築家の胸はおどった。

首相の思想はどれほど巨大で、どれほど楽天的であることか！　いかなる環境のもとでも制約されることなく未来の門戸をおしひらくその進取性、雷雨

をふくむ黒雲をつきぬけ、青い空とまばゆい太陽をのぞむような未来にたいする非凡な眼光――、そのまえで圧倒され、感激に胸ふるわせる若い建築家は、あふれる涙をおさえることができなかった。

その日から設計家たちは、首相の構想にしたがってピョンヤン建設の計画図の作製にとりかかった。それが終わると、各道庁所在地建設の設計をつぎつぎとおこなっていた。

この感激的なニュースは、前線の勇士たちと後方の人民にとって大きなはげましとなった。

戦火のなかにおける首相の偉大な設計は、たんなる構想だけに終わるものではなかった。

金日成首相は、工場と農村のいたるところで人民とともに戦後建設の準備について話しあい、復旧建設の礎石を一つ一つ積みあげていった。

一九五二年の初夏には平安北道の多くの地域をたずね、楽元(ラグオン)機械工場にも足をはこんだ。この工場の労働者たちは、爆撃で破壊された溶銑炉を建てなおして溶鉄をひきだし、鍬と鎌をつくっていた。

首相はこの日の夜、まえぶれもなくこの工場の鋳物職場の党細胞会議に参加した。党員たちは会議の途中で、首相が一番うしろの列の椅子にすわっていることに気づき、どうしたらよいかわからなかった。複雑な国事と苛烈な戦争を指揮する首相が、この小さな職場の細胞会議に姿を見せようとは夢にも考えられないことだった。とくにその日は、新義州地区にたいする敵の無差別爆撃がくわえられた日であっただけに、労働者のおどろきはひとしお大きかった。

最後列にすわり、党員たちの討論を終わりまできいていた首相は、「会議に参加したのだから、党員の一人として、わたしも意見をのべたい」といいながらまえにでた。

金日成首相は、まず細胞会議にたいする意見と、労働者の生活についてのべてから、話しを戦後復旧建設に移した。

「解放後、われわれの手で自分の生活を築きはじめ、やっと生活できるようになったときに、アメリカ帝国主義が戦争の火をつけた。アメリカ帝国主義侵略者をうちのめしたあとには、復旧建設をしなければならないが、そのときにはやらねばならぬ仕事が山ほどある」

戦後建設ということばに、党員たちはますます興奮した。このとき、一人の女性労働者がたちあがった。敵機の爆撃に母や姑をはじめ、息子や娘まですべて犠牲にした女性であった。彼女はおちついた声でこういった。

「首相さま！　戦争が終われば建設はわたしたちがやりますから、ご心配なさらないでください。……解放直後、日本帝国主義がこわしていった工場をみんなで復旧しましたが、それほどむづかしくはありませんでした」

金日成首相は深く感動した。その女性労働者の素朴な話には、おどろくべき力がひめられていた。

そこには、革命の気高い義務を自覚した労働者階級の知恵と勇気が脈うち、いかなる難関をも胸をはってのりこえていく力強い気迫がみなぎっていた。このような労働者階級、このような人民の力をもってすれば不可能なことはなに一つない！　首相はこのことを確信した。

後日、首相はこのときのことを回想してつぎのように話した。

「戦争中わたしは楽元にゆき、楽元機械工場鋳物職場の党細胞総会に参加したことがあります。……その夜わたしはなかなか寝つけませんでした。わたしは、あの同志のことばを生涯忘れることができません。車にのって帰りながらも、わたしはその同志のことばがほんとうに正しいと思いました。このような強靱な意志をもった労働者階級がいるかぎり、わが党は必ず勝利するという自信をいっそうかたくしました」

戦争が終われば山をもくずすことができるという、強靱な人民大衆の力を見た首相は、復旧建設の準備をさらに具体的にすすめていった。

前線の需要をみたすだけでなく、これから先、朝鮮を発達した工業国につくりかえるために、まず機械工業をみ

ずからの力で発展させねばならないと考えた将軍は、すでに一九五一年から熙川（ヒチョン）地区をはじめとする各地に、大規模な機械工業基地を地下に設置する積極的な措置を講じた。いたるところに機械工場が建設された。これは、戦時軍需品生産の保障はもちろん、戦後人民経済の急速な復旧建設においても大きな意義をもった。

金日成首相は、製鉄工業、石炭工業、電気工業の復旧にも力をいれた。

農業についても、多くの大胆な構想をたてた。白頭山の東南にひろがる四万町歩の大高原地帯に農場をもうけ、西海の干潟地を開拓するなど、自然改造にたいする設計図をつくり、農業を社会主義的に協同化する構想もにつめていった。

すでに一九五二年には、平安南道の農村指導の過程で三十人程度の農民による試験的な協同農場を組織し、農業協同化について、小さな規模の農場からしだいにその規模を大きくしていくべきであると教えた。これは戦後の全面的な農業協同化の実施において貴重な経験となった。

金日成首相は、社会主義を全面的に建設するうえで必要な大量の民族幹部を準備する問題についても、大きな注意をはらった。

アメリカ帝国主義が戦争を拡大し、強制徴兵にやっきとなっているときに、金日成首相は、前線にあった学者と学生を除隊させて大学などで学ばせ、先進的な科学技術を学びとらせるために優秀な戦闘員をえらんで外国に留学させるなど、大胆な措置をとった。

こうして戦争のきびしい日々にも、金日成総合大学をはじめ数十か所の大学、専門学校、高等学校などが全国各地で正常に運営された。学生たちは奨学金までうけて無料で学んだ。首相はいそがしい日々にも学校事業を直接指導した。一九五二年四月、平安南道順川（スンチョン）郡に疎開していた金日成総合大学にたいする現地指導は、とくに大きな意義をもっていた。

金日成首相は、この大学の教職員と学生たちに戦後復旧建設の方向と工業化計画、天然資源の合理的利用とそのための調査研究の方向など、重要な方針を提示し、この方針にしたがって幹部を育成しなければならないと強調した。

また、ピョンヤンの牡丹峰地下劇場（地下深く宮殿さながらにつくられたこの劇場では、定期的に多彩な芸術公演がおこなわれた）でひらかれた全国科学者大会では、戦後の人民経済を急速に発展させるための科学研究活動の方向と任務を明らかにし、科学院を創設する課題を提起した。大会後まもなく、戦争の苛烈な炎のなかで科学院が創設された。

首相は、科学研究活動に支障がないよう科学者を安全地帯に疎開させ、疎開先に研究室と実験室を設立し、かれらの実験器具や生活にこまかく心をくばり、多くの援助をあたえた。

金日成首相の思索と活動には、限界がないかのようであった。複雑でひろいはばをもちながらも、明確な目標に集中するその組織性と合理性、その多面性と立体性、こんにちの問題を解決しながら明日を準備し、切りひらいていく非凡な洞察力、そこにつらぬかれている人民へのはかり知れぬ愛情と革命的な独創性、こう列挙するだけでも、われわれの胸には熱いものがこみあげてくる。

しかも金日成首相のこうした思索と活動が、平和が乱された戦争の時期に、それもアメリカ帝国主義という、もっとも狂暴な敵との死闘がくりひろげられていた時期に展開されたことを考えるとき、金日成首相のこの偉大さをなににたとえることができようか！

7　アメリカ帝国主義者はひざまづいた

戦争は最後の段階にさしかかっていた。

帝国主義陣営の内部矛盾と経済危機が深刻化したうえに、朝鮮戦争での連続的な敗北によって世界史的な恥辱をうけ、傷だらけになったアメリカ帝国主義は、泥沼から這いあがる道をもとめて最後のあがきをつづけていた。

かれらはどんな手段をもちいてでも兵力を増強し、戦争を拡大すること以外に策はないと考えた。

アメリカ帝国主義の上層部では大騒ぎがおこった。トルーマンにたいする非難が爆発したのである。それまでトルーマンに多くの賛辞を呈していたものまでが、朝鮮戦争における敗北の責任をかれにおしつけた。結局アメリカ帝国主義者たちがあれほどたよりにしていたトルーマンという船は、朝鮮戦争の暴風にあおられて沈没してしまったのである。

そこでアメリカの独占資本家たちは、第二次世界大戦で十分な利潤をもたらしてくれた「戦争の神」――アイゼンハワーという男を大統領にかつぎあげた。事実、帝国主義者のうちで、侵略にもっとも猛りたっていたのはアイゼンハワーであった。

はたしてかれは、選挙戦の演説でこうわめきたてた。

「いまや、われわれの創意と幻想と生産体制は、ふたたび戦争の展望に集中された。われわれの経済は戦争経済であり、われわれの繁栄は戦争による繁栄である」

かれは朝鮮戦争に直接介入した。緊迫した事情がこの男をそうさせたのである。

この好戦主義者は一九五二年十二月に、アメリカ国防長官をはじめ麾下の提督、将軍らをひきつれて直接朝鮮戦

線にとび、「交渉より行動が第一」だと公言し、戦争を拡大するために冒険的な計画をたてた。
この計画は、一九五三年初に東西両海岸から一大上陸作戦を展開し、漢川（ハンチョン）、ピョンヤン、元山をむすぶ地域に強力な第二戦線を形成し、人民軍の主力部隊の背後を遮断して包囲せん滅することをもくろんだものであった。
アメリカ帝国主義侵略軍の頭目らは、この冒険的な作戦のためにあわただしく南朝鮮に出入りし、多くの艦船と航空機およびその他の戦闘技術機材とぼう大な兵力をかき集めた。そして一九五三年にいたっては、李承晩かいらい軍を十六個師団にふやし、そのほかにも日本と蒋介石の雇用軍をひきいれようと画策した。
情勢は緊張していた。決戦は時間の問題であるかのようにみえた。
敵のこうした動きにたいする金日成首相の判断は、簡単明瞭であった。敵の新しい攻勢は無謀な冒険であり、落日の運命にあるものの最後のあがきであるというのがそれであった。
首相は、敵の攻撃をふせぐばかりでなく、それを徹底的に粉砕し、その勢いにのって終局的な勝利をかちとるという方針をたてた。そのためには、すでにたくわえた物的および精神的力量を総動員することと、いくつかの新しい対策が必要であった。
首相はまず、党を鋼鉄の戦闘的組織に築きあげるべきであると考えた。
当時、党内にはいくつかの欠陥があらわれていた。党の量的な成長にくらべ質的な成長がたちおくれていることと、一部の党員のあいだであらわれた党派性の欠如などがそれであり、なかでも党の統一団結を破壊する分派分子の露骨な策動はそのまま見すごすことのできない問題であった。
のちに明らかにされたことだが、この時期に朴憲永、李承燁などのスパイ一味は、アメリカ帝国主義の指示にしたがい、アイゼンハワーの「新攻勢」とときを同じくして武装暴動をおこし、党と政府の転覆をはかっていた。
こうした状況のもとで、首相は党の組織思想活動の水準をさらに高め、すべての党員の党派性を強化し、分派行

動と自由主義的傾向を一掃するための強力な闘争をくりひろげることにした。
ところが一部の人びとは、アメリカ帝国主義侵略者が死物狂いで攻撃してくる時期に、党内闘争をおこなうことは、いたずらに混乱をまねくだけだと異論をとなえた。しかし首相の見るところでは、それは思想の正しくないものか、近視眼的な見かたしかできないものたちの愚論にすぎなかった。
金日成首相は、情勢が複雑でなさねばならぬ仕事が多いときほど、党内でのあらゆる否定的な現象と徹底的にたたかい、革命の参謀部である党を強化することが、すべての勝利の決定的な要因であると考えた。
首相は、このおしゃべり屋どもに断固として反対し、党内で思想闘争をすすめるという方針を堅持した。
この方針は、一九五二年十二月にひらかれた党中央委員会第五回総会で具体的にしめされた。
金日成首相はこの会議で、『党の組織的、思想的強化はわれわれの勝利の基礎』と題する歴史的な報告をおこなった。
首相は党を組織的、思想的に強化するうえで障害となっている否定的な現象をするどく批判し、いかなる試練にもうちかつことのできる鋼鉄の党を築くための多くの課題を提起した。
首相は党を組織的、思想的に強化するためには、党員の党派性を鍛練し、党隊列の思想意思および行動の統一を強めなければならないと強調した。
金日成首相は報告のなかで、党の統一団結を破壊しようとする分派分子の策動と分派主義の表現形態を全面的にあばき、分派分子と全党的に断固たたかうべきであると訴えながら、つぎのようにのべた。
「わが全党員は革命的な警戒心と党派性をさらに高め、こうした分派分子の行動をきびしく監視し、分派分子がわが党内で一歩も動けないようにしなければなりません。とくにアメリカ帝国主義武力侵略者と苛烈な戦争をおこなっている現在、われわれはこのような分派的行動をいささかもゆるすことはできません。

……もし、分派分子をそのままにしておけば、かれらが結局は敵のスパイになりさがるということをわれわれは深く肝に銘じなければなりません」

党隊列の統一団結を強化し、反分派闘争を強化するという金日成首相の方針は、党の戦闘力を高めるうえできわめて重要な意義をもつものであった。それは、党の唯一思想体系にもとづいた全党の統一団結を強化し、党隊列の純潔性を瞳のように守ることが、マルクス・レーニン主義党建設の根本問題の一つだからである。事実、労働者階級の党の威力はまさに戦闘的な団結力にあり、それは党隊列の思想意思の統一と行動の一致によってもたらされる。したがってマルクス・レーニン主義党は、隊列内から分派主義、あらゆる日和見主義を一掃せずして党の鋼鉄のような思想的統一と組織的団結を確固として守りぬくことはできないのである。

金日成首相は、党にとって瞳のようにたいせつな統一団結を守りぬくためには、党員の党派性を鍛練しなければならないとのべ、これを非常に重視した。

首相はつぎのようにのべた。

「党員の党派性を強め、自由主義的傾向と分派主義の残滓に反対してきびしくたたかわなければなりません」

首相は、党員の党派性を鍛練してはじめて、確固とした党的原則と高い政治的自覚にもとづいて党内の自由主義的傾向をなくし、分派分子をつまみだす全党的な思想闘争をおしすすめることができ、また、急速に成長した党の隊列に質的な強化を追いつかせることができると考えた。

このように金日成首相は、当時の党内の状況と党の組織構成状態を科学的に分析し、党員の党派性鍛練を重要な課題として提起しながら、党派性の本質、党派性の表現、党派性鍛練の方法について全面的な解答をあたえた。

「党派性を強化するということは、一人ひとりの労働党員が党にかぎりなく忠実であり、党活動に積極的であり、革命の利益と党の利益を自己の第一の生命と考え、個人の利益をこれに服従させ、いつ、どこで、いかなる条

件のもとでも党の利益と党の原則を固守し、いっさいの反党的で反革命的な思想と非妥協的にたたかい、党の組織生活をりっぱにおこない、党の規律を徹底的に守り、党と大衆との連係をたえず強めることを意味します」

首相が明らかにした党派性の科学的な定式化は、党建設にかんするマルクス・レーニン主義理論の発展にすぐれた貢献をなし、革命的党の党生活の規範において特出した位置を占めている。

首相は党派性鍛練の基本的な方法として、党の組織生活を強めることを提起し、党生活における民主主義的中央集権制の原則を徹底的に守ることを教えた。

さらにその方法として、批判と自己批判の武器を高くかかげることを強調した。

じつに、金日成首相が全面的に明らかにした党員の党派性鍛練にかんする諸方針は、党員の党派性、労働者階級性を高める綱領的な指針であった。

金日成首相は報告のなかで、党を強化するために組織活動を改善するとともに、教条主義、形式主義を克服し、思想教育活動を決定的に改善することを重要な問題として提起した。

首相はつぎのようにのべた。

「われわれは党内における思想教育活動を強化することによって、わが党員に明確な革命的展望をいだかせ、かれらがすべてを階級的に正しく分析し、革命の課題を正確に実践することのできるマルクス・レーニン主義者になるようにしなければなりません」

首相はとくに、教条主義、形式主義、民族虚無主義が思想教育活動においておよぼす重大な害毒をえぐりだし、思想教育活動の基本をマルクス・レーニン主義的革命思想で党員と勤労者たちを武装させることにおき、わが国の現実を深く研究すべきであると強調した。

金日成首相の歴史的な報告は、党を組織的、思想的に強化し、祖国解放戦争の勝利を早めるうえで、じつに巨大

な意義をもつ文献であった。この報告はまた党建設と革命の将来の発展においても、大きな歴史的な意義をもつものであつた。

総会が終わると全党員は、領袖が提起した課題を実践するための白熱的な討議に参加した。

この全党的な討議は、党員の党派性を鍛錬し、分派主義、自由主義的傾向を暴露、批判する強力な思想闘争の継続であった。

この過程で、まさにおどろくべき事実が判明した。それは、ながいあいだアメリカ帝国主義のスパイとして党と国家機関にもぐりこみ、謀略と殺人、破壊などの反国家的策動をつづけていた朴憲永、李承燁一味の罪状が白日のもとにさらされたのである。

かれらは、すでに解放前からアメリカ帝国主義のスパイにやとわれ、解放後にはアメリカ帝国主義の指示のもとに南朝鮮の党組織を破壊し、労働運動とパルチザン闘争をかい滅状態におとしいれてしまった。さらに北半部にはいったのちも、アメリカ帝国主義の忠実な手先として、ひきつづき反党分派的陰謀をすすめ、戦争の困難な時期に、党、国家および軍事機密を系統的にアメリカ諜報機関に提供していた。

一九五一年に粉砕された敵の「夏季攻勢」および「秋季攻勢」のときには、これに呼応して武装暴動をおこそうとし、アイゼンハワーが「新攻勢」を騒ぎたてたときも、敵の攻撃と並行して武装暴動をおこし、党と政府を転覆して朝鮮人民をアメリカ帝国主義者の植民地奴隷にしようと策動した。

こうした凶悪なスパイ一味が党内にかくれて策動していた条件のもとで、強敵アメリカ帝国主義を連続的にうちのめしていた金日成首相の偉大さは、まさにはかり知れないものであった。

金日成首相が導く朝鮮労働党の破壊をもくろんだひとにぎりにもみたぬ朴憲永一味の策動は、はじめからまったく不可能なことであり、妄想であった。数十年にわたって革命の暴風雨のなかをたたかいぬいてきた金日成首相を

党首にいただき、首相が育成した共産主義者の中核が隊列をかため、すべての党員が金日成首相のまわりにかたく団結した党、金日成首相の指導によって日を追ってますます強化されていくこの党を、朴憲永一味が破壊しようなどとは、それ自体がすでに笑止なことであった。

朴憲永一味は当然のむくいにしたがって、全党、全人民の糾弾の炎にやかれ、処断された。執拗にはびこっていたガンは根こそぎにされたのである。こうしてアメリカ帝国主義者は、突然、脳天に痛烈な一撃をうけ、大きくよろめいた。

じつに金日成首相の洞察力と予見性、問題解決のたくみさは非凡であった。

首相は党を強化し、反党反革命分子の影響を一掃する闘争をくりひろげながら、敵の攻撃を粉砕するたたかいに全人民、全人民軍を動員していった。

金日成首相はこの年の十二月二十四日に、朝鮮人民軍高級軍官会議をひらき、『人民軍を強化しよう』と題する重要な演説をおこなった。

首相は演説のなかでまず、「戦争はその本質において、特別な暴力手段によるある階級の政策の延長」であると規定し、戦争問題の全般にわたって天才的な解明をあたえた。

首相は、戦争の本質と戦争の原因について知ろうとするならば、まず支配階級が戦争に先だって実施した対内外政策と戦争政策を明らかにしなければならないと指摘しながら、戦争の性格をつぎのように定式化した。

「政策が帝国主義的なものであれば、その政策から生まれる戦争は帝国主義的侵略戦争であり、政策が民族解放的なものであるときには、すなわち人民の利益を守り、民族的抑圧に反対する人民の闘争をあらわしているときには、この戦争はまぎれもなく民族解放戦争であります」

金日成首相は戦争の性格からみて、戦争の形態には正義の戦争と不正義の戦争、先進階級の戦争と反動階級の戦

争、階級的および民族的抑圧からの解放をもたらすための戦争と、この抑圧を強めるための戦争があるとのべながら、それぞれの戦争の歴史的な役割についてこうのべた。

「反動的搾取階級の不正義の侵略戦争は、社会の発展をはばむものであります。不正義の戦争とは、世界の再分割のために販売市場と原料供給地と投資権をめぐって帝国主義国家間でたたかわれる戦争であり、勤労大衆の革命運動に反対し、民族的解放と国家的独立のためにたたかう植民地および従属国の人民に反対してブルジョアジーがおこなう戦争であります。

帝国主義侵略者にたいする人民の解放戦争は正義の戦争であります。正義の戦争は社会発展の利益に合致します。この戦争はいかなる形態ですすめられようとも、つねに社会の発展をはばむ反動階級とその統治機関を弱化あるいは完全に掃討し、被圧迫人民を資本主義的奴隷制度から解放し、植民地の人民を帝国主義の抑圧から解放し、世界のすべての人民の自主的国家と民族的発展のための条件をつくりだすのであります」

これが金日成首相の戦争にかんする理論であった。首相はこの理論を朝鮮戦争に適用し、朝鮮人民の偉大な祖国解放戦争が正義の戦争であること、したがってそれは偉大であることをいま一度明確に規定した。

つづけて首相は、朝鮮人民軍建軍の歴史とその不敗の力の源泉、その特性をかさねて明らかにし、戦争勝利の恒久的な要因にかんする全面的かつ具体的な分析をおこなった。

金日成首相は戦争の運命を決定する恒久的な諸要因のうち、まず第一に後方の強固さをあげた。それは強固な後方を、国家の軍事的威力と武装力の戦闘的機能およびその他の要因の基礎であるとみたからにほかならない。

たえず経済恐慌に見まわれ、死滅しつつある社会政治制度をもつ帝国主義国家は、社会主義諸国に反対する不正義の侵略戦争において強固な後方をもつことができず、したがってかれらは戦争に敗北せざるをえない。

しかし社会主義諸国は、制度そのものの優越性と党の活動によつて強固な階級的後方をもつことができる。さら

に社会主義諸国は、同じ立場にある兄弟諸国と世界の階級的兄弟からの強い支援をうけるために、その軍隊は戦争で強固な後方をもつことができる。首相は、これこそが正義の戦争をたたかっている人民軍と朝鮮人民の勝利を決定する要因であるとみたのである。

金日成首相はまた、人民軍の高い政治的、道徳的品性を戦争勝利の重要な恒久的要因の一つであるとみなした。首相は全将兵が正義の戦争の性格と目的を深く自覚し、戦争の目的と人民の利益との密接なむすびつきを正しく理解すること、これをうながす党の政治活動と戦闘における労働党員の犠牲的な模範などは、人民軍の政治的、道徳的品性をかぎりなく高め、戦闘で不撓不屈の英雄性とねばり強さ、戦闘力を生むものであると教えた。また、人民軍の政治的、道徳的品性は、かれらが世界平和を守るためにたたかっているという自覚からも必然的に高められるものであると指摘した。

このように金日成首相は、長期にわたる抗日武装闘争と祖国解放戦争の歴史的経験および世界各国の革命戦争の実践的経験を分析、総括して、戦争における政治的、思想的要素の役割を定式化したのである。

事実、革命の軍隊は必ずしもその数や武器の優秀さによって勝利したのではなかった。革命軍が数的にも、武器の優劣においても反革命軍にくらべて劣勢な場合が多かったにもかかわらず、それがつねに勝利できたのは、まさにこの政治的、思想的優越性にもとづくものであった。

日本帝国主義は、抗日遊撃隊を「大海の一滴」にすぎないといった。しかし最後に勝利したのは抗日遊撃隊であり、やぶれ去ったのは日本帝国主義侵略者であった。祖国解放戦争におけるアメリカ帝国主義の惨敗も、この例にもれなかった。

したがって首相は、この演説で人民軍の政治的、道徳的品性を高める問題に非常に重要な意義をあたえ、党の政治教育活動を強化しなければならないと教えた。

金日成首相は、戦争の運命を決定するもう一つの要因として師団の量と質の優劣をあげ、師団の量と質は武装力強化の基本であると教えた。首相はつぎのようにのべた。

「勝利をかちとるためのわが力量の優越性は確定的であり、量的および質的にすぐれた軍隊はつねに勝利するものであります。基本兵種をもった師団は自立的に戦術的課題を遂行することができるために、戦術的基本連合部隊となり、師団の質の優劣はその組織の科学性と戦闘威力、武器の構成と質、および将兵の訓練度にかかっています、それゆえに、各師団の量と質の優劣は、全軍隊の量と質の優劣をあらわすものであります」

首相は、戦争期間に人民軍の兵力が三倍にふえ、一九五二年には各歩兵師団の火力がその前年にくらべ一六〇パーセントに増強された事実を指摘しながら、それは今後ともさらに強化されるであろうとのべた。

首相は軍隊の質を規定するにあたって、火力とともに指揮官の役割を重要視した。

首相は、たたかいの過程ですぐれた指揮官が多く生まれた事実をあげ、これは戦争の勝利にきわめて重要な役割をはたすものであるとのべた。

さらにこの歴史的な演説は、緊張した情勢にそくして、軍隊内の政治活動の方向と敵の攻勢を撃破するための戦闘的方針を明らかにした。

金日成首相の歴史的な演説『人民軍を強化しよう』は、人民軍と朝鮮人民にいま一度勝利の確信をもたらした訴えであり、すべての力を戦争の終局的勝利にむかって動員するたたかいの旗じるしであり、マルクス・レーニン主義戦争理論と軍事理論の発展に大きく寄与した文献であった。

金日成首相はさらに一九五二年十二月三十日、全人民軍将兵にたいし、万端の戦闘準備をととのえ、敵の攻撃企図を防御戦線および海上において徹底的に粉砕し、祖国の寸土をも敵にわたしてはならないという命令をくだした。つづいて党中央委員会は、全党員に敵撃滅に総決起せよと訴える手紙をおくった。一方、首相は前線部隊を直

接たずね、将兵たちの士気を高めた。
領袖の命令にこたえ、前線と後方は一丸となって大せん滅戦を準備した。
朝鮮人民軍の全将兵は、敵が上陸作戦を強行するならば、一兵ものがさず海のなかに葬り去る決意を表明した。
軍隊だけではなかった。朝鮮人民のすべてが戦争の勝利をめざして生き、動き、たたかった。老人たちもつるはしを手に塹壕を掘り、主婦たちも土を背負って走った。革命はかれらの心臓のなかにあった。見るみるうちに前戦と海岸地帯は難攻不落の要塞にかわった。
一九五三年にはいると、アイゼンハワーはアメリカ第七艦隊のほとんどを東西の両海岸に出動させて上陸作戦のかまえをとり、前線と後方にたいし集中的な爆撃を開始した。一方、基本戦線においてもかれらは必死の攻撃をくわえてきた。
しかし、敵の攻撃は蟷螂（とうろう）の斧（おの）にひとしかった。人民軍は襲いかかる侵略者を容赦なくうちのめし、正面から挑んでその陣地をたたきつぶしてしまった。
人民軍と朝鮮人民は、完全武装をほどこして空高くそびえたつ泰山であった。泰山のいただきには、戦局を一手ににぎる鋼鉄の将帥金日成首相が眼光炯々として一敗地にまみれたアメリカ帝国主義侵略者を見おろしていた。
アメリカ帝国主義者は、あれほど大じかけに準備した「新攻勢」を深い挫折感にとらわれながら断念してしまった。
このように金日成首相は、朝鮮労働党を強化することによって内部の敵朴憲永スパイ一味を清算し、外敵アメリカ帝国主義を圧倒的に撃破した。まさに目のさめるような一刀両断であった。
これは金日成首相と朝鮮人民の偉大な勝利であった。ひとたびあらわした威容をもって手もくださず大敵を驚天

作戦をねる金日成首相

動地させた、そのような勝利であった。世界戦争史上に、これに似た前例がはたしてあったかどうか？　朝鮮人民はそうした例を知らない。アメリカ帝国主義がこうむった敗北は、それほど惨たんたるものであった。

一九五三年三月十五日付『ニューヨーク・タイムズ』紙さえも、朝鮮戦争における苦境を論評しながらこう嘆いた。

「われわれがすすむことのできる道で、危険でない道はない。われわれの勝利を保障できる道は一つもない」

日本のアメリカ研究家の一人は、つぎのようにかいた。

「戦争初期の北朝鮮軍の怒濤の進撃、仁川上陸後のソウルでの壮烈な防御抵抗および戦略的撤退の整然さ、二次にわたるバンフリート攻勢を破った陣地戦における頑強さ、休戦会談の開始後、地上戦における寸分のすきもない態勢など、北朝鮮軍の旺盛な士気を認め

ることは、アメリカの新聞においてさえも定説になっているのである」

朝鮮人民は敵の「新攻勢」の出端をくじいた勝利の感激をいだいて、朝鮮人民軍創建五周年を記念した。

この記念日をまえにした一九五三年二月七日、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会は、「抗日武装闘争および朝鮮人民の武装力である朝鮮人民軍の創建とその強化発展において特出した貢献をなし、米英帝国主義の武装侵略者に反対し、自由と独立を守護する朝鮮人民の正義の祖国解放戦争における卓越した指揮によって敵にせん滅的打撃をあたえ、赫々たる戦果を達成するうえで輝かしい貢献をなした朝鮮人民軍最高司令官金日成同志に、朝鮮民主主義人民共和国元帥の称号を授与するとともに元帥星を授与」する政令を発表した。

全朝鮮人民は、金日成元帥を領袖にいただく大きな幸福感にひたり、元帥を熱烈に祝福し、その健康と長寿を祈った。

戦線で敵を撃破した金日成首相は、停戦会談においてもアメリカ帝国主義者に強力な政治的打撃をあたえた。

戦線でさんざんな目にあったアメリカ帝国主義は、ふたたび停戦会談にひきだされ、捕虜処理問題において政治的、道徳的にきびしく糾弾された。

窮地に追いこまれたアメリカ帝国主義者は、もっとも卑劣で無道な蛮行をはたらきはじめた。狂ったかれらは細菌爆弾を投下し、病院と学校と幼稚園をナパーム弾で焼きはらい、貯水池を爆撃して田畑と農家を水びたしにするなど、非道な盲爆を平然とおこなった。アメリカ帝国主義こそ、まさに人間の皮をかぶったもっとも醜悪な殺人鬼であった。

ここにいたって金日成首相は、アメリカ帝国主義を最終的に葬るべく、全人民軍にたいし、すべての戦線において強力な反打撃戦を展開せよ、との命令をくだした。人民軍各部隊は、この命令をただちに実行に移した。

五月中旬から三次にわたって展開された反打撃戦において、人民軍部隊は全攻撃目標を占領し、敵にかい滅的打

高地で戦争勝利を祝う朝鮮人民軍の勇士たち

撃をあたえた。

とくに三五一高地攻略戦は、金日成首相の卓越した指導と朝鮮人民軍の威力をあますところなくしめしたたたかいであった。

敵は「たとえソウルをあけわたそうとも、三五一高地をわたすことはできない」と公言し、この戦線を「難攻不落の要塞」であり、「不撤退線」であると豪語していた。

しかし人民軍は砲百三十門の掩護のもとに、一個大隊の兵力でわずか十七分間でこの高地を完全に占領してしまった。人民軍の圧倒的な火力と猛烈な攻撃にさらされた敵は硫黄の炎につつまれ、ひとたまりもなくかい滅してしまったのである。

五月中旬から七月の中旬にかけ三次にわたって展開された人民軍各部隊の反打撃戦は、敵に致命的な損失をあたえ、広はんな地域を解放した。第三次の反打撃戦だけにおいても、敵は七万八千余の兵力を失った。朝鮮人民軍の力が圧倒的に強大であることが、ふたたびはっきりと証明された。

侵略者どもは、あまりのことに慄然とした。砲火にえぐられ絶望におちいった敵には、もはやあらそいをつづける余力

がなかった。無謀なたたかいをこれ以上つづければ、全面的に破滅するであろうことはかれら自身があまりにもよく知っていた。アメリカ帝国主義者のなかでもっとも狂悪で愚鈍な連中さえも、このことを火で身を焼くように痛く、はっきりと感じはじめていた。

アメリカ帝国主義は、朝鮮戦争に陸軍の三分の一、空軍の五分の一、太平洋艦隊の大部分を投入し、これにくわえて十五の追随国の軍隊と南朝鮮かいらい軍など、二百余万の大兵力とばく大な量の最新戦闘技術機材をつぎこみ、残忍無道な戦争方法と手段をもちいたが、そこでえたものは、まさに死と屍だけであった。侵略者はそのだれもが朝鮮戦争のすさまじい日々をふりかえり、戦慄におののいていた。

アメリカ帝国主義は朝鮮戦争をつうじて、米軍三十九万余をふくむ百九万三千余の兵力と一万二千余の航空機をはじめばく大な軍需機材を失った。これは、四年間におよんだ太平洋戦争でこうむった損失のおよそ二・三倍にあたる数である。

「常勝」を誇っていたアメリカ帝国主義は、偉大な金日成首相と朝鮮人民によって、その歴史上、最初の、もっとも悲惨な敗北をこうむったのである。傲慢このうえない態度で朝鮮戦争を挑発したアメリカ帝国主義は、いまや皮膚は焼けただれ、背骨までへし折られて星条旗に顔をうずめた。

一九五三年七月二十七日、アメリカ帝国主義は板門店にひきだされ、朝鮮民主主義人民共和国の旗のまえにひざを屈し、停戦協定に調印した。

停戦協定に調印した「国連軍」総司令官クラークは、つぎのように告白している。

「わたしは政府の指示を遂行することによって、勝利をえずして停戦協定に調印した史上最初の米軍司令官という不名誉な名をもつことになった。わたしは、すべてが失敗であったという感をいだいていた。わたしの先任者たちであるダグラス・マッカーサーとメード・リッジウェー将軍らも同感であったろうと思う」

前アメリカ国務長官マーシャルも、「神話はくだかれた。われわれは人びとが考えていたほど、それほど強大な国ではなかった」と告白し、上院議員マッカーシーもまた、「われわれは朝鮮で甚大な敗北をこうむった」と嘆いたのである。

朝鮮は勝利した。全世界が朝鮮に熱烈な歓呼をおくった。金日成首相の名と朝鮮ということばは、勝利と平和、英雄と栄光の代名詞となって全世界にひびきわたった。朝鮮は世界の中心であるかのように思われ、地球も朝鮮を中心にまわっているようであった。

三年にわたって天地を振動させた砲声がやみ、急におとずれた厳粛な静寂、その静けさのなかで、戦線の全人民軍と後方の全人民は無限の誇りを胸に、勝利の組織者、栄光の指導者である金日成首相に歓呼をおくった。

朝鮮と世界の熱狂的な歓呼のなかで七月二十八日、最高人民会議常任委員会は、卓越した戦略戦術をもって祖国

Negotiating with the Russians

In May, 1952, I was appointed Commander of the United Natio[illegible] Forces, representing seventeen countries, fighting Communist aggression in Korea. Fifteen months later I signed a truce that suspended and—I devoutly hope—ended the fighting on that unhappy peninsula. For me it also marked the end of forty years of military service. It capped my career, but it was a cap without a feather in it. In carrying out the instructions of my government, I gained the [illegible]table [illegible]

朝鮮戦争でアメリカ帝国主義の惨敗を
自認した殺人将軍クラークの告白書

解放戦争を勝利に導き、朝鮮人民と人民軍に輝かしい栄光をもたらした金日成首相に、朝鮮民主主義人民共和国英雄称号とともに国旗勲章第一級と金星メダルを授与することにかんする政令を発展した。

同じ日、金日成首相は放送演説をつうじて祖国解放戦争の偉大な勝利を分析し、全朝鮮人民に熱烈な祝賀のあいさつをおくった。

金日成首相はこうのべた。

「わが民族は五千年におよぶ自己の歴史のうえで、外来侵略者にたいして苛烈な英雄的闘争をくりひろげたのは一度や二度ではありませんでした。

しかし、このたびの祖国解放戦争のように、わが人民の団結した力で強大な敵に甚大な打撃をあたえて輝かしい勝利をかちとったのははじめてであり、こんにちのようにわが人民の国際的威信が高められ、全世界の人民から支持と同情をうけたことはかつて一度もありませんでした」

この日十二時、ピョンヤンでは祖国解放戦争の勝利を祝う盛大な群衆大会がひらかれた。

定刻十二時、主席壇に姿を見せた金日成首相は、会場をうめつくした大会参加者たちの熱狂的な歓呼のなかで、全人民におくる祝賀演説をおこなった。

演説につづいて奏された荘厳な『愛国歌』の調べ、英雄的な国土に大きくこだまし世界に勝利をつげる祝砲の轟音、ピョンヤンの鐘の壮快なひびき――朝鮮人民の勝利の祝典はいやがうえにも厳粛なふんいきにつつまれ、未来への希望にいろどられていった。

人びとは感激をおさえきれず、民族的自負心をいだいて、主席壇にたつ金日成首相のまえを一つの大きな流れとなってすすんだ。歓喜の示威行進がはじまったのである。

一人ひとりがすべて英雄であるかれら、砲火に黒ずんだ顔によろこびをかくしきれないかれら――、はげしくゆ

れ動き大きくうねる示威者たちの波のうえで、金日成首相はくり返し手をふりながら、太陽のごとき微笑をおくっていた。

それは壮烈な激戦の日々にも翳ることのなかった三千里祖国の微笑、勝利の微笑であった。

8　卓越した指導と偉大な軍事戦略の勝利

朝鮮は祖国解放戦争に勝利した。この歴史的な勝利は、いはゆる「常勝」と膨脹を誇っていたアメリカ帝国主義のブルジョア軍事戦略にたいする金日成首相の革命的で主体的な軍事戦略の勝利であり、強盗的な侵略軍と帝国主義反動勢力にたいする革命軍隊と革命的人民の勝利であった。

この戦争は、戦争史上まれにみるもっとも激烈な戦争であっただけに、その一つ一つの勝利は、物的、精神的な総力を動員した決死的なたたかいによってのみえられたものであった。

帝国主義陣営の主力であるアメリカ帝国主義は、その軍事力の大部分と十五の追随国の軍隊および李承晩かいらい軍などの大兵力、国家予算の多くをさいた軍事費、七千三百万トン以上の軍需物資、これらすべてを朝鮮戦争にそそぎこみ、残忍非道な戦争方法と手段をすべてもちいて朝鮮人民に襲いかかった。アメリカ帝国主義は朝鮮人民をみな殺しにしようと、朝鮮の都市と農村をのこらず破壊し、細菌兵器までも大々的に動員し、無数のナパーム弾で老人、子どもをとわず焼き殺した。国連の旗を盗用したアメリカ帝国主義侵略軍の将軍らは、口をひらくたびに、「警察行動によって平和を守る」のだと騒ぎたてながら、そのじつ、血ぬられた手で平和を乱し、ヒトラー一味以上の残虐行為をはたらいたのである。

しかしアメリカ帝国主義者は、朝鮮人民を屈服させることも、朝鮮民主主義人民共和国を征服することもできな

かった。

朝鮮戦争において全世界がはっきり見たものは、朝鮮人民の世界史的な勝利とアメリカ帝国主義者の連続的な惨敗であり、アメリカ帝国主義の野獣性と戦争エスカレーションの規模はアメリカ帝国主義がこうむった敗北の大きさに正比例したという、おどろくべき真実であった。

アメリカ帝国主義がこうむったのは、たんに軍事的な惨敗だけではなかった。全世界がアメリカ帝国主義に「野蛮」、「野獣」の烙印をおし、唾棄した。その追随者たちさえも、アメリカ帝国主義の差別待遇と横暴な行為、敗戦の責任転嫁と「強大」なアメリカ帝国主義にまつわる「神話」の破綻、アメリカ帝国主義の侵略的性格から生まれた内部矛盾の激化などによって、ついには主人に見きりをつけ、最後的に背をむけてしまった。

こうしてアメリカ帝国主義は、軍事的惨敗によって満身創痍となり、政治的、道徳的惨敗によって歴史の歯車におしつぶされてしまった。

反面、朝鮮人民は最大の栄光につつまれ、世界の人民の強い愛と深い同情の対象となった。

祖国解放戦争において朝鮮人民が達成した勝利はなにか？　それは、じつにはかり知れないほど大きなものであるが、ここにその意義を要約してみれば、つぎのようにいうことができる。

第一に、朝鮮人民と朝鮮人民軍は、偉大な金日成首相の指導のもとに栄えある祖国―朝鮮民主主義人民共和国を侵略者から守り、祖国の自由と独立と人民民主主義制度を守りぬいた。

金日成首相はつぎのようにのべた。

「祖国―、それはわが人民にとってもっとも貴重なものであります。わが朝鮮人民はその英雄的な闘争によって、もっとも貴重なわが祖国―朝鮮民主主義人民共和国を帝国主義武力侵犯者の侵害から守りぬきました」

これは、朝鮮の革命の歴史とその全成果を守りぬき、現在のみならず、これからむかえるべき革命の勝利と新しい

世代の自由と繁栄を守りぬいたことを意味する。

第二に、朝鮮民主主義人民共和国の地位と権威が非常に高まった。朝鮮は厳然たる主権国家として、世界政治の舞台で、世界平和、とくにアジアの平和の強力なとりでであることが確認され、朝鮮人民は世界の人民から永遠に賞賛される「英雄的人民」、「熱烈な平和の闘士」となり、朝鮮労働党はもっとも革命的な、戦闘的な党として世界革命運動と労働運動の栄誉ある突撃隊とよばれるようになった。

第三に、祖国解放戦争の過程をつうじて、共和国北半部の人民民主主義制度がさらに強化発展し、人民の政治的、思想的統一がはるかに強まった。また、たたかいのなかで、人民、党、軍隊、政権機関、社会団体とその活動家たちがきたえぬかれ、どんなに困難な環境のもとでも確信をもって前進することのできるゆたかな経験をつんだ。

第四に、朝鮮人民と朝鮮人民軍は、強敵アメリカ帝国主義を撃破し、その脆弱性と野獣性を全世界に暴露することによって、平和と民主主義、自由と独立のためにたたかう進歩的人民の前進運動に大きなはげましをあたえた。アメリカ帝国主義は、これを優に撃破することができるばかりでなく、必ず撃破しなければならないということの一つの教訓だけをとっても、朝鮮戦争は大きな世界史的意義をもつものであった。

第五に、朝鮮人民と朝鮮人民軍は、社会主義陣営の東方の哨所を栄誉をもって守りぬき、世界を第三次世界大戦に追いこもうとしたアメリカ帝国主義の冒険を破綻させ、人類の安全を守りぬいた。

これについて、金日成首相はこうのべている。

「われわれは、アメリカ侵略者の侵攻を勇敢に阻止することによって、朝鮮人民が第三次世界大戦を防止する偉業に多大の寄与をなしたことを誇りに思っている。わが人民のゆるぎない強靱さによって、アメリカ合衆国は朝鮮を、中華人民共和国とソ連を攻撃するための軍事戦略基地にかえることができなかった」

以上のような巨大な意義をもつ祖国解放戦争における偉大な勝利は、革命の参謀部であり、洗練された組織者、

指導者である朝鮮労働党が朝鮮人民を指導したからこそ達成されたのである。しかし、朝鮮労働党を偉大な金日成首相が指導しなかったならば、このような勝利は予想さえできなかったであろう。

じつに、金日成首相は、党中央委員会委員長として、内閣首相として、軍事委員会委員長として、朝鮮人民軍最高司令官として、戦争のすべての重荷を一身にになない、卓越した指導と天才的な軍事戦略によって朝鮮人民と人民軍を勝利に導いたのであった。

金日成首相は、卓越した指導と軍事戦略によってアメリカ帝国主義にうちかつことにより、すべての朝鮮人民のかぎりない尊敬と賞賛をうけ、進歩と正義を愛するすべての人類があおぎみる反帝反米闘争の偉大な指導者、正義と平和の守護者となった。

朝鮮戦争の過程とその結果は、金日成首相が発揮した主体的な指導芸術の創造的な威力を感動的に見せてくれたし、首相の指導をうける朝鮮人民は、いかなる難局や風波のなかでも自己の活路を切りひらいていくことができるということをはっきりしめしてくれた。逆に帝国主義の政治と戦略戦術は、それが反動的であり、反人民的であるがゆえに腐り切って無能であり、したがってそれは、もはやどろ沼にすいこまれてゆくものの最後のあがきであるということをはっきり見せてくれた。

戦争をおこなうとき、一般的にブルジョア国家の支配者たちは、人民にたいする弾圧と搾取をいちだんと強めながら軍事活動に熱中するものである。朝鮮戦争の期間のアメリカ帝国主義の支配者もこの例にもれなかった。かれらが信じ、そしてふりかざしたものは、ただ数と技術と野獣の力だけであった。

しかし金日成首相は、それとは逆に、戦争はたんなる軍事活動ではないとみて、それを激烈な政治闘争、革命闘争としてたたかった。首相は、武器よりも武器をもった人間の心と思想を重視し、正義のたたかいにたいする信念に燃える闘士の手ににぎられた武器だけが、勝利をかちとる力であると確信していた。したがって首相は、侵略者

の軍事的優勢を、朝鮮人民と人民軍の政治的、思想的優越性をもって撃破するという独創的な立場を堅持し、戦争がはげしくなり長期化すればするほど、党を強化し、軍隊と人民にたいする政治思想教育を徹底的に強めた。首相は、全国が戦火におおわれていた日々にも、党をより強力な大衆的政党に発展させ、党、軍隊、人民を統一した鋼鉄の革命力量として組織することに成功した。

巨大な資本と戦争手段をもったアメリカ帝国主義は、戦争が長期化するにつれて力を失い、士気をおとし、あえいだ。

だが、これにくらべて小さな国である朝鮮は、その物的、精神的力量がますます強化され、侵略者を見おろすようになり、ついにはかれらをみごとに屈服させた。

このようなおどろくべき真実は、金日成首相の政治的手腕と指導が、創造と革新にみちた偉大な革命の芸術であることを雄弁に物語っている。

金日成首相は、主体的立場と自力更生の革命的原則にもとづいて、朝鮮人民と人民軍を熱烈な革命闘士の大集団に育てあげた。金日成首相は朝鮮人民軍を敵の侵略から党と祖国を死守し、社会主義の獲得物を守りぬく崇高な精神と、熱烈な社会主義的愛国思想で教育し、だれもが抗日遊撃隊員のように英雄的にたたかうように教育し、はげました。

したがって人民軍将兵は、抗日遊撃隊員のように、領袖と祖国のために英雄的に、勇敢に、頑強に、大胆にたたかう模範を全世界にしめした。鮮血にそまった洛東江戦線の砲火のなかで、試練にみちた戦略的後退の途上で、敵の背後での困難なたたかいにおいて、燃える祖国の高地で、不死身のようにたたかった人民軍将兵の熱い心は、つねに領袖のもとに走り、祖国の山河をいだいていた。

これはアメリカ帝国主義侵略者の野獣性と略奪性、冒険的なあがき、絶望と恐怖心とは、まさに水と油の対照を

なしていた。これは、アメリカ帝国主義を連続的な敗北に追いこんだおもな要因の一つであった。

金日成首相はまた、熱烈な革命闘士に育てあげた人民軍を完全に主体的で、天才的な戦略戦術をもってみちびくことにより、各戦闘と戦争の全過程において圧倒的な勝利をかちとった。

祖国解放戦争の全期間は、抗日武装闘争の時期に金日成将軍が日本帝国主義の大軍を自由自在に撃破した千変万化、神出鬼没の戦略戦術を現代戦に適用して、アメリカ帝国主義侵略軍を撃破していった過程であった。

首相は、抗日武装闘争の時期に創造した、奇襲戦、誘引戦、埋伏戦、都市進攻戦、夜襲戦、遭遇戦、防御戦、反包囲戦などをはじめ、数多くの戦闘形式と、敵の量的、技術的優勢を思想的優越性と戦術的優勢によって撃破する戦術、――ときには能動的に敵の弱点を助長してつねに戦闘の主導権をにぎり、味方の力量を最大限に保存しつつ多数の敵を消滅する戦術などを、現代戦の要求と朝鮮の地理的条件にそくして創造的に発展させた。首相は激動する軍事情勢をつねに正確に判断して、適時にそれにそくした戦略戦術的方針と戦闘形式および戦法を具体的にしめした。それればかりでなく、戦争全般に画期的な転換をもたらした主要な戦闘をみずから陣頭で指揮し、そのつど敵に致命的な打撃をあたえた。

戦争の過程で首相は、多くの天才的な戦略戦術を創造し、敵を恐怖と戦慄に追いこんだ。開戦時における敵の奇襲攻撃にたいするときを移さぬ全面的な反攻撃、大部隊による第二戦線の組織、その第二戦線と基本戦線との協同による大包囲作戦、要塞化した坑道を拠点とする大部隊の陣地防御戦、敵の優勢な空軍力を撃破した飛行機狩り班運動と狙撃兵の活用などは戦史に前例のないことであり、首相が朝鮮戦争の客観的要求を集中的に反映させて創造したもっとも優れた戦略戦術であった。それだけにこれらは、マルクス・レーニン主義軍事科学の発展に大きく貢献したのである。このほかにも、主打撃方向の正確な設定、各兵種間の有機的な協同作戦、山岳戦における砲兵火力の集中的な利用、強力な海岸防御組織、襲撃班および遊動砲の活用、前線と後方の統一性の保障、軍民一致、官兵

一致の組織化など、首相が戦争期間に創造し活用した戦略戦術と方針は枚挙にいとまがないほどである。

首相が創造したこれらの戦略戦術と方針は、首相の指導する朝鮮労働党によって教育された朝鮮人民と人民軍の自力更生の革命精神および大衆的英雄主義との結合によって、ますます威力あるものとなった。

金日成首相はその卓越した軍事戦略により、緒戦の段階においては、人民軍をして敵の不意うち攻撃にたいする即時かつ全面的な反攻撃で、開戦わずか三日にしてソウルを解放し、二か月後には南朝鮮の領土と人口の九〇パーセント以上を解放させた。戦略的後退期には、敵の主力を牽制しながらその背後に第二戦線を組織し、敵を前後から挾撃してたたき、一挙にソウルの南まで追いはらった。

また兵力を増強した基本戦線の敵が東西両海岸からの上陸作戦に呼応して攻勢にでる動きを見せるや、永久築城の陣地に依拠した積極的な陣地防御戦によって敵を決定的な敗北に追いこんでいった。それだけではない。戦線においては敵の大軍を撃滅し、停戦会談をつうじてはアメリカ帝国主義侵略者に強烈な政治的打撃をくわえ、アメリカ帝国主義の追随国兵力の増強にたいしては、社会主義陣営をはじめ全世界の反帝勢力との強力な団結をもってこれにこたえた。

じつに祖国解放戦争における朝鮮人民の歴史的勝利は、金日成首相の偉大な政治的指導と天才的軍事戦略の勝利であり、その主体思想の輝かしい勝利であった。

祖国解放戦争における歴史的勝利は、卓越した領袖とマルクス・レーニン主義党の指導のもとに、その運命をみずからがにぎり、祖国の自由と独立と進歩のためにたちあがった人民は、いかなる力をもってしても征服できないということをはっきりとしめした。それはまた、戦争勝利の決定的要因が武器や技術の優位にあるのではなく、自己の偉業の正当性を自覚してかたく結束した人民大衆の力にあるということを実証した。

アメリカ帝国主義は敗北した。

かれらは金日成首相と朝鮮人民に挑戦することによって、「勝利」だけを誇ってきたそのながい侵略戦争の歴史において、はじめてとりかえしのつかない惨敗をこおむった。数多くの国々の政府を転覆し、人民を殺りくし、隷属化してきたアメリカ帝国主義、破壊と略奪の道をひた走り、数億万人民の血涙を飽食して肥え太ってきたアメリカ帝国主義は、ついに朝鮮においておそるべき雷火をあびてたおれた。

傲慢にひるがえっていた星条旗は、いやすすべなきかれらの傷口をおおう旗になってしまった。かれらの空には黄昏がせまり、永遠になだらかであることを誇っていた「前途」は、急にけわしい下り坂にかわってしまった。

全世界が朝鮮人民の偉大な勝利を見て驚嘆し、歓声をあげた。世界の人民は、金日成首相をあおぎみて勇気をえ、帝国主義の鉄鎖につながれてきた人民たちは、反帝闘争の旗を高くかかげてたちあがった。それまでアメリカ帝国主義にたいして幻想をいだいていた人びとは、その侵略的で略奪的な本質をはっきりと知り、アメリカ帝国主義にたいしては大国だけがたたかうことができると考えていた諸国人民は、小さな国でもりっぱにアメリカ帝国主義とたたかい、勝利することができるという確信をもつようになった。

事実、アメリカ帝国主義者が侵略の魔手をのばしている世界の各地で、革命的人民が強力な反米闘争をくりひろげるようになり、武装した侵略者には武装をもってたたかう民族解放闘争が世界情勢のすう勢を決するようになった。

世界の革命家と進歩的人民は、こんにち、かぎりない自負心をいだいて、金日成首相のつぎのことばを思いおこしている。

「朝鮮戦争において、アメリカ帝国主義者はアメリカ史上、はじめて悲惨な軍事的敗北をこうむりました。これは、帝国主義が下り坂を転落しはじめたことを意味するのであります。アメリカ帝国主義者は、この戦争で負った大きな傷をいやすことができぬまま、世界の革命的人民からひきつづき新しい打撃をうけており、いまやいっそう

深い滅亡のふちにおちこんでゆきつつあります」

敗北したアメリカ帝国主義は、南朝鮮にひきつづきいすわり牙をといでいる。しかし、百戦百勝の鋼鉄の統帥者である金日成首相の指導をうける英雄的朝鮮人民は、結局かれらを生かしてはおかぬであろう。朝鮮でアメリカ帝国主義者を待っているものは、かれらの完全な敗北だけである。

第五章　すべてを戦後人民経済の復旧と発展のために

1　社会主義基礎建設の独創的路線

砲煙が深くたちこめていた大地に平和がおとずれた。しかし、決死のたたかいをつうじて勝利の日をむかえた人民は、爆音とかん声のうずまく戦場のふんいきから、いまだにさめきれないでいた。思えば、血を流してかちとった勝利と停戦は、まことに貴重なものであった。

しかし停戦は、完全な平和を意味するものではなかった。そのため一部では、誤った考えがあらわれてきた。

金日成首相は停戦とかんれんしておこりうる偏向を予測し、ことあるたびに革命的な立場を明らかにした。首相は、停戦が完全な平和でないことから、戦争の再発ばかりを気にして経済建設をしても無駄であるかのように考える傾向、また反対に、戦争は二度とおこらず完全な平和が到来したと見て満足し、心をゆるめ、安逸に流れたりすることはいずれもまちがいであると指摘し、戦時の緊張をゆるめず、共和国北半部の革命的民主基地をさらに強化するため、全力をかたむけなければならないと強調した。

これは、停戦にはどのように対処すべきか、停戦後なにをなすべきかという問題を規定するうえで、もっとも革命的で、もっとも正当な立場をしめしたものであった。

首相は、停戦でかちえた貴重な時間を最大限に利用して社会主義革命と社会主義建設を急速におしすすめ、平和をより強固なものにして、祖国統一の歴史的偉業を達成するための確固とした土台を築きあげていくべきであると考えた。

三年余にわたり、祖国の運命を一身にになってたたかってきた金日成首相には、勝利のよろこびにひたる平穏な時間も休息もなかった。首相の視線は、無残に破壊された祖国の大地にくまなくそそがれていた。傷は深く、被害は想像を絶していた。

街路は破壊され、村は焼きつくされた。廃墟と化した工場の煙突には、かささぎが巣をつくっていた。八千七百余りの工場と数多くの企業所、文化施設が爆撃によってことごとく破壊された。電力、燃料、金属、化学など、重工業部門の被害はもっともひどかった。軽工業、農業、手工業および個人商工業もあますところなく破壊され、人民の生活は困難をきわめた。

アメリカ帝国主義侵略者は、「朝鮮は百年かかっても、二度とたちあがれまい」と公言してはばからなかった。

歴史は、ふたたび朝鮮人民にきびしい試練を課した。

人民は建設と新しい生活にむかってすすみはじめた。だが、なにからどうはじめていいのかわからなかった。れんが一枚、セメント一袋、一塊の鉄を生産する設備さえなかったのである。

しかし、この難局は是が非でも突破しなければならなかった。それは革命と民族の運命にかんする問題であり、国家百年の大計を左右する問題であった。

朝鮮人民は、みずからの領袖を信じていた。金日成首相が必ず破壊された人民経済を復旧し、人民生活を再建する革命的な路線と決定的な対策を講ずるであろうことを信じて疑わなかった。

朝鮮人民の期待と信頼は正しかった。

金日成首相は、すでに未来を見つめていた。人民と領土があり、党と人民政権があるかぎり、新しい生活は必ず切りひらけるという確信にみちていた。つねに遠い将来を見とおして構想をたてる金日成首相は、すでに停戦が成立するまえから戦後復旧の大設計図を準備していた。

首相は朝鮮革命の基本任務を、アメリカ帝国主義侵略勢力とその同盟者である南朝鮮の地主、買弁資本家、親日親米派、民族反逆者を打倒し、南朝鮮の人民を帝国主義と封建的隷属から解放することによって、祖国の統一と完全な民族的独立をたたかいとることであると規定した。そしてこの任務を達成するには、なによりも朝鮮革命の源泉地である共和国北半部の革命基地を政治的、経済的、軍事的にいっそう強化しなければならず、そのためには、社会主義革命と社会主義建設を全面的におしすすめなければならないと考えた。

これについて、金日成首相は後日つぎのようにのべた。

「わが党はすでに、戦後復旧の時期に北半部の社会経済発展の合法則的要求と朝鮮革命の基本任務から出発して、共和国北半部における社会主義基礎建設のための総体的課題を提起しました。それは人民経済のすべての分野で小商品経済と資本主義経済を社会主義的に改造し、社会主義経済形態を拡大して生産力を復旧し、それをさらに高め、国の自立的経済土台をしっかり築きながら人民生活を早く改善することにありました」

首相が指摘したように、社会主義の基礎建設とは、生産関係の面では小商品経済形態と資本主義経済形態を社会主義経済形態にかえて、社会主義的生産関係の唯一的支配を確立することであり、生産力の面では自立経済の土台を築くことであった。すなわち、生産関係と生産力の二つの面で、過去の世紀的たちおくれと古い社会の残滓を一掃し、先進的な社会主義社会を建設することであった。

社会主義建設の決定的な段階である社会主義基礎建設の課題は、きわめて高い革命的創意性と練達した戦略的指導を必要とする革命課題であった。まして、かつてたちおくれた植民地封建社会であったことと、戦争によるひど

い破壊がかさなりあった条件のもとで社会主義基礎建設の課題を遂行するということは、ともに、かつてだれも歩んだことのない新しい道の開拓とならざるをえなかった。

しかし金日成首相は、ひどく破壊された経済を早急にたてなおし、革命基地をしっかりとかためるためには、まず社会主義基礎建設の課題をはたさなければならないと確信した。

革命の基地を強固にするためには、工業と農業生産力を急速に発展させ、自立的民族経済の土台を築かなければならなかった。このことなしには、国の経済力を強め、それにもとづいて軍事力をさらに強化し、人民生活を早く改善することは不可能であった。またそうするためには、生産力の発展をさまたげる農村の個人農経理を協同化していかなければならず、都市の資本主義的要素を一掃しなくてはならなかった。

首相は、全国が砲煙につつまれた戦争と激動する全戦線を指揮しながらも、明日にそなえて、廃墟と化した国土を輝かしい社会主義強国に一新させる大設計図を綿密に描いていたのである。

首相は戦火のさなかに地下工場を建て、戦後の建設を構想し、原形すら失われた工場をたずね、労働者とひざをまじえては復旧建設について話しあった。また科学者や設計家をまねいては雄大な都市設計図、工場設計図の作成を指示し、敵機の爆音がなりやまぬ夜道を歩きながらも農業協同化の方法を考え、作戦地図をひろげるときも、卓越した戦略戦術をねるばかりでなく、大自然改造計画を構想していた。人の寝しずまった深夜にも、人が休暇をたのしむ祭日にも、首相は休むことなく祖国の繁栄と人民のしあわせのみを思い、戦後の人民経済復旧発展計画を丹念に作成していたのである。

アメリカ帝国主義者をうちやぶった金日成首相は、停戦になるや、疲労をいやすいとまもなく、砲火のなかで準備した設計図を手に、真っ先に人民のなかへ、工場や農村へとはいっていった。

砲煙がまだ消えやらず、戦車や大砲もまだ砂ぼこりをかぶったままであった停戦の翌日、首相は平安南道の江南(ガンナム)

れんが工場をたずね、復旧建設に必要なれんがを大量に生産しなければならないと労働者に訴え、その翌朝には、人民に寒い思いをさせまいという一念から、ピョンヤン紡績工場をおとずれたのである。

工場は無残に破壊されていた。首相は、復旧期間を五年間と見つもっていた紡績工場被害状況調査団の報告をき終わると、つぎのように語った。

「紡績工場一つの復旧に五年も要するならば、戦争で破壊されたものを全部復旧するには数十年もかかることになる。わたしは二か月もあれば復旧できると思う。なるほど、一般的には、それは五年かかる作業であるかも知れない。しかし、工場の復旧を戦闘だと思ってとりくめば、二か月できっとできるはずだ」

復旧は戦闘である、といったこのことばのなかには、のちに全世界を驚嘆させたすべての奇跡が約束されていたのである。

停戦後三日目の七月二十九日、首相は冶金基地である黄海製鉄所をたずねた。

首相訪問の知らせがつたわると、廃墟と雑草しか見えない工場に、労働者とその家族がかん声をあげながら集まってきた。傷ついた子どもたちにつきそっていた母親たちも、子どもを背負って走ってきた。かれらはその一人ひとりがひたすら首相にしたがい、一面火と化した国土を守り、不死鳥のようにたたかい、そして勝利した誇りある人たちであった。労働者の歓呼にこたえる首相の顔にはよろこびがあふれていた。

首相は労働者一人ひとりの手をとり、情愛にみちたあふれた声でいった。

「みなさん、よく生きていてくれました！　戦争中はほんとうにご苦労でした。わたしはいつもみなさんのことが忘れられませんでした。けがはありませんでしたか？」

労働者たちは目がしらを熱くしていた。

首相は汗をぬぐおうともせず、製鉄所構内に足をはこんだ。いや、そこには製鉄所はなかった。目に映るのは胸

をえぐるような灰燼と瓦礫の山だけであった。三年のあいだヤンキーどもが爆弾を投下しつづけた製鉄所は、見るかげもなかった。それはことばではいいつくせないアメリカ帝国主義の残忍さと野獣性を、声を大にして告発しているかのようであった。

真っ赤にさびついた鉄骨、飴のようにまがった穴だらけの鉄管、焼けただれてかげをとどめぬ電線、野鳥が鳴く雑草のしげみ――、どれも正視にたえられないようなものばかりであった。

首相は鉄鋼労働者のまえにたって、生い茂る雑草をかきわけながら瓦礫と鉄くずで足の踏み場もない工場へ歩いていった。

はげしい憤りのためであろうか、首相の表情はきびしく、かたくむすんだ口からはことばもでなかった。ときおり手にした鉄の棒で灰をかきわけたり、赤さびた鉄骨をたたきながら、なにごとかを考えているようであった。

平炉職場から、造鋼、薄板、耐火物、溶鉱炉などの職場のあとを見てまわり、動力部の裏手にある小高い丘にのぼった。しばらく無言で荒涼とした工場の構内を見おろしていた首相は、やがて力をこめて労働者たちにむかって話しはじめた。

「みなさん、力をおとしてはいけません。わたしたちは、アメリカ帝国主義者をうちたおして勝利したではありませんか。わたしたちは、これからも勝利します。すべてが破壊されはしたが、それを復旧するだけの力は十分にあります。

わたしたちには、英雄的な人民がいます、復旧の予備も少なくありません。ヤンキーどもはなにもかも破壊しようとやっきとなったが、わたしたちには重工業の基礎がのこっており、美しい国土には金、銀、銅、鉄が無尽蔵にねむっています。……わたしたちがこれらをうまく利用すれば、りっぱに人民経済を復旧させることができるのです」

首相は、ときおり工場の構内に目をやりながら、さらに力をこめてつづけた。

「人民経済を復旧するには、重工業からとりくまねばならず、黄海製鉄所を復旧するには、平炉からとりくまなければなりません。こうしてこそ、人民経済の復旧に必要な鉄をうることができるのです。破壊された人民経済を復旧し、わが国を富強にするには他に道はありません。重工業を発展させてこそ、軽工業と農業もそれにつれて発展するのです。そうなれば、わが国の経済的土台をしっかりとかためることができるし、人民生活も早く改善することができます。重工業のうちでも製鋼、製鉄が一番たいせつです。だからこそ、すぐにもこの黄海製鉄所を復旧して鉄を大々的につくりだそうというのです」

首相のこの綱領的な教えは、どこから手をつければいいのか途方にくれていた労働者たちの心を強くとらえた。一人の労働者が興奮をおさえきれず、首相のまえにすすみでて、工場も暮らしも自分たちの手でりっぱにたてなおして見せます、と誓いをのべた。

確信にみちたこのひとことから、たのもしい朝鮮の労働者階級の決意をよみとった首相は、明るい表情をうかべながら、これにこたえていった

「そうです、そうでなければいけません。アメリカ帝国主義が破壊したあの平炉のあとには、それ以上の平炉を築き、焼かれた工場はれんがづくりで再建し、復旧建設においても、ヤンキーどもに朝鮮人民の本領をはっきりと見せてやるのです」

首相が労働者たちの胸にともした革命の火種は、大きな炎となって全朝鮮人民を復旧建設事業へとふるいたたせた。

つづいて八月三日、首相は降仙製鋼所をたずねて労働者たちを激励し、復旧建設の方途をしめした。

一週間にわたる精力的な現地指導をつうじて、すべての問題を現地でとらえ、人民を復旧建設へと組織していっ

た首相は、八月五日、朝鮮労働党中央委員会第九回総会を招集した。

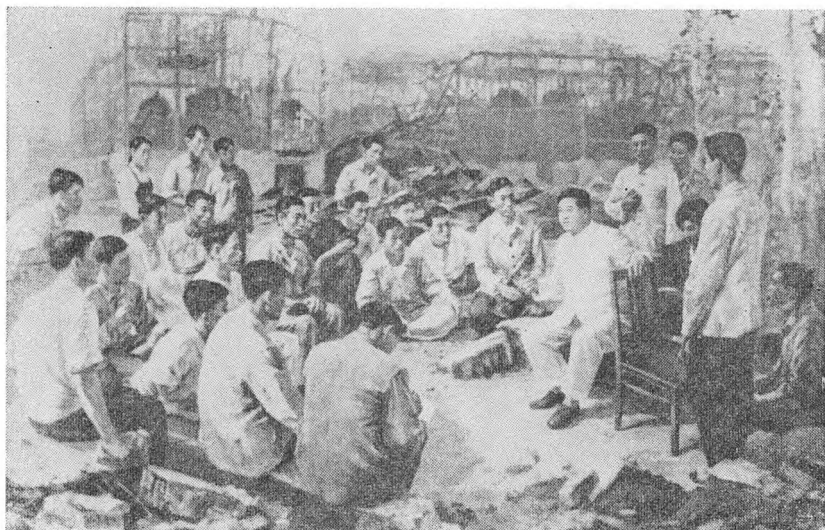
各地から集まってきた党中央委員と傍聴者たちが、ピョンヤンについてまずおどろいたのは、一千余の座席をもった豪壮で美しい大会場を見たときであった。かれらは、この大きな建物が爆撃のなかで無傷のままのこったのを不思議に思った。そして、この建物が戦後わずか一週間で新築されたものであるときいたとき、いい知れぬ感動につつまれた。常識では考えられないことであった。だがこれは事実であり、現実であった。わずか一週間でみごとな大会議場を建設することができたのは、首相の緻密な組織力と科学的予見性のたまものであった。

金日成首相は、戦争のさなかにすでに勝利を確信し、戦後人民経済復旧発展の設計図を準備すると同時に、その設計図を討議する大会議場の設計を指示したのであった。首相は、敵の爆撃をうけても、さして大きな被害をこうむらないように、壁だけを先に建てさせた。壁さえのこっていれば屋根をつくり、内部施設をととのえるのに、数日間もあれば十分であると判断したのである。首相の判断は的中した。停戦の日まで壁はくずされなかった。そこで首相は、のこりの工程を短時間内に完遂するよう指示した。昼夜兼行の作業がつづけられ、会議場は予定どおりに竣工し、会議参加者たちの驚嘆の的となったのである。

人びとは、この建物にまつわるエピソートを知って、多くのことを考えさせられた。この豪壮で美しい会議場はたんなる建築物ではなく、首相の卓越した指導の象徴、戦後に創造されるすべての奇跡の縮図であるように思われた。

金日成首相が主席壇に姿を見せるや、参加者たちはながい嵐のような拍手と歓呼をおくった。

首相は総会の席上、『すべてを戦後人民経済の復旧と発展のために』と題する歴史的な報告をおこなった。この報告の一字一句は、すべて首相みずからが戦火のなかで思索をめぐらし、手帖に記してきたものであった。

首相は報告で、停戦と平和にたいする革命的立場、戦後復旧建設の基本路線と基本方向、社会主義基礎建設の課

降仙製鋼所で現地指導をおこなう金日成首相

題などを明らかにした。

首相は、社会主義基礎建設の総体的課題を提示しながら、当面した戦後復旧建設の基本方向と、人民経済部門の復旧発展の方向を具体的にしめした。

首相は、戦争によって人民経済があますところなく破壊された条件のもとで、人民経済のすべての部門を全般的に復旧建設することは困難であるとのべながら、人民経済の復旧建設を三段階に区分した。

第一段階は、半年ないし一年のあいだに、破壊された人民経済を全般的に復旧建設するための準備活動と整備活動をすすめる全般的人民経済復旧建設の準備段階であり、第二段階は、人民経済のすべての部門を戦争前の水準にひきあげるための人民経済復旧発展三か年計画を遂行する段階であり、第三の段階は、社会主義工業化の基礎を築くための五か年計画を遂行する段階であった。

首相は、これらの全段階における戦後経済発展の基本路線について、つぎのようにのべた。

「われわれは戦後経済建設において、重工業の優先的復旧発展を保障しながら軽工業と農業を同時に発展させる方

向にすすまなければなりません。そうしてこそわが国の経済的土台を強固にすることができ、人民生活をすみやかに改善することができるのです」

首相は、いちじるしく破壊された軽工業と農業を発展させることも、人民生活をゆたかにする経済的土台を築くことも、重工業の成長いかんにかかっていると判断した。それは、重工業を優先的に発展させてこそ、人民経済の植民地的跛行性と技術的なたちおくれをなくすことができ、強固な民族経済の自立的土台と社会主義の物質的、技術的基礎を築くことができるからであった。

しかし首相は、軽工業や農業も、あとまわしにできないと考えた。工業原料を保障するためばかりでなく、もともとたちおくれていた農業と軽工業を一新し、食糧と生活必需品の生産を急速にのばして人民生活を早くたちなおらせるためには、どうしても軽工業と農業を重工業に追いつかせなくてはならなかった。

重工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業を同時に発展させるということは、歴史上、前例のない路線であった。

世界のどの国も、工業建設で重工業を発展させながら軽工業を同時に発展させせたためしはなかった。ましてや戦争によって経済がいちじるしく破壊された条件のもとで、このような建設路線は想像すらできないものであった。にもかかわらず、経済復旧、人民生活、国防分野の広はんな要求をすみやかに解決しながら、同時に自立的民族経済を建設しなければならなかった朝鮮の場合、ほかの国とはちがった特別な対策が必要であった。他国が一歩すすむとき、朝鮮人民は十歩、百歩を走らなければならなかった。もともと朝鮮人民には、ほかの国のように一定の期間に重工業を発展させておいてから軽工業を発展させるとか、資本主義国のように軽工業を発展させ資金をたくわえてから重工業を発展させるといった余裕のある方法は性にあわなかったし、またゆるされもしなかった。いいかえれば、小ぎれいな身なりで安易なまわり道をするわけにはいかなかったのである。

首相は、戦後の経済建設の基本路線をつらぬくうえで、自立経済の土台をすみやかに築き、人民生活の水準も早く高めることのできる近道をもとめた。こうして首相は、経済の自立的土台を強化し人民生活の土台も同時に解決する方法として、重工業をまず発展させながら、その重工業を人民生活向上のための軽工業と農業の発展に密接にむすびつける方針をうちだしたのであった。

金日成首相がしめした大胆かつ独創的な社会主義経済建設の基本路線は、力にあまる困難なものではあったが、そこには実現可能な主客観的条件がそなわっていた。

それはなによりも、絶世の愛国者であり、民族的英雄であり、百戦百勝の鋼鉄の統帥者である四千万朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相の革命思想と、その洗練された指導があったからである。

朝鮮人民は首相の革命思想とその洗練された導きによって、あらゆる難関とあい路を克服し、首相のさししめした社会主義経済建設の基本路線を遂行することができた。

そればかりではなく、戦争をへてきたえられ、首相の革命思想で武装し党と領袖のまわりにかたく団結した勤労者の不屈の精神とつきることのない創造力があった。

朝鮮人民のこの革命精神と創造力、そして偉業のためにはいかなる犠牲をも恐れない闘志と勝利にたいする楽天的な信念をよびおこし、動員し、組織しさえすれば、国をりっぱに建設することもできるし、地中深く埋蔵されている豊富な地下資源も開発して経済建設にこれを最大限に利用することができるのであった。

さらに、戦争の被害はきわめて悲惨なものではあったが、もともと重工業の一定の土台とその発展に必要な豊富な天然資源があり、戦争のあいだ金日成首相によってたくわえられてきた物質技術的準備があり、社会主義諸国の支持声援があった。

首相が提起した社会主義経済建設の基本路線は、すべてが破壊しつくされた戦後の状況のもとで、なにからどう

建設していくべきかという問題が、社会主義建設の運命と祖国の将来の発展にかかわる問題として提起されていたとき、それをりっぱに解決し、党と人民に繁栄と隆盛の道をさししめした路線であった。いいかえると、この基本路線は、戦後復旧建設の当面の課題だけでなく、朝鮮革命の根本的な利益と国家百年の大計を実現する課題をすべて円滑に解決しうる偉大な路線であった。

首相は、重工業を優先的に発展させながら軽工業と農業を同時に発展させる路線を明らかにすることによって、当面、貧しい人民生活を急速に向上させるとともに、国の繁栄をめざす自立的民族経済の土台を築く正確な道をしめした。この路線は、経済建設と国防建設を正しく結合し、革命の成果を守り、経済を早く発展させる革命路線であった。威力ある重工業を建設するばかりでなく、発展した軽工業と農業をもってこそ、社会主義を建設することができるのであり、現代的な国防建設も積極的におこなうことができる路線であった。

じつにこの路線は、わが国の経済発展の合法則的要求と現実的可能性を念頭にいれた唯一の路線であり、マルクス・レーニン主義の拡大再生産理論をわが国の現実に適用した創造的な理論であり、自力更生の革命精神にもとづく自立的民族経済早期建設にかんする金日成首相の確固たる姿勢をしめした革命的路線であり、社会主義・共産主義にすすむ人民を鼓舞する偉大な路線であった。

戦後経済建設の基本路線の偉大な生命力と普遍的妥当性は、日とともに実生活をつうじて確証されていった。

社会主義生産関係の全一的支配の確立をめざす社会主義革命の遂行についても独創的な近道を切りひらく方針をしめした金日成首相は、短期間に社会主義革命を歴史的な勝利に導いた。

総会で採択された大胆で独創的なこの路線には、首相のあつい愛国心と革命的情熱がこめられていた。破壊しつくされた産業を戦前の水準に復旧させるだけでも、容易なことではなかった。それを短時日のあいだに、全面的な大革新と飛躍をおこし、国全体を一新させようとしたのである。これは、ほかの国では、まさに数十年、数百年を

必要とする歴史的な事業であった。

かりに、災難にあって草ぶきの家を失った農民が、それを豪華なれんがづくりの家につくりかえようとすれば、村中がおどろくにちがいない。これと同じように、工業地帯には雑草が生い茂り、折れた煙突だけがのこされ、すべてが灰燼となった国土を、自立的民族経済をもつ社会主義強国にかえようと決心した金日成首相の構想には、世界中がおどろかないわけにはいかなかった。

祖国と人民をこよなく愛する金日成首相にとっては、朝鮮が後進国にとどまることはがまんのできないことであった。なぜ朝鮮が後進国としてあまんじなければならないというのだろうか。豊富な資源をもつ美しい朝鮮の大地に、世界第一級の文化が開花できないとでもいうのだろうか。あれほどの辛酸をなめ、あれほど英雄的にたたかった朝鮮人民が外国にくらべて発展してはならず、先進国として暮らしてはならないという理由がどこにあるだろうか。

偉大な指導者金日成首相は、世界が羨む、そしていかなる風波にもゆるがない発展した経済力と第一級の文化を朝鮮人民にあたえ、美しい楽園を子孫にゆずりわたそうとかたく決心した。まさにこの決心によって、首相は大胆で革命的な路線をしめしたのであった。

朝鮮人民は首相の教えのなかに、百花咲きみだれる祖国の未来像を描き、偉大で創造的な事業にふるいたたせる熱烈なよびかけをききとったのであった。未来への道は、はっきりしていた。全国津々浦々では、戦闘さながらに建設の槌の音が高らかにひびきわたった。

廃墟は見る見るうちに姿をかえていった。朝鮮の奇跡に、全世界が驚嘆の目をみはる日が刻々と近づいてきた。

いだ。

2　きびしい復旧建設のたたかい

戦時経済体制は、平和的な経済体制に切りかえられた。各地に疎開していた機械設備、労働者、技術者たちをのせた貨車が走り、自動車の列が黄色い土煙をあげて故郷めざして疾駆した。軍服姿の除隊軍人たちも建設場へいそいだ。

廃墟のあとには必ず復旧建設指揮部がおかれ、住宅区域には臨時の住宅がたちはじめた。労働者や人民軍勇士たち、学生や政務員たち、そして老若男女をとわずすべてが首相のよびかけにこたえ、戦争でアメリカ帝国主義をうちのめしたその勢いで、復旧建設にとりくんだ。

だれもが、夜と昼を忘れた。国土が、すべて火花散る建設場にかわった。

土ならしをしろ力のかぎり
敵に焼かれたふるさとの地に
溶鉱炉と工場たくましく建て
富強なわれらが祖国を築こう
…………

いたるところで、復旧建設のうたが力強くこだました。しかし戦後の労働は、歌のように、ただたのしいだけではなかった。活動と工程のすべてが難関とのたたかいであった。資材や資金、そして労働と技術も足りなかっ

た。

しかし、この復旧建設がきびしい戦闘とかわりないことを知った人民大衆は、首相の教えとはげましをうけてあらゆる難関に真正面からいどみ、それを一つ一つのりこえていった。

金日成首相は、黄海製鉄所や降仙製鋼所など鉄鋼部門の労働者たちを復旧建設の先頭にたてた。鉄は復旧建設の礎石であり、柱であり梁(はり)であった。いたるところで鉄材と生産設備が要求された。金属がなければ一歩も前進することができなかった。

重工業——そのなかでも冶金部門を優先させるかいなかは、全般的な復旧建設の速度とその成否を決定する重要な鍵であった。そのため首相は、停戦後三日目にはすでに黄海製鉄所を、そして一週間後には、降仙製鋼所をたずね、現地の問題をくわしく分析して労働者たちを真っ先に復旧建設にふるいたたせた。

黄海製鉄所の労働者や建設者たちは、首相の教えとよびかけに英雄的労働をもってこたえた。

「首相の教えどおりにやればまちがいない。すぐに平炉と溶鉱炉をつくりあげ、ヤンキーどもをそのなかで焼きつくしてやるのだ！」

夜と休息を忘れた、たたかいの日々がつづいた。かれらは廃墟のなかでれんがをさがしだし、鉄筋の切れはしをひろい集めた。鉄柱のかわりに木の柱をたて、瓦のかわりに雑草をふき、そのしたで地金を切り、鉄骨をくんだ。

陰惨な廃墟は姿をかえ、生命をえたように躍動しはじめた。そしてついに第一号平炉は、不屈の気概と鋼鉄の体験を誇りながら廃墟のうえにその雄姿をあらわしはじめた。アメリカ帝国主義者は、「黄海製鉄所は、朝鮮人の力では二度と復興させることはできまい」とうそぶいたが、この地の労働者階級は首相の教えにしたがい、ヤンキーどもが破壊したもとのものよりも二倍も大きい一号平炉を、わずか一年たらずのあいだにつくりあげたのである。

首相は各部門で緊急に必要な建設資材生産と輸送問題を解決するため、建材工業と鉄道運輸部門の復旧建設に大

きな力をそそいだ。

これによってぞくぞくと建材工場が建ち、鉄道部門の労働者たちは、破壊された貨車や無残に傷ついた鉄路をわずか一週間で復旧し、国の動脈を生き生きとよみがえらせた。

こうして首相は、鉄鋼をはじめ建材、交通運輸などの復旧建設において先決を要する主な部門をよみがえらせるかたわら、重工業部門のうち、農業発展に重要な役割を果たす化学肥料工場の復旧建設にも大きな注意をはらった。それは、この問題を解決してこそ、重工業の優先的発展に農業を追いつかせることができるからであった。

一九五三年十月、興南、咸興、元山一帯の工業地区を指導した金日成首相は、十七日、労働者たちの歓呼をあびながら興南肥料工場の門をくぐった。

首相はまず、硫安肥料生産の第一工程である変流職場を視察した。真っ黒に焼けた四十余台の変流器をこまかくしらべ、ついで数十万個の極板が欠けたままの電解現場を見てまわり、三千立方メートル容量のガスタンクの復旧場へ足をはこんだ。

労働者たちの意気は、まさに天を衝かんばかりであった。かれらは、ガスタンクを自力で復旧できるか、という首相のといに、やりとげてみせます、と力強くこたえた。たのもしい労働者たちだった。首相は非常に満足し、大胆に考え、難関を克服し、すべてを自力でやりとげ、あまったもとでを基礎にして、どんなことがあってもここにりっぱな工場をたてなければならないと強調した。首相は、ここで何日ものあいだ労働者と寝食をともにしながら、工場復旧の方法を具体的に指導した。首相は、二〜三年以内に必ず肥料を生産しなければならないと、つぎのようにのべた。

「一九五〇年の八月、アメリカ帝国主義者がここを爆撃したとき、咸州平野の農民は一週間も燃えつづけたこの工場を見つめながら、これで農業もおしまいだと涙を流したそうです。この工場にたいする農民の期待と愛着は、

それほど深いものがあります。肥料がなくては、農業を発展させることはできません。農業を発展させ、米や農産物をたくさんつくってこそ、重工業と軽工業を発展させることができるのです。……この工場を早く復旧させるということは、それだけ早く農業を発展させるということになるのです」

工場復旧の具体的な方法をしめした首相は、現地指導から帰ったのちも、科学院の専門家や金策工業大学、咸興化学工業大学の教員や学生たちからなる二百名の実態調査団をこの工場に派遣し、さらに設備や資材もおくりとどけた。

首相の教えと配慮にはげまされた興南肥料工場の労働者、技術者たちは、アメリカ帝国主義者が「三十年かけなければ復旧はできまい」といっていたこの工場を、わずか二年たらずで復旧し、一九五五年八月十一日には第一段階の操業を開始して玉のような硫安肥料を生産したのである。

首相は興南肥料工場を指導するかたわら、各地の工場、発電所、水産事業所などを連日のように現地指導し、平安南道順安(スンアン)郡元和(ウォンファ)協同農場をはじめ各地の農村をたずね、農民たちに、破壊された農業を一日も早く復旧して穀物生産をひきつづき高めるための具体的な方法を教えながら、協同農場を組織し、農業協同化運動をすすめるよう導いた。

こうして首相は、重工業を優先的に発展させながら軽工業と農業を同時に発展させる経済建設の基本路線をつらぬくために、復旧建設を全面的にすすめながらも、主な産業部門を第一次的に復興し、これが他のすべての部門に支援と活気をもたらすよう指導した。

党と国家機関をはじめすべての勤労団体にたいしても、これと同様の方法で活動の中心的な環とその順序を正しく決め、それにしたがって活動するよう指導した。

首相は雨の朝も吹雪の夜もためらうことなく、つねに質素な身なりで、各地の工場や発電所、水産事務所や農村

をたずね歩いて、労働者、農民をはげました。轟音をたてながら火をふく電気炉のまえで溶解工たちとひざをまじえていたかと思うと、いつのまにか都市建設場の一角に姿をあらわしていた。きょう、田畑で農民たちと新生活について話しあっていたかと思うと、あくる日には、潮風が吹きつける船窓から海を見ながら漁夫たちといっしょに水産業の発展について語っていた。自身は簡素な食事をとりながらも、ひたすら人民の生活に心をくだくのであった。

首相のめざましい陣頭指揮にはげまされた朝鮮人民は、歯をくいしばり、あらゆる困難をのりこえていった。創造と建設の日々がつづいた。そして停戦後わずか数か月のあいだに、降仙製鋼所、城津製鋼所、勝湖里セメント工場、川内里セメント工場をはじめ多くの工場、企業所、鉱山がよみがえり、力強く操業を開始した。

こうして、復旧建設の準備段階の課題はみごとに完遂された。首相は、ひきつづき復旧建設の第二段階の課題である三か年計画にとりくんだ。

三か年計画で予定された戦後人民経済復旧発展の主要な課題は、戦争によって破壊された人民経済をもとどおりに復旧させるだけでなく、日本帝国主義支配の悪影響である経済の植民地的跛行性を一掃し、社会主義的工業化の基礎を築くうえで、重工業を優先的に発展させながら、同時に、戦争によって零落した人民生活を向上させるため、軽工業と農業を急速に復旧することにあった。

これは、困難ではあったがやりがいのある課題であった。

首相は、戦後人民経済復旧建設のぼう大な課題を遂行するため、まず党の強化に深い関心をはらった。党の隊列を組織的、思想的に強化し、その戦闘力を高めなければ、この困難な課題を完遂することは不可能だった。

首相は全党をあげて、党中央委員会第五回総会の文献を再討議させ、朴憲永スパイ一味の害毒を根こそぎにし、党の戦闘力をさらにつよめる一方、広はんな人民大衆を党のまわりに結束させていった。

戦争の試練をへた国内の住民の構成は、複雑をきわめた。しかし戦後のぼう大な復旧建設、とくに都市と農村において生産関係を社会主義的に改造するには、各界各層人民との関係を正しく解決しなければならなかった。

そのために、首相は一九五三年十二月に朝鮮労働党中央委員会第七回総会を招集して、統一戦線運動における一部の誤りを批判し、戦後の情勢にそくしてこの運動を改善する対策をたてた。

首相の正しい措置とすぐれた指導によって、戦後の復旧建設を成功させる力の配分が的確に定められた。戦後の復旧建設は力強くくりひろげられ、朝鮮人民の士気はますます高くなっていった。

しかし分派主義者と教条主義者は、いままでこんな政策が実施されたためしがない、マルクス・レーニン主義の古典にもそんなことはのっていない、とさわぎたて、戦後経済建設の基本路線に反対した。かれらは、人民生活が苦しいということを口実に、兄弟諸国の援助を消費品でもらい、生活のたしにすべきだと主張した。

同じころ、現代修正主義者は「国際分業」をうんぬんしながら、朝鮮は機械製作工業を発展させる必要はなく、鉱石その他の原料を生産して売るべきだといいだした。

これらの主張は、北半部を他国の経済に隷属させようとねらったものであった。分派分子と教条主義者が力説する兄弟諸国の援助についていうならば、それは朝鮮人民が消費するにしても、わずか一か月ももたない量にすぎなかった。

したがって、「国際分業」だとか、兄弟諸国の援助だけに頼り、自力で自立的民族経済を建設しようとしないならば、完全に他国に従属して生きる以外にはなかったのである。

これは絶対にゆるせないことであった。

金日成首相は、こうした策動と詭弁を断固しりぞけ、党の経済建設の基本路線を強力にすすめていった。

首相は、戦後の困難な状況のもとでも、徹底的に自力更生の革命精神をつらぬいた。

「革命闘争においても、建設事業においても、自力更生を基本とし、外部からの支持声援は、これを二次的なものと考えなければならない。こうした精神でたたかってこそ、自国の革命と建設を最大限に早めることができ、国際革命運動の発展にも寄与できるのである」

これは、首相の一貫した立場であった。

朝鮮革命の主人は、朝鮮労働党と、その指導をうける朝鮮人民である。朝鮮の特殊な社会経済的条件と難関を克服して、世紀的な変革をなしとげ、アメリカ帝国主義を追いだし、祖国統一のためにたたかう朝鮮労働党と朝鮮人民の情熱によってのみ、朝鮮革命は勝利することができる。朝鮮革命は、他国の人民がこれを代行することは絶対にできないのである。

こうして首相は、戦後においても雑多な異色分子の策動を粉砕し、みずからの力で自立的民族経済の発展に全力をそそいできたのである。

ながいあいだ、事大主義者や大国主義者との闘争をつうじて主体性をうちたて、革命を発展させてきた金日成首相は、いつどのような状況のもとでも、すべての問題を自分の頭で考え、それを自己の主見によって創造的に処理することを鉄則とさだめ、自力更生の革命精神を革命の生命であると確信していた。

首相は、朝鮮労働党第六回総会の報告でつぎのようにのべた。

「問題は、われわれが国家の主人として仕事をりっぱにやりとげるかいなかにかかっており、このすべての可能性をできるだけ早く、いかにして現実のものに転化するかにかかっています。われわれはまず、われわれ自身の力、すなわち、わが党と、わが政権と、わが人民の力を信じなければなりません。この無限の力は、苛烈な戦争で勝利したように、戦後人民経済復旧発展をめざすたたかいでも勝利するでありましょう」

金日成首相は、党と国家機関の力を産業にむけ、とくに産業運輸部門の活動家たちの経済管理の指導水準を高め

ることに大きな関心をはらった。

産業施設が破壊され、住民の絶対多数が農村に移住していた戦時には、農村経理に主力をそそぐことは当然であったが、停戦後の新しい環境のもとでは、人民経済の主な部門である産業部門に主力を集中することが必要であった。それだけでなく、資金、資材、労力のいずれもがきわめて不十分であった条件のもとで、復旧建設を成功させるためには、すべての可能性を最大限に利用し、勤労者の熱意と創意を正しく組織していく練達した指導が要求された。

しかし当時、少なからぬ国家経済機関とその幹部たちは、経済活動の指導を能率的に、具体的に指導することができず、書類にだけけしがみついていた。

こうした形式主義的、官僚主義的な欠陥を克服しなければ、一歩も前進することができなかった。

金日成首相は、一九五四年三月に党中央委員会総会をひらき、経済指導機関の幹部たちが、指令書に署名することを指導だと考える事務室的、官僚主義的活動作風をあらため、実質的で分析的な指導作風をうちたてるべきであると指摘しながら、活動家たちの責任制を強め、点検を系統的におこない、仕事の秩序と規律を確立する課題を提起した。とくに、省と管理局の幹部と支配人が経済活動を深く研究し、これを身につけるべきであると強調した。

このほか、技術幹部を生産現場に派遣する問題、労働行政を改善して労働力の流動と浪費をふせぎ生産を積極的に機械化していく問題、党組織と党の活動家たちが産業運輸部門で政治教育活動をつよめ、経済活動にたいする具体的な指導と統制を強化する問題など、いくつかの課題と対策がしめされた。

首相のこの教えを実践する過程で、産業運輸部門では大きな変化がおこり、勤労者の熱意と創意がいちじるしく高められた。

金日成首相はこれにいっそう拍車をくわえるため、いくつかの産業部門会議をひらいて、三か年計画超過遂行をめざす増産競争運動を組織したが、これはたちまち全国的にひろげられていった。

首相はこのように、各部門でつぎつぎと組織活動を展開する一方、ふたたび現地指導に全力をかたむけた。北部山岳地帯から軍事境界線にいたる津々浦々で力強く、親しみをこめて働く人びとに勇気と知恵をあたえ、心の奥底からこみあげてくるあの独特な微笑でかれらをはげました。

一九五五年十一月十五日、ふたたび降仙製鋼所をたずねた首相は、鉄鋼戦士たちにこう語った。

「破壊された経済を一日も早く復旧し、過去もっともたちおくれた国であったわが国を、強力な工業国家に発展させるためには、三か年人民経済計画を期日より早く完遂しなければなりません。われわれは、人が一歩あゆむときには三歩すすまねばならず、人が三歩あゆむときには十歩、百歩とすすまねばなりません。……

われわれは、かつて日本帝国主義の植民地奴隷として虐待され、さげすまれ、貧しかったうえに、三年間の戦争によって、人民経済はほとんど破壊されてしまいました。

われわれは破壊された経済を一刻も早く復旧し、そしてここ数年内に人に劣らない生活をするためには、もっと多くの仕事をしなければならないし、多くの鉄鋼、鋼材を生産し供給しなければなりません。

鉄鋼、鋼材がどれほど生産できるかということによって、われわれが早く発展できるかいなかがきまるのです。鉄鋼をさらに多く生産するためには、炉の設備を改善し、炉一基あたり鉄鋼三十トンを生産する運動をくりひろげなければなりません」

熱のこもった首相のことばをきいた労働者たちは、その信頼にこたえるため一致して誓った。

「首相同志、鋼鉄のことはおまかせください！」

瓦礫のなかから、わずか四十日で電気炉を復旧し、最初の溶鉄を生産した降仙の英雄的な労働者たちは、このと

きもその誓いどおりに任務を遂行した。

現地指導はつづき、北中（プクチュン）、楽元、煕川の工場地帯をへて、一九五六年五月ふたたび興南肥料工場にいたった。首相は硫安肥料の出荷場で、滝のように流れでる真白な肥料を両手にしながら、工場の幹部たちにいった。

「これが米になるのだ。米はとりもなおさず社会主義なのだ」

首相のことばをきいたとき、肥料の山を見あげる労働者や幹部たちは、たわわにみのった豊作の田野を目にうかべた。

金日成首相は力強く建設されてゆく工場の姿を見て、ことばをつづけた。

「きょうここにきてみて、ほんとうに満足に思います。わたしが一九五三年にきたときには、工場がひどく破壊されていて足の踏み場もないくらいだったのに、いまでは整然とたちならび、肥料の生産も向上しました。……肥料が滝のように流れでる、こんなにすばらしいことがありましょうか。工場も活気にみちあふれており、三か年計画を倍以上は超過遂行するというあなたがたのことばをきいて、心強く思っています。農民もどんなによろこぶことでしょう――」

たくましく成長した子どもたちのしあわせをよろこぶような首相のことばは、労働者たちの胸をうち、大きな力と勇気をあたえるのだった。

このころ首相は、工業地帯ばかりでなく多くの農村で、歴史的な農業協同化と漑灌工事を指導し、各地の住宅建設場にでむいては、雄大な都市と文化的な農村づくりを指導していった。首相は、人民生活の向上をかたときも忘れたことがなかった。衣食住をゆたかにし、十分な生活を保障することだけが念頭にあった。戦争のさなか、すでにピョンヤンをはじめ各都市の建設計画をみずから作成し、停戦と同時に各都市の復旧建設に着手したのも、そのためであった。一本の木を移植するにも、道路をつくり、駅舎を建てるにも細心の注意をはらった。ピョンヤン、

咸興、清津、元山、江界（カンゲ）、松林（ソンリム）、開城、南浦などをはじめ、都市と農村のいずれを見ても首相の関心のおよばないところはなかった。

たとえば、一九五五年七月に江界市をたずねたとき、竣工したばかりの江界駅舎をみてまわった首相は、「江界駅」と書かれた駅名の看板が小さすぎると注意をあたえ、駅のまわりに植えられた苗木を見て、「手ごろな木がたくさんあるのに、すこし小さすぎたようですね。……これでは年よりの目をたのしませることはできません」といって、よく茂った木ととりかえさせたのであった。

苗木をひと目見ただけで、老人をたのしませることを考えたこのひとことにも、人民にたいするあたたかい愛があふれていた。地上のすべてをはぐくむ太陽のように、首相はこの国の老若男女をあたたかくつつみ、いつくしんでいるのであった。

朝鮮を考えるとき世界を見つめ、きょうを考えるとき未来を見とおし、たぐいまれな大胆さで革命を導く首相は、都市と農村をめぐりながら、一本の木を見ても人民の生活に心をはせたのである。

この比類なき慧眼と革命的展開力をもった偉大な指導者の導きと、その指導者にかぎりなく忠実な人民の英雄的なたたかいがあったからこそ、朝鮮は廃墟からたちあがり、難関を突破し、全世界の耳目をそばだたせるような建設の大路をすすむことができたのであった。

朝鮮人民は、金日成首相にしたがって疾風のごとくひた走り、三か年計画の高地を一気に占領した。

三か年計画に予見された工業総生産高は二年八か月で完遂され、一九五六年末には一二二パーセント超過遂行した。一九五六年の工業総生産高は、一九五三年にくらべて二・八倍にのび、一九四九年の一・八倍、一九四四年の二倍に達した。

計画期間中、経済建設の基本路線がつらぬかれた結果、生産手段の生産は四倍、消費材生産は二・一倍にのびた。

また この期間に黄海製鉄所、金策製鉄所、水豊（スプン）発電所、ピョンヤン紡績工場をはじめとする二百八十余の工場が新しい技術によって復旧拡張され、熙川機械工場をはじめ八十余の現代的な工場が新しく建設された。
　農業の発展も、めざましいものがあった。一九五六年の穀物生産高は、戦前の一〇八パーセントにのびた。そして個人農を社会主義的に改造する農業協同化も、すでに決定的な段階にはいっていた。
　人民生活もいちじるしく改善された。一九五六年末に労働者、事務員の実質賃金と農民の実質所得は、戦前のそれよりもはるかにうわまわった。
　人民経済はたんに復旧の段階にとどまらず、産業の植民地的跛行性が大きく是正され、民族経済の自立的土台が基本的に築きあげられた。とくに人民経済の全部門において、社会主義経済形態が支配的位置をしめるに至った。
　惜しみなく流された汗水でかちとられたこれらの成果は、社会主義基礎建設を促進する物的、技術的土台となった。すでに前途はひろびろとひらかれていた。朝鮮人民は闘志もたくましく、金日成首相がさししめす新しい勝利をめざしてたゆみなく前進していった。

3　民主首都の建設者とともに

　戦後の復旧建設で最初に着手されたものは、革命の首都であり、国の政治、経済、文化の中心地であるピョンヤンであった。
　ピョンヤンは完全に破壊されていた。アメリカ帝国主義侵略者が四十二万八千九百余個の爆弾をあびせたこの都市には、家屋はもちろん、樹木一本も満足にのこっていなかった。見わたすかぎり、荒涼とした瓦礫の山であった。ただ牡丹峰と大同江だけが、わずかにむかしの名ごりをとどめていた。

しかし、ピョンヤンは廃墟のなかからたちあがった。それもただ復旧されたのではなく、雄大華麗な芸術的な都市に生れかわったのである。

凄惨な破壊を体験したことのない外国人は、ピョンヤンの姿に感嘆の目を見はった。

それは当然なことであった。朝鮮人民は、古くから朝鮮民族の崇高な精神がやどっているピョンヤンを、偉大な指導者金日成首相が住み、朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府の所在地であり、社会主義祖国の首都であるピョンヤンを再建するため、いっせいにたちあがったのであった。

遠いむかし、高句麗の首都として誕生したピョンヤンは、悠久な歴史の推移とともに、華麗な文化を創造し、うしおのようにおしよせる外敵の侵略をしりぞけ、アメリカの海賊船シャーマン号を焼きはらい、日本の侵略者をうち破った輝しい人民のたたかいがひめられた歴史の都市であった。

解放された朝鮮人民は、ここピョンヤンでたたかいの炎を燃やし水火千里、日本帝国主義者をうちたおして凱旋した金日成将軍を嵐のような歓呼でむかえ、このピョンヤンで朝鮮人民のほとばしる情熱が朝鮮を一新させたのであった。

ピョンヤン――、この地で金日成首相は天才的な戦略戦術をあみだし、世界「最強」を誇ったアメリカ帝国主義者を西山落日の運命に追いやったのであった。

朝鮮の栄誉であり、心臓部であるピョンヤンが、人民の政治、経済、文化生活ではたす役割ははかり知れないほど大きかった。

金日成首相は戦後の復旧建設において、ピョンヤンの建設に大きな意義をあたえ、みずから陣頭にたちその指揮をとった。

首相はすでに、戦火のさなかで、大ピョンヤン建設の設計図を作成した。一九五一年一月、ある建築家に語った

首相のことばは、あまりにも有名である。

「日本が支配していたときのピョンヤン市は、非文化的で畸型的な都市であったため、不合理な点がたくさんありました。文化施設も少なく、めぼしい公園も広場もなく、商店も何か所かにかたまっていて非常に不便でした。これからのピョンヤン市は、このような植民地的畸型性をなくし、勤労人民のための文化施設や衛生施設などを十分考慮すべきであり、近代的な交通網と住宅、文化施設などの建設に中心をおかなければなりません。

わたしの考えでは、都市の中心部であるここに広場をこしらえ、牡丹峰から大同江にそって大通りをつくり、大同江の橋はいくつかふやした方がよいと思います。

ピョンヤンには、大同江と普通江の二つの河が流れ、自然の風景にめぐまれています。この自然の美しさを、いっそうひきたてるべきです。

いま普通江や大同江のまわりは、非常によごれています。

こうしたよごれたところほど、清潔できれいにしなければなりません」

戦争が勝利に終ったその日から、首相は砲火のなかで作成したピョンヤンの復旧建設の設計図をひろげ、その実現に着手した。

そして停戦後七日目の七月三十日、内閣全員会議をひらいてピョンヤン市復旧建設の具体的な方向と方法をさししめした。

首相は内閣全員会議で、つぎのようにのべた。

「ピョンヤンはながい歴史をもった古い都であり、八・一五解放後は朝鮮民主主義人民共和国の民主首都であります。ピョンヤンはわが国の平和的建設時期においても、戦争のもっとも困難な時期においても、朝鮮人民を勝利をめざす闘争へ組織動員した民主革命の参謀部であり、今後もその役割はかわらないでありましょう。

ピョンヤンは戦争の過程で、たえず敵の集中爆撃をうけてきました。ピョンヤン市には、数千数万トンの爆弾がおとされました。それにもかかわらずピョンヤン市は、その全般的な生活と活動を中断したことがなかったのです。ピョンヤン市は、全人民の英雄的な闘争によって守りぬかれた英雄の都市であります。

ピョンヤン市の復旧建設にあたっては、ピョンヤンがアメリカ帝国主義に反対するきびしい戦争で勝利をかちとった共和国の民主首都であることを、歴史的に記念できるように建設しなければなりません。

そして植民地的畸型性をなくして、勤労人民のための文化施設と衛生施設を十分にそなえなければならないし、交通網および各機関の施設を現代的に建設することに中心をおかなければなりません」

このことばには、古いピョンヤンがもっていた植民的畸型性をぬぐい去り、まったく新しい人民的な社会主義的都市を建設し、もっとも美しく現代的な首都を築こうという深い意味がこもっている。

ピョンヤンの建設は、金日成首相の革命的な構想どおりにすすめられ、つぎつぎに建てられた建物には、首相の気高い志と構想を実現するためのたたかいの歴史がこめられている。

ピョンヤン市を雄大な都市に建設するという首相のよびかけにこたえ、全ピョンヤンがいっせいにたちあがった。兵士、労働者、事務員、学生、そして主婦たちも、瓦礫をはこび、土をならした。

昼夜の別なく建設のつち音と歓声がとどろき、機械と人間が躍動した。空には廃墟をふきとばす土ぼこりが白く舞いあがった。国中が資材をおくり、建設者を派遣した。首都を建設する全国的な大戦闘がくりひろげられた。

金日成首相は、全国の復旧建設を指導する多忙な時間をさいて、まだ朝もやの深くたちこめる早朝や雨の夜にも建設現場に姿を見せ、酷暑の夏の日にも雪降りしきるきびしい冬の夜も、質素な身なりで建設者たちとともにすごした。

首相はそういうとき、いつも創意性にとんだ助言をあたえ、技術的な問題を解決し、建設者たちの食事、宿泊、

はきものにいたるまでこまかな注意をはらい、親身の配慮をめぐらした。

首相の教えと配慮にはげまされた建設者たちは、英雄的な労働と大きな成果をもってこれにこたえた。軍人も公務員も大学生も、みんな汗を流して働いた。重い土砂を背負って明け方から夜まで休むことなくうたい、笑ってかけまわる大学生たちの姿は、じつにたのもしく、めざましかった。

労働は、そのまたたかいであった。基礎掘さく場は戦時下の坑道掘設工事を思いださせ、火花を散らす夜間道路工事場は、肉迫戦が展開された戦場さながらであった。

首相はこの戦場のような作業場をたずね、英知と愛情を惜しみなくそそいだ。首相の歩みにつれ、一つの作業班から別の作業班へと拍手と歓声がひびきわたり、ピョンヤンをゆるがした。歓呼の声がとおりすぎたあと、ピョンヤンはさらにはげしい労働の旋風をはらみ、荒れ狂う海のように波だった。

ピョンヤンの建設者たちは、夜に日をついで首都の建設にはげんだ。着工から一年目の一九五四年八月には、首相

革命の首都の復興建設にたちあがったピョンヤン市の勤労者たち

をむかえて、中央通りと人民軍通りの開通式と、金日成広場の竣工式をおこなった。こうして現代的なピョンヤンは、その雄姿をあらわしはじめたのである。

この成果を基礎に、建設工事はいっそう大規模にくりひろげられた。

復旧建設のめざましいたたかいは、アパート建設場でもくりひろげられた。満足な家屋が皆無にちかい状況のもとで、多くの人びとがピョンヤンに帰ってきたため、アパートの建設はいそがれた。

首相は、ピョンヤン市民が半地下壕やバラックなどで不便な生活をおくっていることに胸を痛め、市民たちを一日も早くこういう状態からぬけださせるために、文化住宅の建設を大々的におしすすめ、ひんぱんに建設場にでかけた。設計図に目をとおし、建築現場のすみずみまでくわしく見まわり、欠点を正し、建設者たちには、住宅をよりよく、より早く建設することは自分自身のためであり、全市民のためであることを語ってきかせた。

建設速度を飛躍的に高める方法を考えつづけてきた金日成首相は、大々的な機械化による組立方式で、住宅建設をすすめる方針をうちだした。

建設の機械化が切実にもとめられていたとき、金日成首相は、建設部門の幹部、設計家、労働者たちをよんで、具体的な指導をおこなった。

一九五八年一月十七日、首相は建設部門の幹部たちとともに、組立方式を大胆にとりいれて、より多く、より早く、そしてより格安に建設できる可能性をさぐり、その翌日にはかれらをともなって大衆の意見をきくため、ピョンヤン市内の設計家たちと会い、建築原価をひきさげる予備をさがしだした。ひきつづき十八日と十九日には、ピョンヤン市内の建設部門の労働者たちと会った。

首相は、親しみをこめて労働者たちに語った。

「わたしたちは同じ市内に住んではいるが、きょうは一つひざをまじえて話しあってみましょう。組立方式にす

るにはどうすればよいか、資材と労力をどう節約し、原価をどれぐらいひきさげられるかを具体的に相談しましょう。

いまでは、住宅にたいする需要は、質的にも量的にも以前とはかわってきています。地下壕からでたばかりのときは、古いれんがで適当に家を建てても、それで満足していましたが、いまはその程度の住宅では満足できず、もっと高級なものをもとめています。経済が発展し、生活が向上するにしたがって、りっぱな住宅をさらに多く建てなければなりません。そのためには、組立式に建てなければならないのです」

労働者たちは、組立式にすればいままでの建築にくらべて二倍ちかくの成果をあげることができるとのべた。

首相はしばらく考えてから、ことばをつづけた。

「二倍の成果をあげるだけでもたいへんなことです。しかし、それ以上にする可能性がないかどうかを研究してみましょう。農民がヘクタール当りの収穫高をひきあげるためにたたかうことと同じように、建設者は平方メートル当りの原価ひきさげと、質の向上に努力しなければなりません」

首相のことばは、労働者たちの胸にくいこんだ。かれらは、その場で設備能力と労働工程を計算しはじめた。だが、かれらは新しい予備をさがしもとめられずに堂々めぐりをしていた。

労働者たちといっしょになって技術的な数値を計算していた首相は、組立式にすれば、労力をうんとはぶいても成果はもっとあげることができるといいながら、前列にすわっていた労働者の肩に手をかけてたずねた。

「クレーン一台を単位とする組立作業に、労力は何名ぐらいみこみましたか」

「十二名ぐらいとみつもりました」

「少し多すぎたようですね。大型機械の運転だからといって、そんなにむづかしく考える必要はないでしょう。その半分ぐらいに減らすことはできないものか、考えてみて下さい」

首相のことばをきいて、労働者たちは計算をやりなおした。いままでの一体式建築では一〇・一二工程の労力計算が、組立式では二・七工程の労力になるのであった。

「はい、できました。一平方メートル当り二・七工程の労力です」

前列にいた労働者が、まるでむずかしい数学の問題でもといた学生のように、ノートをふりかざしながらこたえた。

金日成首相は、労働者にうなずいてみせながらことばをつづけた。

「よろしいです。このように具体的にみつもれば、多くの予備をさがしだすことができます。まだまだ資材と労力を節約し、建築原価をひきさげる予備がたくさんあると思います。アパートの各階の高さを、もうすこし低めにすることもできるでしょうし、クレーンの回転時間も七～八分にちぢめ、塗装も建築現場でせず、工場で副材をつくるときにまえもってやってしまえば、安い価格で早く建つはずです」

金日成首相のこうした具体的な指導により、アパート建設では一大革新がまきおこった。首相の教えとアピールをかかげて、民主首都ピョンヤンの市民と建設者たちは、世界を驚嘆させる奇跡をつぎつぎにつくりだしていった。

三分間に壁を一枚組立て、一世帯の組立速度十四分、一晩のうちに高層アパートが一階ずつ建てられ、七千世帯分の資材と資金と労力で、じつに二万余世帯分を建設するというおどろくべき多くの予備と、ピョンヤン・スピードが生まれたのである。

このころ、ピョンヤンを訪問したある外国の評論家は、つぎのように語った。

「ピョンヤンに十日間滞在したが、わたしが毎日通る道路の両側には、新しい建物がつぎつぎと建ちならぶので、方角がわからなくなり、しまいには一人ででかけるのが心配になるほどだった。当時、十四分間に一世帯の住宅が建設されているといわれていたが、わたしは、それが決して誇張でないということを直接体験した。」

金日成首相は、建設と住宅の質を高めることにも、大きな関心をはらった。
首相は、市民たちがどんな家をもとめているかを知るために、大同橋のほとりの新昌(シンチャン)洞住宅建設場を視察して、同じ区域の青年通りアパートの二階にあがっていった。
突然の訪問をうけて、おどろきとうれしさをかくしきれない主婦に、首相はやさしくほほえみながらたずねた。
「暮らしはいかがですか?」
「はい、国のおかげて、なんの心配もなく暮らしております」
彼女はりっぱな新しい家と、なに一つ心配のない生活をあたえてくれた首相のまえで、感激のあまりのどをつまらせるばかりであった。
金日成首相は、主人の職場と収入、子どものことなどをくわしくきいてから、
「家の住みごこちはどうですか?」とたずねた。
彼女は首相のおかげで、地下壕の生活からりっぱなアパートで暮らせるようになったうれしさと感謝のことばをのべるだけであった。
だが、このアパートは、温突(オンドル)式ではなく、板ばりの床であった。暖房施設はととのっていたが、オンドルになじんでいる朝鮮人の生活様式には、不便な点が少なくなかった。首相は床に手をあててみながら、ふたたびたずねた。
「オンドル部屋とくらべてどうですか?　むかしわたしたちの祖父は、あたたかいオンドル部屋にすわって、嫁から食膳をうけなければ生きたうちにはいらないといったものですが……」
「ええ、おっしゃるとおりだと思います。年とった両親のいらっしゃる方や、赤ちゃんのいる家では、オンドル部屋が一番です。このアパートも、オンドルになれば申し分ないと思いますが……」

さっきまで遠慮していたらしい主婦は、まるで両親に話すように、思ったことを全部うちあけた。

首相は同行の幹部たちにいった。

「どうだね。奥さんのいうとおりだと思うが……奥さんは、非常にいい意見をきかせてくれました。人民の意見は、これを至上のものとすべきです。さっそく高層アパートにも、オンドル部屋をいれることができるかどうか研究してみるべきだと思う」

室内を見まわしていた首相は、なにを思ったのか、かたわらの物指しを手にとると、部屋の縦幅と横幅を計りだした。計り終わると、部屋がやたらにながい、もっと使いやすく区切り、天井もいくらか低くしたほうがよいだろうと、こまかい注意をあたえた。

台所を見た首相は、調理台や食器棚、食器、米びつ、石炭置場まで一つ一つしらべて、幹部たちに、奥さんが子どもを背負ってでも仕事ができるように、台所をもっとひろくしなければならないと話した。

「奥さん、ほかにこうしてほしいと思うことはありませんか?」

首相がたずねた。

「ございません」

「これからも思いついたことがあれば、遠慮なく党か関係機関の人たちにいってください。みんなのしあわせな生活のために家も建て、革命もそのためにおこなうのです。わたしたちは、もっともっとおおぜいの人びとの意見や暮らしむきを知っていなければなりません。指導する人たちが、人びとの生活を十分に見ききし、奥さんたちはその人たちともっといろんなことを相談するようになれば、みんなの暮らしは、ますますよくなっていくのです」

首相はこう話し終わってから、アパートをあとにした。

首相はどんな建物を建てるときにも、それが人民の生活上の必要と、文化的な好みにあうかどうかということ

に、最大の関心をはらった。

一九五八年十二月にひらかれたピョンヤン市建設者大会で、首相はこうのべた。

「われわれが建てる建築物の社会主義的な内容とはなにか？　それは人民にとって便利なものであり、優雅で、しかも美しく堅牢であることを意味します。これこそが、われわれの要求する建築物の質なのであります」

このことばはまさに、建築芸術における社会主義的内容についての完ぺきな規定をくだした名言である。ピョンヤン市をはじめ、北半部の津々浦々に続々と建ちならんだ現代的なアパートには、首相のこのような親身の配慮がこめられている。

金日成首相は、住宅建設とともに、教育、文化サービス施設の建設にも力をそそいだ。なによりもまず新しい世代に、りっぱな学校を建ててやらなければならないといいながら、学校の立地条件や教室の採光、教具、教材、運動場のひろさにいたるまで、こまかく気をくばった。また、劇場、映画館、競技場を建設するときには、それが文字どおり人民の文化殿堂となるようりっぱに建て、音響、照明など、技術的問題にいたるまで注意をはらった。

ピョンヤンでは、首相の具体的な教えをもとにして、学校や文化サービス施設などが、民族的な建築美を誇りながらつぎつぎに建ちならんだ。

金日成首相のエネルギッシュで科学的な指導から生まれた「ピョンヤン・スピード」は、アパート建設だけでなく、各種の建設部門においても奇跡を生んだ。日本帝国主義は大同橋をつくるのに七年かかったが、それと比較できないほど雄大な玉流（オクリュ）橋は、わずか一年間で架設された。また当時、ピョンヤン和信（ファシン）（こんにちの第一百貨店）を建てるのに七年九か月かかったが、首都の建設者たちは、その何倍も大きいピョンヤン百貨店をわずか四十五日間で建て、それより二十三倍も大きなピョンヤン大劇場を一年間で建設した。

これらの建物も、金日成首相のきめこまかい指導をはなれては考えることができない。

首相は、ピョンヤン大劇場を建設するとき、設計者集団と建設者たちに三十回以上にわたって指示をあたえ、五回も建設現場にでむき、構造や内部設備をくわしく見てまわり、人民の芸術の殿堂を築くことに腐心した。

ある日、この建設現場をたずねた首相は、竣工まじかな大劇場を視察し、舞台の部分の屋根の調和がうまくとれていないと指摘した。

このとき、大劇場建設事務所の支配人が、舞台の部分の屋根が倉庫のような感じがするという、ある労働者の手紙をもってきた。

すると首相は、「この手紙のとおりです。人民がよくないといえば、それは悪いことであり、人民がよいといえば、それは正しいのです。この劇場の主人は人民です。人民ののぞみどおりに建ててやるのがほんとうです」といいながら、空をとぶ四羽の雁が三羽にかけたように見えるあの屋根はなおしたほうがよいと教えた。

観客用のサービス部分が六〇パーセントぐらいになるというのをきいた首相は、その程度なら勤労者の芸術の殿堂として遜色がないだろうとうなずきながら、むかし人民の血と汗で築いた景福宮(キョンボククン)は、人民を圧迫し、搾取する場所だったと話し、つぎのように強調した。

「われわれが建てるこの大劇場は、真に人民のための芸術の殿堂であるから、人民の希望どおり、人民に便利なように建てなければなりません。大劇場は子孫代々、ながく後世につたえる労働党時代の記念碑的な建物です。だから、とくにりっぱなものにしなければなりません」

現代的都市建設における公園と遊園地の造園および緑化は、もっとも重要な問題の一つである。

金日成首相は、日ましに向上する社会主義勤労者の生活水準にそくした文化的ないこいの場として、各地に公園と遊園地をもうけた。

ピョンヤンは万景峰をはじめ牡丹峰、大城山（テソン）、解放山（ヘバン）、長広山（チャングァン）など、そのまま公園になる美しい丘や山と、大同江、普通江などの大小河川にめぐまれている。首相は、この自然を利用してピョンヤンを一つの大公園にかえ、人民が緑したたり百花咲きみだれる花園のなかで生活できる造園計画をたてた。この計画にしたがって、牡丹峰公園をはじめ、数多くの公園と遊園地がいたるところにつくられた。市民たちは心をおどらせた。

首相は一本の植樹をするにも、草花ひとかぶを植えるにもこまかい指示をあたえ、人民の心にかない、うるわしい朝鮮の自然と地理に調和するように、都市の公園化をおこなわなければならないと教えた。

ピョンヤン市公園化計画は、首相が戦火のなかでピョンヤン市復旧建設計画を作成したとき、すでに考えていたものであった。公園、遊園地、街路などに植える樹々は、そのときから準備されていたのである。

首相は、陵羅島（ルンラ）、林興（リムフン）などに苗場をもうけ、全国からすぐれた園芸専門家を集めて、しだれやなぎや、いちよう、きり、「ピョンヤンかえで」など、三十余種の苗木を育てていた。

「ピョンヤンかえで」は、首相が戦後に名づけたかえでの一種である。首相は自宅の庭で、かえでの種をわざ

ピョンヤン大劇場

わざ採集して苗場におくったのである。苗場で働く人たちは、ピョンヤン市の公園化をはかる首相の心づくしに感動し、誠意をつくしてそのかえでを芽ぶかせ、苗を育てた。かれらは停戦後、かえででピョンヤン市の公園や街路を美しく飾った。

金日成首相は、ピョンヤン市の緑化と公園化の構図、緑地帯の配置、地形や施設と色彩との調和などにいたるまで具体的に構想し、みずから現地におもむいて指導した。

首相の教えによってピョンヤンは、しだれやなぎ通り、ピョンヤンかえで通り、あんず通り、ぼだいじゅ通りなど、通りごとに種類の異なる樹木が植えられて街路のながめをひときわひきたたせた。また牡丹峰をはじめ遊園地や市内のいたるところに、常緑樹の林、ぬるで、果樹などが美しい調和をなしていた。

首相は樹木や草花を少しでも多く植え、たいせつに育てるために、一九五四年六月のある日、園芸家たちとともに配水管工事中の人民軍部隊をたずねた。

配水溝を掘る場所に植えられていたしだれやなぎを見つめていた首相は、兵士たちにこうたずねた。

「この木は、どうするつもりかね？」

兵士たちはしだれやなぎを切りたおすわけにもいかず、よい考えがうかばなかった。そこでかれらは返答に困ってしまった。

「これを、どうにかして生かしておくことはできないものだろうか。一本でも多くの木を植えなければならないのだが……」

それは、ピョンヤンのどこにでも見かけられる木だったが、首相は決して粗末にしなかった。首相のことばに深く心をうたれた兵士たちは、根を痛めないようにしだれやなぎの根の底のほうへ配水管をとおし、それを生かしたのである。

樹木にかんする話がでたので、もう一つエピソードを紹介しよう。

一九六二年の秋、ピョンヤン植物園の某植物学博士が首相から電話をうけてその自宅をたずねた。ちょうど首相が席をはなれていたので、副官がかわりに博士を庭園に案内した。そしてかわったかたちの一本の木をさして、首相がこの木をふやせないだろうかといっていたことをつたえた。

しばらくのあいだその木を観察していた博士は、瞬間、あっと声をあげておどろいた。それはなんと、地球上からすでにほろび去ったといわれる水杉(スサムナム)（学名・メタセコイア＝あけぼのすぎ）だったのである。こんな貴重な木を朝鮮で見られようとは、夢にも考えられないことだった。

水杉は、有史以前の太古には朝鮮をはじめ地球の北半球一帯に分布していたが、いまでは植物学者の図鑑に記載されるだけで、地球上から絶滅したものとされている木であった。

それが一九四〇年代になってから、アジアの一部で何本か発見された。そのとき世界の植物学界では、「二十世紀最大の発見」と色めきたったほどである。それだけに、水杉は学界でも貴重な宝のように保護していた。

その珍種が首相の庭園に茂っていたのである。それがどのような経路をへて入手されたものかはわからなかったが、すでに根元の直径は八〇センチ、高さは六メートルにもなっていた。

水杉は成長が非常に早く、きれいな木であることも特徴の一つだが、木質がよく、建築材としては最高のものであった。

そんなことがあってから、博士は水杉の増殖に適した春の到来を心待ちにしていた。

翌年の春早く、金日成首相から、水杉の増殖実験について電話で指示があった。博士はただちに研究集団を組織し、水杉の枝を切り、挿木の実験にとりかかった。

実験はなんども失敗した。しかし研究集団は、首相の高い志を無駄にすまいと努力に努力をかさね、ついに一万

本の苗木を育てあげることに成功した。

ピョンヤン植物園をおとずれた首相は、青々と茂っている苗木を見て、「これで子孫に水杉をつたえることができた」と非常によろこび、もっともっと繁殖させて、国中を水杉の林にしようと語った。

こうして、ピョンヤン植物園から、二十万本の水杉の苗木が各地におくられた。

水杉——、それは首相の気高い愛国心が育てて朝鮮人民に贈った貴重な樹木であり、子々孫々にまでひきつがれる黄金の木であった。

このように首相は、すべての分野から一本の木にいたるまで細心の配慮をしめし、祖国の百年大計をはかっていたのである。

金日成首相の遠大な構想と指導によって、ピョンヤンは広大な緑園と色とりどりの草花につつまれた緑の都市となった。

ピョンヤンはいま、人口一人あたりの緑地面積が四十平方メートルとなっている。東京の一・一平方メートル、パリの三・六平方メートルは比較にならず、ピョンヤン市民は世界のどの都市にもましてゆたかな緑地をもっているのである。

いまやピョンヤンは、金日成首相の遠大な構想と具体的な配慮のなかで、雄大な世界第一級の現代的都市となった。

不死鳥のようにたちあがった革命の首都の関門であるピョンヤン駅舎から、中央通りをすぎ、牡丹峰劇場のよこにいたる中心部はいうまでもないが、東ピョンヤン、西ピョンヤン、普通江一帯と平川(ピョンチョン)地区まで建ちならぶ現代的なアパートや朝鮮屋根、そしてあくまで青く澄んで流れる大同江の水にその雄姿を映すピョンヤン大劇場、労働党時代の不屈の精神を象徴する千里馬銅像、錦水山(クムス)のふもとにそそりたつ科学の殿堂金日成総合大学、将台丘(チャンデ)の上

に優雅にそびえるピョンヤン学生少年宮殿、大同江の流れにその美しい柱をひたしている玉流舘、そのそばにかかる虹の橋――玉流橋、そしてそれらのわきを縦横に走る広々とした街路――。

目のとどくかぎり、力強く壮快な現代的感覚と洗練された調和とがひろがっていく。

涙の河、ためいきの河だった普通江一帯はりっぱなプロムナードに、大城山は動物園と植物園をもつ遊園地にかわり、日本帝国主義時代には官僚支配層の遊興場であった慶上里(ギョンサン)には、四季おりおりの花が咲きみだれる勤労者のすばらしい公園が建設された。

砲声がとだえたときは、小鳥が翼を休める一本の樹すらなく、満足なれんが一枚なかったピョンヤンが世界第一級の現代的な都市に建設されるまでの歴史は、金日成首相の遠大な構想と賢明な導き、その海よりも深く山よりも高い人民にたいする配慮をはなれては考えることができない。

健全で活気にあふれた生活をいだいて革命の情熱に燃え、国中に希望と光をあたえるピョンヤン、夜は灯りが海のようにひろがり、大きな勝利を夢見るピョンヤン、ピョンヤンは金日成首相の構想にしたがって革命とともにひきつづき発展し、さらに高くのびひろがり、うるわしい未来をたぐりよせ、まえへまえへとつきすすんでいく。

戦後、三たびピョンヤンをおとずれた、ある外国代表団の団長はこう語った。

「いまのピョンヤンは美しい。だが明日のピョンヤンはもっと美しくなるだろう。そして統一なった朝鮮は、いっそう美しいだろう。わたしは、いまのピョンヤンをこよなく愛している。しかし、さらに美しく永遠に繁栄するであろう未来のピョンヤンを、もっと愛する」と。

4　主体性を確立するために

悪戦苦闘のなかでも、革新の日々が流れた。

苛烈な戦争がくりひろげられた大地のうえには、明るく希望にみちた生活が躍動していた。廃墟のうえには新しい都市と農村が生まれ、新聞は毎日のように新しく誕生した工場や企業所の操業式を大々的に報じた。

各都市や農村では、古い生産関係を社会主義的に改造する意義深い革命闘争が高まっていた。革命と建設のすべての分野がめざましいスピードで発展し、そのはばをひろげていった。

しかし、これには深刻な階級闘争がともなった。革命の敵が、最後のあがきに狂いたったからである。

アメリカ帝国主義は、朝鮮戦争でこおむった惨敗から教訓をひきだすかわりに、ひきつづき朝鮮で緊張状態をつくりだす策動に血道をあげていた。また国内の反動どもも、自分たちの最後の地盤が音をたててくずれおちると、ますます悪らつな動きをしめした。そのため朝鮮革命は依然としてきびしく、困難をともなっていた。

朝鮮革命のまえによこたわった難関とあい路を主動的に打開し、困難な革命任務を遂行しなければならない現実的条件は、党員と勤労者たちに朝鮮革命の前途を正しく知らせ、かれらをそのたたかいへと自覚的に、積極的に組織動員することを要求していた。

革命発展のこうした要求を全面的に洞察した金日成首相は、一九五五年四月、朝鮮革命の性格と課題にかんするテーゼ『すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために』を発表した。

金日成首相はこのテーゼでまず、解放後に南北朝鮮でかもしだされた政治情勢と社会経済関係を科学的に分析し、朝鮮革命の基本任務と性格を明らかにした。

首相は、つぎのように指摘した。

「現段階におけるわが革命の基本任務は、アメリカ帝国主義侵略勢力と、その勢力を扶植し、その同盟者となっている南半部の地主、買弁資本家、親日・親米派、民族反逆者を打倒し、南半部の人民を帝国主義的および封建的圧迫と搾取から解放することによって、祖国の民主主義的統一と完全な民族的独立を達成するところにある。

……わが革命は、一方では反帝国主義的民族解放の課題を遂行し、もう一方では、南半部において、いまだに地主の圧迫と搾取をうけている広はんな農民を解放する反封建的課題を遂行しなければならない」

そして首相は、南北に生じた異なる政治情勢から出発して、朝鮮革命の全国的勝利のためには、北半部で社会主義建設を強力におしすすめ、朝鮮革命の源泉地であり、祖国統一の決定的な力量である共和国北半部の革命基地をいっそう強化しなければならないと指摘した。

また首相は、北半部における社会主義建設は、祖国統一の確固とした保障をつくりだすための根本的な要求であるばかりでなく、北半部における社会経済発展の必然的な要求となるとのべた。

金日成首相はテーゼにおいて、民主主義革命の課題を遂行した結果、共和国北半部に築かれた社会経済関係と階級関係を科学的に分析し、北半部における社会主義建設のための党の任務を提示した。

首相はつぎのように指摘した。

「社会主義へむかってすすむ過渡期の現段階において、わが党のまえに提起された基本任務は、労働者、農民の同盟をいっそう強化しながら、戦後人民経済の復旧発展のためのたたかいでかちとった成果に依拠し、社会主義の基礎を建設するところにある。

人民経済のすべての分野において、小商品経済形態と資本主義的経済形態をしだいに社会主義的に改造し、社会主義的経済形態の支配的地位をいっそう拡大強化し、社会主義の物質、技術的土台を築くために生産力をいっそう

発展させなければならない」

首相は、古い生産関係を社会主義的に改造することは、共和国北半部で革命を促進するためのもっとも切迫した課題として提起されるとのべ、小商品経済形態と資本主義的経済形態を社会主義的に改造することにたいする党の方針をふたたび明らかにし、それを実践するための具体的な方法を明示した。

ひきつづき首相は、社会主義の物質、技術的土台を築くためには、社会主義的工業化を実現しなければならず、社会主義的工業化のためには、まず重工業を発展させなければならないと教えた。

そして、重工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業を同時に発展させる独創的な経済建設の基本路線にしっかりと依拠し、国の経済的自立性と国家の自主的発展をもたらすための人民経済の発展方向と具体的な課題を明らかにした。

金日成首相はテーゼにおいて、祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義革命と社会主義建設を促進するために、革命の参謀部である党を組織思想的にいっそう強化することにかんする重要な課題を提示した。

首相は、党を組織思想的に強化するためには、党の隊列の鋼鉄のような統一と団結を保障し、党規律を強化し、党内民主主義を発揚させ、党の政策学習をいっそう強化しなければならないと強調した。

また首相は、革命の強力な武器であり、党の政策の執行者である国家主権をいっそう強化し、革命の防衛者である人民軍隊を鋼鉄のような幹部軍隊に鍛練する問題についても指摘した。

金日成首相が発表したテーゼは、朝鮮革命の性格からして、共和国北半部における社会主義革命と社会主義建設にかんする理論を全面的に明らかにした偉大な綱領であり、金日成首相の革命思想、主体思想が輝かしく具現された不滅の天才的労作であった。

金日成首相が発表したテーゼは、すべての党員と勤労者たちに朝鮮革命にたいする明確な認識をあたえ、革命課

題の遂行において主体的な立場を守り、高い階級的自覚にもとづいて朝鮮革命を最後まで遂行するよう、たたかいの前途を明らかにした点でじつに巨大な意義をもっていた。

朝鮮人民はテーゼが明らかにした道にしたがって勝利のうちに前進し、社会主義革命と社会主義建設において輝かしい勝利を達成した。

じつにこのテーゼは、共和国北半部を短期間に自立的民族経済の確固とした土台をもつ社会主義強国に、社会主義の模範に発展させた偉大な主体的綱領であった。

金日成首相は、テーゼで明らかにした社会主義革命と社会主義建設の課題を遂行するために、階級教育を強化し、党の思想活動において教条主義、形式主義を一掃し、主体を徹底的にうちたてる問題に深い関心をはらった。

首相は、南朝鮮を占領しているアメリカ帝国主義者とその手先ども、そして北半部にの

金日成首相の著作とその原稿

こっている反動的な要素、くつがえされた階級の残存分子たちがおこなう破壊策動をうちくだき、社会主義革命を力強く前進させるためには、すべての党員と勤労者たちが革命の主人にふさわしい態度と階級的立場をしっかり守り、高い自覚性と創造的な積極性を発揮しなければならないと考えた。

こうした革命の切実な要求をとらえた金日成首相は、一九五五年の四月はじめに朝鮮労働党中央委員会総会をひらき、革命発展の要求にあうよう党の思想活動で階級教育活動を強化し、主体を徹底的にうちたてることについての方針をさししめした。

階級教育活動は、人びとを労働者階級の思想で武装させる思想教育活動であり、勤労者たちの階級的自覚を高めることによって、かれらが階級的な敵と非妥協的にたたかい、自己の階級的利益のためには水火をもいとわず闘争し、革命の主人にふさわしい自覚と創造的な情熱を高めるところにその基本的な目的がある。

金日成首相は総会の報告で、党員と勤労者たちのなかで思想活動、とくに階級教育活動を強化する必要性と意義を強調し、階級教育活動の基本方向とその原則を明らかにした。

そして思想活動、とくに階級教育活動における教条主義と形式主義をなくし、主体をしっかりうちたてることについて強調した。

首相は、階級教育活動を朝鮮の具体的な現実、革命と建設のための実地闘争と正しく結合させてすすめてこそ、党員と勤労者たちを革命のために自己のすべてをささげ、献身的にたたかう革命家として育てることができるとのべた。

党中央委員会総会では、金日成首相のテーゼ『すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために』を、全党員と勤労者たちが義務的に学習しなければならない文献として採択した。

思想教育活動において主体を確立し、党員と勤労者たちのなかで労働者階級の意識を高めることにたいする首相

の原則的立場と正確な方向、そして積極的な対策によって、党の思想活動ではかつてない大きな転換がおこった。党員と勤労者たちは正しい階級的観点にたって、党の路線と政策を最後まで責任をもって実践しようという革命的気風と創造的熱意を発揮した。

金日成首相は、党員と勤労者たちのなかで階級教育を強化する活動を、思想活動における事大主義と教条主義を根絶し、主体を徹底的にうちたてるためのたたかいと密接にむすびつけてすすめた。

教条主義と事大主義に毒されたものたちは、革命に少なからぬ害毒を流した。

事大主義者と教条主義者たちは自国の現実を研究しもせず、それを無視しながら他国の経験をそっくりまね、それを機械的に適用しようところみた。かれらは他人だけを見つめ、他人のまねをすることだけが習性となっていたため、最後には自分のものはすべて悪く、他人のものはすべてよいという民族虚無主義におちこんでいった。

こうした事大主義、教条主義は、とくに戦後、社会主義革命と社会主義建設が本格的に展開されるにつれていっそう露骨化した

教条主義者と事大主義者たちは、自主的な党の政策に反対しながら、あたかも朝鮮労働党が他国の党の路線と政策を「異端視」したかのような中傷をくわえた。

かれらは、朝鮮労働党が新しい路線と政策をうちだすと、それがまず他国の党の政策と一致するかどうかに物指しをあててみた。

たとえばかれらは、重工業を優先的に発展させ、軽工業と農業を同時に発展させるという経済建設の基本路線にたいしても、それがマルクス・レーニン主義の古典にはなく、他国においてもおこなわれた経験がないのに、いったいどうするのかといいがかりをつけたりした。

また教条主義者たちは、現代的な農機械をただちに生産できない状況のもとで、農業協同化方針を提起したこと

は「時期尚早」だと誹謗し、農業協同化運動が広はんに展開されると、今度は、協同化の速度があまりにも早すぎるとわめきたてた。

かれらは資本主義的商工業にたいしても、他国におけると同様に、それを育てて利用しようとせず、なぜ改造するのかと非難した。

教条主義者たちは、インテリ政策においても、古いインテリを教育し改造することについての朝鮮労働党の方針が提示されると、それは「右傾化」であるといいがかりをつけた。

戦争の時期にその害毒が大きくあらわれた教条主義は、戦後に社会主義革命と社会主義建設が本格的に展開されるにつれ、いっそうがまんのならない言動にでた。こうした教条主義や事大主義は結局、党の政策を実行に移すうえで消極性を生み、決定的な障害となっていった。

このように、革命と建設に大きな害毒をおよぼした反党反革命分派分子らは、本質的に例外なく事大主義者であった。そのため、国際共産主義運動内に発生した修正主義的潮流がしのびこむ危険さえ生まれた。

革命が発展するにつれ階級闘争がいっそう激化した点と、教条主義や事大主義の弊害を深く洞察した金日成首相は、思想活動で主体をうちたてることにかんする確固とした方針をかかげ、それをつらぬくためにひきつづき強力な思想闘争を展開した。

事大主義と教条主義に反対し、主体を確立するための金日成首相の一貫したたたかいのなかで、一九五五年十二月二十八日、党の宣伝扇動活動家たちのまえでおこなった歴史的演説『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体を確立することについて』は巨大な意義をもっていた。

金日成首相はこの演説において、すでに一九五五年四月の中央委員会総会で提示した思想活動の方針的な問題、すなわち主体確立の方法と意義をふたたび具体化した。

首相は、党の思想活動と国の全般的な分野に害毒を流している教条主義的現象を指摘しながら、党の思想活動における主体とはなにかについて、つぎのようにのべた。

「わが党の思想活動における主体とはなにか？　われわれはなにをしているのか？　われわれはほかの国の革命でもない朝鮮革命をおこなっています。この朝鮮革命こそ、わが党の思想活動における主体であります。したがってすべての思想活動は、必ず朝鮮革命の利益に服従させなければなりません」

つづいて首相は、朝鮮人民が他国の党史や革命史を研究すること、またマルクス・レーニン主義の一般的原理を研究することは、すべて朝鮮革命を正しく遂行するためにおこなうものだとのべながら、なにを学んでも、こうした立場にたたなければならないと強調した。

首相は主体を徹底的にうちたて、朝鮮革命を正しく遂行するためには、朝鮮の現実をよく知ることがまずたいせつだとのべながら、朝鮮の現実を研究するにあたっては、なによりもまず朝鮮労働党の思想、朝鮮労働党の路線と政策でしっかりと武装しなければならないと教えた。

朝鮮労働党の思想と政策は、朝鮮革命の遂行過程で生まれたマルクス・レーニン主義として、朝鮮革命遂行のためのすべてがふくまれている。したがって、朝鮮労働党の思想と政策で徹底的に武装することは、朝鮮革命をもっとも正しく、もっとも力強く遂行する第一歩であり、基本的な力となる。それだけでなく、それは革命と建設のすべての活動を朝鮮労働党が意図したとおりに遂行する重要な保障であり、修正主義、左翼日和見主義、事大主義、教条主義、分派主義、ブルジョア思想、封建儒教思想など、あらゆる反動思想を根こそぎにする唯一の方法であった。

金日成首相はまた、主体を徹底的に確立するためには、朝鮮人民の革命の歴史と朝鮮労働党の革命伝統で武装しなければならないと教えた。

首相は、革命伝統をよく知ってこそ、すべての党員と勤労者たちが朝鮮労働党の深い根源を知ることができ、いかに困難で複雑な条件のもとでも、抗日革命闘士のように自力更生の革命精神と民族的自負心をもって、ひたすら党と革命に忠実であることができるとのべた。

金日成首相は、国際主義と愛国主義は決して矛盾しないと指摘しながら、その相互関係についても明確な解明をあたえた。

「愛国主義と国際主義は切りはなすことができません。自分の祖国を愛しないものが国際主義に忠実であるはずはなく、国際主義に忠実でないものが、自分の祖国と人民に忠実であるはずはありません。真の愛国主義者は、すなわち国際主義者であり、また真の国際主義者は、すなわち愛国主義者であります」

金日成首相のこの綱領的な演説は、歴史的にひきつがれた事大主義と教条主義思想の毒素を一掃し、すべての分野で主体を確立し、自主、自立、自衛の革命的な路線を全面的に具現するうえで根本的な転換をもたらした。またそれは、国際共産主義運動の内部に台頭した修正主義、教条主義、分派主義に反対する深刻なたたかいにおいて、マルクス・レーニン主義の原則を固守し、主体思想の偉大な勝利をもたらす確固とした保障となった。

金日成首相のこの綱領的な教えがあったのち、教条主義、事大主義に反対し、主体をうちたてるための全党的な思想闘争がはじまった。

その結果、教条主義、事大主義、分派主義、民族虚無主義などの反党的な思想が克服され、思想活動をはじめとするすべての分野において主体が徹底的に確立された。

党隊列の思想と意志の統一が強化されたし、すべての活動家と勤労者たちが金日成首相の革命思想とその具現である党の路線と政策以外は、どのような思想にも関知しない主体的立場にしっかりとたつようになった。

党員と人民のなかで民族的自負心と自主意識が高まると、他人の物指しではなく、マルクス・レーニン主義を朝

鮮の現実に具体化した金日成首相の偉大な革命思想と、その具現である党の路線と政策を基準として他人のものをはかり、それがあわないときには必要のないものとしてしりぞけ、すべての問題を自分の知恵と力で解決する革命家的気風がいっそう徹底的に確立された。

思想の分野において主体が確立するにつれ、国のすべての分野でも党の自主、自立、自衛の精神がりっぱに具現されていった。

こうして、すべての分野に主体が徹底的にうちたてられた結果、戦後復旧建設の困難な歴史的課題は輝かしく遂行された。主体が確立されたため、朝鮮革命のまえに一大試練がおとずれた時期にもあらゆる敵と不純分子たちのあがきをうちくだき、社会主義建設を大高揚へと導いた千里馬運動をおこすことができたし、革命と建設で勝利につぐ勝利をかちとることができたのである。

第六章　社会主義革命の歴史的勝利

1　社会主義革命の勝利のために

革命の発展過程には、新たな局面がひらかれた。
戦後三か年人民経済計画は基本的に遂行され、工業と農業生産は戦前の水準をはかるに上回っていた。一方、都市と農村における生産関係の社会主義的改造でも大きな成果がもたらされた。
金日成首相は、革命と建設をさらに前進させ、社会主義の基礎を建設する事業を完成させる新しいたたかいを構想しながら、国内情勢を綿密に分析した。
情勢はきわめてきびしく、複雑であった。
国際的には、帝国主義者の侵略と戦争の策動がますます露骨となり、国際共産主義運動の隊列の内部では、現代修正主義者が頭をもたげていた。
かれらは帝国主義者との闘争をやめ、無原則的に妥協する方向にすすみ、帝国主義、とくにアメリカ帝国主義にたいする幻想をふりまきながら、社会的および民族的な解放をめざす諸国人民の革命闘争をあらゆる面からさまたげた。このため国際革命運動は重大な難関に直面し、国際共産主義運動は大きな試練にさらされた。

これに歩調をあわせて、内外の敵どもは朝鮮革命の勝利の前進をはばもうとやっきになって策動した。南朝鮮を占領したアメリカ帝国主義者とその手先どもは、戦争政策とファッショ化政策を強め、いっそう「北進」をさわぎたてた。

一方、党内にひそんでいた事大主義と教条主義に毒された反党分派分子は、複雑な情勢のすきに乗じて、党の主体的で独創的な路線と政策に反対した。

革命と建設の合法則的な要求と、当面の内外情勢を主体的立場にたって科学的に分析した金日成首相は、全党と全勤労者に、社会主義の基礎建設において提起される革命と建設の具体的な課題を明らかにした。そして党の統一と団結をいっそう強め、すべての分野で主体性を確立し、現代修正主義に反対し、マルクス・レーニン主義の純潔性を守るたたかいを力強くくりひろげるための戦闘的な課題が、党のまえに提起されていることを痛感した。

金日成首相は、このさしせまった問題を解決するために党大会の開催を提起した。

一九五五年十二月にひらかれた党中央委員会総会では、一九五六年四月に第三回党大会を招集することにかんする決定が採択された。

全党員と人民は、政治的熱意と勤労意欲の高まりをもって勝利と栄光の党大会をむかえた。

一九五六年四月二十三日、歴史的な朝鮮労働党第三回大会がピョンヤンでひらかれた。

全党員と人民大衆は、党大会がひらかれるピョンヤンに耳目を集中し、大会でしめされる首相の教えを待ちわびていた。

四月二十三日午前九時、金日成首相が党のおもな幹部と兄弟党の来賓たちとともに大会の主席壇にあらわれるや、全参加者の嵐のような拍手と、「朝鮮労働党万歳！」「金日成同志万歳！」の熱狂的な歓呼がながく場内をゆるがした。

大会の初日に金日成首相は、党中央委員会の活動総括にかんする歴史的な報告をおこなった。

報告は総括期間、党の活動でおさめた偉大な業績と経験を総括し、祖国の自主的統一と北半部における社会主義の基礎建設をうながし、党をいっそう強化するための革命的な路線と方針をうちだした綱領的な文献であった。

金日成首相は、報告のはじめの部分で、総括期間、国際情勢にあらわれた新しい変化について科学的な分析をくわえた。

金日成首相はとくに、複雑な国際情勢に対処して現代修正主義に反対し、マルクス・レーニン主義の純潔性を守り、プロレタリア国際主義の原則を堅持しながら、社会主義陣営と国際共産主義運動の統一と団結を守ること、またアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の新興勢力との親善と団結を強め、この地域の人民の反帝民族解放闘争と諸国人民の革命運動を支援すること、そして帝国主義の侵略と戦争政策に反対し、世界平和と人類の進歩のために断固たたかうことを党の対外政策の基本としてうちだした。

首相は報告のつぎの部分で、平和的建設と祖国解放戦争および戦後復興建設の三つの時期にわたる総括期間に、国内生活でおきた大きな歴史的な変革について総括した。

首相は、総括期間の困難かつ複雑な情勢のもとで、それぞれの時期にマルクス・レーニン主義を国の具体的な実情と革命発展の要求にあうよう創造的に適用し、もっとも正確な路線と政策をうちたて、それを実現するために心血をそそいだ。

首相がうちだした独創的な革命路線とすべての政策、とくに戦後の復興期に明らかにした社会主義基礎建設における段階の設定とその全般的な課題、重工業の優先的な発展を保障しながら、軽工業と農業を同時に発展させるという経済建設の基本路線、農業協同化と個人商工業の社会主義的改造の方針などは、金日成首相の主体思想を革命と建設にりっぱに具現した生きた模範であった。これらの路線は、たちおくれた状態から社会主義にむかうもっと

も早い道をさししめし、実践をつうじてその正しさと偉大な生命力を証明することによって、理論的、実践的にマルクス・レーニン主義の宝庫をゆたかにする偉大な貢献をなした。

報告のなかで金日成首相は、総括期間に達成したすべての勝利と成果は、今後のぼう大な課題に照らしてみるとき、それはまだ第一歩にすぎないとのべ、祖国の自主的統一と社会主義建設の明確な展望と闘争綱領を大会に提起した。

こうした綱領として、まず北半部における社会主義基礎建設の完成を目的とする、五か年計画の基本方向と、社会主義建設の各分野にわたる展望的な課題を明らかにした。

首相は、五か年計画の基本方向について、こうのべた。

「人民経済の各分野にわたって社会主義的部門をさらに拡大発展させ、工業化の基礎建設をいっそう力強くおしすすめ、軽工業と農業の生産を高い水準にひきあげ、人民の物質、文化生活をひきつづき向上させなければなりません」

首相がすでに戦後の復興期にうちだした社会主義基礎建設の全般的任務は、生産関係を社会主義的に改造し、社会主義的工業化の基礎を築くことにあった。

このことから金日成首相は、五か年計画の期間に都市と農村で社会主義革命をひきつづき力強くおしすすめ、農業協同化と個人商工業の社会主義的改造を完成する任務をうちだした。

首相はこうのべた。

「農業の社会主義的改造のたたかいで、われわれがおさめた貴重な経験と成果は、第一次五か年計画の期間に農業の全般的な協同化を完成しうる見とおしをわれわれにあたえてくれました。農業協同組合にたいする党と国家の指導と援助を強めることによって、協同組合を組織的、経済的にいっそう強化発展させ、すべての農民を協同経営

に参加させなければなりません」

金日成首相は、五か年計画の期間に、社会主義建設の分野では社会主義的工業化の基礎を築き、人民の衣食住を基本的に解決することをその中心課題としてうちだした。

首相は、このような五か年計画の中心課題を、成功裏に実現するためには、重工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業を同時に発展させる経済建設の基本路線を、ひきつづき徹底的に実行しなければならないと強調した。

金日成首相がしめした五か年計画の中心課題は、首相のすぐれた経済理論と、遠くを見とおす英知によって、明確な闘争の展望を明らかにする道しるべでもあった。

これは経済建設と人民生活の問題を合理的にくみあわせて、つりあいがとれるように解決するためのものでもあった。

これはまた、経済発展の合法則的な要求をもっとも正確に反映したものであり、祖国の統一と今後の繁栄のための全民族的な利益にも全面的に合致するものであった。

金日成首相は、五か年計画を技術的改造の第一段階とさだめ、その基本方向にもとづいて工業の植民地的跛行性を完全になくし、自立的な民族経済のゆるぎない土台を築くための各工業部門の課題をしめした。

首相のしめした五か年計画は、きわめてぼう大なものであった。計画期間に工業総生産高は二・六倍以上に、農業総生産高は二倍以上に高めることが見こされていた。これはじつに、五か年計画の終わりには、一年間で戦後三か年計画の全期間に生産したものよりはるかに多い工業製品が生産されるということを意味するものであった。

金日成首相はまた、人民の衣食住の問題を解決することのできる大きな展望を切りひらいた。

首相は五か年計画の基本課題を決定するにあたり、人民の衣食住の問題を基本的に解決する方向で、蓄積と消費

をいっそう合理的にくみあわせることに大きな関心をはらった。つまり、蓄積を系統的にふやす基礎のうえで消費を同時に増大させ、それにもとづいてぼう大な経済建設をすすめながら、人民の衣食住を同時に解決できるよう五か年計画の課題を設定したのである。

金日成首相のしめした五か年計画はじつに、抑圧と搾取のない社会主義国に、すなわち、たちおくれた国を強固で自立的な民族経済の土台をもつ社会主義工業＝農業国にかえるための偉大な設計図であった。

金日成首相は報告のなかで、祖国統一の大業をうながし社会主義建設を成功裏に遂行するために、国家社会制度を強化し、発展させるための具体的な課題も明確にしめした。

首相は、労働者階級の指導的役割を高め、労農同盟をいっそう強め、革命の強力な武器である人民政権機関をしっかりとかためてその機能と役割を高めながら、活動家たちのなかで革命的な活動作風と活動方法をしっかりとうちたてるための課題をしめした。

とくに首相は、アメリカ帝国主義者とその手先どもが新たな戦争の準備と破壊謀略策動を強めていることに対処して、内務、検察、司法機関の役割を高め、敵のあらゆる破壊謀略策動をすばやく摘発し、粉砕することについて強調した。

報告のなかで金日成首相は、一貫して堅持してきた祖国統一の基本原則をかさねて明らかにし、その実現のための新しい方策をしめした。

首相は、南朝鮮にかいらい政権がでっちあげられたのち、アメリカ帝国主義者とその手先どもの十年間の支配がもたらした重大な事態を分析し、現段階における朝鮮革命の基本任務は、祖国の自主的統一を実現することであるとのべた。

金日成首相は、当時南朝鮮で平和統一を希望する勢力がひきつづき高まり、南北の話しあいをもとめる気運がま

すます強まっていた情勢を正しくとらえ、祖国統一という共通の目的のもとに南朝鮮のすべての政党、社会団体および個別的人士との連合を主動的に主張するとともに、南北連席会議、または個別的な会談の開催を提案した。

これとともに、南朝鮮人民の当面の闘争課題の一つは、祖国統一のための主体的な力を強めるうえで、もっとも大きな障害となっているアメリカ帝国主義者と李承晩一味のファッショ独裁に反対し、民主的自由と権利をかちとることであるとのべた。

大会は、首相の祖国統一についての構想と方針を具現した宣言『祖国の平和的統一のために』を採択し、自主的な祖国統一をめざす党と人民のたたかいに新たな局面を切りひらいた。

報告のつぎの部分では、総括期間に党を強化するたたかいでおさめた大きな成果が総括され、党を組織的、思想的に強化するための課題が全面的に明らかにされた。

金日成首相は、祖国の統一と北半部の社会主義建設を促進するうえで決定的なうらづけとなるのは、革命の戦闘的な参謀部である党を強化し、その戦闘力をあらゆる面から強めることであると強調した。

総括期間に、党の隊列は量的ばかりでなく、質的にも強化され、党の指導的役割は国家生活の全般的な分野でいっそう高まった。党はその献身的なたたかいによって、広はんな大衆のなかに、深く根をおろした不敗の戦闘的隊列に成長した。

党の発展で重要な意義をもつのは、党を内部から切りくずそうと悪らつに策動していた謀略分子、分派分子、さまざまな日和見主義者をそのつど摘発、一掃し、党の統一と団結をいっそう強化したことであった。

金日成首相は、党を強化するたたかいでおさめた成果を総括するとともに、歴史的に朝鮮の革命運動におよぼした分派の罪状をえぐりだし、とくに八・一五解放以後、南朝鮮で党組織が全面的に破壊されたおもな原因は、アメリカ帝国主義のスパイ朴憲永、李承燁一味と分派分子の罪悪行為にあることを指摘し、党の反分派闘争の歴史的経験

で全党を武装させた。

首相は、党を強化するたたかいにおいて、ひきつづき反分派闘争を重視し、まだ党内に分派ののこりかすとその思想的害毒がのこっていることを警告しながら、つぎのように強調した。

「われわれは、朝鮮革命の参謀部であるわが党の指導的役割をあらゆる面から高め、その戦闘力をいっそう強化するために、これまでのたたかいでかちとった党の統一と団結を瞳のように守らなければなりません。党を切りくずそうとする敵のあらゆるたくらみを徹底的に粉砕し、党内に発生しうるあらゆる不純な要素にたいして高度の警戒心を堅持し、かれらに容赦のない打撃をあたえなければなりません」

金日成首相は、党のまえに提起されたぼう大な革命任務と党発展の実情にもとづいて、党をしっかりかためる問題をとくに強調した。

これは当時、国際的に修正主義が台頭していた状況のもとで、その浸透を徹底的にふせぐためにもいっそうさしせまった問題として提起された。

金日成首相は、党組織の指導活動でのこっている一連の古い作風を深く分析、批判し、党組織の指導活動と党の思想教育活動を強化するための具体的な課題をしめした。

金日成首相は、党を強化するためには党員の党派性をいっそう高め、かれらの日常的な党生活を強化することがなによりも重要であるとのべ、党員の党生活で提起される具体的な課題を明らかにした。つまり、党員のすべての活動と生活の基準であり、基礎である党の規約上の義務を正しく順守するよう指導、統制し、党内民主主義を発揚させ、批判と自己批判、とくに下部からの批判を強めることによって、党員の創意性を高めなければならないと教えた。これとともに、党組織が、党員を解説と説得の方法で根気強く教育しなければならないことも指摘した。

そして、幹部と党員のなかで革命的な大衆観点を確立し、党と大衆とのむすびつきを強め、大衆のつきない創造

力を正しく組織し動員する問題、また主観主義と形式主義的な活動作風を一掃し、党の活動方法を改善することによって、行政、経済活動にたいする党の指導を強める問題など、党を強化するうえで党組織の指導活動のまえに提起された具体的な課題を明らかにした。

首相は党を強化するたたかいで、党の思想教育活動を強めることに、とくに注意をはらった。

首相は、大衆とはなれ、朝鮮革命の実践的な問題とまったくかけはなれた一般的な訴えや、「宣伝のための宣伝」をきびしく批判し、大衆政治活動が勤労大衆の社会主義的意識を高め、かれらが党と人民のまえに提起された政治的、経済的課題を自覚的に遂行できるようにしなければならないとのべた。

このことから出発して首相は、党の思想教育活動の分野でのおもな課題は、教条主義と形式主義を克服して主体性を確立することであると規定し、そのための具体的な課題を明示した。

金日成首相がしめした党強化の方針と具体的な課題は、党の統一と団結を守り、党の隊列を組織的、思想的にいっそう強化するたたかいにおいて綱領的な指針となった。

首相は報告を終えるにあたり、つぎのように強調した。

「われわれは全朝鮮人民を正しく導いて、祖国の民主主義的な統一と独立の大業を達成し、共和国北半部の革命的民主基地をいっそう強化するために、社会主義の基礎建設をりっぱに遂行しなければなりません」

金日成首相の報告は、大会参加者の熱狂的な歓迎をうけた。

党大会でうちだされた革命的な路線とすべての方針は、当時の内外情勢にたいするふかい科学的な分析にもとづいて、すべての問題を独自的に、創造的に解決してゆく、金日成首相の偉大な主体思想を輝かしく具現したものであった。それはまた、革命の発展が提起する機の熟した問題を適時にとらえ、これを正確に解決する首相の明哲で科学的な洞察力と洗練された指導の正しさをはっきりと証明するものであった。

北半部のすべての勤労者は、この年のメーデーを党大会の大きな成果を祝って、とくに意義深く迎えた。この日、ピョンヤン市民の大デモンストレーションと、各地でおこなわれた野外集会、大衆デモに参加した勤労者は、第三回党大会の活動を熱烈に歓迎し、大会の決定を実現するかたい決意と闘志にみなぎっていた。これは偉大な領袖金日成首相が指導する党のまわりにかたく団結して、新しい偉大な勝利をめざしてはやてのようにかける朝鮮人民の力の示威でもあった。

全党と全人民は、金日成首相が明らかにした綱領的課題を高くかかげ、社会主義の基礎建設を完成するための荘厳なたたかいにたちあがった。

任務はおもく、前途はけわしかったが、党と人民は一つの大きな戦闘隊列をくみ、領袖がさししめす大業の勝利めざして力強く前進した。

2　農業協同化への近道

戦後の復興期、工業でひきつづき革新の炎がもえさかっていたとき、金日成首相はもう一つの戦線で偉大な革命運動を指導していた。それは、農村の社会主義的協同化と都市の個人商工業を、社会主義的に改造するたたかいであった。

農業の協同化は、勤労者が伝説的な千里馬の勢いで社会主義建設における飛躍と革新をおこしはじめた一九五六年～五七年ころ、すでに最後の勝利の段階にはいっていた。

農民大衆をあらゆる搾取から解放して社会主義勤労者に改造し、かれらを社会主義・共産主義へとみちびくことは、労働者階級とその党のまえに提起されたもっとも重要な課題の一つであった。

わが国はかつてたちおくれた農業国であり、農民が人口の過半数を占めていたため、金日成首相はこの問題に特別な関心をはらった。

金日成首相は解放直後、土地改革を実施して農民を封建的な搾取から解放し、かれらの生活水準をいちじるしく高めた。

しかし、首相は、「農業生産力を古い生産関係のくびきから完全に解放し、農民を搾取と貧困から終局的に解放するただ一つの方法は、農業の社会主義的協同化」であると教えた。

民主革命の段階で遂行した土地改革が、封建的な土地所有関係を一掃して農民を地主の搾取と隷属から解放し、農業生産力を封建的な生産関係のくびきから解放したものであるとすれば、社会主義農業協同化は、農村から資本主義の要素を一掃し、個人農業経営を社会主義的な集団経営に改造して農民をあらゆる搾取と貧困から永遠に解放し、農業生産力を私的所有にもとづいた古い生産関係のくびきから、完全に解放することを意味した。

個人農経営を協同化することによってのみ、農村における搾取と貧困の根源を完全に一掃することができるだけでなく、農業を計画的にいとなみ、農業に先進的な技術をひろく導入し、農業生産力をすみやかに発展させ、それにともなって農民の生活をいっそう向上させることができた。

金日成首相は早くからこの問題を解決するために、アジアではじめての、もっとも徹底した土地改革を実施し、ひきつづき農業協同化を準備するための見とおしをもった政策をそれぞれの時期にしめし、これらをつらぬいた。

集団的な国営農牧場の創設と拡張、農村の信用協同組合および消費協同組合の創設とその強化、農機械賃耕所の創設とそれをつうじての農村にたいする支援、農民がつくった労働協力班にたいする奨励と支援などの措置は、すべて農業協同化の条件をととのえるためのものであった。

土地改革をはじめとするこうした措置は、農業協同化運動の確固たる前提条件となった。

戦後、個人農経営の社会主義的協同化は、おくらせることのできないさしせまった要求として提起された。

戦後、農業部門でもっとも緊急な問題として提起されたのは、戦争による大きな被害のために苦しくなった農民の生活を、みじかい期間内にたてなおすことであった。

しかし、戦争のために事情が悪化した個人農経営では、たちおくれていたうえ、破壊された農業をすみやかに発展させることができず、したがって、戦後の困難をきわめた食糧問題を解決することもできなかった。

また個人農経営をそのままにしておいては、新しい技術で急速に発展する工業に農業を追いつかせることができず、人民経済を全般的に発展させることもできなかった。

それればかりでなく、個人農経営をそのままにしては、労農同盟をさらに強化することも、階級の敵が根をおろす経済的地盤を完全になくすこともできず、したがって北半部の革命基地をいっそうちかためることもできなかった。

農民もまた、いままでのような古い方法では生活できないことを感じていた。

これらすべての事情を綿密に考慮した金日成首相は、農業の社会主義的協同化がもはやおくらせることのできない現実の要求であると判断し、大胆にこの運動をおしすすめた。

首相は、朝鮮労働党第四回大会の演壇にたったとき、当時をふりかえりながらつぎのようにのべた。

「戦後のわが国の状況では、農業の協同化はこれ以上解決をおくらせることのできないさしせまった要求となり、農民自身が古い方式をつづけては暮らしていけないということをその生活の苦しさから悟りはじめていました。そこでわが党は停戦直後に、農業協同化の課題をうちだし、農民の熱意が高まるにつれて、この運動を積極的におしすすめました」

しかし農業協同化は、はじめから終りまで慎重さと創意性を発揮せずしては成功できない、きわめて複雑で長期

にわたる困難な革命であった。なぜなら、農業協同化は、数千年ものあいだつづいてきた小農経営を根こそぎにする根本的変革であるばかりでなく、勤労者としての肯定的な面と小所有者としての保守的な側面をあわせてもつ農民を、社会主義的な勤労者に改造する深刻な闘争であったからである。

事実、社会主義を建設するいかなる国の党や指導者も、この問題にかんしてはきわめて慎重な検討をかさねた。一部の国では、一定の混乱さえまねいた。ところが共和国北半部の場合は、戦争によって農業が破壊され農民の生活が零落していたうえに、工業化が遂行されなかったため、問題はさらに深刻であった。

しかし金日成首相は、この問題においても独創的な方針をうちだし、禍いを福に転じながら、農業協同化運動をもっとも順調で近い道へと導いていった。

金日成首相は、農業協同化の任務を完全に独創的に解決した。

首相は農業協同化を実現するにあたり、技術改造に先だってそれを遂行する大胆で創造的な道を切りひらいた。これは、生産関係の社会主義的改造と技術改造の順序を根本的にかえた独創的で主体的な方針であった。

この方針は内外の少なからぬ人びとをおどろかせた。技術改造を先だたせてこそ経済形態の改造が可能であるかのように考えていた教条主義者たちは、首相の革命的な方針を理解することができなかった。かれらは、「社会主義的工業化を実現しないことには、生産関係の社会主義的改造は不可能である」とか、「現代的農機械なしには農業を協同化することができない」といいながら、この方針に疑問をはさみ、動揺した。

しかし金日成首相は、技術的条件は社会主義的協同経営の優越性を発揮させる不可欠の条件にはなるが、協同化実現の不可欠の条件にはなりえないとみなした。

首相は、生産力と技術の発展水準が比較的に低い条件のもとでも、生活が古い生産関係の改造を切実に要求し、またそれをやりとげるほどの革命勢力が準備されているときには、ためらうことなく社会主義的改造を遂行して、

社会主義的生産関係を確立することができ、またそうすべきであると考えた。

戦後の共和国北半部では、農業の社会主義的改造がさしせまった要求として提起されていただけでなく、革命できたえられ、党と領袖のまわりにかたく団結した農民大衆があり、かれらの政治的熱意はきわめて高かった。

これらすべてを考慮して金日成首相は、「人民経済の技術的改造が実現できるまで工業が発展するのを待つのではなく、社会発展の成熟した要求にしたがって先に生産関係の社会主義的改造を遂行し、生産力をすみやかに発展させ、とくに技術革命のためのひろびろとした道をひらく」積極的な方針をうちだした。

このように、経営形態の改造を技術改造に先だたさせて遂行する方針は、金日成首相がはじめて明らかにした独創的な方針であり、これは、たちおくれた経済をもったままで社会主義の道にはいる国々における社会主義革命の遂行に大きな理論的、実践的意義をあたえるものである。

金日成首相はこうした大前提にたって、農業協同化の具体的な方針を創造的にうちだした。

金日成首相は、農業協同化の実現で自発性の原則を朝鮮の具体的な実情にあうように創造的に適用した。

首相は農業協同化運動を指導するにあたり、もっとも重要なことは、「……自発性の原則を厳格に守り、実践的な模範をとおして農民に協同経営の優越性を認識させる基礎のうえで、この運動を発展させることである」とのべた。

首相は、農業がひどく破壊され、協同経営を組織運営した経験のある準備された幹部がたりず、農民の文化技術水準が低い実情などを具体的に考慮し、まず貧農と党の中核分子で各郡にいくつかの協同農場を組織し、それを強化する経験的な段階をもうけた。

首相は、この経験的な段階をへて幹部に協同化運動を指導できる経験と教訓をつませ、協同化運動の勝利にたいする確信をもたせ、農村の具体的な実情にあう形態とその規模など、協同化の具体的な方法と速度を正確に規定で

きるようにした。そして一方では、実物教育と実践的な模範をつうじて協同経営がすぐれていることをしめし、広はんな農民大衆、とくに中農が自発的に協同農場に加入できるようにした。

金日成首相はまた、農業協同化で階級政策を正しく規定した。

農業協同化運動は資本主義的要素をなくし、農民をあらゆる形態の搾取と抑圧から解放する深刻な階級闘争であるだけに、正しい階級政策を実施し、階級的力関係を正しく配置することがきわめて重要であった。

協同化を実施した当時の農村の階級構成は、貧農が四〇パーセント、中農が五九・四パーセント、富農が〇・六パーセントであった。

そのうち、貧農は党の協同化政策をもっとも積極的に支持した。中農は、協同化にたいする態度がそれぞれちがっていた。すなわち、土地改革の結果形成された新しい中農は貧農とともに協同化を積極的に支持し、のこりの中農は動揺し、ためらった。富農は協同化にそっぽをむくか反対する立場にあった。

金日成首相は、農村のこうした階級構成とかれらの動向を科学的に判断し、一貫して「貧農にしっかりと依拠しながら中農との同盟を強化し、富農を制限ししだいに改造する」階級政策を実施した。

金日成首相は、農民の各階層にたいして具体的につぎのような対策を実施した。

貧農にたいして——、貧農と中核的な党員を中心にして協同農場を組織し、貧農が協同化運動の中心にたって先駆者的な役割をはたすようにした。

中農にたいして——、中農がもっている階級的な二重性を考慮し、かれらの利益をそこなったり、かれらとの同盟を弱めるようなあらゆる行為を厳禁し、実物教育を基本にしてかれらを協同経営に積極的にひきいれるようにした。

富農にたいして——、富農を階級として収奪するのではなく、かれらの搾取者的本性をきびしく制限し、労働に

たいする教育をとおして社会主義勤労者として改造するようにし、反抗するものにたいしてはきびしい制裁をくわえるようにした。

したがって、農業の社会主義的改造は資本主義的要素にたいする深刻な階級闘争を前提にしたものであった。

金日成首相が、富農を収奪する方法によってではなく、しだいに改造していく方針をとったのは、社会主義革命勢力が強大であり、富農自体が弱く、社会主義改造の急激な前進にともなって富農の搾取的地盤がなくなったことなど、具体的な条件を科学的に分析したうえでの創造的な階級政策であった。

金日成首相がしめした農業協同化の創造的方針のもう一つは、農業協同化運動と協同農場にたいする国家の強力な支援である。

この方針をしめすにあたって首相が考慮したことは、第一に、農村と農民にたいする支援と援助は主権をにぎった労働者階級の使命であるということ、第二に、どのような経営制度も一定の階級の支援のもとでのみ発生し、発展するということ、第三に、農業協同経営はプロレタリア独裁のもとで発生したものであって、個人農経営とは比較できないほど大規模な生産組織であるということ、第四に、協同農場が戦争で農村がひどく破壊された状況のもとで発生、発展するということなどであった。

金日成首相は、協同化を準備する段階でもそうであったが、協同化の初期から協同農場にたいする全党的、全人民的な運動として国家的支援を強めるようにした。

これは、協同化運動を最後の勝利に導く強い力になった。

金日成首相がうちだしたこの創造的な方針は、共和国北半部における偉大ではあるが困難な、農村の社会主義的変革をもっとも短期間に誤りなく模範的に完成しうる方針であったばかりでなく、社会主義の建設途上にある国や社会主義をめざしている国ぐにに、勝利の道をしめす規範ともいうべき科学的な方針でもあった。

金日成首相は、このように独創的な方針をしめす一方、みずから協同化運動の先頭にたってこまかな指導をおこなった。じつに、この運動の輝かしい勝利には、工業分野の難問解決に多忙をきわめたにもかかわらず、一日としてやすむことなく、直接各地の農村を現地指導した首相のあつい配慮がこめられているのである。

首相はまず、試験的に各郡にいくつかの協同農場を組織し、党と政権機関の活動家たちを派遣して新しい農村経営の威力を十二分に発揮させ、それが個人農の注目の的になり、農民をひきつけるものになるよう、あらゆる面から支援し、指導した。

一方、党中央委員会第六回総会の直後、首相は中和地区に十四の協同農場を組織し、みずから多くの力をそそいでそれを指導した。

つい最近までは個人農として一人で肥料や農機具、役牛の心配までしていた古い農場員たちは、首相の直接的な指導によってその仕事ぶりや考え方を大きくかえていった。一人ではつみあげられた石ころの山一つで途方にくれていた農民が、みんなで力と知恵をだしあい、土手を切りくずして水をひき、ながいあいだただ一つの方法しかないと思っていた古い農法に見きりをつけ、まったく新しい方法で農業をいとなんだ。

こうしてはじめての年の農作業では、かつてない大豊作がもたらされた。首相は農場員たちの大きな変化について、後日つぎのような興味ある話をした。

「ことし、われわれは中和農業協同組合（当時は農場を組合とよんだ）に三回ゆきました。春にいったとき一部の農民はうなだれてわれわれをむかえましたが、夏になって農業がうまくいっていたときにたずねてみると喜色満面で、秋になると農民たちはうれしさのあまり笑いがとまらないほどでした。ある老人は、『わたしは旧韓国時代から日本帝国義支配の時代、そして共和国の時代になるまで百姓をしてきましたが、ことしのような豊作ははじめてですよ』といったものです」

事実、各地で試験的に組織された協同農場がその年にえた平均収入は、個人経営のときよりも稲作は一町歩あたり一一〇～一五〇パーセント、現金収入は二～七倍もふえたのである。このおどろくべき事実をまえにして、個人農たちは目をまるくした。きのうまでの個人農も、協同農場に加入しさえすれば、自分たちがおどろくべき力を発揮することを悟った。それというのも、農場員たちの収穫高と現金収入が個人農のそれよりもはるかに多かったからである。個人農の場合、土地改良などは力にあまって思うようにできなかったが、農場では集団の力で土地を改良し、区画も大々的に整理して新しい機械まで使用した。そのうえ、いままではせまいところで一日中黙々と働くしかなかったが、いまでは仕事の手を早めながらも笑いと歌のなかで働くようになったのだから、その変化には非常に大きなものがあった。

こうして個人農の心は大きくゆすぶられた。そして、半信半疑だった中農までが協同経営のすぐれていることを深く信ずるようになり、先をあらそって協同農場にくわわるようになった。

金日成首相のあたたかい指導のもとに、経験的段階で実施された実物教育は、このようにして農民の心をしっかりとらえたのである。貧農はもちろん、数多くの中農も協同化の方針を支持した。

経験的段階で、指導的な活動家たちは協同化運動の勝利にたいする確信をいだくようになり、新しい幹部も数多く育成された。こうして協同化運動は一九五四年の党中央委員会十一月総会をきっかけに、新たな大衆的発展の段階にはいるようになったのである。

農民が大衆的に協同経営に参加するようになるにつれ、協同経営の形態と生産手段の総合方式が重要な問題として提起された。

金日成首相は協同経営の三つの形態をさだめ、農民がその実績と自覚の程度によって、自分たちに適したものをえらぶようにした。

すなわち、固定的な労働協力班である第一形態と、土地を統合してその経営を共同でおこないながらも、土地と労働力によって分配をうける半社会主義的な形態である第二形態、さらに、土地をはじめその他の生産手段を共同所有にし、共同経営の収入を労働力によってのみ分配する完全な社会主義的形態である第三形態の三つであった。

金日成首相は、組合員の役牛と農機具のような生産手段を統合する際も機械的におこなわず、かれらの希望にしたがって統合するか、または一定の時期までそれを私的所有としてのこしておきながら共同で利用するようにし、統合するにしても必ずそれ相当の代価を支払うようにした。

首相がうちだしたこの三つの形態と生産手段の統合方式は、中農をして協同経営をたやすくうけいれさせ、協同化の過程でおこりうるあれこれの偏向を事前にふせぐことができるようにした。

一方、農村の技術水準と活動家たちの管理水準を考慮して、はじめは農場の規模を四十〜百戸程度の小さい組織とし、それが強化されるにつれて規模をしだいに大きくしていくようにした。

金日成首相は、いっそう多くの党の力を協同化運動にふりむける一方、党と国家の指導幹部を多くの農場に派遣してそれぞれの農場の指導にあたらせ、かれらの活動報告をつうじて農場の状況をとらえ、経験を統合しながらそのつど新しい措置をとった。

そしてみずからも各地の、農村におもむいて数多くの農場をりっぱにととのえ、その模範を全国に一般化した。

首相は協同化運動の期間中、平安南道の農業部門にたいしてだけでも、じつに百余回にわたって現地指導し、そのうち江西郡青山里には十六回、順安郡元和里には十七回もそれぞれ現地指導をおこなった。

首相はゆく先々で、農民に協同農場のすぐれていることと協同化方針をわかりやすく解説し、この道にすすんでこそみんなの暮らしが文化的なものとなり、国もりっぱになるとのべた。

人民をかぎりなく愛する金日成首相は、かれらに新しい真理をあたえ、かれらとうちとけて話しあうことを大き

な幸福と考えた。首相にとって人民大衆の顔と声はどんな報告書よりも貴重なものであった。

首相はつねに農民と少しのへだたりもなく接し、かれらの暮らしむきやねがい、微妙な心の動きまでとらえ、そのつど革新的な助言と助力をあたえながら革命の前途を順調に切りひらいていった。わずか一年めに協同化運動の経験的段階を総括し、大衆的な発展段階へと導いたのも、また頭をもたげた左右の日和見的偏向を適時に克服して運動を正しく発展させ、協同農場の量的な拡大に質的な成長を追いつかせたのも、首相が大衆のなかでとらえた数多くの問題をねりあげてそれを政策化したたまものであった。

首相は、協同化運動の初期から党と国家の総力をあげて、協同農場にたいする指導と援助を惜しみなくあたえた。一九五五年からは毎年、全国的な範囲で協同農場を組織的、政治的に強化させるための大規模な集中指導をおこなった。

一九五五年十一月だけでも八千余名の指導部を動員し、四か月にわたる集中指導をおこなった。それとともに、農場を経済的にしっかりと築くための国家的な援助活動も大々的にくりひろげた。

金日成首相は国の暮らしむきがまだ苦しかったときにも、農業の物質的、技術的土台を強めるためにぼう大な潅漑水利工事や農機械作業所網をひろげることや、農業の技術人材養成をはじめ数多くの事業を計画し、それにばく大な資金をふりむけた。

農場にたいする配慮はじつに大きなものがあった。農機械作業所に田畑の耕作をうけもたせ、農器具と化学肥料、ばく大な営農資金、食糧、種子、種畜を供給し、国にたいする農民の負債まで免除した。また一九五六年からは固定現物税制を実施し、税率をひきさげ、農民の負担を軽くして生産意欲を高めた。

それだけではなかった。農村の労力不足をおぎない農村に中核陣地を築くために、除隊軍人と初級および高級中学校の卒業生を数多く農村におくりこんだり、農繁期には田畑がにぎわうほど人びとを動員して農民の仕事をたすす

けた。
　金日成首相はそれでもなお満足できず、あらゆる村々をたずねて指導した。
首相は多忙な政務のあいまに遠く山間僻地の農村まででかけ、山を利用して暮らしをゆたかにする方法を教えるなど、ゆく先々で農民とひざをまじえて話しあった。あるいはまた、娘のとつぎ先の家をたずねる母親のように農家の台所にまで気をくばり、食器棚や米びつまでのぞき、みそやしょう油の味にも心をくだいた。
　金日成首相が咸鏡南道洪原（ホンウォン）郡の農民をたずねたときのことである。
　首相は農場の経営についてたずねたのち、困ったことがあれば遠慮せずに話しなさいと農民たちにいった。
　しかしかれらは首相の心づかいをあまりにもよく知っていたので、多少困難な問題があるにはあったが、なにもないとこたえた。
　ところが、ある婦人農場員がためらいがちに席をたち、「首相さま、わたくしたち女性は荷物を頭にのせてはこびますが、これが少々骨がおれます」といった。
　本格的な農村の技術、文化革命を準備してきた金日成首相は、一農場員のこの発言を決して軽くきき流さなかった。婦人たちが荷物を頭にのせてはこぶことに胸を痛め、深く考えこんでいた金日成首相は笑顔で、「これは技術革命ののろしとなりましょう」とのべた。素朴な農場員のこのひとことから、農場員たちがすでにトラクターやトラックなどの現代的な生産手段をつかって働きたいという願望と、文化的にも早く発展しようとする熱望をよみとったのである。
　金日成首相は自身の構想と農民の念願にもとづいて、ただちに協同化運動に技術、文化革命を追いつかせる方針をうちだした。
　首相は、その女性農場員のことばをすべての農民の切実なねがいであるとみなし、楽元、岐陽、徳川などにおも

慈江道長江郡国宗浦里協同農場員と話しあう金日成首相

むいて、質のよい多くの農機械を農村に供給するようによびかけた。

金日成首相を人民の父とよぶそのことばのなかには、どれほどゆたかで深い内容が盛られていることであろうか。

このように、あらゆる面にわたって大河の流れのようにつきることなくそそぎこまれる首相の親身の配慮と支援のまえで、胸をあつくしない農民はいなかった。これらすべての配慮は、金日成首相の対策こそ、この世でだれもあたえることのできなかった、人民にたいするもっとも大きくあつい愛情であることをかれらに深く感じさせた。

農民は活気にみちあふれた。貧しい土台からたちあがった幼い協同農場は、からだの弱い人間が高価な営養剤をのんで力をえたかのように、見るみるうちに強固なものとなった。こうした協同農場の発展ぶりを見て、それに加入することをためらうおろかものはいなかった。

貧農はもちろん、中農まで過去への未練をいっさいふり切って協同農場に加入した。

こうなると富農の立場も一変した。すべての貧農、中農が協同農場に加入したあとの富農は、どこからも人手をも

とめることができず、まったく孤立した状態におちいった。そしてかれらも、協同農場の優越性を深く悟るようになった。こうして富農までが農村の社会主義的改造をどうしてもうけいれざるをえないようになった。

しかし、ごくわずかの反動分子だけは、協同化運動にたいして執拗に破壊謀略策動をおこなった。これは、巨大な革命的現実のまえで絶望した、くつがえされた搾取階級の残余分子らの最後のあがきであった。だがかれらの謀略策動は、めざめ、組織された人民大衆に徹底的にうちくだかれた。そして協同化運動は、古い社会ののこりかすを一掃しながら大河のごとく、とうとうと流れていった。

こうして、はじめはあたかも冬を追いやる早春の若草のように、ところどころに徐々にあらわれた協同農場が、ついにはすべての山野を目のさめるような青々とした新緑でおおう初夏のごとく、すべての山村と田野にくまなくひろがった。

協同化運動は勝利した。農業協同化は、こうしてはじまってからわずか四～五年にしかならない一九五八年八月、ついに世界をおどろかせる偉大な勝利を宣言した。

こうしたとき、首相のよびかけにかぎりなく忠実な労働者階級は、困難なたたかいをかさねながら自分たちの技術でつくったトラクターやトラックを農村におくりはじめた。

岐陽トラクター工場の労働者は、「鋼鉄の牛」――「千里馬」号を駆ってエンジンの音も高らかに、金日成首相に会うためピョンヤンにむかった。野良仕事をしていた多くの農民たちは「千里馬」号を見るやいっせいにかけより、トラクターをかこんで歓声をあげ、踊りだした。

かれらは、こみあげてくるよろこびをおさえきれず、声をかぎりに「金日成首相万歳！」を叫んだ。

数千年にわたる苦しい肉体労働の歴史に永遠の別れをつげる幕が、いましずかにおりたのである。

農民たちは、「千里馬」号トラクターが田を耕すのを見て、涙を流しながら子どもにこう語るのだった。

「おまえたちはいい世のなかに生まれた。たとえ百歳になっても腰がまがることはあるまい」と。

このことばは、協同化の偉大な勝利とともに、技術革命の時代をむかえたこの国の農民の、ふくらむような希望と感慨をこめた詩でもあった。

一九五八年末、金日成首相は農業生産力をさらに発展させ、とくに農業にたいする技術的改造を本格的におしすすめるために、協同農場を里単位に統合して、その規模を拡大する措置をとった。

金日成首相は、北半部における農業協同化の勝利を総括し、勝利した社会主義協同経営を力強く発展させるために、一九五九年一月、全国農業協同組合大会をひらいた。

大会で首相は、社会主義的協同化が完成したのち、農村で強力におしすすめなければならない中心的な革命課題は技術革命、文化革命、思想革命であると規定した。

金日成首相はつぎのように教えた。

「農村で社会主義を建設するためには、生産関係を改造するだけでなく、農業の技術改造をおこない、農民の意識を改造しなければなりません」

首相のこの方針にもとづいて、農村では技術革命、文化革命、思想革命が力強くおしすすめられた。

こうして共和国北半部では、社会主義的生産関係が全一的に支配するようになったばかりでなく、発展した技術と文化がたえまなく普及し、農民の思想意識にも大きな変化がおこりはじめた。

これは歴史に金字塔をうちたてるべき偉大な勝利であった。複雑かつ困難な革命である社会主義的農業協同化を、このように独創的に、しかも最短期間に完成して農業発展の輝かしい展望を切りひらいた例は、まさに世界のどこの国にも見られないことであった。

これは、金日成首相のすぐれた政治的英知とその指導によってのみ可能であった。

思えば、農業協同化運動がおこなわれていた期間は、人民経済のすべての部門でたび重なる難関をのりこえ、悪戦苦闘をしながら大変革をおこしていた時期であった。

破壊しつくされた農業の復旧、生産関係の社会主義的改造、工業の全面的な復興建設と人民経済の技術的改造など、その一つ一つが力にあまる歴史的な課題であった。

しかし金日成首相は、これらすべての大事業を同時に解決しながらも、農業協同化運動をこのように最短期間に輝かしく完成したのである。

まさに金日成首相の思索と英知と革命的な展開力には、限界というものがなかった。

いかに複雑な対象にたいしても科学的な戦略戦術をたて、各方面から立体的かつ連続的に攻撃をくわえ、それを最短期間にみごとに占領すること、まさにここに金日成首相のもつ指導芸術の輝かしい一面があるのである。

首相の独創的な方針と人民のためにはどのような苦労もいとわない熱い肉親的な配慮が、党と大衆の熱意にむすびついて偉大な力を生みだし、ついにひろびろとした農村の自然と農民を、社会主義の歴史の舞台にのせたのである。

社会主義的農業協同化と協同農場は、まさに金日成首相が農民にさししめした社会主義への大路であった。活気にあふれる協同労働とよろこびにみちあふれる社会主義大家庭と新しい先進技術が生まれ、最新機械がかけてくる大路、農民たちはこの大路にたって、小規模で分散的であったあの個人経営のうらさびしい小路を感慨深げにかえりみるのであった。

共和国北半部の農民はだれもが、かぎりなく幸福な明日を目のまえにして過去との訣別をよろこんだ。かれらは、活気にあふれて働きトラックやトラクターを駆った。そして絵のように美しい文化住宅で暮らし、りっぱな学校や幼稚園を見てまわりながら、一つの熱い思いにひたった。それはとりもなおさず、勝利と幸福をもたらした指

導者金日成首相へのかぎりない感謝と忠誠の念であった。
境遇も考え方も複雑で、文字どおり各人各様の農民たちを教育改造し、協同化の大船にのせて暗礁や浅瀬の多い海を一度の失敗もなく全速力でのり切り、社会主義の港にたどりつかせた金日成首相は、まさに現代の偉大な巨人である。

3　「ともに共産主義社会へすすもう」

社会主義は農村ばかりでなく、国のすべての部門でくまなくひろがっていた。
金日成首相は農業協同化運動を積極的に導きながら、都市にのこっている古い社会の最後の経済的要素である個人手工業と資本主義的商工業を社会主義的に改造する活動を組織指導した。
社会主義制度をしっかりうちたてるためには、農村で個人農経営を協同化するだけでなく、都市でも個人手工業と資本主義的商工業を社会主義的に改造しなければならなかった。
北半部における個人手工業の社会主義的改造は、過渡期の初期から客観的に要求されていた。
日本帝国主義支配の時期に破産し、窮乏していた手工業者たちは解放後、首相のあたたかい配慮と人民政権の積極的な援助のもとで経営を発展させ、その生活もいちじるしく改善された。しかし、零細で技術的にたちおくれた手工業は強固でなかったし、大きく発展する見こみもなかった。手工業者はその経営を統合する協同化の道をすすんでこそ、生産と技術をさらに発展させ、生活もいっそう改善することができた。
手工業者の困難な状態を知っていた金日成首相は、社会主義制度をしっかりとうちたてる遠大な構想のもとに、過渡期のはじめにあたる一九四七年から自発性の原則にもとづいて手工業者の生産協同組合をつくり、その経営を

社会主義的に改造する方針をとってきた。

金日成首相は戦争中も、大規模な国営工業が破壊された状態のもとで人民生活を安定させるため、国営の地方工業とともに協同組合工業を発展させるための多くの措置をとった。

ところが戦後、戦争中に大きな被害をうけてますます困難になった手工業者たちは、その経営を統合して国の積極的な援助をうけないでは、もはや経営をつづけることもできなくなっていた。こうした実情を考慮した金日成首相は、手工業者の協同化を全面的におしすすめる方針をしめした。

手工業者たちは、金日成首相の協同化方針を積極的に支持した。こうして手工業の協同化は戦後わずか数年のあいだに完成した。

一方、資本主義的商工業を社会主義的に改造する困難な革命課題も、首相の正しい導きによって比較的みじかい期間に順調に遂行された。

もともと資本主義的な搾取者である個人商工業者は社会主義革命で収奪の対象となりうるものであった。しかし金日成首相は国の具体的な実情から、資本主義的商工業を平和的に改造する独創的な方針をとった。

北半部の資本主義的商工業者は一連の特性をもっていた。

かれらは解放前、民族資本家として生きてきたし、日本帝国主義の民族産業抹殺政策によってその発展を抑制されてきたため、数のうえで少なかったばかりでなく、その経済的土台もきわめて弱かった。

かれらはまた、その経済的境遇からして帝国主義とは矛盾していたし、解放後は朝鮮労働党の統一戦線政策をうけいれ、反帝反封建民主主義革命にくわわっていた。

金日成首相は、こうした資本主義的商工業者の特性を考慮し、資本主義的商工業経営を収奪の方法で一掃するのではなく、平和的な方法で改造できるものとみなした。

そこで首相は、資本主義的商工業にたいし、かれらの経営をしだいに社会主義的に改造していく方針をとった。金日成首相はつぎのようにのべた。

「過渡期において、資本主義的商工業にたいするわが党の政策は、そのよい側面を利用し、悪い側面を制限しながら、それをしだいに社会主義的経営に改造することにありました」

戦後、資本主義的商工業の社会主義的改造は、機の熟した問題として提起された。

多くの企業家、商人が戦争のとき、アメリカ帝国主義の無差別爆撃によって破産し、のこっていた資本主義的商工業者も大部分が手工業者や小商人とほとんどかわらない境遇にあった。とりわけ、人民経済のすべての部門で社会主義経済形態が圧倒的に支配するようになり、農業と手工業が協同化されていくにしたがって、かれらは原料と資材をこれまでのように個人市場で買いもとめることができなくなった。

こうした状況のもとで資本主義的商工業者は、国家と社会主義経営の支援をうけないでは、またみずからの生産手段と資金を統合して共同で働かないでは、零落した経営をたてなおすことができなかった。

金日成首相は、戦後のこうした具体的な状態を科学的に分析し、資本主義的商工業にたいする社会主義的改造を積極的におしすすめた。

首相は、資本主義的商工業の社会主義的改造を生産協同組合をつうじ、手工業の改造と密接にむすびつけて実施する方針をとった。

これは経営形態を改造するだけでなく、人間をも教育し、りっぱな社会主義的勤労者につくりかえることを見こしたものであって、世界ではじめて実施された独創的な方針であった。

また生産協同組合をへて資本主義的商工業を改造するこの方針は、その経営規模が零細な国の実情に適したもっとも正しい方針であった。

首相は、資本主義的商工業を平和的に改造するからといって、一部の社会主義国でのように、国家資本主義のような形態をとる必要はないと考えた。

国が中小商工業者にわざわざ資金を貸しあたえ、かれらを大資本家に育ててから改造するという無駄骨をおる必要はなかった。

首相は、資本主義的商工業者を生産協同組合にひきいれる際にも、かれらの経済的状態と意識水準をよく考慮し、それにふさわしい具体的な方針をしめした。

首相は、資本主義的商工業者の協同化において、自発性の原則とかれらの相互の利益を守る原則を堅持し、生産手段と資金を統合して共同経営を運営するものの、労働による分配を基本にしながら、かれらが組合に投じた出資金に応じても分配をうける、半社会主義形態をひろく適用するようにした。

そして組合員の意識程度と組合の経済的状態に適するようこれをしだいに高い形態、すなわち生産手段と資金を全的に組合員の共同所有にし、労働によってのみ分配をうける完全な社会主義的経営形態へと導いていくようにした。もちろんこうした場合でも、それぞれの組合員が投じた生産手段と資金にたいする補償を支払うようにした。

また個人商工業者の社会主義的改造のためには、工業生産と商業活動をかねる生産販売協同組合という過渡的な形態を利用させた。そうして生産の比重を高めていき、しだいに生産協同組合に改編して、商工業者たちを生産勤労者に改造していった。

こうした各種の形態をとおして、私的所有を社会化していく方法は、資本主義的商工業者個人の利益と組合の共同利益をむすびつけたものであったために、かなり資金の多い工業企業家や商人までも生産協同組合にたやすく加入することができた。

しかし、ひきつづき人民を搾取する資本家にとどまろうとしながら、破壊と謀略行為をおこなうごくわずかの悪

質分子にたいしては、国家の断固たる制裁がくわえられた。

金日成首相は生産協同組合に国家のばく大な物的、財政的援助をあたえ、これを経済的に強化する措置をとる一方、党と大衆団体をして商工業者の古い思想意識を新しい社会主義的思想に改造するよう思想教育活動を強めた。

このように、困難な革命課題の一つであった手工業と資本主義的商工業にたいする社会主義的改造は、首相の正しい方針と、それを徹底的につらぬく党と国家の積極的な指導と援助によって短期間に順調におこなわれ、農業協同化の勝利とほぼときを同じくしてみごとに完成された。

こうして都市で古い生産関係は完全になくなり、全一的な社会主義生産関係が確立され、人間による人間の搾取と貧困の根源は永遠になくなった。

かつては生きるよろこびも希望ももてなかった貧しい個人手工業者たちが、創造と幸福が約束された社会主義的勤労者となった。中小商工業者のなかでおこった変革は、いっそう劇的であった。金のためには自分の良心と幼ない子どもまであざむいて他人を搾取してきたかれらは、その恥ずべき生活ときっぱり訣別した。かれらは勤労者となったのである。

物を生産し、創造するということは、なんと大きなよろこびであろう！　集団と国の繁栄のなかに幸福をもとめるようになったかれらは、いまやこの世に恥じるものはなかったし、幼い子どもの澄んだ目を見ても心のやすらぎをおぼえるのだった。かれらは国と領袖の配慮をうけ、社会主義への道を歩んだ。

金日成首相は、協同経営をいっそう発展させ、組合員の思想水準を高めるためにひきつづき大きな関心をはらった。ときには直接、組合をたずねてかれらの生産と生活に心をくばり、かれらの小さな成果をも高く評価した。

一九五九年六月五日、元山鉄工生産協同組合を現地指導していたときのことである。首相は、組合の作業場を見てまわり、出銑作業中の小型溶鉱炉のまえで足をとめた。首相は、組合員がたいへん有益な仕事をしているとほめ

たたえたあと、一作業班長に、無煙炭で鉱石を溶かす方法を研究してみてはどうかとたずねた。敬愛する首相から仕事の成果を賞賛されたうえ、研究課題まで直接あたえられたかれは、よろこびのあまりことばにつまってしまった。

金日成首相はこの日の夕刻、ふたたび多くの組合員と席をともにして、かれらの仕事が国と人民にどれほど役だっているかをこんこんと説ききかせた。

首相は鉄材協同組合でつくった小刀一つを見たときも、「あなたがたは本当にりっぱな仕事をしています。りっぱです。たいへんりっぱです」とほめた。そればかりでなく、組合の生産条件を改善し、収入を高める方法や、住みごこちのよいアパートを建てる問題にいたるまで、じつの親のように気をくばった。組合員たちは領袖のあたたかい愛情につつまれ、人間としてもっとも貴い、しあわせな社会主義勤労者としての高い栄誉をおぼえた。

金日成首相は、すべての人びとが自発的に働き、だれもが自分ののぞみどおりに供給をうけることのできる共産主義社会について説明してから、力をこめてこう語った。「わたしは、みなさんを共産主義社会までつれていくでしょう」。だれもが感激に目をうるませた。首相はその場所にいた作業班長を見ながら、ふたたび語った。「きみの息子も、一人のこらずつれていこう!」

作業班長は生まれてはじめてうれし涙を流した。かれは、かつて二十余名の労働者をやとって鋳物工場を経営していたが、旧貨幣で三十万ウォンもの金を出資して組合員になった人だった。

その夜、かれは息子と娘に金日成首相の感激的なことばをきかせながら、ふたたび涙を流した。かつての恥ずべき生活は永遠に消え去り、領袖の愛につつまれ幸福な新しい人間に生まれかわったのである。かれは首相が教えたとおり、無煙炭で鉄鉱石を溶かす方法を研究しようと、寝食を忘れて実験をくりかえした。七十二回も失敗をかさねながらも屈しなかったかれは、ついにそれに成功した。その日、家に帰ったかれは、虎の子のように大切にしま

っておいた三十万ウォンの証書をタンスのひきだしからとりだした。それは組合に投資した個人企業当時の債券であった。かれは組合事務所にかけつけ、三十万ウォンの債券を党委員長のまえにさしだしながらこういった。

「首相の教えどおりに、共産主義社会へすすもうと思います」

かれは、首相の恩恵を回想したその手記のなかで、当時の心情をこうつづっている。

「わたしは、わたしのすべて――、生命と財産と知恵のすべてをささげて、党と人民のため、革命のために最後までたたかいぬくことを党のまえに誓った」

これがどうして一組合員だけの決心であったろうか。すべての組合員が新しい人間に生まれかわった。かれらは誇りをもって、すべての人民と同じ隊列にたち、世界でもっとも多くの恩恵と権利を享受する人間に、もっとも神聖な義務である社会主義建設を遂行する人間になったのである。

世界の革命運動の歴史は、搾取階級である民族資本家までも、このような社会主義勤労者に教育、改造して党のまわりにかたく結束させ、かれらを共産主義へとゆるぎなく導いている実例をまだ知らない。

金日成首相の創造的な方針と配慮がかれらのなかでまきおこした変革は、このように徹底的で根本的なものであった。

革命とは、まさにこのようにおこなうものである！

政治とは、まさにこのようにほどこすものである！

4　すべての人びとを一つの大家庭に

一九五八年は、共和国北半部で社会主義制度がしっかりと築かれた歴史的な年である。

都市と農村で、ながい生活をへてきた個人農経営と手工業および資本主義的商工業が社会主義的に完全に改造された結果、北半部では生産手段の私的所有がなくなり、社会主義的所有制度が全一的に確立された。

金日成首相はもっとも正しく早い道へ党と人民を導き、複雑で歴史的な革命的課題を戦後わずか四〜五年のあいだに輝かしく完遂した。

これは、社会主義制度の確立と社会主義祖国の創建を意味した。社会主義制度は、資本主義制度とはくらべようもないほどすぐれた、もっとも先進的な社会制度である。

金日成首相はつぎのようにのべた。

「社会主義制度は、人民大衆が政権をにぎり、生産手段にたいする社会的所有にもとづいて、人民の福祉を系統的に増進させる目的のもとに、高い科学的、技術的土台のうえで生産をたえず計画的に発展させ、あらゆる搾取と圧迫を永遠になくし、各人が能力に応じて働き、各人に労働の質と量によって分配をおこなうもっとも先進的な社会制度であります」

資本主義のもとでは人民大衆が政治的自由と権利をもたないが、社会主義のもとでは人民大衆が国家の主権を行使し、自分の能力と技術にしたがって職業を選択し、心ゆくまで学び、自由と権利を実質的に保障される。

資本主義のもとでは生産手段が資本家の私的所有になっているため、労働者はどうしても資本家に労働力を売り、搾取されるが、社会主義のもとでは生産手段が社会的所有となっているため、労働者はだれにも搾取されることなく、全社会と自分自身のために生産する。

また資本主義のもとでは、生産手段が資本家の私的所有になっているため、生産が無政府的に発展し、経済恐慌がくりかえしおこり、経済を沈滞と破綻に追いやる。しかし社会主義のもとでは、全生産手段が社会的所有となっているために、人民経済が計画的に、つりあいをたもって発展し、経済恐慌もなく、たえず早い速度で発展するよ

うになる。

さらに資本主義社会では、生産物を資本家が独占するため、生産が発展すればするほど生産者は暮らしにくくなるが、社会主義のもとでは生産物がすべて社会と勤労者自身に属するので、生産が発展するにしたがって勤労者の生活が系統的に高まっていく。

こうして北半部では、数千年にわたってうけつがれてきた人間による人間の搾取と貧困の根源が永遠に一掃され、生産力は古い生産関係から完全にぬけだし、発展のみが約束された無限の大路を歩むようになったのである。血と汗で社会の富を生産する人民大衆が、かえって遊んで暮らす搾取階級におさえつけられ、略奪され、貧困にあえがなければならなかった時代は、いまやむかしがたりとなった。国の主人である勤労大衆は、すべての生産手段の完全な主人となったのである。

しかし南朝鮮では、人民のうえにあぐらをかいた搾取者、反逆者の最上層部にアメリカ帝国主義侵略者がいすわり、わがもの顔にふるまっている。人民はほら穴のようなわらぶき小屋で貧困と飢えに苦しんでいるが、略奪者は宮殿のような大邸宅で人民の血と汗でこえふとり、夜ごと酒宴をくりひろげている。権力と金力をにぎった支配者は悪法と銃剣をふりかざし、解放と統一のためにたたかう人民を手あたりしだいに弾圧しながら、南朝鮮を修羅場にかえている。

金日成首相の賢明な指導のもとに北半部で社会主義制度が樹立された結果、個人農、手工業者はいうまでもなく、資本主義的商工業者までも社会主義的勤労者に改造され、ただ、社会主義と共産主義建設で利害関係をともにする労働者階級と協同農民、勤労インテリのみがのこった。

搾取階級と被搾取階級、支配階級と被支配階級との敵対的対立と闘争が社会関係の基本となっている資本主義社会とは異なって、北半部では勤労者の団結と協力が社会関係の基本となり、すべての人びとが主人となって集団と

社会のために働き、国の繁栄のなかであらゆる政治的権利と幸福を享受するようになった。
そして、苦難にみちた抗日武装闘争の炎のなかで、金日成将軍と抗日闘士たちがあれほどまでに念願し、そのために血みどろの闘争を展開したその偉大な理想が、ついに祖国の北半部でりっぱに実現されたのである。これは、金日成首相の指導のもとに、朝鮮の共産主義者と人民がおさめたもっとも偉大な業績の一つであり、朝鮮の歴史に永遠に輝く勝利であった。

——

金日成首相は勝利した社会主義制度を強固にしながら、人民の政治的、思想的統一をいっそう強化し、北半部を単一の政治的力量にかえるために大きな力をそそいだ。北半部を単一の政治的力量にかえる課題は、金日成首相が解放直後にうちだした祖国統一と朝鮮革命勝利のための戦略的方針の重要な構成要素となっていた。
首相は、アメリカ帝国主義者が南朝鮮を占領している状況のもとで、南朝鮮を解放して国を統一するためには、朝鮮革命の基地である北半部で強力な経済的および軍事的な力をつちかうだけでなく、全人民を党のまわりに結集し、一つの強力な政治的力量にかえなければならないとのべた。革命と建設は大衆自身のための活動である。したがって首相は、マルクス・レーニン主義党の指導のもとに広はんな大衆が積極的に動員されてこそ、革命は成功裏に遂行されうるという立場をつねに守りとおした。北半部を単一の政治的力量にかえるということは、生産関係の社会主義的改造が完成された条件のもとで、人民の政治的、思想的統一をさらに高い段階へひきあげることを意味した。
しかしこれは、国が分断され、世界反動の元凶アメリカ帝国主義者と直接対峙している状況のもとで、きわめて複雑かつ困難な革命的任務であった。アメリカ帝国主義者とその手先どもは、北半部の社会主義制度に反対してあらゆるブルジョア反動宣伝をおこない、スパイ、破壊分子、謀略分子どもを潜入させ、党と人民を離間させるための悪らつな策動をおこなった。くつがえされた搾取階級の残存分子らもアメリカ帝国主義者とむすびついて、むか

しの地位をとりもどそうとさまざまな離間策動をつづけた。

また、社会主義制度が確立されたばかりの条件のもとで、勤労者の意識のなかには、敵がよりどころとしうる最後の地盤となる古い思想ののこりかすが少なからずのこっていた。これにくわえて住民の社会的、政治的構成も複雑であった。しかし、長期にわたる革命闘争の過程で洗練され、きたえられた革命のすぐれた指導者である金日成首相は、これらすべての障害をたくみに克服し、すべての人びとを一つの赤い大家庭に結束させた。

金日成首相は、国の社会的、政治的関係を綿密に分析し、党を組織的、思想的にしっかりとかため、大衆をめざめさせて革命の側に完全にひきよせ、長期にわたる革命闘争できたえられた共産主義者を中核として全党員を革命家に育て、党員を中核として全人民を革命精神で武装させ、階級路線と大衆路線を正しくむすびつけて、ごくわずかの敵対分子を孤立させ鎮圧するとともに、広はんな大衆を教育、改造して党のまわりにかたく団結させる方針をたてた。

こうして、革命の中核的な勢力を強化することを基礎として、各階層の大衆を教育、改造して党のまわりに結集させた。そして、かつて政治生活が複雑であった人びとまでもあたたかく教育し、導いて社会主義勤労者に育て、全社会の人びとが党のまわりに結束し、たがいにたすけあいながらまえへとすすむ大家庭をつくりあげていった。

金日成首相は、全社会を一つの政治的力量にしっかりかためるうえで、なによりもその中核的勢力である党を強化する活動をもっとも重要視した。

首相は、革命の指導的力量である党が強力であってこそ、複雑な階層までふくむ広はんな大衆を党のふところにいだき、人民の政治的、思想的統一をいっそう強化し、人民大衆をりっぱに教育し改造することができると考えた。首相は革命と建設を力強く発展させながら、つねに実践闘争のなかで党を組織思想的に強め、党員をすぐれた革命家に育てあげていった。そして国際舞台で帝国主義者の悪らつな「反共」さわぎがくりひろげられ、これに足

なみをそろえて現代修正主義者がマルクス・レーニン主義に挑戦していた環境のもとで、修正主義とあらゆる反動的ブルジョア思想の浸透に反対し、分派主義、事大主義、教条主義に反対する強力な思想闘争をくりひろげた。

金日成首相の賢明な方針によって、党は社会主義革命と社会主義建設の実践闘争のなかでいっそうきたえられ、歴史的につづいてきた分派の汚物を一掃し、首相の革命思想によって団結し、どんな風波にもゆるがない革命的で戦闘的な党に強化され発展した。

首相は党を組織的、思想的に強化する基礎のうえで、すべての勤労者を共産主義思想で教育する活動を強めた。

勤労者にたいする共産主義教育の強化は、社会主義経済体系が全面的にうちたてられた条件のもとで、人びとの意識の領域からも資本主義を終局的に一掃し、世紀的にひきつがれたあらゆる古い思想ののこりかすと遺習から、人民大衆を完全に解放するための深刻な思想革命であった。

金日成首相は一九五八年十一月、全国の市、郡党委員会扇動員のための講習会でおこなった演説『共産主義教育について』のなかで、共産主義教育の必要性とその中心内容を全面的に明らかにした。

「われわれがおこなっている革命は、すなわちいっさいの古いものをうちくだき、新しいものを創造するたたかいであります。新しいものと古いものとのたたかい、進歩と保守のたたかい、積極的なものと消極的なものとのたたかい、集団主義と個人主義とのたたかい、総体的に社会主義と資本主義とのたたかい、これがわれわれのおこなっている革命闘争の内容であります。……古い資本主義思想ののこりかすをなくし、革命の高揚をさらに高い段階へと発展させるためには、全勤労者を共産主義思想で武装させることがもっともたいせつであります」

首相は、共産主義教育の必要性についてこのようにのべたのち、その中心内容をつぎのように明らかにした。

――南北朝鮮でたがいに異なるこの二つの制度が対立しており、社会主義に反対してアメリカ帝国主義とその手先たちが悪らつに策動している条件のもとで、勤労者を搾取制度と搾取階級にたいする非妥協的な敵愾心で武装さ

せ、かれらに資本主義にたいする社会主義、共産主義制度の優越性と、新しいものは必ず勝利し、古いものは滅亡するという真理を深く認識させること。

——勝利した社会主義制度を強固にし、社会主義、共産主義建設を促進するために、勤労者のなかで個人主義と利己主義を一掃し、集団主義精神、国家財産と協同財産を愛護し、労働を愛する精神をつちかうこと。

——勤労者を自分の郷土、いいかえれば、自分の農村、自分の漁村、自分の都市を愛することから出発して自分の社会主義祖国を愛し、自分の祖国を愛することから出発して社会主義陣営のすべての国ぐにと、自由と幸福のためにたたかう世界のすべての勤労者を愛する社会主義的愛国主義とプロレタリア国際主義精神で教育すること。

——勤労者を継続革命の思想——、継続前進、継続革新の思想で教育すること。

このように金日成首相は、社会主義のもとで勤労者が必ず所有すべき共産主義的世界観と道徳の本質を理論的に深く説きあかした。首相の演説は、社会主義が樹立されたのちにおこなわるべき共産主義教育にかんする理論を、世界ではじめて明らかにした思想革命の偉大な綱領であった。

首相は、共産主義教育にかんする理論を創造するうえでも独創性をしめした。それは、共産主者教育で階級教育を基本としたことである。革命の獲得物と社会主義制度をあくまで守り、帝国主義と搾取者に反対して非妥協的にたたかう階級意識は、共産主義者と革命的人民にとって、もっとも基本的な精神的特質なのである。

首相は、こうした階級意識による勤労者の教育を共産主義教育の基本として、出発点としてしめし、複雑な大衆教育活動で堅持すべき革命的原則をはじめて明らかにした。

金日成首相の共産主義教育理論における独創的なもののいま一つは、党の政策にたいする教育と革命伝統の教育を強化する基礎のうえで共産主義教育の目的を達成するという理論である。

それぞれの国の共産主義者たちは、まず自国の革命に忠実でなければならない。そうしてこそ世界革命にも貢献

しうるということが、首相の徹底した革命的信条である。
首相は、わが国における共産主義教育の目的は、朝鮮革命に忠実な朝鮮の革命家、朝鮮の共産主義者を育てることにあると説き、朝鮮革命の唯一の指針である朝鮮労働党の政策で武装するための党政策教育と、朝鮮革命の根本をはっきり認識し、抗日遊撃隊員の生きた模範に見習い、その偉業をうけつぐ革命伝統教育の強化にもとづいて共産主義教育をおこなうようにした。
これは、大衆の思想教育活動で主体性の確立を明示したものである。
首相は、共産主義教育活動を全党的、大衆的活動としてしめし、共産主義教育の独創的な方法を創造した。
首相は、肯定的な模範による感化教育の方法を、共産主義教育のもっとも効果的な方法の一つとしてうちだした。社会主義が勝利した北半部では、勤労者のなかで多くの共産主義者的美風と肯定的な模範が生みだされた。
首相は、こうした肯定的な模範で人びとを感化するならば、古くて否定的なものをたやすく克服することができ、共産主義思想で教育することができると教えた。
首相はまた、勤労者が共同で働き、生活する生産現場を拠点にして共産主義教育をおこなわなければならないと教えた。肯定的な模範をとおした教育と実践的闘争をとおした教育方法は、党の大衆教育活動に形式主義をなくし、勤労者の思想意識をかえる威力ある方法となった。共産主義教育にかんする首相の教えは、困難で複雑な大衆教育活動で偉大な生命力を発揮した。
共産主義教育は、勤労者のなかで革命と領袖にたいするつきない忠誠心、社会主義制度にたいする熱烈な愛、社会主義、共産主義建設にたいする炎のような志向、継続前進、継続革新と自力更生の革命精神を燃えたぎらせた。そうして全社会が党のまわりに団結し、たがいにたすけあい導きあいながら、社会主義、共産主義建設のために力強く前進する明朗でむつまじい一つの革命的な大家庭にかわっていった。

首相は、人民の政治的、思想的統一を強化するにあたって、社会政治生活が複雑な大衆を教育し改造して、党のまわりに団結させる活動に深い関心をはらった。

首相はこの活動で、革命のために献身的にたたかう労働者、農民、勤労インテリ、そして愛国烈士の遺家族、犠牲者の家族、戦死者家族、人民軍隊の留守家族など革命の中核勢力に依拠した。そしてこの活動を全党的、大衆的な活動としておしすすめる方針をしっかり守った。

長期にわたる日本帝国主義の植民地支配と国の分裂、祖国解放戦争の時期におこなわれたアメリカ帝国主義者の離間策動などによって、北半部の住民の社会、政治的構成はきわめて複雑であった。住民のなかには、日本帝国主義植民地支配の時期に生活のため日本の機関に服務した人もおり、戦争の時期に共和国北半部へ一時侵入した敵の威嚇と恐喝、デマ宣伝によってあれこれの反動団体にくわわっていた人たちと、敵が逃走するときかれらが南に連行していった人たちの家族もいた。

首相は、人民の政治的、思想的統一を強化するためには、この複雑な階層との活動を正しくおこなわなければならないと教えた。

金日成首相はつぎのようにのべた。

「もし、あれこれの条件をみな詮索すれば、まともな人間は一人もいないでしょう……。あれこれの条件をみな詮索して大衆を失ってしまうならば、共産主義へすすむ人は何人ものこらないでしょう。こうなっては、共産主義を建設することができません。われわれは、なんの条件にもひっかからない何人かをつれて、どこかの島へでもいって、われわれだけで共産主義を建設することはできません。われわれは必ず大衆とともに、かれらの力に依拠して、この大地に新しい生活を建設しなければなりません。

そうするために、あれこれの問題のある人びとをみな改造し、かれらと手をとりあってゆかなければなりません」

金日成首相は、人びとの階級的出身成分や思想は固定不変のものではなく、かつてよくなかった人でもこんにちはよくなりうるということ、複雑な階層の人びとのなかで意識的な敵対分子は事実上ごく少数にすぎず、絶対多数は朝鮮労働党についてくることのできる勤労大衆であるということ、すでにすべての人が古い生産関係からぬけだし社会主義的勤労者になったばかりでなく、社会主義制度がもたらしたしあわせな生活を体験し、社会主義と共産主義に自分たちの明るい未来をはっきり見とおせるようになったということ、朝鮮労働党はどんなに複雑な階層でも十分に包容し、教育し改造できる強力な党になったということなどを科学的に分析し、社会、政治生活の複雑な階層を大胆に包容し、積極的に教育し改造する方針をしめした。

「社会、政治生活のいきさつの複雑な人びととの活動でわが党が堅持している一貫した原則は、あくまでも本人の現在の動向を基本にしてそれぞれの人びとを評価し、敵対分子を最大限に孤立させ、一人でも多く革命の側にかちとるようにすることであります」

金日成首相はこうした原則をしめし、ごくわずかの意識的な搾取階級出身の敵対分子をのぞいたすべての人びとを教育し、改造して社会主義のふところにいだいた。

首相は、すべての党団体が社会、政治生活の複雑な大衆との活動で階級路線と大衆路線を正しく結合し、大衆のなかに深くはいり、すべての人びとをあたたかく包容し、信頼し、かれらが社会主義建設でその才能と積極性を十分に発揮できるよう極力たすけ、根気強く教育しなければならないと教え、みずからその実践的な模範をしめした。

戦後復興建設の力強い闘争がくりひろげられていたときのことである。

清津製鋼所で働いていたある技師長は、つねに保守主義、技術神秘主義にとらわれ、労働者や技術者の創意的な意見をききいれなかった。そのうちに生産で多くの不良品をだし、戦後復興建設で切実に要求されていた鉄の生産

敵の手にかかって身内を虐殺された家族たちと話をかわす金日成首相
（黄海南道延安郡梧峴里で）

に大きな支障をきたした。

かれは古いインテリとして、日本帝国主義支配時期にはゆたかに暮らし、祖国解放戦争のときには一時動揺して、北半部地域を占領した敵が逃走するときにはかれらについて渙浪（オラン）までいったが、ふたたび帰ってきた人であった。

かれが仕事の過程でおかした重大な誤りをどうみるべきか、故意ならば当然、制裁をうけるべきであった。

しかしこの事実を知った金日成首相は、かれについてのすべての資料に目をとおして寛大にゆるした。

そして、かれに親しく使いのものをやり、絶対に萎縮せず勇気をだして働くようにとはげました。

首相は、たとえ誤りが重大であっても、それはかれが古い社会の影響を多分にうけてきたため、思想的に未熟なところから生まれたもので、決して故意ではないとみなした。そして戦争の時期に一時動揺したことはあるが、アメリカ人が悪いと

いうことを悟り、ふたたび党をたよってきたことを考慮して、今後かれを教育し改造することができるとみなしたのである。

首相は、その後もこの製鋼所をたずねるたびにかれに深い関心をはらい、はげました。技師長は首相の厚い信任にかぎりなく感激し、すべての力や情熱をかたむけて期待に報いようとかたく決意した。事実その後のかれは、党と領袖に忠実なインテリに、積極的な技術革新者となった。

金日成首相の愛の手は、南朝鮮に連行された人たちの家族にもさしのべられた。

一九五九年五月十二日のことだった。金日成首相は黄海南道延安郡にたちより、親しく郡内の越南者家族と会った。

彼女たちの夫の大部分は、かつての戦争の時期、人民軍の反撃にあって一時的に占領した北半部から逃亡するアメリカ侵略者のおどかしとデマ宣伝によって南につれていかれた人びとであり、貧しい生活をしていた人たちであった。しかしかれらは、階級的境遇からみて決してアメリカ人や李承晩についていく人びとではなかった。

延安郡が新しい解放地区として共和国北半部の地域になったとき、越南者家族は党の教育と生活体験をとおして、自分たちの夫が敵のデマ宣伝にだまされたことを悟るようになった。彼女たちは、なにも知らずに南にいった夫をひきとめなかった自身をくやみ、夫が敵についていったということで心が重く、いつもひけめを感じながら暮らしてきた。子どもたちが大きくなって物心がつき、お父さんはどこへいったのかとたずねるとき、彼女たちの胸はしめつけられる思いがした。

こうした越南者の家族たちに、金日成首相の愛の手がさしのべられたのである。

自分たちを父なる愛情で幸福の道に導いてくれる金日成首相、夢にまでみた首相に直接会った越南者家族は、みな形容しがたい感激につつまれた。

金日成首相は、かれらと席をともにし、主人のいない家に暮らす彼女たちをあたたかくなぐさめ、彼女たちの生活にこまごまとした気をくばった。

感激したある婦人は、つぎのように語った。

「首相さま！　首相さまにお会いできてほんとうに光栄です。首相さま、ほんとうに夢のようです……。このよろこびをどういいあらわしたらよいのかわかりません……」

「みなさんのご主人をつれて帰ればうれしいでしょうが、わたしを見たところで、なにがうれしいでしょう」

感激にむせぶ主婦たちにこう語った金日成首相は、池のほとりに歩みよって一輪の花を手折った。首相はその花びらを一ひら一ひら池の水面におとしながら深い思いにふけっていたが、しばらくして言葉をつづけた。

「ほんとうに、祖国の平和的統一は朝鮮人民の切実なねがいです。いまみなさんは、一家でともに暮らせないでいます。しかし、祖国統一はかならずや実現されるでしょう――」

金日成首相は祖国統一の見とおしについてくわしく語り、彼女たちに希望と信念をいだかせ、南につれていかれた人びととその家族にたいする党の政策についてのべた。

「一部の人びとは、共和国の政治がよいということを知らずに南へいったのです。南朝鮮にいったあなたがたのご主人のなかには、空缶を手に物乞いしている人もいるでしょうし、また李承晩一味に反対してたたかっている人もいて、そのたたかいで勲功をたてて帰ってくる人もいるでしょう。おおよそ北半部からでていった人たちが、共和国の政治がよいという言葉を一番多く口にしているということをわたしたちは知っています。それゆえ、越南者の家族だからといってみな悪いとはいえません。わが党はそのように考えてはいません……。なにも知らずに越南した人びとにたいしてはいうにおよばず、ここで罪を犯していったからといって、みな悪い人たちであるとは考えません。かれらのなかには、いいことをして帰ってくる人もいるでしょう。わが党の政策は、つねに自分のあやま

ちを悔いあらため、わたしたちといっしょにやろうという人はみなゆるし、手をとってすすむことなのです」

これほどまでに信じてくれる領袖のまえで、越南者の家族はみな感激とよろこびにひたった。

金日成首相は、つづけて語った。

「みなさんは、子どもたちがお父さんのことをたずねたらはっきりこたえてやるべきです。悪いことをしていったならば、わたしたちの階級の敵であったということを教え、たとえお父さんはそうした道を歩んだとしても、おまえたちは正しい道を歩んで革命家になるんだよと教えることです。もし、お父さんがなにも知らずにいったのなら、お父さんには罪がなく、知らずには南へいったということを教え、お父さんに会えないのは、アメリカ帝国主義と李承晩一味のためであるといいきかせることです。こうして、アメリカ帝国主義と李承晩一味こそ、わたしたちの不倶戴天の敵であることを教えてやらなければなりません。そして、『おまえたちに罪はない。おまえたちは共和国の公民として同じ待遇をうける。越南者の家族だからといって決して差別はしない。安心してよく勉強し、よく働き、労働革新者になるのですよ』と教えるべきです」

さらに金日成首相は、越南者家族の今後の問題についても語った。

「わが党や国家では、みなさんの前途を切りひらいています。みなさんは自分の力で自身の運命を切りひらかなければなりません。そして勉学にはげみ、仕事にも精をだして共和国をゆたかな国にしなければなりません。今後あなたがたは仕事をよくして党にも入党し、また幸福に暮らさなければなりません。政治生活にもよく参加して、越南者家族のなかから社会活動家も生まれ、労働英雄もあらわれるようにしなければなりません」

金日成首相が話を終えると、しばらく沈黙が流れた。このときある婦人が席をたち、いまにもあふれでそうな涙をこらえながらいった。

「首相さま！　首相さまのおことばをきくと、わたしたちの輝かしい前途が目に見えるような気がします。必ず

首相さまのおことばどおりにいたします。首相さまが教えられたとおりに、わたしも労働革新者になり、子どもたちもりっぱな革命家に育ててゆきます」

これは、そこに集まっていたすべての越南家族の一致した心情であった。

人民の不幸を自身の不幸とみなし、人民の苦しみを自身の苦痛とみなす偉大な領袖を見おくる彼女たちは、こみあげる感激をおさえきれずむせび泣いた。

その後、越南者家族の生活には大きな変化がおこった。みながこぞって国事に参加し、活気にみちた日々をおくるようになった。

こうした金日成首相の直接的な指導によって、複雑な階層の人びとが希望にみちた道を歩むようになった実例は数えきれない。

恥ずべき過去を悔やんでいた人びとは、金日成首相の賢明な方針とあたたかい配慮にかぎりなくはげまされ、生きがいのある社会主義建設に力のかぎりをつくすようになった。

このように、金日成首相が明らかにした党の正しい方針とあたたかい配慮によって、社会のすべての成員が党のまわりに団結するにつれ、北半部全人民の政治的、思想的統一は鉄壁のように強化された。

人びとの政治思想意識には一大変革がおき、党と敬愛する領袖金日成首相にたいする人民の信頼と敬慕の念はこのうえなく高まっていった。こうして北半部は、金日成首相が教えたように、おたがいにいたわりあい、愛しあい、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」働き、学び、たのしく暮らす勤労者のむつまじく明るい大家庭になった。

北半部の革命基地を一つの政治的勢力に築く、金日成首相の遠大な戦略的路線は勝利した。これは北半部で社会主義建設をうながし、朝鮮人民の最大の民族的課題である祖国統一の偉業と朝鮮革命の終局的勝利を達成する決定

的なうらづけとなるのである。

第七章　朝鮮を千里馬(チョンリマ)の国に

1　きびしい試練をへて

共和国北半部における社会主義革命と建設は、世界をおどろかせた有名な千里馬(チョンリマ)運動の過程で、非常な速度ですすみ、いまもすすんでいる。

けわしい山なみや広野を一気にはばたき、雲や霧をついて日に千里を駆けたという伝説にもとづく神秘な千里馬——、朝鮮における社会主義建設の速度と革命の意気ごみをその千里馬にたとえて、勤労者の集団的な革新運動である千里馬運動がおこった。世界に類例のないこの誇るべき運動は、すぐれた指導者である金日成首相によって生みだされ発展したものである。

それは自然を改造し社会を改革するばかりでなく、人間までも一新する運動であり、苦難のなかで育ち、たたかいのなかできたえられた朝鮮人民が、世界の面前で革命と建設の本領をしめした驚異的な運動であった。だからこそこの運動は、それを創造して導いた金日成首相のすぐれた指導芸術を、社会生活の生き生きとした動きのなかで感銘深くしめしているのである。

千里馬運動は、生産関係の社会主義的な改造が完成の段階にはいり、人民の絶対多数が社会主義勤労者となった

条件のもとで、一九五六年末から一九五七年のはじめにおこった。

それは発生すると同時に、革命と建設を非常な速度でおしすすめる力となった。その後この運動は経済と文化、思想と道徳など、社会および経済生活のあらゆる分野にわたってたちおくれをなくしてたゆみなく前進する一大革命運動となり、自然と社会を変革するだけでなく、人間そのものまでも教育し改造する運動に発展し、ついには社会主義建設における党の総路線となった。

しかし千里馬運動は、決して平穏な環境から発生したわけではなかった。むしろその当時は、国内でも国際的にも帝国主義勢力と革命の裏切り者らが一大騒動をおこし、社会主義建設がきびしい試練にさらされていたときであった。

したがって、一般的な論理からすれば、千里馬運動はおこりえなかった。しかし金日成首相は、たびかさなる難関と敵の挑戦のまっただなかでこの運動をおこしたのであった。

ここに金日成首相のすぐれた革命的な展開力と指導芸術の威力があったのである。

朝鮮労働党第三回大会がひらかれた一九五六年の暮れであった。北半部の人民は火花の散る労力闘争によって、この年の生産課題を超過完遂していた。農村と都市では生産関係の社会主義的改造が完成の段階にはいり、革命はあらゆる分野において高揚していた。戦後のたびかさなる難関をのりこえながらきたえられた人民は、高い自負心と勝利への確信をもって、国を社会主義工業＝農業国家に一変させる新しい五か年計画の輝かしい未来をめざしていた。

だが、未来へつうじる道はけわしかった。国の経済状態と人民の生活がまだゆたかでなかったうえに、ぼう大な計画を内部の源泉と蓄積だけでやりとげなければならなかった。とりわけ最大の難関は、革命の敵と異色分子らが死物狂いに反抗してきたことであった。終局的な敗北に直面したかれらは、是が非でも朝鮮革命の前途にさまざま

な障害をもうけ、わなをしかけようとした。しかもそれが、当時、国際的にくりひろげられた騒動とつながりをもっていたため、問題はいっそう深刻であった。

国際的には、世界反動の元凶アメリカ帝国主義をはじめとする帝国主義者たちが社会主義国家間の団結を弱め、国際共産主義運動の隊列を分裂させようと血まなこになり、社会主義国家を一つずつ切りくずそうと悪らつな策動をつづけていた。

国際反動どもはハンガリー事件をひきおこし、共産主義は滅亡するとわめきたてながら「反共」騒動にやっきとなっていた。

ときを同じくして、国際共産主義運動の内部で頭をもたげてきた現代修正主義者たちは、帝国主義者と妥協して革命に反する誤った路線をひろめ、傲慢にも兄弟諸国の党と内政にまで干渉しはじめた。

一方、南朝鮮を占領していたアメリカ帝国主義侵略者とその手先李承晩一味は、「武力以外に国土統一の方法はない」とわめきちらし、「北進」騒動にやっきとなっていた。

こうした情勢に乗じ、北半部でも、すでにくつがえされた階級の敵が頭をもたげはじめた。ながいあいだ分派的陰謀をつづけながら機をうかがっていた崔昌益（チュエチャンイク）を頭目とする反党反革命分派分子と頑固な教条主義者らは、修正主義のもとにむすびつき、大国主義的な外部勢力をかつぎだし、ときをえたとばかりに頭をもたげて策動しはじめた。

かれらは、修正主義的な路線を国際共産主義運動の「共同綱領」としてかかげようとしていた現代修正主義者たちの策動に同調し、修正主義を「国際思潮」であるとさわぎたてながら、これをひろめようとくわだてた。現代修正主義者と結託したかれらの真の目的は、党とその指導部をくつがえし、朝鮮革命を失敗させることにあった。

おろかで卑劣なかれらは、金日成首相が政府代表団をひきいて社会主義諸国を親善訪問していたすきをうかが

い、党と革命を破壊しようとさまざまな陰謀をたくらんだ。
こうして党と革命は、内外のあらゆる敵からのはげしい攻撃をうけた。
だが、革命の敵と裏切り者どもはまったく誤算していた。
かれらは、金日成首相が現代史のもっともはげしい風波をのりこえ、鋼鉄の闘志とすぐれた政治的手腕によって党を不敗の隊列に築きあげたこと、そして金日成首相のまわりに全党員と人民がかたく団結しているという厳然たる事実を忘れていた。
かれらはまた、金日成首相に忠実な朝鮮労働党員と朝鮮人民の革命精神をおしはかることができなかった。
敵は決して、金日成首相と朝鮮人民を微動だにさせることができなかった。おじ気づいたのはかえって革命の裏切り者たちであった。
金日成首相が社会主義諸国を親善訪問して空路帰国したときのことである。飛行機からおりた金日成首相は、明るい微笑をうかべて出迎えの幹部たちとあいさつをかわした。そのとき、首相の視線が崔昌益にそそがれた。金日成首相はとっさに、かれの表情からただごとならぬものを感じとって注意深く見つめていた。
その瞬間、かれはびくっとして生気なくうちしおれてしまった。その顔面は蒼白で目には落着きがなかった。指導者が他国を訪問しているあいだに反革命をくわだてたかれは、いざ首相を目のまえにすると恐怖におそわれ、血の気がひいてしまったのである。
金日成首相は崔昌益の腹黒い性根を見ぬいていたが、なおも明るい表情で自動車に乗った。車中で首相は、崔昌益がどうしてああいう表情をするのかとたずねた。するとだれかが、事情を知らないで、体でも悪いのでしょうと、見当ちがいな返事をした。
ほかの車にのった崔昌益は、まるで死罪でもおかして裁判所に引立られる罪人さながらであった。だが、ぶるぶ

るふるえながらも強情で、絶望しながらも死物狂いに反抗するのが反革命分派分子のつねであった。

金日成首相と人民は、確信をもって敵の策動をうちくだいていった。

首相は反帝反米闘争の旗をいっそう高くかかげてアメリカ帝国主義の侵略策動に反対してたたかい、現代修正主義者と大国主義者の策動を徹底的に排撃し、国際共産主義運動と労働運動の団結を守って反党反革命分派分子とのたたかいを強力にくりひろげた。

もともと崔昌益をはじめこの一味は、解放前からの悪質な分派集団である「M・L派」その他の派閥にくわわって、朝鮮共産主義運動に多くの害毒をおよぼしてきた連中で、骨の髄まで分派的習性がこびりついている革命の裏切り者であり、偶然分子であった。金日成首相は解放後、かれらが自分たちのあやまちを悔いあらためて革命に忠実であるよう忍耐強くさとし、党と政府の要職まであたえたのである。しかしかれらは、うわべは金日成首相と党に忠実であるかのようにふるまいながら、裏にまわってはなおも策動をつづけてきた。

金日成首相はかれらのこうした動きをいち早くとらえ、その背信的な行為に激怒したが、ただちに策動をやめるようにいましめ、かれらの「中傷」にたいしても忍耐強く説得した。

しかし分派分子は恩を仇でかえし、一九五六年八月の党中央委員会総会を契機に、大国主義者を後楯としてあくまでも党に反対して正面からいどんできた。

反党反革命分派分子らは、社会主義革命と社会主義建設における党の指導的役割を否定する反マルクス主義的主張をとなえた。

かれらは、党内に無政府主義的な混乱をひきおこして党を私物化しようとこころみ、党の唯一の思想体系をくずし、きびしい革命闘争で点検されきたえられた党の幹部隊列を切りくずし、党を何人かの分派分子を中心とした小ブルジョア集団にかえようとねらった。

反革命分子らはさらに、人民大衆のなかで党と政府の威信を失墜させ、党と人民が悪戦苦闘のすえにかちとった社会主義建設の輝かしい成果に悪どい誹謗をくわえた。

そしてついには、兄弟党との国際主義的な親善団結までも破壊しようと卑劣な策動をおこなった。かれらはアメリカ帝国主義のスパイと結託して党と政府をくつがえす暴動の陰謀までくわだて、はては朝鮮民主主義人民共和国を社会主義陣営から切りはなし、親米的な「中立国」にかえようとさえした。

しかし、反革命分子のこうした最後的なあがきは、ついに金日成首相の断固とした処置をうける破目におちいった。

首相は党と革命と人民のために、反革命分派分子に決定的な打撃をくわえる一方、かれらを手先として内政にくちばしをいれていた大国主義者、修正主義者の策動を完膚なきまでにうちくだいた。

首相にとっては、この問題は、決して全力をそそがなければならないような重大事ではなかった。すぐれた戦略家である首相は、このしいられたたたかいを契機に、かえって主体性を確立し、国際的には修正主義と大国主義とたたかい、国内では自力更生の精神を高めて革命を一大高揚へと導いたのであった。

金日成首相はさらに、党内の分派分子の罪状をあばき、分派を根こそぎにするための思想闘争を力強くおしすすめた。

分派分子が真っ向から党にいどんできたことを知った人民ははげしい怒りに燃えた。だれもが金日成首相の心中を思い、領袖と党を死守する決意を強くした。

緊迫した日々にもつねに人民のなかにあった金日成首相は、大衆のこうした気勢にじかにふれ、かぎりなく勇気づけられた。

金日成首相が現地指導のため平安南道の南浦へむかう途中、江西郡台城（テソン）里にしばらくたちよったときのことであ

る。

人民軍の連隊長をつとめていた息子をたたかいでなくしたという一人の老婆が、金日成首相の手をにぎって目にいっぱい涙をうかべながらこういった。

「首相さま、お顔色がたいそう悪うございますが、あまりご心配なさらないでくださいまし。なあに、分派分子めがじたばたしてみたところで、いまじゃみんなしっかりしてますから大丈夫ですよ。なんといっても、わたしらが勝つにきまっています。分派分子めが勝てるもんですか。ご心配にはおよびません。わたしたちはみんな首相さまを支持しています、味方ですよ」

素朴ななかにも真実のこもったこの老婆のことばは、最上級の美辞麗句をならべたてた賛辞よりも金日成首相を大きくはげまし、重大な使命感を感じさせたのであった。それはまさに名誉も報酬ものぞまず、ひたすら偉大な領袖とともに、労働とたたかいのけわしい道を力強く切りひらいてきた人民大衆の心の奥底からほとばしりでた声であった。

金日成首相は、全党と人民のあいだでいちだんと高まった革命的情熱と内外の敵にたいするはげしい闘志をはっきりとよみとり、その情熱と力をそのまま社会主義革命と建設に集中させていった。

こうして金日成首相は、たちはだかる困難と試練を契機として、かえって社会主義革命と建設を大きく飛躍させ、その勢いで分派分子を完全に一掃してしまう決意をかためた。

これは革命の弁証法を深く知り、いかなる状況のもとでも、それに適応する政策を自由自在に駆使するすぐれた指導芸術をそなえた偉大な領袖だけがもつ決断力であった。

金日成首相はのちに、この当時のことを回想してこう語った。

「われわれはただひたすら、党員と人民にたよる以外になかった。わが党は党員と人民大衆を信じ、かれらの力

を結集して、たびかさなる難関と試練を切りぬけてゆく決意をかためた」

革命的な大衆に依拠し、かれらから学び、かれらを革命的に教育し、かれらをふるいたたせて革命を前進させ、難関を突破していくことは、金日成首相が抗日武装闘争のときから守ってきた原則であった。

首相は、当時こう語った。

「革命というものはもともと古いものをくつがえし、新しいものをつくりだすものであるから、古い勢力の反抗がつきまとうものです。

われわれが日本帝国主義侵略者とたたかっていたとき、日本帝国主義侵略者と地主らはわれわれを匪賊とよび、人民は革命軍とよびました。悪者たちがわれわれに悪口をいったからとて、おどろくにはあたりません。したがってわれわれは、必ず世論の階級的基盤をよく分析してみる必要があります。

われわれは、革命を遂行する過程で決して動揺分子の世論にたよってはならず、農村においては貧農と雇農のいうことに耳をかたむけなければならないし、都市では労働者のことばに耳をかたむけなければなりません。

こういう人たちは、つねにわれわれを支持してくれます。

いまでも、生活が悪いの、なにがどうのといって不平をならべ、世論をあおろうとするものは古くさいブルジョア思想の持ち主です。かれらはきまって、むかし裕福に暮らしたものたちです。こういう連中は機会さえあれば不平をならべ、ちょっとした困難にもすぐ動揺してしまいます。しかし、かつて裕福に暮らせなかった労働者や農民は、いまでは生活がよくなったために満足しており、かれらには不満がありません。かれらは困難にうちかつすべを知っており、革命を最後まで遂行するため力強くたたかっています。われわれは必ず、こうした大衆にたよらなければなりません」

金日成首相はこのように、革命と建設においてつねに階級的立場と原則を守らなければならないと教えたばかり

でなく、革命を前進させるためには強力な政治思想闘争をくりひろげ、それをとおして革命的高揚をおこし、経済建設においては大衆路線をつらぬくことによって難関を切りぬけていくすべを明らかにした。

一九五六年一二月にひらかれた朝鮮労働党中央委員会総会は、国際的および国内的にたちはだかっていた多くの難関を一挙に解決し、金日成首相のすぐれた指導芸術をしめした歴史的な会議であった。

この総会で首相は五か年計画の最初の一年の課題を提示した。工業生産を一九五六年にくらべて一二％に高めることをみこした一九五七年度人民経済計画は、じつにぼう大なものであった。

総会では、鋼材、日用品、穀物など一部の重要生産物の不足を解決するための課題のほかに、四十億〜五十億円(旧朝鮮貨幣)の商品を増産し、各種鋼材を五千〜一万トン、穀物を五万トン多く生産する決定を採択して、全党員と勤労者に訴えた。

すると一部では、五か年計画があまりにもぼう大であると動揺しはじめた。もちろん北半部の人民は、非常に困難な状況のもとでぼう大な計画をおしすすめなければならなかった。人民経済をすみやかに発展させ、人民生活を向上させるためにはより多くの物資と資金が必要であったが、その源泉は十分でなく、五か年計画のぼう大な要求にくらべて人民経済の内部蓄積も多くはなかった。兄弟諸国の援助ものぞめず、すべてを自力で解決しなければならなかった。これにくわえて内外の敵がなおも策動をつづけ、党内では反党反革命分派分子の残党とのたたかいがつづいていた。

すべてが緊張し困難をきわめていた。だが金日成首相は保守主義者と消極分子の不平や誹謗を排し、人民経済をひきつづき早い速度で発展させる方針をかたく守り、計画を完遂するための決定的な環を、生産内部の予備を十分に利用して設備利用率を高めることのなかに見いだした。

首相は、「最大限の増産と節約」という戦闘的なスローガンをかかげた。

首相が信じたのは、ただつきることのない力の所有者である人民大衆であり、いかなる逆境にもかかわらぬ党にたいするかれらの忠誠心であった。

金日成首相はこの総会のあと、党と政府の指導幹部を各地の重要な工場や企業所、農村や漁村に派遣し、みずからも一九五六年一二月二十八日、降仙製鋼所の労働者をたずねた。

首相がはいったひろい室内は、いましがた仕事を終えてきた製鋼所の幹部や作業服のままの労働者でいっぱいだった。その目は誇りにかがやき、赤銅色の顔は明るい笑みにつつまれていた。しかし金日成首相が話しだすと笑いが消え、きびしい表情にかわっていった。

首相は最初から、党がもっとも困っている問題を、それも少しも格式ばらずに胸襟をひらいて話した。

首相は期待と愛情のこもったまなざしで一人ひとりを見つめていた。

「現在のわれわれの状況はまことに苦しい。……ある国の人びとは自分たちの分派をおくりこみ、また別の国ではこの国に同調して、われわれをおさえつけようとしている。わが国の分派どもはそれぞれ自己の主人を後楯にしており、李承晩はアメリカをたよりにしてわれわれに襲いかかろうとしている。われわれはだれをたよりにしたらいいのだろう。みなさんのほかに、たよる人はいないのだ」

場内はざわめき、空気がけわしくなった。領袖と革命に反抗する敵への憤りがみちあふれた。朝鮮人民の誇りであり希望である領袖と党に、いったいだれが危害をくわえようというのか。赤銅色の顔は闘志に輝きだした。

そして金日成首相が、「われわれはだれをたよりにしたらいいのだろうか。みなさんのほかにたよる人はいないのだ」というと、労働者たちはいっせいにたちあがり、「金日成同志万歳！」とさけんだ。これは、心の底からほとばしりでた金日成首相にたいするかれらのかぎりない忠誠の声であった。

首相は手をあげてこれにこたえた。心なしか目がうるんでいた。幸福感と崇高な使命感が金日成首相の心をゆさ

社会主義建設の革命的大高揚をよびおこすために
降仙製鋼所で現地指導をおこなう金日成首相

ぶったのであろうか。
労働者たちは、めいめいどんな困難なことでもやりとげることをかたく決意し、分派分子らを熔鉱炉のなかにたたきこんでしまうから、かれらを自分たちにひきわたしてほしいとこぶしをふるわせた。
泰山をもゆり動かさんばかりの気勢と溶鉱炉のようににえたぎる朝鮮労働者階級のこの熱意こそ、つきない財富を生む力であり、敵を容赦なく切りたおするどい刃であった。
金日成首相はこの戦闘的な部隊をさらにふるいたたせ、かれらを先頭にたてて新しい奇跡を創造しようと決心した。
首相は問題の核心について、つぎのような意味のことばをのべた。
「われわれは来年から第一次五か年計画にはいる。ところで、この計画をりっぱにおしすすめるためには多くの資金と労力と資材が必要である。しかしわれわれには、すべてが不足している。なかでも鋼鉄と鋼材が非常に急を要している。……『一人のこらず節約し、増産

しよう！』　これがいま、わが党がかかげたスローガンである。われわれはすべての難関にうちかち、社会主義建設を最大限におしすすめなければならない。過去のわれわれの生活は苦しかったし、また、たらないものが多い。であるから、他人が一歩すすめば、われわれは十歩すすまねばならず、他人が十歩すすめば、われわれは百歩すすまねばならない。そうしてこそ、他人が共産主義に到達するとき、われわれもいっしょに共産主義に到達することができるのである」

首相は、愛情のこもったまなざしで労働者たちを見まわし、なおも話をつづけた。

「この困難な時期に、このすべての困難にうちかちながら、党の路線と政策の正しさを確証すべきものはほかでもない、みなさん自身なのだ。党は革命の主力軍である労働者階級の力をかたく信じている。……ところが保守主義者は、『公称能力』だけにこだわってわれわれの前進をはばんでいる。保守主義をうちやぶり、緊張している人民経済の環をとく人も、ほかならぬみなさんなのだ。みなさんは停戦後、自分たちの力でこの工場を復旧したではないか」

首相のこのことばは、労働者たちの心を強くとらえた。ある労働者は、そのときの感動をこう回想している。

「首相のことばを一言ひとことかみしめながらきいていたわたしの胸は、熱い血潮でたぎりたつようでした。それまでもわたしは、自分が革命の指導階級の一人であることに誇りをいだいていました。しかしわたしはこのときまで、わたしたちにたいする党と領袖の期待と信頼が、それほど大きく厚いものだとは知らなかったのです」

首相の話がおわると、労働者たちは先をあらそって革新をおこす決意をのべた。年間計画より多くの鋼鉄を生産するという決意や、コークスのかわりに無煙炭をつかって外貨を節約するという決意、また炉の増補修時間を半分にちぢめ、溶解時間を二時間のあいだに四十分短縮するという決意などがつぎつぎとのべられた。

首相は満足そうにこういった。

「労働者のみなさんと相談したかいがありました。予備はみなさんの頭のなかにあります。みなさんの決意はどれも正しいものです」

首相が降仙の労働者の胸にともした火は、全国津々浦々に力強く燃えひろがっていった。生産や建設は戦闘と化した。

「公称能力」はくずれ、保守主義者は労働者階級の砲火をうけてあわてふためいた。とくに領袖の訴えを直接うけ、領袖の面前でかたい決意をのべた降仙製鋼所の労働者たちの気勢は天をも衝かんばかりであった。だれもがこぶしをふりあげ、テーブルをたたきながら決死のたたかいにのぞむ兵士が戦場で入党を誓うときのように、これまでは考えられなかった多くの生産課題をうけもった。英雄的で勇敢な労働者階級は、高鳴る革命の進軍ラッパに熱血をたぎらせ、領袖がよびかける大革新運動の戦場へはせ参じた。

鉄鋼職場の労働者は五か年計画の最初の日の出鋼で、溶解時間を三時間五分も短縮する記録をうちたてた。飛躍は連鎖反応をおこし、すべての作業班が高い生産記録をつぎつぎと更新していった。

このようなおどろくべき労働闘争は前例のないものであり、新しい運動の発端となった。まさにこの英雄的な革新運動が、こんにち朝鮮の異名となった世界的に有名な偉大な千里馬運動の発端であったのである。

千里馬運動は、領袖と党のまわりにかたく団結した人民大衆の偉大な創造力のあらわれであり、社会主義建設を最大限の速度でおしすすめる全人民的運動である。

金日成首相はときを移さず全国のあらゆる工場、企業所を大革新運動にふるいたたせた。

首相は、一九五七年の新しい年が明けた一月三日には、もうすでに黄海製鉄所の労働者たちのなかにいた。首相はそこの労働者に二十五万トン能力の第一号溶鉱炉と、三十万トン能力をもつ解炭炉の建設を促進させるなど戦闘的な課題をあたえながら、かれらを力強くはげましました。労働者たちは熱烈にこれにこたえた。領袖と党のよびかけ

であれば水火をもいとわぬことを誓いあった。

首相は、全党をはげしい増産闘争にふるいたたせながら、自身はなおも全国各地の数多くの農村や工場、企業所を直接指導し、いたるところで新しい奇跡を生みだした。

首相の情熱と高い志は大衆のなかに深く浸透し、大衆自身の意志と思想になった。労働者、農民をはじめすべての勤労者は、金日成首相の思想を具現した党の政策と路線を自分自身の死活的な問題としてうけとめ、その遂行のためには骨身をおしまなかった。

これは決して、偶然でも一時的な現象でもなかった。かつて亡国の民の苦しみと屈辱をいやというほど体験した朝鮮人民は、自分たちを主人にしてくれたこの制度をどんなことがあっても守りとおし、国中を世界がうらやむ一大楽園に築こうと決意した。

朝鮮人だからといって、なぜ他人より貧しく暮らさなければならないのか？　他人が一歩すすめば、われわれは百歩をも千歩をも駆けよう！　党と領袖のよびかけであれば泰山をも動かし、海をもうめよう！　これが領袖のまわりに一枚岩のように団結した朝鮮労働党と人民の意志であり誓いであった。

長期間にわたって蓄積されたこのような革命的情熱のなかで、その情熱を燃やしふるいおこしながら、威力を発揮させた金日成首相のすぐれた指導芸術から伝説的な千里馬が生まれ、千里馬運動の歴史がはじまったのである。

平穏でおちついたゆりかごからではなく、革命の暴風雨のなかから生まれた千里馬！　その千里馬にはいま勇猛な騎手がまたがり、炎のようなたてがみをなびかせて天空高く駆けはじめたのである。朝鮮革命に真っ向から反対していた敵やペテン師どもは、千里馬に足蹴にされて千尋（せんじん）の谷間へつきおとされてしまった。

このように金日成首相は、内外の敵が襲いかかるきびしい状況のもとで、いささかもひるむことなく偉大な千里馬運動をおこすことによってかれらに痛烈な打撃をあたえ、社会主義革命と社会主義建設を高揚させるという、文

字どおりの奇跡をもたらしたのである。

この輝かしい勝利は、時代を切りひらく金日成首相の偉容を、いま一度全世界にしめしたものであった。

2　世界を驚嘆させた千里馬の大進軍

きびしい革命の熱風のなかでうまれた千里馬は力強く、そして疾風のごとく駆けた。

それまで、まえとかわらぬような暮らしをしていた人びとは、いつのまにか自分たちが千里馬の騎手たちから遠くひきはなされているのに気がつきおどろいた。

千里馬の騎手も、たちおくれた人も、社会的境遇や革命課題の遂行のうえではみなおなじであった。ちがいがあるとすれば、それは革命的な熱意と実践上の展開力にあった。たちおくれた人びとはだれもがこのことに気がついた。革命と建設で、安逸と自己満足がどれほど有害であるかということがいまや明白となった。

われわれとてたちおくれてはいられない、われわれも革新のための可能性と予備をさがしだそう。われわれも千里馬に乗り、歳月をたぐりよせよう、こうしたねがいがどの勤労者の胸にも芽ばえはじめた。

こうした願望と社会的のなりゆきを全面的にとらえた金日成首相は、まだ工業の重要部門でしかおこっていない千里馬運動を、全社会的に一般化することが現実的に可能であることをよみとった。朝鮮全体を千里馬の国とすることは、時代と革命のさしせまった要求であった。

首相は全党によびかける一方、みずから勤労者のなかにはいってかれらを革命的な飛躍へとふるいたたせた。

こうして千里馬は日ましに大きくなっていった。国中がわきたった。勤労者の心はおどり血は燃えたぎった。どの顔にも、朝鮮がたちおくれていることへの憤りでみちみちていた。そして、短期間のうちに社会主義強国を建設

しなければならないし、また建設できるのだという覚悟と自信にみちあふれていた。

金日成首相は昼夜をとわず、このような勤労者たちのなかへ、すべてが英雄になることを決心した人びとのなかへはいってゆき、知恵と勇気をあたえた。

金日成首相のゆくところではかならず革新の火花が散り、それにともなって全国津々浦々で、また社会主義建設のあらゆる戦線で世人をおどろかせる奇跡が生みだされた。いたるところで時代おくれの基準とこれまでの「公称能力」が葬り去られ、新しい技術、新しい基準がうまれた。

降仙製鋼所の分塊職場の労働者たちは、既存の設備では六万トン以上は絶対に不可能だといわれていた鋼片生産を一躍九万トンに高める決意をし、実際には二倍の十二万トンも生産した。また金策製鉄所の労働者たちは、年産十九万トンしか生産できないといわれていた銑鉄を二十五万トンにする決意をかため、実際には二十七万トンも生産したのであった。

こうした革新によって、一九五七年の工業部門におけるぼう大な計画は、一一七パーセントも超過遂行された。これは前年の一四四パーセントにあたるものであった。

いたるところで飛躍と革新が生まれた。海州——下聖間の八十余キロメートル広軌鉄道敷設工事でおさめたおどろくべき成果もそのひとつである。

一九五八年六月十九日、金日成首相の現地指導をうけたここの建設者たちは、領袖の信頼と激励に力づけられ、一年計画であったこの工事を、わずか七十五日で完成することを決意した。

青年建設者たちは集団的な革新運動によって、ふるい基準量をすべてうちこわし、新しい記録をつぎつぎとうちたてていった。難関にぶつかるたびにかれらはますます気勢をあげ、責任量の四～五倍でも満足せず、十倍の作業量を目標にかかげた。鉄道敷設工事場は、まるで一つの大きな職場のようであった。新元の裏山を二十五メー

トルの深さでくりぬいていく大切土場工事をうけもった「一、二一一高地突撃隊」、鉄橋建設をひきうけ、水中掘削と水中コンクリート工事にとりくんだ「李寿福英雄突撃隊」をはじめとする数多くの突撃隊が組織され、山を切りくずし、鉄橋をかけ、鉄道を敷いていった。

七月の炎天も、党と領袖にたいする忠誠心に燃える青春の情熱にはかてなかった。

「李寿福英雄突撃隊」のある隊員は、水中に二十九時間もひたり、七十キログラムの土のうを五百八十個もつみあげて洪水を未然にふせぎ、四十日間の予定であった水中掘削と水中コンクリート工事をわずか五日間で終えた。

全工事のうちでもっとも土量が多く、難工事の一つであった七万山の切りくずし工事をうけもったある建設事業所の若い建設者たちは、先進的技術を導入し、大胆にも三十トンの火薬で大発破作業をおこない、行く手をふさいでいた七万山を一気にふっとばしてしまった。

かれらは八十八万メートルの土を掘り、五千六百余平方メートルのコンクリートをうち、数十個の橋をかけ、駅舎や線路班、機関区そして二百余世帯の住宅を建設した。こうして建設者たちは、領袖に誓った計画をりっぱになしとげたのである。

普通三～四年はかかるこのぼう大な工事を、かれらはわずか七十五日間でりっぱにやってのけ、世界の鉄道敷設史上類例のない奇跡をつくりだしたのである。

こうした奇跡は、九十日以上の日照りがあったにもかかわらず、前年よりも多く収穫をあげた農業面においても、また、おどろくべき「ピョンヤン速度」を生んだ基本建設面においてもおこった。

金日成首相は、生産関係の社会主義的改造によって千里馬運動の社会経済的基盤をしっかりと築く一方、この運動をさらに発展させるための積極的な方針をうちだした。

首相は消極性と保守主義に反対する強力な思想闘争をおしすすめ、すべての活動家と勤労者が大胆に考え、大胆

に実践し、あらゆる面で政治活動を先行させ、党政策の教育、革命伝統の教育、共産主義教育を強化して勤労者の熱意と献身性を自発的に発揮させる方針をさししめした。

金日成首相は、勤労者の意識を、社会と子孫のためのたたかいのなかで自身の幸福をも見いだす思想に、継続革新、継続前進する思想に、革命的な共産主義思想にかえ、集団的革新運動の思想的基盤をしっかりと築いたのである。そして、こうした思想教育とともに社会主義的分配原則をただしく実施し、勤労者の物質的関心を高めていった。

また首相は、労働生産能率を高めるための重要な環の一つである科学と技術を発展させ、これを生産に積極的に導入して大衆の政治的および労力的熱意とむすびつけ、たゆみなく革新をおこしていく方針をうちだした。

金日成首相が明らかにしたこの方針は、社会主義建設における人民大衆の革命的熱意と創造力を最大限に発揮させるきわめて正確な方針であった。

首相はこう語った。

「わが国における社会主義建設の大高揚や千里馬の進軍は、党のまわりに一枚岩のように団結し、党をかぎりなく信頼し、党のさししめす道にむかってあらゆる難関をのりこえて新しい生活をつくりあげようとする、わが勤労者の高まった革命的熱意をぬきにしては想像さえできないことであります」

首相は千里馬運動を飛躍的に発展させるため、なによりも勤労者の革命的熱意を高める政治思想活動に大きな関心をはらった。これは千里馬運動自体の本質と、革命と建設で勤労者の思想意識がはたす能動的なはたらきを科学的に分析したところからだされた結論であった。

首相は生産力を軍隊の武装力にたとえながら、軍隊が戦闘で勝利をおさめるためには、もちろん武装もすぐれていなければならないが、戦闘意欲と思想意識が高く、技術水準も高くなければならないと同様に、労働生産能率を

高めるためにも勤労者の思想意識が決定的な役割をはたすということをし定式化した。

首相はつぎのように語った。

「労働生産能率を高めるうえで決定的な意義をもつものは、祖国と人民のために、みずからの幸福のために、自分の全精力と知恵をかたむけてたたかおうとする労働者の気高い思想であります」

金日成首相は、勤労者の革命的な情熱をたかめ、あらゆる沈滞と保守性をうちくだき、千里馬運動をいちだんと発展させるために、全国革新者大会をひらくことを提案した。

一九五八年九月、ピョンヤンの国立芸術劇場で金日成首相の参席のもとに全国生産革新者大会がひらかれた。これは千里馬騎手たちの最初の大会であった。

首相はこの大会で、『社会主義建設における消極性と保守主義に反対して』と題する歴史的な演説をおこなった。

「社会主義を完全に建設するためには、国の社会主義的な工業化を実現しなければなりません。……社会主義的工業化をなしとげてこそ、わが国を先進的な工業国にかえることができます。そうなれば、わが国の工業は現代的な工業へといっそう発展し、農業でも凶作がなくなり、食べるもの、着るものが豊富になって、文化住宅がどこにでも建ちならぶようになるでありましょう。これはまた祖国の平和統一を促進し、南半部の人民をたすけ、かれらの暮らしをわれわれと同じくよい暮らしにする道であります。それゆえ、社会主義工業化をはやく実現することがなによりもたいせつであります」

このように金日成首相は、社会主義建設の重要な任務について強調し、千里馬運動をいっそう高い段階へ発展させることを生産革新者たちに訴えた。

「こんにち、生産と建設の分野でまきおこっている技術革新運動をさらに一歩前進させ、いっそう高い段階に引

きあげることが必要であります。

われわれは、たえず革新をおこさなければなりません。いまよりもっとよいものをつくりだし、それをもとにして、さらにすぐれたものをつくりだす、というようにたえず革新をおこさなくてはなりません。……一人だけではなく、おおぜいの人が英雄にならなければなりません。……朝鮮人がすべて千里馬を駆り、だれもが英雄になるならばこれ以上よろこばしいことはないでありましょう。……それゆえ、党は集団的革新運動をひろくくりひろげることを要求しているのです。」

つづいて首相は、社会主義建設で保守主義と消極性を決定的にうちくだかなければ、千里馬運動を発展させることはできないと強調した。

「革新がおこるときは、かならずたちおくれたものがこれを妨害するものです。だから革新そのものがすでに、たちおくれたものとの闘争をともなうのです。たちおくれたもの、保守主義的なものとの闘争をせずに革新をおこすことは不可能です。これは生活の法則です」

首相は演説をおえながら、生産革新者たちに、革命活動や革新運動でなによりも重要なことは、すべての行動の指針である党の政策、党の決定に忠実であることであり、それを徹底的に実行するため水火をもいとわずたたかうことであると教えた。

首相のこの大きな期待にはげまされた生産革新者たちは、領袖の教えどおり、たちおくれたもの、保守的なものとあくまでたたかって革新をおこす決意をいっそうかたくした。

この大会の直後にひらかれた、朝鮮労働党中央委員会九月総会では、金日成首相の発起によって全党員におくる赤い手紙を採択し、千里馬大進軍の前途をはばむ保守主義、消極性、技術神秘主義をうちやぶり、大胆に考え、大胆に実践して社会主義建設に大高揚をもたらすことを訴えた。

赤い手紙にこめられた領袖と党の戦闘的な訴えを実践する過程で、保守主義と消極性はうちくだかれ、千里馬運動は社会主義建設のあらゆる戦線で新しい飛躍をなしとげた。

金日成首相は千里馬大進軍の先頭にたって、党と国家事業を力強くおしすすめていった。首相はできるだけ多くの時間をさいて勤労者とともにすごし、つぎつぎと大胆な構想や独創的な提案をだして大衆の創造力を最大限に発揮させた。

黄海製鉄所の労働者たちと話しあう金日成首相

こうした過程で、戦後小さな農機械工場として発足し、中小農機械をつくっていたにすぎなかった岐陽(キャン)機械工場がりっぱなトラクター工場にかわり、自動車付属品工場として発足以来一年にもならない徳川(トクチョン)自動車修理工場は、いつのまにか貨物自動車を大量生産する自動車工場に姿をかえた。

実際、自動車一つをとってみても、設備も設計図もないところから生産の段階までこぎつけるということは、なみ大抵のことではなかった。しかし発展途上の経済、とくに農業では多くの自動車をいますぐにも必要としていた。

金日成首相はさしせまったこの要求を解

決するため、自動車を自力で生産することを決心し、この至難の任務を徳川の労働者たちにあたえたのである。

徳川の労働者たちは、領袖の信頼と期待のあらわれであるこの任務をうけると、ただちに自動車試製品の生産にとりくんだ。かれらのまえには数多くの難関やあい路がよこたわっていた。設計図一枚もなく、なくてはならない特殊機械や建物の設備もなかった。また自動車を製作した経験がなかったため、数千種におよぶ付属品を生産するのに、どんな技術装備が必要なのかさえわからなかった。一部の人たちは、こういう実情のもとで自動車がつくれるわけがないし、たとえできたとしても採算があわないといってとりあわなかった。

こうしたとき、一九五八年十月三十日、金日成首相が徳川自動車工場をたずねた。首相はまず工場のすみずみを見てまわり、自動車試製品の生産状況をくわしくきいたのち、労働者とひざをまじえ、自動車生産について熱心に論議した。

首相は、自動車を生産するうえでなによりも重要なことは、自力更生の革命精神であると考えた。

首相は労働者にたいし、社会主義建設で自動車生産がいかに重要であるかということ、農村の機械化のためには二万五千台の自動車が必要なのに、外国から毎年二千五百台を輸入するとしても十年はかかるということ、したがって自動車はかならずわれわれの手で生産しなければならないこと、などについて説いた。

「われわれ自身の力で自動車をつくりださなければなりません。生産すると、輸入にくらべて採算があわないという人もいるが、たとえ原価が少し高くても、われわれ自身の力でつくった方が有益だと思います。もちろん、はじめのうちは他国のものより原価が高くつくかもしれないが、技術技能が高まり、労働生産能率があがれば原価も自然と低下するだろうし、また自動車のような現代的機械を生産してこそ、はじめて工業も自立的に発展するのです。われわれは特殊機械をはじめ、あらゆる機械をすべてわれわれ自身でつくれるよう努力しなければなりません。

ほかの国の人たちが自動車をつくれるのに、われわれ朝鮮人がつくれないはずがありましょうか。抗日パルチザ

ンの隊員たちは、満足な道具さえない仕事場で、爆弾をつくり敵をうちやぶりました。自動車もわれわれの力でつくらなければなりません。

われわれは、他人よりもたちおくれていたから、もっと早くすすまなければなりません。だれかがわれわれの生活をよくしてくれるだろうと、手をこまねいていてはいけません。われわれの手で築きあげるべきなのです。困難にうちかたなければなりません。強力な重工業基地が創設された現在の条件のもとでは、われわれが革命思想で武装さえすれば不可能なことはないのです。……ハンマーでたたきながらでも、自動車をわれわれの手でつくりださなければなりません」

首相のこのことばは、労働者たちに勇気と勝利への確信をもたらした。

徳川の労働者、技術者たちは、小さな仕事場で爆弾をつくりあげた抗日遊撃隊員のように、かならず自動車の生産を成功させてみせるという決意をかためて、自動車試製品生産に突進した。設計図もないかれらは自動車を分解し、それを見本として付属品を一つ一つつくってゆき、鉄板をハンマーでたたいて車体をつくった。組立てながら付属品があわないと、何回も何回も削ってはあわせていった。こうして、領袖に忠誠を誓った労働者たちは、ついにこの栄えある任務をなしとげたのである。

貨物自動車「勝利五八型第一号」は、ついにつくられた。これは工業の発展と技術革命における大きな勝利であった。

楽元機械工場でも同じであった。金日成首相がみずからたずねていき、エクスカベーター生産の課題をしめすと、楽元機械工場の労働者たちも保守主義、消極性をうちやぶり、悪戦苦闘のすえついたエクスカベーターの製作に成功したのである。

こうした奇跡は、いたるところでおこった。首相の直接の指導のもとに、千里馬号トラクター、勝利五八型貨物

自動車、赤い星五八型ブルトーザー、エクスカベーターなど、威力ある機械がつぎつぎと生産されていった。
千里馬の騎手たちは生産と建設のテンポを早めながら、新しい技術の要塞めざして大胆にすすんでいった。そしてかれらのすばらしい先駆者的役割によって、数千数万の新しい千里馬騎手が誕生した。これは革命的な先進思想が保守的思想を一掃する過程であり、先をすすむものが自分の模範によってたちおくれたものを感化させ、改造していく過程であった。
こうして千里馬運動は、いっそう深化発展し、千里馬作業班運動へと移っていった。
すなわち、生産の基本単位である作業班で集団的な革新をおこし、生産を急速に高める一方、党政策の教育と共産主義教育を力強くすすめ、たちおくれた者を先進者にかえ、新しい共産主義的人間に改造する活動と密接にむすびつけたもっとも高いかたちの社会主義競争の運動に発展したのである。
首相が火をともした千里馬作業班運動ののろしも、やはり降仙製鋼所の鋼鉄戦士たちによって高だかとかかげられた。そしてこの炎は、やがて全国のすべての工業分野にひろがっていった。
ピョンヤン製糸工場のある女性作業班長は、仕事にあまり熱中しない造糸工たちをしんぼう強く教育して、この作業班を模範的な作業班につくりあげた。
だがこの作業班長は、それだけに満足しなかった。
彼女は賃金が減るのもかまわず、たちおくれた作業班にすすんで移り、作業班員たちを忍耐づよく教育し、身をもって手本をしめして、ついにこの作業班をも千里馬作業班にかえた。
金日成首相は彼女の気高い共産主義的気風を高く評価し、父親のような愛情で彼女をはげました。
三・八国際婦人デー五十周年を記念するピョンヤン市報告大会に参席した金日成首相は、大会ののち休憩室で数名の千里馬騎手たちと会った。そして、そのなかにいたピョンヤン製糸工場の千里馬作業班長にこういった。

「どうですか？　人間を教育し、改造するということはほんとうにたいへんなことでしょう？　しかし一人のこらず教育、改造して、共産主義社会にともにすすまなければなりません。この世のなかでもっとも貴いものは人間です。だから共産主義者は、人間を愛することを知らなくてはならないのです。われわれが共産主義社会を建設しようというのも大衆のためであり、すべての人をしあわせにするためなのです。……だからわれわれはすべての人びとを一人のこらず教育、改造して、人間の最高の理想である共産主義社会にまでいっしょにいかなくてはならないのです。もちろん、大衆のなかにはたちおくれた人もいます。しかし生まれつきの落後者というものはいないのです。したがって、改造できる期間が早かったりおそかったりすることはありますが、改造できない人間はいないのです。……人間を共産主義的に改造すればすべての問題が解決されるのです。大衆全体を教育し改造することは人間の意識をかえる深刻な思想革命であり、困難で長期的な革命です。だがわれわれは、最後までやりとげなければなりません。……自信がありますか？」

「はい、自信があります。必ずやりとげてみます」

彼女のこたえをきくと、首相は満足そうに微笑をうかべて、大衆を教育、改造するにはどうすればよいかについてくわしく話した。

「千里馬作業班では、大衆を共産主義的に教育、改造することを重要な活動としなければなりません。千里馬作業班では共産主義教育、とくに革命伝統の教育を強めなければなりません。人間を教育、改造するためには、まずその人を心の底から信じ、愛し、またよく知らなければならないのです。人びとをよく知るには大衆とともに働き、生活し、同じように呼吸し、苦楽をわかちあわなければなりません。共産主義者は大衆のなかにはいり、実際の行動によって模範をしめし、大衆がめざめるまで忍耐強く説かなければならないのです。欠点のある人にはもっとあたたかく接し、なやみごとがあれば親身になって解決してやり、その人たちが正しく生きていくようにたすけてや

らなければならないのです。こうしたたゆみない努力なしには、人を感化することはできないし、人を教育、改造する複雑で困難な革命の任務をやりとげることはできないのです。大衆を教育し改造するには、肯定的なもので否定的なものを克服していく感化教育がもっともよい方法です。人間がもっている肯定的なものを最大限に生かし、毎日のように各地でおこっているりっぱな模範にならうようにし、否定的な面を克服するようにしなければならないのです。これがこんにち、社会主義のもとで大衆を教育し改造する基本的な方法です」

首相は、つづけてこう語った。

「われわれといっしょにすすもうとする人たちは、だれでも教育し改造してともにいかなければなりません。しかし意識的にわれわれに反対する階級的な敵対分子には、徹底的な打撃をあたえなければならないのです。つねにこのことを忘れてはなりません」

首相は、作業班内には孤児が多いかと班長にたずねて、こうつづけた。

「アメリカ帝国主義者に父母を奪われたその子たちは、ほんとうに貴重な子どもたちです。父や母がいれば、どんなにかその子たちをかわいがることでしょう。ところがその子たちはいま父母の愛をうけることができない。……子どもたちに必要なのは愛情といつくしみです。父親の深いいつくしみと、母親のあたたかい愛情をもとめているのです。だれがその子たちに、そうしたいつくしみと愛をあたえることができるでしょう。それは、あなたたちがしなくてはならないのです。……あなた方がその子たちのよい姉さんとなり、やさしい母親となってあげなければならないのです。わたしは、あなたがそうしてくれることを心からねがっています。そうして、うらみをのこしてこの世を去った父母の分まであわせて、その子たちがしあわせに暮らせるようにしてあげなければなりません」

作業班長は首相のこのことばを胸に深く刻み、作業班長であるまえに班員たちの姉となり、母となるようにつとめた。

彼女は作業班員たちを深く愛した。

そしてみんなが正しく生きていけるように全力をつくした。

金日成首相は、数千数万にのぼる千里馬の騎手たちをこのように育てた。生産を建設で革新者であるばかりでなく、才能ある管理人に、練達した組織者と政治活動家に、真の共産主義教育者に育てあげた。全国いたるところで、生産と建設で大衆的な革新がおこり、共産主義的人間の赤い花が咲きこぼれた。

本宮（ポングン）化学工場のある扇動員は、一人の作業班員が戦時中に別れた姉の消息がわからず困っていることを知り、各地に数百通もの手紙を書いておくった。しかしそれでも消息がわからなかったので、今度は休暇をもらい、遠くのまちにまででかけ、じつに百七十三か所をたずね歩いてやっとさがしあてたのである。

それればかりか、かれはその姉弟に自分の住居まであたえたのであった。

また慈江（ジャガン）道第四建設事務所の二重千里馬裁断作業班員たちも、数年間分の休暇と休日をさき、数十回もたずね歩いて戦時中に生き別れとなっていた班員の肉親をさがしだした。

このように、工業分野でくりひろげられた千里馬作業班運動は、人びとを教育、改造しながら生産でつぎつぎと飛躍をもたらしていった。

こうしたとき、共和国北半部では、第一次五か年計画を成功裏に遂行し、社会主義建設で決定的な前進をもたらす七か年計画のぼう大な任務の遂行へとすすんでいった。これを成功させるためには、千里馬作業班運動を工業だけでなく、経済と文化そして思想生活のあらゆる分野にわたってくりひろげなければならなかった。

首相は、社会主義建設と千里馬運動発展の合法則的な要求をみてとり、千里馬作業班運動をさらに拡大し発展させるための措置をとった。

首相の発起によって一九六〇年八月、ピョンヤンでは第一次全国千里馬作業班運動先駆者大会がひらかれた。

首相は大会で、『千里馬騎手はわれわれの時代の英雄であり、党の赤い戦士である』と題する演説をおこなった。首相はこの演説のなかで、千里馬騎手は社会主義建設をこれまでにない早い速度で前進させる栄光に輝く先駆者であり、社会主義の高い峰にむかって、共産主義の光明にかがやく未来にむかって力強く前進する党の赤い戦士であると評価しながら、千里馬作業班運動の本質と特性、その政治、経済的意義を科学的に明らかにした。

そして、千里馬作業班運動をいっそう拡大発展させるためにつぎのようにのべた。

「千里馬作業班運動をより拡大し発展させることは、社会主義および共産主義へむかうわが人民の前進運動をいちだんと促進させることになります。すべての勤労者とすべての作業班はこの運動に参加しなければならないのです。工業部門だけでなく農業、建設、運輸、商業、教育、保健、科学、文学、芸術など、経済と文化のあらゆる分野でこの運動をひろくくりひろげなければなりません」

つづけて首相は、こう訴えた。

「われわれは千里馬作業班の隊列をたえずひろげ、この運動をいちだんと高めて千里馬作業班から千里馬職場へ発展させなければならない」

首相の教えどおり、千里馬作業班運動は、社会主義建設のすべての戦線と社会生活のあらゆる領域にひろがっていった。すなわち、工業ばかりでなく、農業、運輸、科学、教育、文化、保健、商業流通など、人民経済のすべての部門と生産、技術、文化、思想および道徳のあらゆる領域にわたって全面的にひろがっていった。この過程で、人民経済のすべての部門では生産革新者、才能ある管理人、練達した組織活動家、真の共産主義者の隊列が拡大していった。生産と文化、思想と道徳のあらゆる分野で革新があいついでおこり、世人を驚嘆させた。

肥料工場病院の医療集団は、全身の四八パーセントに三度火傷をおって入院した九歳の方夏秀(パンハス)少年を救うため

寝食をわすれて治療にあたった。

あらゆる手段と方法を講じてみたが、患者の熱は依然として四十度をさがらず、昏睡状態がつづいた。

人間の生命をかぎりなく貴ぶかれらは、古今東西、いまだかつてだれもおこなったことのない同種皮膚移植手術をおこなうことを大胆に決心し、少年の全身をおおうための皮膚を自分たちの体から切りとることにした。このことはたちまち全国に知れわたり、病院は感動と興奮のるつぼと化した。

生命を救う貴い壮挙を外科医だけにまかせておけようかと、多くの人びとが先をあらそってかけつけた。

手術室はたちまち興奮した人びとでいっぱいになった。そのなかには病院の院長をはじめ医師、看護婦、看病員たちもおり、入院患者である興南肥料工場の労働者もいた。かれらはわれ先にと皮膚の提供と輸血を申しでた。かれらの目は涙でうるんでいた。

この感動的な事実を知った金日成首相は、ただちにその医療集団に熱烈なはげましの手紙をおくった。

文面には、つぎのようなことばがしたためられていた。

「みなさんは人間をかぎりなく愛し、人間の生命をなによりも貴び、他人の苦しみを自分の苦しみとし、あくまで人民に奉仕し、人民の幸福のためには、自分のすべてをなげうつ共産主義者の気高い思想を、実際の行動でしめしました……」

首相のこの手紙は、ラジオをつうじて放送された。

人民はこぞって方夏秀少年のために胸を痛め、医療集団に熱烈な声援をおくった。

直接、病院をたずねて皮膚と血を提供した人もたくさんいた。方夏秀少年は千里馬騎手の献身的な愛情によって、少しずつ危機を脱していった。少年はその後、数回におよぶ皮膚移植手術によってついに大地を歩けるようになり、人びとの胸にいだかれて笑えるようになった。うたがいもなく方夏秀少年は、この世でもっとも美しい共産

主義的な愛情によってよみがえった一輪の花であった。

人の胸をうつこのような美談は、いたるところできくことができた。まさに共産主義的な新しい人間と英雄が、群れをなしてぞくぞくと生まれる時代であった。

自分の命をもかえりみず雨期に敵の敷設した機雷をとりのぞきながら、ふりしきる雨のなかで堤防工事を期限内に完成し、人民の生命と財産を守った建設事務所の千里馬小隊員たち。人間にたいするかぎりない愛情によって、自分ばかりでなく家族の皮膚や骨まで切りとり、十余年ものあいだたつことさえできなかった患者に大地を歩かせ、このすばらしい社会を見ることができない、目のみえない数百名の気の毒な人たちに光明をあたえた医師たち。困難なことはいつもすすんでひきうけ、功績は他人にゆずる労働者たち。人の寝しずまった真夜中にこっそり冷床苗床にむしろをあんでかぶせ、薪木をはこんだ農民たち。研究のかたわら生産現場をおとずれて労働者とともに働き、技術を教えた科学者たち。まことにこれらの人びとは、金日成首相のいつくしみのなかで育った新しい共産主義的な人びとであった。

これは千里馬作業班運動の貴い結実であった。金日成首相が導いた千里馬作業班運動は、このように勤労者を集団的英雄主義と共産主義的に教育する全人民的な運動であった。

千里馬作業班運動は、首相の正しい指導によってその範囲を急速にひろげていった。この運動は作業班単位をはなれ、職場や工場も千里馬職場、千里馬工場へとますます高い段階に発展していった。

このように、千里馬運動は飛躍に飛躍をかさね、経済と文化、思想と道徳のあらゆる分野で、古いものを一掃しながら革新をつづけ、社会主義建設をよりすばらしく、より早くおしすすめるための数百万勤労者の一大革命運動に発展した。金日成首相は、千里馬運動の本質と巨大な意義にもとづいて朝鮮労働党第四回大会では、この運動を社会主義建設における朝鮮労働党の総路線であると規定した。

首相は、この路線の本質と生活力についてこうのべた。

「この路線の本質は、すべての勤労者を共産主義思想で教育、改造して党のまわりにいっそうかたく団結させ、かれらの革命的熱意と創造的才能を大きく発揚させ、社会主義をよりいっそうすばらしく、より早く建設することにあります。この路線の不敗の生活力は、それが人民大衆によって生みだされ、党が大衆の意志を反映してかれらの実際の闘争経験を一般化してうちだした路線であり、したがって大衆がそれを熱烈にうけいれたことにあります」

千里馬運動の基本的な目的は、首相がのべたように、「資本主義から社会主義へ移行する過渡期に、すべての人を教育、改造して消極分子を積極分子にかえ、たちおくれた人が一人もいないようにし、だれもが大衆的英雄主義を発揮して社会主義、共産主義を早く建設しようとするところに」ある。

このような目的をもった千里馬運動は、いうまでもなく金日成首相の主体思想、自力更生の革命精神によっておこったものであり、これはまた党の伝統的な大衆路線がもたらした結実でもあった。この偉大な運動の強じんな力の源泉は、まさにここにある。

この運動の力強い流れのなかで、革命と建設の分野では巨大な変革がおこった。

千里馬大進軍のなかで、工業総生産額を二・六倍に高めることをみこんだ五か年計画の課題は、わずか二年たらずで完遂され、一九五七年～一九六〇年までの四年間に工業総生産高は三・五倍に成長し、年平均成長率は三十六・六パーセントに達した。社会主義的工業化のしっかりした基礎が築かれたことによって、共和国北半部は強力な自立的経済土台をもった社会主義工業=農業国家にかわった。

じつに数千年来の歴史をつうじて想像もできなかったことが、千里馬の大進軍のなかでなしとげられ、生活はすべて革命的にかわっていった。国の様相は一新され、山河も人間もおどろくほどかわった。

戦争の爪あとはあとかたもなく消え、現代的な都市や文化的な農村、大きな工場や企業所が林立した。また田野には五穀がみのり、人の寿命は二十年ものびて九十歳が還暦といわれるようになった。

そして世界の人びとは、四千万朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相の指導する朝鮮民主主義人民共和国を社会主義の模範として、「千里馬朝鮮」として高く賞賛している。

千里馬運動は、国際的にも大きな意義をもっている。

この運動は、なによりも国際革命運動のすぐれた指導者のひとりである金日成首相によって創造され、社会主義革命と建設にかんする独創的な思想と理論が、いかに実践的威力をもつものであるかを、全世界にあますところなくしめした。そしてこれは、金日成首相にたいするすべての進歩的人民と革命家たちの、尊敬と敬慕の情をいっそう深いものにした。その反面、帝国主義者たちには、偉大な領袖と英雄的人民によっておこなわれる社会主義革命と建設は、いかなる力によってもさえぎることができないということをしめした。

千里馬運動はまた、社会主義、共産主義建設は、領袖と党によって、共産主義思想で武装した人民の集団的革新運動によって、はじめて成功するものであり、また、それを最大限に早めることができるということをしめした。

それればかりでなく、この運動は、社会主義制度が資本主義制度よりもくらべようもないほどすぐれており、その優越性によって発揮される威力は、じつにかぎりないものであることをしめした。

千里馬は朝鮮の象徴となった。ピョンヤンの美しい牡丹峰とむかいあっている万寿台（マンスデ）の丘には、朝鮮人民の革命的な気概をあらわす、世界最大級の千里馬銅像が空高くそびえたっている。前脚で天空をかき、後脚で雲をけり、一気に千里を駆けめぐる翼の千里馬――、保守主義と神秘主義を一掃し、新たな飛躍へと全人民をふるいたたせた、領袖の偉大な訴えである党の赤い手紙を、片手に高くかかげて、手綱をしっかりとにぎった労働者がまえにまたがり、そのうしろには、実もたわわな稲束をかかえた婦人がのっている千里馬の像は、社会主義、共産主義にむかっ

てまっしぐらにすすむ英雄朝鮮の気概をしめし大空高くはばたいている。
千里馬は万代にわたって永遠に空高くそびえたち、われわれの時代の雄大な偉業が、いかにきびしいたたかいのなかでなしとげられたかを想起させ、朝鮮人民は一人のこらず、英雄になるべき栄誉と義務をになっていることをつたえずにはおかないであろう。

3 降仙の労働者とともに

千里馬運動の先頭には、つねに労働者階級がたのもしくたっていた。きびしい革命のなかできたえられたかれらは、身体も精神も強靱であった。安逸と私利私欲をきらうかれらは労働を戦闘とみなし、おたがいが戦友となって領袖の教えにしたがい、艱難辛苦をのりこえ、全力をふるって革命を前進させ、そのなかでかれら自身もたくましい革命家に成長した。
もちろん、いかなる国の労働者階級でも革命的な気質をもっている。しかし、その気質がどの程度の強靱さと社会的な威力を発揮するかは、かれらの前衛的な党とその指導者の政策、そしてその指導芸術に左右される。
したがってわれわれは、もっとも革命的で気高い朝鮮の労働者階級について考えるとき、なにをおいても金日成首相の偉大な指導を思いおこし、またその指導について考えるたびに、それを実践する最前線にたつ労働者階級の雄々しい姿を思いうかべるのである。
そこには、国際革命運動の貴重な模範となる叙事詩的な歴史がある。金日成首相は労働者階級をどのように見たか、革命の各段階と難関をのりこえながら労働者階級をどのようにきたえ、はぐくんできたか、首相が朝鮮の労働者階級のなかで、もっとも大切に育ててきた気質はなんであったか、などの点を概略的ではあるが、具体的な事実

にもとづいていまそれを思いおこすことは大きな意義をもっている。

われわれは無数の工場や企業所のなかでも、降仙製鋼所の労働者たちが歩んできた道のりをその実例の一つにえらんでみた。なぜなら、降仙製鋼所は千里馬のふるさとであるという点で重要であるばかりでなく、この地の労働者たちはピョンヤンのもっとも近くにある党のたのもしい近衛隊として、金日成首相からもっとも多くの現地指導と配慮をうけ、革命の最先頭にたってたたかいながら成長したからである。

ふりかえってみると、解放直後における降仙製鋼所の労働者たちの境遇は、きわめて困難であった。降仙製鋼所は他のすべての工場と同様に、敗走する日本帝国主義者によって無残にも破壊しつくされていた。そのためここの労働者たちは、いったいなにからどうはじめるべきかにまよい、暗くうち沈んでいた。都市や農村に住居をもつ一部の労働者は考えあぐねたあげく工場をはなれ、故郷にむかって帰りはじめた。これは、非常に悲しむべきことであった。

ちょうどこのとき、祖国を解放して凱旋した金日成将軍は、二十年ぶりに見るふるさと万景台にもたちよらず、真っ先にここ降仙製鋼所をたずねたのである。

この日、金日成将軍は労働者たちに新しい朝鮮についてこう語った。

「解放された朝鮮の労働者階級は、工場と国家の主人として、工場を敵の破壊と略奪行為から守りぬき、われわれの力でそれを建設拡張し、わが国の大鋼鉄工場にしなければならない。……もちろんわれわれのまえには多くの難関とあい路がよこたわっている。しかし、労働者が一つに団結した力ですすむならば、どのようなものでも占領できないことはない。このような大きな工場を建設して運営した経験のある人はいないが、技術技能を学びながら克服すれば必ず運営することができる。朝鮮民族はむかしから才能のある民族である。われわれは輝かしい民族文化と悠久な歴史をもっている。ゆたかで強力な自主独立国家の建設のために、すべての同胞が団結してすすもう」

将軍のことばは、朝鮮の新しい時代の予告であり、各地の労働者とともに、降仙の労働者たちを新しい歴史の創造へとたちあがらせる領袖の最初のよびかけであった。

労働者たちは、金日成将軍の教えと熱烈な期待に深く感動した。

ある労働者は、仲間たちにこうさけんだ。

「見てくれ、われわれが待ちに待った金日成将軍がこられたではないか！　これでわれわれの生きる道がひらけたのだ！」

工場があまりにもひどく破壊されたため、いつ仕事ができるかわからないといいながら、故郷に帰ることばかりを考えていた人びとも手にハンマーをにぎり、すでに故郷に帰っていた人もいつのまにか消息をきいて先をあらそって工場へかけつけてきた。降仙だけでなく、どの工場でもこうした変化が生まれた。国が解放されたのだから、これからは故郷に帰って父母妻子とともに自分の暮らしでもたてようと考えていたかれらの胸に、祖国というかけがえのない大きな存在がしっかりと根をおろしたのである。かれらは、金日成首相の教えから、鋼鉄で新しい国の柱をたて、礎石をうちかためなければならない重大な任務が自分たちの双肩にかかっており、そしてそれがいかに重大で栄誉ある任務であるかを深く悟った。

このように金日成首相は、解放直後から労働者たちに確固とした階級的自覚と栄誉ある歴史的使命にめざめさせ、難関のまえでどうしていいかわからずに気をおとすか、散りぢりになったかも知れないかれらを、革命と建設のたのもしい前衛として団結させたのである。これは、階級関係と政治情勢がきわめて複雑であった解放直後の環境では、とくに重要な意義をもっていた。

降仙の労働者たちは領袖の最初の教えを実践するために、たちはだかる難関をつぎつぎとのりこえ、奮闘につぐ奮闘の日々をおくった。解放直後であったため暮らしむきは苦しかったが、かれらは、わが家の生計を考えるより

もこわれた加熱炉をなおすれんがのことをもっと心配し、無残に破壊された圧延機をどうすれば早く復旧できるかということにいっそう深い関心をしめした。

日本の侵略者たちは、製鋼所の技術的構造が朝鮮の労働者には「永遠の秘密」として残るだろうとうそぶいたが、領袖の教えに忠実な降仙の労働者たちは、大胆で革命的な方法によってわずか数か月間に工場を復旧し、新しい祖国建設に必要な鋼鉄を生産しはじめた。

かれらは、三年間にわたる祖国解放戦争のときにも身をもって党と領袖を守りぬき、最後まで勇敢にたたかった。アメリカ帝国主義者が挑発した戦争は、かれらにとってもきびしい試練の連続であった。しかし降仙の労働者たちは、戦時生産を保障することにかんする領袖のよびかけにこたえ、弾雨のなかでも工場をはなれず、生産をとめなかった。爆撃でクレーンから墜落して重傷を負った労働者も職場をはなれようとはしなかった。またかれらは、雨のようにとびかう弾丸のなかで犠牲者をだしながらも、領袖の高い志をかかげて分塊圧延機やクレーンを守り決死的に働いた。

かれらは、圧延機を破壊しなければならなかった戦略的後退のときも、「だめだ、絶対にだめだ！　おれが生きているかぎりは、だれも圧延機に手をふれさせないぞ！」と叫び、安全な場所へ圧延機を移してから後退したのである。

そして後退から帰ってきたかれらは、生死を知るよしもない家族の安否をたずねるまえに、まず工場の設備をうめた場所へかけつけていった。ある圧延工は、圧延機の心臓部であるモーターを自分の家の近くにうめ、毎晩のようにチゲで土をはこんでは盛りあげて小山をつくり、それでも気が休まらずに掘立小屋を建て、停戦の日までそこにすんだという。

祖国解放戦争における偉大な勝利は、国中もそうであったが、降仙の地をもかえた。その変革はやはり、偉大な

領袖金日成首相によってもたらされた。

首相は一九五三年八月三日、まだ硝煙が消えやらぬまえに降仙製鋼所をたずねた。ここも例外なくひどく破壊されていた。三万余の機械設備の残骸と一万数千発の爆弾の穴しか見あたらない工場の構内は、まるで蜂の巣のようだった。しかし首相は、ためらいなく雑草をかきわけてすすんだ。

このように、満足に足の踏み場もない危険な場所へ歩みを移す首相の姿を見て、労働者たちははらはらした。一人の労働者が道をつくろうと、鎌で雑草を刈りはじめた。しかし首相はそれをおしとどめた。首相は微笑をうかべながら、「鎌で道をつくるのですか。労働者階級は鋼鉄で大路を切りひらくものです」といった。

金日成首相は分塊圧延職場までくると、圧延機の心臓であるモーターが動くのを見て非常によろこんだ。そしてモーターが破壊されなかったいきさつを知ると、圧延機にひめられた労働者たちのかぎりない情熱に思いをはせながら、なんどもモーターをなでまわした。首相は労働者たちの手をかたくにぎりしめながら、傷ついた人はいないかと心配し、なによりもまず労働者の住宅から建てなければならないとのべた。

さらに首相は、ある労働者の顔色が非常によくないのを見て、病をなおすよう治療の対策までたててくれた。

慈愛にみちた首相が労働者たちの荒れた手を固くにぎりしめながら、たいへん苦労したでしょうとやさしく声をかけ、暮らしのすみずみまで気をくばったとき、犠牲の多かった戦火のなかでも涙を見せなかった労働者たちも、ついにこらえきれず声をしのんで泣いた。岩のようなかたい意志の持ち主であったかれらは、泣くまいとして唇をかみしめたが、熱い涙がほおをつたうのをどうすることもできなかった。かれらは数多くの難関にとりかこまれてはいたが、春の太陽のような領袖をいただいていたからこそ、そして未来にたいする楽天的な確信と希望があったからこそ、さらに金日成首相の戦士として生き、たたかうよろこびがあったからこそ、胸の奥底からこみあがる熱い涙をおさえることができなかった。

ある労働者がいった。

「首相同志、ご心配にはおよびません。わたしたちはたたかいぬきます。あの凄惨な火の海のなかでさえ生きてきたでのすから……。これからも、首相同志の教えどおりに工場を建てて鋼鉄を生産すれば、わたしたちの生活もきっとよくなるにちがいありません」

かれらは、製鋼所を復旧せよという命令を早くくだしてほしいと首相に嘆願した。

この日、金日成首相は分塊圧延職場だけでなく、破壊された製鋼所のすみずみまで見てまわった。ながい時間にわたって足のふみ場もない構内をこまかく視察した首相は、労働者たちといっしょに腰をおろして、工場の復旧について話しあおうと提案した。労働者たちは、首相をむかえいれるにふさわしい部屋一つ満足にないことに心を痛めた。しかし首相は、焼けのこった一本の白楊(ポプラ)の木のしたにいくと、くずれた壁土に腰をおろした。そして首相は、まわりに集まった労働者たちとともに復旧の方法について話しあった。

首相はまず、工場の復旧にたいする労働者たちの意見をたずねた。このとき一部の労働者と技術者たちは、鋳造、工務職場から復旧し、つぎに鋼鉄、造鋼、分塊職場を復旧すればどうでしょうかと話した。

首相はかれらの意見を注意深くきいたのち、それだけの力があるかどうか、労力は全部でどれくらいあるだろうかとたずね、つぎのような意味のことを話した。

「みなさんの気持ちはよくわかります。しかしわたしの意見では、まず鋼鉄職場を復旧することに力を集中する方がよいと思います。鋼鉄が生産されてこそ、それを処理するつぎの工程が円満に解決されるのです。鋼鉄が生産されないのに、つぎの工程から復旧してなんになりましょう」

そして首相は、黄海製鉄所の労働者たちに平炉から復旧すべきだとのべたように、ここでもたとえ一台の電気炉でも早く復旧して、鉄を生産することに力を集中すべきだと強調した。

鉄こそ国の宝であった。首相はまさに鉄を、鋼鉄を鍵とみなし、廃墟のなかから大工業の道を切りひらこうと考え、鉄、鋼鉄をもって社会主義への近道を切りひらこうと決心したのである。

首相はまた、製鋼所を復旧するにしても元どおりではなく、より現代的な大冶金工場に復旧発展させなければならないとのべながら、工場の復興建設はわれわれ自身の力で、われわれの設備とわれわれの資材、われわれの技術で遂行しなければならないと強調した。

そして、まず鋼鉄職場から復旧し、朝鮮人では百年かかっても復旧できないとうそぶいたアメリカ帝国主義の頭上に、真っ赤な溶鉄をふりそそいでやらなければならないとのべた。

そして首相は、どの工場よりもまず製鋼所を復旧し、鉄を生産してこそ、これにもとづいて人民経済のすべての部門を急速に発展させることができると強調した。

首相は革命と建設であたらしい課題や難関が生じるたびに、まず労働者階級、なかでも鋼鉄基地や機械製作基地の労働者たちをたずね、つねに、党のもっとも革命的な前衛部隊としての高い使命と戦闘的な威力を発揮すべきであることを強調し、党はかれらの力をもっとも深く信頼しているとのべた。

自国の人民と子孫のための革命と建設は、決して他人がしてくれるものではないということ、したがって労働者階級はその先頭にたって、あらゆるものをわれわれの設備、われわれの資材、われわれの技術でやりとげなければならないということ、革命は階級の敵と難関とのたえまないはげしい闘争をつうじてこそ、輝かしい勝利をえることができるという教えは、首相が解放直後から一貫して強調してきた自力更生の精神と主体思想の具現であった。

金日成首相は、このように労働者階級を闘争のなかできたえながら革命的に教育した。

朝鮮の労働者階級の歴史は浅いが、かれらはきわめて戦闘的であった。かれらは日和見主義の潮流に汚れたことがなかったため、金日成首相が形容したように、かれらの頭はまったく白紙のようにきれいであった。首相は、こ

うした朝鮮労働者階級の純潔性を財宝のように大切にしたばかりでなく、そこにもっとも革命的な赤い思想をふかくうえつけたのである。これは首相の指導における、じつに貴重で偉大な勝利であった。

だからこそ降仙の労働者たちは、戦後の困難な時期にも首相の教えからかぎりない力をえて、復旧建設の荘厳なたたかいの場にとびこんでいったのである。かれらのまえに提起された戦闘的な課題は、一日も早く鉄を生産することであり、自力更生の精神によって現代的な大鋼鉄工場を建設することであった。

金日成首相はかれらに、降仙は自力更生の模範にならなければならないと教えた。かれらはこの教えを信念として、名誉として前進に前進をかさねた。

全国津々浦々でもそうであったように、降仙の労働者たちがくりひろげた復旧建設は、まさに前例のないはげしい戦闘であった。労働者たちは現場で生活し、食事をはこんでもらいながら建設に熱中した。工作機械もなく、鋳物工場さえなかった。かれらはすべてを手で削り、ハンマーでたたいてつくりあげた。製管工たちは保安鏡がないため、カーバイトの煙でガラスをいぶしてもちい、おどろくべき成果をあげた。

荒れはてた廃墟のうえに雄大な降仙製鋼所がそびえたった過程には、数かずの感動的なエピソードがひめられている。そのなかには、こんなこともあった。

炉のなかに不発弾がくいこんでおり、これをとりのぞくことが問題となった。

かれらがこの問題に頭を痛めていたとき、敬愛する首相から製鋼所に電話がかかり、復旧建設の状況はどうか、労働者たちの健康はどうかと気づかっていたという話がつたえられた。その瞬間、一人の溶解工が鉄の棒をわしづかみにすると炉のなかへとびこんだ。

「同志たち！　百メートルさがってくれ！」

しかし、炉からはなれる仲間はいなかった。かえって、炉のなかへとびこむ労働者たちが続出した。かれらは先

をあらそい、たとえ一命を失ったとしても、領袖に誓った電気炉の復旧をおくらせることはできないと、いつ爆発するかも知れない不発弾をかかえて一歩一歩、大同江めざして歩きはじめた。そして、革命に身をささげる決心をしたこの英雄たちは、ついに危険な不発弾の処理に成功した。
かれらは夜に日をついで汗まみれになってあらゆる困難をのりこえ、停戦後わずか四十日で最初の鉄を生産することに成功した。
こうして、火花散る溶鉄の流れを見つめた瞬間、労働者たちは、たがいにだきあってぐるぐるまわりながら、「金日成同志万歳！」を叫んだ。
金日成首相は全国の革命と建設を導びいていく多忙な身でありながら、いくどもこの製鋼所をたずね、生産と建設で提起される問題を解決し、労働者たちを力強くはげました。りっぱに建設された工場を見まわるとき、首相はつねにはげましのことばをあたえて労働者たちの自負心を高めた。
「炉が復旧されたね！　ここへくると力がわいてくるよ！」、「あの炎を見ると力がでる！」、「きみたちといるときが一番しあわせだ！」
これは、溶解工たちに語った首相のことばである。首相は労働者たちを革命家として、親友としてあつかい、かぎりなく愛した。かれらを革命的にきたえながら教育したのも、この大きな愛からうまれたのであり、この偉大な愛によって国事までかれらと討論し、重大な任務をためらうことなくあたえたのである。
党と領袖をもっとも近いところで守っている降仙の労働者階級は、領袖の教えであれば水火をもいとわず、必ず最後までやりとげるたのもしい首都防衛部隊であった。
だからこそ金日成首相は、五か年計画がはじまってまもない試練のときでも、ふたたび降仙の労働者階級をたずね、かれらをたたかいの最先頭にふるいたたせたのである。

首相が複雑な情勢と難関について説き、労働者たちに新しい功績をよびかけたとき、かれらは領袖と党を熱烈に擁護して誓った。

「首相同志！　かならず鋼鉄を増産してみせます。分派分子どもを真っ赤な鉄で焼きつくし、わたしたちの土性骨を見せてやります」

首相が帰った日の夜、分塊圧延職場の労働者たちは、仲間のひとりを批判していた。批判されたのはこの日、首相とひざをまじえて話した労働者であった。

かれは、鋼板をより多く生産する予備がどれくらいあるかを知らなかったため、一万トンの鋼材さえ余分にあれば国はひと息つくだろうという首相のことばを耳にしても、鋼板をそれだけ増産しますとすぐこたえられなかったのである

「なるほど、予備がどれくらいあるのかわからなかったというのかね。それにしても首相同志が、あれほどまでに鋼鉄のことを心配なさっているのに、たとえ何百回たおれようとも、必ずやりとげてみせますという、われわれ労働者階級の決心ぐらいは申しあげることはできたはずだではないか」

だれかがこういうと、数多くの労働者たちがこぶしでひざをたたきながらそれに賛成した。批判された労働者は顔をあげることができなかった。かれらは戦火をともにかいくぐり、戦後復旧建設のきびしい日々にもたすけあい、はげましあいながら生死をともにしてきた戦友であり、同志たちであった。だからこそかれらは、同志の弱さに心を痛め、歯に衣をきせないきびしい批判をくわえたのである。

その当時、保守主義と消極性にとらわれた一部の人びとは「公称能力」だけにこだわり、鋼鉄増産の予備をさがしだすことをさまたげていた。ある人びとは、予備は二か年計画のときにみなつかいはたしてしまったから、これ以上の力はなく、生産を増大させることはむずかしいと主張し、またある人びとは、製鋼時間をこれ以上ちぢめる

ことはできないし、分塊圧延機では絶対に六万トンの「公称能力」をこえることはできないといいはった。しかし、金日成首相につねに忠実な降仙の労働者たちは、保守主義と消極性を打破し、革新ののろしをうちあげた。会議ではだれもが、それまでは想像もつかなかった生産と建設課題をひきうけた。しかし、かれらの前進をはばんだのは、三日もたたないうちに灰でつまってしまう加熱炉の煙突であった。

この問題さえ解決すれば、圧延や切断が二、三倍は高まるはずだったが、炉の稼動をとめなければ灰をのぞくことができないという古い考えが、かれらの前途をふさいでいたのである。そのため、かれらはしばしば炉をとめなければならなかった。

こうしたとき、一トンでも多くの鋼鉄を増産しようという情熱に燃えたったかれらは、体にかんたんな装具をつけ、高熱の炉にとびこんでまたたくまに灰をとりのぞくことに成功した。こうした英雄的な働きによって、加熱炉は休むことなく稼動しつづけたのである。

金日成首相はつねに、継続前進、継続革新の革命思想で労働者を教育し、かれらは力と知恵を一つにして生産と技術をたえず発展させていった。

首相は自身の貴重な経験から、革命と建設で大衆路線つらぬくことがどれほど重要なことであるかについて、指導的な幹部たちにつぎのようにのべた。

「労働者たちとともに話しあい、かれらの集団的な知恵をうけいれて発展させるならば、そこからかならず増産と節約の予備が生まれるはずだ。これは社会主義思想を知らない人びとには、絶対に理解できないことである」

一九五七年六月にも、金日成首相は千里馬の大高揚にわく降仙の労働者たちのなかにいた。労働者たちの士気がきわめて高いことを知った首相は、かれらをはげましながらこうのべた。

「みなさんはつねに、党の政策をつらぬくために先頭にたちました。十二月総会の決定を実行するにあたり、『最

大限の増産と節約』をよびかけた党の戦闘的なスローガンをかかげ、全国をふるいたたせましたが、つねに先頭にたってこそ威信があるというものです。りっぱにやりとげなければなりません。降仙製鋼所はほかの工場とちがって、党中央委員会をもっとも近いところで守っている近衛隊です。集団的な革命運動をおこさなければなりません。……一つの作業班、一つの職場だけでなく、工場全体がふるいたたなければなりません」

首相はある溶解工の肩をたたきながらはげました。

「きみたちが中核なのです。国の主人はみなさんです。国がよりゆたかになるかどうかは、きみたちが鋼鉄をどれだけ多く生産するかにかかっているのです」

こう語った首相は、溶解工たちがどんな高熱のなかで働いており、かれらになにをより多くあたえるべきかを知るために、二千度の高熱で灼けただれた炉のそばに近より、火焔と火花をものともせず視察をつづけた。首相は深いもの思いにとらわれていたあと、高熱のまえで働く人は寒さを余計に感じるものだが、風が吹きこまないようにし、作業服はもっと厚くてよいものをあたえるようにといいながら、工場の指導幹部たちにこう話した。

「溶解工たちの健康状態について、もっと気をつけなければなりません。炉のまえに扇風機をつけることが必要です。また栄養剤も十分にあたえ、休養と静養にもゆかせ、労働法令にしたがって休暇も存分にあたえるべきです。中核がむりをしないようにしなければなりません」

首相は一労働者の健康まで心配し、みずからその治療対策までたてたり、溶解工たちの飲料水からベットなど、生活のすみずみまで肉親のような愛をそそいだ。

首相は降仙をおとずれるたびに、いつも労働者の家庭や宿舎、そして商店を見てまわり、かれらの暮らしむきに気をくばり、どうすればかれらが、すこしの不便も心配もなく、しあわせにくらすことができるかについて心をくだいた。

こうした配慮は、かれらの生活をいっそう明るいものに、より楽天的なものにかえ、戦闘的な気勢をますます高めた。

かれらはひきつづき千里馬の勢いで駆け、困難だといわれた一九五七年度の工業生産をみごとに超過完遂した。

創造と奇跡がつぎつぎと生まれた。

領袖の革命思想で武装した降仙の労働者階級には、占領できない高地などはなかった。だからこそ金日成首相は、千里馬運動を大衆的な革新運動と人間改造運動がむすびついたより高い大衆運動へ深化、発展させる構想をいだいて、まず降仙の労働者階級をたずね、かれらに最初ののろしをかかげさせたのである。

降仙の労働者たちは、領袖のこのような深い志を胸に、「一人は全体のために、全体は一人のために!」「共産主義的に働き、学び、生活しよう!」というスローガンのもとに、集団的な革新運動をくりひろげた。

かれらは作業班を拠点に、集団的革新運動と自身をいっそう革命化する努力を密接にむすびつけ、おたがいにたすけあい、はげましあいながら前進する気高い共産主義的品性を発揮した。そしてこれが千里馬作業班運動の発端となったのである。

かれらにとっては、領袖の革命思想が具現された党の政策と教え、『抗日パルチザン参加者たちの回想記』などが、共産主義的に働き、学び、生活するうえでの唯一の教科書となった。かれらは、領袖の革命思想をしっかりと身につけ、領袖にかぎりなく忠実だった抗日闘士の崇高な革命精神と品性に学び、それを自分の生活に具現するために努力をかさねた

かれらのなかには報酬もうけず、おくれた作業班をたすけながら百日を一日のごとく働きぬいた人びともいた。

またかれらは、同志の苦しみをなくすためなら自分の血や肉をささげることも惜しまなかったし、すすんで高熱の電気炉のなかに身を投じ、炉を修理して正常な生産を保障した。かれらは、こうした革命思想を集団的革新運動に

よって、五か年計画の高い目標を二年間も早く遂行する奇跡を生みだしたのである。

こうして降仙の労働者たちは、全国の労働者階級とともに金日成首相と朝鮮労働党の近衛隊、決死隊としてつねに千里馬運動の先頭にたってすすみ、自分たちの工場をいっそう大きな見とおしをもつゆるぎない主体の工場につくりあげた。

じつに、降仙の労働者たちがあゆんできた勝利の歴史は、金日成首相の直接的な教育と原則的な愛情にはぐくまれた闘士、革命家の勝利の歴史であり、かれらの誇り高い姿は、たたかいながら前進する全労働者階級の輝かしい社会的典型であった。

いかなる民族も、真に強力で幸福な民族となるためには、こうした勇敢な労働者階級をもたねばならない。また、いかなる国の党と指導者も、真にりっぱな社会主義・共産主義社会を建設しようとするならば、金日成首相のように労働者階級をきたえ教育することを知らなければならず、かれらを深く大きく、そして原則的に愛することを知らねばならないのである。

45.10.25

金日成首相の主要活動年表

（一九一二年四月～一九五七年十二月）

一九一二年四月十五日
ピョンヤン市万景台区域万景台里（当時、平安南道大同郡古平面南里）において、金亨稷先生と康盤石女史の長男として誕生。

一九一七年三月二十三日
金亨稷先生が反日地下組織である朝鮮国民会を組織。

一九一七年の秋～一九一八年の秋
金亨稷先生がピョンヤンの監獄において獄中闘争を展開。

一九一九年の夏～一九二三年一月
中江鎮、臨江をへて八道溝の小学校で学ぶ。
金亨稷先生が中江鎮、臨江、八道溝において反日闘争を継続。

一九二三年二月～一九二五年のはじめ
故郷の彰徳学校で学ぶ。

一九二五年のはじめ（十四歳）
祖国解放の大志をいだき鴨緑江をわたる。

一九二六年六月五日
金亨稷先生逝去。

一九二六年の夏～秋
樺甸県華成義塾に入学し非合法組織ㅌ・ㄷ（打倒帝国主義同盟）を組織。秋に華成義塾を中退し撫松でセナル少年同盟を組織。

一九二七年の春
吉林毓文中学校入学。ここでマルクス・レーニン主義を探求。

一九二七年の春～一九二八年
吉林ではじめて共産主義青年同盟を組織。反帝青年同盟を組織。
朝鮮人留吉学友会を指導。吉林でおこなわれた安昌浩の民族改良主義的演説を論駁。
康盤石女史、撫松で婦女会主任として活動。

一九二八年十月～十一月
吉会線鉄道敷設反対闘争を組織指導。

一九二九年の春
「南満青総大会」に参加したが、柳河県三源浦で民族主義者の分裂行動を糾弾する弾劾文発表。

一九二九年
満州反動軍閥に反対する青年学生の同盟休校闘争を組織指導。

一九二九年下半期～一九三〇年の春
吉林監獄で獄中闘争。植民地民族解放問題、朝鮮革命路線などを研究。

一九三〇年の夏～一九三一年のはじめ
朝鮮革命にかんする主体的なマルクス・レーニン主義的革命路線を提示。抗日武装闘争のために共産主義者たちの武装組織である朝鮮革命軍を組織。吉東地区で共青組織を指導。卡倫、孤楡樹、五家子、敦化、安図地方の農民大衆のなかで活動。農村青少年のなかで軍事訓練を実施。

一九三〇年八月
武装闘争の最初の試みとして国内に武装グループを派遣。武装グループ責任者の叔父金亨権先生は、豊山、洪原などで活動中、日本帝国主義者に逮捕され一九三五年、ソウル西大門刑務所で獄死。

一九三一年の秋
九・一八「満州事変」ののちに開催された安図地方革命組織責任者集会で、抗日武装闘争路線を具体化。

一九三一年十一月
明月溝会議に参加し、抗日遊撃隊の組織問題を討議。

一九三一年の秋～一九三二年の春
間島朝鮮農民の秋収暴動と春慌暴動に農民大衆を組織動員。

一九三二年四月二十五日
抗日遊撃隊を創建。

一九三二年の夏
民族主義者たちの武装力である独立軍の司令梁世奉と談判、民族団結をよびかける。

一九三二年七月三十一日
康盤石女史逝去。

一九三二年の夏〜一九三五年　東満各県に遊撃根拠地——解放地区を創設。根拠地内に人民革命政府を樹立。土地改革をはじめとする社会経済改革を指導。

一九三三年六月　「反日部隊」の頭目呉義成と談判。

一九三三年九月　東寧県城進攻戦闘を指揮。

一九三三年十二月〜一九三四年一月　小汪清遊撃根拠地の防御戦闘を指揮。

一九三五年二月〜三月　大荒崴会議、腰営溝会議で反「民生団」闘争の左翼偏向路線などを批判。

一九三五年六月〜一九三六年二月　老黒山戦闘を指揮。北満遠征おこなわれる。各部隊が南満洲、東満州、国内各地に進出。

一九三六年二月　南湖頭会議をひらき、反日民族統一戦線、党創建準備のより積極的な推進および遊撃隊の鴨緑江沿岸、白頭山西南部地帯への進出方針を提示。

一九三六年五月　東崗会議で南湖頭会議の方針を具体化。

一九三六年五月五日　祖国光復会創建。十大綱領を発表。機関誌として『三・一月刊』の発刊決定。金日成将軍が祖国光復会会長に推戴さる。

一九三六年八月十七日　撫松県城進攻戦闘を指揮。

一九三六年下半期　白頭山根拠地創設。

一九三七年一月　甲山一帯の祖国光復会下部組織の一つ朝鮮民族解放同盟結成。

一九三七年六月四日　普天堡戦闘を指揮。朝鮮人民につげる布告文を発表。

一九三七年六月三十日　間三峰戦闘を指揮。

一九三七年九月　日本帝国主義の中日戦争挑発——七・七事変と関連し国内人民につげるアピールを発表。

一九三七年十一月～一九三八年三月　馬塘溝で軍政学習を指導。

一九三八年十一月　南牌子会議で極左冒険主義路線である熱河遠征を批判。三個の方面軍を編成。

一九三八年十二月～一九三九年四月　南牌子から長白への苦難の行軍。

一九三九年五月一日　長白県小徳水でおこなわれたメーデー慶祝大会で演説。

一九三九年五月十八日～二十三日　茂山地区戦闘を指揮。

一九三九年の秋～一九四〇年のはじめ　白頭山東北部一帯で大旋回作戦を指揮。

一九四〇年八月　第二次世界大戦の勃発と関連し、敦化県小爾巴嶺会議を召集、会議で最後の決戦に対処する方針を提示。小部隊活動へ移行。

一九四一年の春　汪清、延吉、東寧など各県と国内における小部隊および武装グループの軍事政治活動を指揮。武装グループは羅津、雄基一帯で活動。

一九四一年十二月　日本帝国主義の太平洋戦争開始に対応した人民革命軍の活動方針を提示。

一九四二年～一九四五年八月　戦争情勢の新たな転換と関連し、最後の決戦に対処する準備活動を推進。武装グループが東満州とピョンヤン、会寧、雄基、清津、羅津一帯で活動を展開。

一九四五年八月八日　ソ連の対日宣戦布告を契機に、朝鮮人民革命軍に日本帝国主義にたいする最後の攻撃命令をくだす。

一九四五年八月九日～十五日　朝鮮人民革命軍が雄基郡一帯での戦闘をはじめ、羅津、清津、羅南、元山解放戦闘などを展開。

一九四五年八月十五日　朝鮮人民、日本帝国主義の植民地支配から解放される。朝鮮人

民革命軍の祖国凱旋。

一九四五年八月十五日　金日成将軍が指導した栄えある抗日武装闘争の偉大な勝利。日本帝国主義の敗亡。朝鮮解放。絶世の愛国者であり、民族的英雄である朝鮮革命の偉大な指導者金日成将軍の祖国凱旋。

一九四五年十月十日　朝鮮共産党を創建。党の政治路線と組織路線を提示。

一九四五年十月十三日　各道党責任幹部たちのまえで『新朝鮮建設と民族統一戦線について』演説。

一九四五年十月十四日　ピョンヤン市民衆大会で祖国凱旋を内外に宣布。

一九四五年十一月一日　党機関紙『正路』発刊。

一九四五年十一月十五日　党中央組織委員会第二回拡大執行委員会を指導。

一九四五年十二月十七日～十八日　党中央組織委員会第三回拡大執行委員会を指導。

一九四五年十一月～一九四六年一月　大衆社会団体などの結成を指導。北朝鮮民主女性総同盟結成（一九四五年一一月一八日）。北朝鮮職業総同盟結成（一九四五年一一月三〇日）。北朝鮮民主青年同盟結成（一九四六年一月一七日）。北朝鮮農民同盟結成（一九四六年一月三一日）。

一九四六年二月八日　北朝鮮臨時人民委員会を樹立し、その首班に推戴される。

一九四六年三月四日　党中央組織委員会第五回拡大執行委員会を指導。

一九四六年三月五日　土地改革法令を発布。

一九四六年三月二十三日　二十か条政綱のを発表。

一九四六年五月二十一日　普通江改修工事着工式に参席し最初のシャベルをとる。

一九四六年六月二十四日　労働法令を発布。

一九四六年七月二十二日　北朝鮮民主主義民族統一戦線を結成。

一九四六年七月三十日　男女平等権法令を発布。

一九四六年八月十日　重要産業国有化法令を発布。

一九四六年八月二十八日〜三十日　北朝鮮労働党創立大会で『勤労大衆の統一的党の創建のために』を報告。北朝鮮労働党を創立。党機関紙『労働新聞』、雑誌『勤労者』発刊を決定。

一九四六年九月〜十月　南朝鮮労働者たちの九月ゼネスト。十月人民抗争。

一九四六年十一月三日　朝鮮での最初の民主選挙である北朝鮮道、市、郡人民委員会委員選挙を実施。平安南道江東郡選挙区で、平安南道人民委員会委員にえらばれる。

一九四六年十一月二十五日　建国思想総動員運動——思想意識の変革のためのたたかいを展開する方針を提示。

一九四七年二月二十二日　北朝鮮人民委員会を組織。その首班に推される。北半部で社会主義への過渡期はじまる。自立的民族経済建設路線を明示。

一九四七年三月十五日　北朝鮮労働党中央委員会第三回会議を指導。

一九四八年二月八日　不敗の革命武力——英雄的な朝鮮人民軍を創建。閲兵式で『朝鮮人民軍創建に際して』演説。

一九四八年三月二十七日〜三十日　北朝鮮労働党第二回大会を指導。

一九四八年四月二十日〜二十四日　南北朝鮮の政党、社会団体代表者たちの連席会議を指導。

一九四八年九月九日　栄えある朝鮮民主主義人民共和国を創建し、その首班に推戴される。

一九四九年二月十二日〜十三日　北朝鮮労働党中央委員会第五回会議を指導。

一九四九年六月二十五日　祖国統一民主主義戦線を結成。

一九四九年六月三十日　南北朝鮮労働党の合党。その委員長となる。

一九四九年十二月五日～十八日　党中央委員会第二回総会を指導。

一九五〇年六月二十五日　アメリカ帝国主義とその手先李承晩一味の共和国北半部にたいする武力侵攻。祖国解放戦争開始。

一九五〇年六月二十六日　朝鮮人民軍最高司令官であり、百戦百勝の鋼鉄の統帥者である金日成首相が、『すべての力を戦争勝利のために』を放送演説。
軍事委員会を組織し、その委員長に推される。

一九五〇年六月二十八日　ソウル解放戦闘を指揮。

一九五〇年七月八日　演説『アメリカ帝国主義者の武力侵攻を断固粉砕しよう』を放送。

一九五〇年七月二十日　大田解放戦闘を指揮。

一九五〇年十一月二十日　朝鮮人民軍の禿魯江軍政幹部会議を指導。

一九五〇年十二月二十一日～二十三日　党中央委員会第三回総会を指導。

一九五一年九～　一、二一一高地戦闘を指揮。

一九五一年十一月一日～四日　党中央委員会第四回総会を指導。

一九五二年二月一日　道、市、郡人民委員長および党指導幹部連席会議で、『現段階における地方政権機関の任務と役割』にたいして演説。

一九五二年六月二十一日　楽元機械工場を現地指導。

一九五二年十二月五日～十八日　歴史的な党中央委員会第五回総会を指導。

一九五三年七月二十七日　金日成首相のすぐれた指導のもとに、祖国解放戦争で朝鮮人民が偉大な勝利を達成。アメリカ帝国主義の敗北。

一九五三年八月三日　降仙製鋼所を現地指導。

一九五三年八月五日～九日　戦後の社会主義基礎建設の総的課題と、独創的な社会主義経済建設の基本路線を提示。党中央委員会第六回総会を指導。

一九五三年十二月十八日～十九日　党中央委員会第七回総会を指導。

一九五四年三月二十一日～二十三日　党中央委員会三月総会を指導。

一九五四年十一月一日～三日　党中央委員会十一月総会を指導。

一九五五年四月一日～四日　党中央委員会四月総会を指導。

一九五五年四月　朝鮮革命の性格と課題にかんするテーゼ『すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために』を発表。

一九五五年十二月二～三日　党中央委員会十二月総会を指導。

一九五五年十二月二十八日　党の宣伝扇動活動家たちのまえで、『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体を確立することについて』演説。

一九五六年四月二十三日～二十九日　朝鮮労働党第三回大会を指導。

一九五六年八月一日　東方で最初の全般的初等義務教育制を実施。

一九五六年八月三十日～三十一日　党中央委員会八月総会を指導。

一九五六年十二月十一日～十三日　歴史的な党中央委員会十二月総会を指導。金日成首相が創造した社会主義建設における朝鮮労働党の総路線——千里馬運動はじまる。

一九五七年四月十八日～十九日　党中央委員会四月総会を指導。

一九五七年十月十七日～十九日　党中央委員会十月総会を指導。

一九五七年十二月五日～六日　党中央委員会十二月拡大総会を指導。

訳者あとがき

この本は、先に出版された白峯(ペクボン)著『民族の太陽金日成将軍(キムイルソン)』の日本語訳『金日成伝』の第二部にあたる。

第一部では、朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相の生い立ちから、初期革命活動をへて、祖国の解放と民族の独立をもたらした栄えある抗日武装闘争をとりあげている。

この第二部では、さらに筆をすすめて、祖国への凱旋と、民主革命、偉大な祖国解放戦争、戦後経済復旧と社会主義革命と社会主義建設を組織し指導する金日成首相の英雄的な姿が格調高く描かれている。

じつに、少年時代からこんにちまでの金日成首相の半生は、かつて歴史上にその名をとどめた、どの詩人も描くことのできなかったすぐれた大英雄叙事詩である。

世界には、その名をとどろかせた英雄も数多い。

しかし、いかなる民族的英雄といえども、抗日武装闘争を組織指導して祖国を解放し、三十六年間にわたる日本帝国主義の植民地支配で荒廃しきっていた祖国の地に民主基地を建設し、またそれを破壊しようとして侵入してきたアメリカ帝国主義とその手先どもを相手に三年有余の困難な戦いを勝利へと導き、戦後復旧建設を輝かしくおしすすめ、りっぱな「社会主義の模範」、「千里馬の国」、「社会主義強国」とよばれる朝鮮に築きあげた四千万朝鮮人民の偉大な領袖金日成首相のようなすぐれた英雄を、われわれは知らない。

この本は、そういった意味では、たぐいまれな大英雄叙事文学ともいえよう。

そしてまた、この本は、当然のことながら、朝鮮人民の勝利へのたたかいを描いたすぐれた朝鮮人民の歴史でもある。

金日成首相は、朝鮮人民を勝利へと導くにあたって、つねに主体性を徹底的に堅持した。これはすでに、抗日武装闘争の時期に築きあげた輝かしい伝統である。

首相は、これについてつぎのようにのべている。

「主体性を確立するということは、革命と建設のすべての問題を独自的に、自国の実情にあうように、そして主として自己の力に依拠して解決する原則を堅持することを意味する。これは教条主義に反対し、マルクス・レーニ

ン主義の一般的真理と国際革命運動の経験を、自国の歴史的条件と民族的特性にあうように適用してすすむ現実的で創造的な立場である。これは他人にたいする依存心に反対し、自力更生の精神を発揚し、自己の問題をあくまでも自分自身が責任をもって解決していく自主的な立場である」

金日成首相は、思想においては主体、政治においては自主、経済においては自立、国防においては自衛の立場をつねにしっかりと堅持した。

金日成首相はすべての政策を作成するにあたり、つねにこのような主体思想から出発した。じつにこんにち、朝鮮の北半部に築かれたすべての成果と偉大な変革は、まさに金日成首相の主体思想とそれにもとづく政策の巨大な結実である。

千里馬の国朝鮮は、いま意気天を衝き、毎日のように奇跡が生まれる国となり、社会主義の真っ赤な花が咲きこぼれる楽園となった。

栄光にみちた輝かしい生活によって世界の模範となっている社会主義朝鮮のこんにちの姿は、そのまま偉大なる朝鮮人民の領袖金日成首相によって母なる祖国朝鮮の大地のうえにうたいあげられた雄大な大交響曲であり、大叙事詩ともいえよう。

さいわいにしてこの本の第一部は、広はんな日本国民のあいだで大きな反響をよびおこし、深い感動をもってむかえられている。

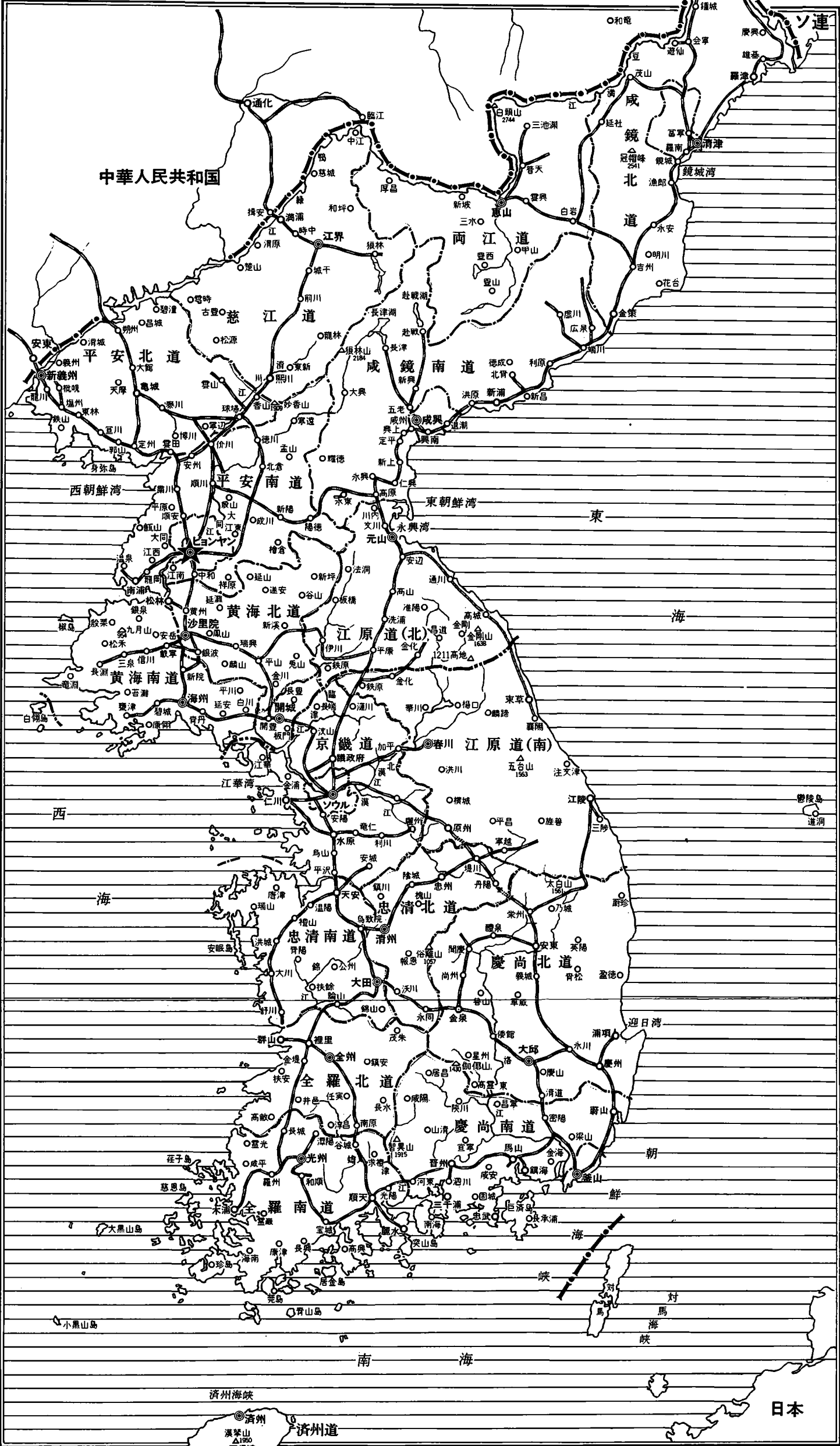
わたしたちは、この第二部も第一部と同様、日本国民のあいだに金日成首相の偉大な人となりや革命思想を正しくつたえ、朝・日両国人民の友好と親善に寄与するものとかたく信じている。

ひきつづきわたしたちは、『民族の太陽金日成将軍』第二部第八章以下を、『金日成伝』第三部として近くおとどけしたいと思う。

一九六九年九月九日

朝鮮民主主義人民共和国創建二十一周年記念日に

金日成伝翻訳委員会

朝鮮全図
中華人民共和国
ソ連
日本
平安北道
平安南道
慈江道
両江道
咸鏡北道
咸鏡南道
黄海北道
黄海南道
江原道(北)
江原道(南)
京畿道
忠清北道
忠清南道
慶尚北道
慶尚南道
全羅北道
全羅南道
済州道
ピョンヤン
ソウル
開城
元山
咸興
清津
羅津
恵山
江界
新義州
安東
通化
臨江
沙里院
海州
春川
江陵
仁川
水原
清州
大田
大邱
全州
光州
釜山
麗水
木浦
済州
群山
馬山
晋州
慶州
浦項
安東
西朝鮮湾
東朝鮮湾
永興湾
江華湾
鏡城湾
迎日湾
東
海
西
海
南
海
朝
鮮
海
峡
対
馬
海
峡
済州海峡
鬱陵島
白翎島
椒島
身弥島
安眠島
荏子島
慈恩島
大黒山島
小黒山島
珍島
莞島
巨済島
南海
突山島
居金島
青山島
白頭山
2744
冠帽峰
2541
金剛山
1638
五台山
1563
太白山
1561
俗離山
1057
伽倻山
1430
智異山
1915
漢拏山
1950
1211高地
西帰浦
三池淵

白峯著・金日成伝翻訳委員会訳

金日成伝〈第二部〉

訳者との協定により検印廃止

昭和四四年八月五日初版

定価九八〇円

発行者　長坂一雄

発行所　雄山閣出版株式会社

東京都千代田区富士見二ー六ー九

電話東京(二六二)三二三一(代)

振替　東京　一六八五

印刷　亜細亜印刷株式会社
株式会社祥文堂印刷所
新成美術印刷社

製本　協栄製本株式会社

製函　有限会社加藤紙器製造所

乱丁・落丁は本社にてお取替え致します。